

(財)群埋文発掘調査事業団調査報告書第13集
一般国道(上武道路)改築工事に伴う報告書

歌 舞 伎 遺 跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1982

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業団保管	
No. 1-2445	平成2年3月31日	(7)

歌 舞 伎 遺 跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1982

序

本県において大規模な開発の波に対応した埋蔵文化財の発掘調査が軌道にのりはじめたのは、昭和48年のことでした。上越新幹線、関越自動車道とならんで、群馬県と埼玉県を結ぶ国道17号線のバイパス道路、上武国道の建設計画が発表されました。この地域は、県内有数の埋蔵文化財包蔵地域であり、計画路線内には57遺跡の包蔵地が明らかにされています。そして、当面、伊勢崎市と前橋市の境界を分ける神沢川以南の22遺跡について発掘調査を実施することになりました。

昭和48年度には、群馬県教育委員会と建設省関東地方建設局との協議に基づき、初年度の発掘調査を実施し、多くの資料が得られましたが、その報告書の刊行は遅れておりました。ようやく昭和55年度に至り、歌舞伎遺跡の整理に取り組むことになりましたのでここに昭和56年度を期して、報告書刊行のはこびとなりました。

今回、報告する歌舞伎遺跡は、新田郡尾島町世良田の東武伊勢崎線世良田駅の東方300mの線路をはさんだ南北200mにひろがる遺跡で、古墳時代から平安時代に及ぶ住居跡群180軒あまりを検出した遺跡です。遺跡は、周辺を低地でかこまれた微高地に占地され、必ずしも集落としてはすぐれた立地とはみられません。この条件下に古墳時代から平安時代に及ぶ集落が連綿として継続する事実は、私達の祖先が営々として築いて来た生活のあり様を知る上でわれわれに多くの問題を提起してくれます。

本報告書が、地域を知り新しい文化を創造する上で、多くの方々に寄与するところ大となることを期してやみません。

最後になりましたが、調査にたずさわり、本報告の上梓にご努力いただいた関係者の皆様の労苦を謝して、序といたします。

昭和57年3月25日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

目 次

序

第I章 発掘調査と遺跡の概要	3
第1節 発掘調査に至る経過	3
第2節 遺跡の位置と環境	5
第3節 遺跡における層序	9
第4節 調査の概要	10
第II章 遺構と遺物	11
第1節 A地区の遺構と遺物	12
第2節 B地区の遺構と遺物	161
第3節 陶磁器	240
歌舞伎遺跡 竪穴住居一覧	251
歌舞伎遺跡 遺物一覧	258
第III章 考察	283
第1節 土地利用の変遷	283
第2節 歌舞伎遺跡における土器の編年	289
第3節 住居の主軸方位と規模	296
第4節 集落の変遷	299
結	302

例 言

- 1 本書は上武国道建設に伴い、発掘調査が実施された、群馬県新田郡尾島町世良田に所在する歌舞伎遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は、昭和49年5月22日から昭和50年2月15日の間にA地区、50年4月7日より7月12日の間にB地区を対象として調査が実施された。
- 3 発掘調査は建設省の委託を受けて群馬県教育委員会文化財保護課が実施し、整理作業は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 4 調査組織

発掘調査

事務、接渉

近藤義雄、磯貝福七、森田秀策、木暮仁一、阿久津宗二、山田 始、飯塚喜代子

(群馬県教育委員会文化財保護課)

発掘調査

調査担当者 木暮仁一、井上唯雄、柿沼恵介、石塚久則、大江正行 (群馬県教育委員会文化財保護課)

調査員 内田憲治、坂爪久純、今井権三郎 (群馬県教育委員会による委嘱調査員)

整理作業

事務、接渉

小林起久治、沢井良之助、飯塚喜代子、近藤平志、国定均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)、吉田笑子、吉田恵子、野島のぶ江、並木綾子、(同団補助員)

整理作業

担当者 井上唯雄 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)

整理作業従事者 浅井良子*、星野かつ子、内田京子、中川絹子、平野照美、押江さゆり、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による整理嘱託員(*)および整理補助員)

- 5 遺物の写真撮影は佐藤元彦 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による補助員)
- 6 遺物の科学的処理は浜野和宗作、伊能敬司、関邦一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による嘱託員)による。
- 7 本書の作成にあたり、次の諸氏、機関の協力、教示を受けた。記して謝意を表する。

資料教示

地 質……新井房夫 (群馬大学) 灰釉陶器……檜崎彰一 (名古屋大学)

陶磁器……長谷部楽爾、矢部良明 (東京国立博物館)、倉田芳郎 (駒沢大学)

地域史……金子規矩雄、(県文化財保護審議委員)、定方嘉津夫 (尾島町文化財専門委員)

協力機関

尾島町教育委員会、東部教育事務所、群馬大学考古学研究会

協力者

平野進一、横沢克明、清水和夫、真下高幸

8 本書の執筆は次の通りである。

第II章第3節、第III章第1節を大江が分担し、他は井上による。

9 本書の編集は井上が行い、校正編集に大江、飯田陽一（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）の手を煩わせた。

凡 例

1 本書中の遺物出土位置のNoは、土器観察表、遺物実測図Noに一致する。

2 本書中の遺構実測図は明記のない限り1：60であり、縮尺を入れた。

3 本書中の遺物実測図は1：3を原則としたが、第II章第3節の陶磁器類に限り1：2とした。

4 本書中の方位は磁北であり、グリット方位角はN座標北より47°30'Wである。

挿 図 目 次

第 図	挿 図 名	
1	大間々扇状地地形図	6
2	周辺の遺跡図	7
3	土層柱状図	9
4	A-1号住居図	12
5	A- // 遺物実測図	12
6	A-2号住居図	13
7	A- // 遺物実測図	14
8	A-3号住居図	14
9	A- // 遺物実測図	15
10	A- // 遺物実測図	16
11	A-4号住居図	17
12	A- // 遺物実測図	18
13	A- // 遺物実測図	19
14	A-5号住居図	19
15	A- // 遺物実測図	20
16	A- // 遺物実測図	21
17	A- // 遺物実測図	22
18	A- // 遺物実測図	23
19	A- // 遺物実測図	24
20	A- // 遺物実測図	25
21	A- // 遺物実測図	26
22	A-6号住居図	27
23	A- // 遺物実測図	28
24	A-7・8号住居図	28
25	A-8号住居遺物実測図	29
26	A-9号住居図	29
27	A- // 遺物実測図	30
28	A- // 遺物実測図	31
29	A-10号住居図	31
30	A- // 遺物実測図	32
31	A-11号住居図	32
32	A- // 遺物実測図	33
33	A-12号住居図	34
34	A- // 遺物実測図	35
35	A- // 遺物実測図	36
36	A-13号住居図	36
37	A- // 遺物実測図	37
38	A-14号住居図	37
39	A- // 遺物実測図	38
40	A- // 遺物実測図	39
41	A-15号住居図	40
42	A- // 遺物実測図	40
43	A-16号住居図	41
44	A- // 遺物実測図	41
45	A-17号住居図	42
46	A- // 遺物実測図	43
47	A-18号住居図	44
48	A- // 遺物実測図	45
49	A-19号住居図	46
50	A- // 遺物実測図	46
51	A-20・21号住居図	47
52	A-20号住居遺物実測図	47
53	A-21号住居遺物実測図	47
54	A-22号住居図	48
55	A- // 遺物実測図	48
56	A-23~25号住居図	49
57	A-23号住居遺物実測図	50
58	A-24号住居遺物実測図	50
59	A-25号住居遺物実測図	50
60	A-26号住居図	52
61	A- // 遺物実測図	52
62	A-27号住居図	53
63	A- // 遺物実測図	53
64	A-28~30号住居図	54
65	A-28号住居遺物実測図	55
66	A-29号住居遺物実測図	56
67	A-30号住居遺物実測図	56
68	A-31号住居図	57
69	A- // 遺物実測図	57
70	A-32号住居図	57
71	A- // 遺物実測図	58
72	A-33号住居図	59
73	A- // 遺物実測図	60
74	A-34号住居図	61
75	A- // 遺物実測図	62
76	A-35号住居図	63
77	A- // 遺物実測図	63
78	A- // 遺物実測図	64
79	A-36号住居図	65

80	A- // 遺物実測図	65	123	A-61号住居図	97
81	A-37号住居図	66	124	A- // 遺物実測図	97
82	A-38号住居図	66	125	A-62号住居図	97
83	A- // 遺物実測図	67	126	A-63・64号住居図	98
84	A-39号住居図	67	127	A-65号住居図	98
85	A-40.41号住居図	68	128	A- // 遺物実測図	99
86	A-40号住居遺物実測図	69	129	A-66号住居図	100
87	A-41号住居遺物実測図	69	130	A- // 遺物実測図	101
88	A-42号住居図	70	131	A-67号住居図	101
89	A- // 遺物実測図	70	132	A- // 遺物実測図	102
90	A-43号住居図	71	133	A-68・69号住居図	103
91	A- // 遺物実測図	72	134	A-69号住居遺物実測図	103
92	A-44号住居図	73	135	A-70号住居図	103
93	A-45号住居図	73	136	A- // 遺物実測図	104
94	A-46号住居図	74	137	A-71号住居図	104
95	A-47・48号住居図	74	138	A- // 遺物実測図	105
96	A-47号住居遺物実測図	75	139	A-72号住居図	106
97	A-48号住居遺物実測図	76	140	A- // 遺物実測図	107
98	A-49号住居図	77	141	A-73号住居図	109
99	A- // 遺物実測図	78	142	A- // 遺物実測図	109
100	A- // 遺物実測図	79	143	A-74・75号住居図	110
101	A-50号住居図	80	144	A- // 遺物実測図	111
102	A- // 遺物実測図	81	145	A-76号住居図	112
103	A-51号住居図	81	146	A- // 遺物実測図	113
104	A-52号住居図	82	147	A-77号住居図	114
105	A- // 遺物実測図	82	148	A- // 遺物実測図	115
106	A- // 遺物実測図	83	149	A-78号住居図	116
107	A-53号住居図	84	150	A-79号住居図	117
108	A- // 遺物実測図	85	151	A- // 遺物実測図	118
109	A-54号住居図	85	152	A-80号住居図	119
110	A-55・56号住居図	86	153	A- // 遺物実測図	119
111	A-55号住居遺物実測図	87	154	A- // 遺物実測図	120
112	A-57号住居図	88	155	A-81号住居図	120
113	A- // 遺物実測図	89	156	A- // 遺物実測図	120
114	A- // 遺物実測図	90	157	A-82号住居図	121
115	A- // 遺物実測図	91	158	A- // 遺物実測図	121
116	A- // 遺物実測図	92	159	A-83号住居図	122
117	A-58号住居図	93	160	A- // 遺物実測図	122
118	A-59号住居図	93	161	A- // 遺物実測図	123
119	A- // 遺物実測図	93	162	A-84号住居図	123
120	A-60号住居図	94	163	A-85号住居図	124
121	A- // 遺物実測図	95	164	A- // 遺物実測図	125
122	A- // 遺物実測図	96	165	A-86号住居図	126

166	A-	〃	遺物実測図	127
167	A-		87号住居図	127
168	A-	〃	遺物実測図	128
169	A-		88号住居図	129
170	A-	〃	遺物実測図	130
171	A-	〃	遺物実測図	131
172	A-		89号住居図	132
173	A-	〃	遺物実測図	133
174	A-		90・91号住居図	134
175	A-		91号住居遺物実測図	135
176	A-		92号住居図	135
177	A-	〃	遺物実測図	136
178	A-		93号住居図	136
179	A-	〃	遺物実測図	137
180	A-		94号住居図	138
181	A-	〃	遺物実測図	139
182	A-		95号住居図	140
183	A-	〃	遺物実測図	140
184	A-		96号住居図	141
185	A-	〃	遺物実測図	141
186	A-		97号住居図	142
187	A-	〃	遺物実測図	142
188	A-		98号住居図	143
189	A-	〃	遺物実測図	143
190	A-		99号住居図	144
191	A-	〃	遺物実測図	144
192	A-		100号住居図	145
193	A-	〃	遺物実測図	145
194	A-		101号住居図	146
195	A-	〃	遺物実測図	146
196	A-		102～104号住居図	147
197	A-		102号住居遺物実測図	148
198	A-		103号住居遺物実測図	148
199	A-		104号住居遺物実測図	149
200	A-		105号住居図	149
201	A-	〃	遺物実測図	150
202	A-		106号住居図	150
203	A-	〃	遺物実測図	151
204	A-		107号住居図	151
205	A-	〃	遺物実測図	152
206	A-		区H～Iピット図	153
207	A-		区J～Lピット図	154
208		〃	遺物実測図	155
209	A-		区Mピット図	156
210	A-		区M10-1ピット遺物実測図	156
211	A-		区ピット一括遺物実測図	157
212	A-		区1号溝遺物実測図	158
213	A-		2・5・10号溝遺物実測図	159
214	A-		区H-24大溝埋土遺物実測図	159
215	A-		区その他の遺物実測図	160
216	B-		1・2号住居図	162
217	B-		1号住居遺物実測図	162
218	B-		2号住居遺物実測図	162
219	B-	〃	遺物実測図	163
220	B-		3号住居図	164
221	B-	〃	遺物実測図	164
222	B-		4号住居図	164
223	B-		5号住居図	165
224	B-	〃	遺物実測図	165
225	B-	〃	遺物実測図	166
226	B-		6号住居図	166
227	B-	〃	遺物実測図	167
228	B-	〃	遺物実測図	168
229	B-	〃	遺物実測図	169
230	B-	〃	遺物実測図	170
231	B-	〃	遺物実測図	171
232	B-	〃	遺物実測図	172
233	B-		7号住居図	173
234	B-	〃	遺物実測図	174
235	B-	〃	遺物実測図	175
236	B-		8号住居図	176
237	B-	〃	遺物実測図	176
238	B-		9号住居図	177
239	B-	〃	遺物実測図	178
240	B-		10号住居図	178
241	B-	〃	遺物実測図	179
242	B-		11号住居図	179
243	B-	〃	遺物実測図	180
244	B-		12号住居図	180
245	B-		13号住居図	181
246	B-	〃	遺物実測図	182
247	B-		14号住居図	183
248	B-	〃	遺物実測図	184
249	B-		15号住居図	184
250	B-	〃	遺物実測図	185
251	B-	〃	遺物実測図	186

252	B-16号住居図	187	295	B-39号住居遺物実測図	217
253	B- // 遺物実測図	188	296	B-40号住居遺物実測図	217
254	B-17号住居図	189	297	B-42号住居図	218
255	B- // 遺物実測図	189	298	B- // 遺物実測図	218
256	B-18号住居図	189	299	B- // 遺物実測図	219
257	B- // 遺物実測図	189	300	B-43号住居図	220
258	B-19号住居図	190	301	B-44号住居図	220
259	B-20号住居図	190	302	B- // 遺物実測図	220
260	B- // 遺物実測図	191	303	B-45号住居図	221
261	B-21号住居図	191	304	B- // 遺物実測図	221
262	B- // 遺物実測図	192	305	B-46号住居図	221
263	B-22号住居図	193	306	B- // 遺物実測図	222
264	B-23号住居図	194	307	B-47号住居図	223
265	B-24号住居図	195	308	B- // 遺物実測図	223
266	B- // 遺物実測図	195	309	B-48号住居図	224
267	B-25号住居図	196	310	B- // 遺物実測図	224
268	B- // 遺物実測図	196	311	B- // 遺物実測図	225
269	B-26号住居図	197	312	B-49号住居図	225
270	B- // 遺物実測図	198	313	B- // 遺物実測図	226
271	B-27号住居図	199	314	B-50号住居図	227
272	B- // 遺物実測図	200	315	B- // 遺物実測図	228
273	B-28号住居図	201	316	B- // 遺物実測図	229
274	B- // 遺物実測図	202	317	B-51号住居図	229
275	B-29号住居図	203	318	B- // 遺物実測図	230
276	B- // 遺物実測図	204	319	B- // 遺物実測図	231
277	B- // 遺物実測図	205	320	B- // 遺物実測図	232
278	B-30号住居図	206	321	B-52号住居図	232
279	B- // 遺物実測図	206	322	B- // 遺物実測図	233
280	B-31号住居図	207	323	B-53号住居図	234
281	B- // 遺物実測図	208	324	B- // 遺物実測図	234
282	B- // 遺物実測図	209	325	B- // 遺物実測図	235
283	B-32号住居図	209	326	B区1・2区掘立建物遺構図	236
284	B- // 遺物実測図	210	327	B-3号掘立建物遺構図	237
285	B-33号住居図	211	328	B区M-L22ピット図	237
286	B- // 遺物実測図	212	329	B区L-22・23ピット遺物実測図	238
287	B- // 遺物実測図	213	330	B区溝一括遺物実測図	239
288	B-34号住居図	213	331	緑釉陶器出土位置図	240
289	B-35号住居図	214	332	緑釉陶器実測図	241
290	B- // 遺物実測図	214	333	舶載陶・磁器類出土位置図	242
291	B-36号住居図	215	334	舶載陶・磁器類実測図	243
292	B- // 遺物実測図	215	335	// 実測図	244
293	B-37号住居図	215	336	国産施釉陶器類出土位置図	245
294	B-38~41号住居図	216	337	国産中世陶器類実測図	246

338	〃	実測図	247
339		国産焼締陶器類実測図	248
340		国産陶・磁器類実測図	250
341		平安水田の畦とそれ以降の水田断面	284
342		新田義重讓状	284
343	〃	書下し	284
344		古代遺構位置図	285
345		中世長方形土壇群位置図	286
346		古代・近世遺構配置図	286
347		長楽寺絵図	287

348		中世焼締陶器と中世前半水田層	287
349		長方形土壇に残る平鋤状工具痕	287
350		住居の主軸方位	296
351		住居変遷図	297
352		住居の主軸方位	297
353	〃		298
354	〃		298
355		住居変遷図	298
356	〃		298

図版目次

図版 1	二体地藏古墳より遺跡地、赤城山を望む 南→ 木崎台地より遺跡地、榛名山を望む 東→
図版 2	A区調査区近景 東→ A区厚査区近景 北西→
図版 3	B区近景 南東→ B区近景 南→
図版 4	B区試掘風景 北西→ B区試掘風景 北→
図版 5	A区5号住居跡 南西→ A区6号住居跡 南東→
図版 6	A区10号住居跡 北→ A区12号住居跡 南東→
図版 7	A区15号住居跡 南西→ A区16号住居跡 西→
図版 8	A区22、25号住居跡 北→ A区23、24、25号住居跡 東南→
図版 9	A区25、26号住居跡 西北→ A区27号住居跡 東→
図版10	A区31号住居跡 南西→ A区34号住居跡 北→
図版11	A区38号住居跡 北→ A区43号住居跡 北東→
図版12	A区52号住居跡 北東→ A区54号住居跡 北→
図版13	A区55号住居跡 北→ A区59号住居跡 西→
図版14	A区60号住居跡 南→ A区61号住居跡 南西→
図版15	A区78号住居跡 南→

図版16	A区82号住居跡 南東→ A区93号住居跡 西→ A区91、99号住居跡 南→
図版17	A区95号住居跡 東南→ A区95、96号住居跡 西→
図版18	A区97号住居跡 北→ A区102、103号住居跡 南→
図版19	B区1号住居跡 西→ B区1、51号住居跡 西北→
図版20	B区5号住居跡 東→ B区6号住居跡 東→
図版21	B区10号住居跡 北東→ B区15号住居跡 東→
図版22	B区18号住居跡 東→ B区24号住居跡 南→
図版23	B区25号住居跡 南→ B区26号住居跡 北→
図版24	B区29号住居跡 北→ B区33号住居跡 南→
図版25	B区47号住居跡 北西→ B区48号住居跡 北西→
図版26	A区1号住居跡カマド 西→ A区3号住居跡カマド 南→
図版27	A区15号住居跡カマド 西→ A区26号住居跡カマド 西→
図版28	B区27号住居跡カマド 南東→ A区30号住居跡カマド 東→
図版29	A区31号住居跡カマド 南→ A区78号住居跡カマド 南→
図版30	A区93号住居跡カマド 南東→

- A区105号住居跡カマド 南→
- 図版31 A区106号住居跡カマド 西→
A区52号住居跡遺物出土状態 西→
- 図版32 A区15号住居跡貯蔵穴および土器出土状態
南西→
A区26号住居跡遺物出土状態 西→
- 図版33 A区60号住居跡遺物出土状態 東→
A区65号住居跡遺物出土状態 北西→
- 図版34 A区方形周溝遺構 北→
A区方形周溝構 北→
- 図版35 A区L-12号井戸跡 北→
同 近接 北東→
- 図版36 B区H-30号井戸跡 西→
A区I-13号井戸跡 北→
- 図版37 A区M-11号土壇遺物出土状態 南→
A区M-10号土壇遺物出土状態 南→
- 図版38 B区L-21周辺の長方形土壇群 北東→
B区G-18号長方形土壇 東→
- 図版39 B区E・F-27~30における台地陸部縁辺
北東→
同 上 北東→
- 図版40 A区K-8近世方形遺構 北→
A区K-17溝、J-18溝(左) 北→
- 図版41 遺物写真
- 図版42 遺物写真
- 図版43 遺物写真
- 図版44 遺物写真
- 図版45 遺物写真
- 図版46 遺物写真
- 図版47 遺物写真
- 図版48 遺物写真
- 図版49 遺物写真
- 図版50 遺物写真
- 図版51 遺物写真
- 図版52 遺物写真
- 図版53 遺物写真

歌 舞 伎 遺 跡

第 I 章 発掘調査と遺跡の概要

第 1 節 発掘調査に至る経過

上武国道は、埼玉県熊谷市大字高柳字村東坪町から国道17号線に分岐し、利根川を横断して新田郡尾島町に入り、同郡新田町、佐波郡境町、同郡東村、同郡赤堀村、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て、再び前橋市田口町で国道17号線に接続する総延長35.1 kmにわたる国道17号線のバイパス道路である。従来の高崎、前橋両市街地の渋帯を緩和し、埼玉県と群馬県北部を直結させる重要幹線道路として、建設省が直轄する計画路線である。特に本県においては、前記 2 市 3 町 3 村をはじめとして県央及び東毛地域の開発に寄与するものとして、その開通には大きな期待が寄せられてきた。

この上武道路の建設が計画されている地域は関東平野の西北部から、赤城山南面の山麓台地縁辺、赤城山の西南山麓をよぎるものであり、埋蔵文化財の最も濃密な分布を示す地域である。この計画が出された段階で、群馬県教育委員会は、この地域における分布調査を実施し、総数472件の所在を確認した。昭和45年度のことである。これはまだ路線決定がなされていない時点での調査であり、文化財の側からみて重要な遺跡も対象となっていた。更に、計画が具体化し、路線決定の間に建設省と群馬県教育委員会の間で協議が重ねられ、重要遺跡を路線からはずし、現状保存をはかることとし、第一次協議で建設省関東地方建設局高崎工事事務所の依頼にもとづいて、更に 150 m 巾に計画をせよめて対象となる遺跡の検討を行なった。昭和46年度になり、一般国道50号線（前橋市二之宮町地内）までの区間で29件、そこから前橋市田口町の区間で32件の包蔵地が路線にかかることを高崎工事事務所に連絡した。

正式路線発表に先立って更に調整が図られた結果、現状保存の措置が講ぜられる可能性のある 4 遺跡を除いて埋蔵文化財包蔵地57地点について、工事着工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施する必要があることを両者で確認し、そのための準備を進める一方、正式に全路線の発表を行なった。昭和46年11月のことである。

こうして上武道路の建設が具体化し、当面、尾島町から国道50号線までの開通を急ぐことになり、発掘調査実施について、その方策を協議することとなった。この協議は、建設省関東地方建設局高崎工事事務所、群馬県企画部幹線交通課上武対策係、群馬県教育委員会文化財保護課の間で行なわれ、昭和47年度に数次にわたる協議で、調査についての細部の詰めが行なわれた。この結果、昭和48年度以降、尾島町から前橋市、伊勢崎市の境町、神沢川間22遺跡について発掘調査を実施することが本決まりとなり、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長の間で、次のような協定書の交換が行なわれることとなった。

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書

一般国道17号（上武道路）改築工事業地域における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という）の実施について、建設省関東地方建設局長、帯猛（以下「甲」という）と、群馬県教育委員会教育長山川武正（以下「乙」という）は次のとおり協定を締結する。

（適用地域）

第 1 条 この協定書を適用する区域は新田郡尾島町から前橋市二之宮町（神沢川）までとし別図のとおりとする。

（調査の期間）

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第2条 乙は発掘調査を昭和48年4月1日から実施し、昭和58年8月31日までに業務を完了するものとする。

2 前項の発掘調査の着手順序は甲、乙協議して決定するものとする。

(発掘調査の実施場所および対象面積)

第3条 発掘調査の実施場所および対象面積は別添(上武国道地域埋蔵文化財包蔵地第一覧)のとおりとする。

2 前項に予定する発掘調査の実施場所及び面積に変動ある場合、乙は甲にあらかじめ協議するものとする。

(費用)

第4条 乙の業務のため、必要とする費用は別添のとおり概算総額458,240,000円とし、甲が負担するものとする。

2 前項の費用は、工事区域内であらたに埋蔵文化財を発見した場合の取扱い等、及び物価、人件費等の変動により増減のある場合は、別途甲、乙協議するものとする。

(発掘調査委託契約及び委託金の支払方法)

第5条 発掘調査は甲と乙とが年度区分ごとに発掘調査委託契約を締結のうえ実施するものとする。

2 前項第1項の委託費の契約に基づき各年度ごと支払うものとする。

(地権者関係)

6条 甲は乙が計画的に発掘調査できるよう努めるとともに、発掘調査場所に係る土地所有者等の承諾を発掘調査着手以前に取りまとめておくものとする。

(請負業者等の指導監督)

第7条 上武道路工事(関連工事を含む)中の請負業者等に係る埋蔵文化財の取扱いについては、甲が責任をもって指導監督にあたるものとする。

(機械、備品等の処理)

第8条 乙が発掘調査のため購入した発掘用機材及び備品等は第1条の適用区域内すべての調査が完了した場合において別途協議して処理するものとする。

(発掘調査報告書)

第9条 乙は、業務が完了した時は、発掘調査報告書を甲に提出するものとする。

2 乙は業務が完了したときは、甲の名において発掘調査報告書を群馬県教育委員会を経由して、文化庁長官に提出するものとする。

(協定の変更)

第10条 この協定を変更する必要がある時は、甲、乙協議して行なうものとする。

(協定の有効期間)

第11条 この協定の有効期間は協定締結の日から第2条の発掘調査が完了し、委託金の精算行為が完了した日までとする。

第12条 この協定に定めのない事項または疑義が生じた事項については、その都度、甲、乙協議して処理するものとする。

この協定の証として、本書2通を作成し、甲、乙のおのおの記名、なつ印のうえ各自その1通を保有する。

昭和48年4月1日

甲（委託者）

建設省関東地方建設局長

帯 猛

乙（受託者）

群馬県教育委員会教育長

山 川 武 正

別添1 上武国道地域埋蔵文化財包蔵地等一覧

遺跡No	所在地	時代	協定金額	予定分布面積	発掘予定面積
1	新田郡尾島町島耕地早川付	古 墳	千円 28,700	m ² 14,300	m ² 7,000
2	〃 〃 安養寺	中 世	1,500	500	500
3	〃 〃 森南森東	古 墳	9,840	5,950	2,400
4	〃 〃 粕川粕川境	〃	36,900	18,225	9,000
5	〃 新田町下江田	〃	17,220	8,400	4,200
6	〃 尾島町歌舞伎	〃	34,850	13,000	8,500
7	〃 〃 小角田前	〃	11,070	8,250	2,700
8	佐波郡境町三ツ木	〃	15,580	22,080	13,800
9	〃 〃 三ツ木（西今井）	縄文・古墳	41,000		
10	〃 〃 下瀨名	古 墳	38,950	29,050	9,500
11	〃 〃 〃	〃	26,240	12,800	6,400
12	〃 〃 上瀨名	縄文・古墳	10,250	11,000	2,500
13	〃 東村東小保方	古 墳	8,430	9,450	1,400
14	〃 〃 三室	〃	5,740	5,775	1,400
15	〃 〃 小保方	縄文・古墳	41,000	15,600	10,000
16	伊勢崎市豊城町	〃	41,000	15,200	10,000
17	〃 書上町	〃	18,450	9,100	4,500
18	〃 堤町	縄 文	6,150	6,200	1,500
19	佐波郡赤堀村五目牛	〃			
20	同 上	古 墳	22,550	11,575	5,500
21	同 上	〃	24,600	12,250	6,000
22	伊勢崎市波志江町	先土器・縄文・古墳	17,220	14,700	4,200
計			458,240	243,405	111,900

この協定に基づいて、群馬県教育委員会は昭和48年度から上武担当の文化財保護主事4人を採用し、この調査に当る体制を整えた。そして、この協定にもとづき、昭和48年度の発掘調査委託契約を県教委と建設省関東地方建設局の間で締結した。しかし、調査は用地問題の未解決もあって、発掘調査に入ったのは、昭和49年1月に入ってからであった。この初年度には、伊勢崎三和町、新田郡新田町下江田前の二遺跡を調査し、ようやく、調査は軌道にのることになった。

第2節 遺跡の位置と環境

群馬県の東南部の地域を特色づけるものの一つに大間々の扇状地がある。扇頂の大間々市街地から、伊勢崎、木崎、太田を扇端とする東西16km、南北20kmに及ぶ広大な地域は、標高200mから50mという大きな変化をみせている。遺跡の立地する世良田はこの木崎ののる台地の先端にある。

この扇状地は大別して西側の桐原面、東の藪塚面の二つに分けられるが、歌舞伎遺跡は後者に属している。

第1章 発掘調査と遺跡の概要

早川を境にして東にひらける藪塚面は扇状地で分断され、木崎台地、由良台地の二つが、独立しているが本来は続いていたものである。

歌舞伎遺跡は、この大間々扇状地の最先端に位置しており、南側はやや低くなり水田が開けている。すぐ東側には北へ4kmの湧水を起源とする石田川が東南方向に流れを変えている。西側には1kmをへだてて早川が流れている。この両河流にはさまれた低地との先端部の微高地上に歌舞伎遺跡は占地している。

この占地面は、原地形では周辺がかなり下がっており、比高差は1mほどあったとみられる。この傾向は北から東へかけての集落縁辺部で確認されており、その意味からするとこの微高地は周辺から独立した状態で北側の低台地から分断されたものと考えられる。さらに推定すれば、一時的に西を流れる早川が、三ツ木部落の東側に曲流点を南に流れないでそのまま直にこの歌舞伎遺跡の北側に流れたものと考えられる。その痕跡をみると西今井部落の北側から小角田部落の前を通り、世良田駅ののる部分をはさんで水田がひらけていることと関連するものとみられる。

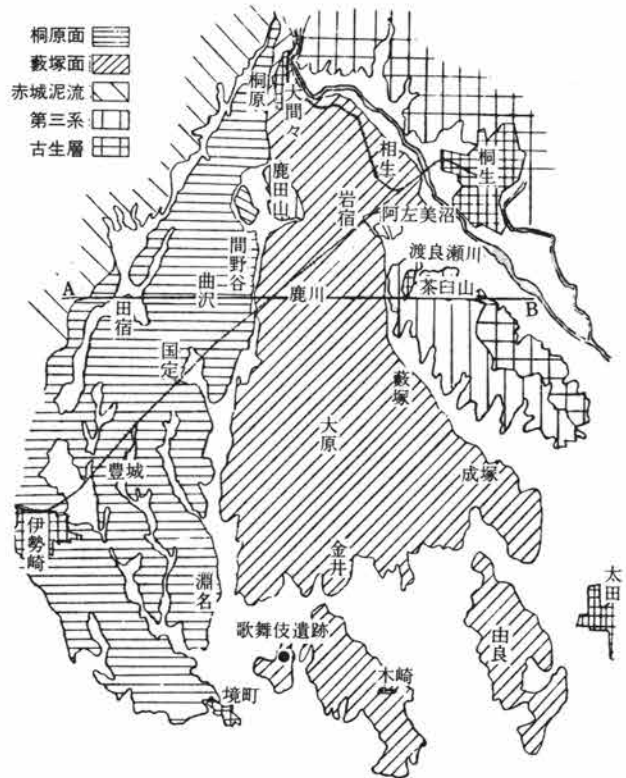
その流れの中に中州状にとり残された形でこの歌舞伎遺跡は残丘状にのこされたものとみられ、その時期は遺物の残存状態などからみて、ちょうど集落の形成期間中であつたものと思われる。

次に周辺の遺跡に目をやると、地形的には第1図の、桐原面、および藪塚面とよばれる台地上に集中する。大間々面と桐原面の境が早川である。この台地の縁辺部は特に遺跡の集中する地域である。

遺跡の所属する時期は先土器時代から中世館址にまで及んでおり、ここに営々とした人々の生活の歴史があつたことがうかがわれる。

先土器時代では、歌舞伎遺跡の東北方の中江田遺跡がある。ここは木崎台地の西縁部に当たるところである。この木崎台地の最先端部には矢抜神社古墳があり、二ツ岳給源の角閃石安山岩を使用した石室をもつ前方後円墳があり、雷電神社古墳の様相と共通する面をみせている。

また、その雷電神社のすぐ北には、佐位郡衙址と関連するとみられる国指定史跡十三宝塚遺跡もある。また、ところどころに古墳群があり、特に銀杏古墳群には36基にも及ぶ古墳の群在が指摘されている。こうした遺跡が周辺にひしめき合っているがそれを表示すると次のようである。



第1図 大間々扇状地地形図(沢口原図)
「群馬のおいたちをたずねて」による

第2図 周辺の遺跡



1. 歌舞伎遺跡
2. 小角田前遺跡
3. 三ツ木・西今井遺跡
4. 下瀨名遺跡
5. 上瀨名遺跡
6. 三室遺跡
7. 流通団地遺跡
8. 流通団地遺跡
9. 十三宝塚遺跡
10. 矢板神社古墳
11. 中江田遺跡
12. 越戸遺跡
13. 西今井館址
14. 上矢島遺跡
15. 女塚遺跡
16. 長楽寺
17. 新田西部住宅団地遺跡
18. 江田館址
19. 木崎中学校校庭遺跡
20. 中道遺跡
21. 銀杏古墳群
22. 雷電神社古墳
23. 島海戸遺跡
24. 出口遺跡
25. 武士古墳群

歌舞伎遺跡周辺の遺跡

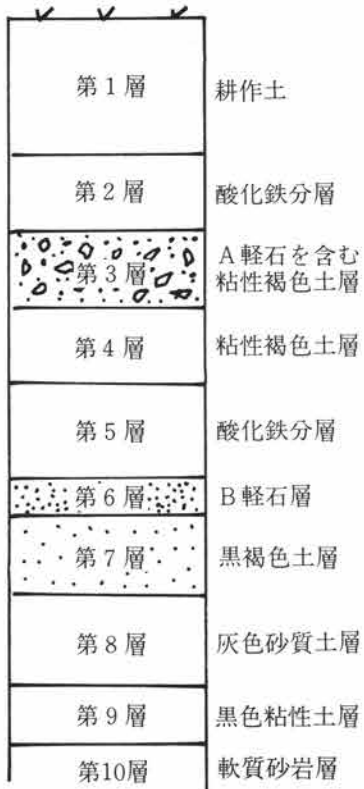
No.	遺跡名	方位	距離km	内 容	文 献 名
1	歌 舞 伎		0	本報文、古墳～平安時代の集落	上武道地域調査概報II、III、群馬県教育委員会49、50年度
2	小 角 田 前	NW	0.5	古墳時代後期の集落址。古墳5基が隣接。7世紀、埴輪東博	// IV・V51、52年度
3	三ツ木・西今井	NW	1.6	古墳～平安時代の大集落址。方形周溝墓検出	// IV51年度
4	下 測 名	NW	4.0	古墳～平安時代の大集落址、古墳群、館址発見。昭53年度事業団調査。境町教委調査	
5	上 測 名	NW	5.5	古墳時代集落址、古墳、水田址検出。昭和53、4年度事業団調査	
6	三 室	NW	6.3	水田址、古墳時代集落。昭56年度事業団調査	
7	流 通 団 地	NW	7.3	700軒の大集落址検出、古墳～平安時代。製鉄炉検出。55年度県企業局調査	報告書既刊、企業局
8	流 道 団 地	NW	7.3		
9	十 三 宝 塚	NW	5.8	基礎建物3棟を含む50棟の掘立柱建物、集落址。49～51年度県教委調査	調査概報I、II、III県教委
10	矢 抜 神 社 古 墳	SE	0.8	角閃石安山岩使用石室古墳	
11	中 江 田	NNE	0.7	先土器～平安時代包蔵地	
12	三 ツ 木 越 戸	NW	1.1	平安時代集落。昭55年度事業団調査	報告書。56年3月埋文事
13	西 今 井 館 址	NW	2.2	鎌倉時代の居館址、方形の堀をめぐらす県指定史跡	
14	問 矢 島	NW	2.7	古墳～平安時代集落。墨書土器を大量に出土	上矢島遺跡調査概報。境町教委56、3
15	女 塚	W	1.5	古墳時代末の住居検出	考古学年報⑮
16	長 楽 寺	SSW	1.3	古名利、栄朝系の名僧輩出。普光庵跡、県史跡	長楽寺遺跡、尾島教委55年度
17	新田西部住宅団地	WNW	3.0	古墳前期～平安時代集落、掘立柱建物。県企業局調査	報告書近刊
18	江 田 館 址	N	2.8	方形に周堀をめぐらす江田氏の居館址。県指定史跡	
19	木崎中学校校庭	E	1.7	古墳時代後期の集落址。昭和35年、群馬大学尾崎研究室調査	報告書、新田町、昭56
20	中 道	NWN	1.2	東電鉄塔敷、古墳時代前期、平安時代集落。S51、東電調査	
21	銀 杏 古 墳 群	NW	5.0	36基の古墳群。主墳測名古墳は前方後円墳で消滅	
22	雷 電 神 社 古 墳	WNW	5.8	角閃石安山岩使用石室をもつ7世紀の前方後円墳	
23	島 海 戸	NW	5.0	古墳時代前期～平安時代集落。昭51境町教委調査。ほ場整備に伴う調査	島海戸・出口遺跡。境町教委。昭53
24	出 口	NW	5.0		
25	武 士 古 墳 群	W	4.0	上、下武士で100基あまりの大古墳群。境町教委調査	報告書。境町教委。昭47

第3節 遺跡における層序

本遺跡は沖積微高地上に営まれており、周辺はすべて水田として利用されている。現況においては、地形上、大きな変化はみられないが、遺跡の形成された時期はかなり変化にとんだ地形であったことが確認された。特に、遺跡ののる微高地は周辺の低地とおよそ1.8m比高差があったことが確認された。

そこで、本遺跡における標準層序を模式的に示すと次のようである。

第1層の耕作土は有機質を含む黒褐色砂質土層で厚さは20cm内外である。第2層は酸化鉄分層で赤褐色を帯びた砂質土層で、上層の水田耕作により鉄が沈澱した層で7cm内外の厚さである。第3層は浅間山給源の



第3図 土層柱状図

軽石を含む粘性をもつ褐色土層である。この軽石層は従来の研究で天明3年降下のもとみられるところからこの3層より上層は18世紀以降のものともみられる。

第4層は粘性褐色土層であるが、これには全く浅間軽石を含んでいないところから天明期以前の土層である。更に第5層に酸化鉄分層の沈澱がみられるところから、この第4層も水田耕作が行なわれていたことは明白で、後述の畦畔が検出されている。第6層は浅間給源の砂粒状の軽石を主としている。この軽石は従来の研究で1108年降下のもととされているB軽石で年代推定の一つの論拠を与えているものである。即ち、この土層が12世紀における表土層であったとみられる。更に第7層にも類似の軽石を少量含んでいる。

第8層は灰色砂質土層で水成堆積によるものであろう。第9層は純黒色土層である。基盤層は黄灰色の軟質砂岩層である。

これらのことをまとめると、第3層までが11世紀までの土層であり、4～6層が12世紀から天明期まで、第3層以上が天明期以降の堆積であることになる。

この所見にもとづいて、遺構の掘りこみをみて、各遺構の年代を推定する根拠としている。

次に各地点における土層を抽出して提示すると次のようである。

これで見ると、まず土層では基盤層の変化は周辺の低地と最も高い部分の差は105cmの差があり、台地縁辺はかなり急激に原地形が下がっていた様子をうかがい知ることができる。この低地部は西の小角田部落の前から西にかけても同様な状況がみられるので、西方500mほどを今は北西から南東方向に流れて、小角田部落の西で南に向きを変えて流れる早川が、一時期氾濫をしたために削られたとみるのが妥当であろう。現在は河川改修によりやや流れを変えているが、つい最近まで川巾も狭く、流路が曲りくねっていたために、夏季の増水期にはしばしば満水の状態になった事実がある。

この氾濫の時点は、堆積土層の状況からみるとかなり何回にもわたったことが台地縁辺部の調査区から推定できる。即ち、この地点は台地の終縁部に当たっているが、この内、浅間B軽石層まで5砂層が堆積しており、しかもその堆積は水平であることからすると、以前削られた部分が次第に深くえぐられて流路が広くなり氾濫した水が後には次第に縁辺部では流れる状態から水位が次第に上がる増水の形をとり、水平な堆積をみせ

るようになったものと思われる。

この浅間B軽石は台地の上面ではほとんど層としては認められず、深い部分や溝中などに認められる。これは、他の周辺の遺跡でも確認できる場所であり、降灰量と粒子の軽さから来る現象とみられる。これに比べて浅間A軽石は量的にも多く、台地上面にもかなり認められるところから、この天明の降灰期には既にこの周辺は沖積によりかなり安定した地形になっていたものと推定される。原地形において台地と周辺部は1.5mほどの比高であったものが、天明期には30cm内外になっていたものとみられる。

また地層的にみると数層の鉄分沈澱層があり、この面上に水田が耕作されていた可能性が大きい。上層のは耕作土下のものであるので、現在の水田に付随するものであることは明らかであるが、下層のはB軽石上にあり、この水田は中世に耕地化された可能性が大きい。(第342図)

こうした観点からB軽石降下前の状況を考察すれば、まだかなり周辺からの比高があり、しかも周辺部は砂の堆積がわずかに認められ、不安定な治水であったとみられる。しかし、B軽石下の黒褐色土層は有機質をかなり含んでおり、また後述のように部分的ではあるが水田の畦畔が検出されており既に水田化されていたことは明らかである。

第4節 調査の概要

歌舞伎遺跡は線路をはさんで南北にひろがっている。そのため、調査時点の相違と線路下の調査が不可能なため線路南部分をA地区、線路北部分をB地区と呼称する。

調査は3次にわたって実施されたが、その概略を記すと次のようである。

調査区分	調査期間	地点	調査担当者	調査面積	
第一次	49.5.22	A地区 1～5区	木暮仁一 柿沼恵介	井上唯雄 大江正行	3,400m ²
	50.2.15				
第二次	50.4.7	B地区	柿沼恵介 大江正行	石塚久則	6,000m ²
	50.7.12				
第三次	50.11.1	A地区 補充区	井上唯雄	大江正行	1,500m ²
	51.3.13				

調査は上武国道計画路線の中心杭をIラインとし、5mグリットを設定した。グリットの呼称は、巾方向をアルファベットとし、長さ方向に数字を付し、M-20グリットのように呼んだ。各グリットは北東メッシュを基準としている。海拔標高は37mほどで、この基準は、建設省杭を基準とした。遺構の実測は5mグリット杭を基準に平板測量を行ない、土層図、遺構図は20分の1の縮尺を基準とした。

第II章 遺構と遺物

歌舞伎遺跡における遺構の分布は、東武伊勢崎線をはきんで、巾50m、長さ250mの範囲に検出された。遺構は、東を石田川が流れ、それに向かって原地形が1mほどの緩傾斜をみせている。北側はまだ微高地が更にのびるものとみられる。西側はほぼ北東方向に向かって2mほど急激に傾斜し、この微高地が水によって削られている様相をうかがうことができる。遺跡のひろがりについて推定すると、東西は調査区で限定できたものの南北方向についてはまだかなりのひろがりをもつことが想定される。

南北方向のひろがりについては、以前の遺物の発見や調査例がある。その1つは、世良田駅構内における土師器使用住居跡の調査（昭和35年、群大尾崎研究室）で、他は駅西方の県道大間々線と東武線にはさまれた南西部分に祭祀遺物及び土師器が発見された（金子規雄氏蔵）ものである。これによって、遺跡地は東武線路沿いに300mほどの範囲に及ぶことが推定される。更に、それら出土遺物をみると、両者とも和泉期のもを中心にしており、調査地点のものと比較して、全体的には古い時期に属する傾向が推察される。

地形的にみても西側はかなり台地と低地の境が明瞭でそのひろがり、この祭祀遺物の出土地点が西端と考えて誤りなからう。こうして、ひろがり全域を数値的に表わすと、遺跡全域は70,000㎡にも及ぶ広大なものになるであろう。

上武国道はこの遺跡の中央やや東寄り部分を東南東から西北西方向によぎったことになり、特に遺構の最も密集した部分を買っているものと推定される。そのため、本報文中の遺構数をみても、線路南のA地域と線路北のB地域を合すると竪穴住居161軒、溝31条、土壇89基、井戸2基等ほう大な数にのぼり、更に水田址なども検出している。

この状況を、A、B両地点に分けて表示すると次のようである。

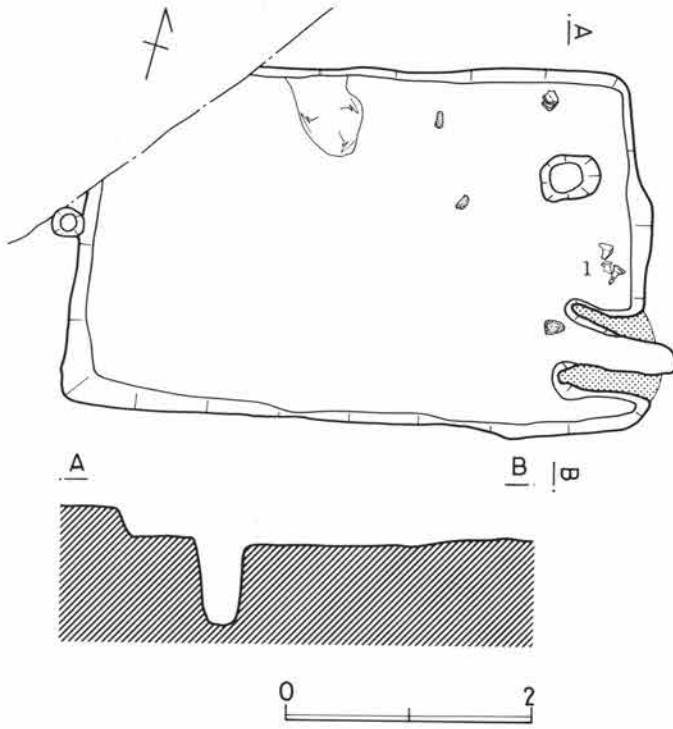
区 分	A 地 域	B 地 域	備 考	
竪 穴 住 居	古墳時代	64	37	古墳時代後期が主
	奈良時代	21	1	
	平安時代	11	9	
掘立柱建物	古墳時代	0	2	総柱建物、柵列
	歴史時代	0	2	総柱建物
溝	20	11	古代から近世に及ぶ	
井 戸	2	0	屋内井戸を含む	
土 壇	5	84	中近世のものがほとんど	
そ の 他	12	7	時期不明住居18軒、他に中世方形遺構	

この調査区での様相でみると住居の密集は、地形的に更に小さく分断されている可能性もあり、その観点からすると70,000㎡の内、東半部分は比較的新しい集落、西は古い時期の集落に分かれることも考えられる。いずれにしても、今回の調査における遺構の密集度はかなり高く、土地利用の一端を知ることができるとともに集落の性格をも示唆しているのであろう。

第1節 A地区の遺構と遺物

A-1号住居

長辺4.6m、短辺2.84mの東西に長い長方形を呈する住居跡である。ロームからの掘り込みは10cm内外と浅く床面は整っている。東壁南寄りに黒灰色粘土によりカマドを設置している。住居北東部に径33×50cm、深さ65cmの貯蔵穴をもつ。



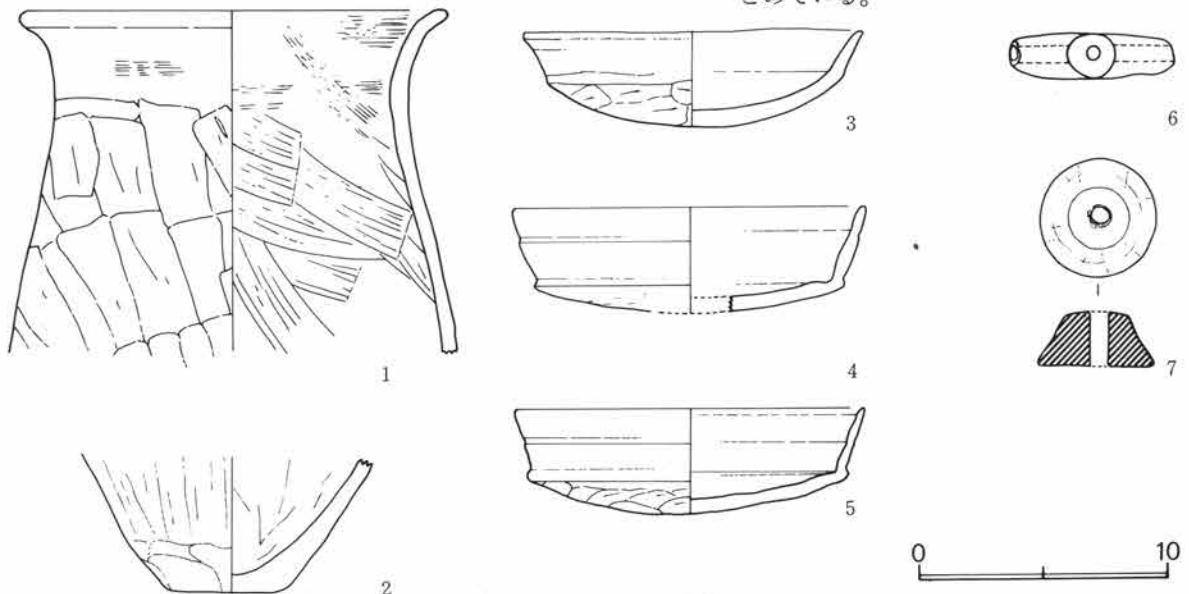
第4図 A1号住居図

西壁中央壁外に柱穴を有しているが、反対側の対称位置には柱穴が検出されなかった。住居内の支柱穴を欠くところからみて、壁外柱穴の2柱式の上屋をもつものである。

遺物は、カマド左袖部の東壁下に集中して検出された。

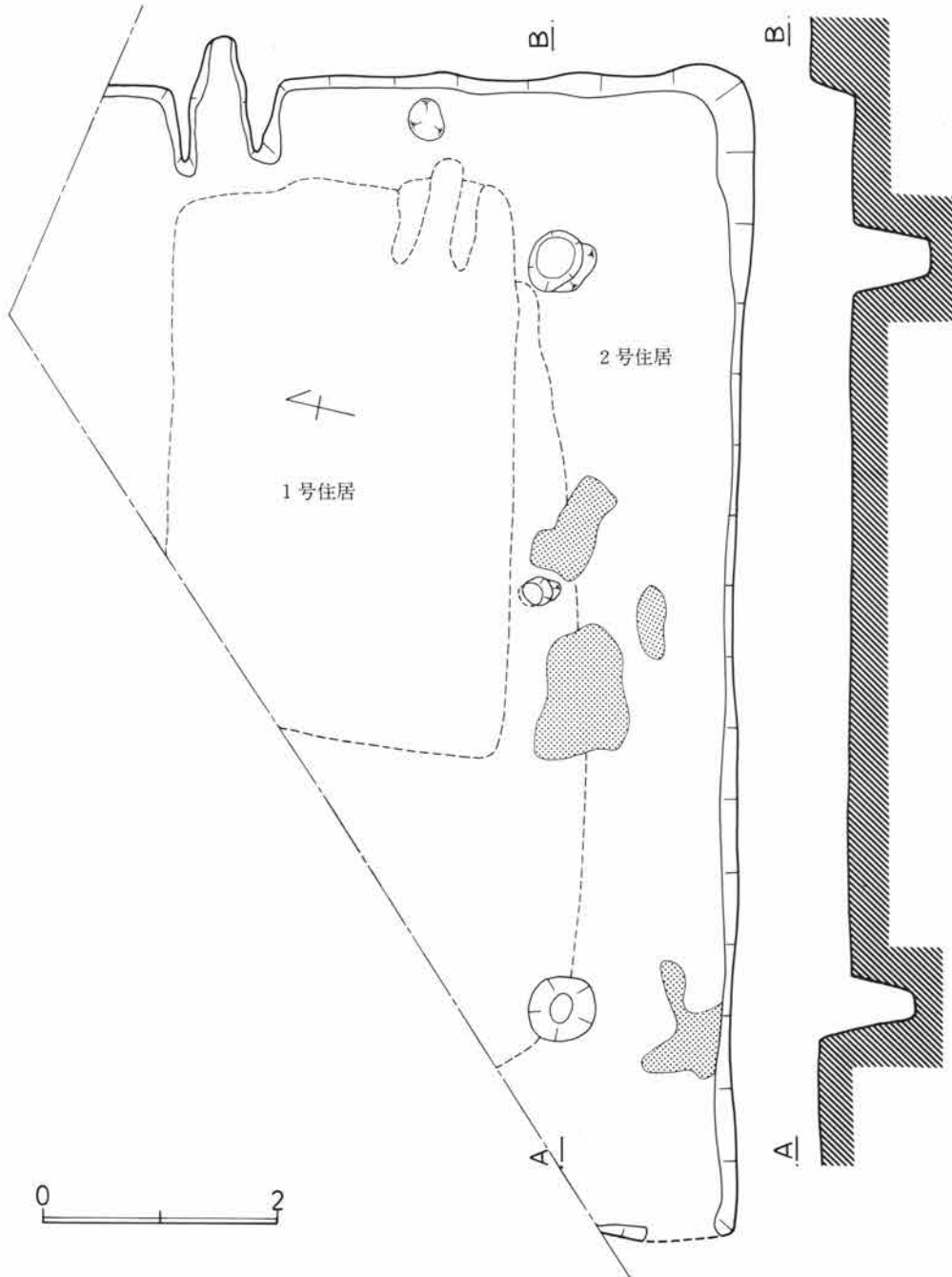
遺物(図5-1~7)長胴甕、及び坏、土錘、紡錘車を出土している。甕は輪積み技法で頸部がややくびれる形で、胎土に小礫を含むこと、ヘラ削り技法に特徴を有する。

坏は、浅い体部から外傾して開く口縁をもつものと、肩部に段を残し、口縁部にヘラで沈線を入れ、弱く外傾する二種がある。紡錘車は滑石製で比較的高い円錐台形を呈し、底面に使用擦痕をややとどめている。

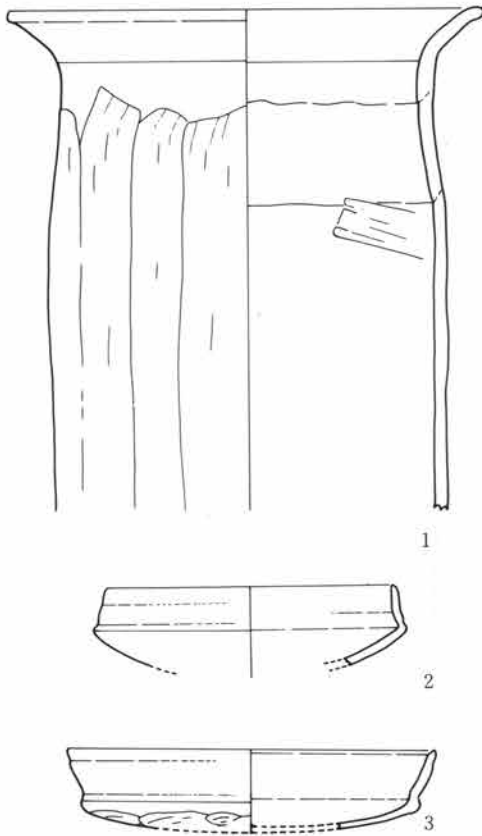


第5図 A1号住居遺物実測図

A-2号住居 1号住居と重複する東西壁長9.64に及ぶ方形住居とみられるが路線外にのびるため未完掘である。1号住居はほぼこの住居の中にスッポリ収まる形で上のにのる。掘りこみの深さは40cmほどで、床面も堅く踏み固められて整っている。四隅には支柱穴が4本穿たれたものとみられる。更に支柱穴間が6.2mにも及ぶため、その中間に補助柱穴を小さく、浅く設けている。カマドは東壁中央部に設置されているが、このカマドは当初からこの位置への設置を意図して、ロームを削り残して袖とし、その芯に粘土をまく。燃焼部は主として壁内にあるが、煙道部は壁外にのびている。



第6図 A-2号住居図



第7図 A 2号住居遺物実測図

規模からすると集落中最大のものとみられ、支柱穴は径54cm深さ60cmあり、カマド規模も焚口中74cm、奥行110cmと大きい。南壁下床面のところどころに焼土塊が認められた。

遺物 (図7、1~3) カマド床面に接して長胴甕、他に埋土中から坏2コが出土している。長胴甕の形状は頸部が少しくびれ、そこからゆるく外彎気味に外傾する口縁部が開く。口唇端部は横ナデで丸味をもつ。成形は紐作り手法でその痕跡をとどめている。整形は口縁、内面とも横ナデ、体部外面はたて方向の大きいヘラ削り痕をのこすが、胎土の良好さから、比較的整っている。

坏は2形態あり、浅い体部と口縁との接合は明瞭な段を有する点で共通するが、口縁部の立ち上がりに変化が認められる。即ち、2は短かく内傾し、中央に泌線状にくぼみが意織されている。3は比較的長く外傾して立つ形で、端部近くにおさえのための横線がみられる。共に整形はていねいで、底部は手持ちの不定方向のヘラ削り痕が認められる。

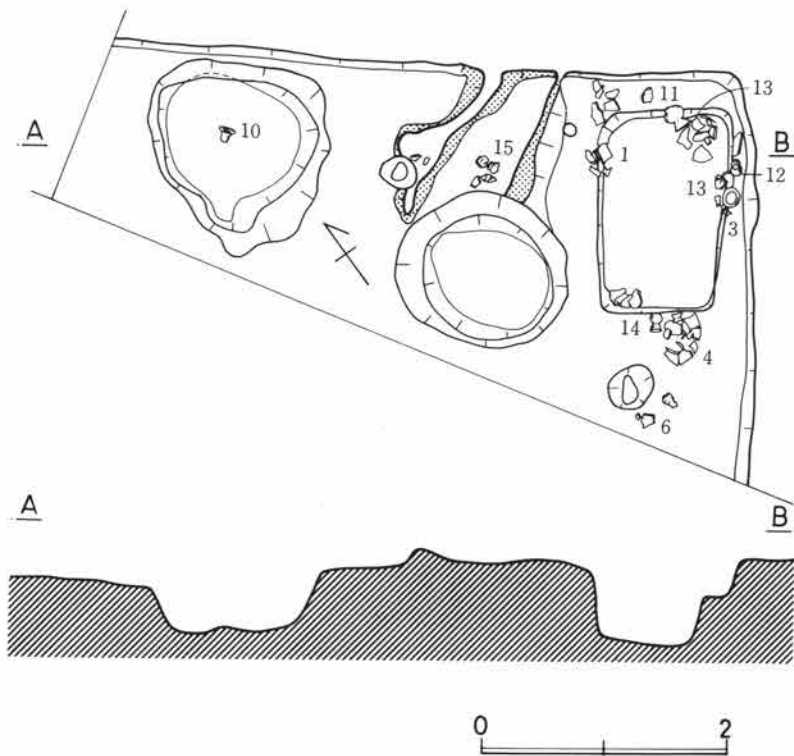
A-3号住居

調査区西端近くに検出された方形住居で、住居東南隅部を調査したにとどまったため全容は不明である。調査範囲には、カマド、貯蔵穴が認められ、その周辺から多量の遺物を検出した。

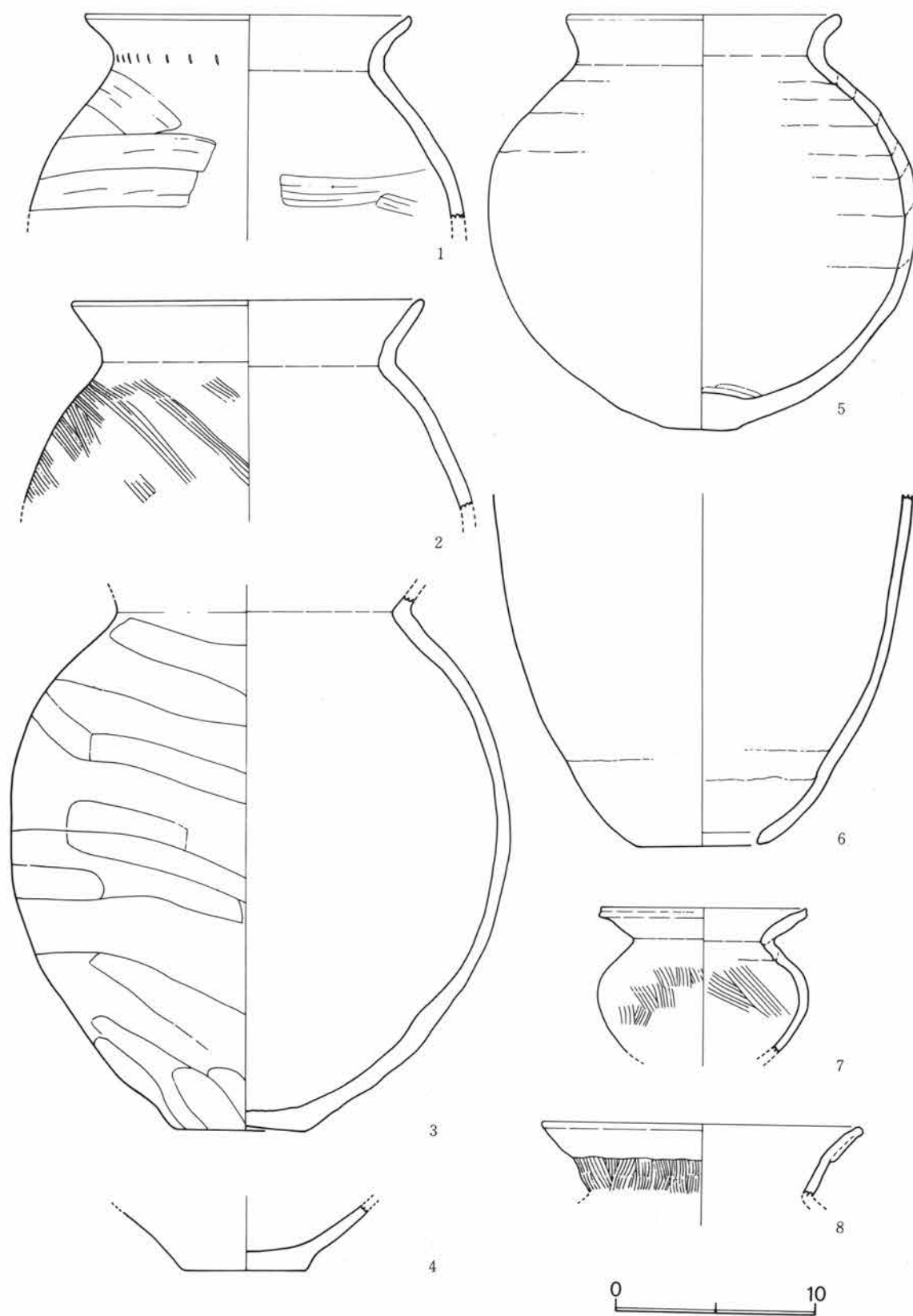
カマドは東壁中央から南寄りに検出されたが、壁から住居内に40度ほどの角度で大きく張り出している。規模は焚口中60cm、奥行150cmと大きく、煙道は伴わない粘土カマドである。

住居の隅に1.6m×1.05mの長方形で深さ60cmの大きな貯蔵穴を有している。この周辺からは多量の遺物を出土した。

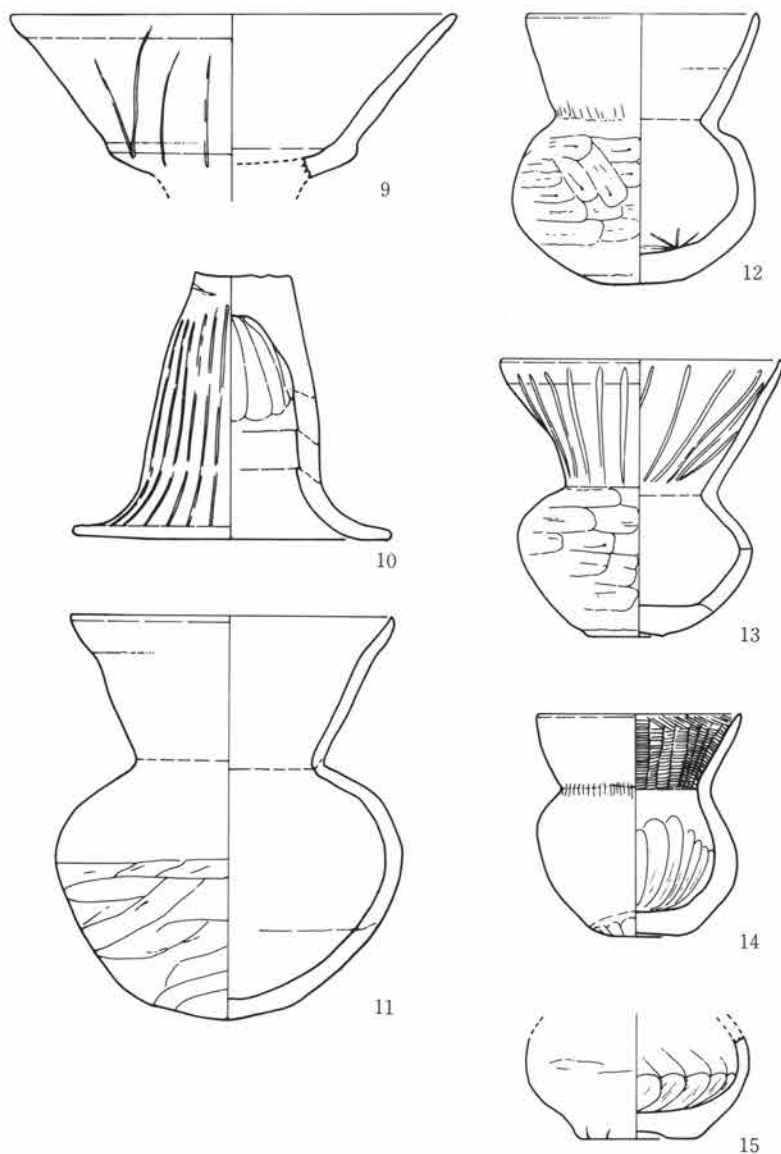
カマド前面及び、壁下に2ヶの径1.1m、深さ50cmほどの不正円形のピットがあるが、後に掘られたものである。ピットの埋まり方、内部に柱痕らしい痕跡を有すること、柱穴間の芯心距離が2.4m程であることから掘



第8図 A 3号住居図



第9図 A3号住居遺物実測図



第10図 A3号住居遺物実測図

立柱穴の可能性が高い。

遺物(図9、10—01~15)狭い範囲から多量の出土遺物を検出した。しかし、器種は比較的限定され、壺(4、8)カメ(1~3、5)、甗(6)、埴(7、11~15)、高坏(9、10)である。

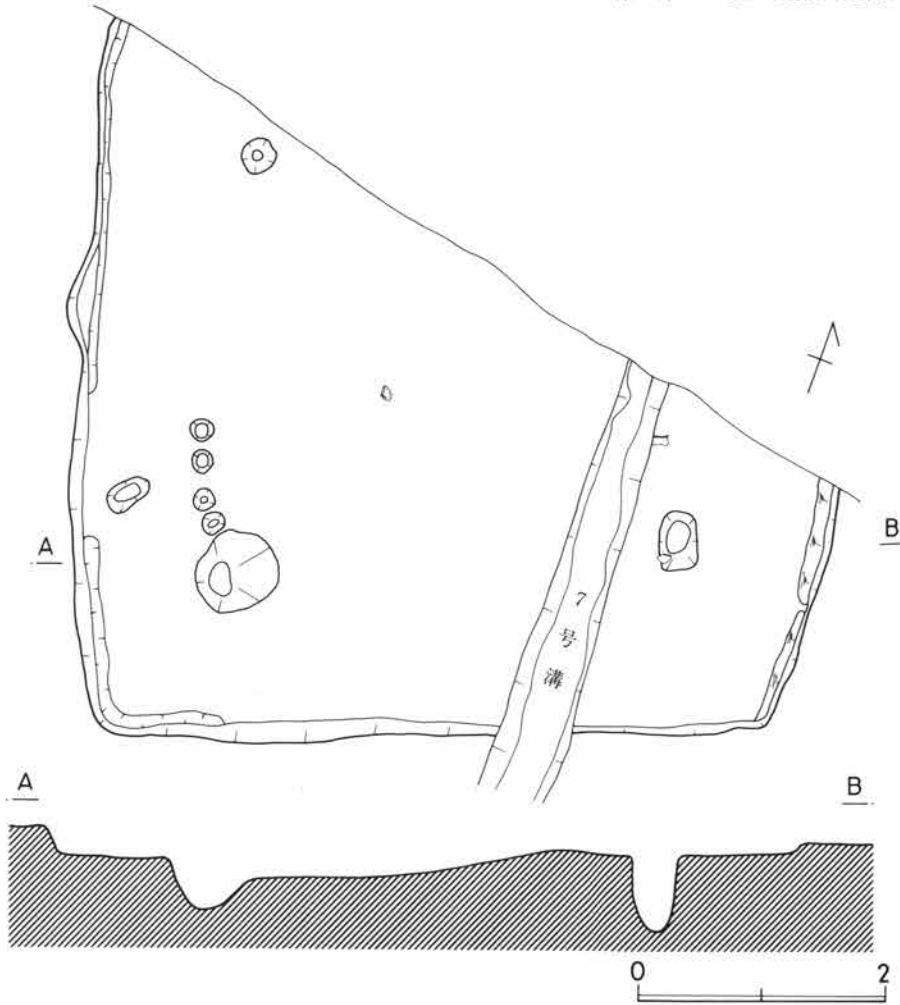
壺は折り返し口縁であるがやや不明瞭である。底部は4にみる如く造り出しの平底である。カメはやや長胴化した球形胴に一旦立ち気味に端部を外反させた口縁がつく。頸部は縮り、強く屈曲する。甗は上半を欠くが、大形の単孔である。

埴は2種あり、大型で口縁部が長くのびる丸底状のものと、短い口縁が外反しながら立つ小型のものがある。共に体部は扁球状を呈し、平底の中央に指で押したものや、上げ底のものがある。器表面はヘラ研磨痕がのこる。また一部のものには楯状工具による整形痕をとどめている。また小型のものは底部から体部にかけて指でたて方向にかきとった整形痕が認められるものがある。色調はやや黄色味がつよい褐色で、焼成温度の高さをうかがわせる。

高坏の、坏部は底部、口縁部の立ち上がりとも直線的で底径が口径に比しほぼ $\frac{1}{2}$ で、深さが底径とほぼ同じで大きい。内外面ともヘラ研磨痕がのこっている。脚部は一旦直に近く立ち、裾部は先端部で急に開く、脚の外側はたて方向ヘラ削り、内側は奥部に指のカキトリ痕、裾部近くで紐作り痕をのこしている。

A-4号住居 路線外に $\frac{1}{3}$ がはみ出すため未完掘である。規模は1辺5.6mほどの方形住居で、ルーム面から掘り込み20cm内外である。南壁を除いた調査部分に壁下の周溝が浅くめぐる。カマドは、おそらく、未調査部分に設置されているとみられる。その他の施設では、支柱穴が隅から1.5m入った対角線上に検出された。径30cm、深さ50cmほどのものが検出された。柱穴間の芯心距離は東西3.6m、南北3.5mとほぼ等しく、これでもほぼ方形の形状と推定できる。

床面はやや高低差があるものの比較的良好に整っている。住居東壁に平行して1.6mの位置に近世のものと思われる浅い7号溝が掘られていた。遺物は特にこの溝近くで集中的に検出されたところからみると、カマド位置は東壁である可能性が強い。



第11図 A4号住居図

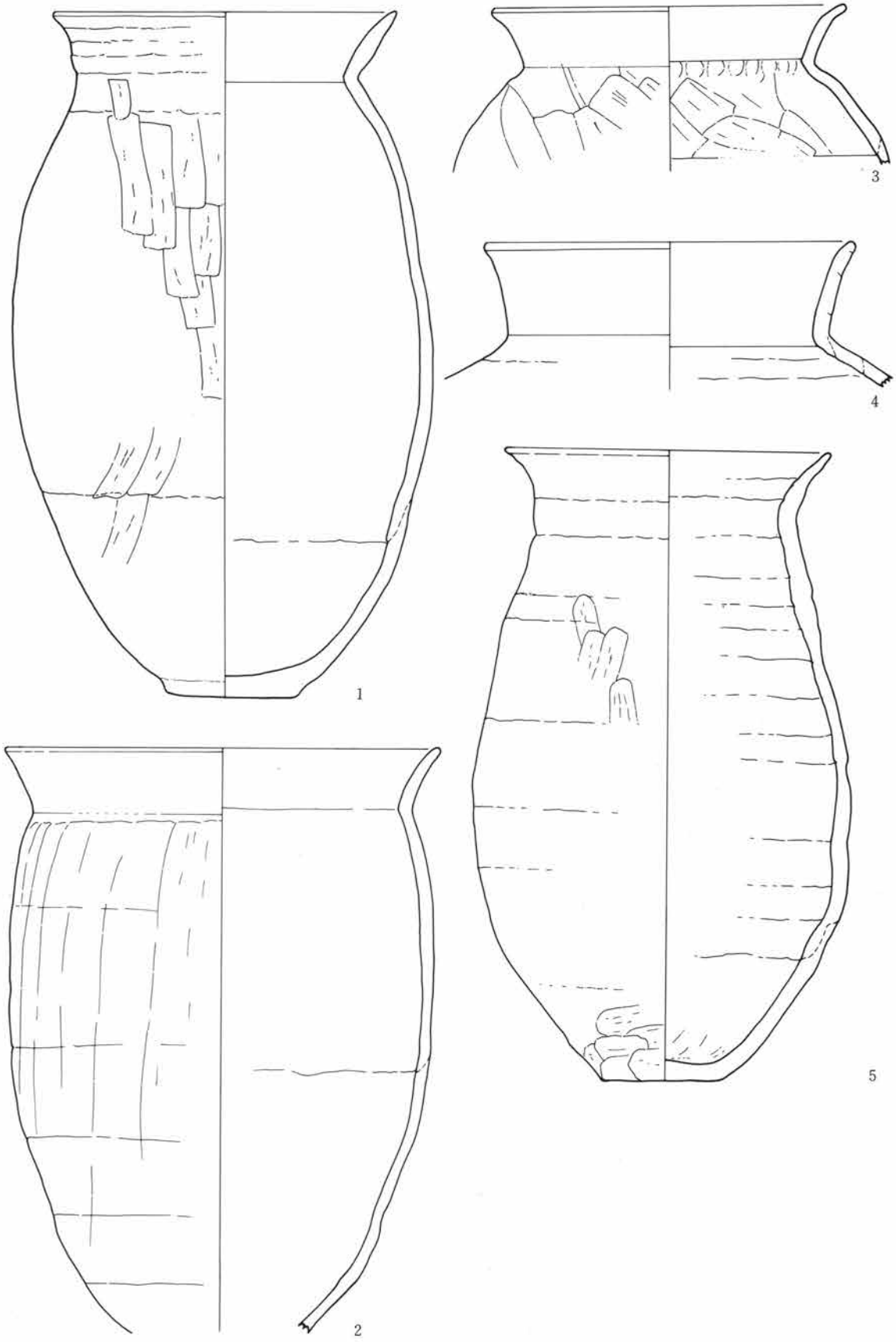
遺物(図12、13-1~8)器種は壺(4)、カメ(1、3、5)、甑(2)、高坏(6)、坏(7)、須恵器坏(8)のセットである。

壺は球形胴から直に近く外開きする短かい口縁を有するもので、頸部の折れ曲りは強い。体部はヘラ削りで、胎土に含まれる砂粒のため擦痕がヘラの方を示す。カメは長胴形を呈している。体部は中央に最大巾をもつ砲弾型で、輪積み痕をよくのこしている。底部は大きく平底を造り出しているもの(1)と、体部からそのまま、比較的広い平底に接続するもの2種がある。頸部は両種ともくびれ、そこからほぼ直に外開きする口縁部に接合している。部分的にヘラ削痕をのこしているが、それを抑えて消している。

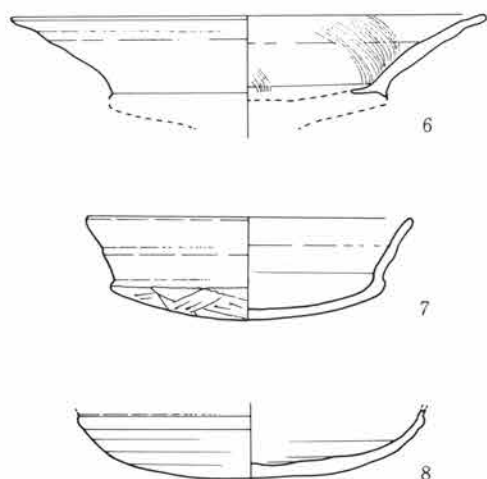
甑は長カメと同様の形態の底部を欠く単孔で、整形がていねいで、つくりはよい。体部外面はヘラの方で削り、内面は横ナデ痕をとどめている。高坏は坏部を小さくし、口縁部が外彎気味に外開きする。口縁径に比し、浅い感じがする。坏は体部の肩がややはり、浅い。口縁との接合部は段が明瞭に意識されている。口縁部は、体部に比し長く外開きする。中央部に沈線の退化した痕跡がうかがえる折れまがりがある。

須恵器坏(8)は蓋坏の身で、口縁部を欠くが、体部の形状からして大型である。体部は肩がコケた感じで、ロクロ痕をよくのこしている。胎土中の白色の小礫からみて、太田金山窯跡群のものである。

これら一群の遺物中、6、7は住居との関係についてはやや確実性を欠くものである。特に溝があとから掘られたことと、床面上に貼り床状の面があり、場合によれば、異なる住居が上面にのっている可能性もあるからである。



第12図 A 4号住居遺物実測図



第13図 A 4号住居遺物実測図

A-5号住居

1辺5.5mほどの方形住居である。ローム面からの掘り込みは10cmほどで浅いが、床面全体に散る炭化材により、焼失家屋であることは明らかである。そのため住居内の遺物も多く、今次調査における最も遺物の多い住居である。

施設としては東壁下南寄りに不正円形の貯蔵穴、対角線上の4本の支柱穴、南壁中央の副柱穴が注目されるが、カマドは伴なわないことが特徴である。また、炭化材の出土状態から上屋構造の推定も可能である。

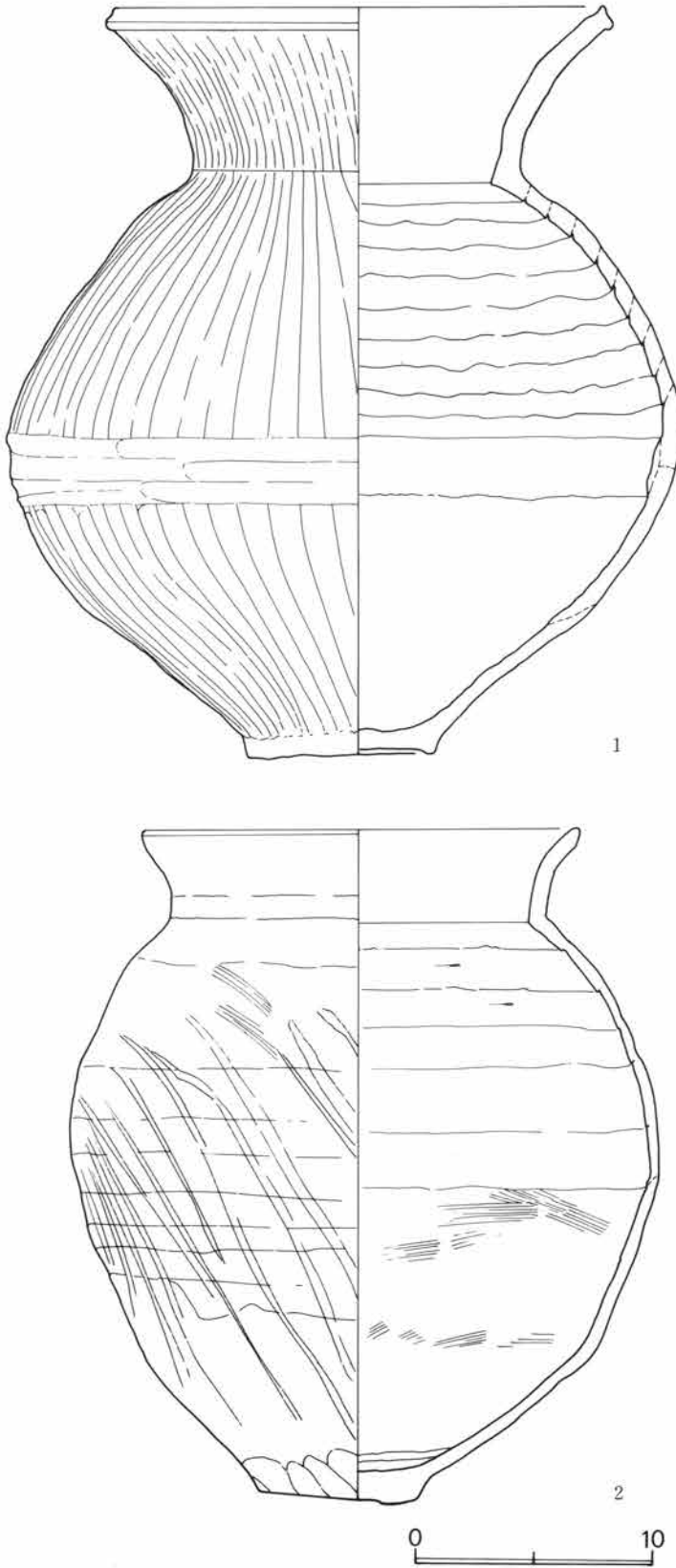
支柱穴は、各壁から1.6mほどの対角線上にあり、全般的に中央寄りである。また、西壁中央の副柱穴と炭化材の走向からみると、棟走向は東西にあったとみられる。西側の支柱穴



第14図 A 5号住居図

の中央部に粘土を馬蹄状にまいた焼土部があり、ここが炉址とみられる。粘土の状態からみるとむしろ、カマドの初現形態とみられないこともない。遺物の出土は、この支柱穴を結んだ方形の内に多くみられる。

貯蔵穴は、径1m、深さ50cmの不正方形で、周辺に遺物が多い。遺物の集中して出土する地点は、東側の支柱穴間、貯蔵穴周辺、北西部柱穴周辺の3地点である。床面は全体的によく踏み固められ、平らに整って



第15図 A 5号住居遺物実測図

いる。

遺物(図15~21、1~53)器種として壺、カメ、高坏、埴と単純であるが、特にカメ、高坏の多いことが目をひく。

壺はイチジク形の体部に底部は大きい安定した平底を造り出し、口縁は強くしまった頸部から長く大きく外反して立つ。表面はたて方向のヘラ研磨でつくりがよい。底部は上げ底である。

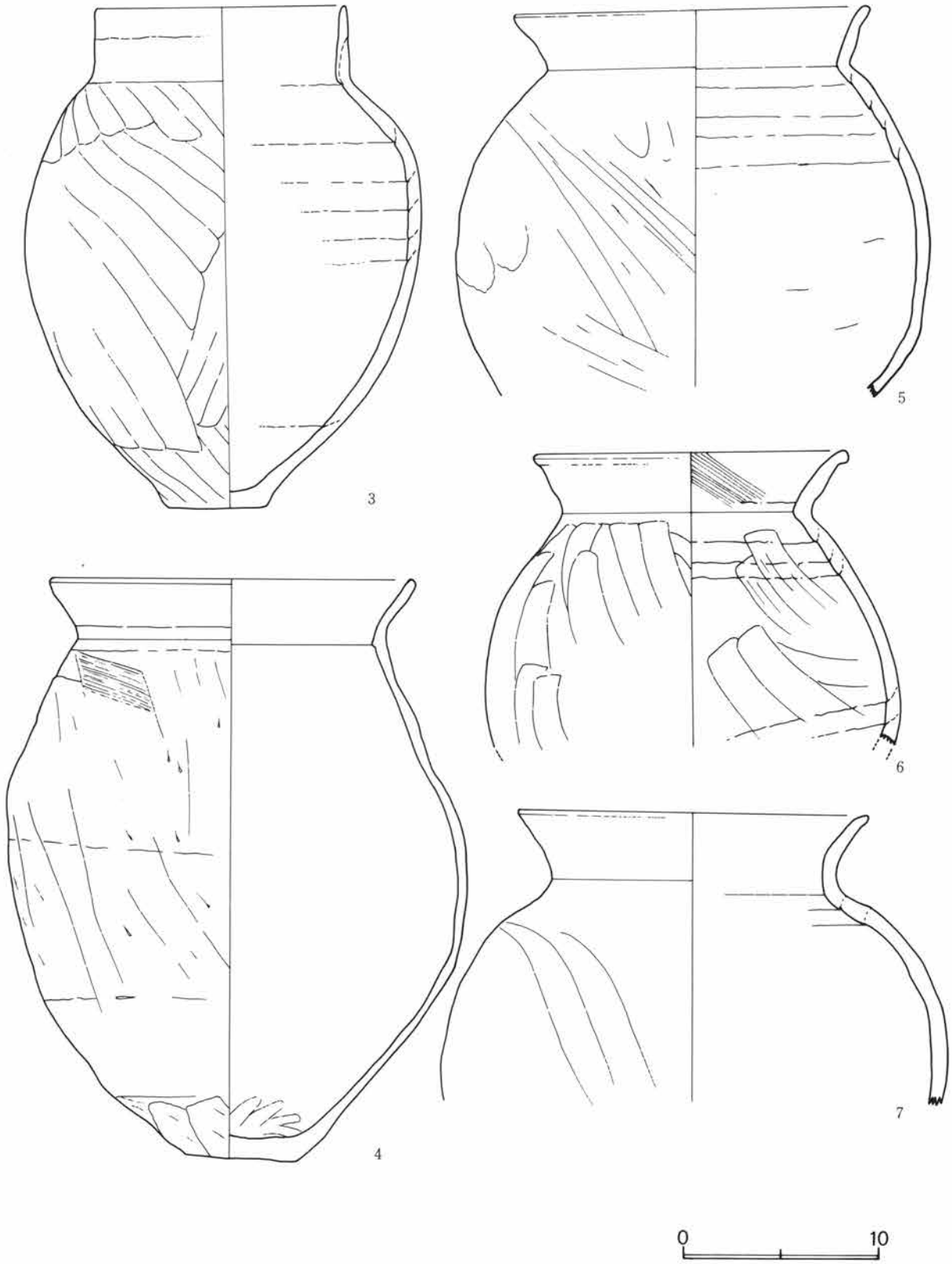
カメは球形胴とやや長胴気味の2種があるが、球形胴のもの口縁は強い「く」の字状を呈して頸部から外開きする。長胴気味ものは、口縁が比較的直に近く立つ傾向がうかがえる。底部のつくりも、前者が平底の造り出しであるのに対し、後者は体部から直接底部に移行する形である。また櫛状工具により整形痕をのこすものが多いことも特徴である。

高坏は、坏部の底径が口径に比し大きく、深いものが多い。底部から口縁への移行には段を付して直線的に開くものと内彎気味に開くものの2種がある。

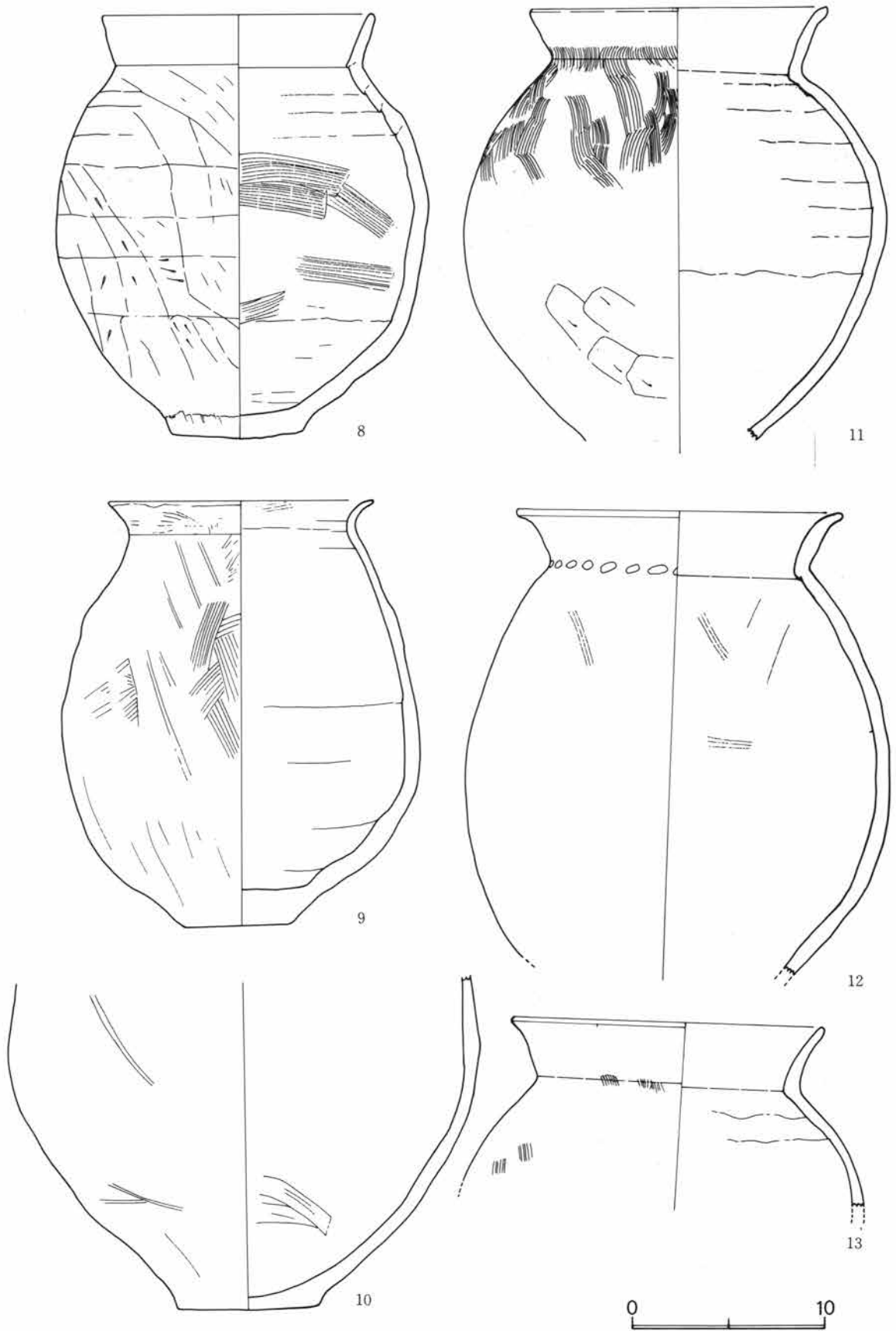
脚は一旦直に近く立ち裾部を急に開く形が一般的であるが、接合部から直接開く感じのものと、直立部分の中央にふくらみをもつものの2種がある。また、坏部と脚部の接合には、半数ほどが「ヘソ」はめ込み式をとっていることが注目される。

整形はていねいで、特に内外面にヘラ研磨による放射状痕をのこしているものが多い。

埴は体部最大巾が下半にくるものと、肩部にくるものとの2種がある。前者は口縁が広く外開きするのに対して、後者は直に近く開いて短かく立つ。形も前者は大型で後者は小さい。指のカキ取り、指おさえなどの技法は後者にみられる。

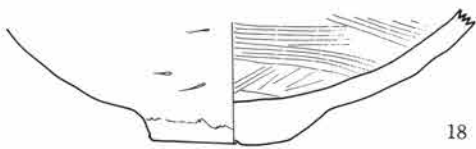
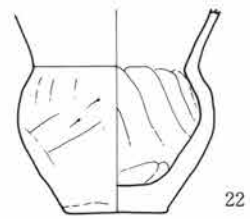
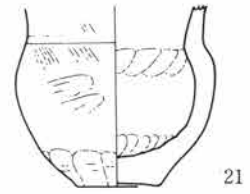
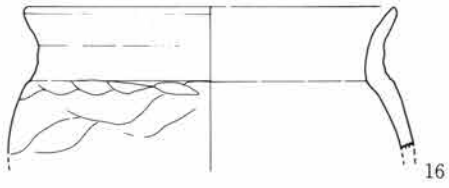
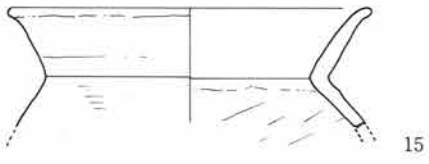
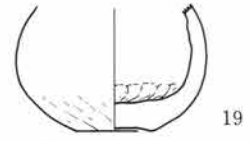
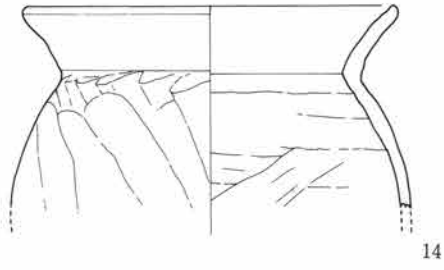


第16図 A 5号住居遺物実測図

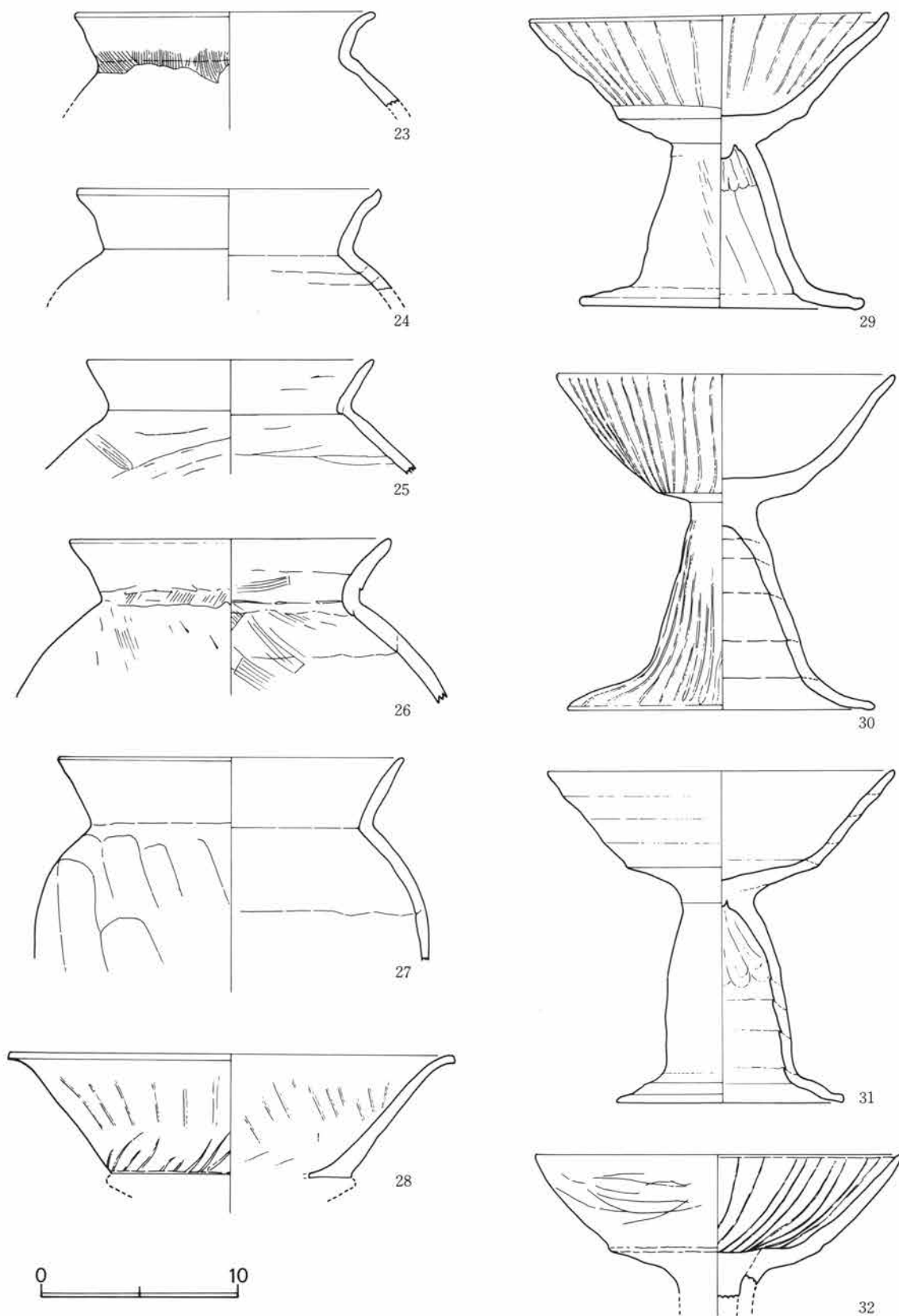


第17図 A 5号住居遺物実測図

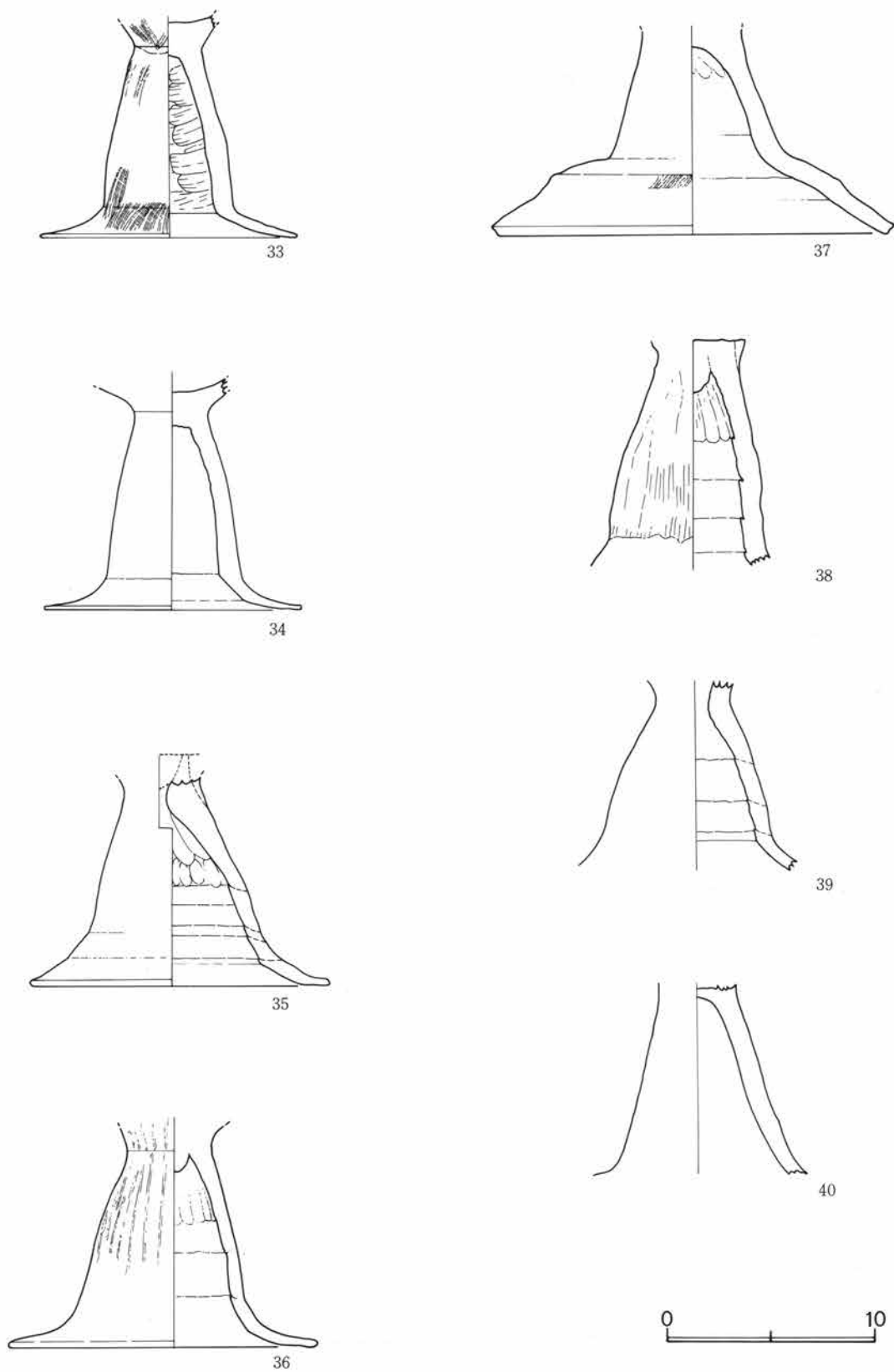
第1節 A地区の遺構と遺物(A-5号住居)



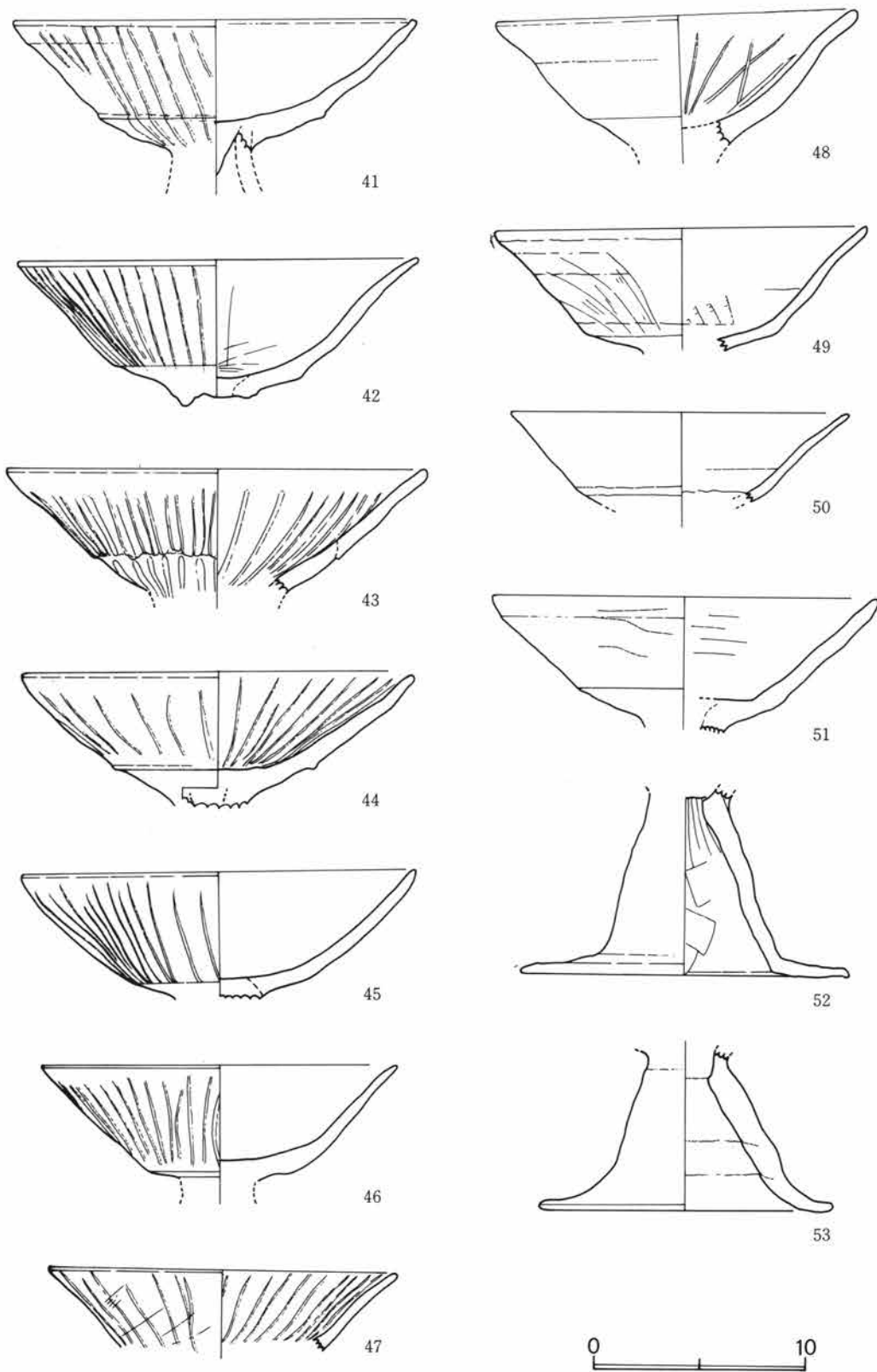
第18図 A 5号住居遺物実測図



第19図 A 5号住居遺物実測図



第20図 A 5号住居遺物実測図



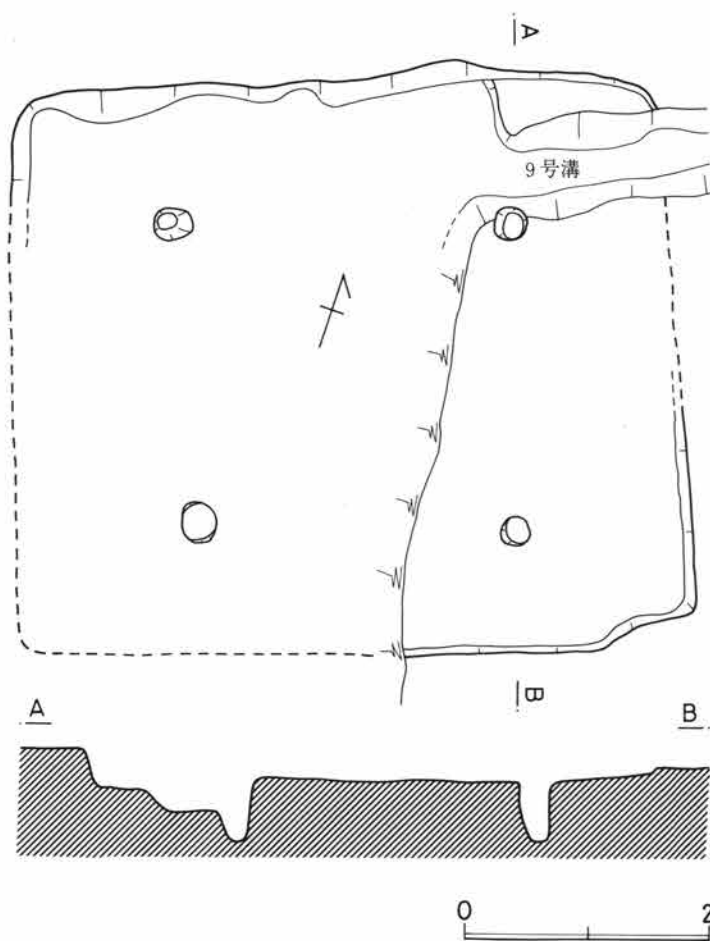
第21図 A 5号住居遺物実測図

A-6号住居跡

遺構の規模は3.69×4.0mあり、ルーム面からの掘り込みは30cmほどである。住居南西部を斜めに中近世のものと思われる溝がよぎるため住居の全ぼうは明らかにできなかった。支柱穴4本と南西コーナーを除く3つの隅が確認されている。カマドは東壁欠落部分にあったとみられ、周辺から多少、焼土ブロックが認められた。貯蔵穴も明瞭には把握できなかった。

支柱穴は4本、住居の対角線上に検出された。径30cm内外、深さ46cm内外で直に立つ。柱間は各2.5m内外で整合している。遺物の出土はほとんど後世手の入らない住居中央南寄りや貯蔵穴に認められたが、まとまったものは少ない。

遺物 (図23-1～3) 長胴甕と坏が出土している。長胴甕は頸部がほとんど締らない砲弾型で、口縁は内彎気味に外方に向かって開く。器表は紐作り痕を消すため、たて方向、斜め方向のケズリを入れているが、継ぎ目は痕跡をとどめている。底部は体部がそのまま移行する形で、体部の大きさと比べると、やや小さ目で不安定である。



第22図 A 6号住居図

坏は浅い肩のこけた体部から口縁部との境に明瞭な段を有している。口縁部は段から外開きするが、口縁部 $\frac{2}{3}$ ほどのところに沈線状にゆるい段をみせている。貯蔵穴出土。

A-7号住居

路線外へほとんど出るため現状では南東隅しか確認できない。施設遺物等もほとんど検出されていない。

A-8号住居

9号溝によって切断されているため、住居北半分が路線外にのびるために全容はつかめない。南壁部分の長さは4.6mあり、西 $\frac{2}{3}$ には壁下周溝をめぐるしている。

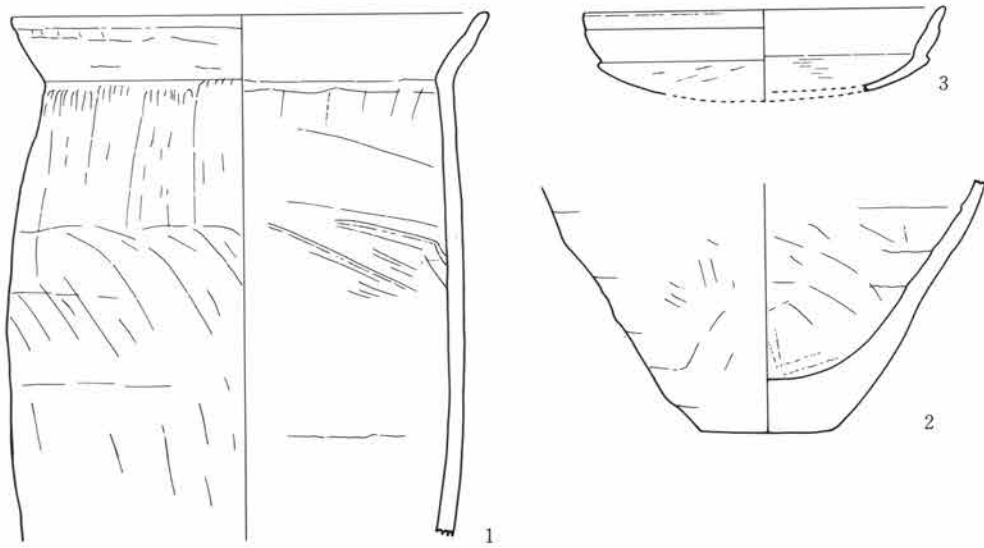
カマドは近世の溝により破壊されていて不明であるが、焼土等の出土により東壁部分に想定される。

住居東南隅に検出された貯蔵穴は90×80cm、深さ50cmの不正方形を呈している。中から坏などの土師器片を出土している。

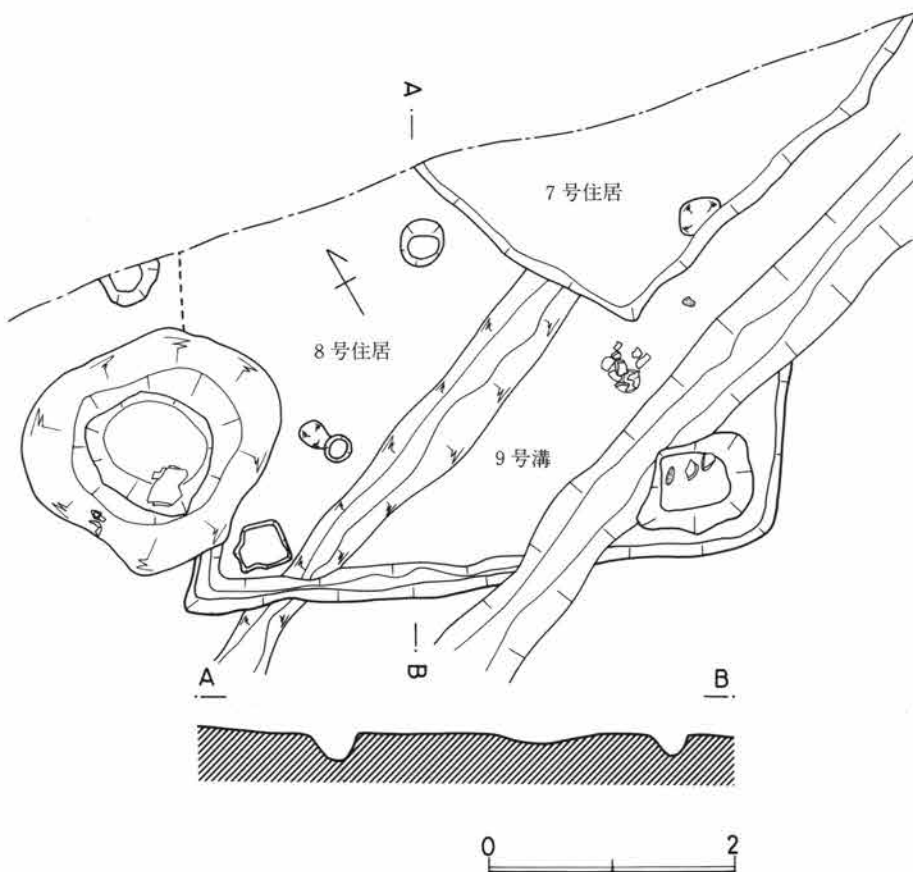
柱穴は確実なものは南西部のものが1本で径22cm、深さ40cmほどである。

遺物は前記貯蔵穴中の他、カマド前面と思われる部分から長胴甕が出土している。

遺物 (図25-1) 長胴甕で体部はまだかなり長円形をのこしている。最大径は胴部最大径部分にある。頸部は比較的強くしまり、そこから短かく斜方向に開く。紐作り痕がよくのこっているが焼成は高温であ



第23図 A 6号住居遺物実測図



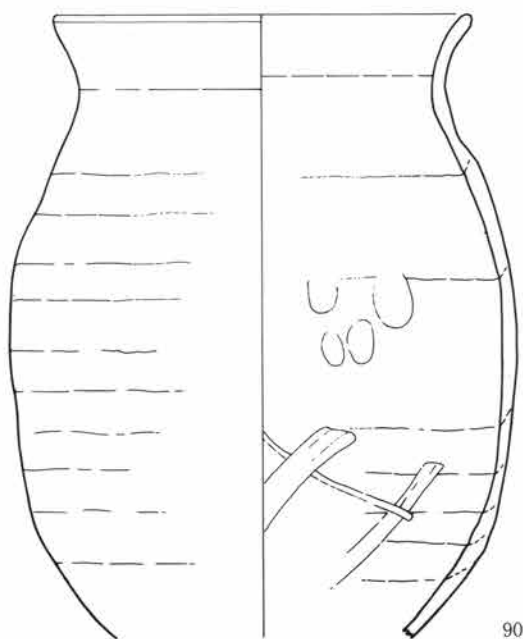
第24図 A 7・8号住居図

る。他に貯蔵穴の坏破片があるが、体部の肩がはり深い。口縁部は、器高の $\frac{2}{3}$ ほどで、外斜口辺の坏からの退化形態とみられるものである。

A—9号住居

4.7×5.6mの南北に長い長方形を呈するが、西壁が南側でややすぼまる不正形である、カマドは北壁に設

第1節 A地区の遺構と遺物(A-9~10号住居)



第25図 A 8号住居遺物実測図

置された粘土カマドである。焚口巾は36cm、奥行76cmで煙道をもたず壁内で終結している。

カマドの右脇には貯蔵穴が円形に開いている。径は76cm深さ95cmで、中段にこしが倒れ込むように口縁を下に向けて出土していた。

対角線上の主柱穴は確認されなかったが、カマド前面の柱穴は、これに当るかも知れない。他の小ピットの内、東壁沿いの二つは上屋構造と関連する可能性がある。

遺物の出土は、住居北東四半部分(カマド周辺)に集中して検出されている。

住居南辺部分は他住居との重複や後世の攪乱によって一部破壊されている。

遺物(図27, 28-01~13) 器種はカメ、コシキ、小型カメ、坏である。カメはやや球形胴から長胴

化する傾向があり、最大径は胴部中央に来る。口縁はやや締った頸部から比較的強く屈曲して外方へ開く。底部は安定した造り出しのある平底を呈する。

こしきは体部にふくらみのある長胴形で頸部のくびれは認められない。底部を欠く形の単孔である。

小型カメはカメとほぼ同様に技法的特徴をもつ。

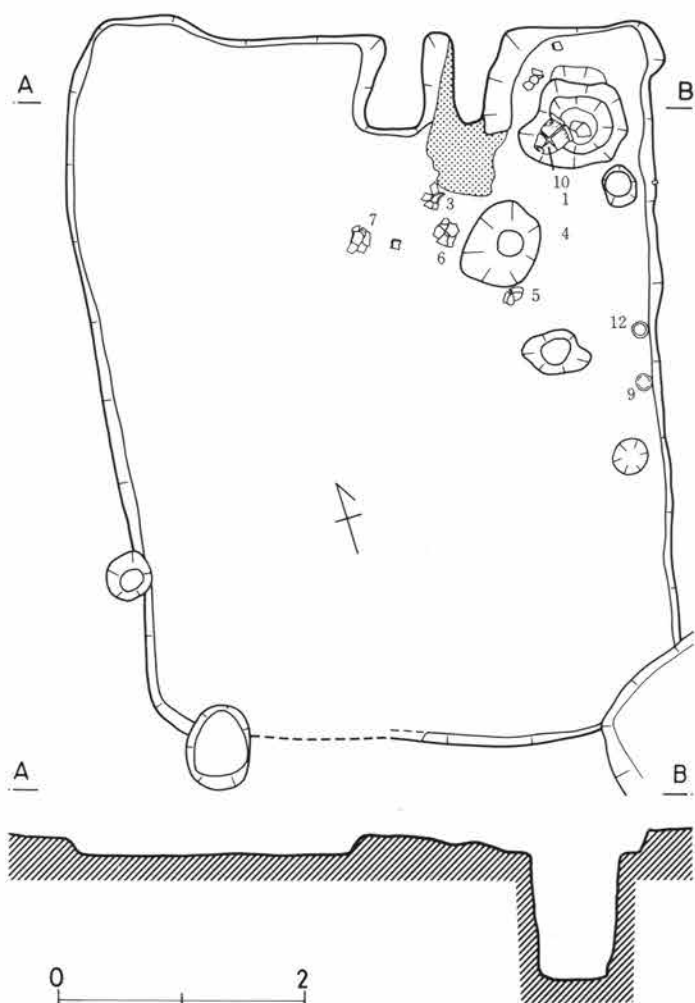
坏は共通して大型で、体部が深く、口縁との境に段を有している。口縁の立ち上がりは、外反、直立、やや内傾3つの形がある。

特に全器種を通じて、口唇端部のへらおさえの技法に、櫛状工具による整形痕を一部にとどめている点がみられる。

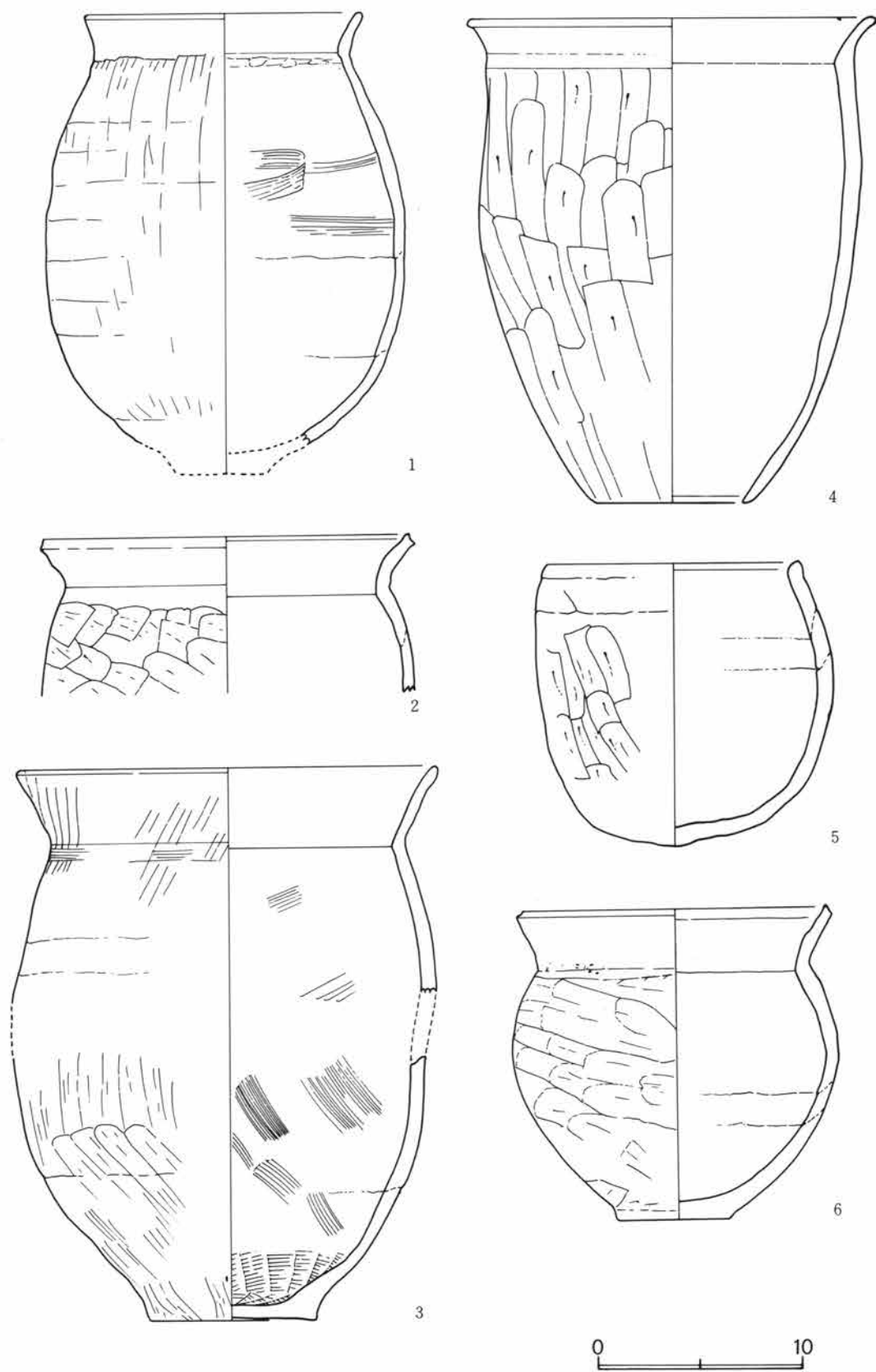
A 10号住居

4.8×4.3mの歪んだ長方形を呈している。ロームの面からの掘りこみは25cm内外と浅い。

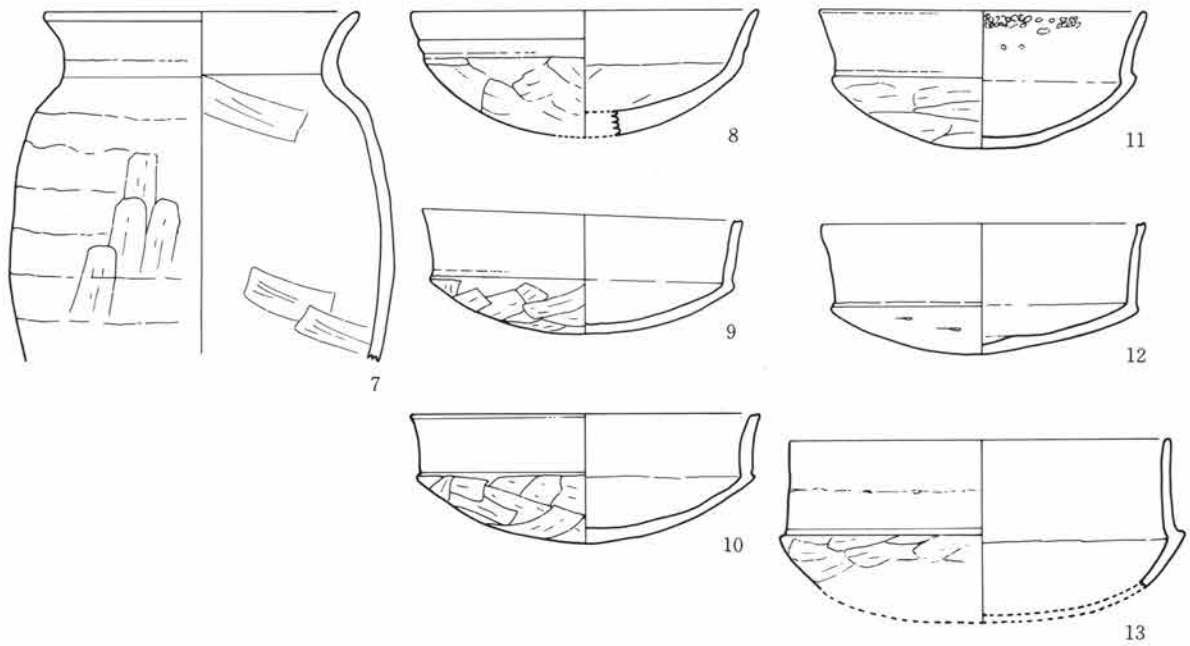
カマドは北壁に設けられているが、住居の壁に対し東南方向に斜行している。焚口巾30cm、奥行80cmで壁外への煙道部



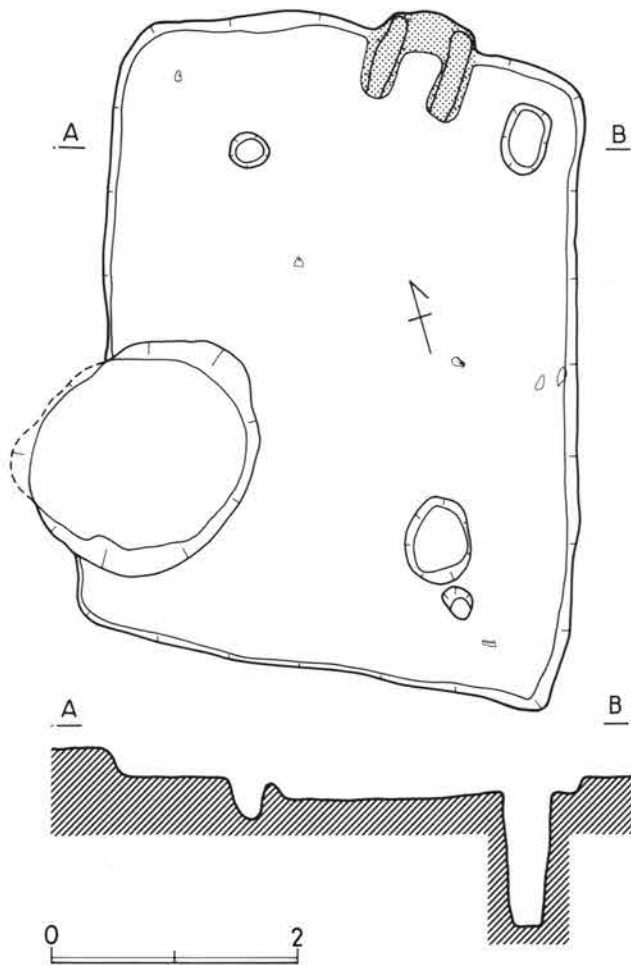
第26図 A 9号住居図



第27図 A 9号住居遺物実測図



第28図 A9号住居遺物実測図



第29図 A10号住居図

ののびはほとんどない。

カマド右脇に不正長円形の貯蔵穴がある。径40cm、深さ1.1mと径に対し、深さが極端に深いのが特徴である。

柱穴は北東隅と南東隅部に不明瞭ながら検出されたが、他には確認されていない。

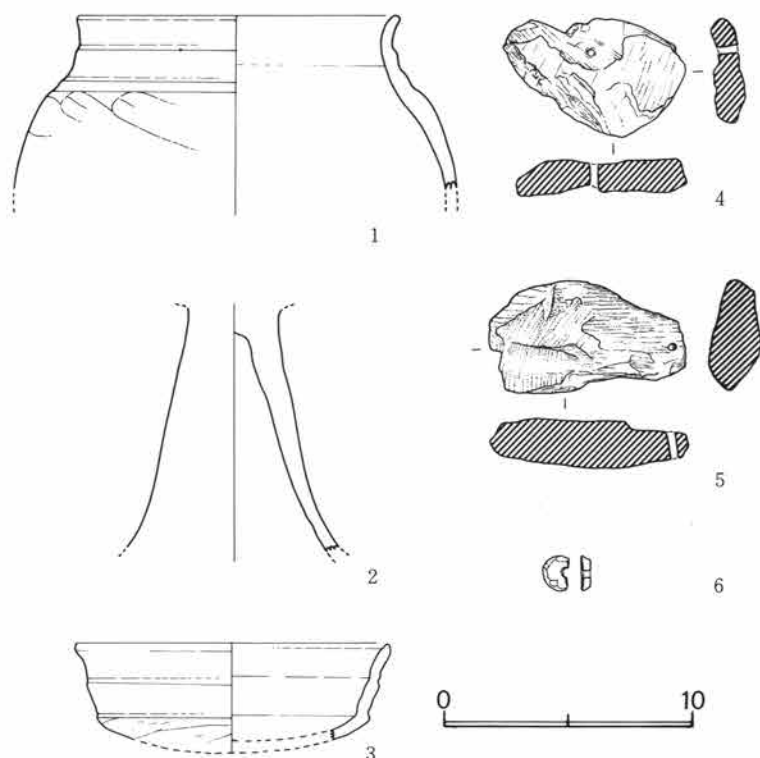
遺物は、カマド周辺に土器が、住居東北四半部に石製模造品が検出されている。

住居西壁にかかる大きいピットは中近世のものである。

遺物(図30-1~6) 小型カメ、高坏脚、坏形土器が出土し、他に石製模造品3点が発見されている。

小型カメは球形胴から短かく外方に開く口縁を有する形で、底部は欠くが丸底を呈するものと思われる。口縁部には中央に沈線で段をつける意図がみられる。つくりは良好である。高坏脚は直に近く、裾部で急に大きく開く形である。

坏は、小形カメと同様に口縁部にヘラで中央に段を付している。体部は浅く肩部もこけているが口縁との境の段は明瞭である。



第30図 A10号住居遺物実測図

の掘り方がある。深さは17cmで、内部から土器（1、2、4、5）が出土している。これを貯蔵穴とするには規模、深さとも問題はのこるが、一応貯蔵穴としておく。

住居南半部中央に焼土、灰の集中する60cmほどの径をもつ部分があり、ここが炉址とみられる。また住居北西隅には径50cm、深さ1.4mのピットが直にうがたれており、湧水がみられた。貯蔵穴としては深すぎ、屋内井戸のような性格を有するものであろうか。

その他、住居南西隅に焼土の堆積がみられた。これは土器の上面をおおう形で、焼失家屋の様相をみせている。西壁北隅外側には、本住居にのる形でA6号住居のカマドがのっている。

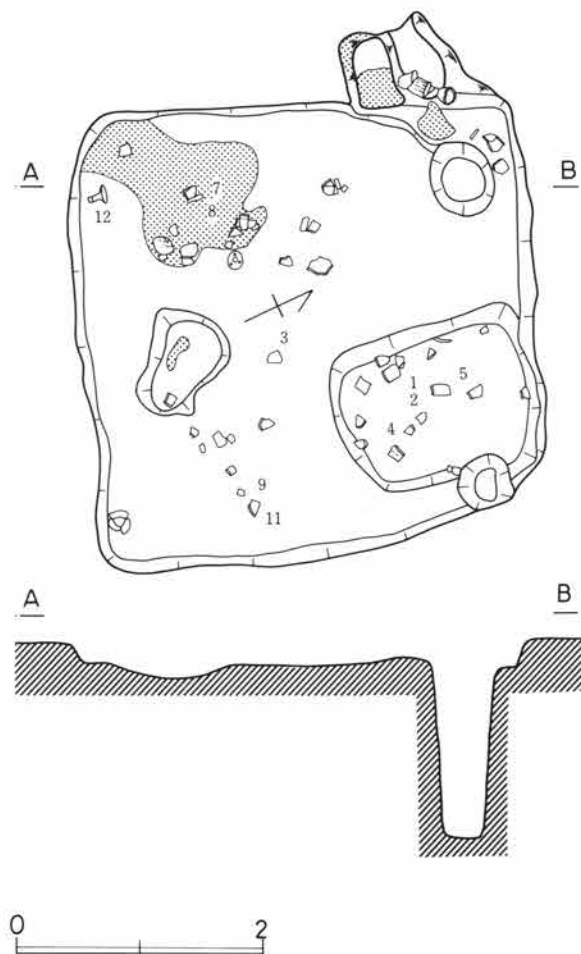
遺物はほぼ住居跡全面から認められたが、貯蔵穴中、住居南西隅部に集中して検出された。それらの中の一部は二次焼成を受けているものもあり、焼失家屋であることを裏づけている。

遺物（図32-01~12）器種としては壺、カメ、

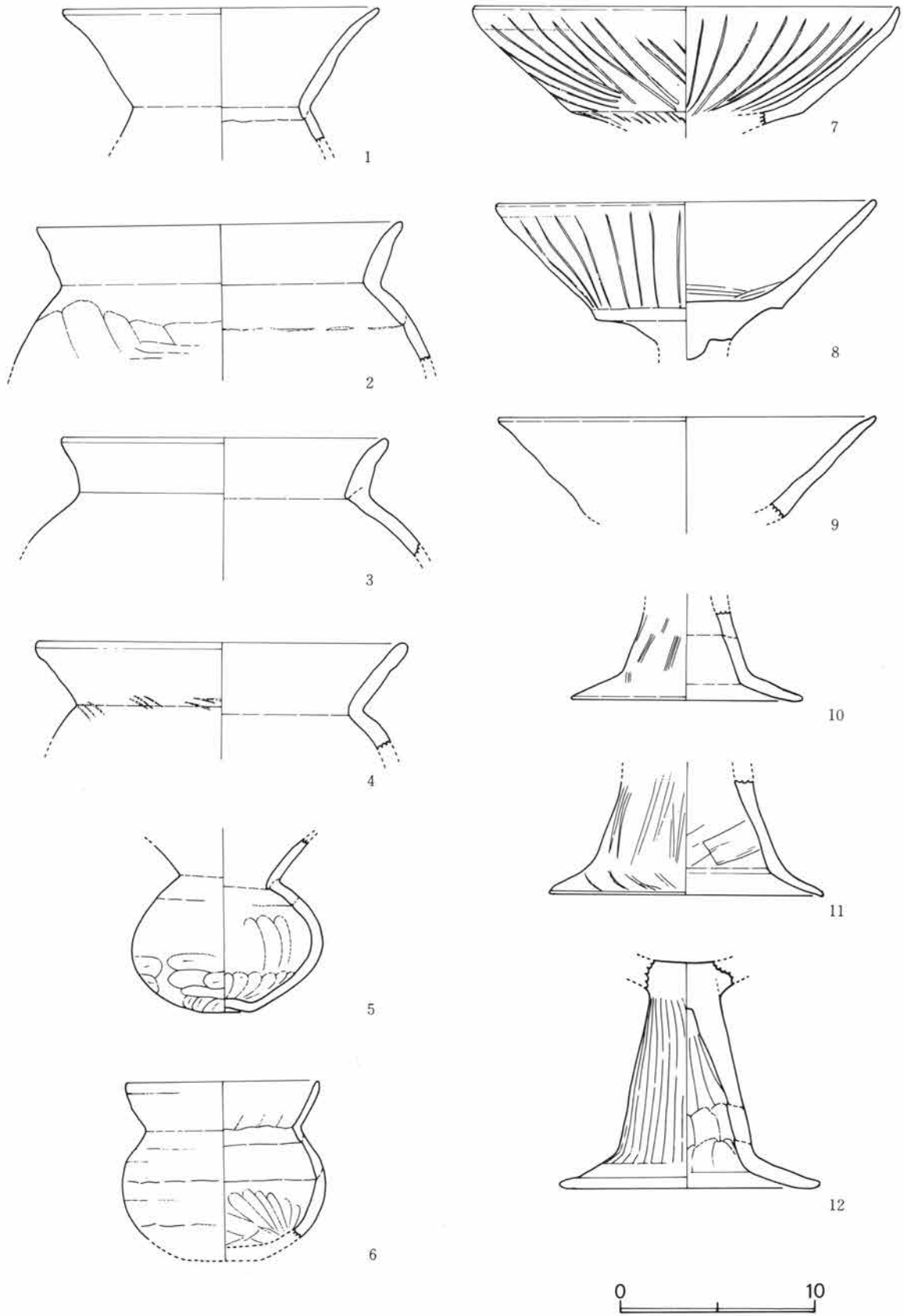
石製模造品3点は共に滑石製である。4、5は穿孔の位置や全体的な形状は斧状を呈するがはっきりしない。6は白玉であるがうすい円錐台形をしている。石製模造品は概して造りが雑で特に大型の2点は未製品の感すらあるものである。

A-11号住居

I・J-8区に検出された住居で1辺3.6mの不正方形である。ルームからの掘り込み面は25cm内外である。北東隅部分は東壁が内側に入りこんでいるため歪んでいる。その内側に径1.6×1.2mの長方形



第31図 A11号住居図



第32図 A11号住居遺物実測図

埴、高坏である。全体として、古式をのこしている。壺は体部を欠くが、頸部が強くしまり「く」の字状に屈曲して外開きする口縁につづく。口縁の器内の調整により弱い複合口縁の形をみせている。体部はあまり張らないで、球形を呈し、平底をもつものと推定される。最大巾は口径にくると思われる。

カメはすべて体部下半を欠いているが、球形の体部から短かく外方に開く口縁を有する。壺、カメとも比較的作りはよく、器面調整にヘラ研磨、櫛状工具の使用痕をとどめているものもある。内面からみると、紐作り痕がのこっている。

甕は口縁が長く外開きするものと、短かく立つものの二種がある。前者は体部が球形に近く、底部は中央があがっている。頸部から口縁への移行は「く」の字状に強く屈曲して大きく外方に開く。口唇部を欠くが最大径は口径部に来るものと考えられる。後者は、体部が偏円形の球形胴で、口縁の立ち上がりもやや弱い。共に表面は研磨しているが、内面底部の指のカキトリ痕は共通している。

高坏は大きく直線的に開く坏部をもち、脚は直線的に一旦立ってから裾部が開く点で共通している。坏部は内外面の放射状研磨痕と脚との接合に「ヘソ」はめ込み式のもののあること、坏部の体部と口縁の境に稜を有するものがあることなどが注目される。

A-12号住居

調査区の東武線線路敷に近い部分のH12区で検出された4.5×4.6mの規模をもつ方形住居である。ほぼ対角線が東西南北を指す軸線を有している。ローム面からの掘り込みは浅く、西壁下では10cmにも満たない。

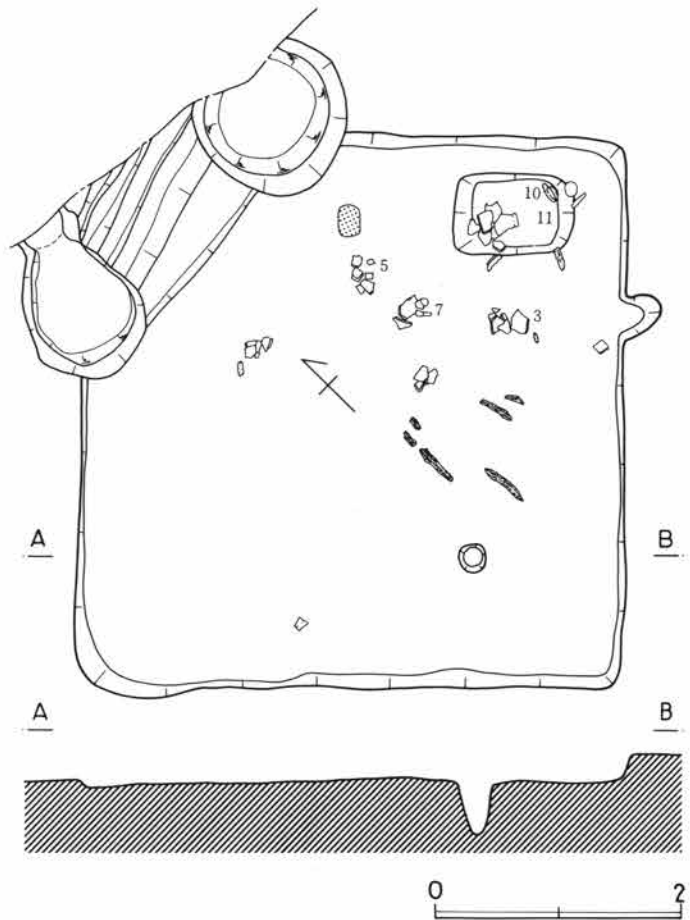
住居北西隅部分が後世の攪乱により破壊されているためカマドは不確実である。

しかし、東壁中央部に焼土の堆積した部分があり、壁を破壊された部分に、カマドのあったことが推定される。住居北東コーナーに径66×95cmの不正方形の深さ40cmの貯蔵穴が検出され、内部からカメや坏などが出土した。

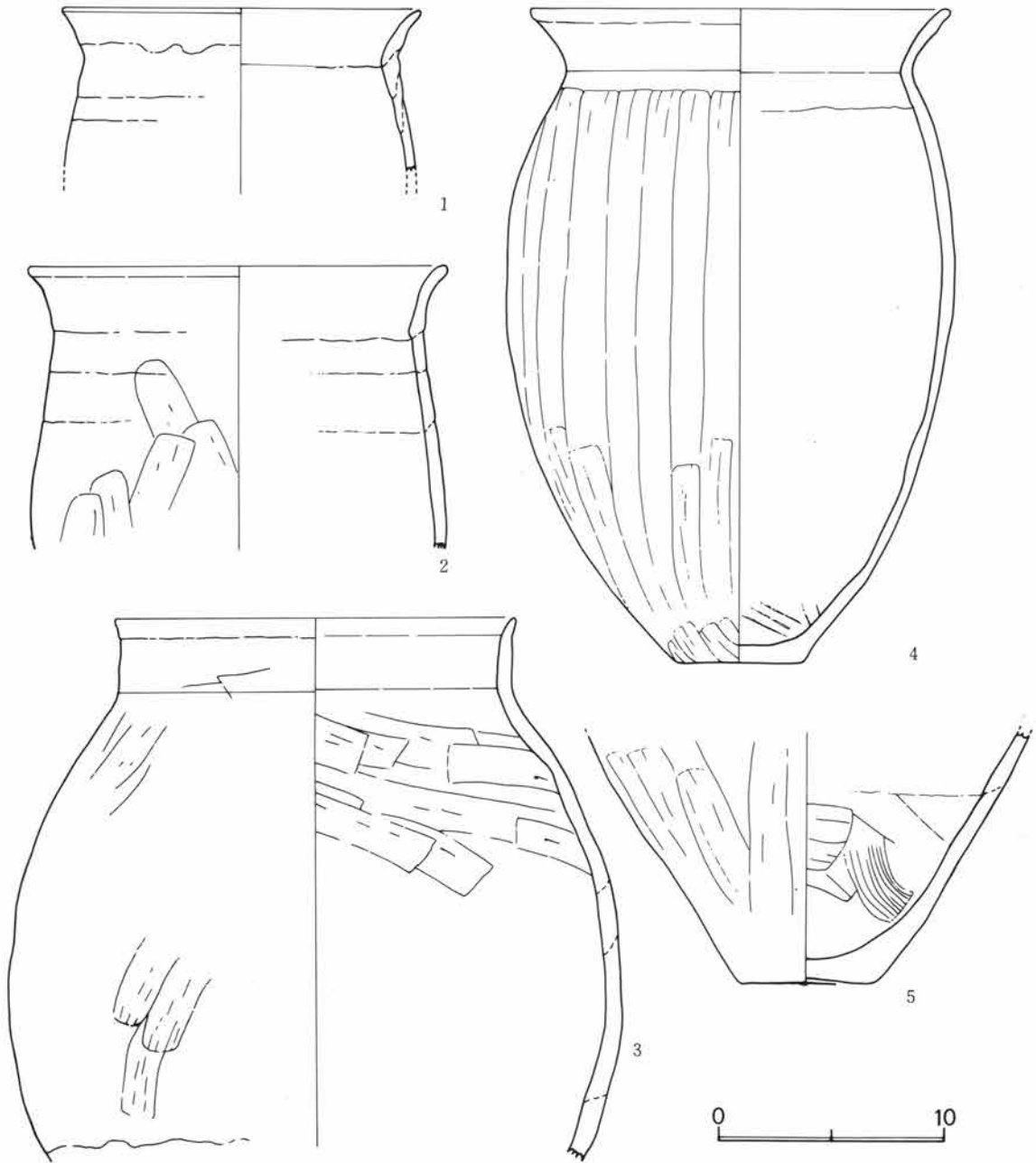
柱穴は西南部に径30cm、深さ40cmのピットが1ヶ検出されたが、他は土層が黒色土で、その中に掘り込まれたらしく明確になし得なかった。

住居北西コーナー部分は中近世にかかるピット、溝が掘られて破壊されている。

遺物 (図34、35-01~11) 器種は、カメ、埴、坏である。カメは頸部がややくびれ、中央の張った体部から造り出しをもつ底部につながる。頸部からの口縁部は直に立つものと比較的大きく外方に開くものの2種がある。整形は一部にケズリはあるもののその上からヘラで整えている。



第33図 A12号住居図



第34図 A12号住居遺物実測図

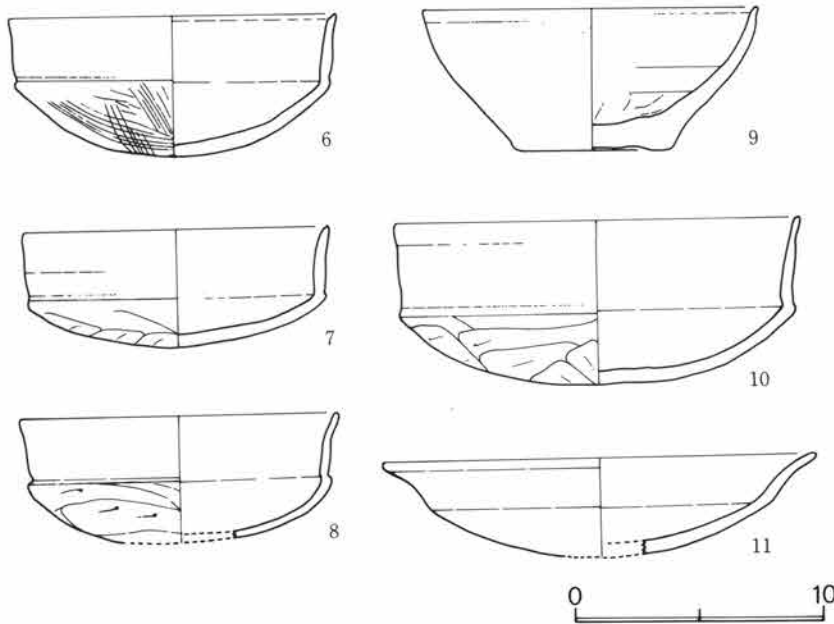
坏は深い体部と直に立つ口縁をもつものが主で、これにも大型のものと小型のもの二種がある。体部と口縁の境には段が明瞭である。

(11)の坏は、浅い、口縁の外反するもので他と傾向を異にしている。

碗は(9)は、大きい平底から、内彎しつつ外開きする口縁を有する。口唇部は短かく外反する傾向をわずかながら残している。小型土器の一群はつくり、整形ともよく、よく整っている。

A-13号住居

K-9区で検出された5.0×4.9mの方形住居であるが、その大半は住居北西から南東に走る1号址で切られて、その痕跡を確認したにすぎない。即ち確実に確認されたのは北東、南西コーナーのみである。住居の



第35図 A12号住居遺物実測図

施設としては、北東コーナーの貯蔵穴及び南西のものを除く3本の柱穴のみである。

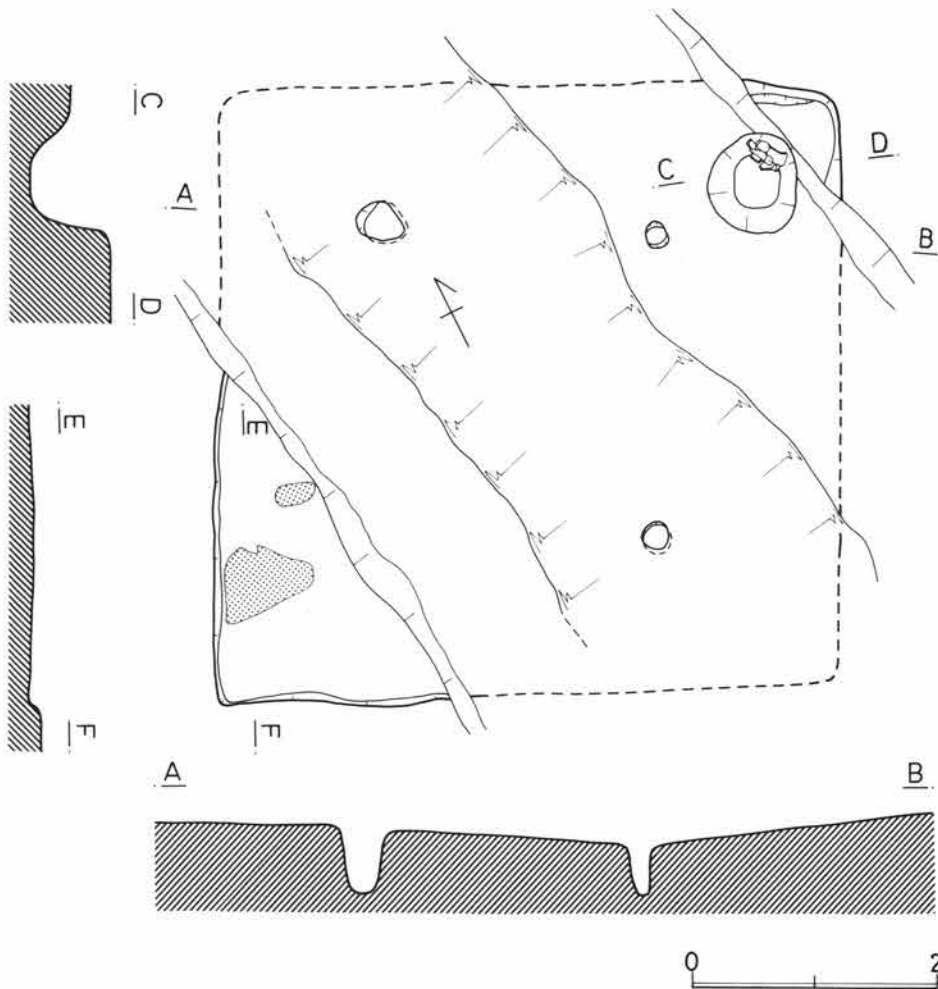
貯蔵穴は径80cm深さ30cmの円形で、その穴の肩にかかって、コシキが出土した。柱穴は溝の中に検出されたため、基部のみが確かめられたが径20cm内外と柱の太さを示しているものとみられる。住居南西コーナーでは焼土塊が認められた。

遺物(図37-1)コシキ。口径に最大径が来る大型コシキで、強く外方へ開く口縁は

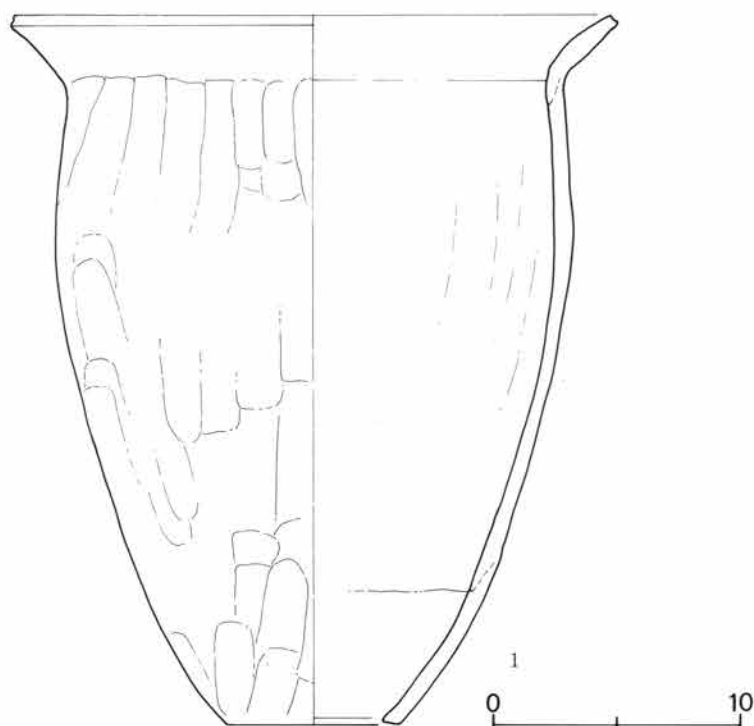
端部をヘラでおさええている。肩から胴部にかけてやや緩やかに、下半部で急速にすぼまり表面はヘラ削り、内面は櫛ナデ。

A-14号住居

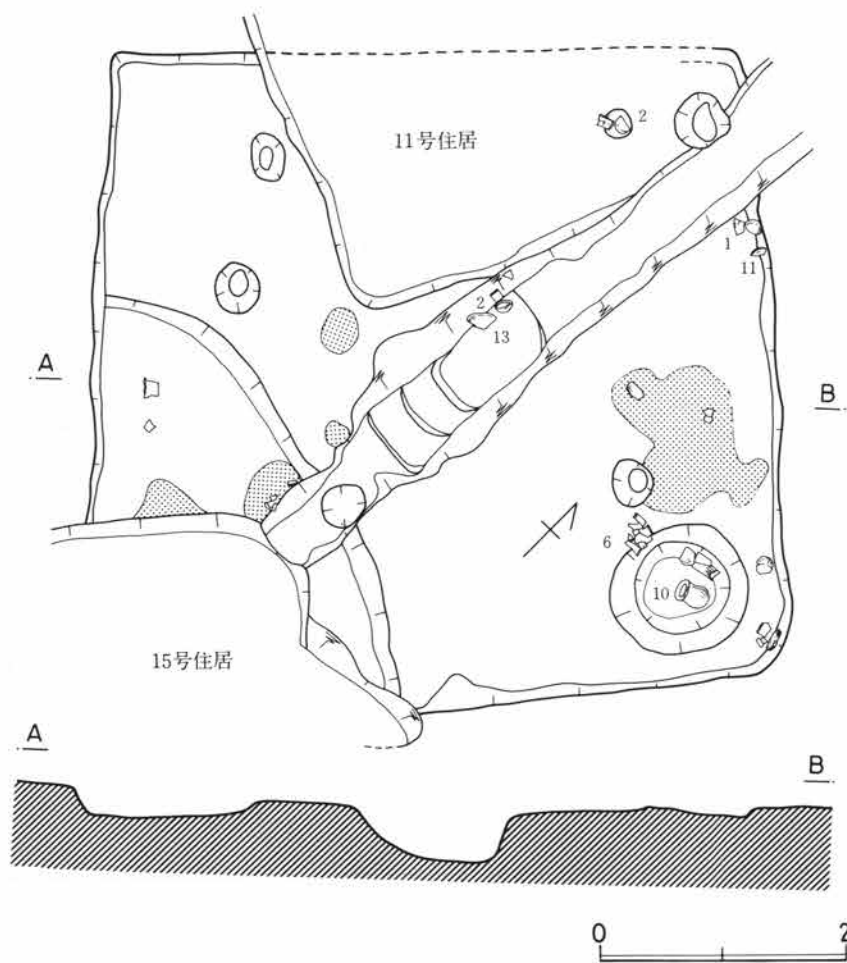
住居の規模は5.4×5.1m、方形の住居である。住居南西隅を15号住居が切る。住居の北東から南西にかけて後世の溝が住居南西隅を15号住居に、北壁中央部を11号住居に切られて複雑な様相をみせている。したがって、旧状をとどめている部分は全体の半分ほどに



第36図 A13号住居図



第37図 A13号住居遺物実測図



第38図 A14号住居図

過ぎない。

東壁側では東南コーナー部に貯蔵穴が径1m、深さ30cmの円形に設けられ、縁や内部からコシキ、坏、カメなどが出土している。

そのすぐ北に焼土塊がまともっておりカマドのあったことを裏づけている。柱穴は、床面が荒れているため明らかにしがたいが、2ヶほど検出した。

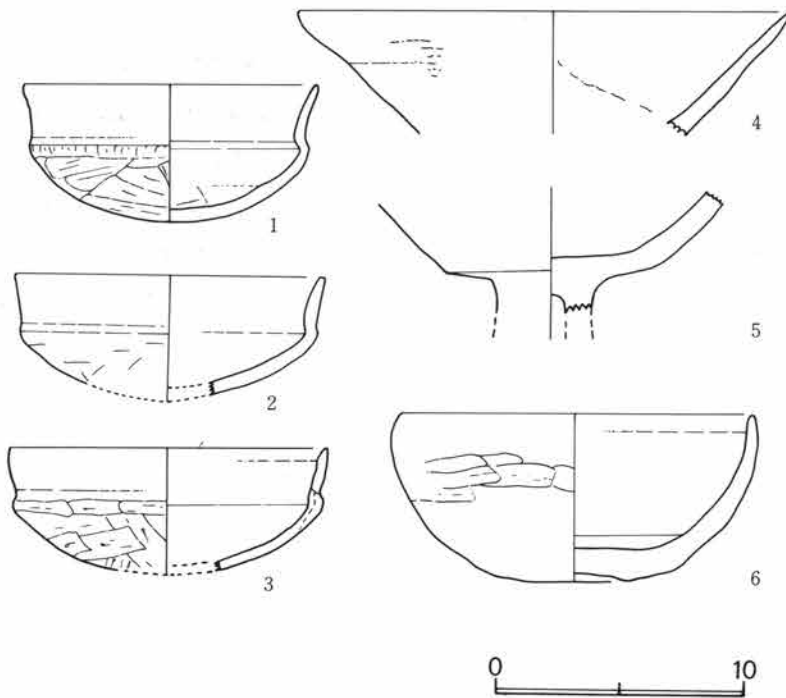
遺物は貯蔵穴周辺、北東コーナー、住居西半中央部に集中してかなり多量に検出した。

遺物 (図39、40-01~16)

遺物の器種はカメ、コシキ、高坏、埴、小型カメ、坏等多彩である。長胴カメは最大径が体部中央にくる形で、しまった頸部からやや外彎気味に立ちかげんに開く口縁部を付す。底部は安定した大きい平底。

コシキは、最大径を口径にもつもので短かく開く口縁部からややふくらみをもって体部下半がすぼまる。両者とも紐作り痕がのこり、ヘラによるたて方向削痕をのこしている。高坏の坏部は二段の立ち上がり、脚部は直に立つ裾が急に開く形である。

埴は深い体部で全体にまるみをもつ体部とほぼ直に立つ長い口縁の間に明らか



第39図 A14号住居遺物実測図

な段をつくる。器内外面ともヘラで整えられている。碗は大きな平底から内彎しながら立つ素縁口辺をもつ形で、器肉があつい。

A-15号住居

J-9区に検出した。

規模は3.4×2.7mで東西に長い長方形を呈する住居である。東壁の中央に壁外へほとんどが張り出す形のカマドを付設している。焚口巾60cm、奥行110cmと住居規模に比べ大型な粘土製である。かまど前面は方形に10cmほど床面が下がっている。

ローム面からの掘りこみは30cmほどあり、床面も整っている。遺物はカマド中に坏(6)、住居中央に坏(4)、カメ(1)が出土した。

住居北東隅に近世溝が重なっている。

遺物 (図42-1~6) コシキ(1)カメ状を呈するが口縁の状態、内外面の整形などからみて、コシキであろう。表面のたて方向のケズリ、内面のていねいな横ナデに特徴がある。

坏には2種がある。即ち、体部と口縁部の境に不明瞭な稜線を有する共通点はあるものの、短かく内彎気味に立つ口縁をもつもの(4)と、体部が深く内傾気味に短かい口縁部をもつもの(6)の2種である。前者は口唇端部は丸くなるが、後者は内そぎの手法をみせること、体部が深く丸味をもつちがいがあ

A-16号住居

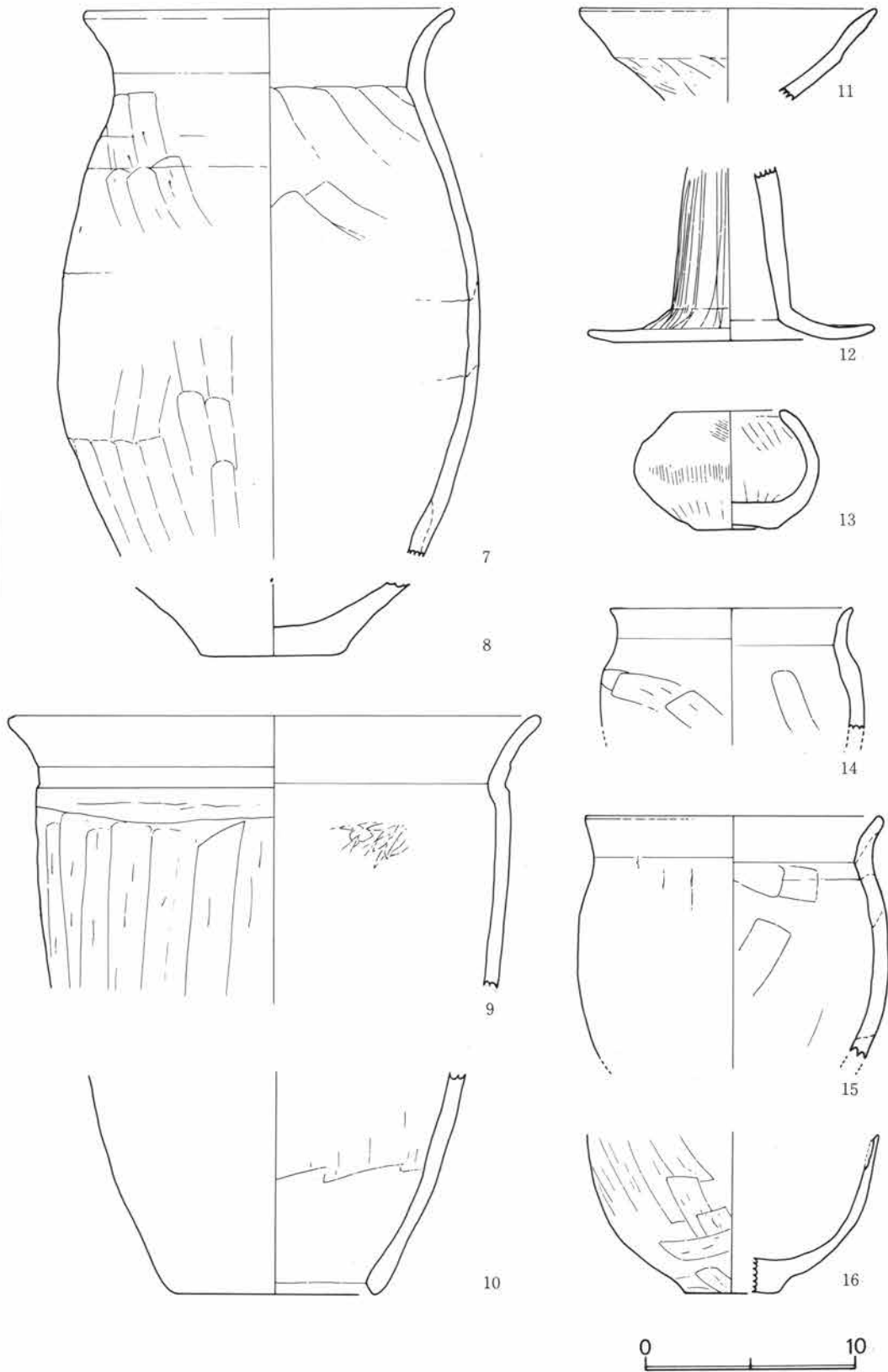
I-9区に検出された。規模は、3.4×3.8mの方形住居で、ロームからの掘り込みは25cmである。カマドは北壁東寄りにあり、粘土で構築されている。焚口巾45cm、奥行1mでほぼ壁線がカマドの中央にくる。床面はよく整っているがあまり踏み固められてはいない。床面には柱穴は確認されなかった。貯蔵穴も認められない。

遺物はカマド周辺、カマド前面部分等に認められたが、埋土中にもかなり遺物を包含していた。

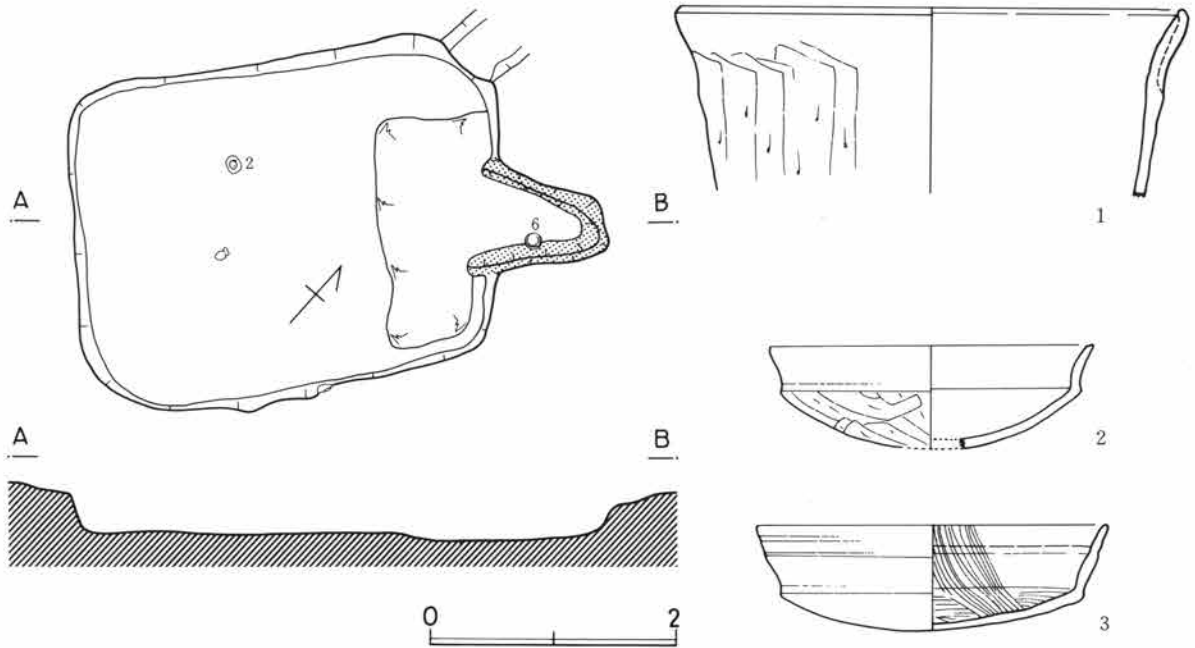
遺物 (図44-1~9) カメ、小型カメ、坏の器種である。カメは、頸部のみを厚くつくり、体部をうすく削りこんだ丸底ないし、不安定な平底を呈する。特に胎土中に砂を含むもので、焼成火度も低い。

坏類は土師器に二種ある。一つは、浅い体部から短かく立つ口縁で境に稜をのこすもの、他は、浅い体部と口縁が区別できない素縁口辺のものである。他に須恵器坏の底部がある。不明確な平底で、ヘラ切り状の切りはなしで一部ヘラ調整している。

A-17号住居 M-9区に検出された方形住居である。住居東南隅部は後世の攪乱により破壊されている。住居の規模は5.4×5.5mで、ローム面からの掘り込みは12cm内外と浅い。北壁中央にカマドが設けられて



第40図 A14号住居遺物実測図



第41図 A15号住居図

いる。このカマドは、住居を掘りこむ前にこの位置に企画されたこととみえ、ロームを削り残してその上に粘土を貼っている。焚口巾45cm、奥行75cmで、煙道を欠く。カマド右袖脇に粘土が置かれていた。この粘土はカマドの改築を意図したものと思われる。

カマド左脇には径50、深さ50cmの長円形の貯蔵穴が設けられており、1の長胴カメがそのふちにかかって出土した。柱穴は、東南隅部を除く、3つの支柱穴が検出された。東西の柱間が南北に比べて広いのは、カマドの位置に規制された棟走向との関係によるものと思われる。遺物はカマド右脇の坏の他、住居南西隅に集中して出土した。

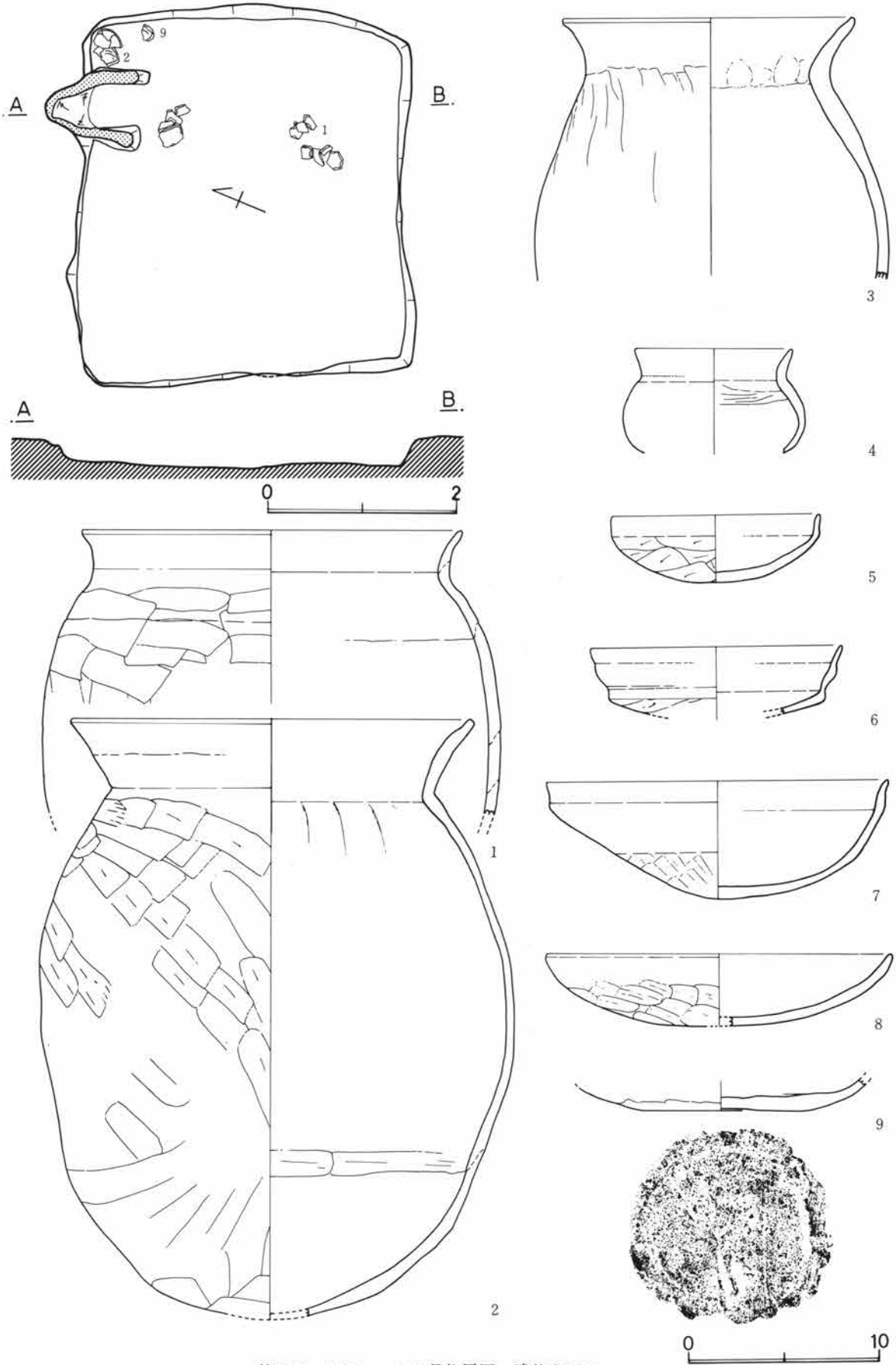
遺物 (図46-01~12) 遺物は長胴カメ3、コシキ1、坏8である。長胴カメは頸部のしまらない砲弾形で、体部に比し小さい不安定な平底の底部をもつ。口縁部は外傾して開くが、一部に沈線の入るものもある。

コシキは、頸部に少しくびれをもち、体部は多少肩の張りが認められる上半部から急速に下半がすぼまる形でたて方向のヘラ削りで調整している。口唇部は箱形の断面でヘラで仰えている。カメに比べ焼成、整形ともすぐれている。

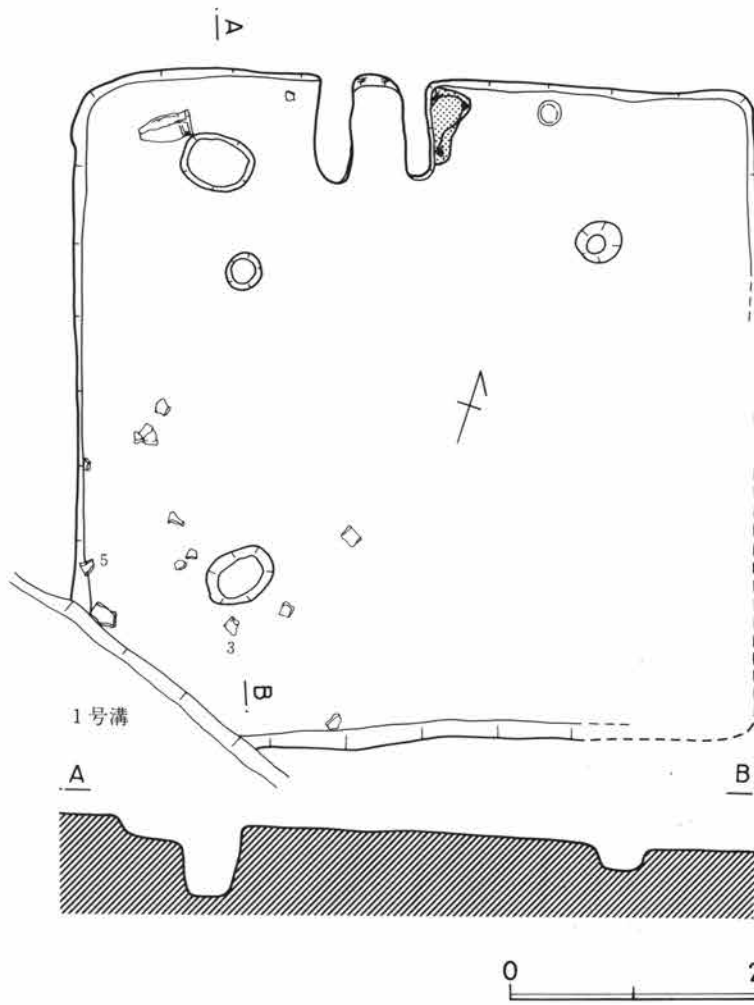
坏は3種がある。5は体部と口縁部の境が不明瞭で、口唇部は短かく外斜する。先端部は内そぎの手法がみられる。6、7は体部の深みがなく、内斜する口縁部が立つ。境には段があり、口縁は沈線が中央に入る。8~12は外斜する口縁を有していたが、口縁に沈線で折れを表現したもの、外彎するもの、段が不明瞭なもの各類型がある。体部外面は不定方向ヘラ削り技法で共通している。



第42図 A15号住居遺物実測図



第43図・44図 A16号住居図、遺物実測図



第45図 A17号住居図

埴は口径と体部最大巾が同径で口縁がやや短い。体部は中央部が最大径で底部は小さく、中央部分が上がる。口縁部は強い「く」の字から外斜する。器下半分にケズリが入る他は表面をヘラ研磨してつくりはよい。

高坏は、少なくとも4個体はあったとみられるが、坏部は口径と底径の差が大きい深手のもので直線的に開く。

脚部は接合部が小さく、そこから徐々に開きながら立つもの(11)と、直に立ち裾部で急に開くもの(13)の二種がある。更に裾部の開きには、そのまま段を付さないで開くものと、明瞭な段をのこして開くもの(12)とがある。

その他には、土製の勾玉(7)がある。全体につくりが雑で、穿孔もない。また、浮石状の石を両面から三角形に掘りくぼめているものがあり。更に小口面にも掘り込みがある。これがいかなる用途のものかは不明である。(5)の有段外斜口縁の坏は埋土中からの出土であり。本住居につかない可能性が強い。

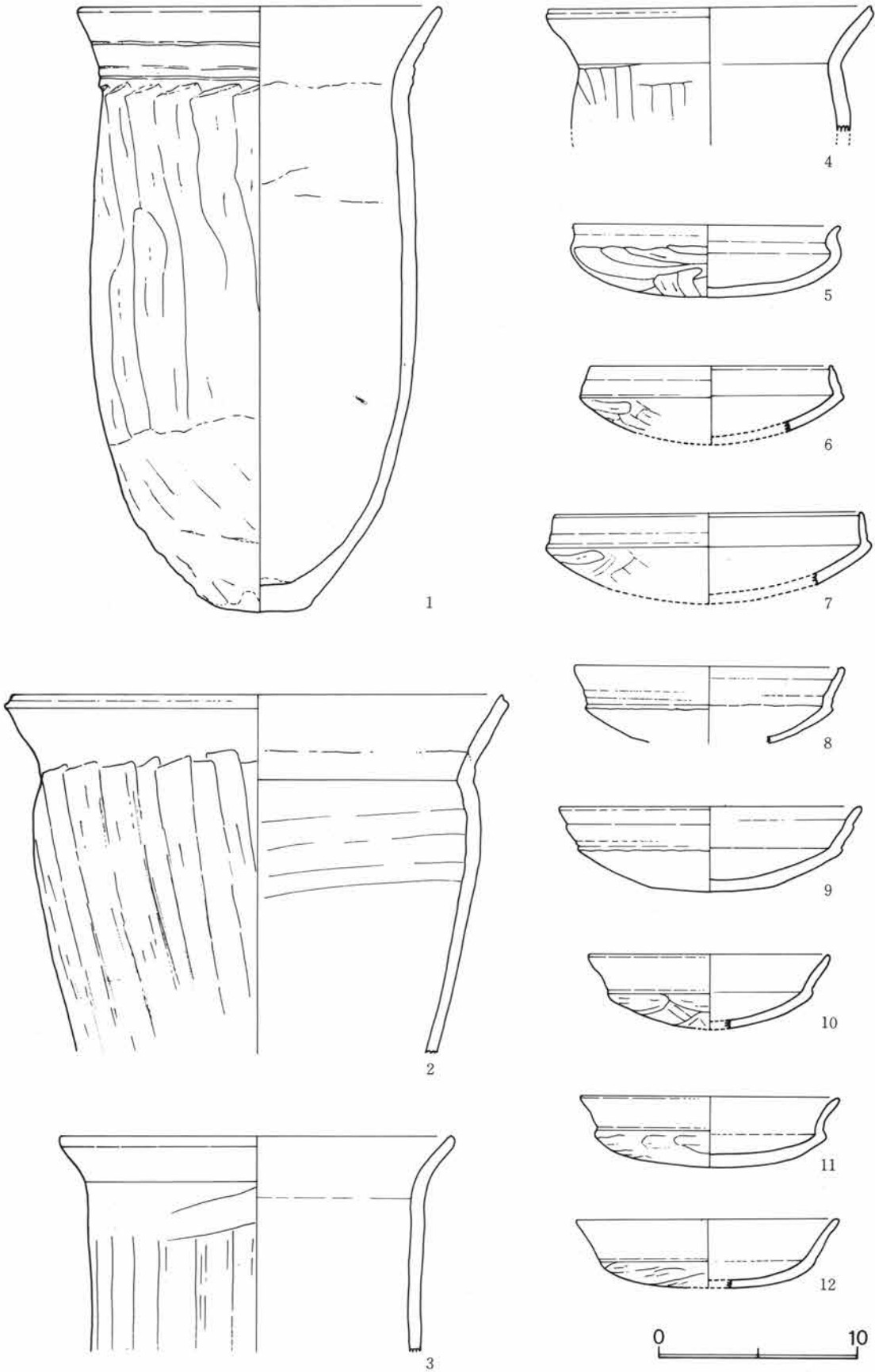
全体的にみて、器表面のヘラ研磨、器制などの面、カマドをもたないことなどから、本遺跡における古い時期のものともみることができよう。

A-18号住居

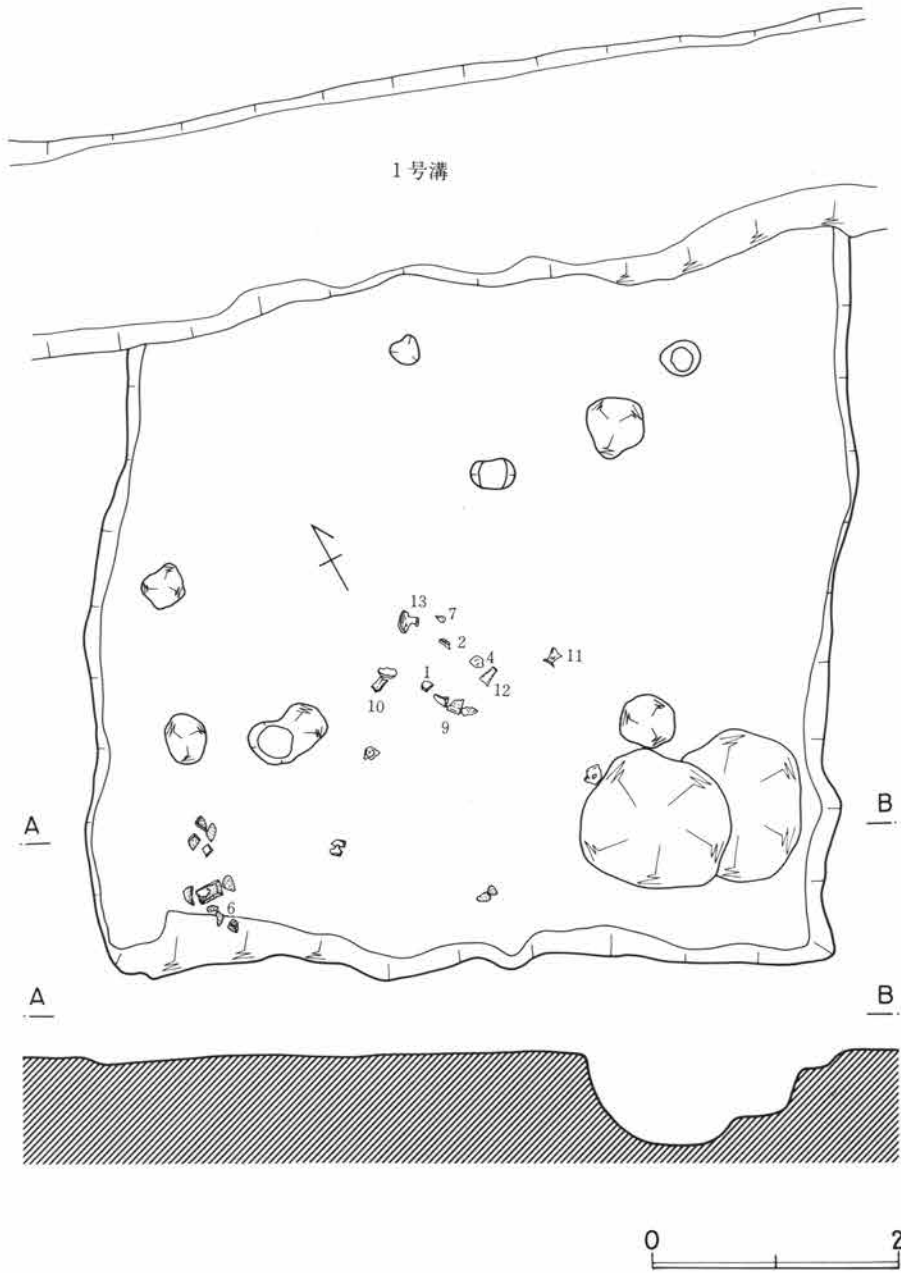
0-8区に検出された1辺5.8mほどの方形住居である。ローム面からの掘りこみは10cm内外と浅い。北壁部分は1号溝に切られている。住居の施設としては南東隅の貯蔵穴と柱穴である。貯蔵穴は径1.06m深さ65cmのもので掘り替えがみられる。柱穴は北西隅のものは未確認であるが、他の3本ははっきりしている。

カマドは欠くが、南柱穴間の土器の集中した地点に炉址らしい焼土のブロックが多少認められている。

遺物(図48-01~13) 壺、カメ、埴、高坏が出土している。壺は、底部のみであるが造り出しの大きい平底を呈している。カメは同様に底部のみであるが、体部からのまま平底に移行する。共にヘラで研磨された器表面は滑沢である。



第46図 A17号住居遺物実測図



第47図 A18号住居図

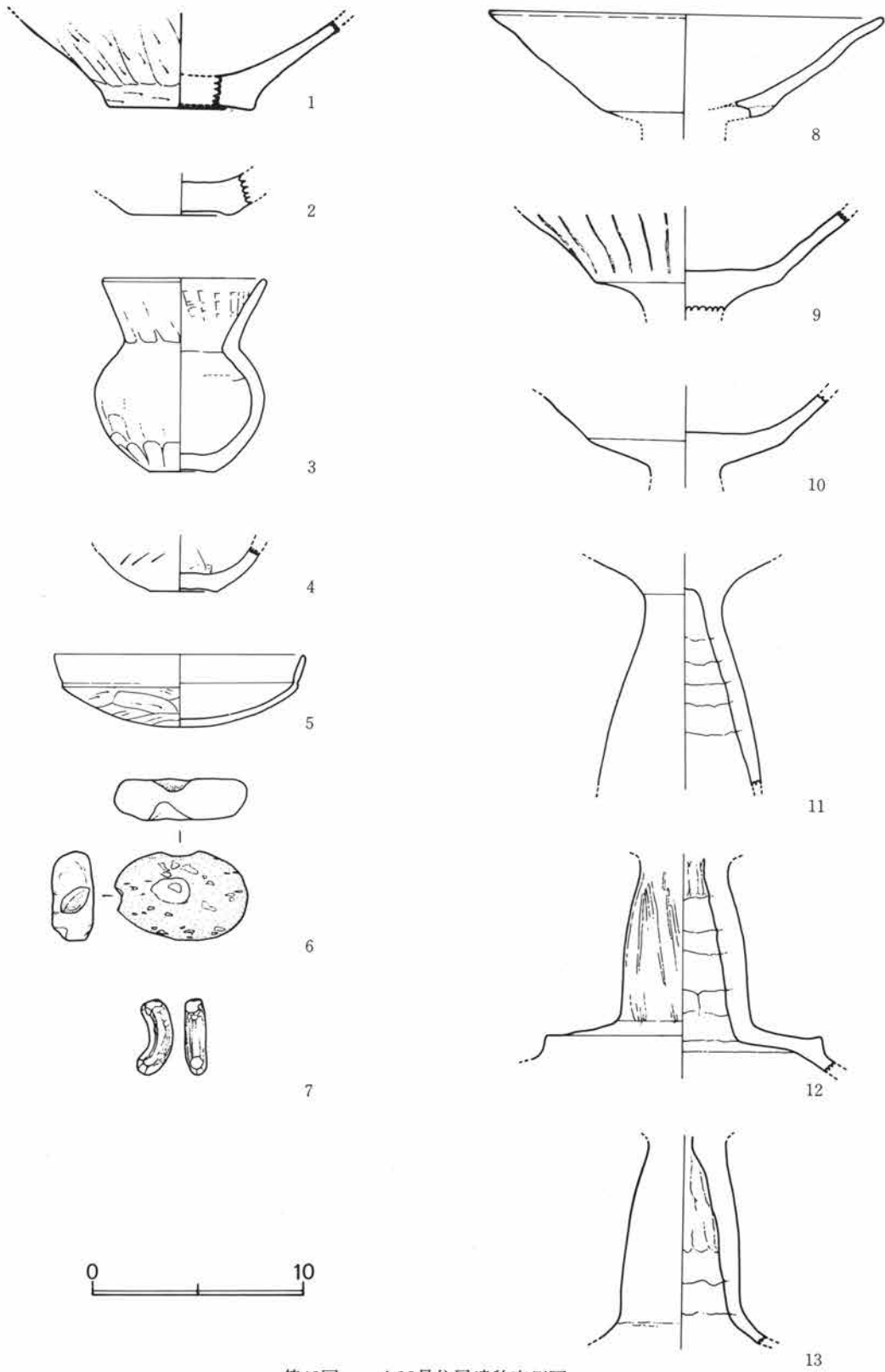
A-19号住居

M-8区に検出された大型の住居跡で、重複関係からみて、18号住居より新しく、17号住居より古いという所見がある。規模は7.4×6.8mである。住居の西壁部分、東北四半部を斜めによぎる1号溝に切られて全ぼうはつかめない。住居の施設なども2本の柱穴が認められたほか不明確な部分が多い。焼土は2カ所検出されたがカマドも不明である。

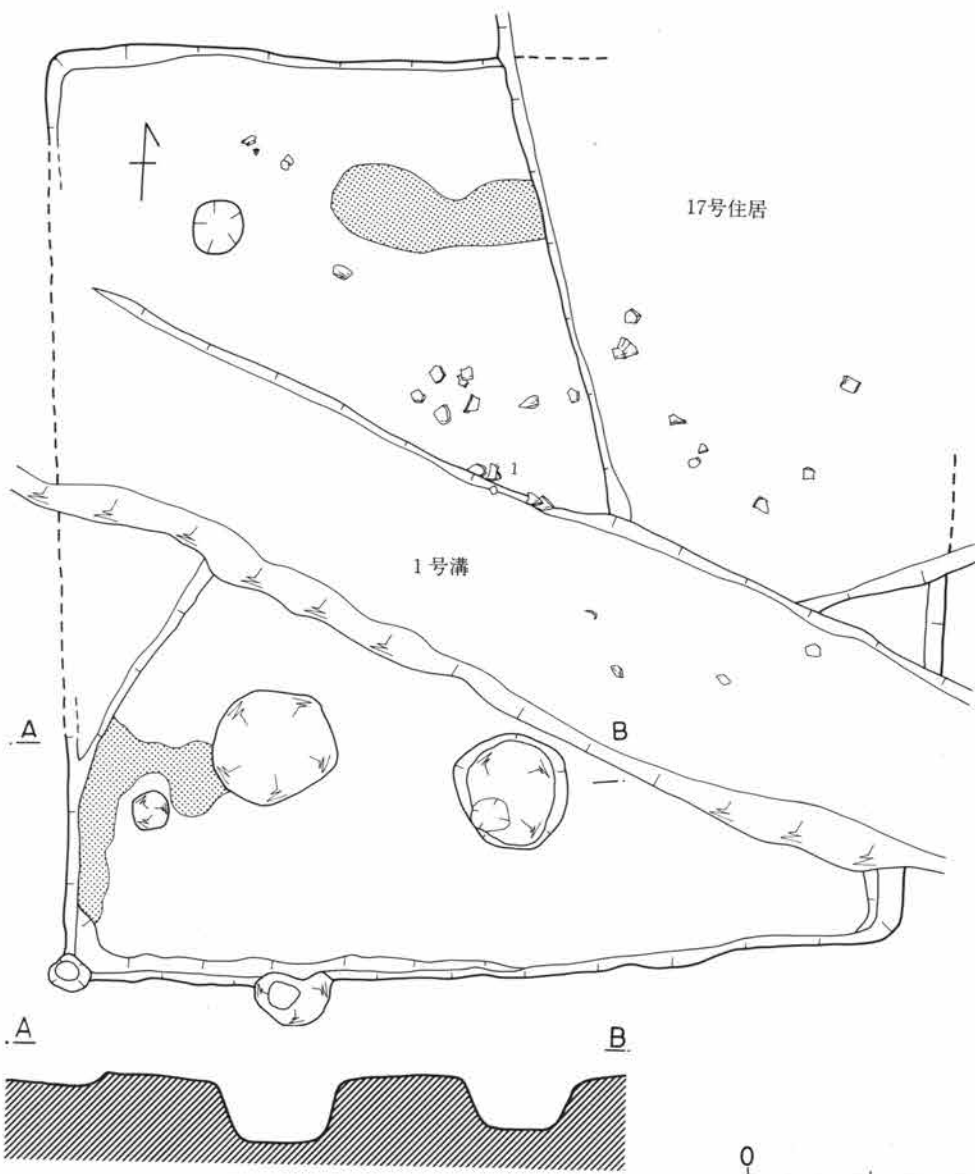
遺物 (図50-1~3) 壺、小型カメ、砥石が出土した。壺は、大型平底で、下半の一部のみである。

砥石は携帯用のもので4面とも使用痕がのこっている。石質は粘板岩である。

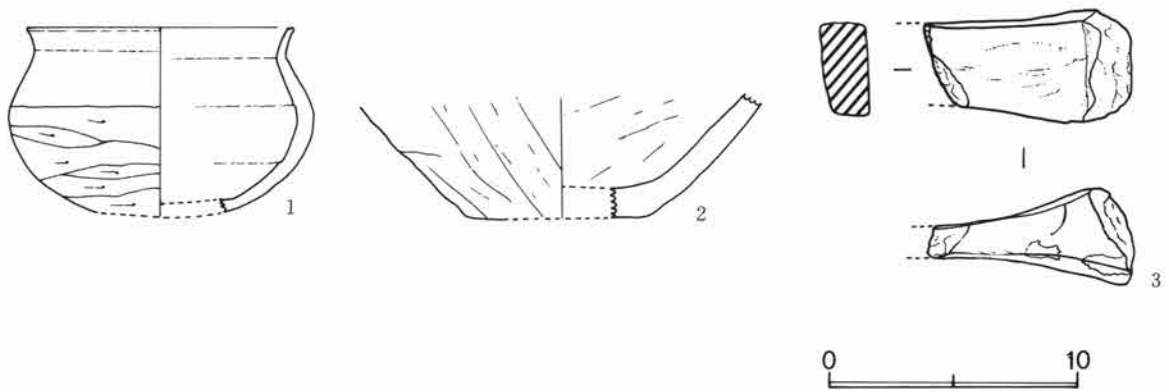
小型甕は体部中央に最大巾をもつ扁球形の胴から短かく外斜する口縁を付す形である。紐作り痕をのこし



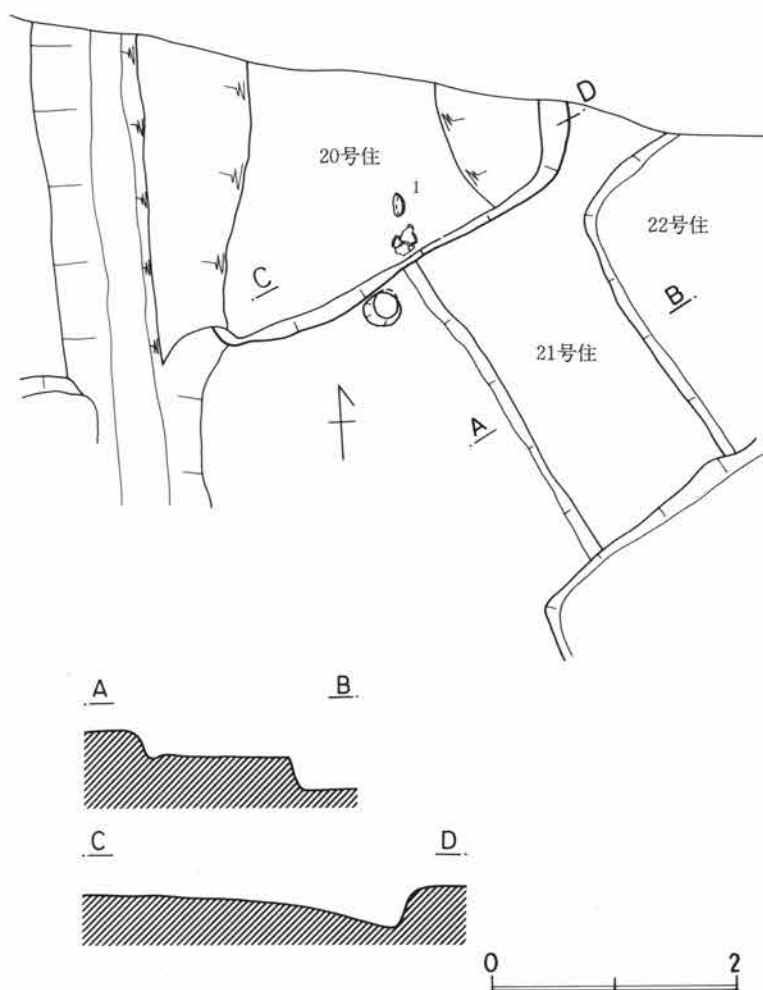
第48図 A18号住居遺物実測図



第49図 A19号住居図



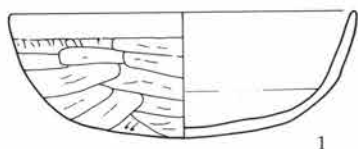
第50図 A19号住居遺物実測図



第51図 A20・21号住居図



第52図 A20号住居遺物実測図



第53図 A21号住居遺物実測図

ているが、表面はヘラ研磨、ケズリが行きとどいて目立たない。

全般的に遺物が少なく、その全容はつかみにくい。

A-20、21号住居

調査区の端で検出され、しかもその主体が路線外にのびることもあって、その全容は不明である。更に20号住居は西側に中近世の溝が入りこみ、住居をカットしている。

20号と21号住居の重複関係でみると20号の方が古く、21号はまた更に22号住居により切られているという複雑な様相をみせている。

遺物(図52-1、53-1、2)

20号住居の遺物は1のみであるが、素縁口辺の坏である。扁円を半分にした形で、体部と口縁の境は、横ナデの技法で分けるだけである。

外面はよくヘラ研磨され滑沢であり、内面には放射状の暗文が付されている。これも中央からでなく、底部と体部の接合部から斜めに一定方向に研磨している。

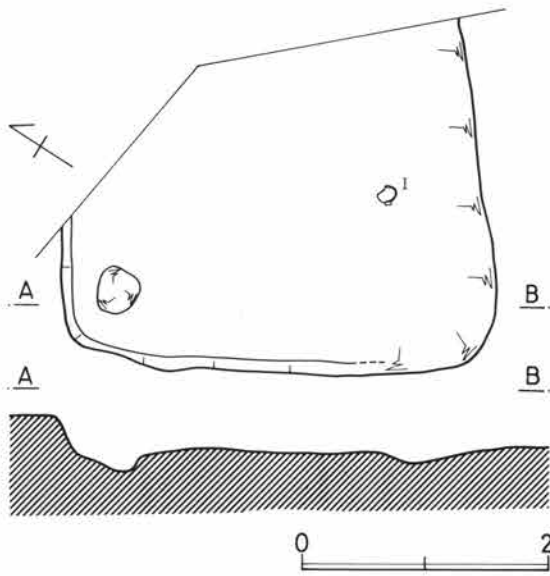
A-21号住居の遺物 明確なものはこの二例のみである。

1は深手の坏で、むしろ壺と称すべきかも知れない。1の素縁の口辺は横なで、他は斜方向のヘラ削りで器表を整えている。

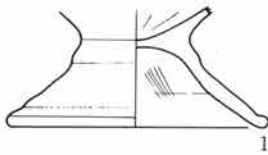
2は、浅い体部から口縁が水平に近く外開きする形でケズリによりかなり体部はうすい。口縁部は内そぎ状に端部をおとし、水平のような感じを一層強くさせている。

A-22号住居 G-10区に検出された隅丸方形で北東部が路線外にかかるため全ぼうは不明である。現状では西壁長が3.5m、南壁長が現状で2.7m以上に及ぶことは確実である。ローム面からの掘りこみは25cm内外で、南壁部は立ち上がりは不明瞭である。

住居の施設としては特に注目すべきものはない。カマドは東壁ないし南壁に付設されたとみられるが、前述のように不明な



第54図 A22号住居図



第55図 A22号住居遺物実測図

壁面であるので確かめられない。住居西北隅に径35cmほどで深さ15cmほどのピットがあるが性格は不明である。床面は一応平坦であるが、踏み固められた痕跡はみられない。

遺物 (図55—1) 脚付甕の脚部である。カメの下半部はかなり削りこまれて薄くなり、コケテ、おそらくイチジク状を呈する器形になると思われる。脚は底部から「ハ」の字状に大きく開き、径の割りに高さが低い。器体部との接合、脚端部は肥厚している。胎土に砂粒を含むこと、顕著なケズリ技法端部の肥厚などが技法的特徴である。

A—23号、24号、25号住居

G—11区を中心に検出された住居で、23～25の順で重複している。すなわち、23が最も新しく、25が最も古いという所見が得られている。23号住居は4.0

×4.9mの規模を有する住居でローム面からの掘り込みは20cmほどである。床面はよく整っているが、踏み固められた部分はカマドの前面のみである。

カマドは北壁東寄りに設置された粘土カマドで燃焼部の半分ほどが壁外に出る方形の掘り方をもつ形である。焚口巾30cm、奥行65cmで煙道部分は不明である。柱穴は23号に確実に付随するもの

は北西隅の一つとみられるが、南西隅部のものは24号住居と重複して大きくなった可能性がある。径25cm、深さ30cmほどである。

住居中央の大きいピットは、浅く、後で掘られたものと考えられる。

24号住居は、住居北2/3を23号住居で切られているため西壁長のみの全長が確認されただけであるが、その長さは4.3mである。西壁から北壁にかけて壁周溝がまわっている。柱穴は23号住居内の2穴と合せて主柱穴が4本である。カマド部分はおそらく東壁にあったものと思われるが破壊されている。

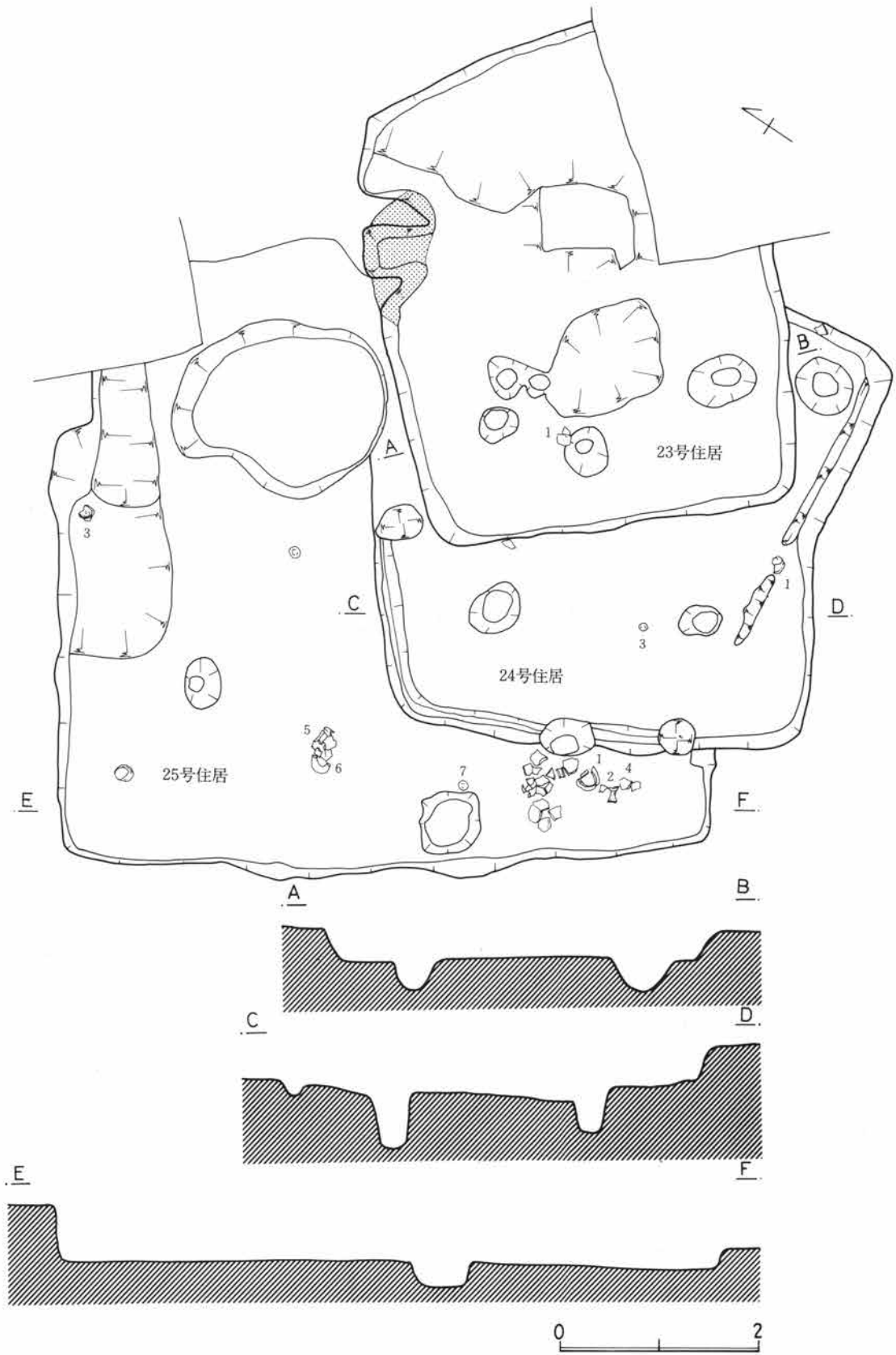
25号住居は最下面の住居で6.1×6.5mと規模が大きく、ローム面からの掘りこみも56cmと最も深い。これに伴う柱穴は北西隅の1つが確認された他、24号住居の西壁上の1つがそれに対応するものとみられる。北壁中央から東へかけて壁周囲を20cm、巾1mほど掘りくぼめているが、床下面への掘りこみで床面は貼り床されていた。除湿のための所作と考えられる。中央の大きいピットは後で掘られたものである。

煮沸構造については確認されていないが、検出された遺物からみると炉址であった可能性が強い。住居床面は固く踏み固められて整っている。

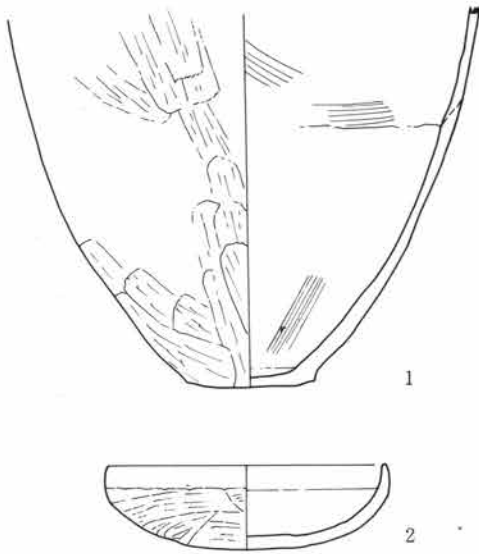
遺物は住居南西隅に集中して発見されたほか、住居中央部からも出土した。

なお、24号住居の南壁にコーナーをもつ住居があり、壁下周溝、貯蔵穴を有することが判明したが、24号住居と直接平面的にも重なったため、不明の点が多い。ただ時期的には24号に先行するものであることは確実である。

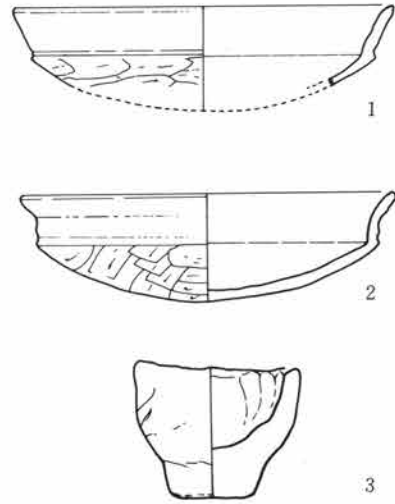
遺物 (図57、1・2) 23号住居遺物は、カメおよび坏が出土した。カメは器体下半部のみである。体部お



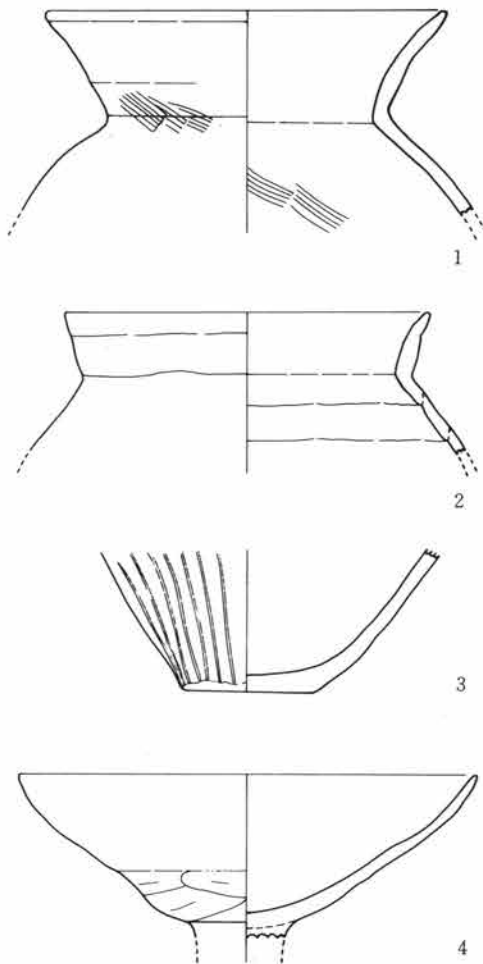
第56図 A 23~25号住居図



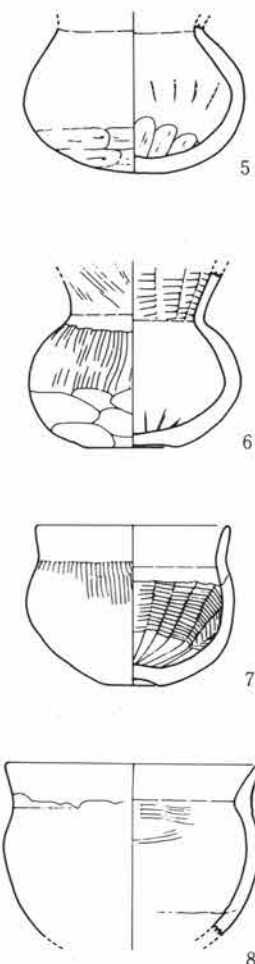
第57図 A23号住居遺物実測図



第58図 A24号住居遺物実測図



第59図 A25号住居遺物実測図



よび底部ともかなり削りが強く、たて方向の削り痕には胎土中の砂のため削り方向が明らかに察せられる。底部は不安定な平底である。坏は、小型で、浅い器体部から口縁への移行はやや稜を意識している。短かい口縁は端部に至りやや内彎気味に立つ。底部は手持ちヘラ削りで口縁と内部はナデでよく整っている。

24号住居遺物 (図58-1~3) 坏と手捏ねの小型粗製土器である。坏は浅い体部と口縁との境に明らかな段を有することは共通する。二個体が出土した。しかし、外に開く口縁は一方は直に外反し、他方は一旦直に立った後、外斜するちがいがあがる。底部のヘラ削りは不定方向である。手捏ね土器は、いわゆる祭祀用の粗製土器である。外面は指圧痕をのこし、内面は指でヒネリ出してその痕跡が明らかである。

25号住居遺物 (図59-1~9 カメ、高坏、柑、小型カメ、手捏ね土器が出土した。全体的には器表面のヘラ、櫛状工具により整形痕などの整形技法、黄褐色がかった高温度の焼きのよさなどの共通点が認められる。

カメは球形を呈する体部から強く「く」の字状に外反する口縁部に特徴があるが、下半部はなく不明である。輪積み手法をとるが外面はほとんど整形で消されている。3の底部はそのうすさから鉢形になる可能性もある。高坏は脚部を欠いているが、坏部のひらきは直線的である。脚の形状については不明であるが、全体的に接合部は小さい。

柑は4コあるが、二種に分けられる。1つは扁平な球形胴から長く口縁ののびるものと、口縁が短かく外傾するものである。前者は口縁が最大径になるものとみられ、器面もヘラ研磨により滑沢である。後者は頸部のしまりがなく、そこから短かく立つ口縁が外開きする。内ソギによる端部のうすいものもある。両者とも底部は平底が主で、その中央を上げているものや指で押したものがある。

手捏ね土器は全般的にうすい器肉で、指の押圧で仕上げているが器表面には櫛状痕がのこっている。焼きは黄褐色に近い良好な焼成である。

A-26号住居

H-10区に検出された住居で2.8×3.0mの規模と小型である。形状は隅丸方形を呈するが西壁部分がややひろがる不正形である。ロームからの掘りこみ面は50cmほど深く、壁面のたち上がりも直ではない。床面もあまり整っていない。

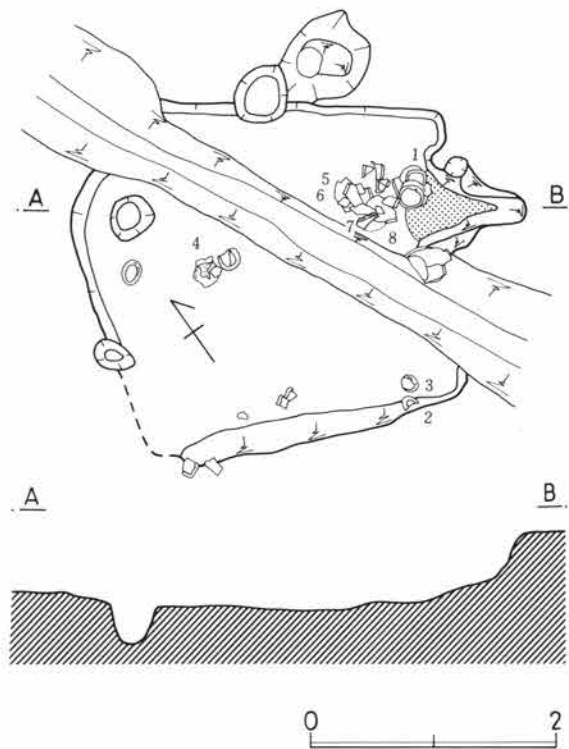
カマドは、東壁北寄りにつくりつけられており、燃焼部の半分は壁外に出る。焚口巾56cm、奥行1mで煙道は更にのびていたと思われる。粘土製で、裾部に長カメを立てていた。また、その上に長カメを組み合わせて架構していたような状況で、カマド前面に土器がつぶれて出土した。

柱穴は、四隅の支柱穴を欠くが西壁上に1つ、北壁上に1つ検出されたが、これが上屋とどういう関係になるか、不明である。カマド正面のピットは径36cm、深さ35cmの規模である。また住居の北西隅からカマド右袖南部分に斜めに横切る溝は中近世のものである。

遺物 (図61-1~9) カメ、小型カメ、わん、坏、土錘が出土した。カメはカマド中からの出土であるが、最大径が口縁部にくる長胴形で、口縁は外斜する。器面はケズリ痕が顕著である。小型カメは球形胴で頸部がゆるくしまる。口縁はそこらにおく外斜して短かく立つ。底は丸底。わんは大きい底から内彎して深く立ち、口縁を短かく直立させる。底は不安定な平底で器面は大きく横方向にヘラ削りしている。

坏はすべて土師器で形態的には3種ある。1つは4に見るごとく平底気味の底部から深い体部を経て、口縁が内傾したもの、1つは5のように浅い体部から肩に稜の痕跡をのこしながら短かく直立するもの。1つは8のように深い平底気味の底部から内彎して外傾する。土錘は長い紡錘状である。全体的には器面のヘラ削り、器肉のうすさ、焼きの甘さが共通である。

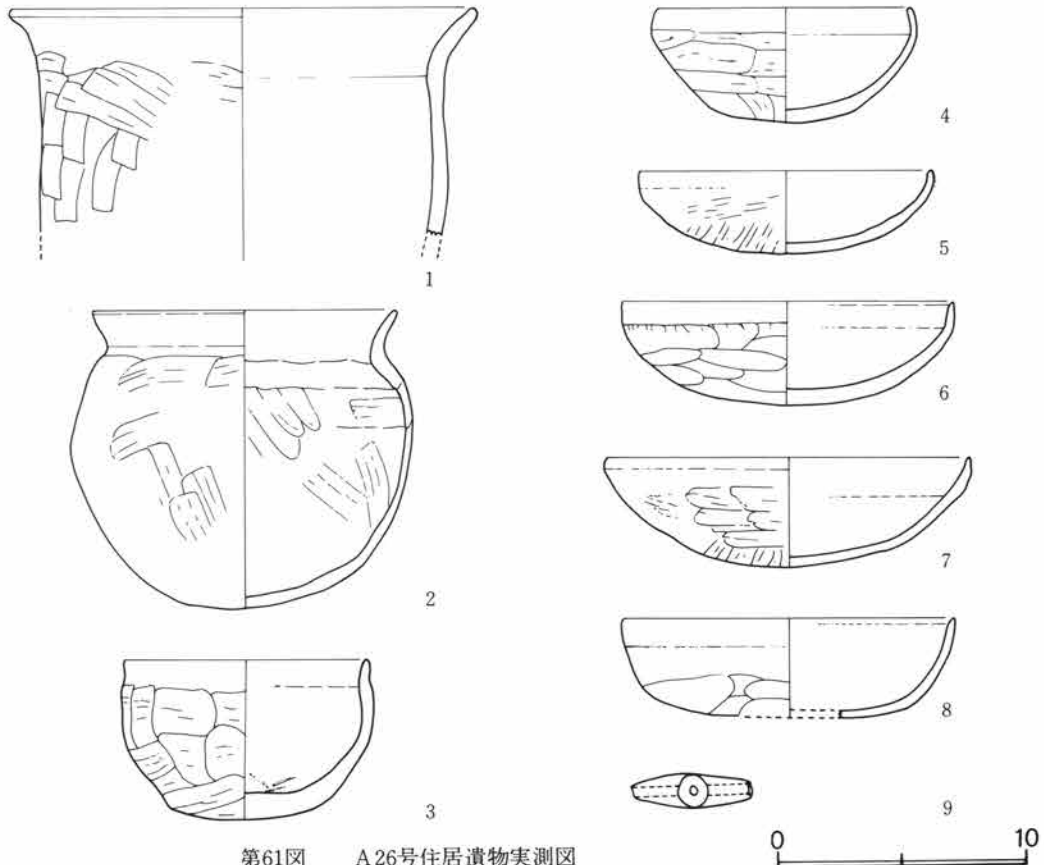
A-27号住居



第60図 A26号住居図

H-12区に検出された隅丸方形住居で3×4.4mの規模をもつ。カマドは北壁中央にあり、25号住居の上面にのる。カマドは焚口巾50cm、奥行1m、カマド内および右袖部で遺物を検出した。全体的に黒色面への掘りこみのため、住居範囲の確定に多少問題がのこる。カマドは壁外につくりだされてよく焼けていた。掘りこみは25cm内外で、床面もやわらかく確認しにくい。住居北東隅部は25号住居と重複している。南東隅の長方形土壇は中世に属するものである。

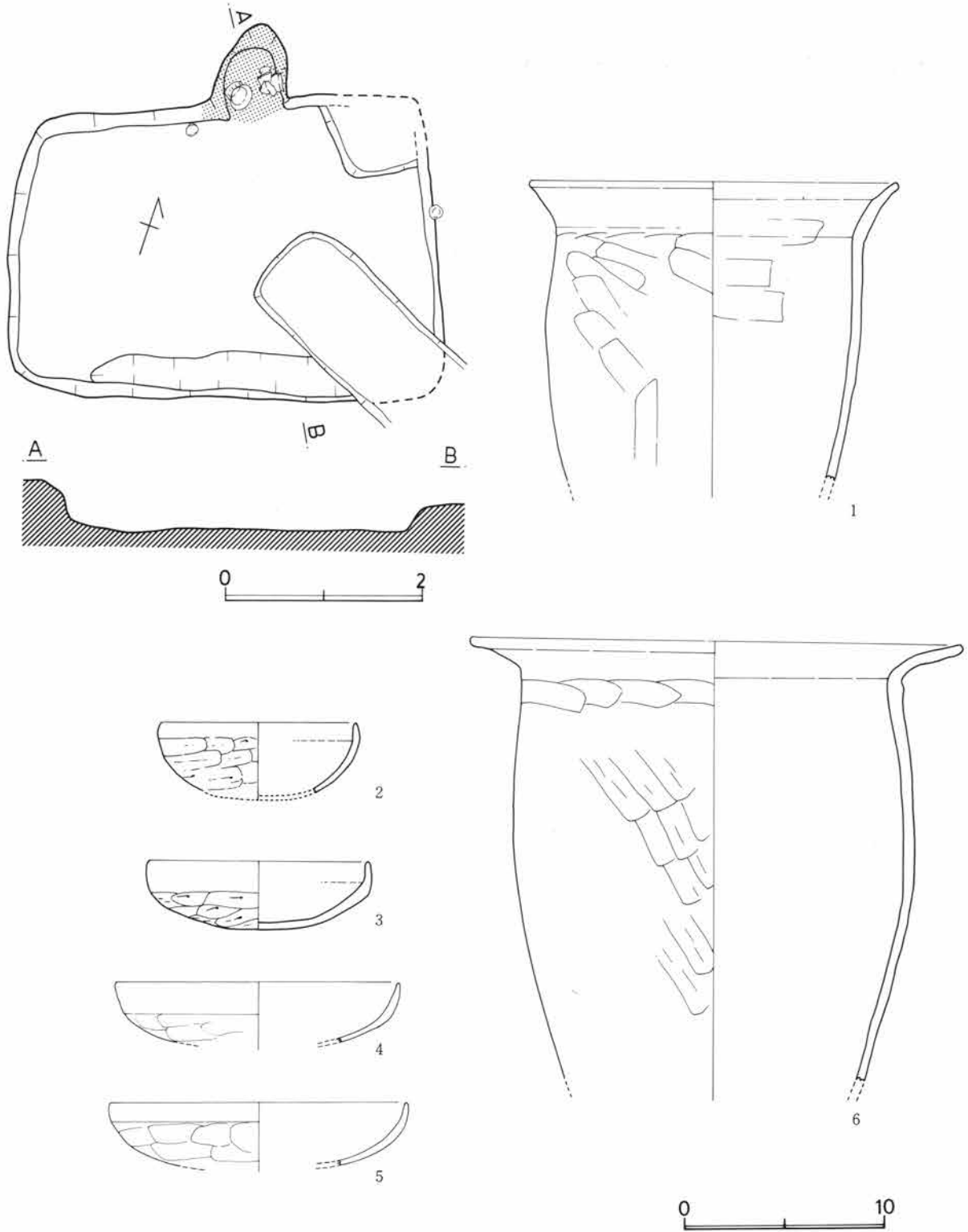
遺物 (図63-1~6) カメと坏の二種のみである。カメは、最大径が口縁にくる長胴で口縁が水平に近く開くものがある。器表の削りが顕著で器肉がうすい。坏は、形態的には体部と口縁の不明瞭な稜を一部のこすものがある。大きさの面では10cm前後のものと15cm前後のもの二種がある。共に底部のヘラ削りは手持ち、不正方向で、稜のこるものは、口縁部の外側からの削りを入れて意識させている。



第61図 A26号住居遺物実測図

A-28~30号住居

住居が複雑に入り組んで重複した上に、後世の攪乱による地形の変化も著しく、住居範囲の確認も難渋した。重複関係でみると最も新しい住居は28号で30号、29号の順序となる。

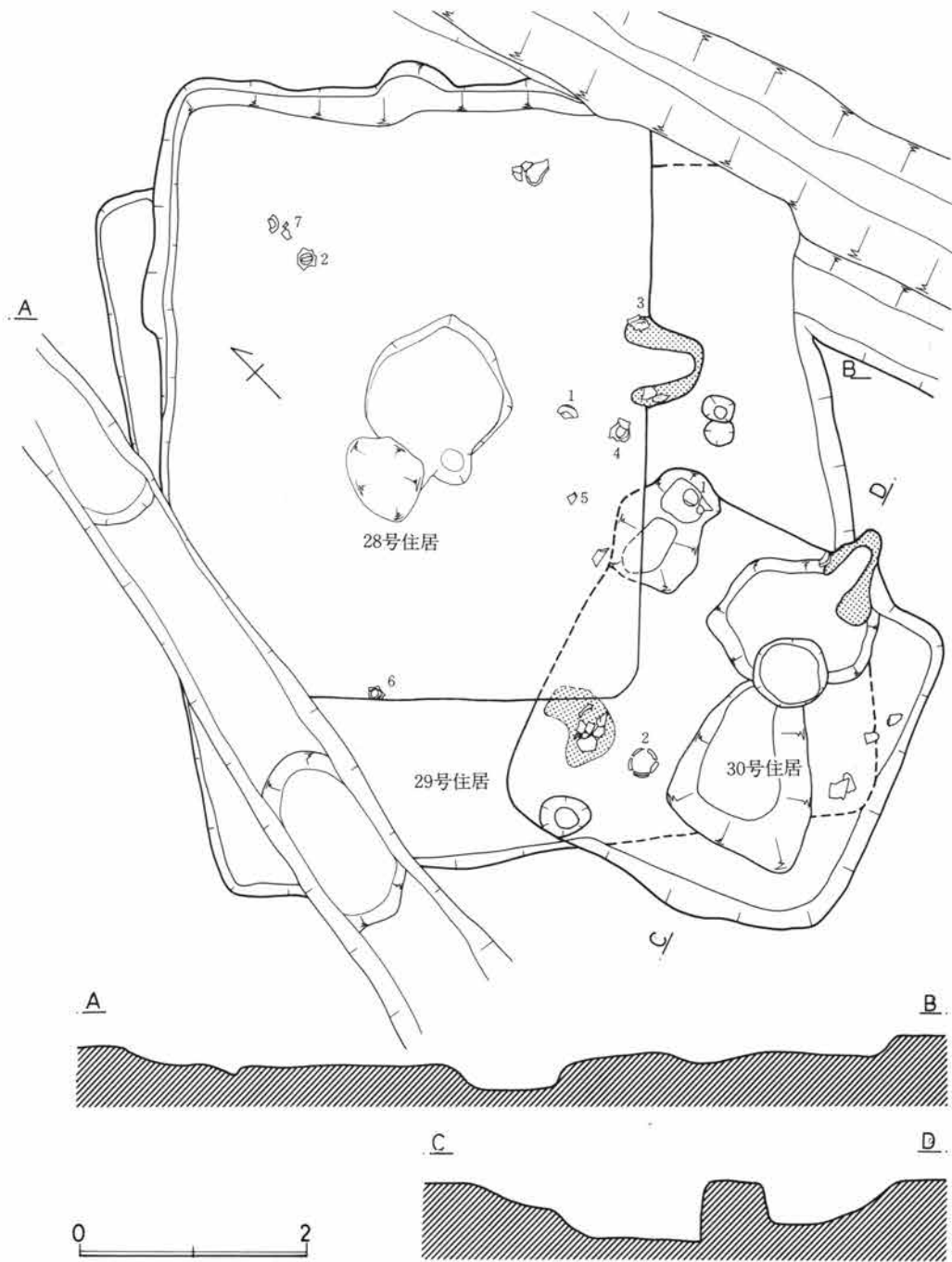


第62・63図 A 27号住居図、遺物実測図

A-28号住居

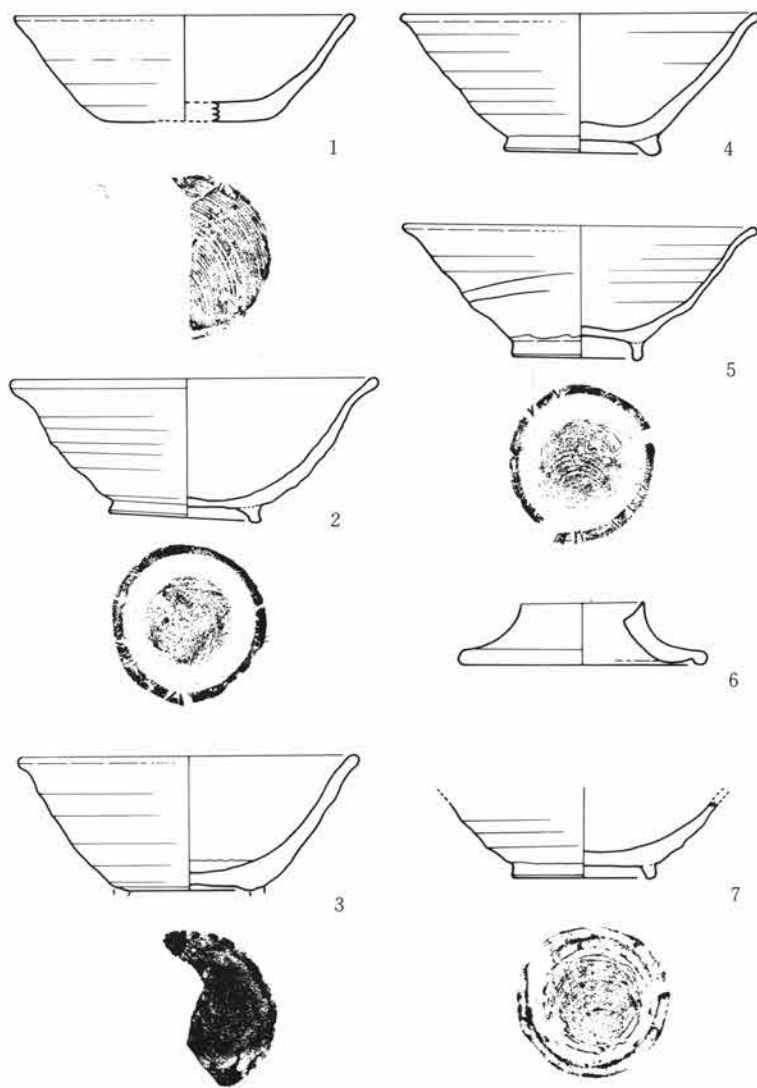
28号住居はI-11区で検出された住居で、隅丸長方形を呈している。規模は5.3×4.3mで、ローム面からの掘りのみは20cmほどである。カマドは東壁中央につくりつけられている。29号住居との床面におけるレベル差がほとんどないため、範囲はカマドと遺物の出土範囲で想定した。カマドは焚口巾36cm、奥行60cmで内から遺物を出土した。カマド前面には径1.2m、深さ25cmの大きさのピットがあいている。

北・西壁には壁下周溝がめぐっている。巾1.5cm、深さ10cmほどであるが東壁にはめぐっていた痕跡はない。遺物は、前述のカマド中のほか、カマド右前、北東隅部、南壁下で検出されている。



第64図 A28～30号住居図

遺物(図65-1~7)脚付カメ、坏、高台わんの三種が出土している。脚付カメは径に対し、立ち上がりが短い形で、端部をおさえてまるめている。焼成火度が低いために水に溶けやすい。坏は、比較的大きい平底から逆「ハ」の字状に大きく開く。底部は右回転の糸切りをのこし、口唇端部は素縁でやや肥厚気味である。体部には、ロクロ痕がのこっている。口径と底径の比は約2:1である。



第65図 A28号住居遺物実測図

い「く」の字で外斜して開く。下半を欠いている。

わんは平底の扁円形の体部に短かく立つ口縁が付く。口縁と体部の境は稜で区切られている。口縁は一旦直に立ち、端部が外彎気味に開き、端部が肥厚する。

坏は浅い体部から短かく素縁の口辺が立つ形で、体部と口縁の境の稜線は弱い。

全体的には、器表面のケズリ技法、低火度焼成がめだつ一群である。

A-30号住居

28号、29号の共に南東コーナー部分に重複する方形住居で、1辺3.2mほどの規模をもつ。ローム面からの掘りこみは20cmほどで床面はピットなどで荒れている。カマドは東壁中央やや南寄りに設置されている。焚口巾は30cm、奥行80cmと小形の粘土カマドである。

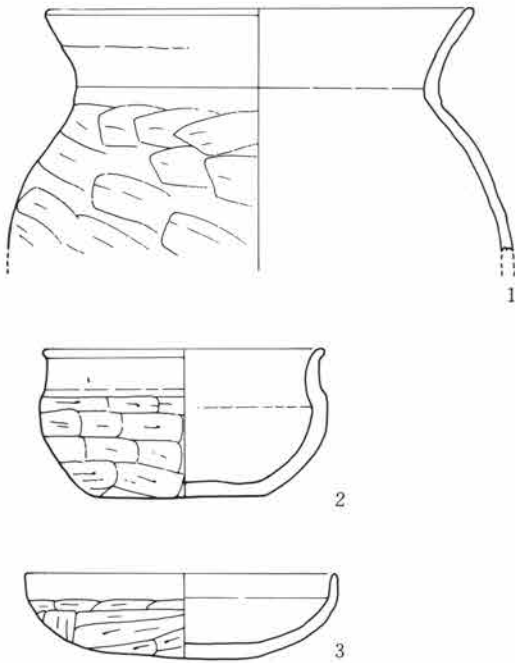
わんはすべて高台付きである。底部と口径の比は坏よりやや率が上がり2.5:1ぐらいである。高台は比較的しっかりとした付け高台で、接地部はほぼ水平である。

体部には全て、ロクロ痕が明りようにのこる。底部は右回転ロクロで糸切り後、高台を付す。焼成火度が低く、堅緻さに欠けるほか全体につくりは良好である。

A-29号住居

大部分は28号と30号住居の下に入ってしまうため、全ぼうはほとんどわからない。一辺6mほどの方形住居とみられ、床面もしっかりしている。カマドは重複により破壊されており、このことから、この一群の中では最も古いものとみられる。その他施設等一切は不明である。

遺物(図66-1~3)カメ、わん、坏の三種が出土している。カメは全体に薄手のつくりで、削痕が顕著である。体部は長円形で、頸部のくびれも強い。口縁部は弱



第66図 A29号住居遺物実測図

カマド前面の二つの大きいピットは住居を設置する前の穴と思われる。径は1.4m、深さ50cmほどのもので、わん底状の掘りこみである。両ピットの間には円形の高まり部分がのこっているが、これは原地形のままとみられるところから、住居を掘る以前の風倒木痕とも考えられる。

遺物 (図67-1~2) カメと坏が出土している。カメはやや長胴化した球形胴のくびれた頸部が「く」の字状に外開きする短かめの口縁部がつく。口唇部は両面がおさえられて剣形を呈している。体部は輪積み痕をたんねんにつぶしているが部分的に痕跡がのこる。器面の整形はヘラ削りが一部に入っている。底部は不安定な平底で、やや造り出している傾向が認められる。

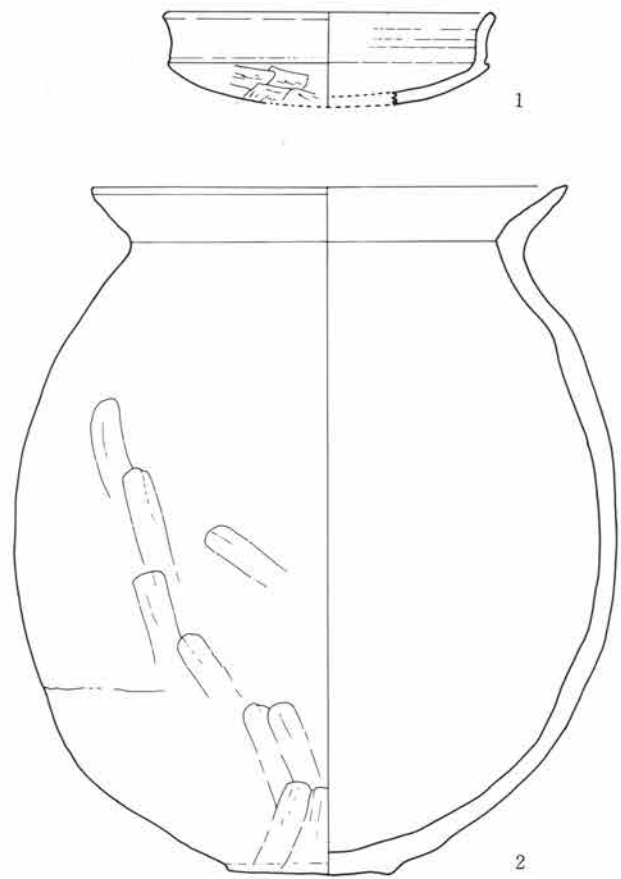
A-31号住居

K-11区で発見された4.6×3.2mの東西に長い隅丸方形の住居である。北西部は32号住居により切られている。カマドは破壊されているが、東壁部に本遺跡ではカマドの構築に使用されることの多い黒色粘土があること、焼土が点在することなどから、この部分にあったとみられる。

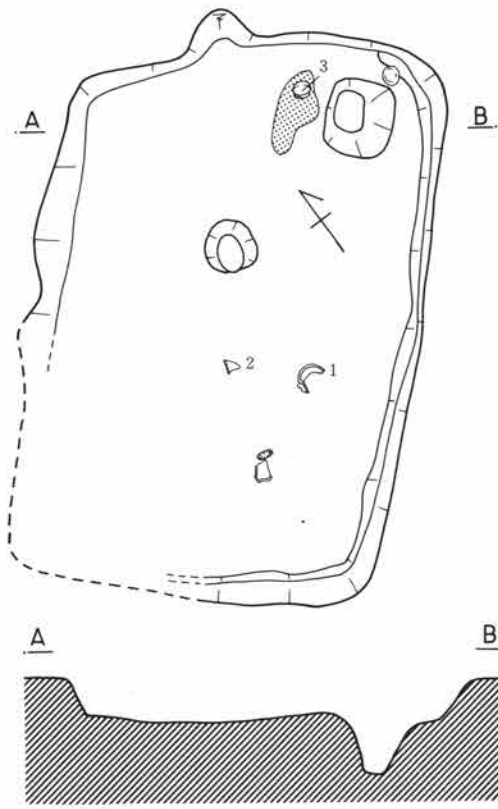
カマドの右脇には方形の貯蔵穴がある。上端の径60cm、深さ50cmで底部はせまい。住居南壁には壁下周溝がめぐっている。床面は一部で凹凸がみられるが概して整っている。遺物はカマド貯蔵穴周辺、住居西南部に集中して出土している。

柱穴は床面ではコーナー部には発見されていない。ただ、カマド前方に1コのピットがあいている。場合によれば二柱式の上屋構造で、棟走向は長軸に立っていたことが推定される。

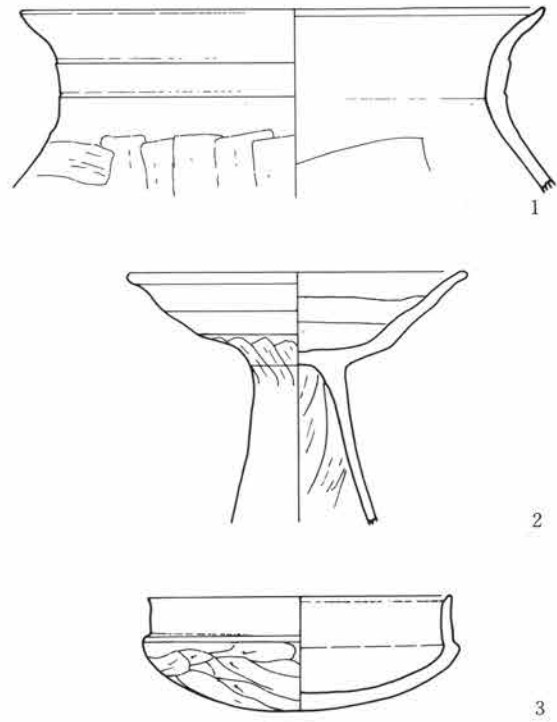
遺物 (図69-1~3) カメ、高坏、坏が出土している。カメは肩部から下はない。頸部は比較的くびれが強く、一旦直に立ち、それから大きく外開きする。全体の器形で考えれば、おそらく、最大径は体部中央にくる形で、大きい平底を有するものと考えられる。口縁部はヘラによる沈線がほぼ頸から上を3分するよ



第67図 A30号住居遺物実測図

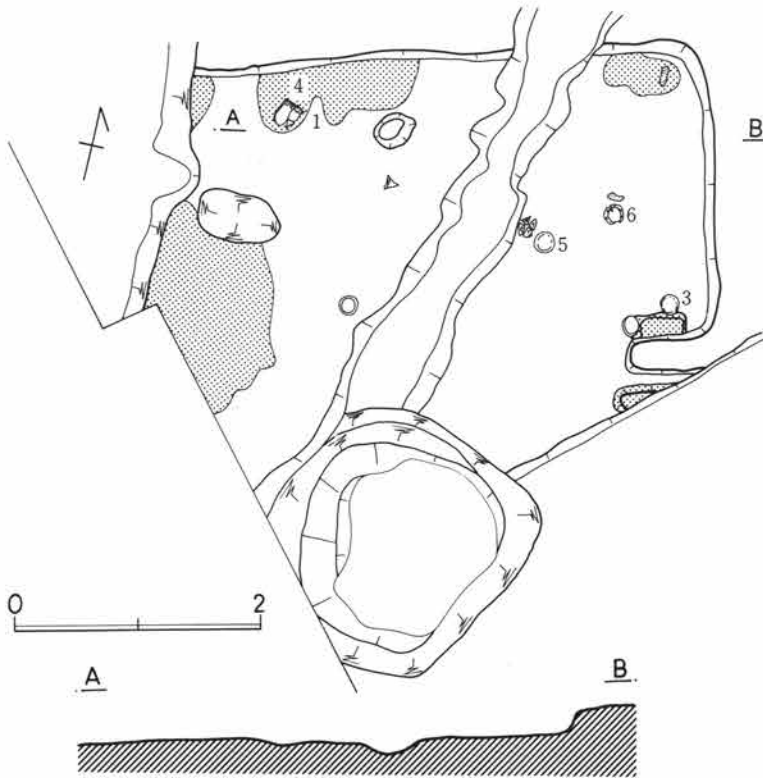


第68図 A31号住居図



第69図 A31号住居遺物実測図

うに沈線で区画している。体部の表面はたて方向のヘラ削り痕がのこっている。



第70図 A32号住居図

高坏は脚裾部を欠いている。坏部は、大きい底部と浅く直線的に開く口縁が外斜して開く。口唇部はやや外に開くが肥厚はしない。脚部はほぼ一旦直に立ち、裾を急に開く形とみられる。坏部と脚の接合は底径の1/2より広い状態である。比較的直線的に構成されて作りもていねいである。

坏は体部と口縁の立ち上がりの部分の比が1:2になるような形で体部の肩から底部への移行にはふっくらとしたふくらみが認められる。口縁は内傾気味に直立するが、口唇端部はヘラでしっかりとおさえている。体部と口縁の接合部には明瞭な段がのこっている。底部は手持ちによる不定方向ヘラ

削り技法で整えている。

全体的に焼成火度の高い、つくりのよい土器の一群である。

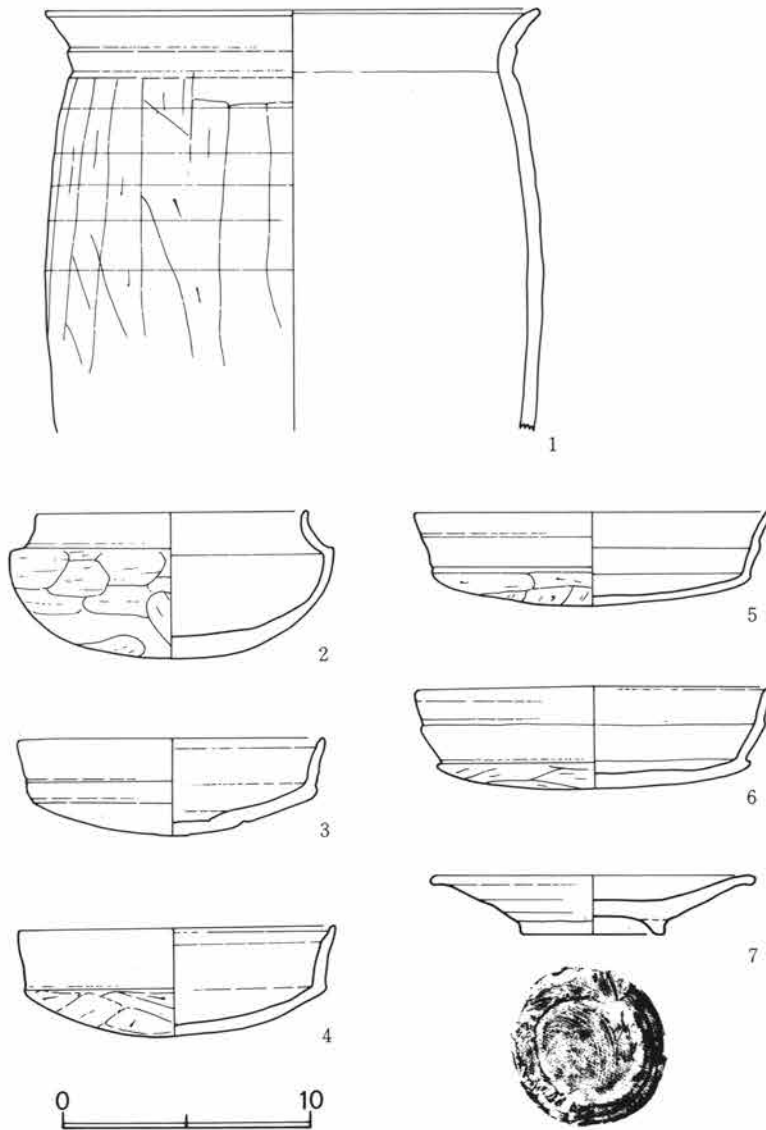
A-32号住居

K-10区に検出された住居で、第一次調査の際の範囲ぎりぎりのところであったため住居東南部、住居西1/2ほどの部分は未調査である。特に住居の南北方向に2本、中近世の溝が縦断している。

住居は調査された範囲で3.4×4.2m以上の規模が確認されているが、カマドの位置からみておそらく1辺4.5mほどの規模であったと推定される。形状は方形で東壁中央近くにカマドが付設されている。このカマドは当初からここに企画されたらしく、ロームを削りのこして芯にし黒色粘土をまいてつくっている。

住居床面はロームを10cmほど堀りこんでつくられているが、住居の壁近くに多くの焼土が推積しており焼失家屋であったことも考えられる。

なお、K-10ピットは径1.8mほどの隅丸方形で深さ40cmの大型で内部の出土遺物からみると平安時代に属するものであることは明らかである。



第71図 A 32号住居遺物実測図

遺物(図71-1~7) 32号住居に属する出土遺物はカメ、坏の二種である。カメは最大径と口縁部の径が同じ形態である。頸部のくびれはしたがってごくわずかで、そこから短かく外開きする口縁につづく。口縁部はヘラでおさえて中位に段をつけている。口唇端部は内そぎ状に先端を細めている。胴部は紐作り痕が明白であるが、それを指でおさえたあと、たんねんにたて方向のヘラ削りで整えている。

坏には3種がある。その1つは2にみるごとく体部は肩のはった丸味をもち、平底状の底部へつづく。口縁部は体部との境に強い段をもち、そこから短かく外彎気味に立つ。深さからいえば、わんといった方がいいかも知れない。体部表面は手持ちヘラ削りによりていねいに整形されている。口縁と内面は横ナデがていねいになされて、焼成も高火度である。

2つは3、5、6の一群にみられる極く浅い体部(底部)から大

きく高く立つ口縁を有する形である。体部の深さは口縁の高さの約1/3の深さで、口縁との境の段はあまり強くない。口縁の立ち上がりはやや外開き気味に立つ。中段にはヘラによる沈線の段が1本付されている。その段の影響が内面まで及んでいるものと、及ばないものがあるが、丸底の深手のものより安定していることと、底部のケズリが入念であることが共通点である。

もう一つは4にみる、口縁と体部の境が稜で画されるものである。この手は体部の深さが前者より深く、口縁の立ち上がりも直に近い。口唇端部はおさえがきいて薄手になっている。

K-10ピット遺物

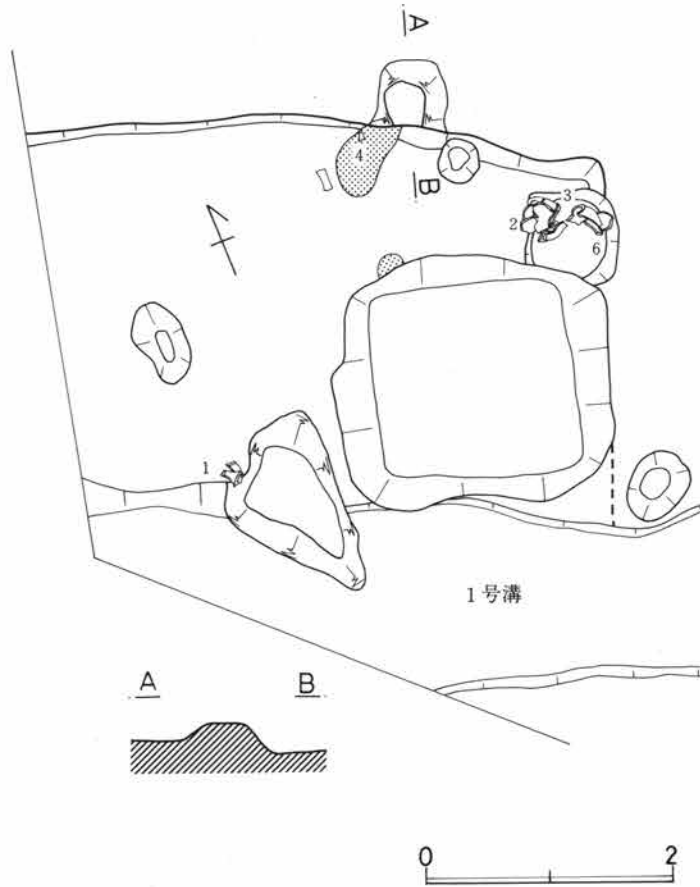
高台付皿で須恵器である。底部は糸切り後高台を貼付しているが、断面形状はふんばりがまだのこっている。体部外面はロクロ痕がのこり、口唇端部は肥厚している。

A-33号住居

L-11区で検出した住居で、これも第一次調査の境界に位置したため住居の2/3を調査しえたのみである。更に南壁側は1号溝で大きく切断されている。

住居の規模は現状で4.6×3m以上でカマドの位置は北壁中央からやや東に寄っているものと思われる。しかし、これも右袖はほとんど欠いており、大きさも不明である。残存状況からみて、燃焼部は壁内にあり、煙道をもつものであることが推察された。貯蔵穴は北東コーナー部分に径70cm、深さ50cmのものが発見された。縁にかかって、カメ2コ、コシキ1コが出土した。

柱穴は北東隅部に1コ発見されたが、対応する南東部のものは、後から掘られたL-12ピットで破壊されて、検出できなかった。



第72図 A-33号住居図

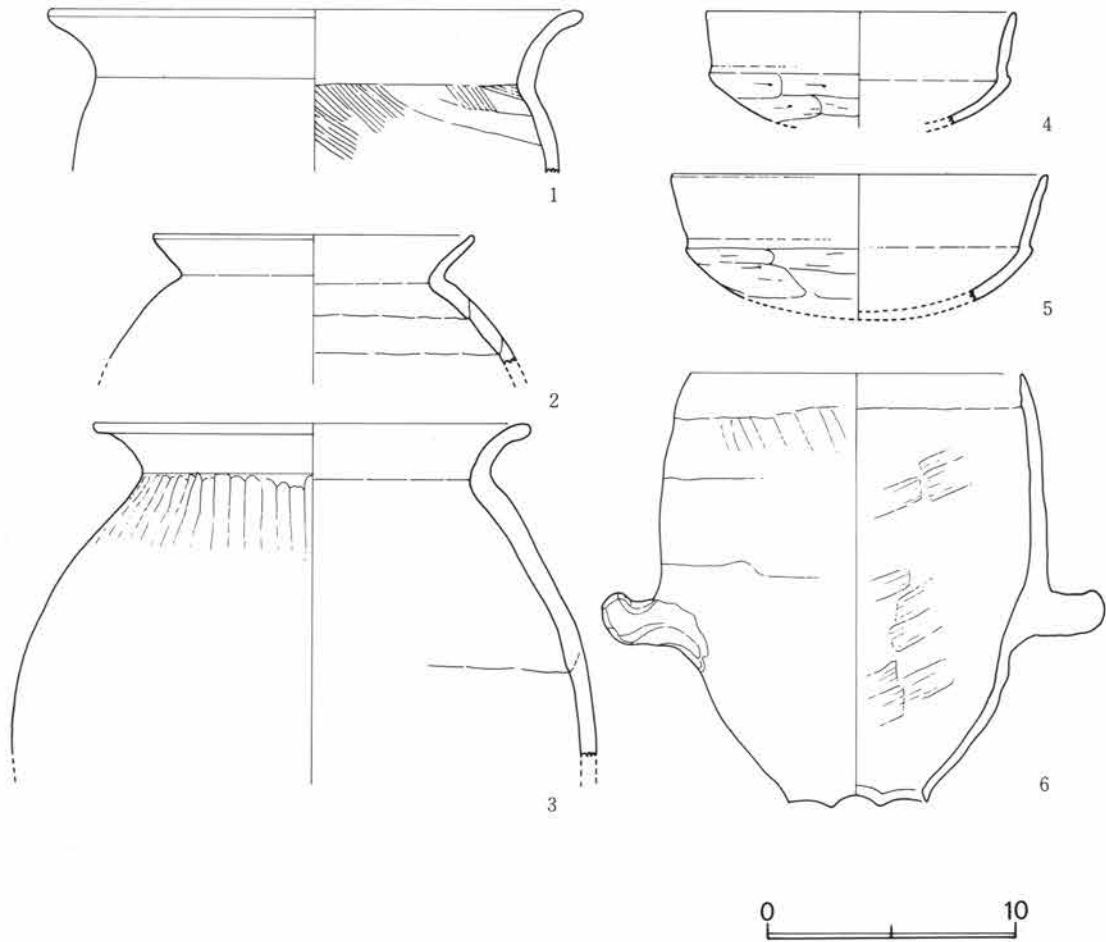
床面は全体によく踏み固められており、整っている。

L-12ピット、1号溝については、後で触れることにする。

遺物(図73-1~6) カメ、コシキ、坏の器種で検出されたが、特に県下での事例の少ない把手付コシキの出土がみられる。カメは頸部のしまりの強い「く」の字口縁のもの(1)と頸部のしまりの弱い口縁先端が外にめくれる感じのもの二種がある。体部は球形からやや長胴気味のものがある。

コシキは、ふくらみのある長胴型で口縁端部は内そぎで尖がった形で、底部は底をおとし、更に端部に半円形の切りこみを6コ付して波形を呈する。把手はほぼ器体部の中央やや下に付されているが、接合のための器壁の圧迫がみられる。把手は面取り状に角ばっている。

坏はまた、かなり体部の深い大型の直



第73図 A33号住居遺物実測図

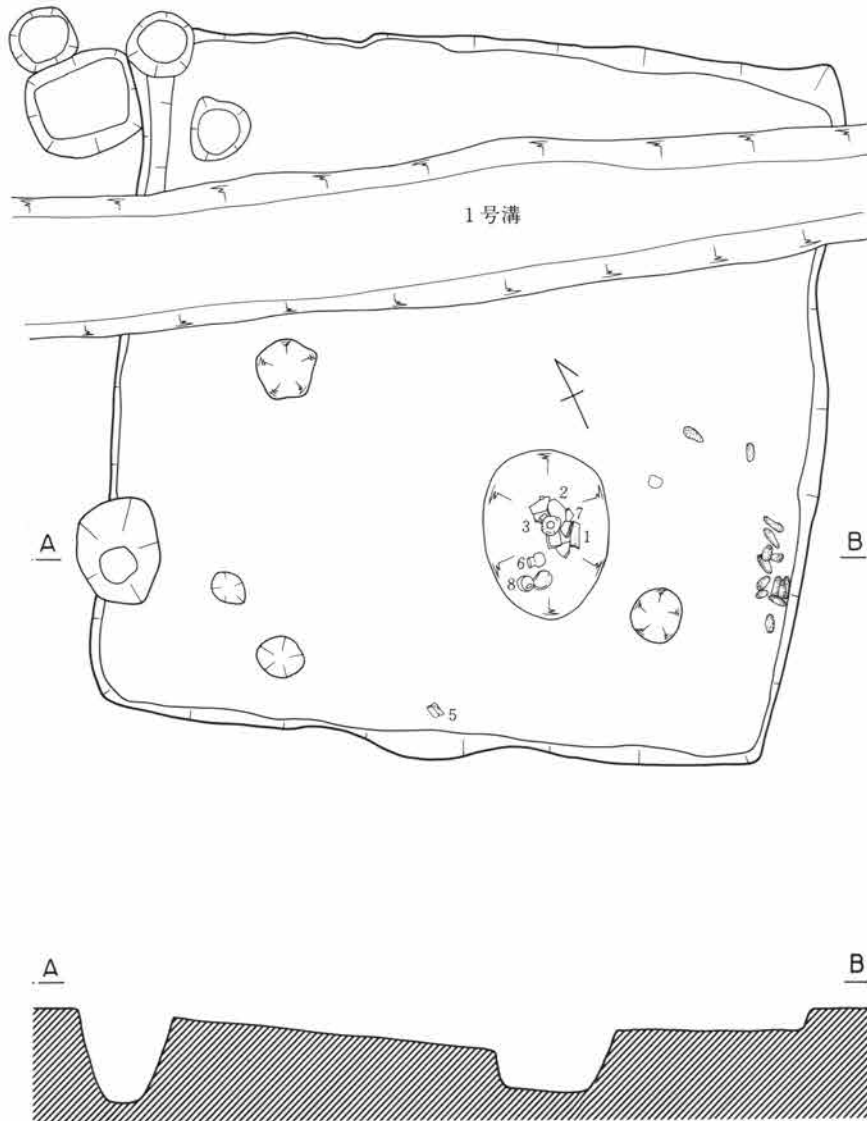
に立つ口縁を付す形で、体部との境には明らかな段がある。全体に器面の櫛、ヘラなどの整形痕がのこる特徴がある。

A-34号住居

N-11区に検出された方形住居であるが、住居北半部を北壁とほぼ平行に1号溝が切るため全ぼうはつかめていない。5.4×5.7mの規模で、ロームからの掘りこみは20cmほどである。住居南東部には径1×1.3m、深さ45cmほどの貯蔵穴があり、内部にカメ、高坏、埴等が出土した。柱穴は比較的住居の壁近くに3コ検出されたが、北東隅のものは、溝に切られて不明である。東壁下南より長さ15cm内外の細長い河原石が14コ集中して出土した。床面はよく整っている。

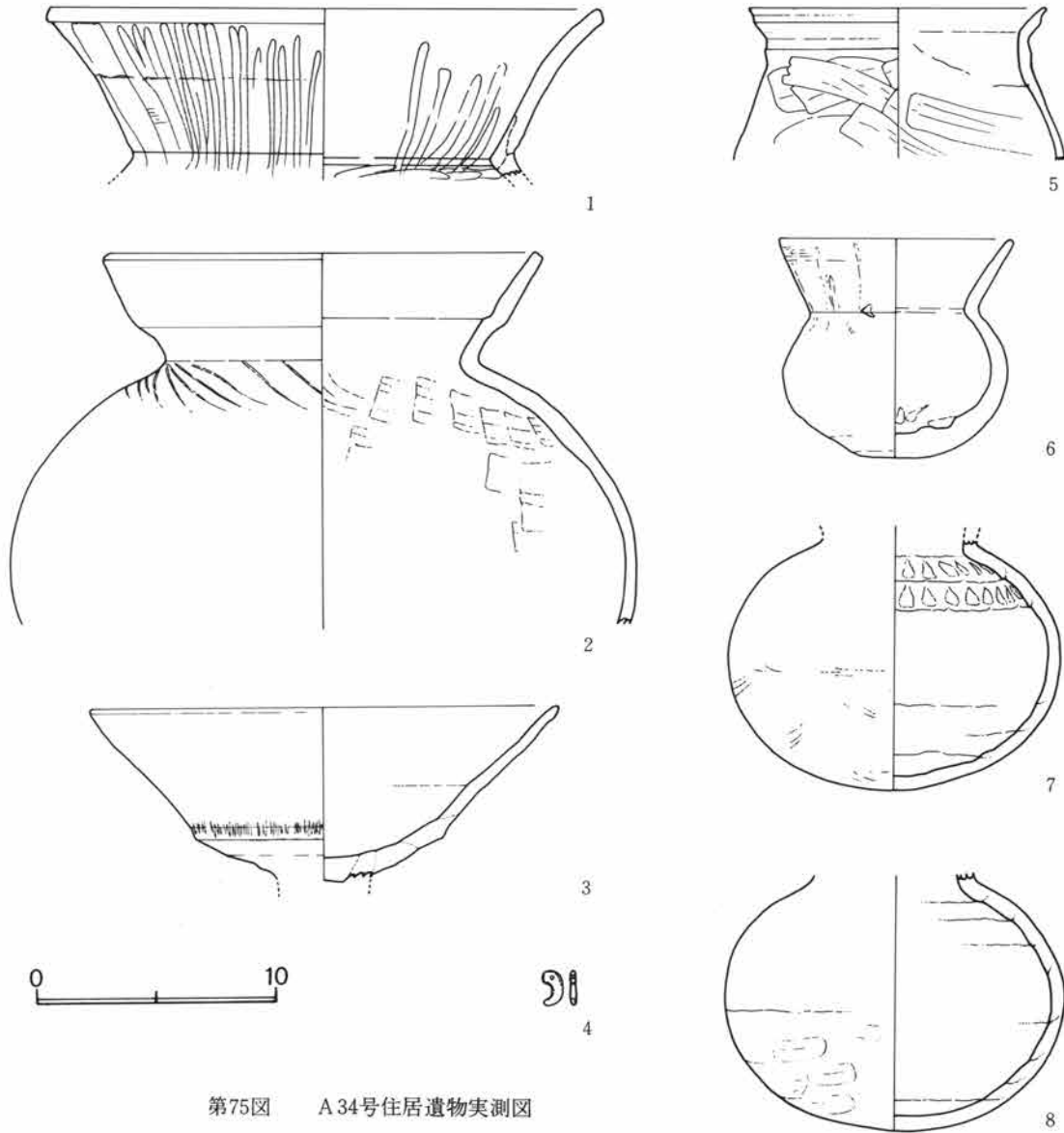
遺物 (図75-1~8) 壺、カメ、高坏、埴、土製勾玉が出土した。壺は単口縁と有段口縁のもの二種がある。体部は共に球形胴である。器面は滑沢で、ヘラ研磨が卓越している。カメは小型であるがやや長胴の体部から有段気味に短かく外斜する口縁を付す。体部はケズリが顕著で、口縁は厚めで体部にくらべ補強されている。高坏は大型で坏部は深い。

埴は、大型と小型の二種がある。小型のものは球形胴に短かく外反して口縁部が付され、最大径は口縁部



第74図 A 34号住居図

に来る。大型のものは両者とも口縁部を欠いているが、球形胴で、底部が丸底である点が前者と異なっている。体部は輪積み手法がみられ、7のように肩部内面を指おさえした痕跡をとどめているものもある。他に埋土中から滑石製の勾玉が出土している。小型であるが作りはいいである。全体的に土器は焼成が良く、器面研磨などに特徴がある。



第75図 A34号住居遺物実測図

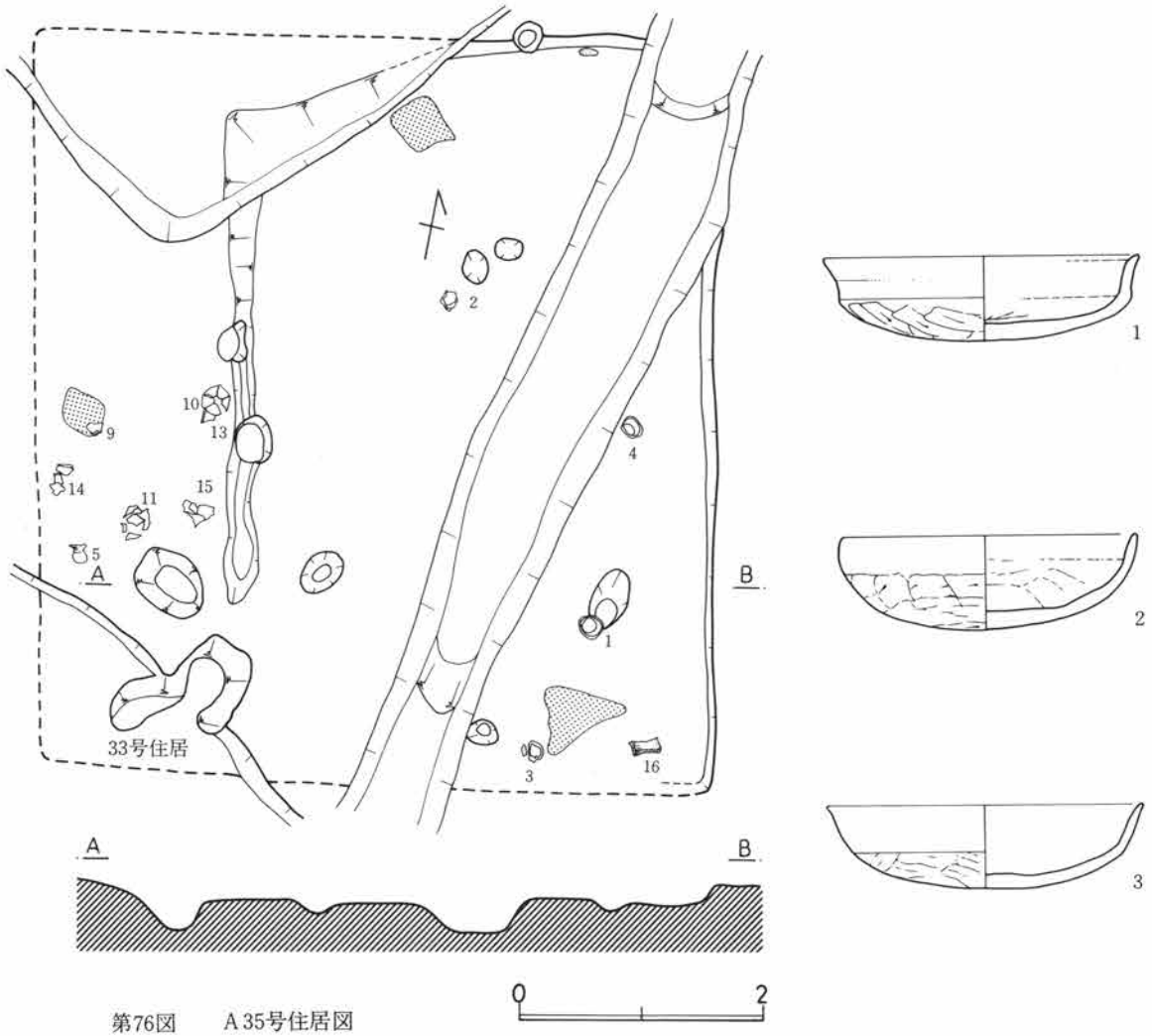
A-35号住居

L-12区に検出された住居で第一次調査時点の調査区南端であったため全ぼうはつかめず、別の住居に北西部を切られ、南西部を33号住居に、更に住居北東隅から南壁中央部にかけて10号溝が切っているため残存状態はよくない。1辺6mの正方形でルーム面からの掘りこみは20cmほどである。

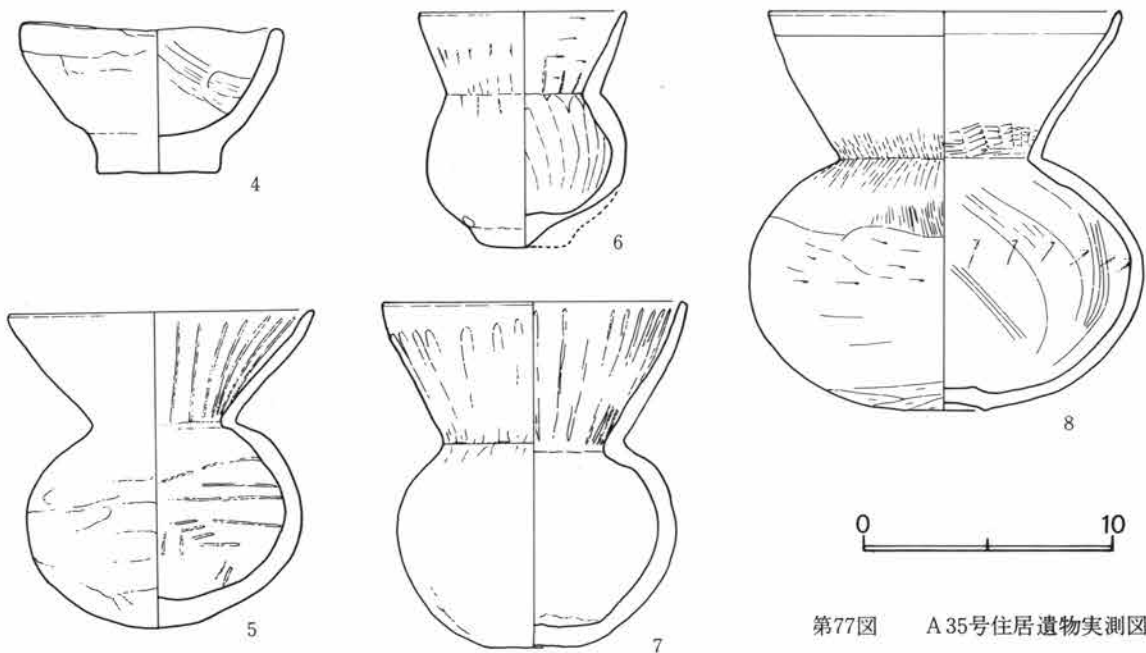
施設としては、柱穴が2コ検出されていたが、壁に対して東西壁に近く、南北壁からは離れる傾向がみられる。棟の走向は南北方向であろうか。なお、上方にある住居は湧水のため確認できず遺物のみを確認している。

遺物 (図77・78-1~16) 35号住居に付随するものは4~16までの壺、カメ、罎、高坏、鉢、砥石である。壺は球形胴から強い「く」の字口縁を有するもの(12)で器面はヘラ研磨している。カメは球形かやや長胴化傾向をみせ、口縁部は短かく外斜して開く。輪積み痕がめだち壺に比べ粗製である。最大径は胴部中央に来る。罎は大型と小型の二種があるが扁円形に大きく外開きする口縁部を付す。最大径は口縁部に来るものが多い。その点からみると、8はやや異質で口唇部の外そぎの技法、底部の底中央をあげること、最大巾

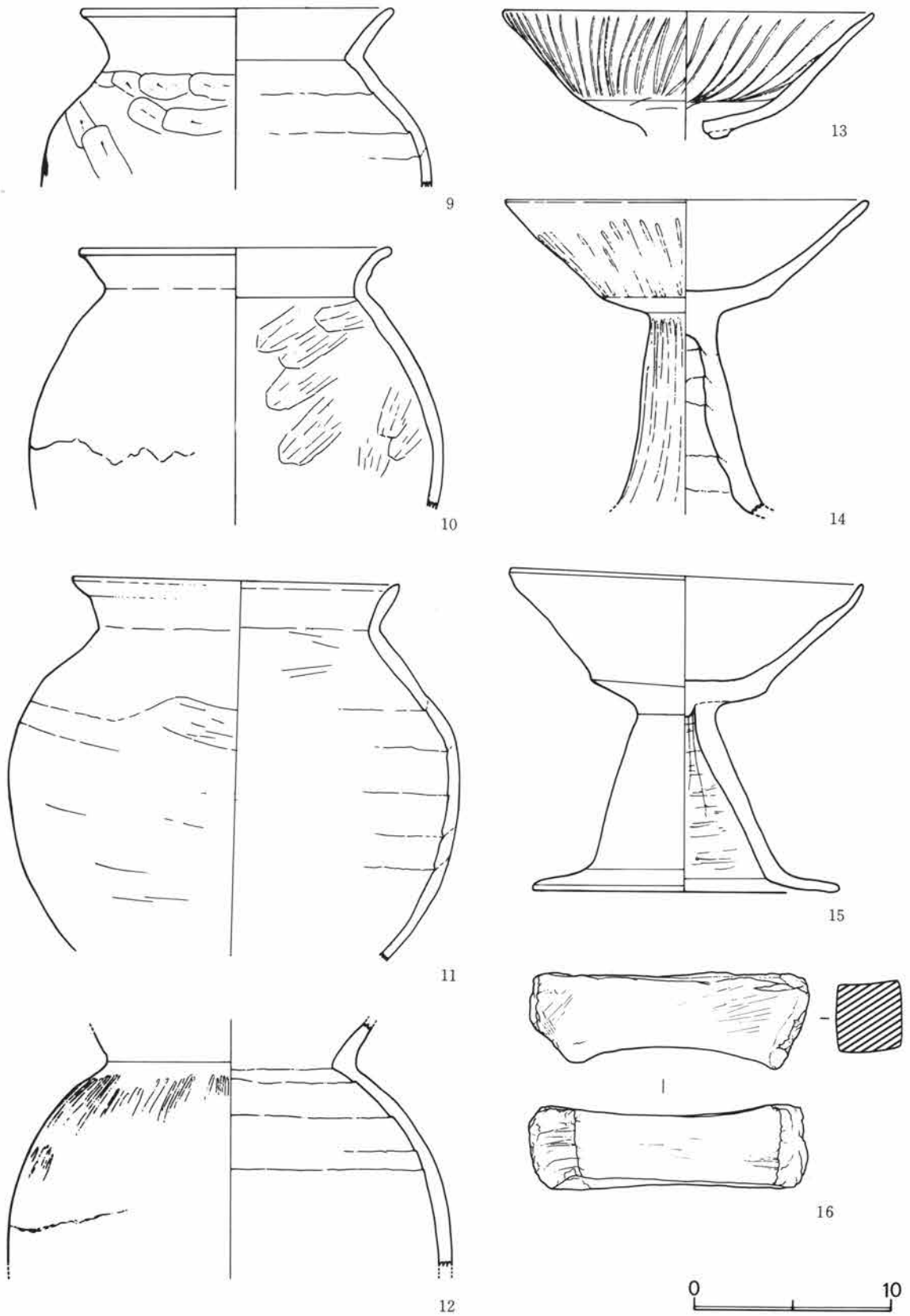
第1節 A地区の遺構と遺物(A-35号住居)



第76図 A 35号住居図



第77図 A 35号住居遺物実測図

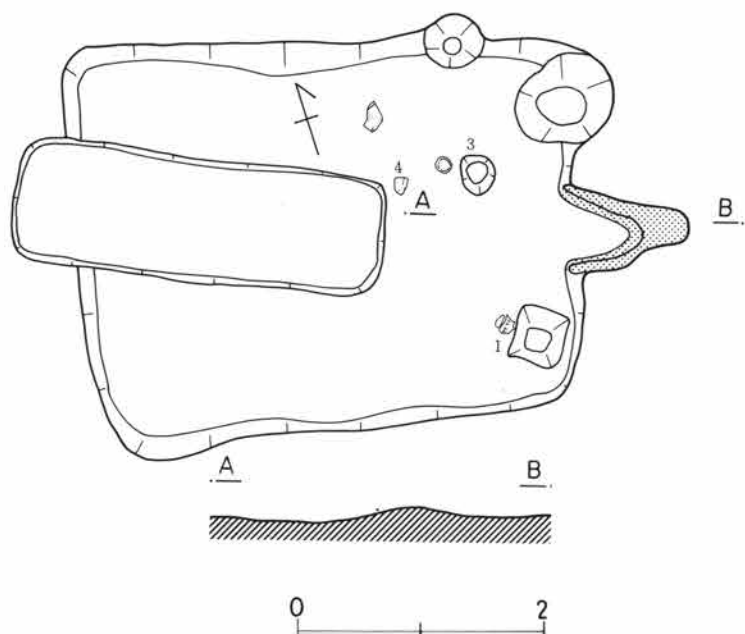


第78図 A 35号住居遺物実測図

が体部中央に来ることなどから他と異なっている。

6は底部が造り出しになっており、内面を指頭でかき上げる技法をみせている。

4は鉢形で大きい平底から斜めに外開きする体部は内彎気味で、口唇部は変化しない。高坏は大型で坏部は直線的に深く大きく開く。脚は大きい接合部から一旦立って裾で大きく開く形。砥石は大型据え砥で四面が使用されている。1～3は上層にあった住居の遺物であり体部の浅さに、口縁との境の段や稜の弱さに時期的な特徴がうかがわれる。



第79図 A36号住居図

A-36号住居

H-17区に検出された隅丸方形住居で27号住居の上層に検出された。3.1×4.1mと小型である。カマドは東壁中央に壁外につくり出されている。焚口巾50cm、奥行1mで黒色粘土を用いている。カマド右脇には浅い貯蔵穴状のピットを伴う。

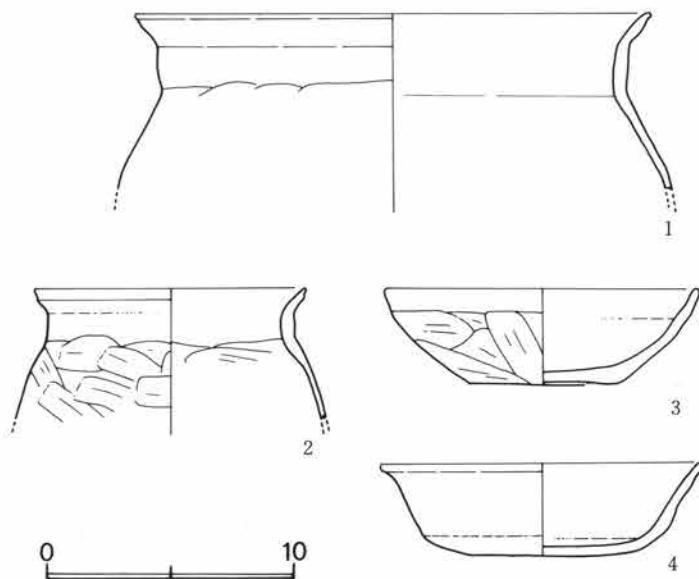
住居北東部に3コのピットがあるがこの住居に伴うか否か不明である。

遺物は貯蔵穴の縁にかかってカメが出土したほか、カマド左手前に集中して発見されたが、量的には少なかった。

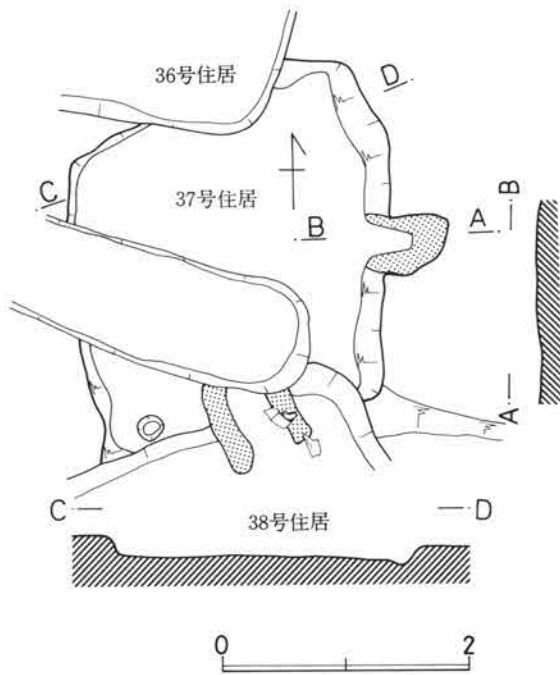
遺物 (図80-1~4) カメ、坏である。カメはいわゆる「コ」の字口縁の上半部で、比較的大型である。更に小型のカメも同様な形態で技法もヘラ削りの顕著なことも同様である。

坏は土師器の平底で「ハ」の字状に開く深手のものと、須恵器の坏である。前者は土師器ではまれな大きい平底で、形態的に須恵器を意識したものと思われる。

後者は糸切り底で底部が大きく、口縁端部はやや折れて開く形をみせている。



第80図 A36号住居遺物実測図



第81図 A 37号住居図

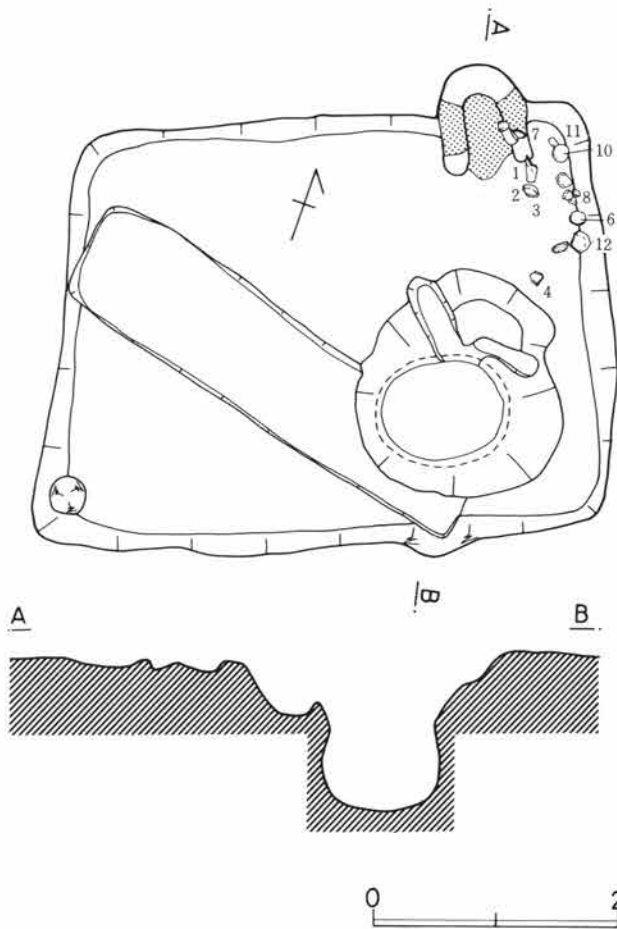
A-37号住居

H-13区に検出された方形住居である。北に36号、南に37号住居、中央に中世の長方形土壇が掘られている状況で、かなり荒れている。住居の規模は2.8×2.5mで、ルーム面からの掘りこみは15cm程である。カマドは東壁中央に付設されているが、燃烧部を方形に掘りこんでおり、そのまわりに粘土を貼付している。

壁の立ち上りはゆるやかで、壁下に東壁側では、カマド前面を除き周溝をまわしている。

東壁に比べて西壁はややせまくなり、全体的に不正方形をとっている。床面はかなり平坦であるが、あまり踏み固められた痕跡はない。カマドの焼け方もあまり強くなく、居住期間はやや短かったことが推定される。

遺物は床面密着のものは全くなく、埋土中に数片の土師器片が出土したのみであった。



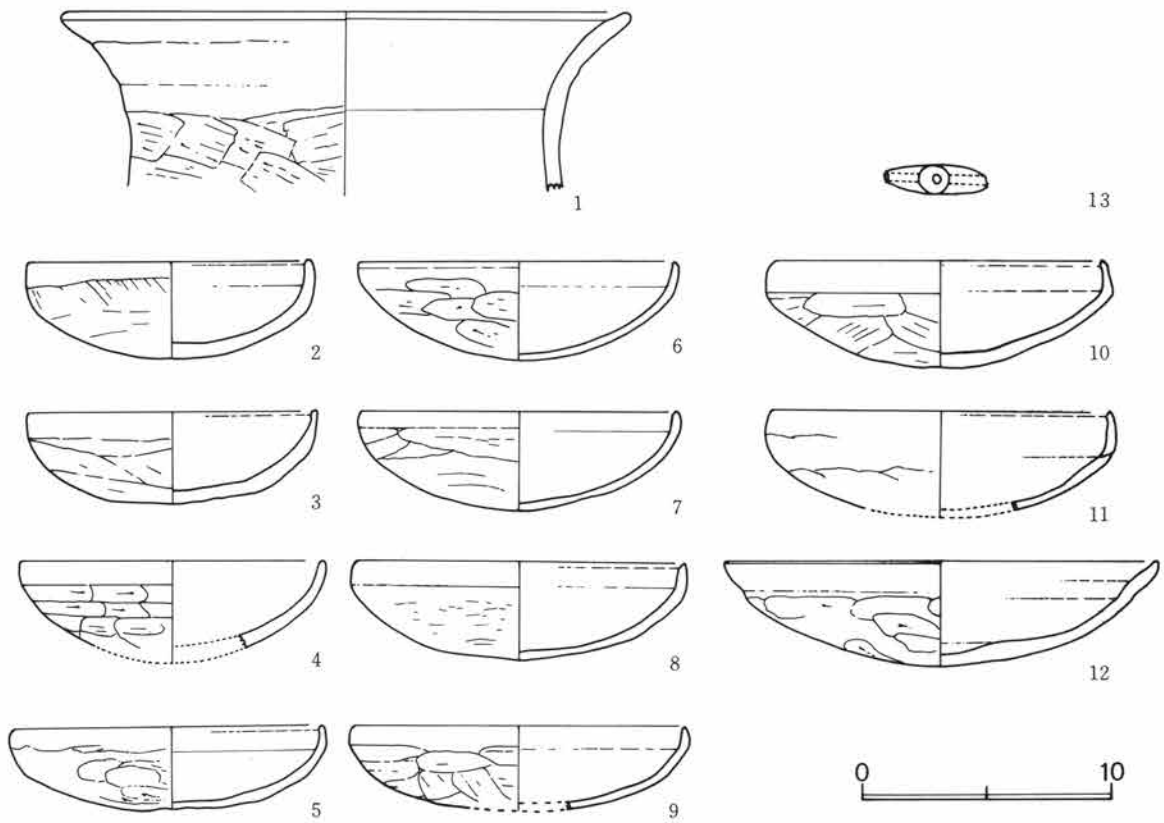
第82図 A 38号住居図

A-38号住居

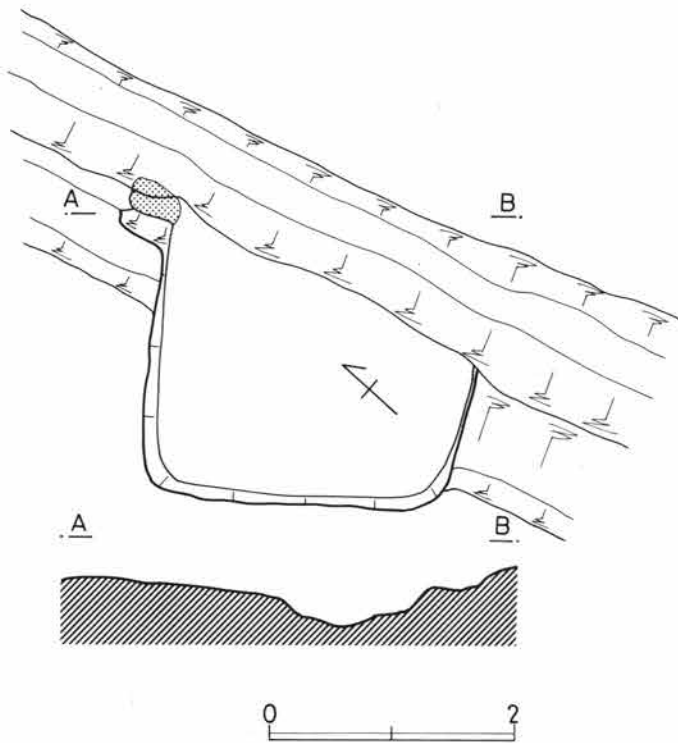
H-13区に検出された方形住居である。規模は3.4×4.5mでルーム面からの掘りこみは東側で20cm 西側で10cmほどである。この住居の中に長方形土壇、円形土壇が掘りこまれ、それぞれ中世、近世のこの周辺の改変を物語っている。

カマドは北壁の東コーナー寄りに設置されているが、黒色粘土を馬蹄状にまいた粘土カマドである。焚口巾40cm、奥行90cmの大きさで、石などは使用しない。このカマド右裾部分だけに遺物が集中して出土しており、このコーナーが厨房の機能を有していたことを物語っている。床面は全般に荒れが著しく整わない状況で特に土壇の周辺で凹凸がはげしい。

土壇については、後述の予定であるので詳細はそれにゆずるとするが、規模は長方形土壇が90cm、長さ3.5m、深さ20cm、円形土壇が径2.3m、深さ115cmであるが、長方形土壇が先行する。



第83図 A 38号住居遺物実測図



第84図 A 39号住居図

遺物(図83-1~12)カメ、坏、土鍾の組合せである。カメは頸部のしまりのない長胴カメで、最大径は口縁部にある。体部のヘラ削りが顕著である。

坏は3種ある。共通的に肩のこけたやや尖り気味の底部をもつ体部からの口縁部の立ち方で①境目に稜をもって短かく立つもの②内傾するもの③外開きするものである。①が最も多いが、全体的に稜線はくずれてきて不明瞭である。技法的には底部はヘラ削技法が顕著である。③は大型である。

土鍾は細長い端部の小さくなる円筒形でつくりは雑である。

A-39号住居

J-14区で発見した住居である。1辺の長さは西壁のみが確認できるが、その長さは2.6mである。住居東側は中近世の溝で切断されているため東西方向は不明である。

第II章 遺構と遺物

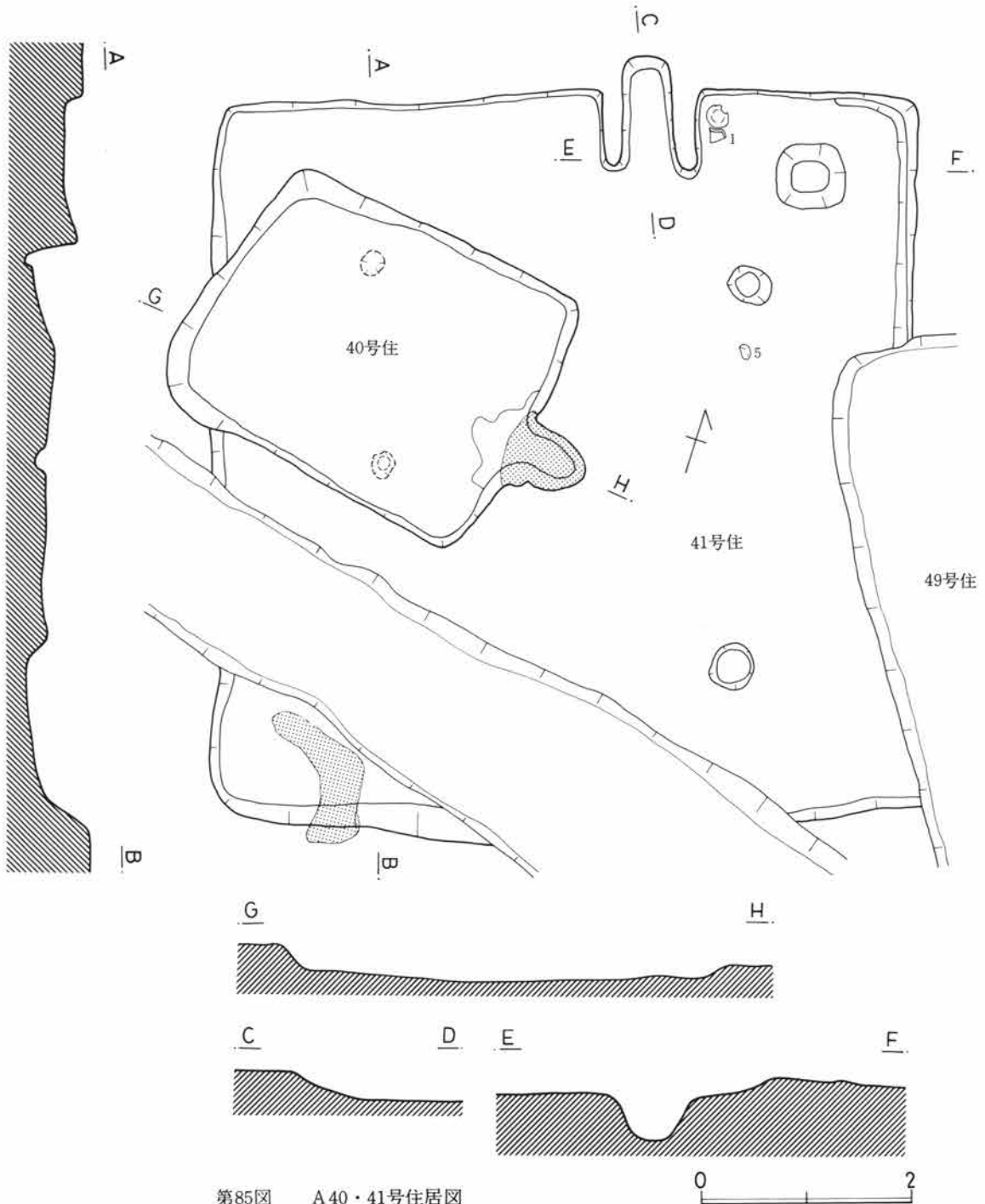
全体的にそのため荒れがひどく、床面に凹凸がはげしい。北壁部分ではローム面の掘りこみも浅く、カマドの存在によってようやく範囲が限定された。

カマドは北壁のおそらく東寄りに設置されていたとみられるが、全体的には一部がかろうじて溝の間に残った状態で、焼土の位置から推定するにすぎない。

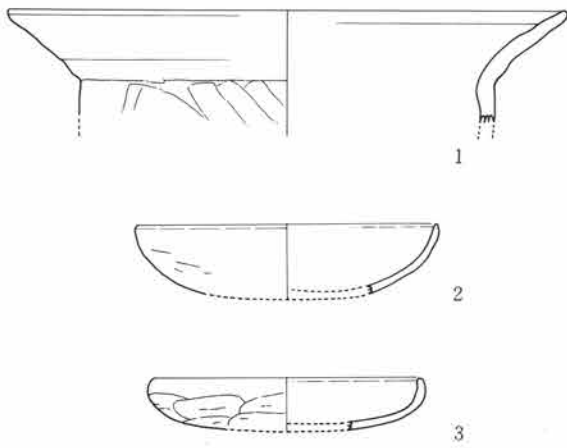
出土遺物もそういう状態のため、本遺構に確実につくものは出土していない。

A-40号住居、41号住居

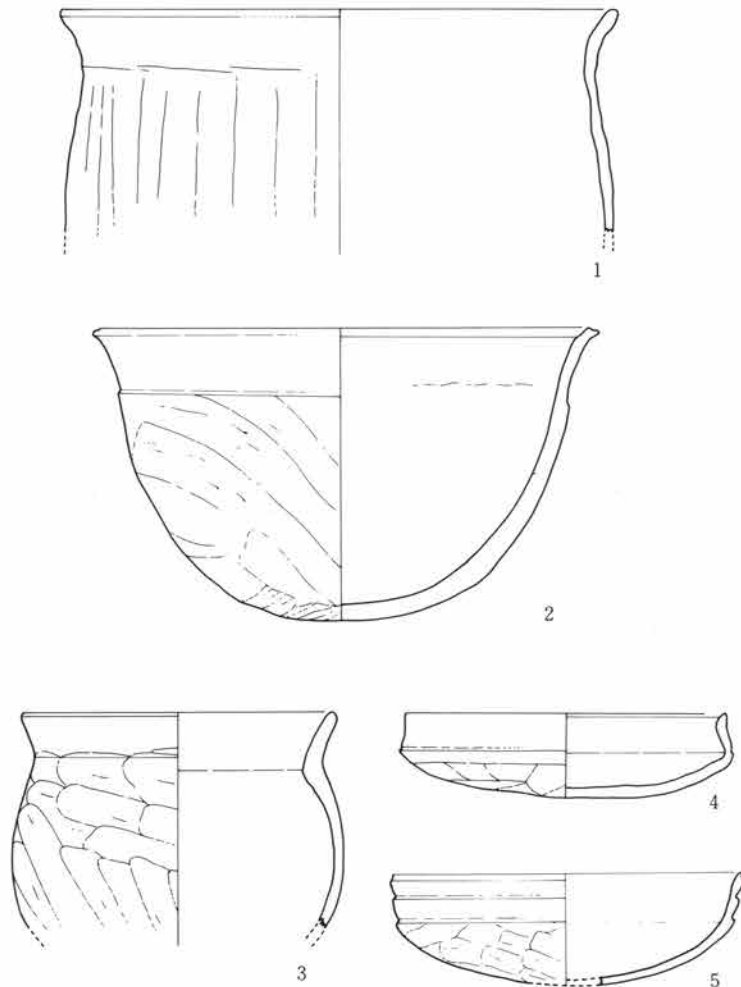
K-13区に検出された住居で41号住居の上層に40号住居が重複して検出された。40号住居は2.6×3.2mの



第85図 A40・41号住居図



第86図 A40号住居遺物実測図



第87図 A41号住居遺物実測図

隅丸方形を呈し、ローム面からの掘り込みは20cmほどである。東壁中央に粘土カマドを有している。焚口巾45cm、奥行1mで燃烧部も壁外に出る形である。床面は平らで整っている。住居内にはこの住居に伴なう柱穴は認められない。壁の切りこみも直ではない。遺物はカマド周辺に認められた。

41号住居は大型の方形住居で7×6.6mの大きさである。北壁東寄りに取りつけられたカマドは、当初の企画により、ロームを削り出して袖をのこして、粘土を張っている。焚口巾が45cm 奥行1.1mの大型である。カマド右脇の貯蔵穴は径60cmの方形で、深さは40cmほどである。支柱穴は四隅にあったとみられるが、近世の溝で切られて東南隅のものは滅失している。柱穴は径40cm、深さ50cmである。遺物はカマド右袖脇に集中して検出された他、住居東北部を中心に散乱して出土した。

二つの住居を断面でみると40号住居のは41号住居の床面を切って掘り込んでおり、41号住居の床面から30cm下に位置している。

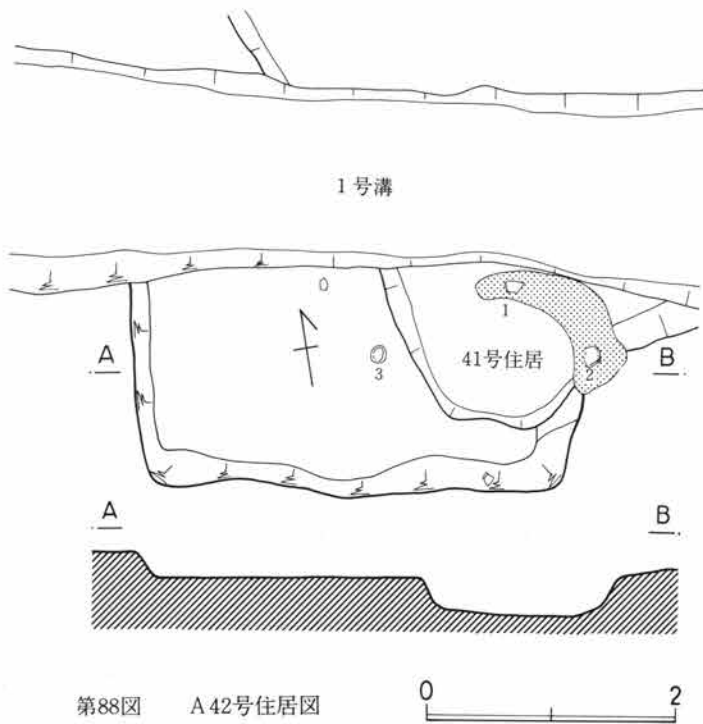
なお、41号住居は東南部で49号住居と重複して削られて、コーナー部の詳細は不明である。

遺物(図86-1~3) 40号住居、カメと坏の二器種が出土している。カメは長胴の体部に水平に近い口縁が開く。体部は削りが顕著で頸部以下はうす手の器肉である。

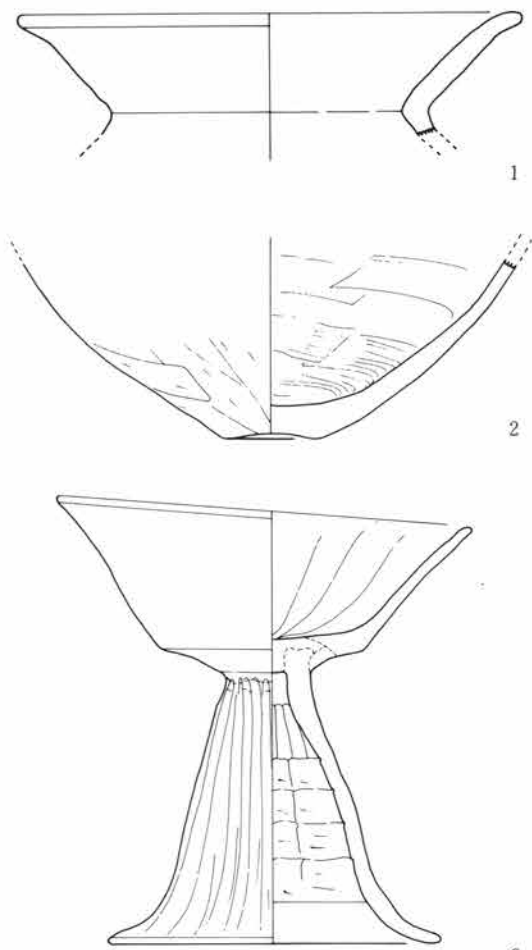
坏は小型の浅い体部にそのまま立つ形と境に稜を見せて立つ口縁の二形態がある。ともにケズリ痕が顕著でうすい。焼成火度も低い。

41号住居遺物(図87-1~5) カメ、鉢、小型カメ、坏の組合せである。

カメの口縁はほとんどくびれの無い体部から直立気味に立ち、端部を



第88図 A42号住居図



第89図 A42号住居遺物実測図

外に開く形で、器表はヘラ削りの痕跡がたて方向にみられる。

鉢は丸底で、口縁端部に最大径がくる形、いわゆる鉄カブト状を呈する。

小型カメは頸部のくびれは弱い、そこから外斜して口縁が立つ。底を欠く。

坏は浅い体部から直に立つ口縁に沈線の入るものと、内傾して立つものの二種がある。

全体として、体部のヘラ削り技法の盛行、坏における体部の浅くなることと口縁部の立ち上りのバラエティなどが目につく。

A-42号住居

L-14区に検出された住居で、北半を1号溝で切られ、更に東北部を41号住居で切られている。

残された状況でみると南壁長は3.6mあり、ローム面からの掘りこみは25cm内外である。壁面のたち上りはやや傾斜している。重複した41号住居の床面とのレベル差は25cmほどである。

床面は平らで整っている。カマドなどの炊飯施設は残存した住居の範囲内では確認できない。おそらく、溝が切られた住居部分にあったものと思われる。

柱穴は検出されていない。I号溝中には、多くの遺物が含まれていたが、本住居との関連はつかめていない。

遺物 (図89-1~3) この住居の出土遺物は、壺および高坏である。壺は体部下半のみで全ぼうはつかめない。現状では体部下半の丸味からみて球形胴に近い形であったとみられる。下部ではヘラ削り痕はあるが、他はヘラ研磨痕がのこり、器面は滑沢である。底部は体部に比べ極端に小さく不安定である。更に、底部は中央が彎曲して上がる形で、ヘラで整えている。

高坏の坏部は深く大きい。口径に比し、底部は1/2である。底部と口縁の境は稜線で強く画され、直線的に外斜する。口唇部は素縁で内外面とも研磨されている。

また、内面にはヘラによる放射状研磨痕が施されている。脚部は、一旦立ち、裾部が急にひろがる形である。環と脚の接合部は広く、底部の径の1/2ほどに達している。脚外面はたて方向のヘラ削りでよく整えている。脚の内面は輪積み痕が明瞭で、横ナデによっても完全に消されていない。脚の接合部近くの内面は指によるカキ出し痕がたて方向にのこり、端部は横なで技法がみられる。

A-43号住居

調査区の東端、石田川寄りに検出された住居で本住居の東南隅は原地形が削られて欠けている。G-14区に検出されたこの住居は、隅丸方形の形状で南壁長5.3×西壁長4.7mである。

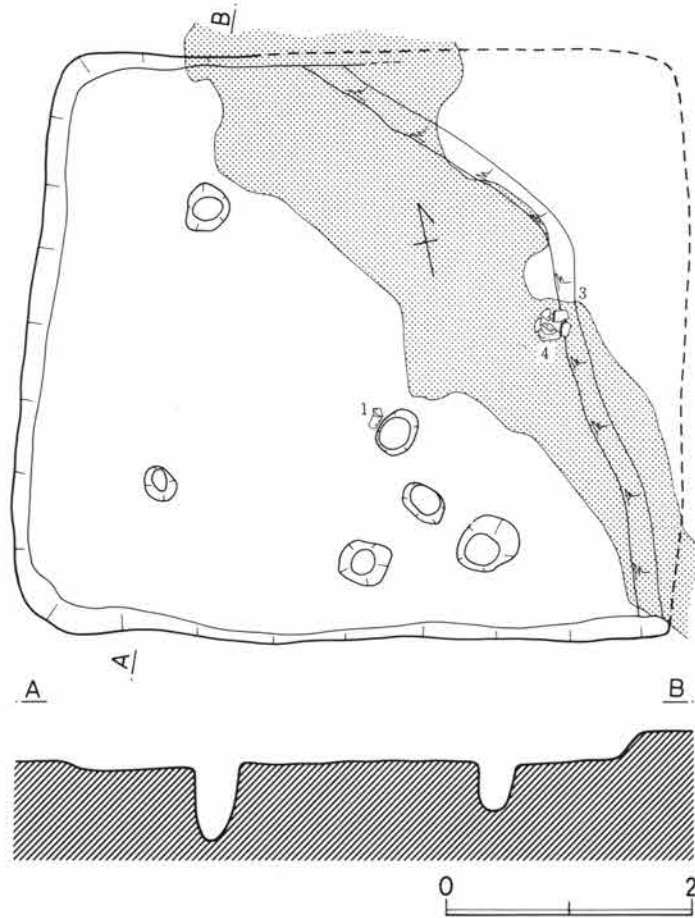
ローム面からの掘りこみは20cmほどであるが、44号住居をきる北壁部分では30cmほどの掘りこみである。

ロームが削られた住居北東部分の削りに沿って巾1.3mほどの焼土と木炭の混りあった部分が扇状にひろがっている。付近にあった焼失家屋のそれが水のよどんだふちに流れ寄ったものであろうか。

柱穴は、西壁側の2コは確認されたが、東壁側のそれは検出できなかった。また、南壁下中央からやや東に寄った位置に壁と平行に2コ浅いピットが検出されたが入口であろう。

カマドは検出されていない。おそらく、東側の水により削られた部分にあったものであろう。

遺物は中央部に認められた他は焼土層の中に床面から浮いて検出されている。増水により、住居内の遺物が水により浮き、水がひくのに伴って淵に寄せられたものであろう。

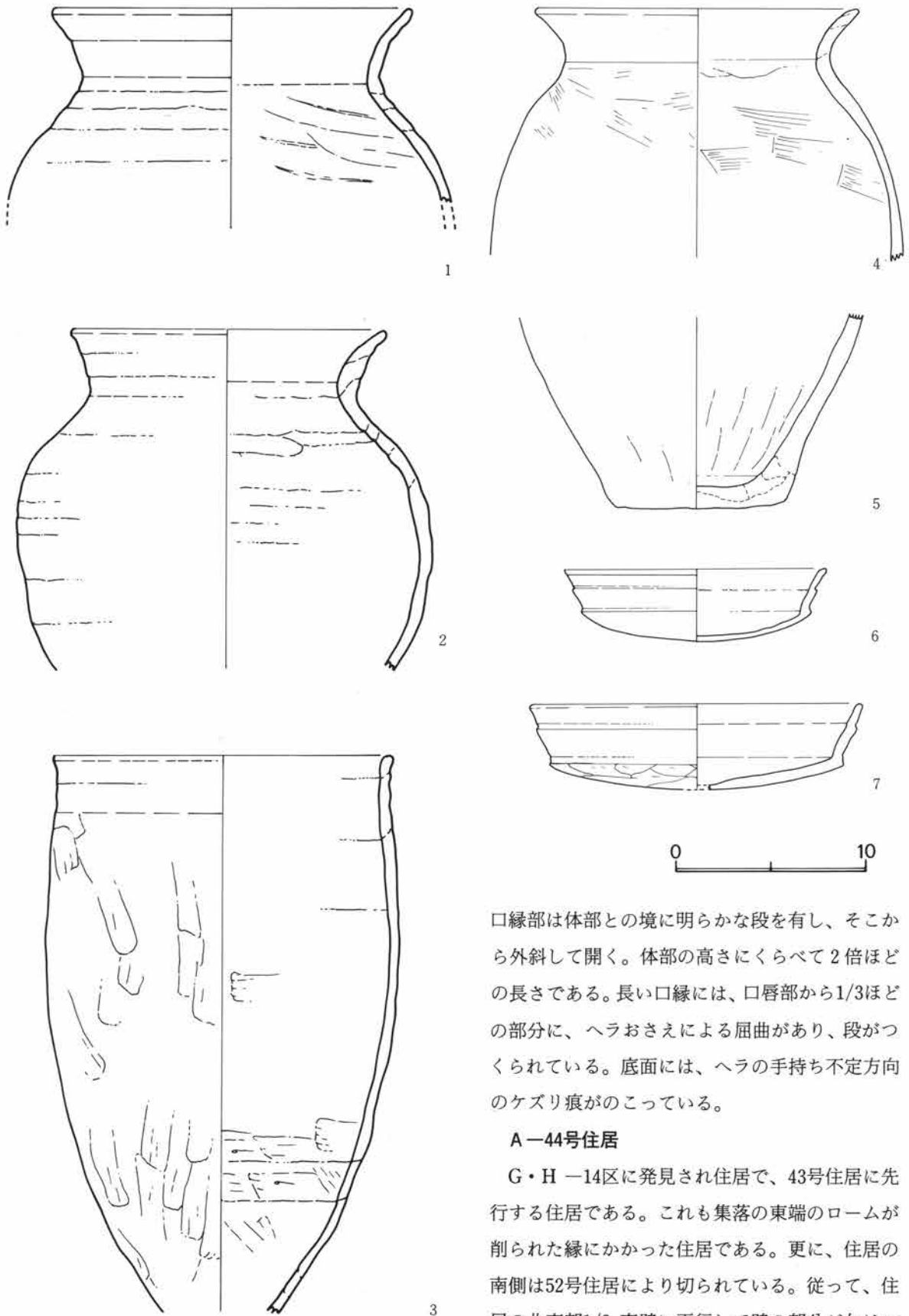


第90図 A43号住居図

遺物(図91-1~7)カメ、坏の出土がみられる。カメは、球形胴のものと同長の二種がある。前者はくびれの強い頸部から短かく外斜して開く口縁がつく。輪積みによる成形のあとがうかがえる。表面はヘラによるおさえ程度の整形がみられる。また、一部には櫛状工具による整形痕をとどめているものもある。

後者はいわゆる長胴甕である。底部を欠くので不明瞭だが、コシキの可能性もある。特に素縁の口辺は、体部がそのままのびた状態でおさえただけのものである。体部はそのまま尻がこけてすぼまり底部につづく。器表外面には斜、たて方向の削り痕がのこる。成形はやはり輪積みである。また底部のみであるが5のように大きい安定したカメの底ものこっている。

坏は大きさに二種あるが、形態的には全く同じで、つくりも同巧である。浅い体部で丸底だが接地面積は広い。

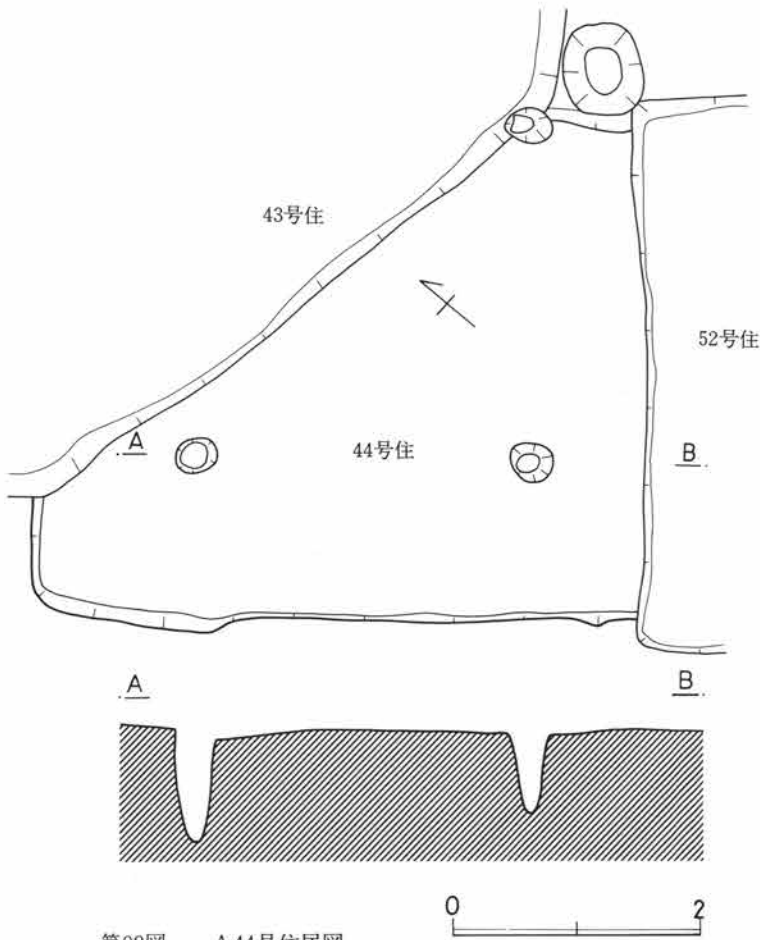


第91図 A43号住居遺物実測図

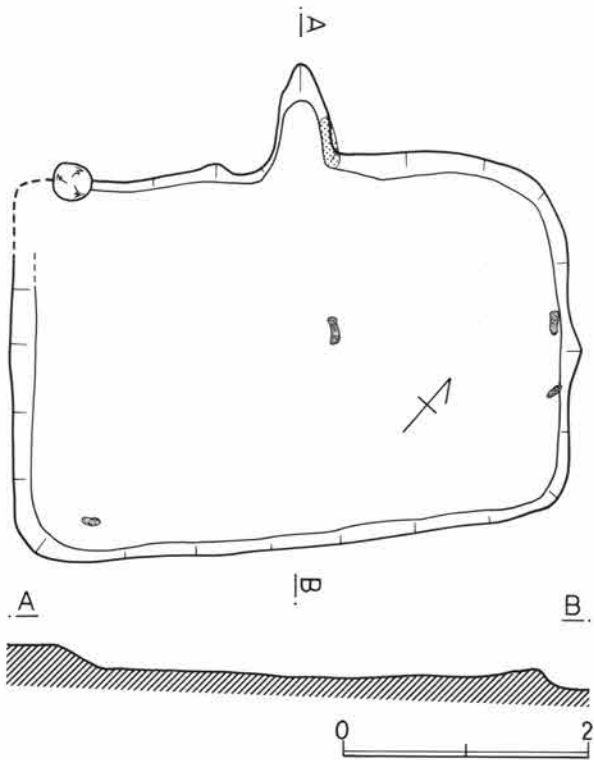
口縁部は体部との境に明らかな段を有し、そこから外斜して開く。体部の高さにくらべて2倍ほどの長さである。長い口縁には、口唇部から1/3ほどの部分に、ヘラおさえによる屈曲があり、段がつくられている。底面には、ヘラの手持ち不定方向のケズリ痕がのこっている。

A-44号住居

G・H-14区に発見され住居で、43号住居に先行する住居である。これも集落の東端のロームが削られた縁にかかった住居である。更に、住居の南側は52号住居により切られている。従って、住居の北東部1/3、南壁に平行して壁の部分が欠けている。残存部分は、住居全体の2/3弱ということに



第92図 A 44号住居図



第93図 A 45号住居図

なる。

住居の床面は、43号、52号住居に切られているため、ロームからの掘りこみの深さもはっきりしないが、よく整って平らである。

住居の施設としては、貯蔵穴、柱穴が確認されたのみである。貯蔵穴は70×60cmの長円形で、深さは40cm内外である。この貯蔵穴の左側にカマドがあったとみられるが、削られている。

柱穴は、4本認められた。径35cm、80～60cmの深さで、ほぼ直に立っている。52号との関係で見ると、52号がこの44号住居を切っていることから時期の推定をせざるを得ないほど、遺物はほとんどみられない。

A-45号住居

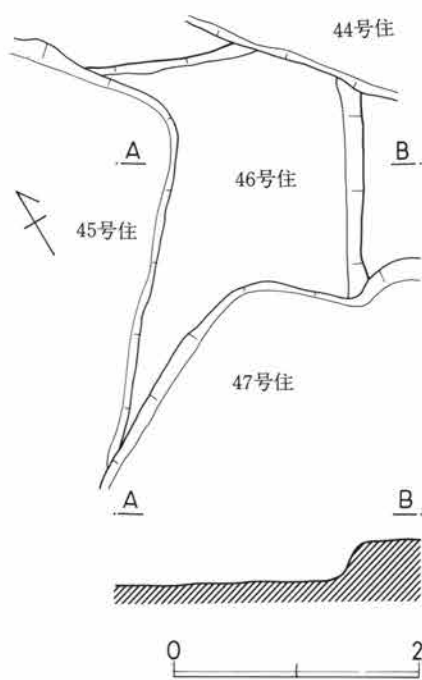
1-14区に発見された隅丸方形の住居である。3.1×4.6と東西に長い長方形を呈し、ローム面からの掘りこみは20cm内外である。

カマドは、北壁中央にあり燃焼部も壁の外へ張り出している粘土カマドである。粘土は本遺跡で一般的に認められる黒色粘土である。焚口巾40cm、奥行80cmである。焼け方はあまりひどくなく、使用期間はあまり長くなかったとみられる。

住居内には柱穴は認められなかったが、住居北西部の北壁上に小ピットが検出されている。これで見ると、柱穴は、このような壁外に出ていた可能性が考えられる。

遺物としては土器はほとんどなく、埋土中の土器片にもまとまる形のものはない。ただ、東壁下中央、西南コーナー壁下、住居中央に長さ20cmほどの河原石が4コ出土している。

この住居の周辺も長方形の中世土壇がみ



第94図 A46号住居図

られるが、北西コーナーも、この長方形土壇に切られている。

A-46号住居

H-14区に検出された住居である。この住居は、45号、47号、49号、44号の住居により周囲をすべて切られ、その間に僅かに一部がのこっている程度である。

方形住居であることは北、東壁の走向で推察されるが、隅丸方形か否かは不明である。その他、遺物の出土もなく、その実態は全く不明である。床面のみ平らで整っている。

A-47、48号住居

1-15区を中心に重複して検出された。ほぼ同方向、同規模でスライドした状態で発見されたが、47号が後行することが断面で確認された。

47号住居は隅丸長方形で3.1×2.7mと小型である。ローム面から45cmの深さである。床面はやや凹凸があるが整っている。柱穴は認められない。

東壁中央に付設されたカマドは粘土カマドで、燃焼部も壁

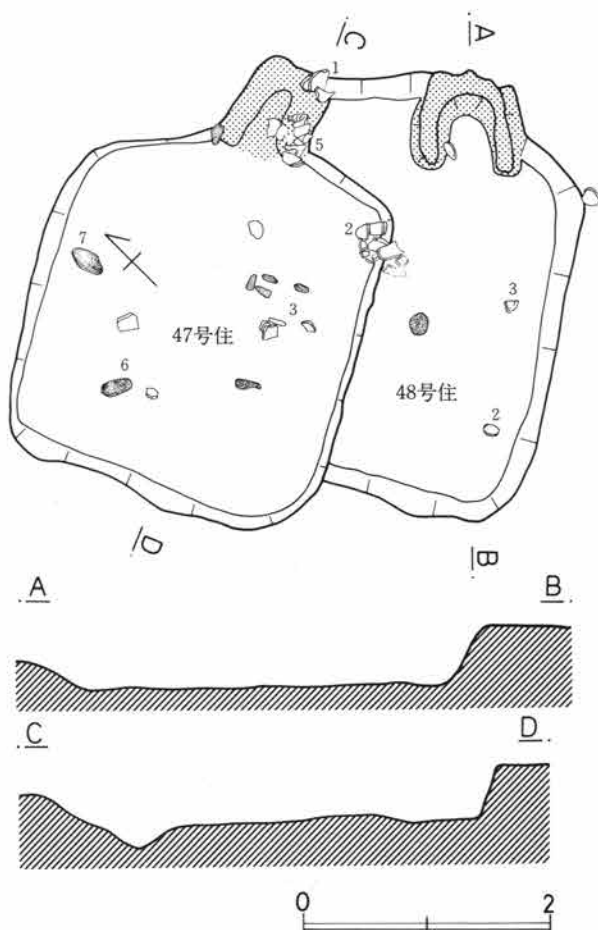
外に出ている。焚口巾は40cm、奥行は80cmである。焼け方は激しい。

遺物は、カマド内および東南四半部に集中して発見されている。他に床面上に河原石の転石が7コ発見されている。

48号住居は、47号住居に北壁を切られて2/3ほど欠けている。隅丸長方形で3.4×2.4mの規模である。ローム面からの掘りこみは50cmほどで、床面はよく整っている。

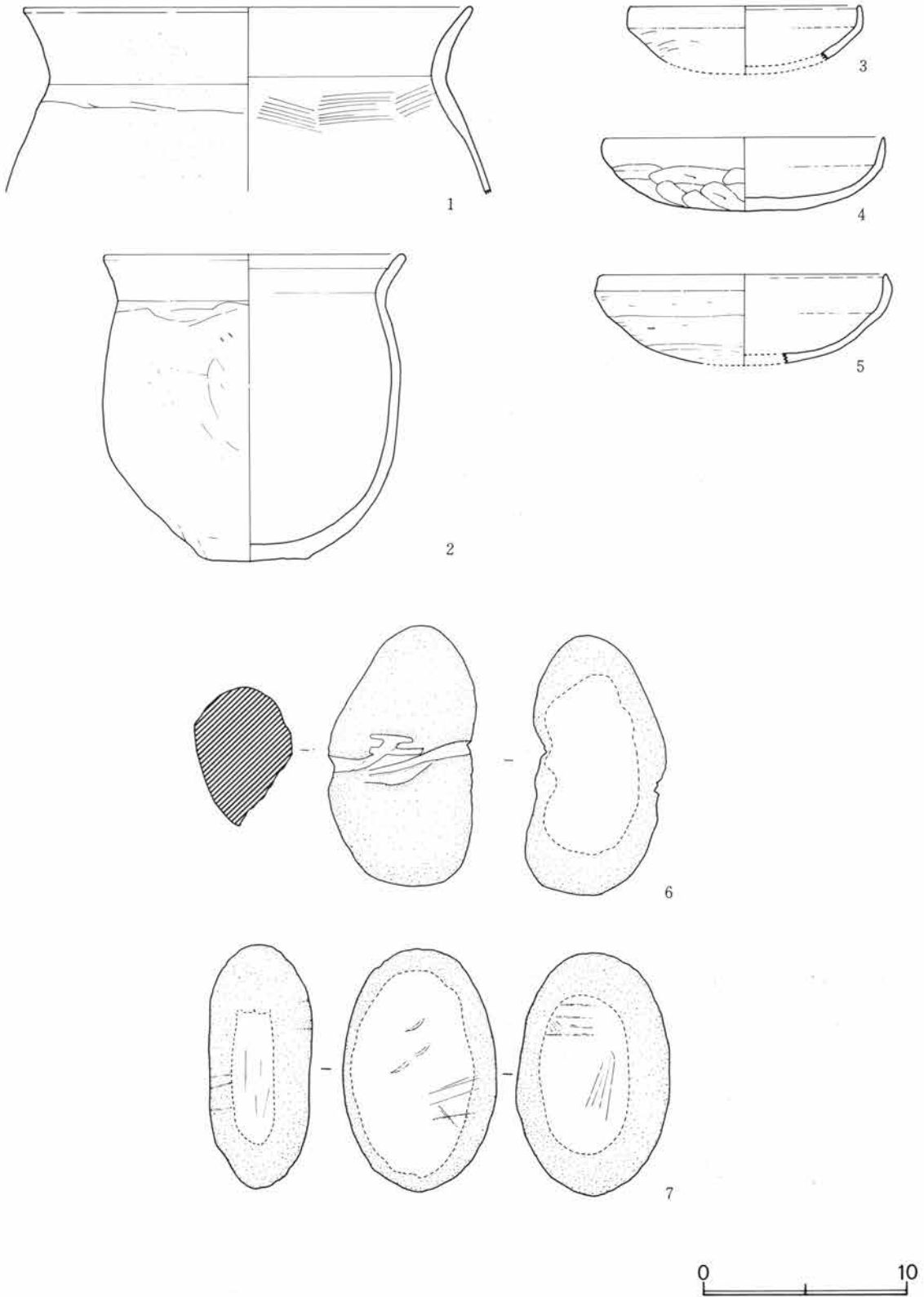
柱穴はない。カマドは住居内に向って壁から張り出している粘土カマドである。焚口巾40cm、奥行75cmで粘土のまき方は厚い。

遺物は、カマドの前及び南壁下に発見されたが量的には多くない。

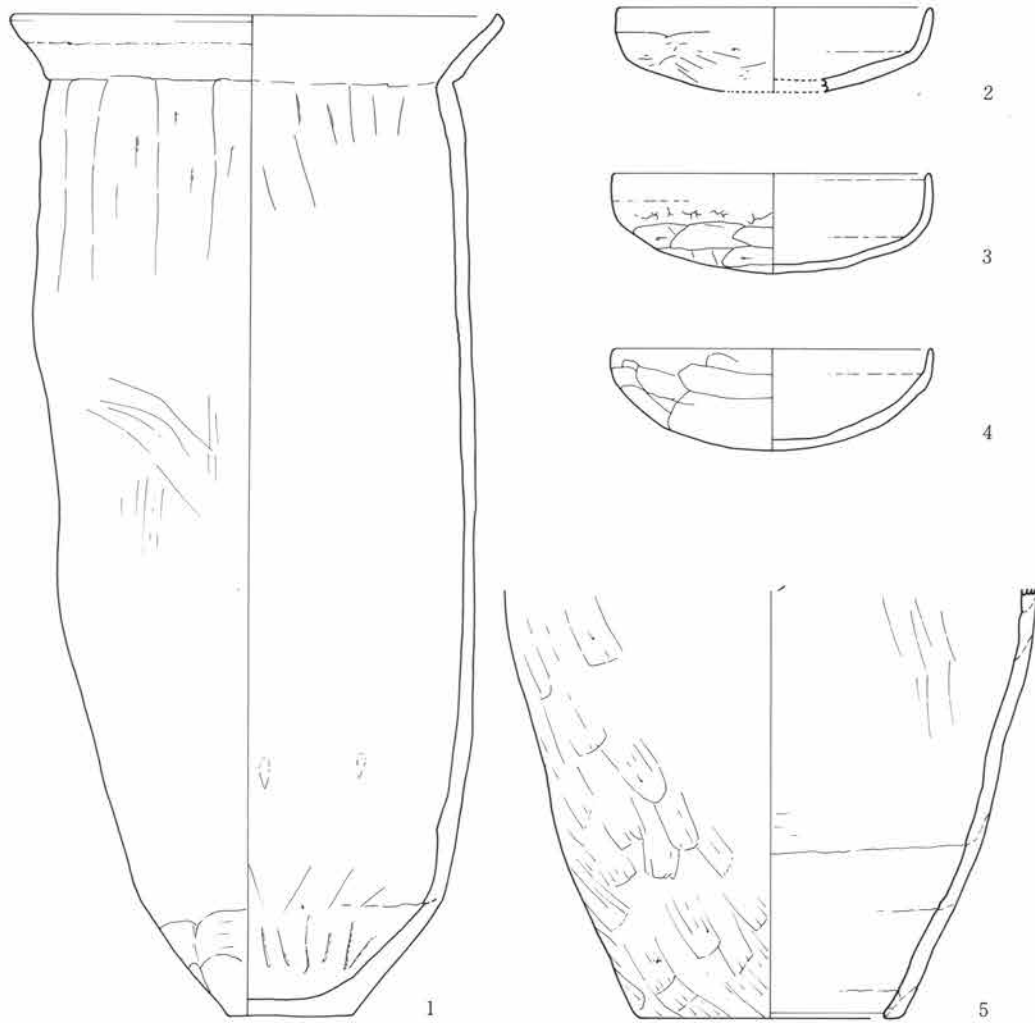


第95図 A47・48号住居図

第1節 A地区の遺構と遺物(A-46~48号住居)



第96図 A47号住居遺物実測図



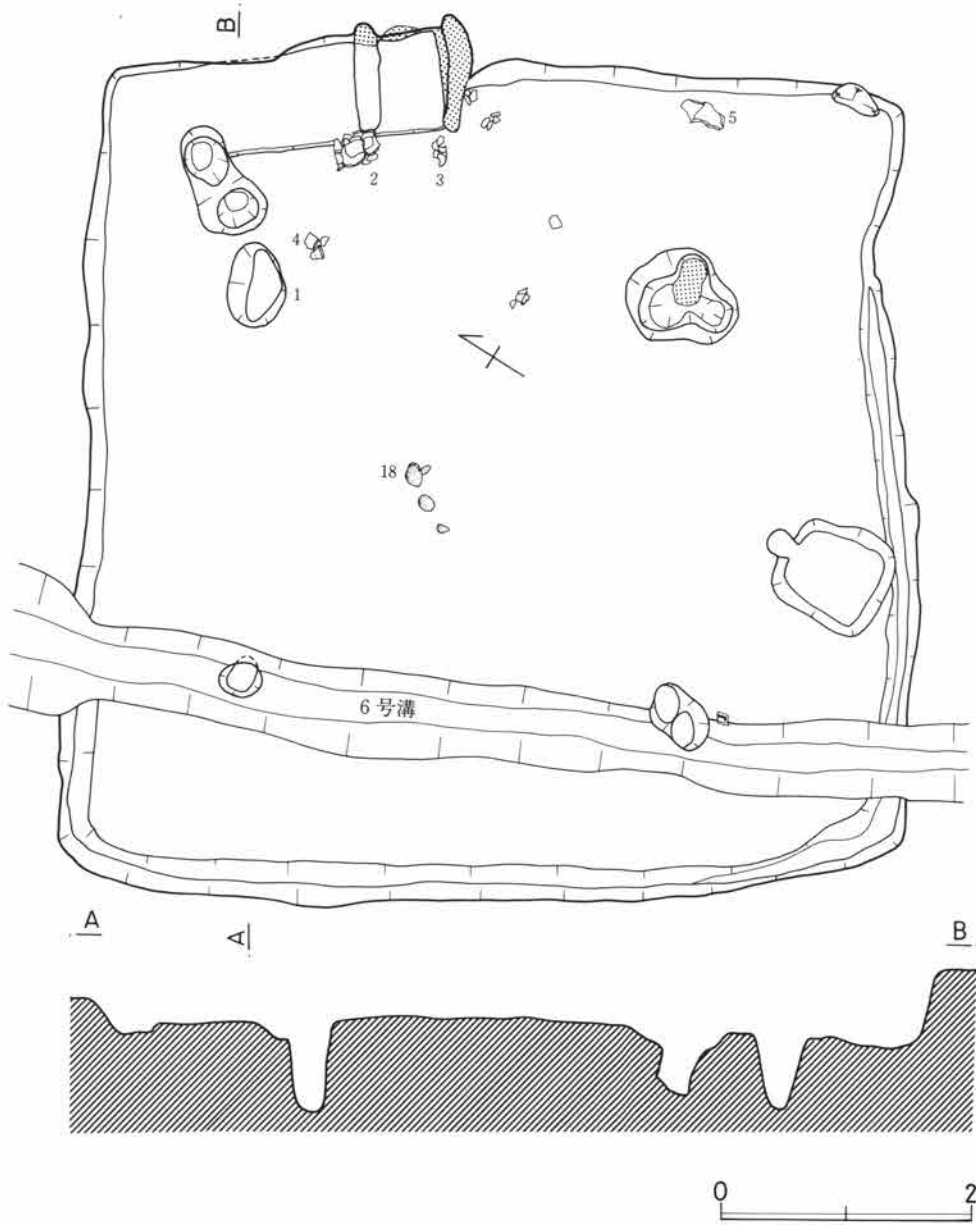
第97図 A48号住居遺物実測図

A-49号住居 J-14区を中心に発見された大型住居である。一辺6.6mの方形で、ロームからの掘り込みは65cmと深い。住居の西壁に平行して近世の6号溝が切っているが、床面のカットは10cmほどであるため、全ぼうを知るのには支障はない。カマドは東壁中央のやや北寄りに設置されているが、壁から住居内に粘土を直にのぼしている。焚口巾70cm、奥行80cmで煙道は外へのびていたとみられるが、それは中央の焼けのはげしい部分が壁外へのびていることから推定される。

住居の南壁から西壁北壁の一部にかけて壁下周溝がめぐっている。住居の各コーナーには主柱穴が確認されている。しかし、これらは単一でなく、2つがセットになっているものが3組あるところを見ると、この住居は建て替えが行なわれた可能性がある。その目で、他の部分を見ると、カマド前面に接して東壁ぞいに一本の筋状の掘りこみがある。これはおそらく、当初の住居の壁下にめぐっていたとみられ、カマドのつけ替え時に外側に住居を拡張した可能性がある。

床面は堅く踏み固められていてははっきりと確認できる。特に東南四半部は固い。

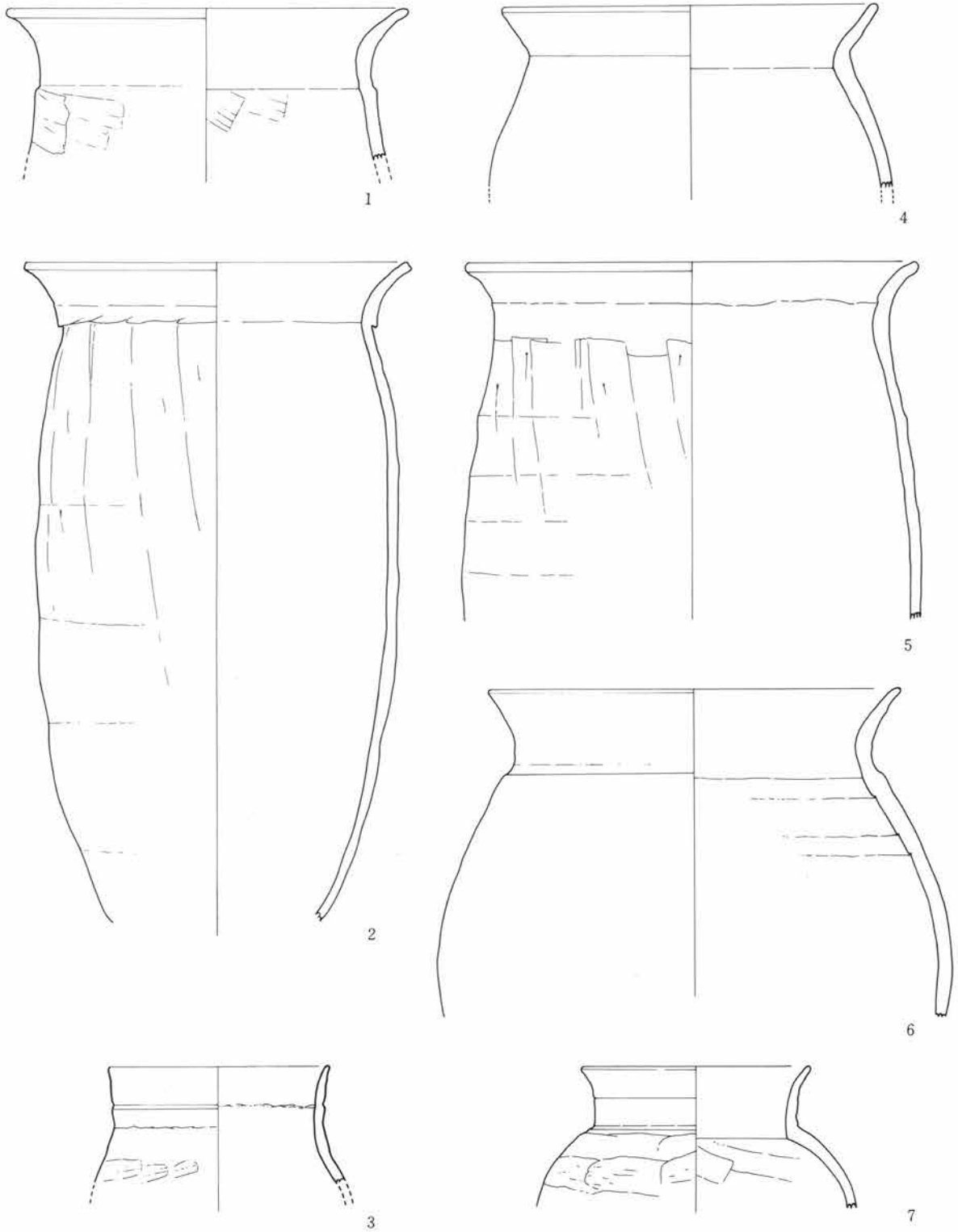
南壁下にある方形の大きい方形ピットは貯蔵穴か否か確定しえないが、80×90cmの不正方形で、深さは45cmである。規模的には貯蔵穴とみてよさそうであるが、位置的にこの類例はないので確定できない。遺



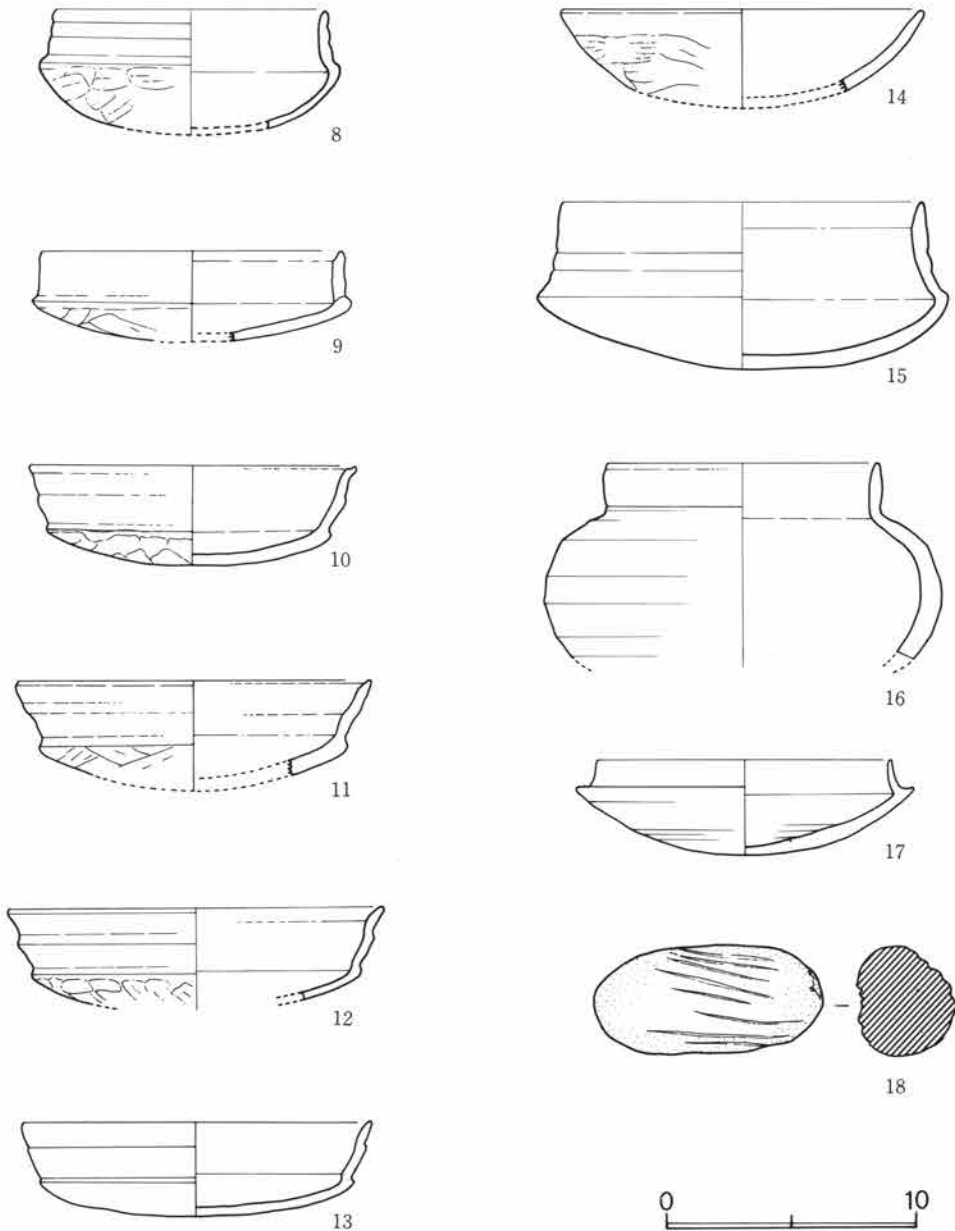
第98図 A49号住居図

物はカマド周辺に集中して発見した。

遺物(図99、100-1~18) 壺、カメ、小型カメ、坏などの土師器の他、短頸壺、坏身の須恵器、軽石に刃物痕のあるものなどが出土している。壺(7)は球形胴から一旦直に立ち、端部は外斜して開く。口縁にはヘラによる沈線の稜が入る。カメは三形態ある。1つは長胴カメで、ややくびれた頸部から外湾気味に開く口縁をもつもの、2つは張りのある体部から直に近く短かく立つ口縁を有するもの(3)、3つは、頸部のくびれが強く、外斜して外開きする口縁をもつものである。2、3は最大径が胴部にあり、1は口縁部にあるところに特徴がある。



第99図 A49号住居遺物実測図



第100図 A49号住居遺物実測図

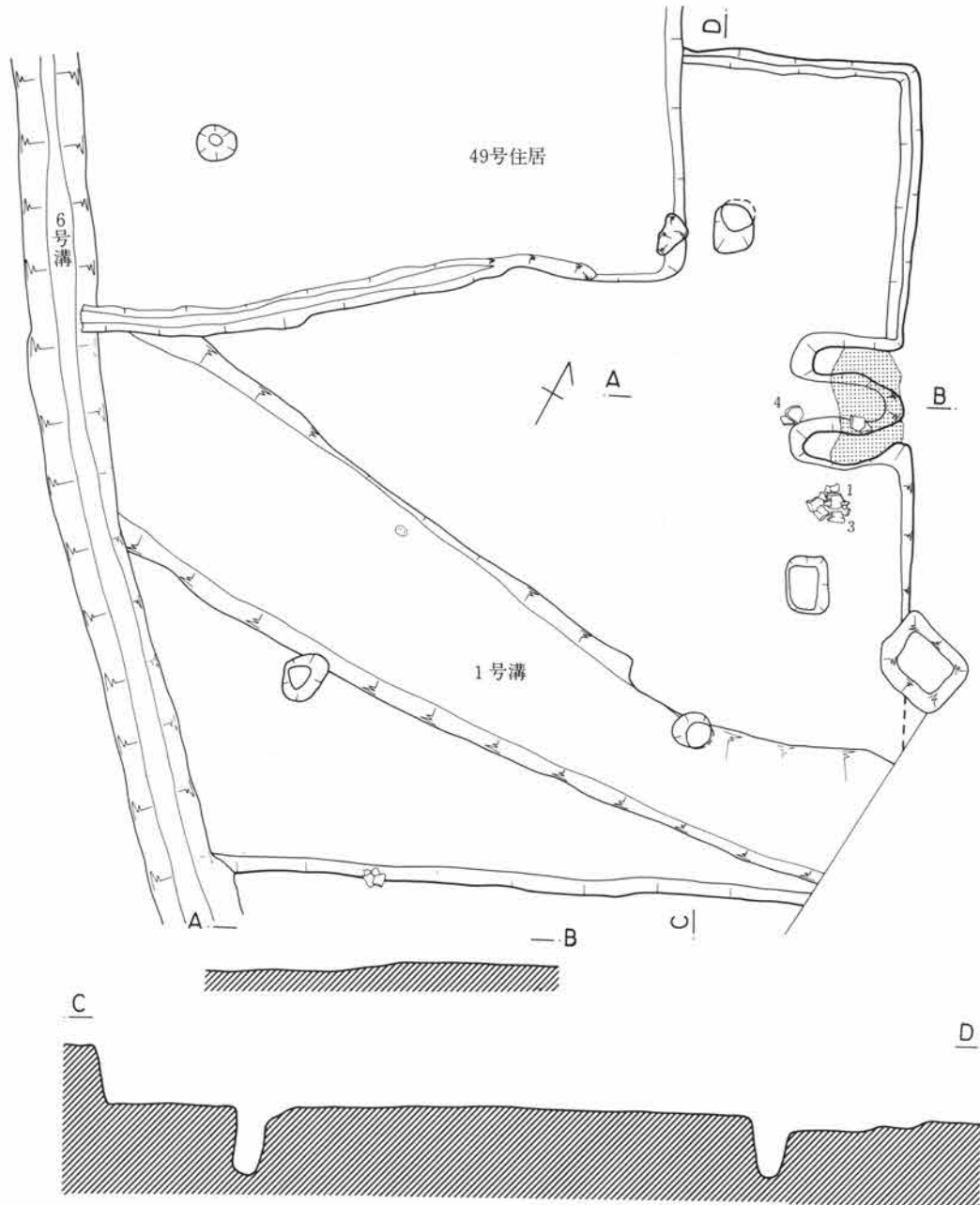
坏は体部の深さで二種、口縁の立ち上がりに三種がある。前者の深いものは8、11、12である。これらは特に口縁との境に段が顕著である。後者では、口縁が直立するもの、外傾して開くもの、素縁口辺のもの三つである。素縁口辺のものを除いて、口縁に沈線やヘラによる屈曲点を意識させる技法がみられる。

須恵器は短頸壺は扁円形の体部から直立して短かく口縁をもち、端部を外そぎする。器面はロクロ痕が明瞭である。坏は、口縁と体部の境の段がきわだつ浅い体部のものである。太田金山窯跡のもので7世紀初頭に属するものであろう。軽石についた刃物痕はかなり鋭利である。なんのためのものか意図は不明であるが、人工のものであることは明らかである。

A-50号住居

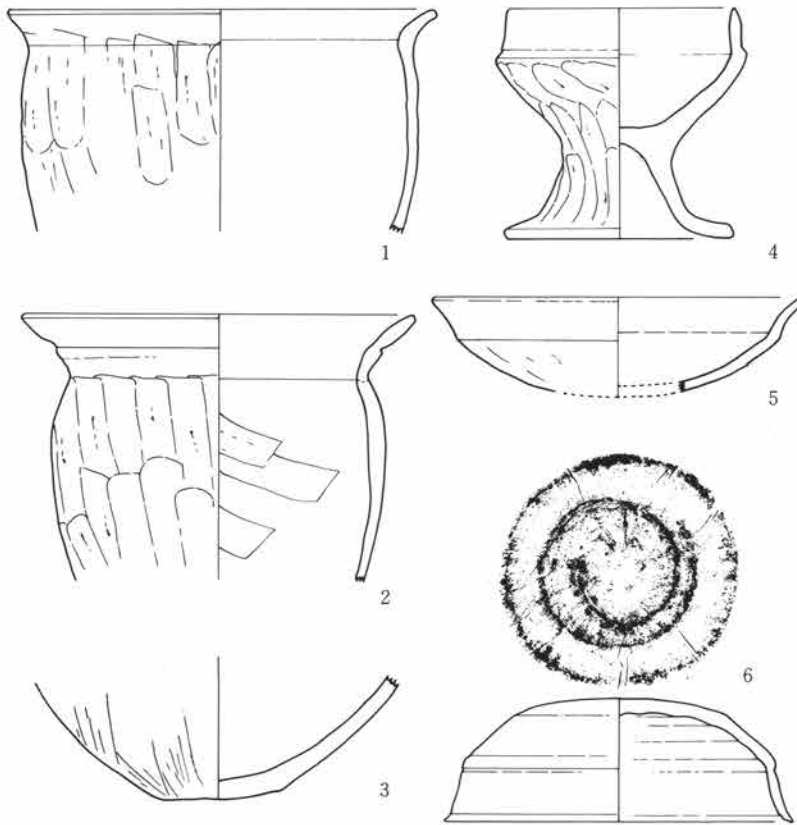
J-15区に検出された大型住居で、北西隅で重複する49号住居は50号に先行することが調査時の所見で得られた。また、西壁と平行したものと、西壁中央から南東隅に向けて近世溝が切る。規模は7.2×6.8m、深さは、ローム面から50cmある。掘りこみはシャープで、床面も固く踏みかためられ整っている。

カマドは東壁中央に付設されているが、企画段階で決められていたものらしく、ロームを削りのこしている。焚口巾40cm 奥行100cm でこれも大型である。貯蔵穴はその右脇に35×60の方形に深さ50cm であけられている。柱穴は隅で検出されているが、径30、深さ55cm ほどの大きさで、内傾気味に立つ。柱間は南北が4.4m、東西が3.5mと距離が異っている。東壁カマド左脇から北壁にかけては周溝がめぐっている。



第101図 A50号住居図





第102図 A 50号住居遺物実測図

遺物(図102-1~6)カメ、高坏、坏の土師器、須恵器蓋坏の蓋が出土している。

カメは二形態に口縁部の形態で分けられる。一つは口縁部が短かく外開きする(1)ものと長く開くもの(2)の二つで、後者は口縁部の中段に沈線を入れ、そこから屈曲度を大きくして変化をもたせている。

底部は、不安定な平底である。

高坏は深目の体部から段をもって直立する形の坏に太い脚を付した形のものである。

須恵器蓋坏は天井部が高いもので口縁と天井の境の稜線はあまりシャープではない。ロクロ回転によるケズリがみられる。口唇部は内そぎ

でやや外開きする。

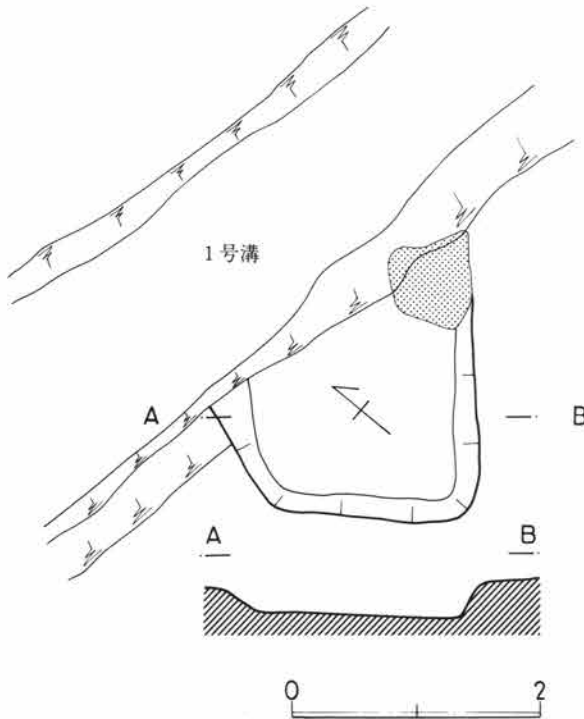
A-51号住居

K-15区に検出された超小型住居である。しかも1号溝で北壁部分を切られているために、全体をつかむことはできない。現状による西壁長で見れば東西もそうのびるとはみられない。ただ、西壁部分は南西隅から鈍角に壁がのびることもあり、変則的な形になる可能性もある。

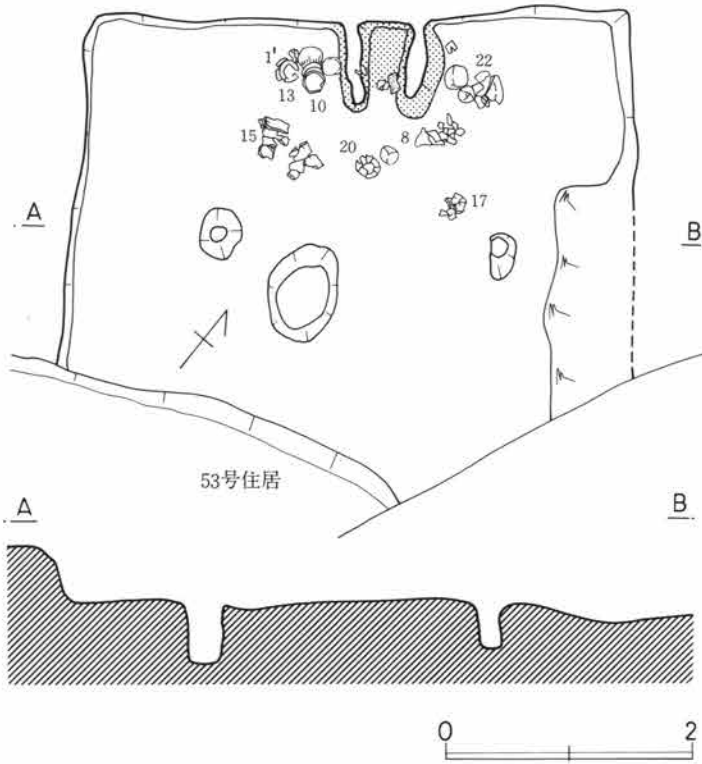
ローム面からの掘りこみは30cmほどあり、面は平らに整っている。

東壁の1号溝と接する部分には焼土の堆積がみられて、ここにカマドが付設されていた可能性があるがはっきりしない。他例からみても、東壁に設けられているものが圧倒的に多いことからしてもまちがいないと思われる。

遺物はほとんど破片もなく、特に床面に接するものは皆無であった。また重複関係もなく、この



第103図 A 51号住居図



第104図 A 52号住居図

重複は、1号溝が新しい。

A-52号住居

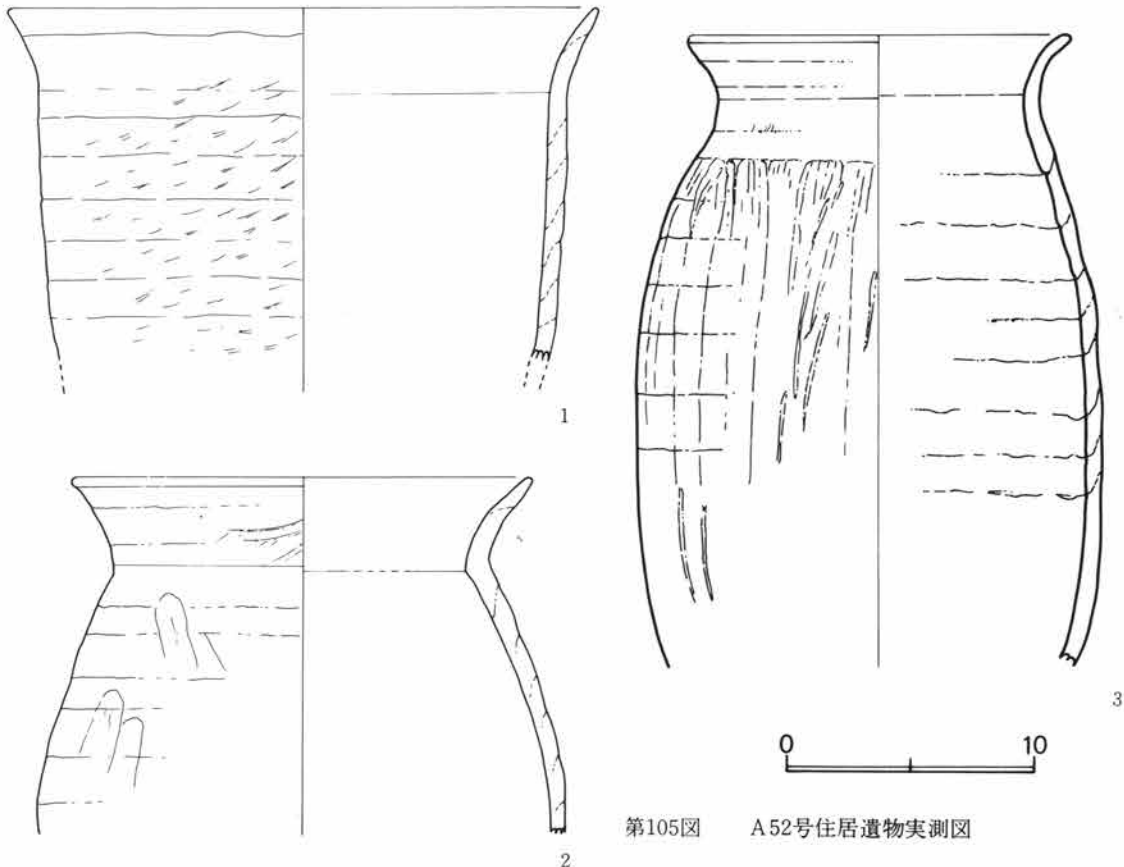
H-15区に検出された住居で、東壁の一部は原地形の傾斜によって削られている。南壁側は53号住居により切られて不明である。

完全に計測できる北壁長は4.4mで、その中央に住居の内側に張り出したカマドが設けられている。粘土を素材としたカマドは焚口巾25cm、奥行70cmの規模で煙道は壁外にのびない。

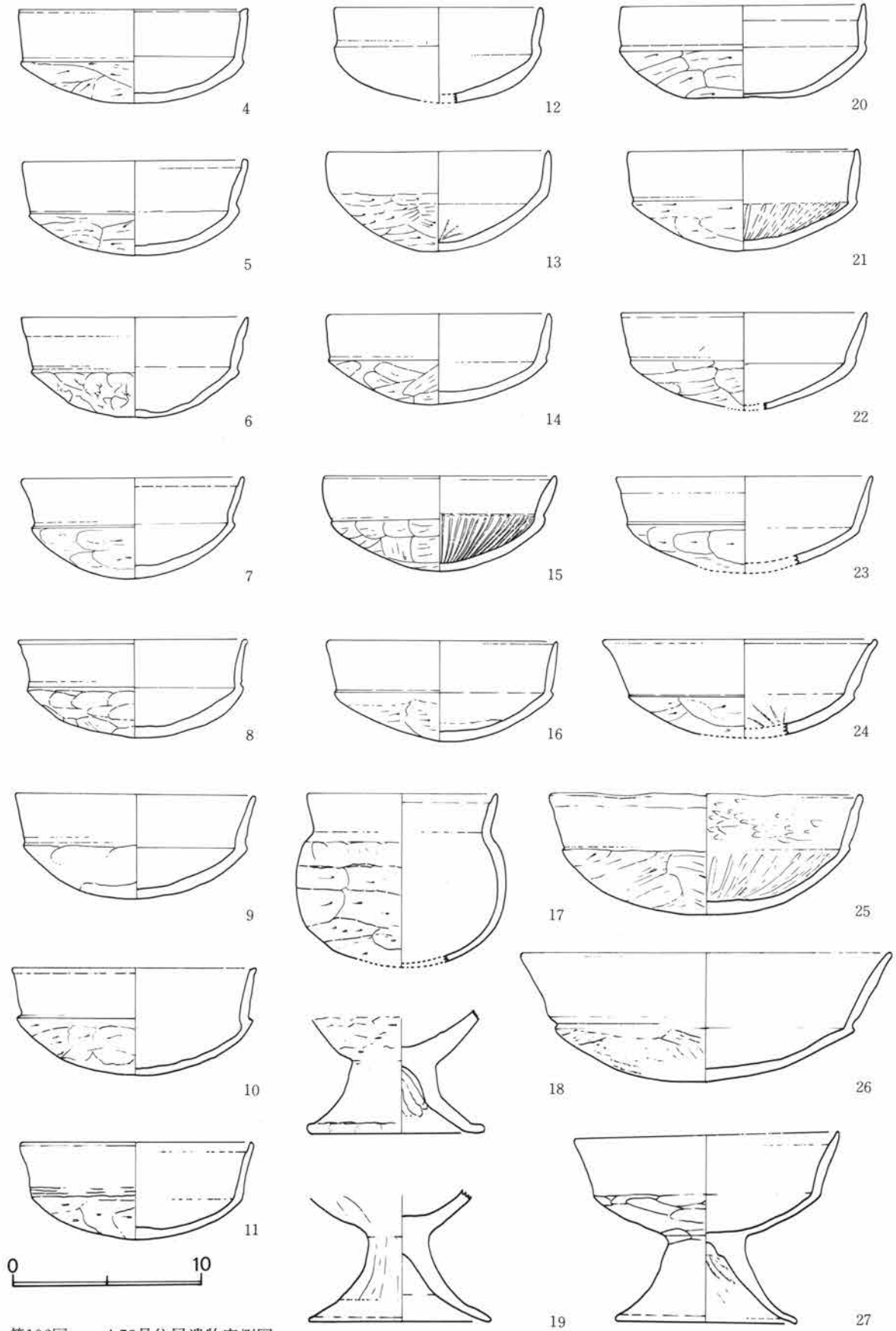
柱穴は、北側の2コが検出されており、径30cm、深さ45cmほどである。

遺物はカマド周辺に集中して出土したが、特にカマドの左右脇に土器が積みあげられた状態で出土した。とりわけ坏が、全部で20個体あることは注目に値する量である。

遺物 (図105-1~17) カメ、コシ

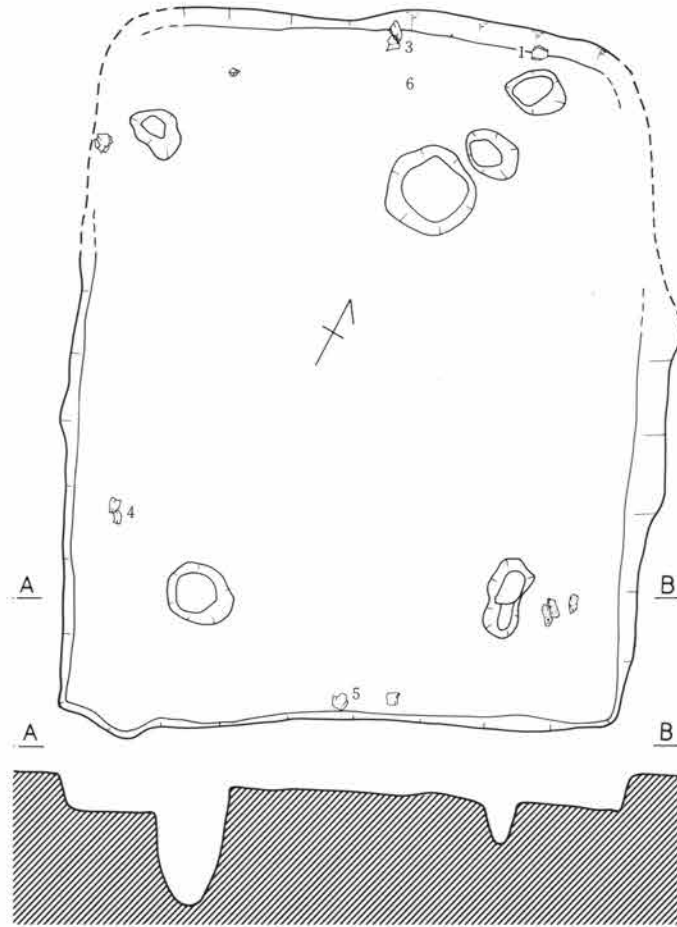


第105図 A 52号住居遺物実測図



第106図 A52号住居遺物実測図

キ、小型カメ、坏の組合せである。カメは頸部のくびれから短かく外反する口縁をもつ。胴部は輪積み痕をのこして長胴化している。最大径は胴部中央にある。コシキ（1）は最大径を口縁部にもつ長胴形である。小型カメは丸底から扁円形の体部、短かく立つ口縁をもつ。高坏は、坏部の底部は深く、口縁が稜の部分から弱く外斜して立つ。脚部は小さい接合部から「ハ」の字状に短かく立つ。坏は20コあるが、形では大型のものが2コある。口縁部の形は①の稜から直立するもの②外開きするもの③へらでおさえた段から反立するもの④外開きするものの4種がある。①が3、②が1、③が8、④が8個である。体部の深いこと、口唇部をへらでおさえる。中に放射状研磨痕を有するものなどある。



第107図 A53号住居図



A—53号住居

H—15区に検出された住居で、北東隅を52号住居、北西隅を48号住居が切っている。南北5.7×東西4.9mの規模でロームからの掘りこみは30cmである。

住居の施設としては、柱穴があるのみである。長方形住居の西壁、東壁ともやや柱穴を外側に寄せている。おそらく、南北方向に棟走向をもつ住居なのであろう。

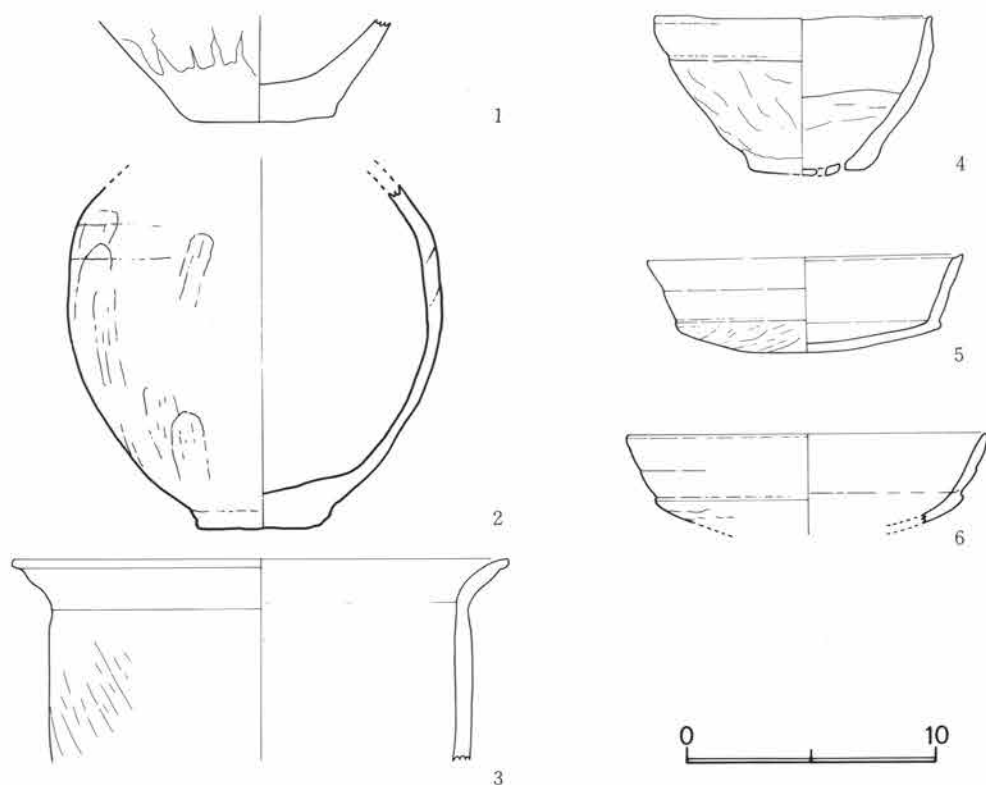
カマドはなく、おそらく炉址を伴なうものと思われるが、床面が湧水のため確認が困難であった。

遺物は、各壁下に集中して検出されたが、他に南東コーナーの柱穴周辺に河原石の集中出土がみられた。

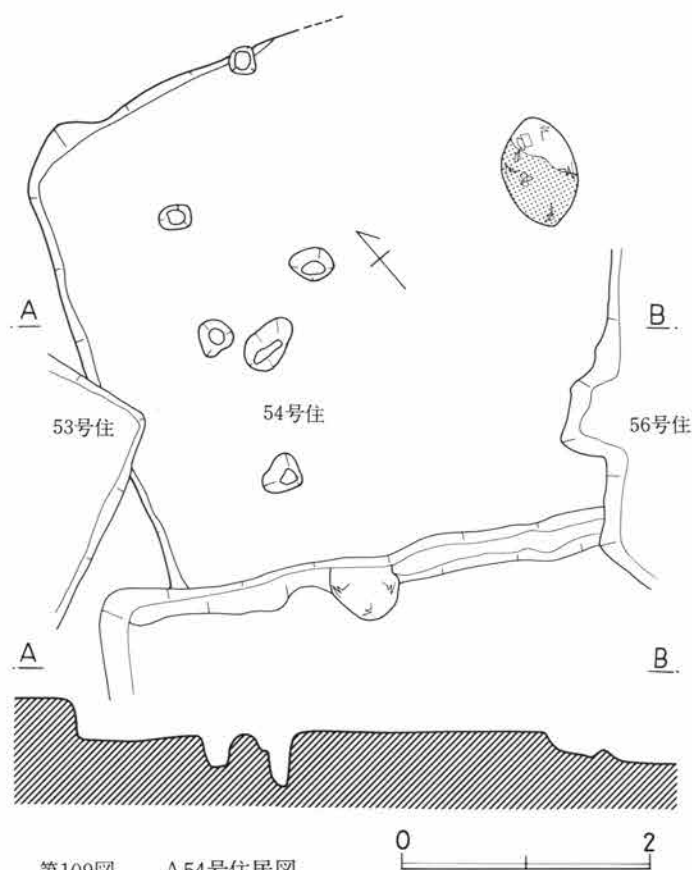
東北コーナー部の柱穴以外のピットの性格は不明である。

本住居上面にも別の住居が重複していた様相もうかがえることから、それと関連したものとも考えられる。

遺物（図108—1～6）などの遺物があった。



第108図 A53号住居遺物実測図



第109図 A54号住居図

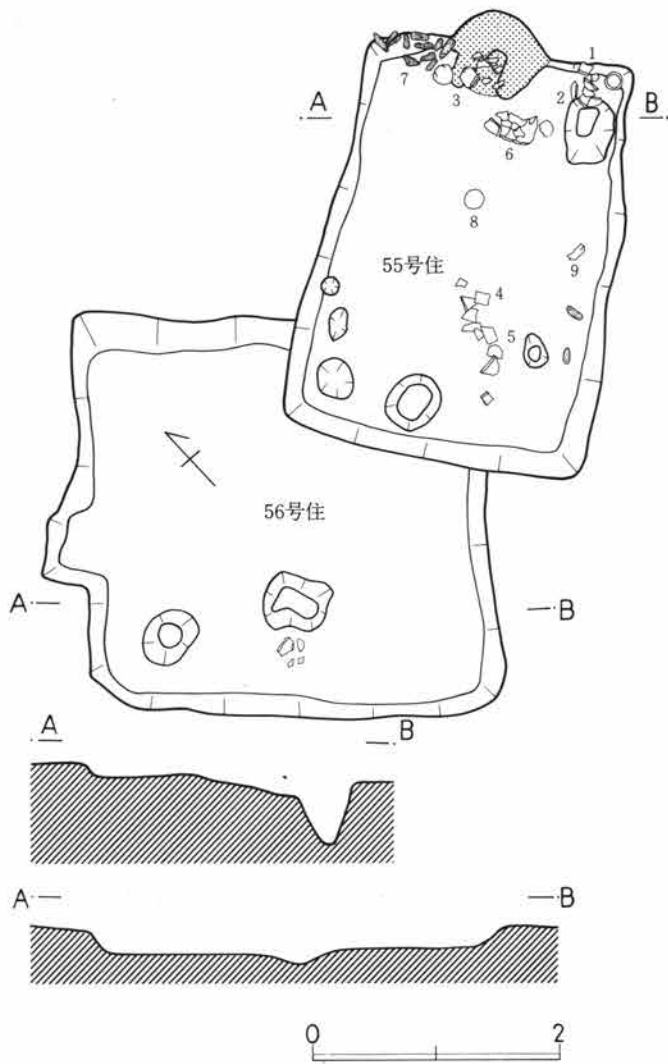
A-54号住居

G-16区に検出された住居であるが西壁部で53号、南壁部で57号、東壁部で56号、東北コーナー部で、原地形の削平などにより四周を削られて全ぼうはほとんどつかめない。

こうした状況の中で1辺の長さ4.4mほどを確認している。特に西壁と平行して3個ならぶ柱穴からみると、ほぼこの長さは住居規模を示しているものと推察される。

柱穴は全体に小型で深さも浅い。すなわち、径25cm、深さ40cmほどである。

カマドは東北部に少量認められた焼土によって北壁東寄りか、東壁北寄りに推定される。他の例からすれば、前者の例である可能性が大きい。



第110図 A55・56号住居図

A—55号、56号住居

H—17区に認められた小型の住居である。両者は56号の南東部と55号の北西部が重複しており、前後関係は、56の上面に55号がある形である。

55号住居は、東壁中央に黒粘土により築かれたカマドを壁外まで出している。カマドは、焚口巾25cm 奥行70cm で粘土のもり上りの状態もよくのこっていた。

カマド右脇即ち住居の南東コーナーには貯蔵穴が掘られていたが、その形状は不正長方形の平面で、深さ40cm である。この穴と壁の間には土器が集中して検出され、また他では、カマド前面および中、住居中央やや西寄り部に多い。

柱穴は、この住居に直接つくものは1個で他は見当らず、対になるものはない。他にカマド左の壁際に15cm ほどの河原石の集中出土があった。

西壁下中央に認められた、45×40cmの長円形ピットは、場合によると56号住居の貯蔵穴としての機能をもつものであるかもしれない。

A—56号住居

55号住居の下層に発見された方形住居跡である。ほぼ対角線に東西南北の軸線がのるので壁の向きを表現するのはむずかしい。そこで、張り出し部のつく壁を一応北壁と呼称する。規模は3.2×3.3mでほぼ方形である。カマドは重複部にあったものかどうか不明であるが、55号の西壁下のピットを56号住居の貯蔵穴とみれば、重複部分、すなわち、東壁南寄りに設置されていたことになり、他の趨勢と一致する。

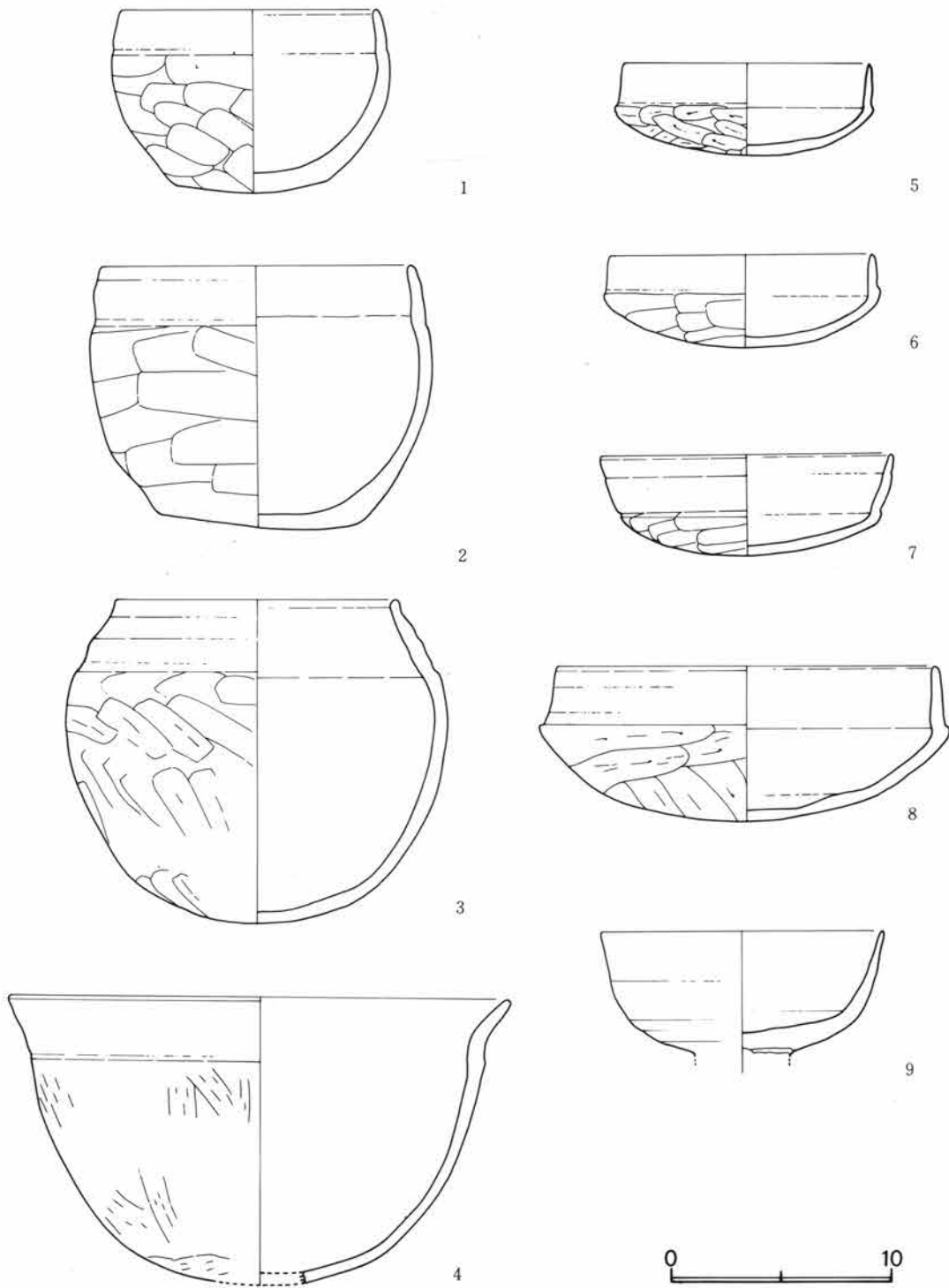
他には2コのピットを確認したが、それは径50cmほどの不正長円形をし、深さも10cmほどで、いかなる性格をもつものか、推定もできない。

なお、55号住居の東側は、流れにより削られて原地形が、東に向って下がっている。

遺物はほとんど、まとまったものはなく、西壁下中央、ピット寄りに数片が検出されたのみである。

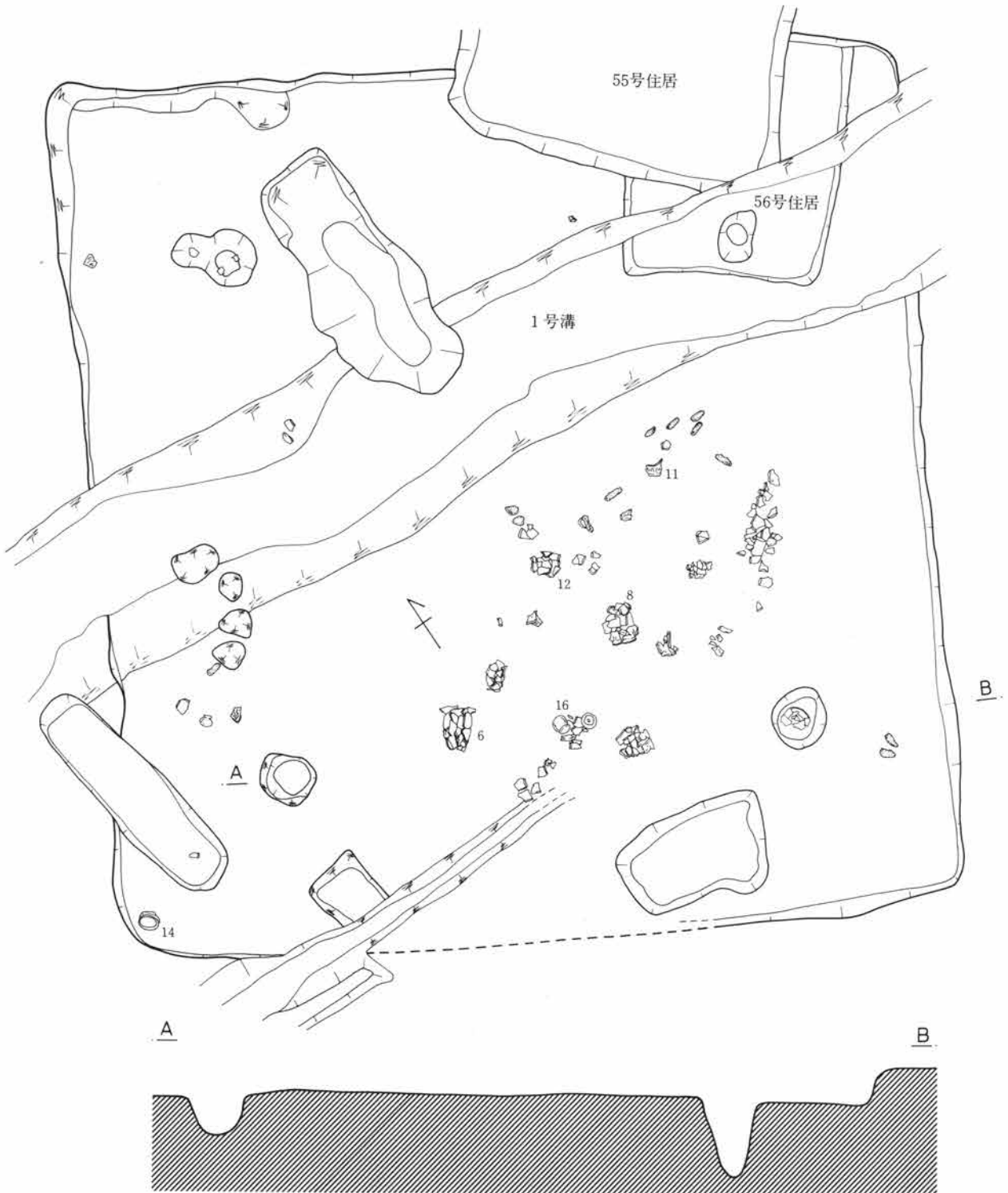
遺物 (図111—1～9) 55号住居から出土した遺物であるが小型カメ、短頸壺、鉢、坏の土師器と須恵器高坏の出土がある。特に須恵器高坏の出土は、本遺跡全体からみても少なく、注目される。

小型カメは、大小の別があるが形態はほぼ類している。大きい平底から、あまり体部にふくらみをもたず、頸部のくびれもほとんどなく、そこから短かい口縁部が内傾気味に立つ。口縁と全体の境には沈線が両者を分けるように入る。直口壺は丸底気味の体部から口縁に2段の屈折をみせて内傾気味に立つ。鉢は鉄カブト

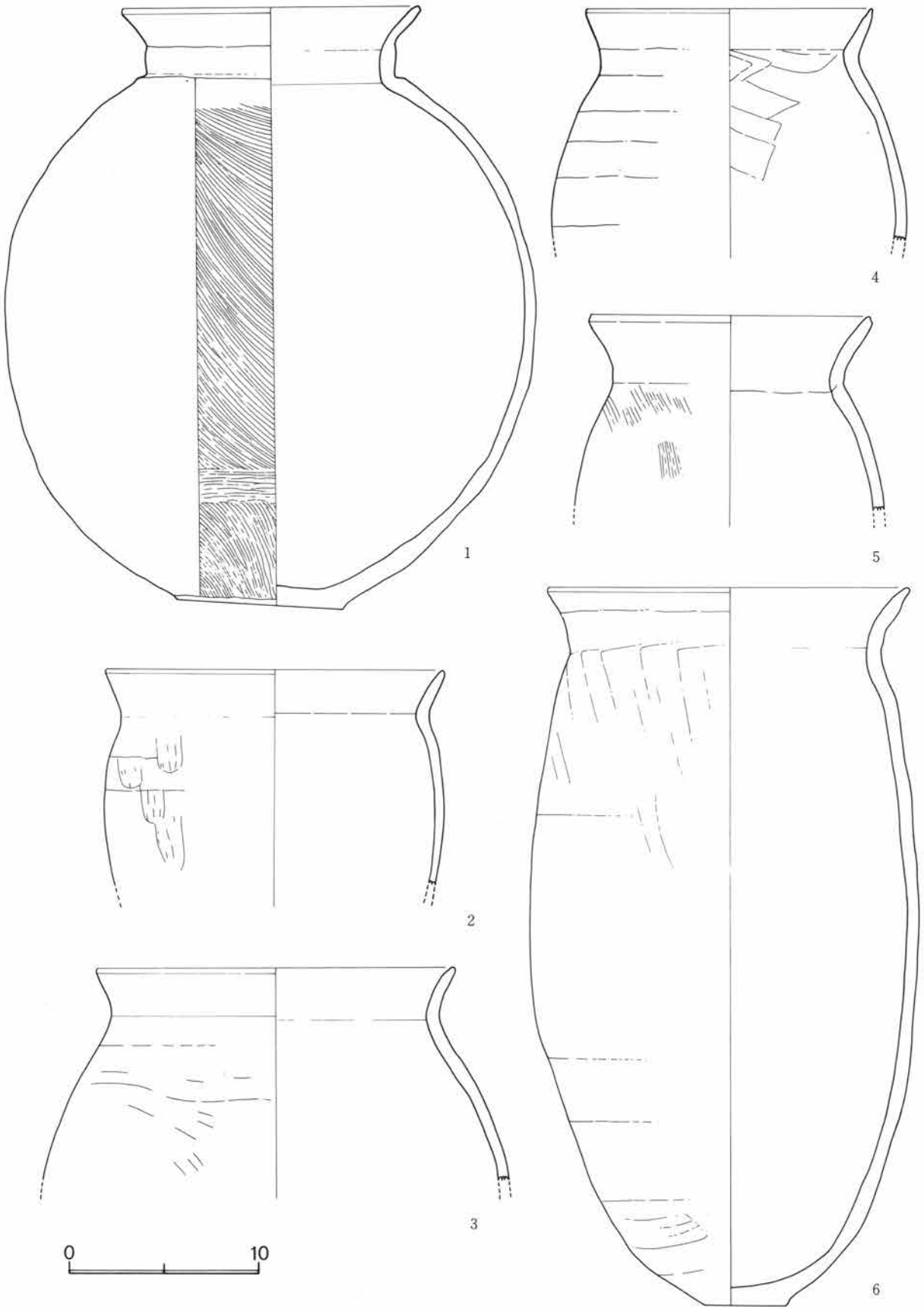


第111図 A55号住遺物実測図

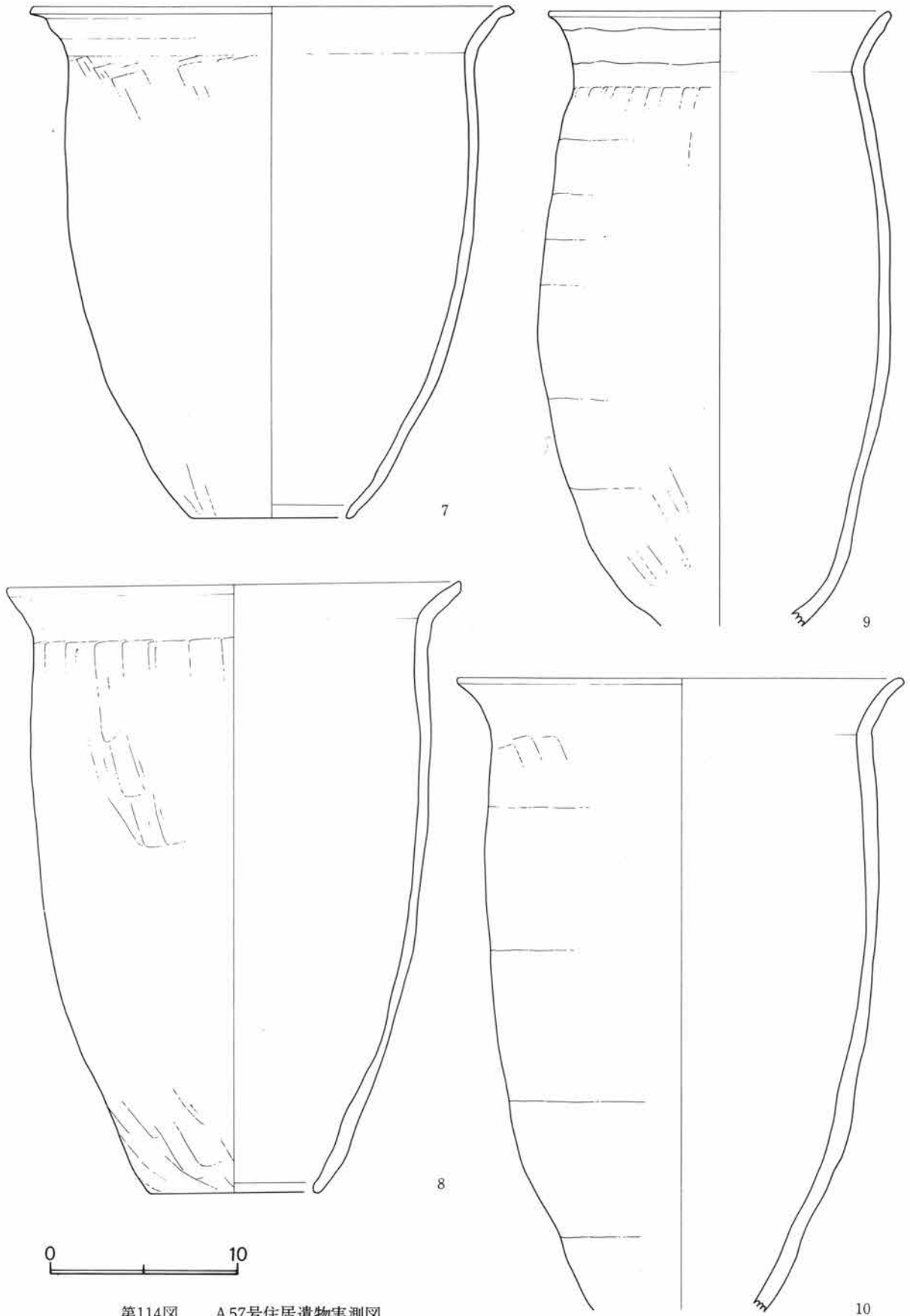
状を呈する丸底、外傾する口縁を有する形である。坏は、比較的古く、体部が明瞭な稜が段を有して直立する形で、大型のものもある。須恵器高坏は脚部を欠くが、深手の坏で底部は厚くせまい。口縁部はやや外開き気味に立つが、端部はうすい。脚はおそらく直に長く立つものとみられるが不明である。全体にケズリ技法がみられるが、つくりは良好である。



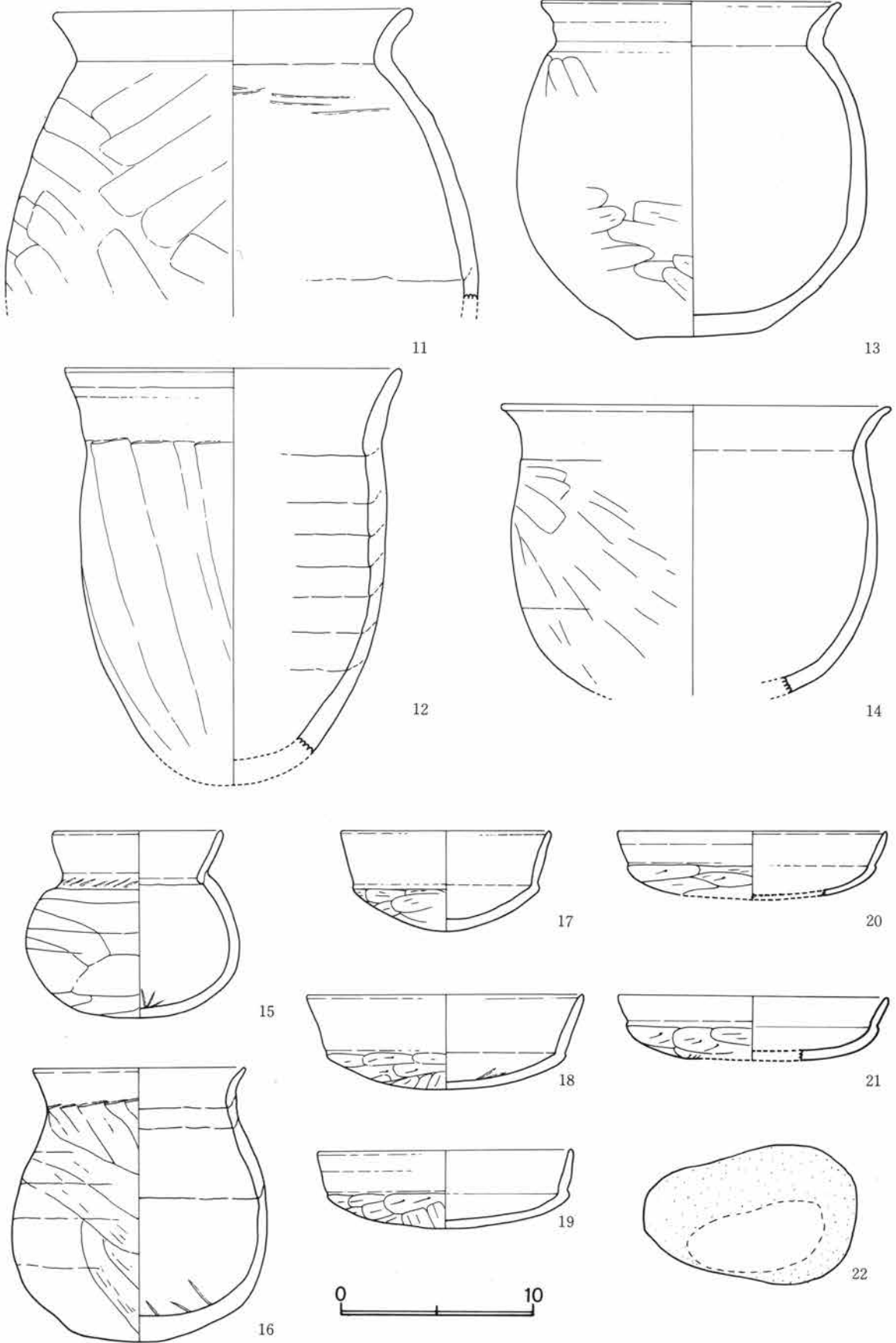
第112図 A57号住居図



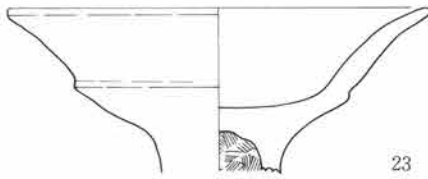
第113図 A57号住居遺物実測図



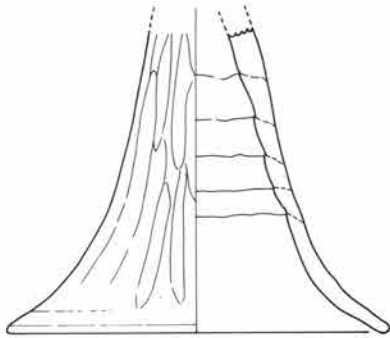
第114図 A57号住居遺物実測図



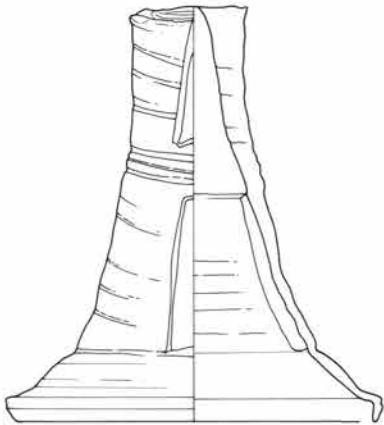
第115図 A57号住居遺物実測図



23



24



25

第116図 A57号住居遺物実測図

A—57号住居

J—17区を中心に検出された大型住居で8.8×8.4mの規模をもつ。ロームからの掘りこみは30cmほどである。他の遺構との重複関係では、北東隅から、西壁中央にかけて1号溝が切り、北壁東寄りの部分で56号住居により切られている。更に、北西部、南西部で長方形の中世土壇が掘られて様相を複雑にしている。

住居の施設としては、対角線上にのる4本の支柱穴がある。径60cm、深さ70cm内外と大きく、しかも、各柱穴とも内傾している。この傾向はおそらく大形住居の上屋架構において梁、桁をかける長さを減じ、屋根が極端に高くなることを防ぐための所作と考えられる。

カマドの位置は不明である。56号住居を掘る際に欠失されたとみられるが、焼土等の出土もなく、推察の根拠もない。ただ、他の例からみると、この部分にカマドをもつ例が東壁に多いことによる。

遺物は住居東南四半部に集中して検出されたが、南東隅の柱穴中からも出土している。

また東側の住居の柱穴間に6コの15cmほどの長さをもつ河原石の転石群が発見されている。

遺物 (図113～116—1～25) 長胴カメ、コシキ、壺、高坏、小型カメ、小壺、坏などが出土した。量的にも多く、本遺跡中の良好なセットの一つである。

カメは7コあるが長胴化傾向をみせる球形胴のものと、完全に長胴カメの範疇に入るものの二種がある。前者は4、5などにみられる強くくびれる頸部から短かく外反する口縁をもつものである。後者は6、9などにみる小さい不安定な平底に長胴の器体、弱くくびれた頸部から外斜する短かい口縁を付するもので、とも

に輪積み痕、ヘラ削り技法が特徴である。壺は球形胴から一旦直に立ち外開きする口縁部を有し、大きく安定した平底を有する体部外面には荒い櫛状工具による整形痕をのこしている。

コシキは大形の単孔のもので、7、8、10の3個体がある。カメと異なり、最大径が口縁に来る形で、11のようにやや詰まる感じのものと他の二つのように長胴化するものの二種がある。高坏はやや直線的な線で構成される坏部と丈の高い脚をもつものがある。須恵器高坏は脚のみであるが高い脚の中間に沈線を3条施し、その上に三角形、下に方形の透しを入れている。

坏は17のように体部が深く、口縁が長く直立するようなもの他、19のように体部が浅く、長く立つ口縁に沈線で段を表現するようなものの二種がある。しかし、ともに体部と口縁の境は稜線でつよく表現されて、段で区切るものとの差異をみせている。その他15のような埴に近い壺の共伴も注目される。

また、用途不明の石もでているが、小さい河原石の一面に加工を加えているが機能は不明である。

全体的には、焼成火度も高く、成整形ともていねいで、土器にまとまりがある。

A-58号住居

H-18区で検出した長方形住居である。規模は2.7×4mでローム面からの掘りこみは20cm内外である。

住居は北西から南東方向に浅い溝により切られているが、住居の全ぼうをつかむのに支障はない。

カマドは北壁東寄りに設けられている。焚口中30cm、長さ1.25mと長く燃焼部を壁内に煙道を壁外にのぼしている。カマドの右わきには小ピットや、やや床面が荒れているが、貯蔵穴とみられるものはない。

他に、住居西南部にピットが認められたが、柱穴にしては対応するものがない。

遺物は土師器の小片がわずかに出土したのみで形状を復元しうるものは一個もない。

ただ前後関係でいえば、57号と近接することから同時存在はありえない。

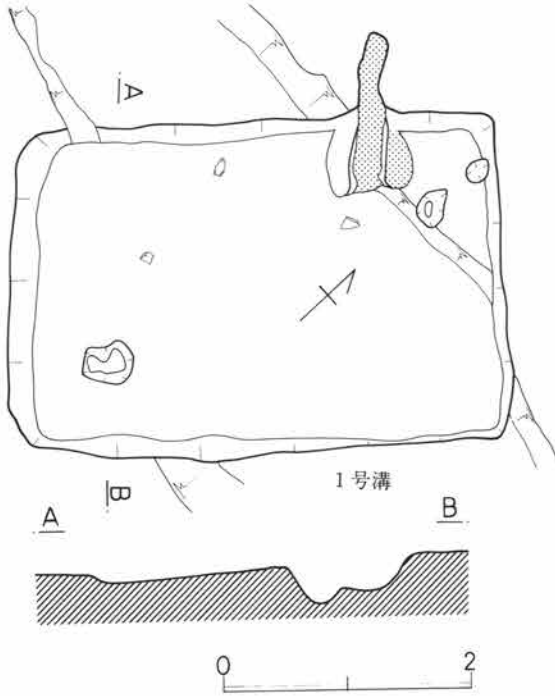
A-59号住居

G-17区に検出した住居で、発掘区の端に出土し、原地形が東におちる際に発見され、全ぼうをつかんでいない。3.2mの南壁長は確認されたが南北の長さは不明である。

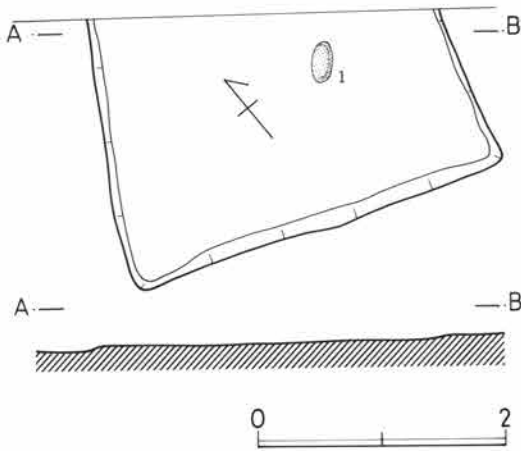
したがって床面もほとんど黒色土面上にあり、その範囲も明らかになしえなかった。住居の形状がやや変形しているのも原地形のくずれによるものである可能性もある。

カマドや柱穴、貯蔵穴などは一切検出されていないが、これらはすべて未掘部分や湧水による床面精査の困難によってひきおこされたことであった。

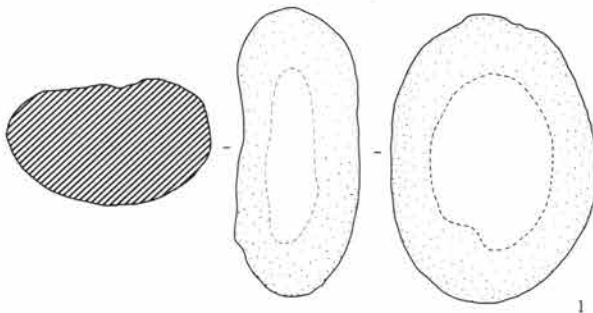
遺物は石が1コ出土したが、この石は角閃石安山岩で面がたたいたように磨耗し、多少くぼみをみせている。この種のものには他にも刃物あとのあるものなどもあり、住居の中にもちこまれてなんらかの用途に使用されたことは明らかである。



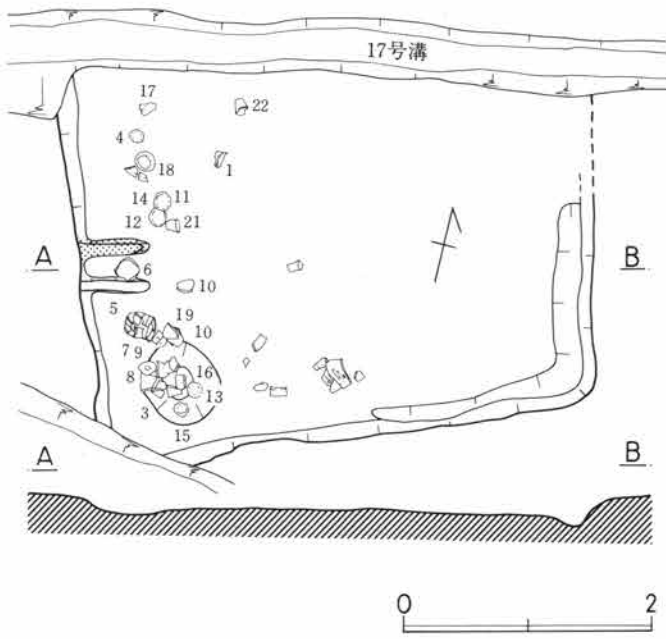
第117図 A58号住居図



第118図 A59号住居図



第119図 A59号住居遺物実測図



第120図 A60号住居図

A-60号住居

H-19区に検出された方形住居で、住居の周囲には近世の溝が浅く、深く入りこんで発見され、住居の北側1/3を削っている。しかし他は、住居内までその掘削が及んでいないため、住居の検出ができた。

規模は3.2×4.3mで、ローム面の深さは15cmほどで浅い。

カマドは西壁中央と他の例に比較すると特異で、その形状も粘土帯を壁に直交させて二本住居内にはり出させたものである。焚口巾22cm 奥行50cm と小型で、中に坏が出土した。素材は粘土カマドで、床に黒色粘土をしっかりと掘りこみ気味に固定していた。

貯蔵穴を住居南西コーナーに設置している

が、径65cm、深さ50cm で中から多量の土器が検出された。そのほか出土遺物はカマド周辺、貯蔵穴周辺に多量に認められた。住居の東南コーナーには壁下周溝がめぐっている。

遺物 (図121、122-1~22) カメ、コシキ、小型カメ、坏、手捏粗製土器が出土した。カメは球形胴の長胴化傾向がみられ、口縁はくびれた頸部から短かく外斜する。コシキはカメと異なり最大径が口縁にくる大型単孔形である。カメ、壺などの底は平底で大きく安定している形である。坏は深い体部に稜を明瞭に直立した口縁を付す。口唇部のつくりが、素縁のもの、やや外開きのもの、剣形状になるものなどがあるが、概してつくりは良い。

10のように尖底気味の深い体部から短かく口縁を外斜させて立たせる碗状のものも含まれている。その他では7、8、21、22のように粗製土器の存在が目される。鉢状のもの、カメ状のもの、コップ状のものなど多彩だが、輪積み痕をのこすこと、指頭整形、安定した平底などに特徴がうかがわれる。

A-61号住居

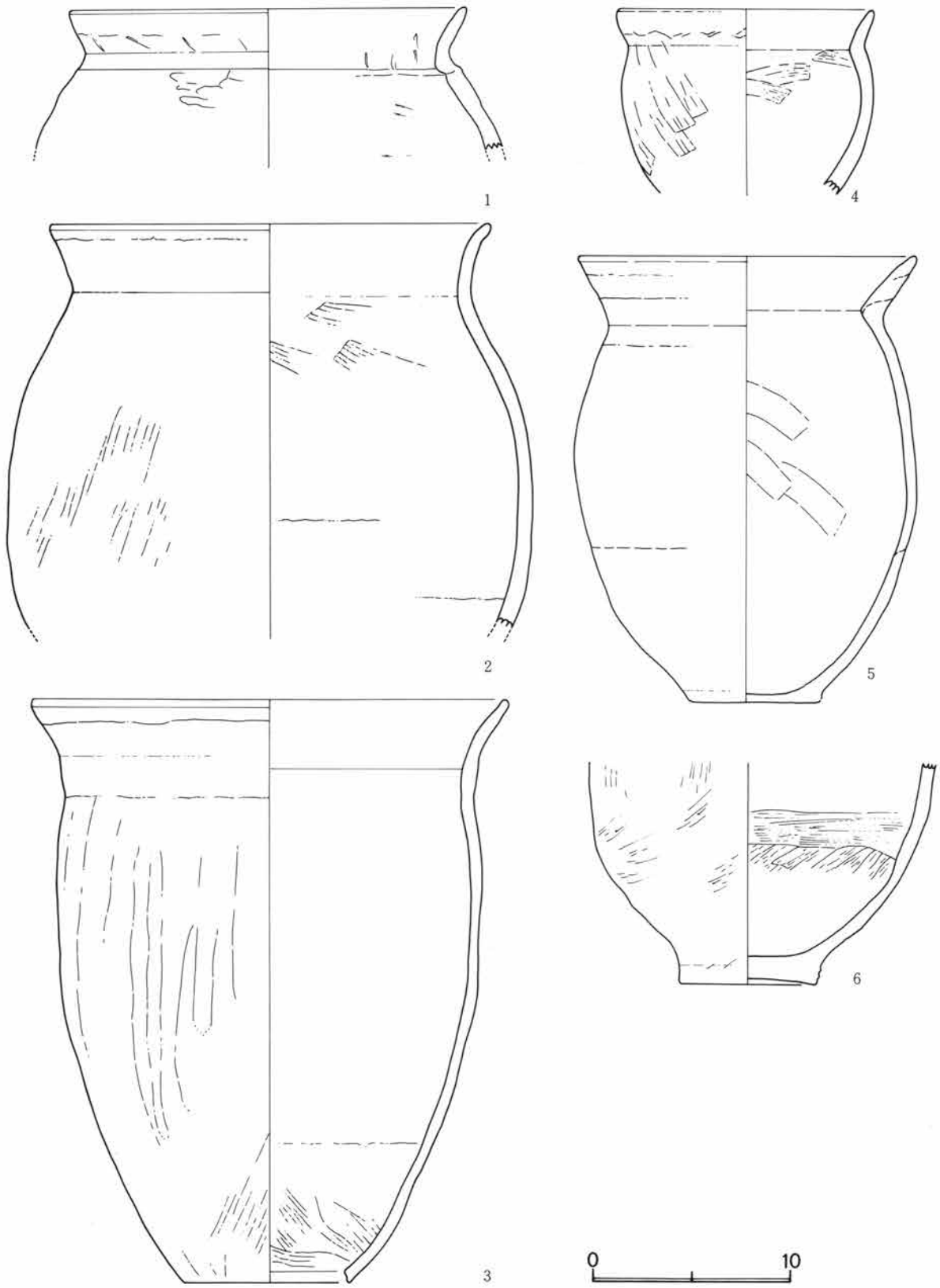
G-21区に検出された小型の隅丸方形住居である。規模は2.8×4m以上で東壁は水で削られたため消失している。ローム面の掘りこみは40cmほどで比較的深い。床面は水平でよく整っている。しかし、ローム面自体に傾斜があるため、北壁の掘りこみより、南壁の掘りこみは極端に浅くなっている。

カマドは北壁の中央よりやや東壁によって発見されたが、規模は焚口巾30cm、奥行60cm と小型で、燃焼部は壁外に張り出している。カマドの床は奥にいくに従がいやや上り勾配となっている。

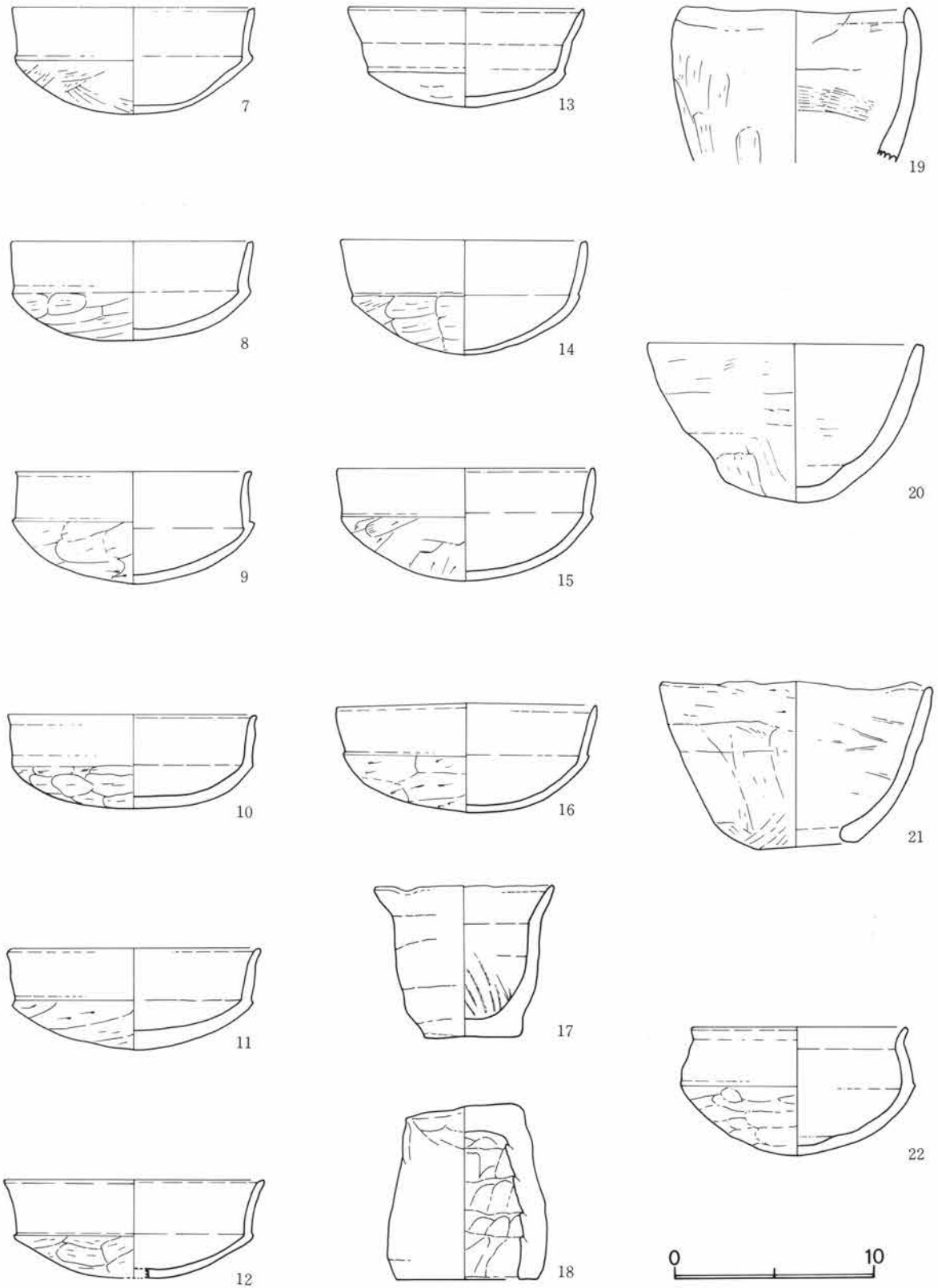
カマド左脇から西壁に至る部分には、カギ型に壁下周溝がめぐっている。巾、深さとも10cm ほどである。

遺物は北西隅にカメの破片が出土したほかはほとんど検出されず、柱穴などの施設もまったく検出されていない。

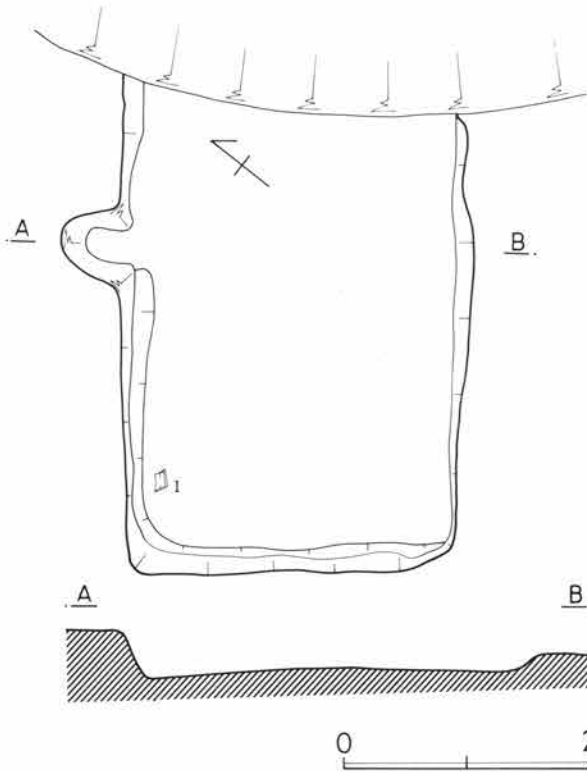
遺物 (図124-1) 遺物はカメの上半部のみである。体部は丸味をもつ形で、器表面はヘラ削り痕が顕著である。頸部は強めのくびれで、そこから外彎気味に外開きする。ナデによる段の痕跡をとどめている。



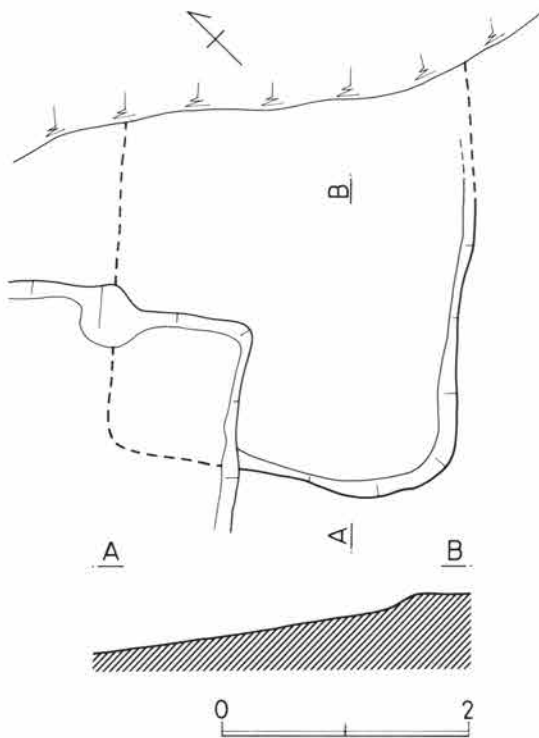
第121図 A60号住居遺物実測図



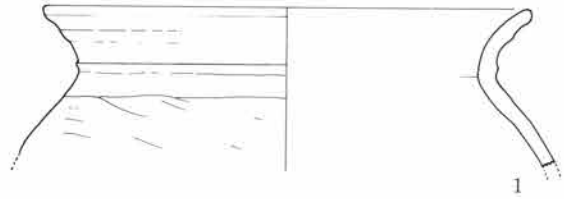
第122図 A60号住居遺物実測図



第123図 A61号住居図



第125図 A62号住居図



第124図 A61号住居遺物実測図

A-62号住居

G-18区に発見された住居である。この住居も東面する水による削り面に検出されたために住居東半は壁の確認が困難なほどである。更に、北西隅部は55号住居と重複しているため、住居の大半は判然としない。形状は隅丸方形で、推定規模は東西3.4以上×2.9mである。面的には前述の61号との類以点が多く、時期的にも共通する要素が多い。

床面は北および東へ向ってローム面が傾斜しており、その意味からは北壁、東壁は確認というより地層的な推定により導いたものである。すなわち、埋土中にかなり多量の木炭片やロームブロックまじりの黒色土が含まれた土層を確認したものである。

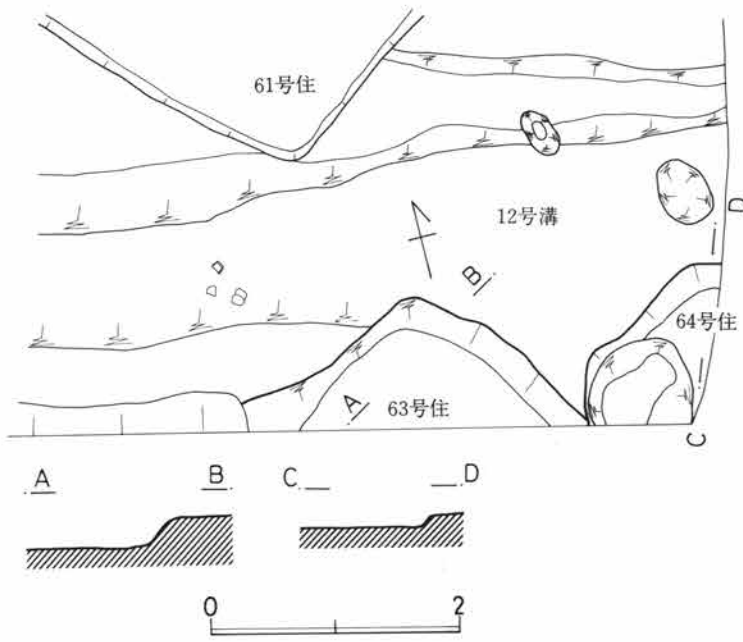
住居の施設は一切確認されていない。カマドは従来の傾向からいえば、おそらく東壁部分にあったものと考えられるが、水で流されたものであろう。柱穴がないこともこの住居の時期を推定する一つの根拠を与えてくれる。

遺物が全くないのも、床面が傾斜していることからわかるように、水によって流された結果によるものと推定される。

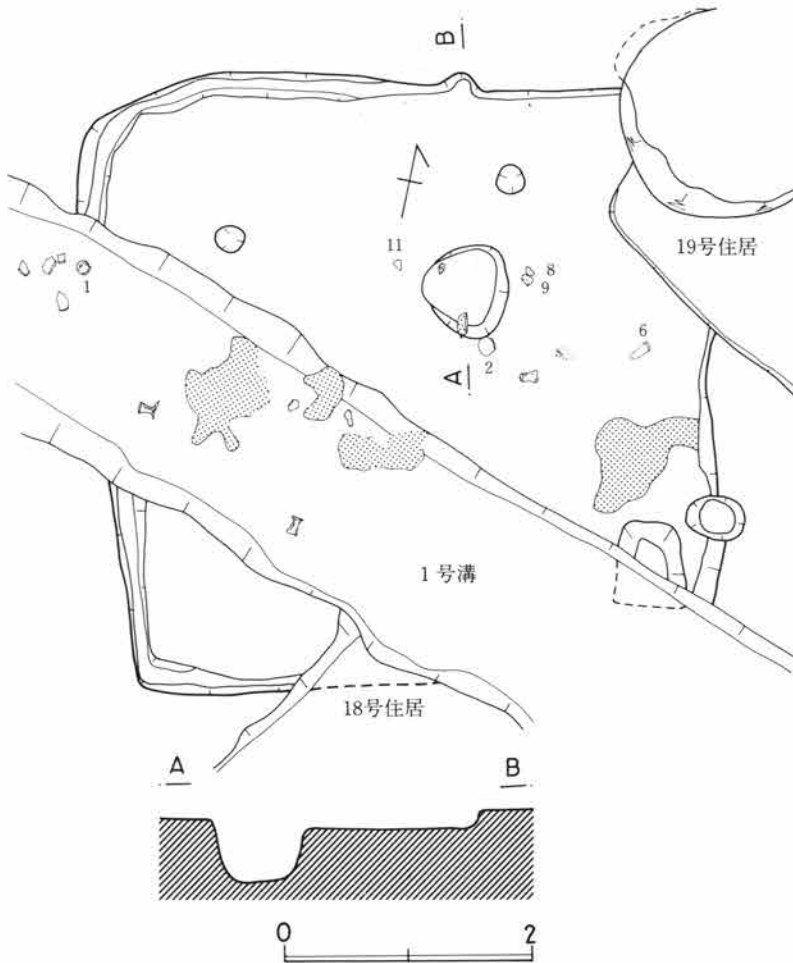
A-63号住居、64号住居

H-21区に検出された住居であるが、第一次調査と第二次調査のちょうど境目にあたるため未完掘である。

63号住居は住居の北東隅部が1m²ほど、三角形に検出されたのみである。ちょうど、このあたりから北、東方向にローム面はくんだり傾斜に削られている。ローム面からの掘りこみは20cmほどで



第126図 A63・64号住居図



第127図 A65号住居図

あるが、一応床面は整っている。

壁面はエッジがくずれている。

遺物は検出されていない。

64号住居はその東に接して検出したが、不正円形状の大きい掘りこみで、住居か否か危ぶまれる面もある。更にその内側に70cm、深さ40cmほどの円形掘りこみがあり、複雑になっている。

遺物はここでもまったく検出されず、その時期を推定する根拠を欠いている。その意味からしても、本遺構は不明な面が多い。

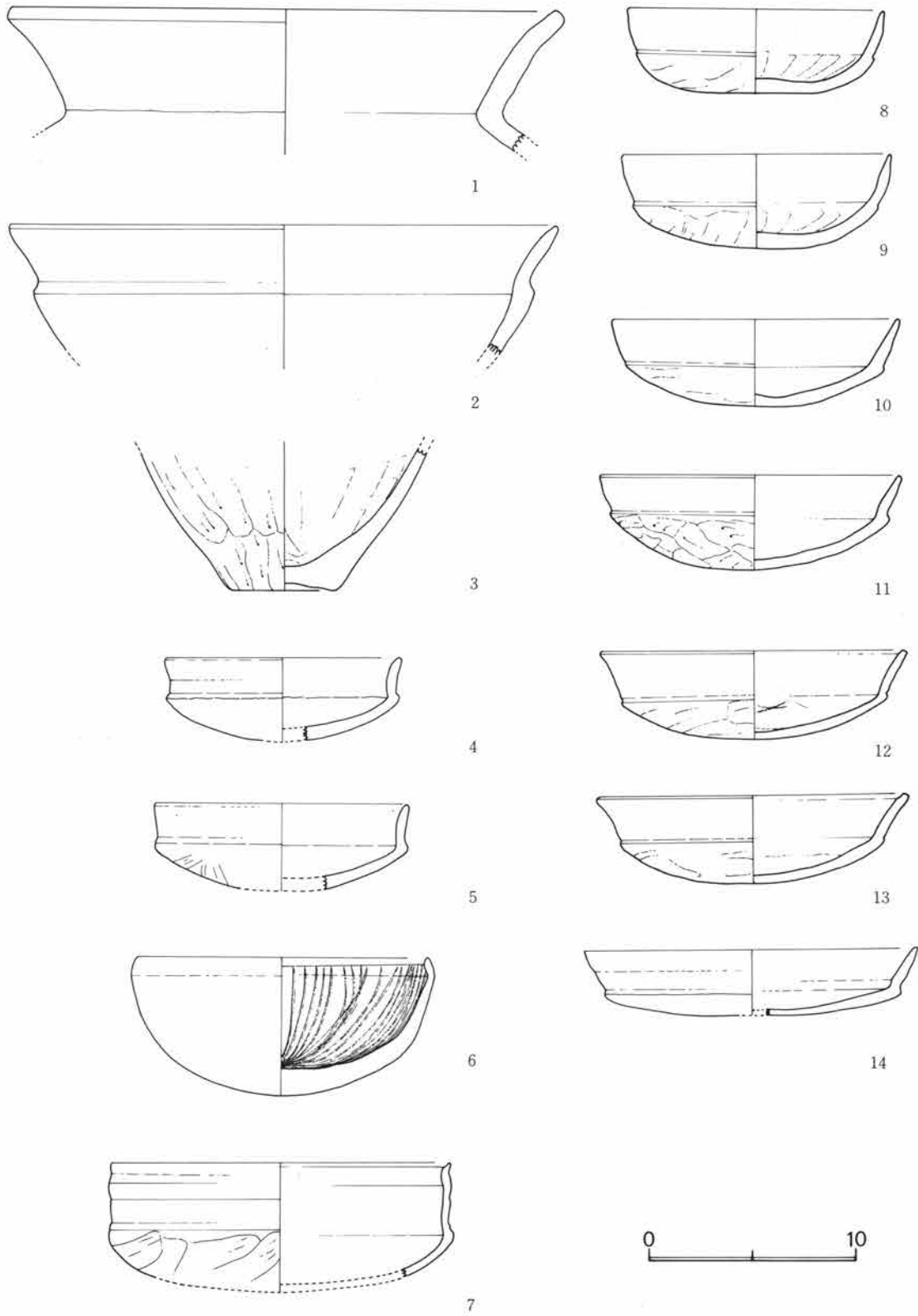
A-65号住居

M-7区に検出された方形住居である。1号溝によって西壁中央から東南隅に向けて巾1.7mで住居が分断される形になっている。

住居の規模は4.9×5mの方形で、ローム面から床面までの深さは15cmほどである。

カマドは破壊されていて現状を把握できなかったが、東壁中央からやや南に寄った部分にかなり多量の焼土があり、すぐ右脇に貯蔵穴があることなどから、カマドがここにあったことはほぼ誤りなからう。

貯蔵穴は半分が1号溝に切られているが、不正方形の深さ50cmほどの規模をもつ。柱穴は北東隅のものが確実なほか、南東隅のがやや定位置より内側に認められた。しかし、他の2本は1号溝の中に含まれて確認できていない。住居中央部の径70cm、深さ50cmほどのピットは



第128図 A65号住居遺物実測図

いかなる性格のものか、この住居に付属するものが明らかでない。

遺物はほとんど住居北東部に集中している。他に住居の北壁中央から南で壁下周溝がめぐっている。全体的にみて、かなり整った感じのする住居で、床面も固く踏み固められている。

遺物 (図128-1~14) カメ、鉢、坏の組合せで量的には坏が主体を占める。

カメは、大型で口縁部のみであるが、体部は球形胴に近いものとみられる。頸部のくびれも大きく、外斜して開く口縁部は端部をヘラで抑えている。

鉢はこれも口縁部のみであるが、体部はかなり肩から直線的に尻がこける形とみられる。頸部はかなり強い段で区別されてそこから口縁が外開きする。

長胴カメもあったことは3で確認されるが、底部は大きく、安定している。

坏は11個も検出されているが、形態的には3種がある。(6)の碗状のものは、体部が深く肩の張りが大きい。底部から口縁部に向けて放射状の暗文(研磨痕)をのこしている。口縁部は、内斜する短かいもので、全体につくりがよい。体部から段を境に口縁が直立するのは3個体である。この種のもの全般に体部が深い。また、(7)のように口縁に沈線による段を意識させるようなものもある。主流をしめる口縁が外斜して開くものは、開く角度の大きいものほど体部が浅く、底部のケズリが顕著でつくりがやや雑である。この手のものにも口縁に段を意識したもの(14)が含まれる。

これに対し、外開きの小さい直立気味のもの(8)は概して体部が深く、口縁の立ち上りも大きい。更に口唇端部のつくりも、剣先状に尖がり、シャープなつくりである。

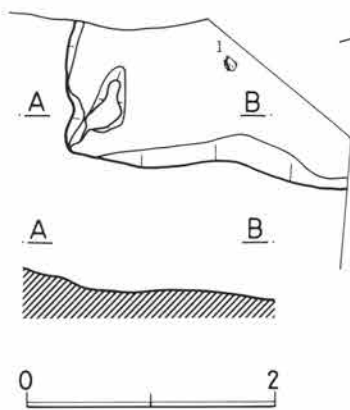
形態的にはこうした差異はみられるが、これらは、住居中央部のピット中から共伴しており、この住居の時間的位置づけを明確にしてくれる好資料である。

全体的には、本遺構出土の遺物は各器種にわたってヘラ削り技法をとり入れてはいるものの、整形はいいねいで、よく整っている。また、胎土中の夾雑物も少なく、器面のキメをこまかく見せている。焼成火度も高いとみえ、堅緻である。

A-66号住居

M-12区で検出された住居で、住居の東南隅の2m²分ほどを確認したにとどまる。従って方形であるとみられること、ロームからの掘りこみは5cm程であることを除きほとんど不明である。床面もかなり荒れており、検出状況は良くない。

遺物も、床面に密着するものは1個で他は床面近くで確認されたものである。



第129図 A66号住居図

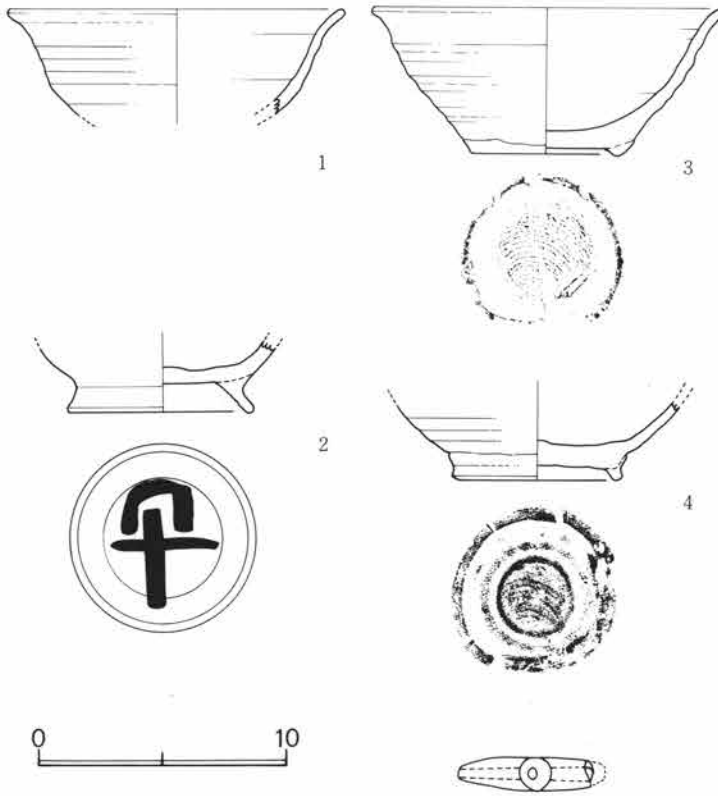
遺物 (図130-1~5) 高台付碗と土錘の出土がみられた。

高台碗は4個体出土しているが、様相は必ずしも一様でなくバラエティーに富んでいるといえよう。

高台部のつくりでみると、貼付け高台であることは共通であるが、3にみるように、粘土紐をはりつけたもので、底部は右回転糸切り底の周縁に高台が低くつくものがある。

また、2の高台のように、底部に比較的高く、大きく「ハ」の字状に開く高台を付するもの、3のように両者の中間に位置するものなどである。

そして、体部のつくりをみると、前者が、下半の張りがなくほとんど直線的に外斜して開く口縁をもつものに対し、後者は全体的に器体部



第130図 A66号住居遺物実測図

の丸味がうかがわれる。

また2の高台碗底部には、墨書が認められるが「𠂔」である。異体字としても、いかなる文字であるか、判読できない。

土錘は一般的なもので素焼きである。この一群の土器は、高台の筒略化の状態からみてかなり新しい要素がうかがえるものである。墨書土器の出土と合せて、本遺跡中では注目すべきものであろう。

A-67号住居

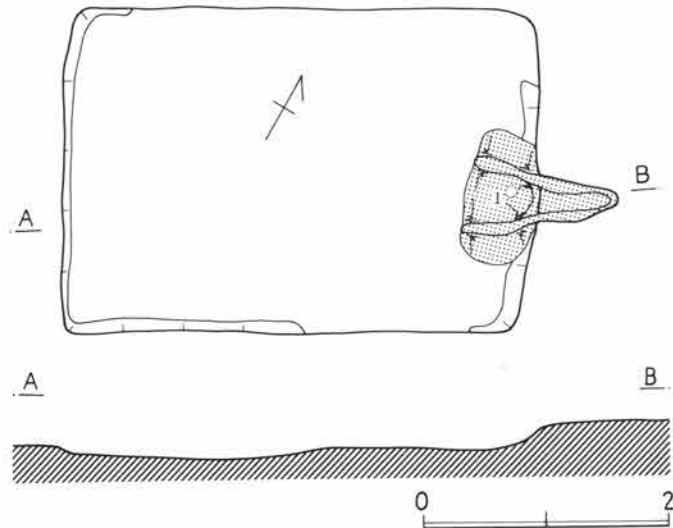
M-13区に発見された長方形住居である。2.6×3.8mの規模でローム面の掘りこみは10cmほどである。カマドは東壁の中央に粘土で燃烧部を壁内に煙道を壁外に出して付設されていた。焚口中40cm、奥行1.2mで、カマド内には土製支脚が据えられていた。

他に住居の施設らしいものはなく、住居床面は整っていた。柱穴はまったく検出されていない。

遺物 (図132-1~5) カメ、長胴カメ、コシキ、坏、土製支脚が出土している。カメは球形胴から頸部のくびれ、そこから短かく外斜して口縁をもつ。肩部上段まで強い横ナデ痕をとどめる。長胴カメ、コシキは同形で、最大巾が口縁部に来るやや詰まり気味の砲弾型で底部は小さい。

坏は小型で、体部は浅く、口縁は内傾して短かく立つ。境目は明瞭な稜線で画されている。

土製支脚は小型の長カメ状で、倒立させると長胴カメと類似している。口縁部



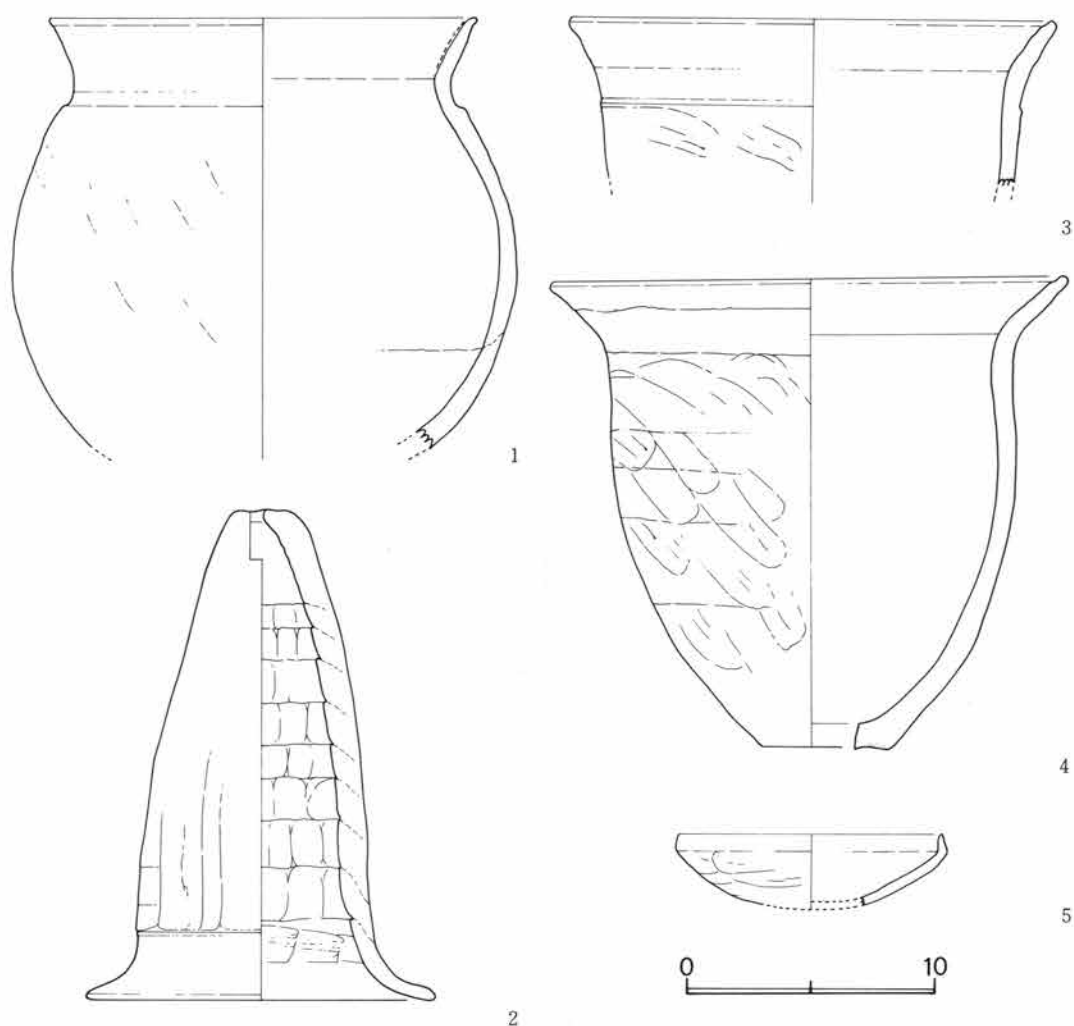
第131図 A67号住居図

はカメより大きく水平気味に開いている。内面には輪積み痕が荒くのこり、指頭でおさえたあとがある。

A-68号住居、69号住居

N-13区に発見された住居である。この周辺は荒れていて遺構は形状もごく一部の壁が検出された程度で、所々に不正形の掘りこみが入り、床が荒れている。

68号住居は、69号住居の上層につくられており、カマドの焼土とみられるものが点在している。この周辺



第132図 A67号住居遺物実測図

にカマドがあったものと推定される。住居の規模や方向についてもほとんどわからない。

69号住居は、住居の一辺のみは検出されたが、他は調査区外におよぶため未完掘である。68号により切られていることもあり、床面もピット、溝状のものがところどころにうがたれて全ぼうは知るべくもない。

北壁ぎわに径1m、深さ20cmほどのピットがあり、その周辺から遺物が出土したが、床面に接した状態ではない。

このピットは貯蔵穴様のもので、これが貯蔵穴とすれば、切れている北壁部分にカマドがあった可能性がある。

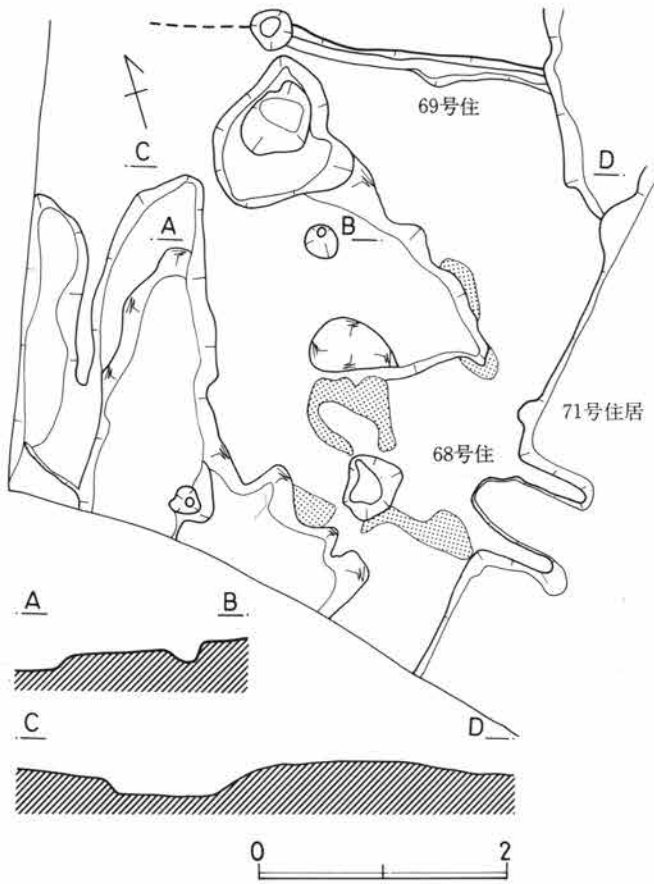
68号住居の遺物は、溝状部分の縁にかかって須恵器蓋が出土したが、形状はカエリのつく蓋で天井部は比較的高い。ツマミは宝珠状を呈している。

遺物 (図134-1~2) 69号住居の遺物は、小型長胴カメ、カメである。前者は口縁部に最大径があり砲弾型である。後者は扁円形の球形胴から短かく外斜気味に立つ口縁をもつ。

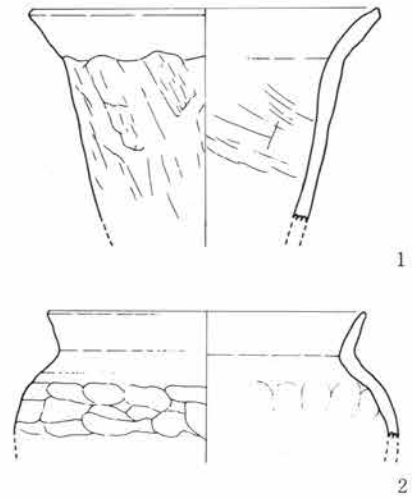
両方ともケズリ痕が明らかで、焼成火度も低い。

A-70号住居

N-14区に検出された長方形住居である。4.8×3.2mで、71号住居の上層に重複する。カマドは東壁中央



第133図 A68・69号住居図



第134図 A69号住居遺物実測図

に粘土を素材としてつくられているが、壁外に造り出されている。焚口中45cm、奥行70cmである。

柱穴などは見当たらないが、部分的に掘りこまれているものもある。住居範囲は不明瞭な面が多く、推定線については、遺物の出土範囲で想定した。

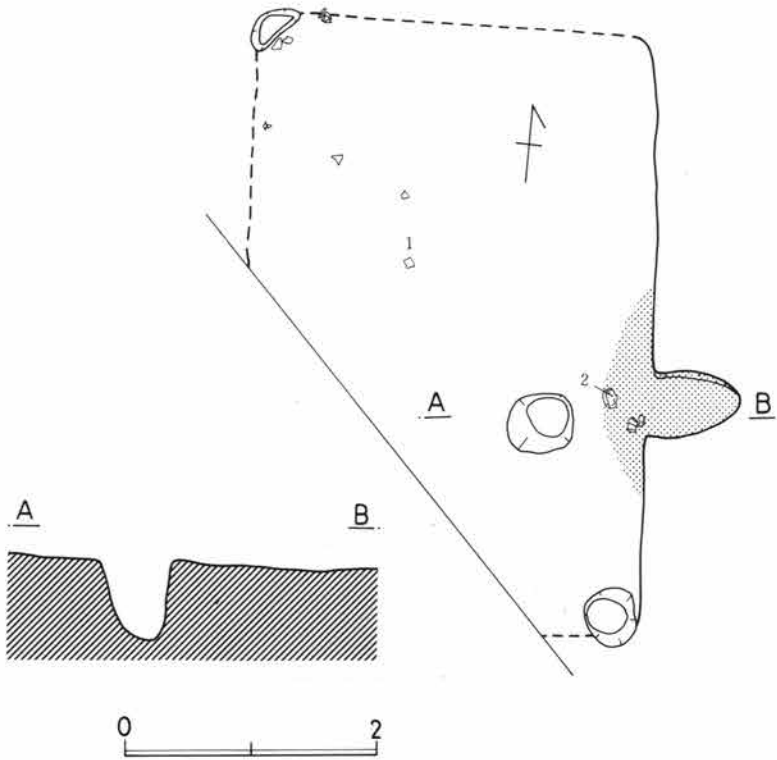
その遺物は、カマド中、住居西北隅部に集中的に検出された。特に、坏類の出土がめだつ。

ただ、この住居の上層に更に新しい住居があった可能性もあるが確認できなかった。

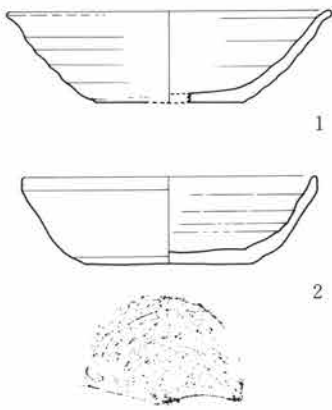
遺物(図136-1~2)坏類が出土している他に、カメの小破片がある。カメは、最大径が口縁端部にくる長胴カメと思われる。

坏は形態的には単一で、比較的深い体部から①直立するもの②内傾するものの二種がある。

前者は口縁と体部の境の稜線は明瞭である。



第135図 A70号住居図



第136図 A70号住居遺物実測図

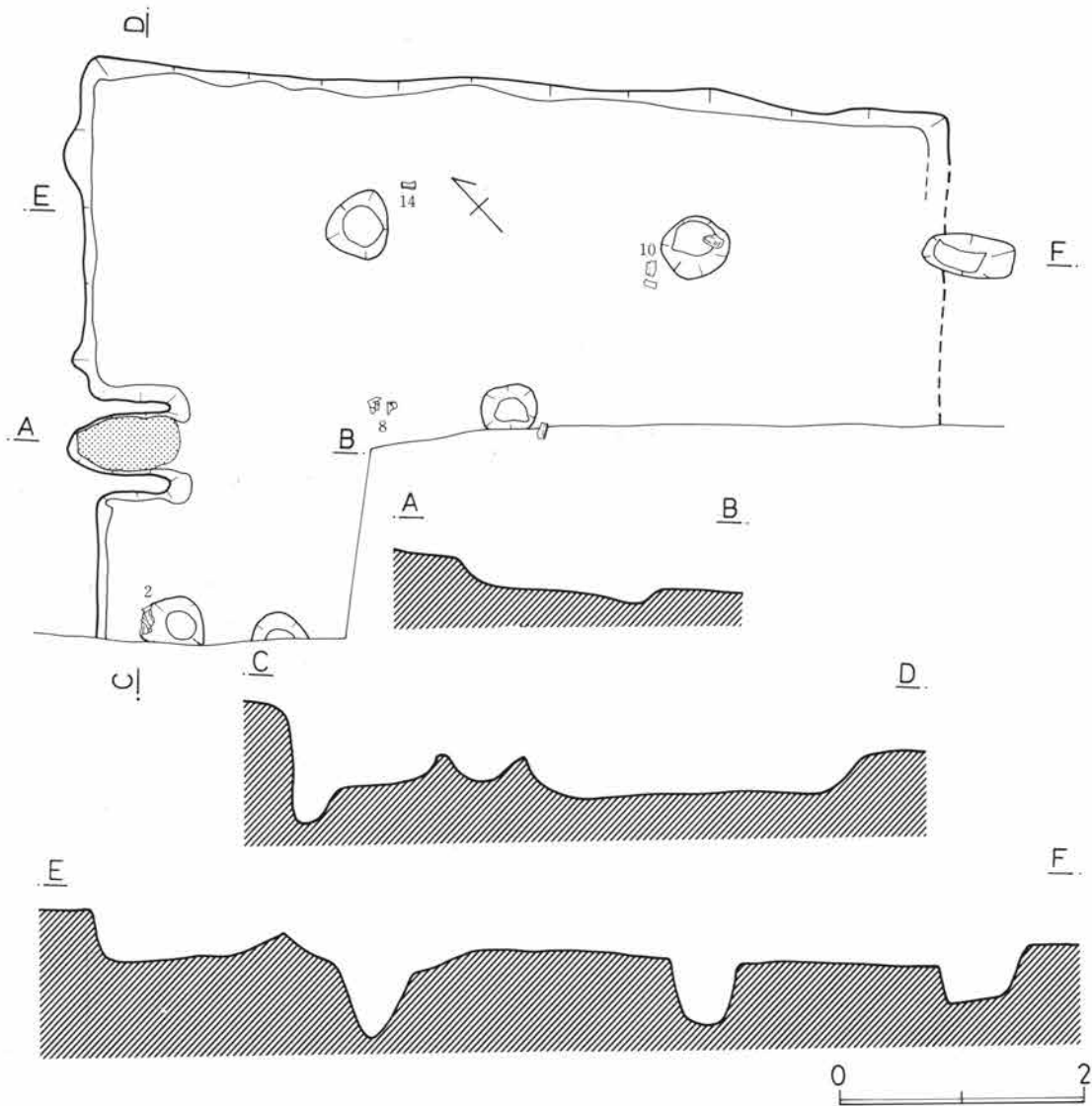
後者は比較的大型で、稜線が弱いのが特徴である。共に底部は手持ち不定方向のヘラ削り技法がみられる。

1、2は前述の重複していた上層住居から出土した可能性のある須恵器である。底部糸切りで体部にロクロ痕、2は口唇部に外そぎ技法がみられる。底径と口径の比率で見るとまだかなり底径が大きい。

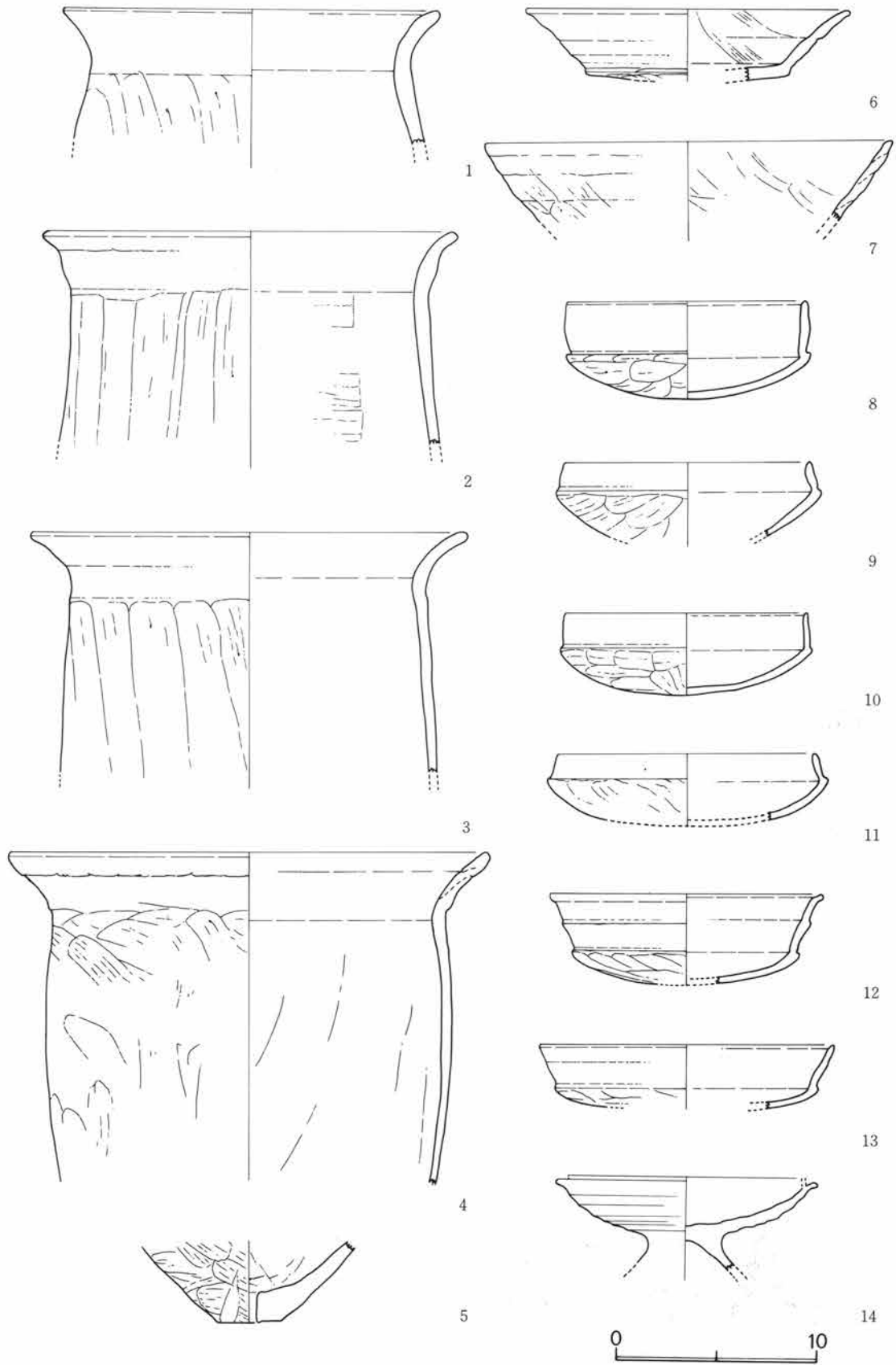
A-71号住居

N-14区に発見された大型の方形住居で、1辺7mほどの規模とみられるが未完掘である。カマドは北壁中央にあり、ロームを削り残して袖とした形で、焚口巾43cm、奥行1mで、先端部は僅かに壁外までのびる。貯蔵穴はカマド左袖部に径50cmほどの規模をもち、その縁にカメがかって出土した。

柱穴はほぼカマドを中心にして各コーナーに4個、中央に1個の5個



第137図 A71号住居図



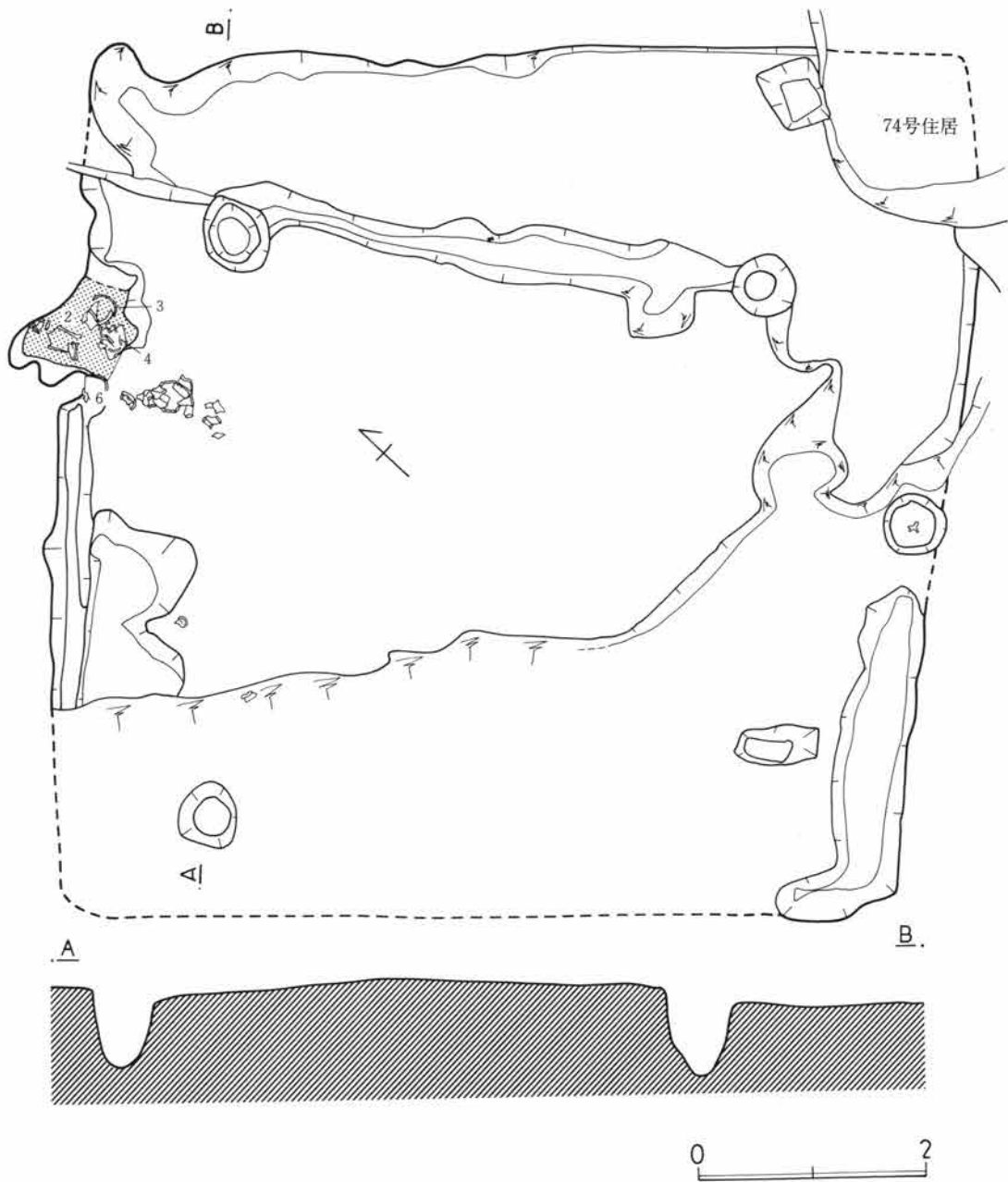
第138図 A71号住居遺物実測図

がある。大型さからくる中央補助柱穴の存在が考えられる。

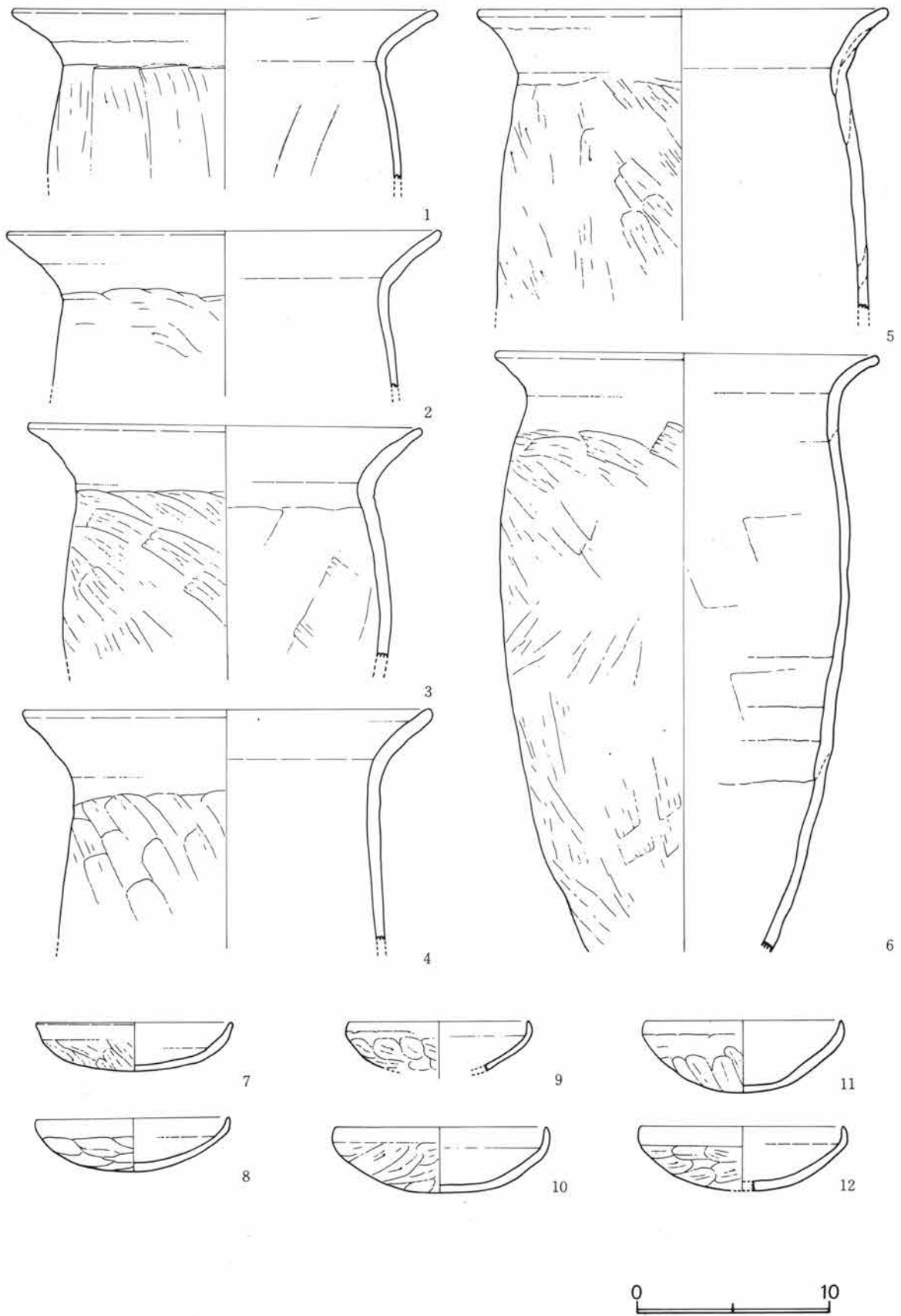
遺物は、カマド前面、南東隅柱穴付近に集中して検出された。

遺物(図138-1~14) 長胴カメ、コシキ、鉢、坏、須恵器高坏の組合せである。カメはすべて上半部のみ
の出土であるが、口縁部に最大径があること、たて方向の削りが共通的である。頸部のくびれはほとんどみ
られない。

コシキは長胴カメ型のものともみられるが、底部に単孔が小さくあく形である(5)。鉢(7)は素縁口辺
のものであるが下半を欠く。高坏(6)か否か不明であるが、体部、口縁部の傾向からみると高坏の可能性
がある。坏は、浅い体部から口縁部との境に段を有し、①直立、②外傾、③内傾の3種がある。①、②は口
縁部が長く、特に③は1~2本の沈線で変化を意識させている。③は短かく、蓋付坏の身を意識した形であ
る。つくりはよい。



第139図 A72号住居図



第140図 A72号住居遺物実測図

第II章 遺構と遺物

須恵器高坏は、極端に強調された段をもつ形で、底部は肩部がややこけている形である。脚は、小さい接合部から直線的に開く形である。裾部は欠けている。

A-72号住居

M-14区に検出した住居である。重複が複雑である。規模は6.8×7.5mで北壁中央に焚口に長胴カメを芯にした粘土カマドを付設する。焚口巾80cm、奥行は切断され不明である。カマドの両袖に長カメを倒立して立て、更にそれに長カメを2コつづけ横架した構造とみられる。煙道は壁外にかなり長くのびたものとみられるが溝で削られている。

壁下には各辺とも周溝をめぐらしていたとみられる他、支柱穴の外側は一旦床面下のロームを掘り下げ、その上に貼り床をしている。

支柱穴は対応関係はあまりよくないが4本認められ、更に南壁中央部の線上に1穴認められた。この壁上の柱穴は棟を支えたものとみられ、その意味からすると、棟走向は南北方向で、このカマドの位置と深いつながりがあるものと考えられる。

遺物の出土は、カマド架構用のカメをはじめとして、カマド前面、住居西北部などに集中的に検出されている。

遺物 (図140-1~12) 長胴カメ、坏のセットである。長胴カメは、カマド構築用の6とカマド前面の2を比べると前者が頸部のくびれがややあるのに対し、後者は全くない。架構用のカメは、カマド前面のものにくらべれば、形態的に微妙な変化をさぐるのに役立つ。

坏は6個体認められるが、形、大きさとも二種ある。11、12の大型のものに対し、小型のものが多い。

口縁部の形では稜線から直に短かく立つものと内傾するものの二種がある。

全体的にケズリ技法の盛行、坏の小型化などが特徴的な面で、カマド構築用の長カメと日常用器に差がある。

A-73号住居

72号住居にやや先行する時期のものですぐ東に接して検出され、L-15区に属している。規模は6.8×6.4mで、ローム面からの掘りこみは30cmほどである。住居の西壁部、東南隅部は他の住居により切られている。

カマドは北壁中央からやや東よりに発見された粘土カマドである。焚口巾は45cm、奥行は1.2mで大型である。壁に対して粘土を直に住居内にはり出させ、煙道はわずかに壁外までのびる。

貯蔵穴はカマド左袖部に発見されたが、径60cm、深さ50cmほどの規模である。四隅の柱穴は認められないが、壁上に2ヶある。

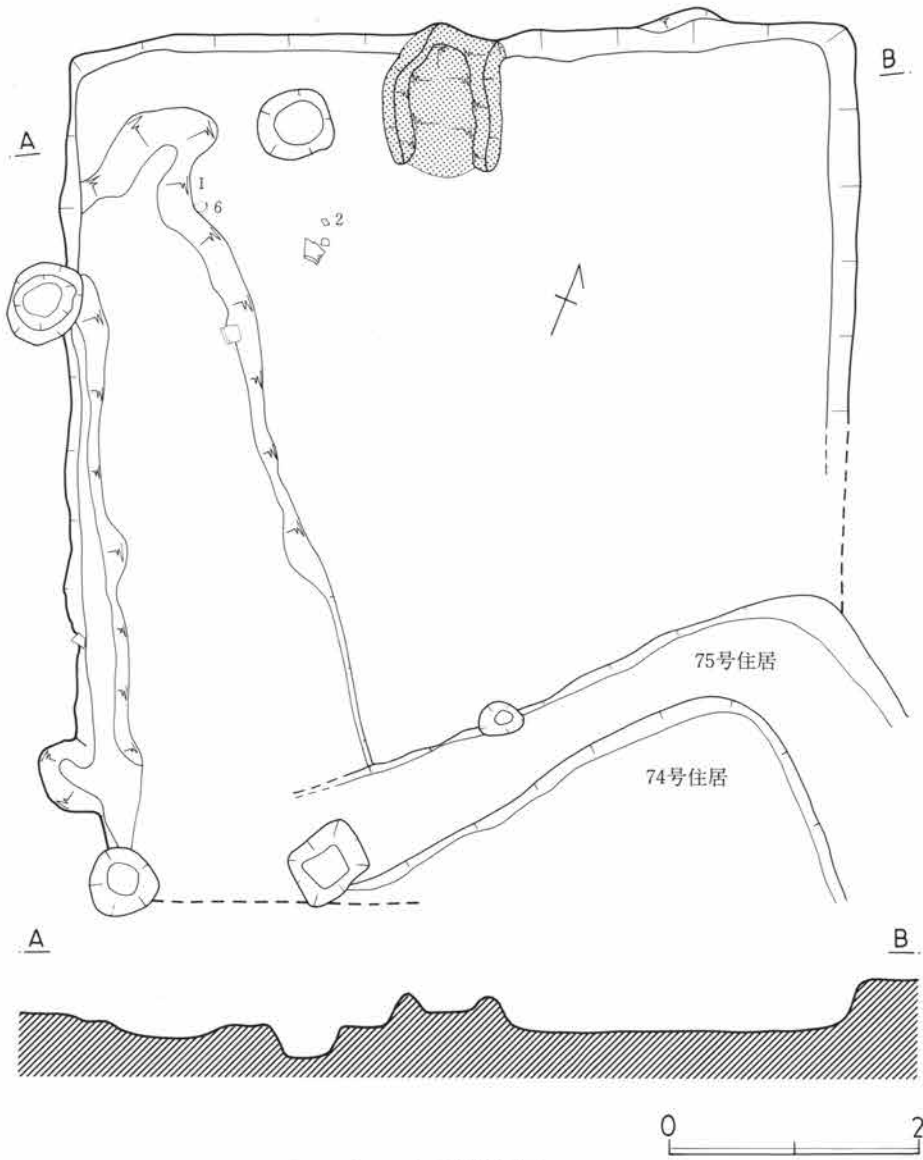
西壁の大部分の壁下周溝が検出されたが巾30cm深さ10cmである。遺物は、貯蔵穴周辺にわずかに認められた。

遺物 (図142-1~6) 坏が発見されているが、この坏には、浅い体部から口縁部が短かく直立するものと、内傾するものの二種がある。この二種は、口縁と体部の境の稜線があまり明瞭ではない。

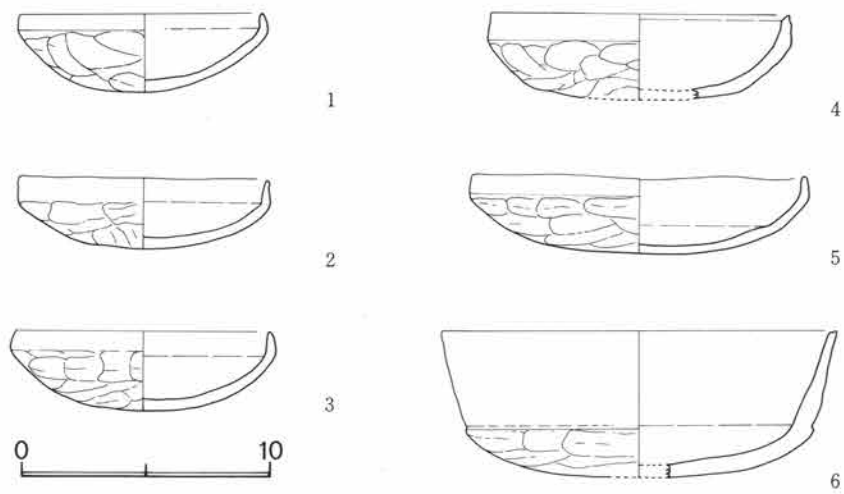
6の坏は、やや古式をみせる土器で、体部は浅く、大きく口縁部が立つ。境には弱い段がのこっている。口縁は外開き気味に立ち上がるが、焼成、胎土などで、他の坏と異なっている。

A-74号住居、75号住居

L-16区に検出した住居で74号住居は75号住居の中にスッポリ収まる形である。前後関係でいえば74号が75号に先行するものとして調査時の所見が得られた。従って、75号の中にスッポリ収まる状況で74号住居が発見されたものとしてとらえた。



第141図 A73号住居図

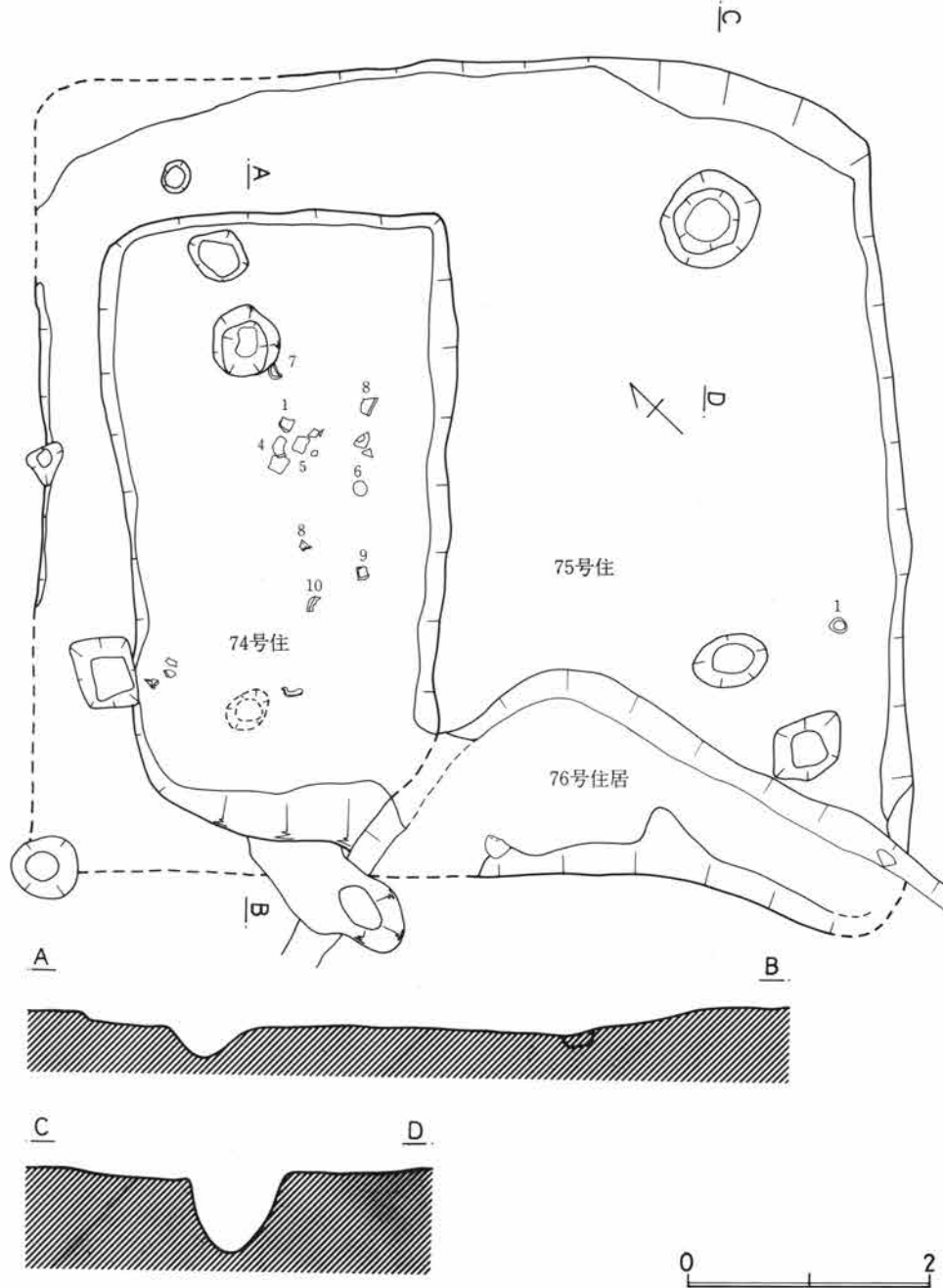


第142図 A73号住居遺物実測図

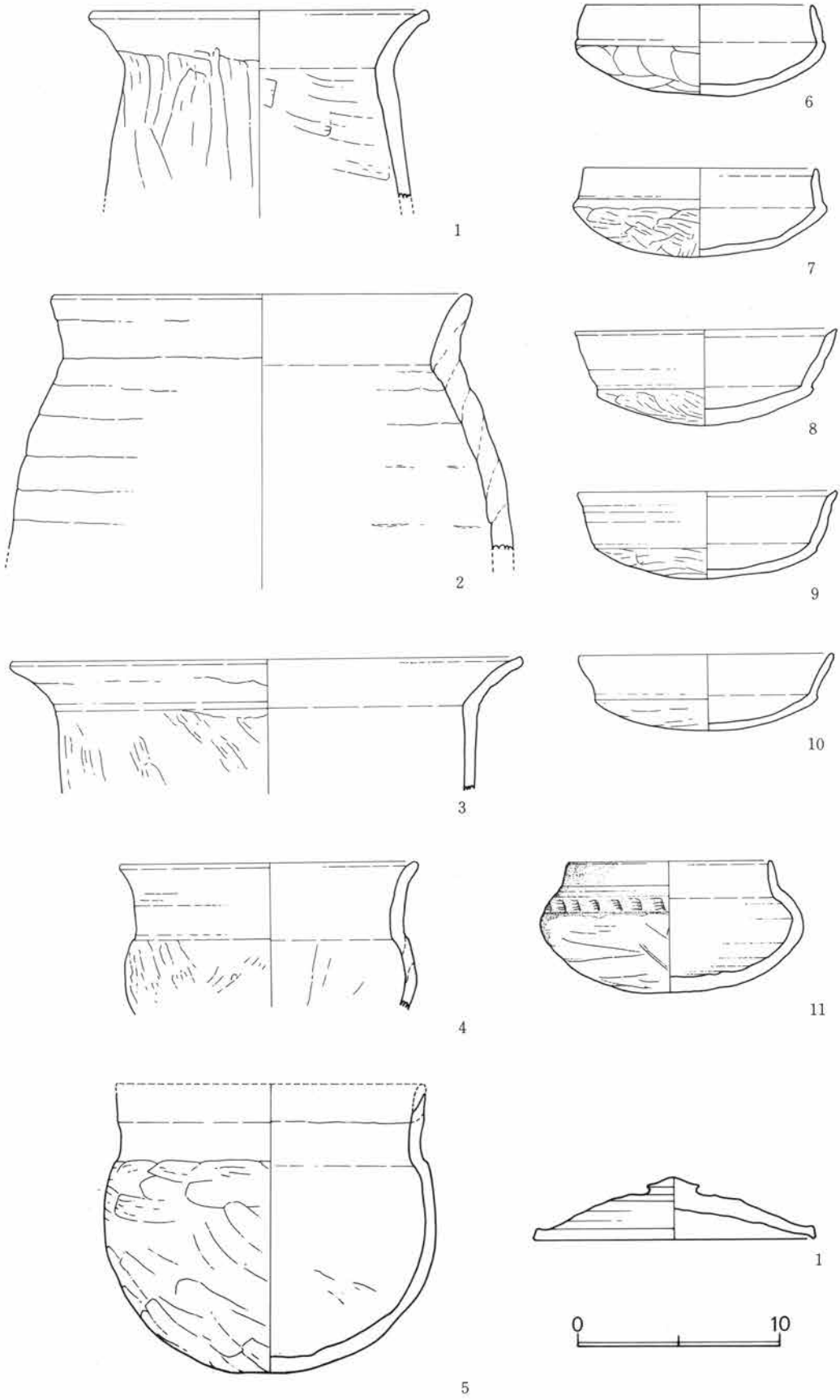
第II章 遺構と遺物

74号住居は小型の長方形で、75号住居床面との関係でみると、74号住居の床は75号住居の床面から10cmほど下がっており、75号住居がつけられた際には上面を整地されたものである。住居の施設としてはカマド、柱穴ともなく、ただ中央部に遺物が散乱した状態で出土したのみである。その点で考えると、これを住居と限定するか否かについても問題が残るところである。規模は5.2×3mで、南側コーナーは76号住居により切られている。

75号住居は6.7×7.6m隅丸長方形を呈する住居で各コーナー部に柱穴が4本確認されている。径45cm、深さ50cmほどのもので柱間はほぼ等間である。住居の線と壁の間は一旦床面下を掘り上げ、貼り床して除湿し



第143図 A74・75号住居図



第144図 A74・75住居遺物実測図

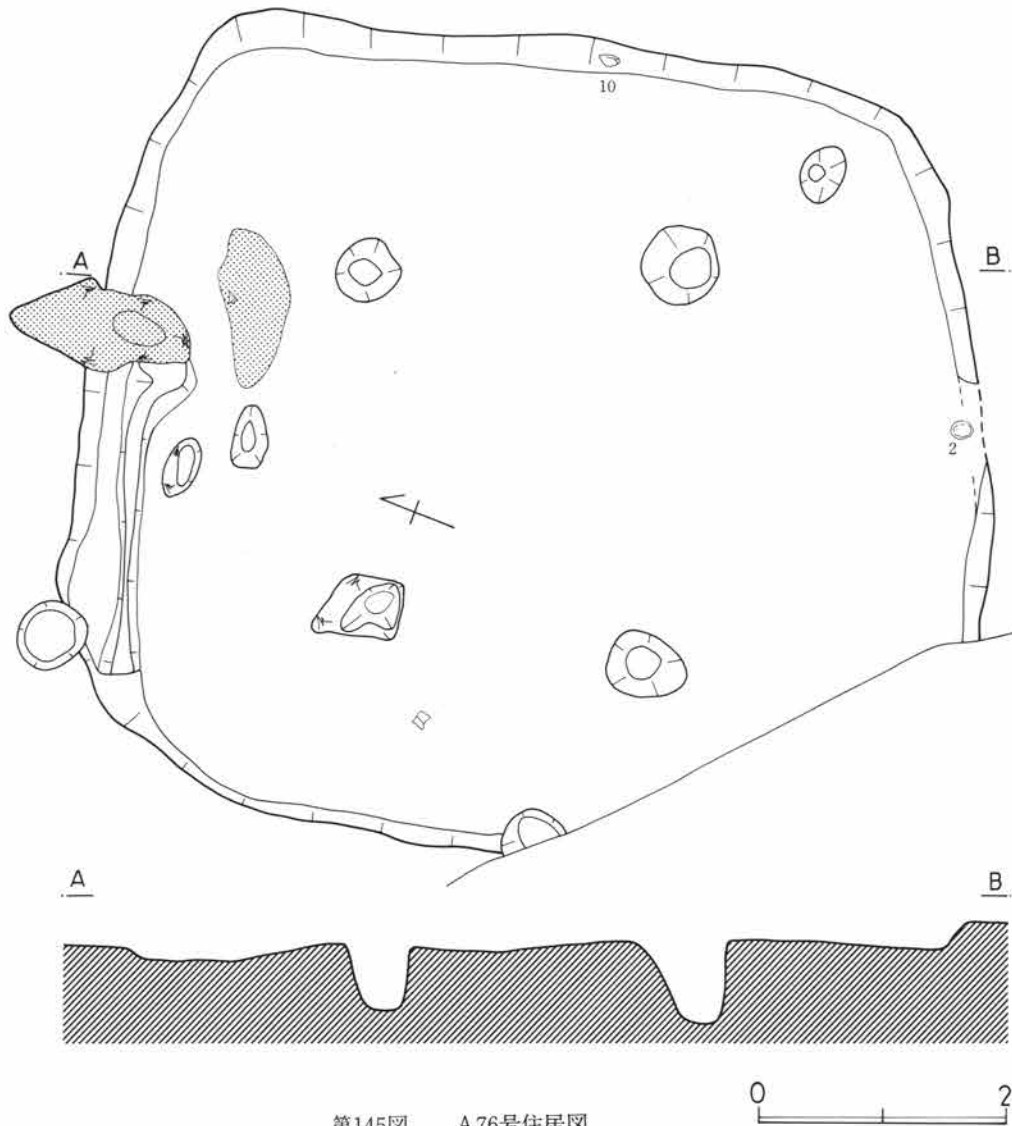
ている。

カマドは見当たらないが、壁が切られている西北部にあったと推定せざるを得ない。とすれば74号の北壁に接する方形のピットが貯蔵穴になる可能性がある。遺物はほとんど発見されていないが、僅かに西南コーナー部に須恵器が検出された程度である。

遺物 (図144-1~11, 1)カメ、小型カメ、坏、須恵器短頸壺のセットである。カメは二種あり、最大径の位置が体部中央にくるものと、口縁部にくるものとである。前者は厚手で頸部のくびれる形で、口縁は短かく外斜して立つ形である。体部には輪積み痕が明らかにのこっている。後者は頸部のくびれが全くなく、口縁部はかなり水平に近く開く状態である。

小型カメは不安定な小さい平底で扁円形の体部から直立またはやや外開き気味に立つ長い口縁部をもち、中段に沈線で稜を意識させているものもある。カメとともに器表面の整形はケズリが顕著である。

坏は二種あるが、口縁部と体部の境にはやや退化した不明瞭な段をもつことは共通している。口縁部の立ち上がり方で短かく内傾するものと、長く外開きするものがあるが前者は段の部分に沈線を入れて、段をより明瞭に表現する意図がみられる。後者は、口縁中段に1~2本の沈線を入れて変化をもたせているもの



第145図 A76号住居図

がある。口縁部にやや内そぎ状におさえたものがある。

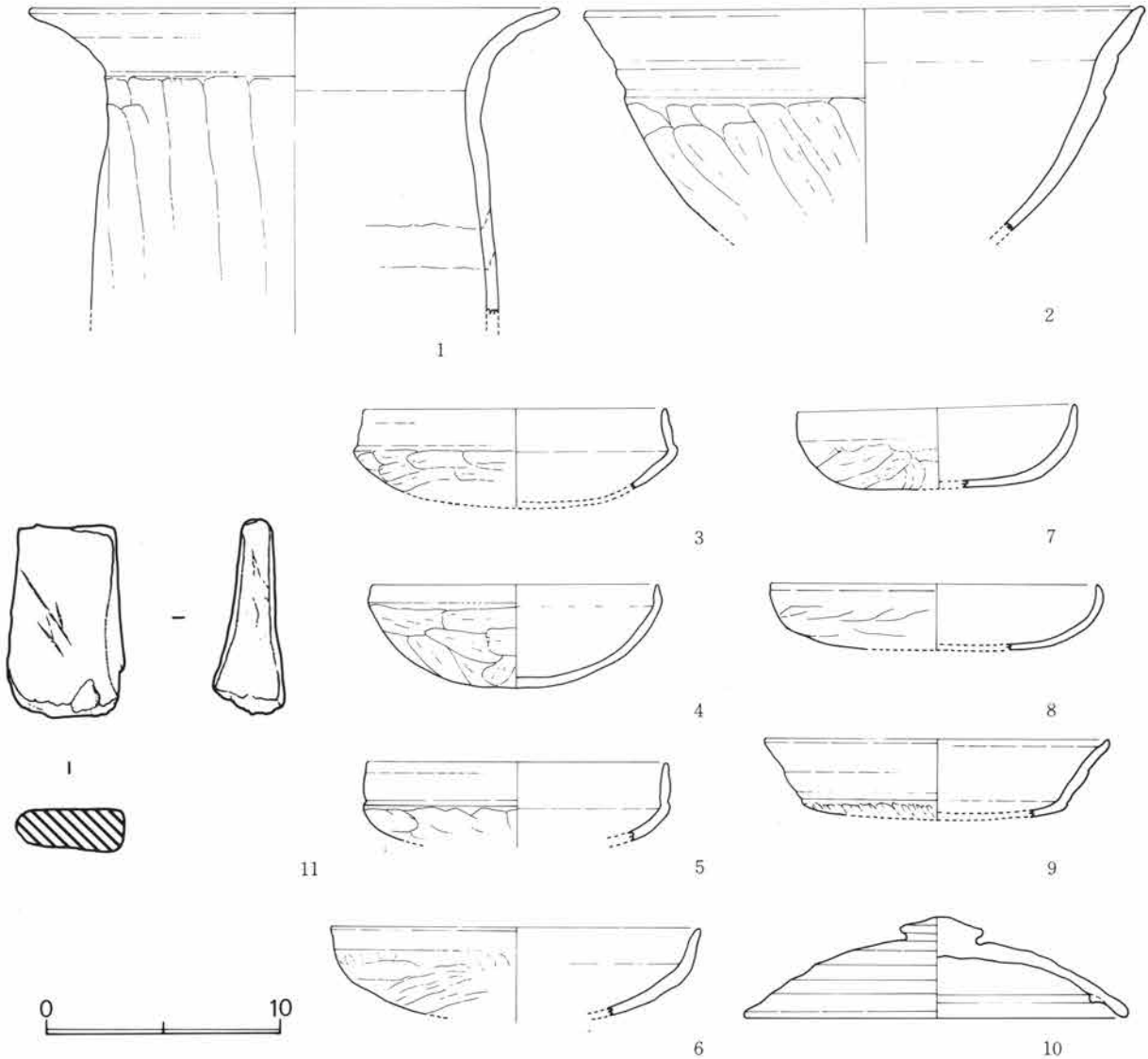
短頸壺(須恵器)は、強い扁円形の器体部に短かく素縁の口辺を立てた形で、肩部に櫛状工具によるヒツカキ紋様がある。底部は丸底である。

75号住居

低い宝珠状つまみをもつ蓋で、天井部が比較的高い形である。口唇部にはカエリはなく、短かく折り曲げただけのものである。内外面とも、ロクロ痕がのこっているがつくりは良好である。

A-76号住居

M-16区に検出された隅丸方形の大型住居である。規模は6.5×7.4mで、ローム面からの掘りこみは25cm内外である。カマドは東壁中央にあったとみられるが、焼土の塊りがあり、燃烧部の掘り込みがその中央に見出せることから推察される。柱穴は、四隅に発見されたが、径50~60cm、深さ60cmほどの規模である。貯蔵穴は認められなかった。床面はよく整って平坦で、とりわけ柱穴の内側は堅く踏み固められていた。北壁下に一本の溝が走っているが、75号住居との重複によるものとみられる。



第146図 A76号住居遺物実測図

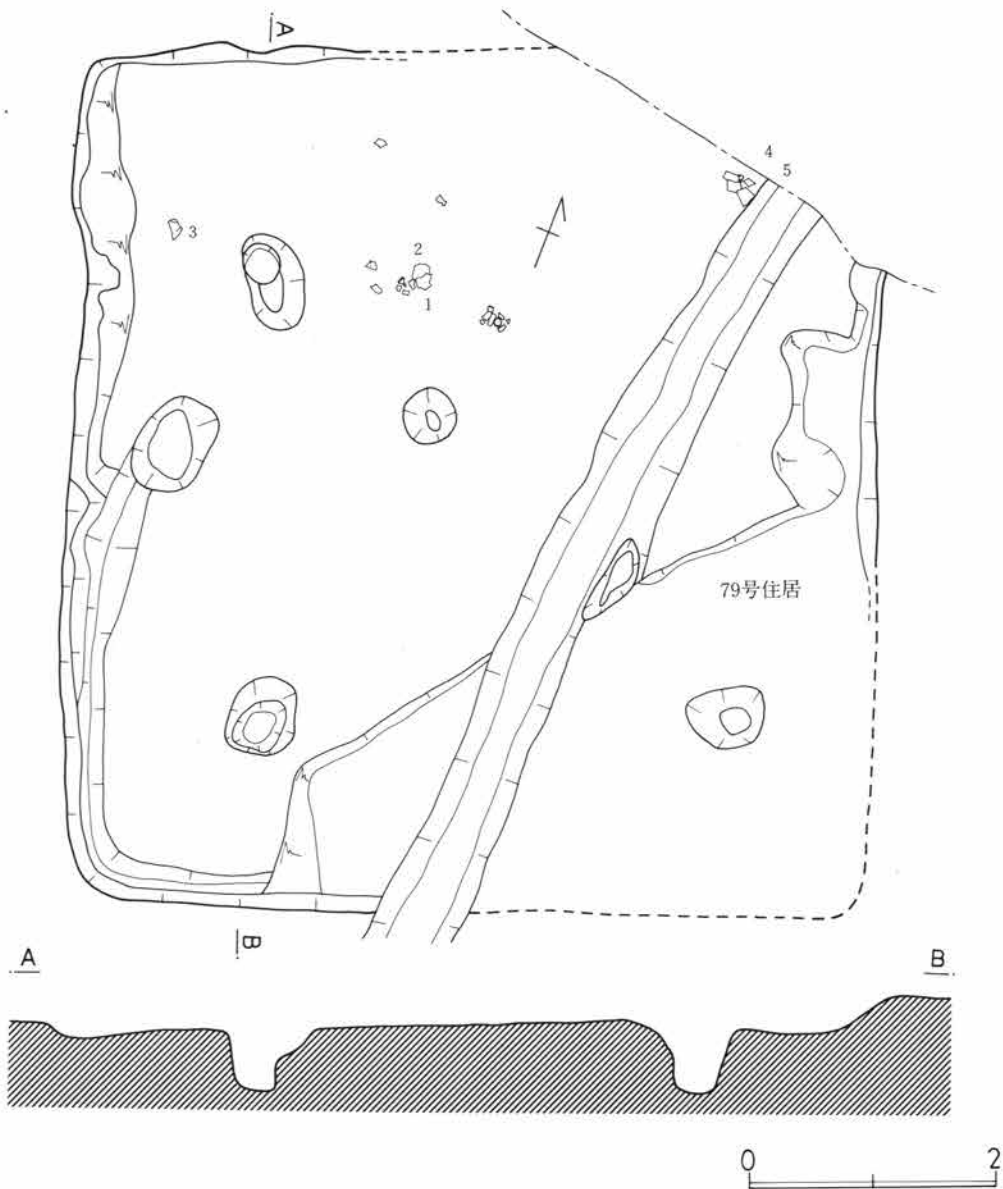
第II章 遺構と遺物

遺物は南壁部に蓋を出土したほかは、カマド周辺に数片出土した。ただし、埋土中にはたくさんの遺物を包含していた。

遺物 (図146-1~11) 長胴カメ、鉢、坏、須恵器蓋、砥石などが出土している。長胴カメは最大径を口縁部にもつ形で頸部のくびれはない。鉢は肩の張りの少ない体部から口縁は長く外に開く。口縁部には沈線による段を表現している。

坏は三種あるが、この内、深い体部から明らかな稜線をもち短かく直立する口縁を有する形、大きい平底から内湾して立つ素縁口辺をもつもの、浅い体部と口縁部の境に段をもち、口縁が内傾、直立、外斜するものがある。

須恵器蓋は、高い天井部から大きく丸味をもってそのまま開き、端部が肥厚する。内側先端部近くにはカエリがつく。ツマミは宝珠状で、中央のもり上がりは高い。他に小型の手持用の砥石が出土している。研ぎ面は4面だが、広い二つの面の減り方が著しい。



第147図 A77号住居図

A-77号住居

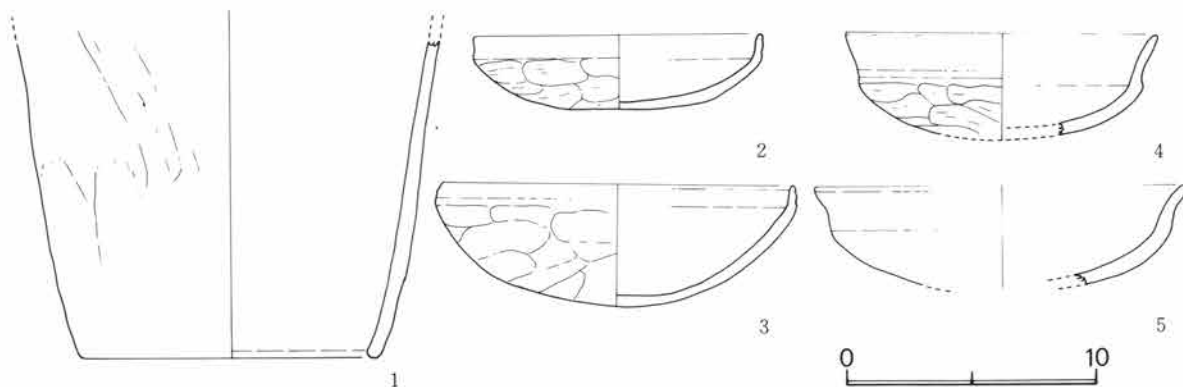
L-17区に発見された大型住居で、6.8×6.5mの規模である。床面の深さは20cmほどで床面は整っていた。住居の北東部は壁がこわされていた。また、南東部は79号住居と重複していたが、79号住居が先行する。更に、北東部から南壁中央に向けて近世の溝があいていた。柱穴は、西壁側に2つの柱穴が確認された。径50cm、深さ50cmほどである。東壁側の1つの柱穴は溝や、79号住居の掘りこみが深いためにはっきりと確認できなかった。

西壁から南壁の壁下には、壁下周溝がめぐっている。巾15cm、深さ10cmほどである。貯蔵穴についてもおそらく北東隅にあると思われるが未調査である。他の西壁部、中央の柱穴は本遺構は関係ないと思われる。

遺物は主に北西隅の柱穴東側に集中して発見されたほか、北東部コーナー部にも検出された。この他、南東部の重複部の貼り床部分から出土した遺物があるが、この遺物は、むしろ、79号住居のものとして考えた方がよいのかも知れない。調査時点が湧水期であったため、はっきりととらえることができなかったが、下の79号住居の床面が77号住居のそれと25cmほど下がるのが、後で確認されたためである。

遺物 (図148-1~5) コシキ、坏の出土がみられた。コシキは、下半のみで、底の孔の極端に大きい形で、胴部はほぼ直に近いほどのものである。坏の2、3は、深い体部から口縁との境の明瞭な稜で立ち上がる口縁部が短かく立つ。コシキと共に器面のケズリ技法がめだつ。

4、5は、遺構の項でも述べたように、79号住居に属する可能性の強い坏である。丸味のつよい体部と、外斜して立つ口縁部の境には段があり、器面もとのい、つくりがよい。前の一群と比べると焼成火度が高く、胎土も夾雑物が少ない。



第148図 A77号住居遺物実測図

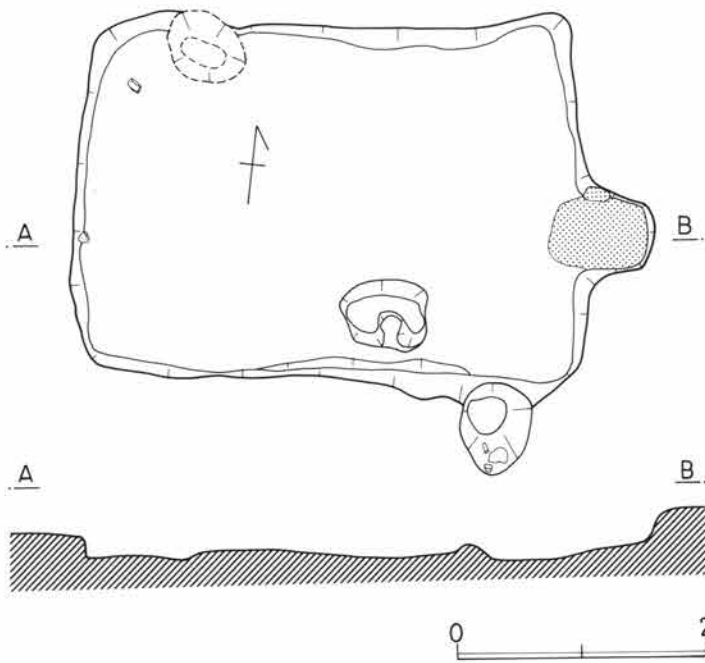
A-78号住居

J-19区に発見された隅丸長方形住居である。北壁部分で先行する79号住居と重複する。

住居は東西に長い長方形を呈しており、ローム面からの掘り込みは20cm内外である。床面は西壁下、住居中央などでやや荒れている様相がみとめられる。床面はあまり踏み固められていない。

カマドは東壁中央にあり、壁を方形に掘りこみ、粘土を貼っている。カマドの規模は焚口巾60cm、奥行80cmの大型で、煙道は確認されなかった。カマドの床は焚口前を一旦掘りくぼめ、そこからやや上り勾配の形に床をつくり、掘り込み先端部で直立気味に立つ。

カマド床面には柱穴や貯蔵穴は認められなかった。カマド前面の南壁下中央にピットが発見されたが、これはいかなる性格のものかはっきりしなかった。住居周辺のピットは北壁上のものは他の遺構と関連するも



第149図 A-78号住居図

ので、本遺構とは直接関連はない。遺物は検出されない。

A-79号住居

K-18区を中心に検出された大型住居である。住居の南東コーナーで78号住居、西南コーナーで77号住居と重複するが、79号住居が、二つの住居に先行することは調査時で確認されている。

カマドは北壁東寄りに検出された。焚口巾50cm、奥行1.2mの規模の粘土カマドで鋭角の三角形を呈する。カマドはすべて住居内に張り出す形で残りの状態は良好である。床は燃焼部でやや下がり、更に奥へ行くに従い上り勾配である。粘土の壁は激しく焼けている。

貯蔵穴はカマドの右脇に大型の長方

形のものが付設されている。60×100cmで深さ80cmで中に土器片が入っていた。北壁のカマドを除く部分には壁下周溝がめぐる。

柱穴は4本が各コーナー部に認められたほか、一部補助柱穴もあいている。各柱穴はやや内傾気味の掘りこみで、上屋構造について材、屋根の高さに関連するようである。

床面はとくに東北四半部は固く踏み固められており、南壁中央には焼土が認められた。遺物は住居北東四半部のカマド前面、南壁下焼土部分を中心に検出された。

その他、床面に掘りこまれた3条の溝が北西から南東方向に3条、ほぼ平行して走っていた。全体的に住居の重複や溝により切られている割には、のこりのよい住居であった。

遺物 (図151-1~12) 長胴カメ、わん、坏、コシキが出土している。

カメは三个体検出されたが共通点としては、最大径が胴部中央にくること、頸部のくびれがつよいこと、底部は平底であること、輪積み痕が顕著なこと、器面のたて方向へら削りがみられることなどである。

コシキは、最大径が口縁にくる形で、頸部はくびれず、なだらかに底部がしぼられる。孔は、底を欠く形の単孔で、技法的にはカメと同様であるが、つくり、成形、焼成ともすぐれている。

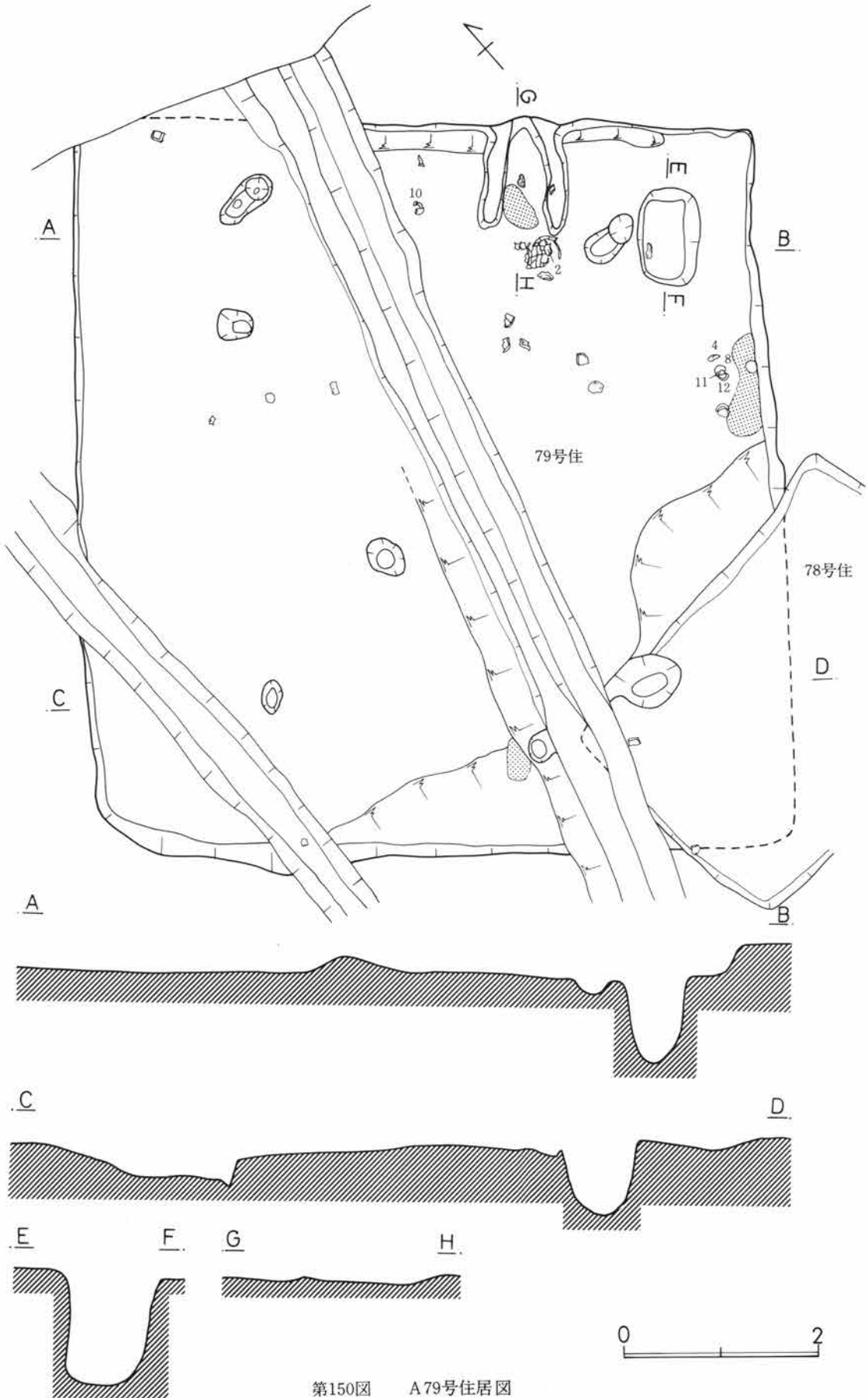
わんは1個体(10)発見されている。丸底気味の不安定な底から内彎気味に口縁を大きくひらく形で、器体部は深い。口縁部は端部を外そぎの技法で整えている。内面には、放射状へら研磨痕が不明瞭にのこっている。

坏は3種あるが、これらは技法的には底部へら削り、口縁と体部の境の段が強はっきりとしていること、口縁端部をへらでおさえたり、外そぎしたもの、おりまげて開いたものなど入念なつくりである。

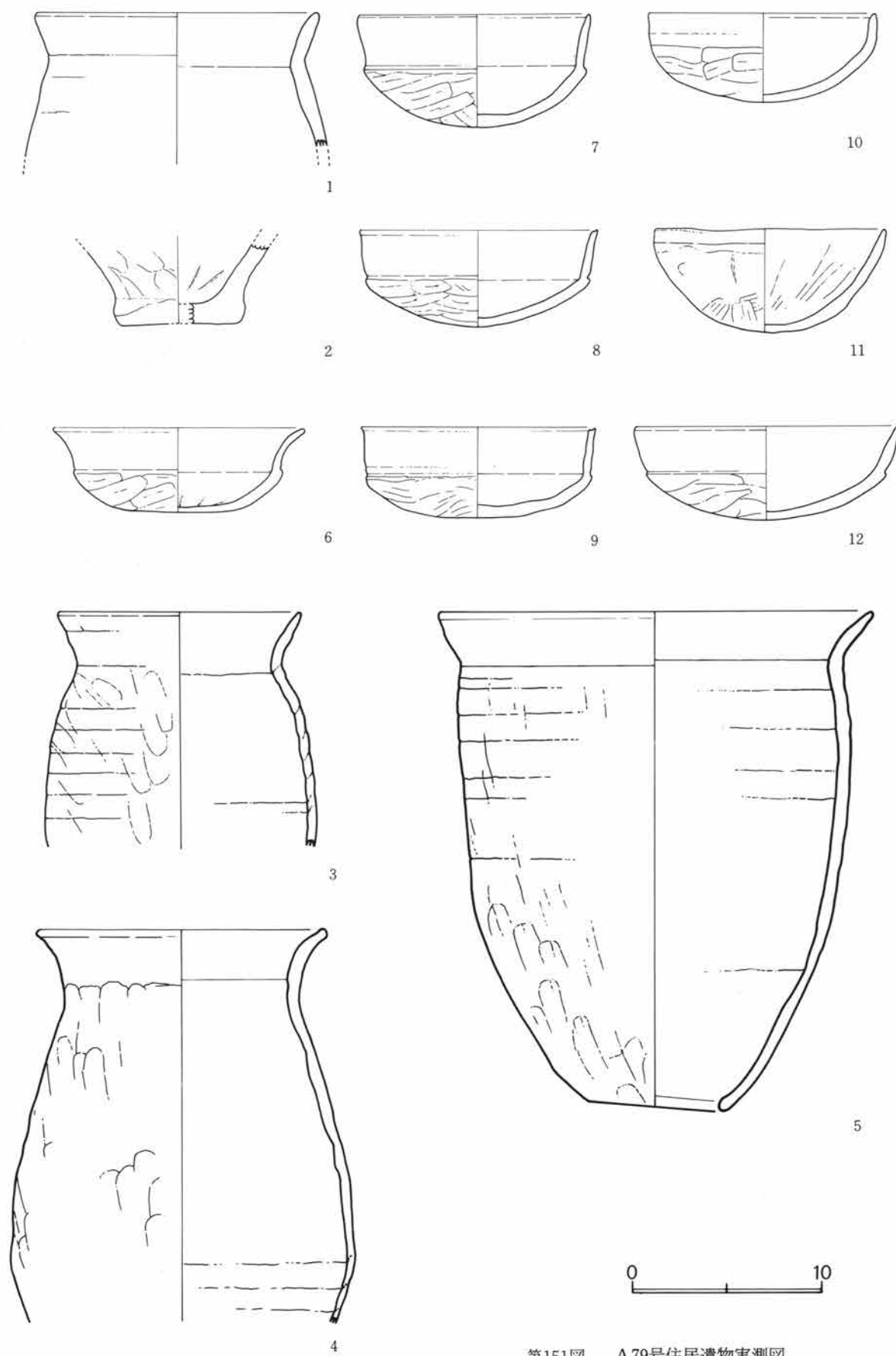
口縁が直に立つ形のものにも6のように段から直に立ち、端部をおさえたと9のように段が不明瞭で、口縁部が素縁のもの二つがある。

11、12のように段から外開きするものは口唇の扱いが外そぎ、開く形と二通りある。

これらの坏は体部の深い点は共通している。



第150図 A 79号住居図



第151図 A79号住居遺物実測図

A-80号住居

79号住居の北半部上層に重複して発見された住居で、79号より後行することが確認された。

方形を呈しており、規模は4.6×3.8mを現状ではかれるが不明瞭で、特に南北長はこれよりのびることは確実である。

カマドは東壁中央にあたとみられる部分に住居内に燃焼部をおき、煙道部をやや壁外にのぼしている。規模は焚口巾30、奥行90cmで粘土製である。カマド袖部には坏の破片が出土している。

カマドの左脇に貯蔵穴を検出している。径1mほどの長円形で、深さは60cmほどである。

床面は全体によく整っていたが、他の住居との重複部分では、やや整わない部分が認められた。

遺物は前述のように、カマド周辺に出土した他、住居東北部に認められた。

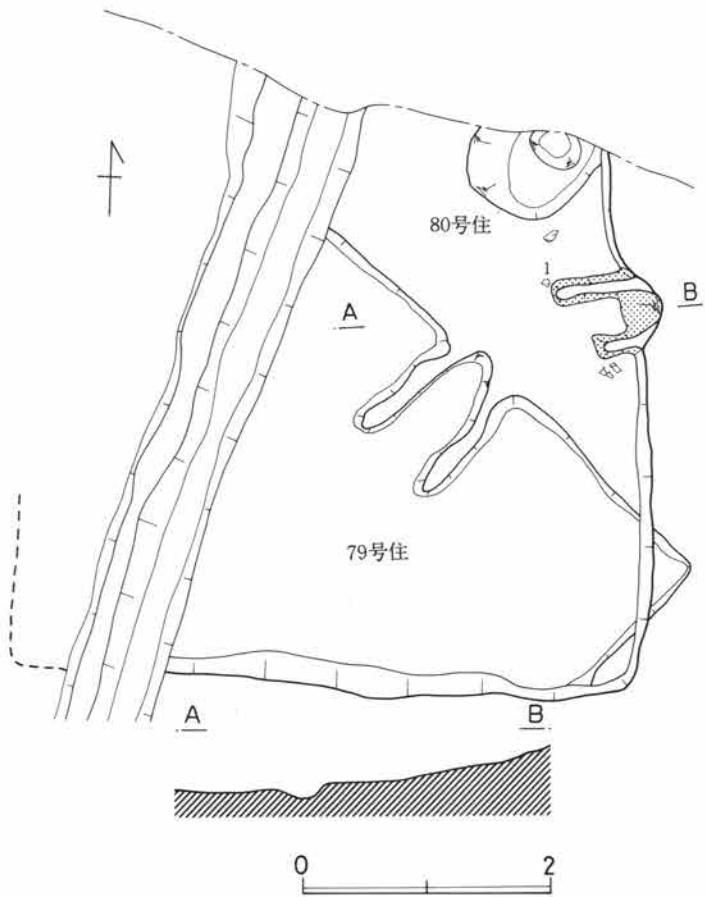
遺物 (図153、154-1~10) 遺物のセットは、カメ、高坏、鉢、坏である。

カメは頸部のくびれが弱い、胴部最大径が胴部中央にくる長胴形である。底部は平底で、つくり出しのものとそのまま体部から移行するものの二種があるが共に安定している。体部は輪積み痕がのこり、ヘラ削りの整形痕が多少のこる。

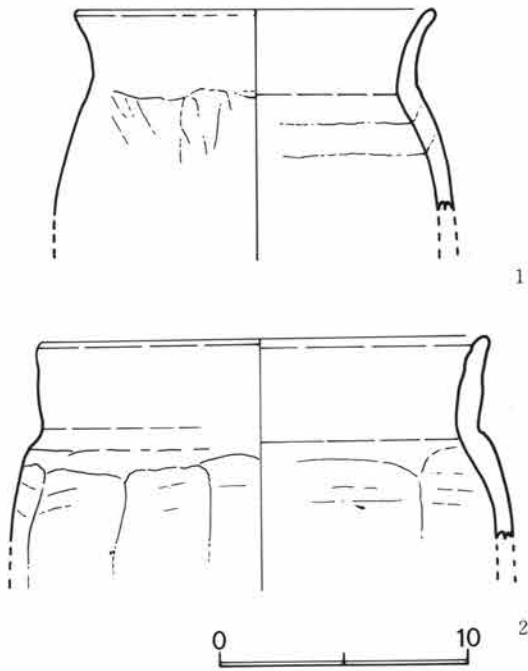
高坏は、脚部のみで広い接合部からラップ状に開くが、坏部径には及ばない形とみられる。内面は指で整形している。

坏は、深い体部から直立する口縁をもつものと、口縁がやや外斜して立つものの二種があるが、共に口縁部の境に段を明瞭にのこしている。

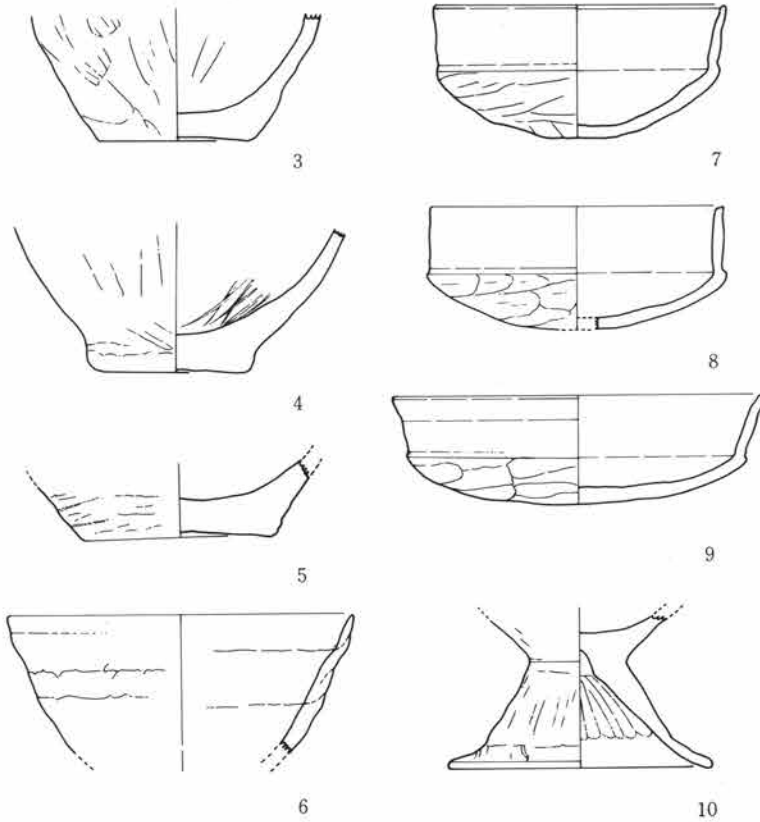
鉢は底部を欠くが、体部から口縁への移行は直線的で端部は剣形である。体部には輪積み痕が明りょうのこっている。概して、つくりは粗雑である。



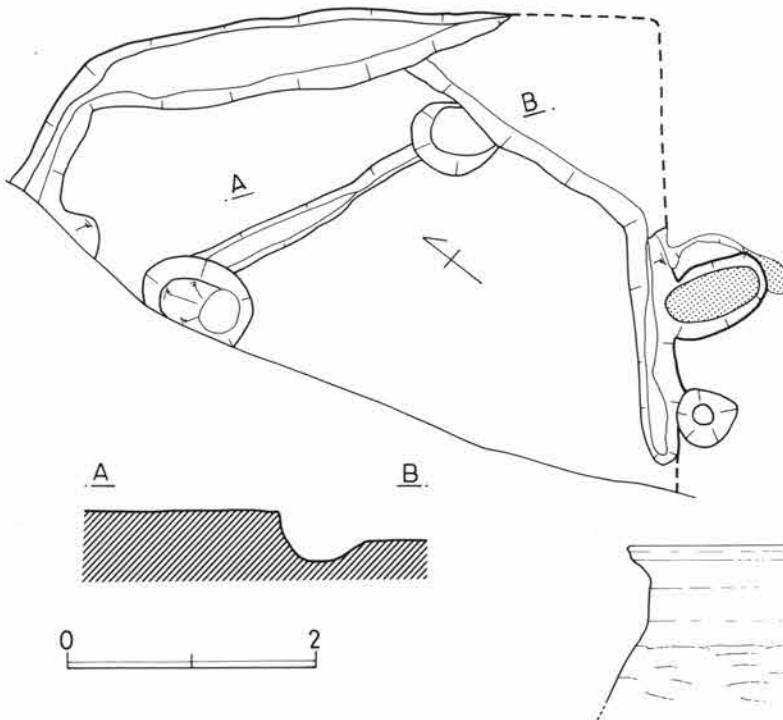
第152図 A80号住居図



第153図 A80号住居遺物実測図



第154図 A80号住居遺物実測図



第155図 A81号住居図

A-81号住居

調査区の端で発見された住居でN-18区に位置する。

この住居も上層の破壊がひどく全ぼうをつかむのに困難な状態であった。

外周は主として壁下周溝のめぐり方で判断して形状をとらえたが内部に更に小さい溝、ピットがめぐり、様相は複雑である。

カマドラしきものは、東壁に認められたが、かなり破壊されていて、一部カマド状の掘りこみもあることから、焼土のある部分に認定した。しかし、これでいくとカマド前面にまで壁下周溝がめぐることになり、やや不自然な面もあるので確定できない。

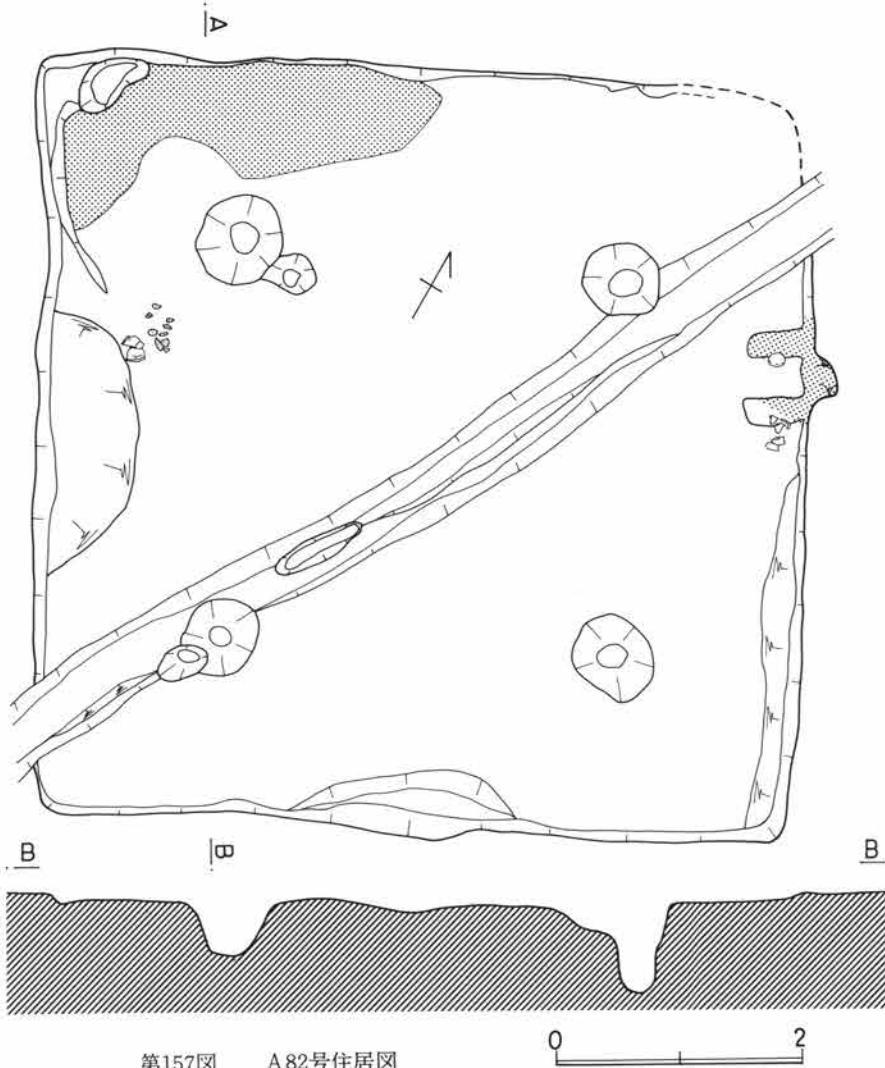
その他、壁の走行、内側の溝、ピットなど、全体的にはより複雑な住居の重複があったことも予想されるが、湧水がひどく確認できなかった。

遺物(図156-1)カメの上半部のみであるが、口縁が「コ」の字に折れまがる形で、胎土に砂などの夾雑物を含むこと、ヘラ削り痕が顕著で、器肉がうすいのが特徴である。

第156図 A81号住居遺物実測図

A-82号住居

M-18区に検出された方形住居で、北東隅から南西隅に向けて近世溝が切っている。



第157図 A82号住居図

規模は一辺6.1mの方形で、ロームの掘りこみは浅い。部分的に認められた壁下周溝と焼土の範囲でその規模が確認できた。

カマドは東壁中央に粘土製のもの、燃焼部を住居内に、煙道部を壁外にのぼす形で発見された。規模は、焚口巾35cm、奥行75cmで、燃焼部は内面が方形を呈している。袖や床面はかなり強く焼けている。カマド周辺、特にカマド右袖脇には遺物がまとまって出土している。

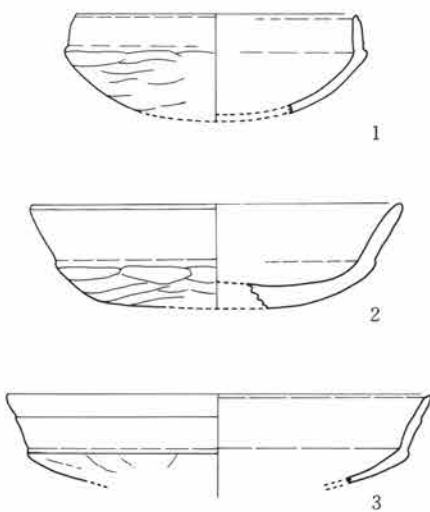
柱穴は各コーナーの対角線上に4個発見されたが、径50cm、

深さ60cm内外で整っている。なお南西、北西コーナーの柱穴には補助的なものが企画性がなく接して発見されている。柱の根元を固めて補強をはかったものであろうか。

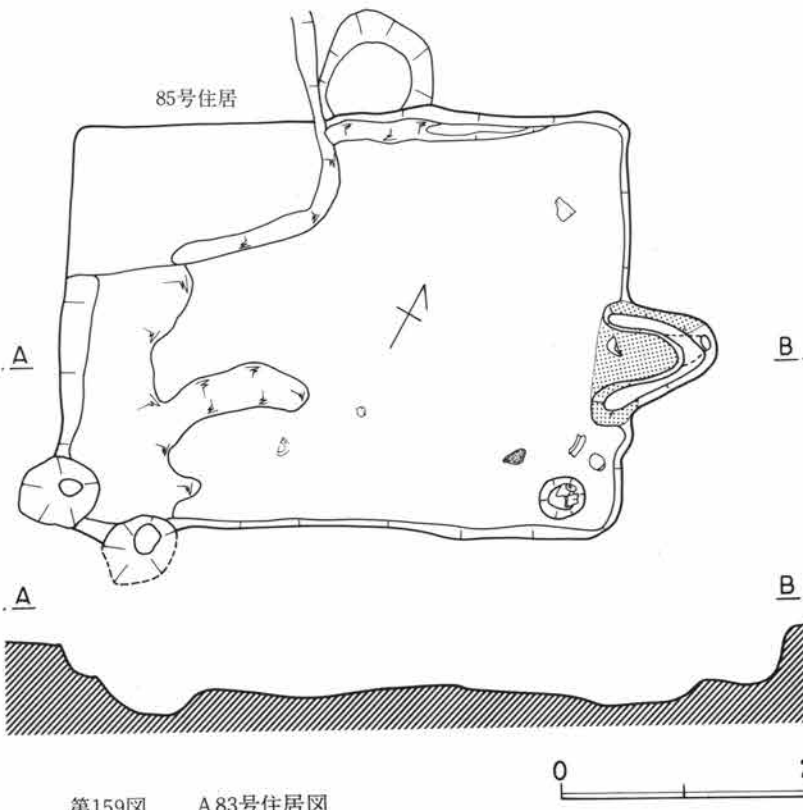
北壁下西寄り部分に多量の焼土・木炭・灰の堆積がみられたが廃棄された時点で流れこんだものであろう。

遺物は、カマド周辺、他、北西柱穴部分の周辺で集中して出土している。また、このまわりからは10cm内外の河原石の転石がまとまって出土した。

遺物(図158-1~3)復元できたのは坏のみである。やや、浅めの体部から明瞭な段を境に口縁が立つ。1つは短かく内傾するもので、他は外斜して開く形である。3は特に大型で、外斜して開く口縁の中段に沈線でアクセントがつけられている。



第158図 A82号住居遺物実測図



第159図 A83号住居図

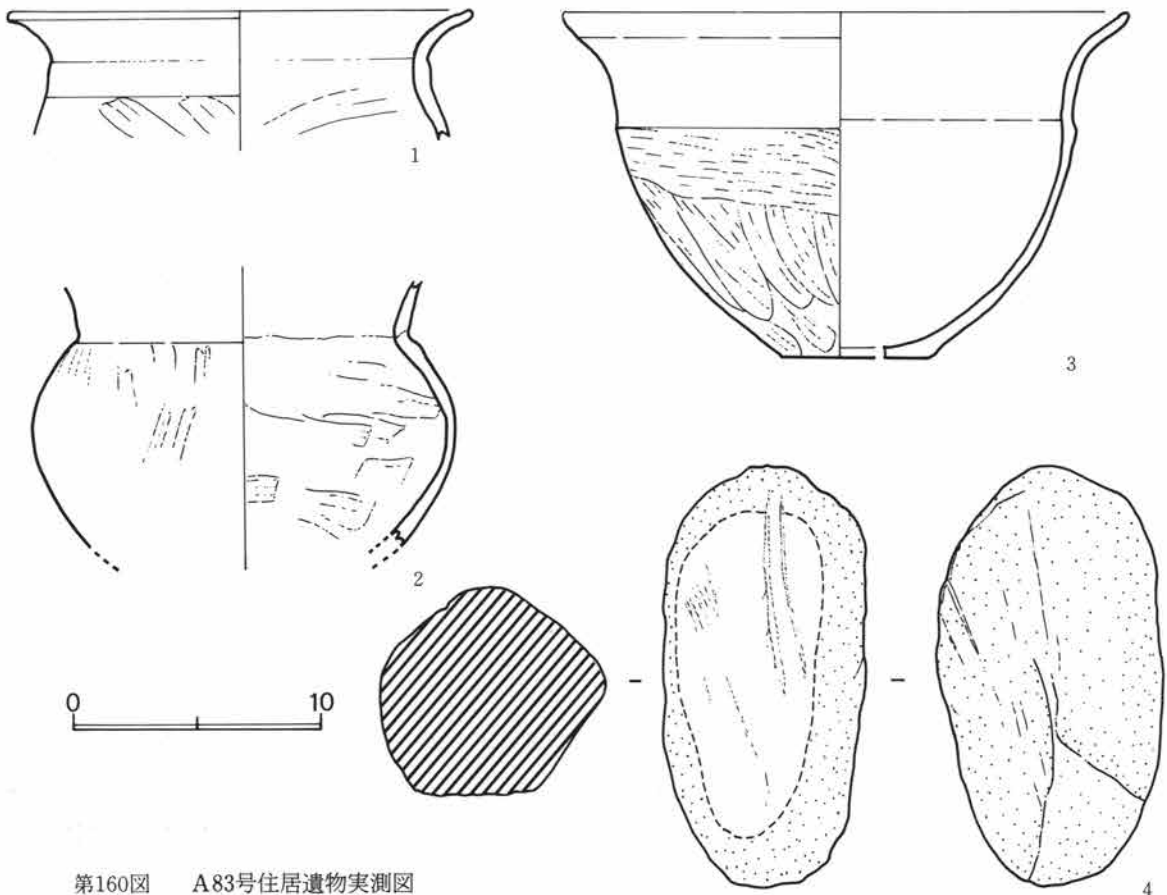
全体的には、浅い体部に特徴があり、口縁端部のつくりも甘く、肥厚気味のものもある。

A-83号住居

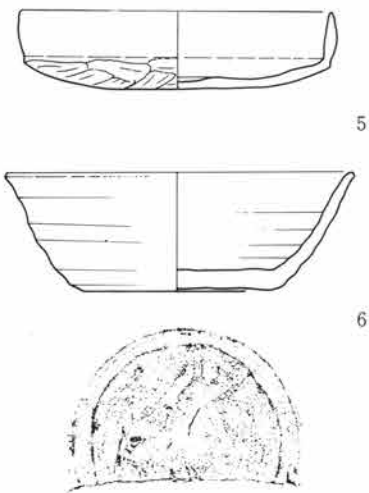
M-21区に検出された東西方向に長い形の長方形住居である。84号、85号住居の上層に乗る住居で両者より新しい時期のものである。

ローム面からの掘りこみは深く40cm内外に及ぶ。

カマドは東壁中央南寄りに付設されているが袖の先端部が住居内にあるほか、ほとんど燃烧部、煙道部とも壁外に出て馬蹄形を呈し



第160図 A83号住居遺物実測図



第161図 A83号住居遺物実測図

ている。焚口巾50cm、奥行1mである。カマド前面はやや掘りこまれ、火床は下り勾配から急に直立し煙道となりかなり強く焼けている。

カマドの右脇の住居南東コーナーには小さな貯蔵穴様のピットが発見された。径30cm、深さ20cmほどで、内部から遺物が出土した。

他に北壁下の床面はおちこみがあり、かなり荒れていた。また、南西コーナー住居外にピットが並列していたが、性格は不明である。

遺物はほとんど、カマド及び貯蔵穴周辺で認められたが、南壁中央でも多少の出土をみた。

全般に床面に起伏があり、床面の踏み固めも少なく、荒れていた。

遺物 (図160、161-1~6) カメ、コシキ、坏、須恵器坏の他、砥石状の円礫の出土をみた。

カメは上半部のみ出土であるが長胴形と球形の二つがある。共に、器表面のケズリが顕著で器肉がうすい。コシキは平底の鉢形で、底部

に多孔のあく形である。口縁や体部に丸味があり、つくりもていねいだが、焼成はやや甘い。

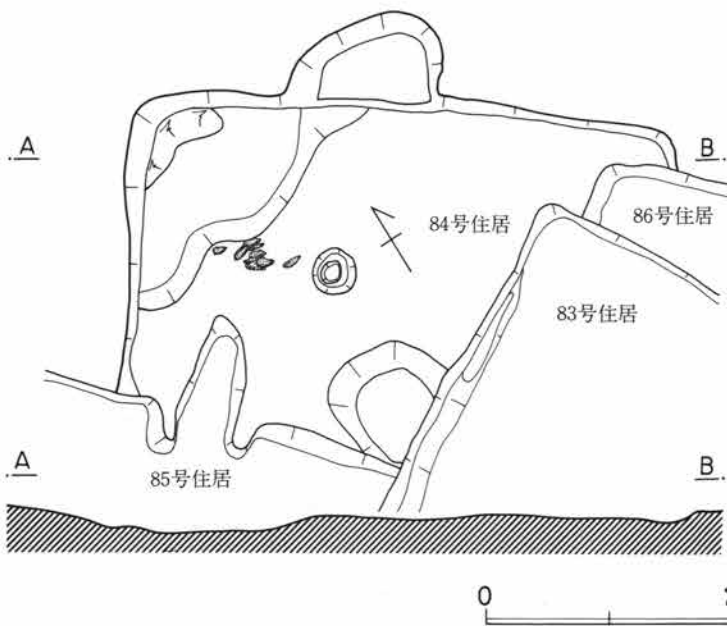
坏は大きい平底様の浅い体部に素縁口辺の口縁が直立する。須恵器坏は底部を糸切り後ヘラ調整しているもので、体部には、ロクロ痕がよくのこっている。

角閃石安山岩の石は平の面をけずり、刃物痕のようなものがあることから砥石様の使用方法をとっていたものとみられる。

A-84号住居

L-21区で検出された住居であるが重複がひどく、全ぼうはつかめていない。

現状では方形住居とみられるが東西4.5m、南北3.5m以上の規模をもつことは確実である。北西コーナーの柱穴の位置からすればかなり大型になる可能性があるがほとんどは83号、86号、85号住居により削られて



第162図 A84号住居図

しまってみる影もない。

重複する住居が上にあることにもよるが、ローム面からの掘りこみは10cm以下である。

柱穴は径35cm、深さ60cmほどで、しっかり直立している。

床面は比較的よく整い、特に中央部はよく踏み固められていてパリパリである。住居の北西コーナーの床面はやや掘りこまれているが、これは貼り床をしていたところから、除湿装置とみることができよう。

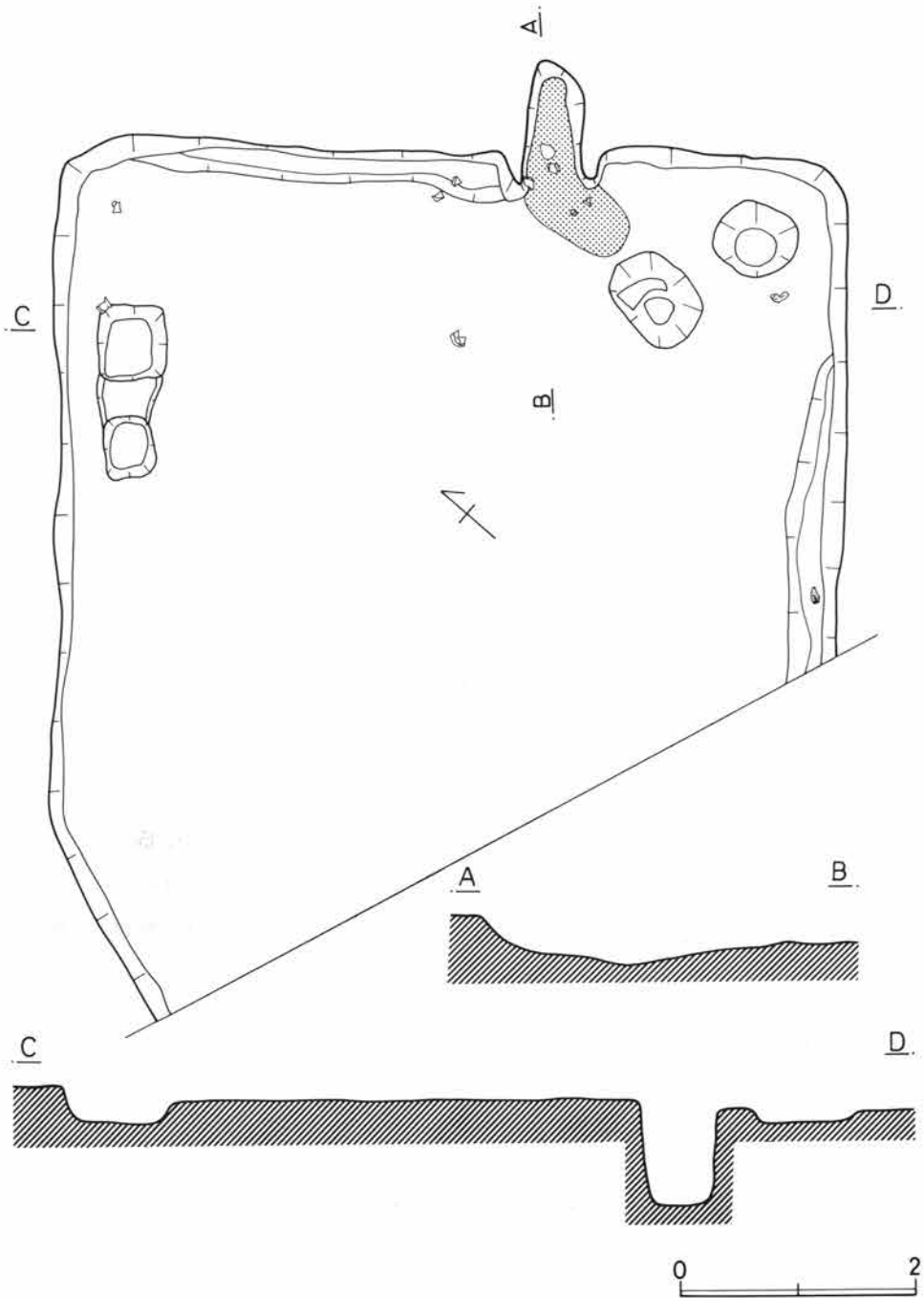
そのほか、壁外(北壁)住居中央に大型のピットがあいているが、これらが、住居と関連するものであるか否か、いかなる性格のものかにつ

いてもほとんど手がかりは得られなかった。

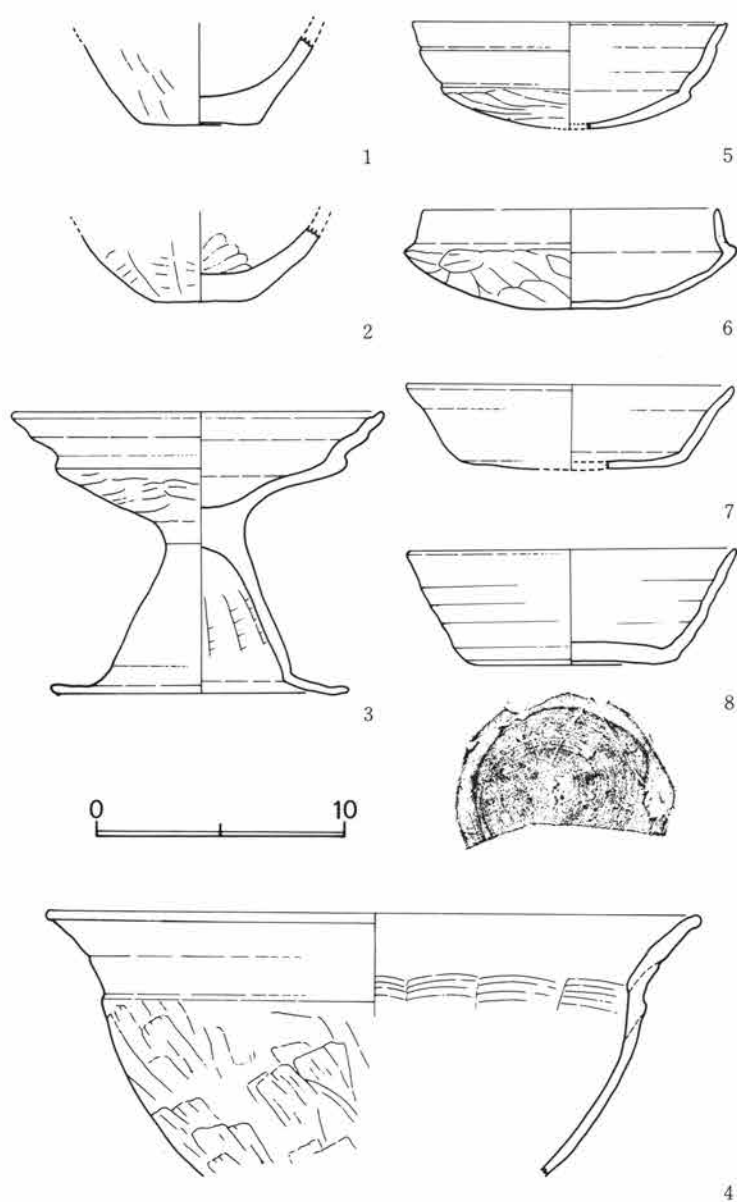
遺物は土器はほとんど小破片が数片出土したのみであり復元可能なものはない。その他では、柱穴西側に接して、長円形の河原石がまとまって、9個出土している。

A-85号住居

M-20区に発見した。大型の方形住居である。規模は7.4×6.7mと大きく、東壁中央やや東寄りにカマドを付設している。カマドは燃焼部を少し住居内にのこすが、ほとんどは、壁外に造り出されている。焚口中45cm、奥行1.2mで粘土カマドである。火床は一旦カマド前面を低くし、そこから上り勾配の形をとっている。煙道とのつながりはかなり急傾斜である。



第163図 A85号住居図



第164図 A85号住居遺物実測図

貯蔵穴はカマド右脇の南東部コーナーに円形のもの設置されている。径60cm、深さ45cmほどである。壁下の一部、カマド左側、南壁部分には巾20cm、深さ13cmほどの周溝がまわっている。

その他、柱穴はカマド右前面に1個、径60cm、深さ60cmのものが確認されたが、これに対応する位置は床面が、他住居と切り合っていて確認できなかった。

全体に住居はよく踏み固められて整っている。なお北壁部のピット2個の内深いもので18cmで、他の柱穴との比較で考えると、柱穴とはみられず、補助的なものとみられる。

遺物 (図164-1~8) 土器としては、鉢、カメ、高坏、坏のセットが出土した。鉢は、底部を欠いているが、最大径が口縁部に来る丸底の鉄カブト状のものとみられる。頸部はややくびれをもち、口縁部はそこから大きく外斜して開く形で端部をややおりまげ、肥厚させている。体部は尻がこけた感じでそこから碗底状にすぼまる形で、器表面はヘラ削り痕が顕著である。

カメは口縁部を欠く。底部は小さ

めであるが安定した平底である。おそらく、かなり長めの長胴形を呈するものであろう。

高坏は、坏部だけをみるといわゆる有段の坏である。底部の浅い体部からかなり明瞭な段をみせて、そこから45°ほどの角度で大きく外開きする。口縁中段には沈線が入っている。脚部は接合部を比較的小さくし、そこから一旦斜めに開いて立ち、先端を水平に開く形である。脚内部はヘラで削りとった痕跡がみられる。

坏は二種ある。一つは、浅い体部と大きく外開きする口縁の境に、明瞭に段をもつ。口縁の中段にも沈線を入れて、彎曲をなだらかにしている。

もう一つは、やや深めの体部をもち、平底気味の底部、口縁部を短かく内傾させる形である。

それぞれ、技法的にはヘラ削り技法、荒い櫛状工具による整形痕のある点などに特徴がある。

A-86号住居

M-21区を中心に検出された方形住居で1辺6.7mほどの規模を有している。住居上半部を83号住居によつ

て切断されているため83号住居より古いことが確認された。両者の床面差は10cmほどである。

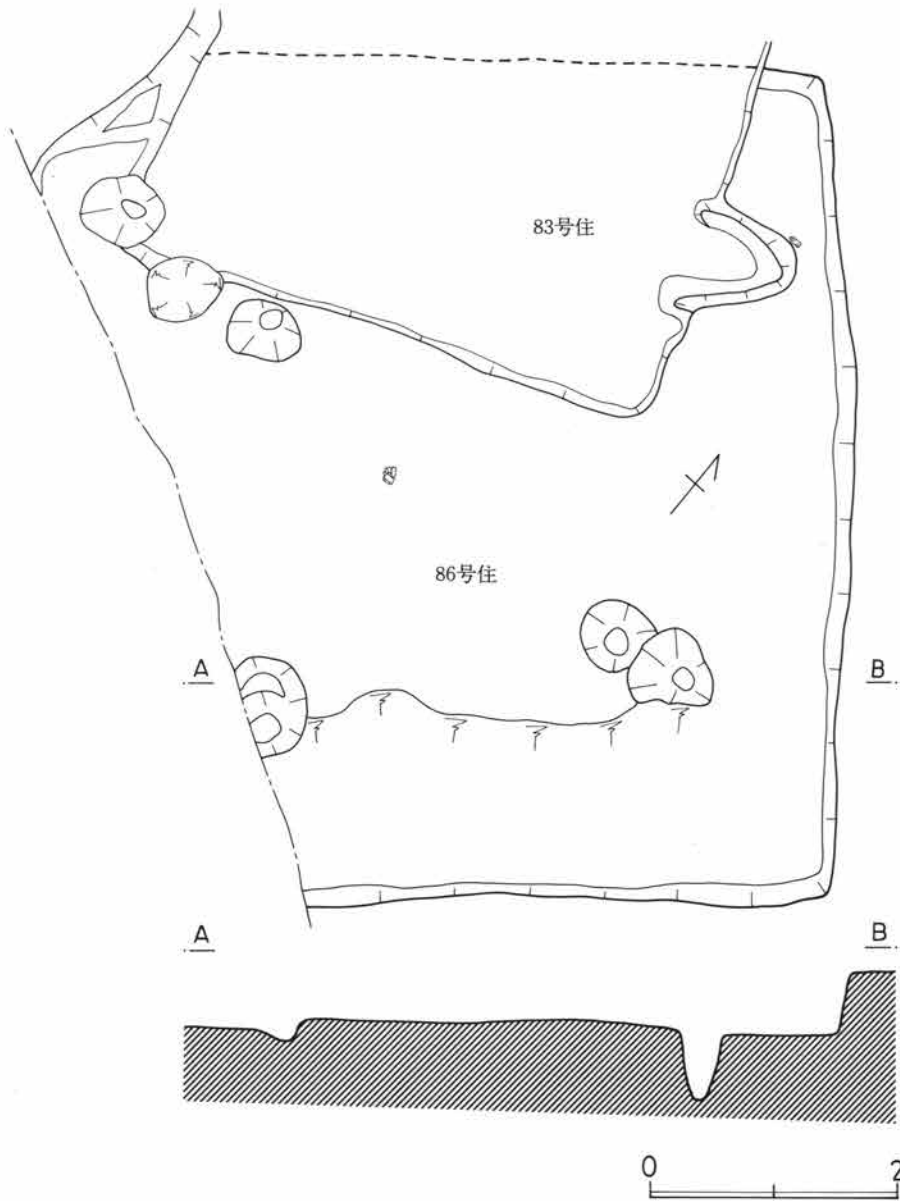
カマドは34号住居により切られた部分にあるものとみられ、確認できない。

柱穴は、切断された部分を除いて3個検出されたが、径60cm、深さ55cmほどの規模である。特に北東隅部の柱穴は2個が近接しており、南西隅のものは2個が連続していることなどからすると上屋の改築が行なわれた可能性が大きい。

床面では、柱穴の外側が一旦掘りくぼめられてその上に貼り床をする除湿のための工作が行なわれている。特に南壁部分で顕著である。

ローム面からの掘り込みは1mちかくあり深く、壁の断面も直におち、整っている。また床面のうち、柱穴で結ばれた内側は特に踏み固められていた。

全体的にみると、この周辺の住居の一群中では、84が最も古く、85、86号が同時に併存し、そのあとに83号住居がつけられたとみるのが発掘時の所見である。



第165図 A86号住居図

遺物 (図166-1

～5) カメ、コシキ、坏、石製紡錘車を出土している。

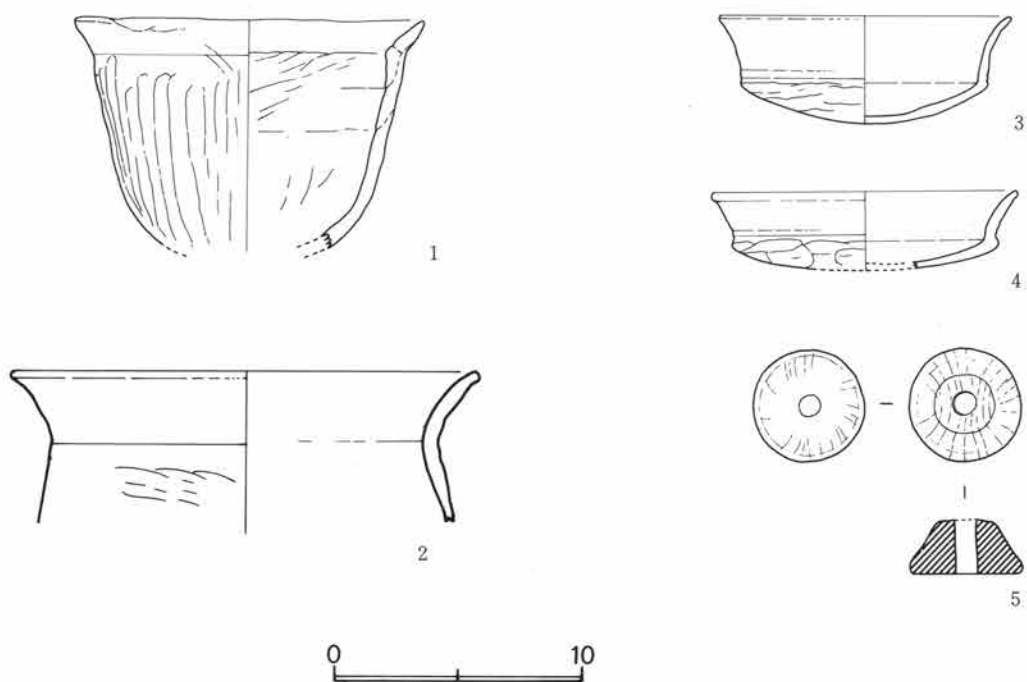
カメは最大径が口縁部に来る長胴カメとみられるが下半を欠く。頸部は多少くびれ傾向をのこしている。

コシキ(1)は丸底の鉢形で、多孔をもつものと推定されるが、底部を欠くため不明である。口縁部は頸部のくびれがなく、そこから外反する。端部は剣型である。

坏は明瞭な段から外彎気味に外開きする形で、ヘラ削りが顕著である。

紡錘車は円錘台形で底部の擦痕がのこっている。

第1節 A地区の遺構と遺物(A-87号住居)



第166図 A86号住居遺物実測図

A-87号住居

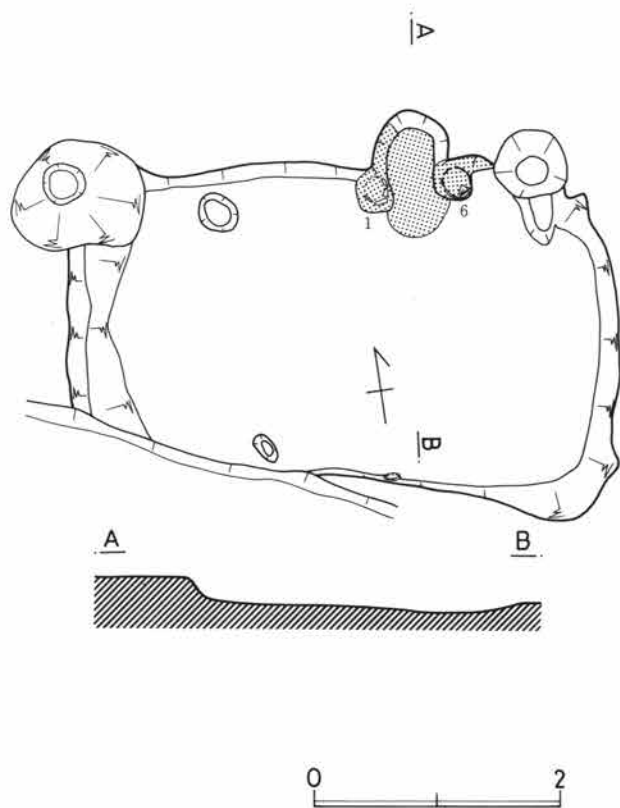
L-19区に検出された長方形住居である。住居の西南コーナーで81号住居と重複するが、前後関係では81号に先行する時期の住居と考えられる。

規模は2.5×4.5mの隅丸長方形で東西に長い。カマドは北壁東寄りに検出されたが、焚口部の両袖に長カメを立てている。燃烧部の半分は壁外につくり出されており、焚口巾35cm、奥行80cmで馬蹄形に掘りこまれている。カマドの床は住居の床面から弱い上り勾配で先端部が急激に立つ。

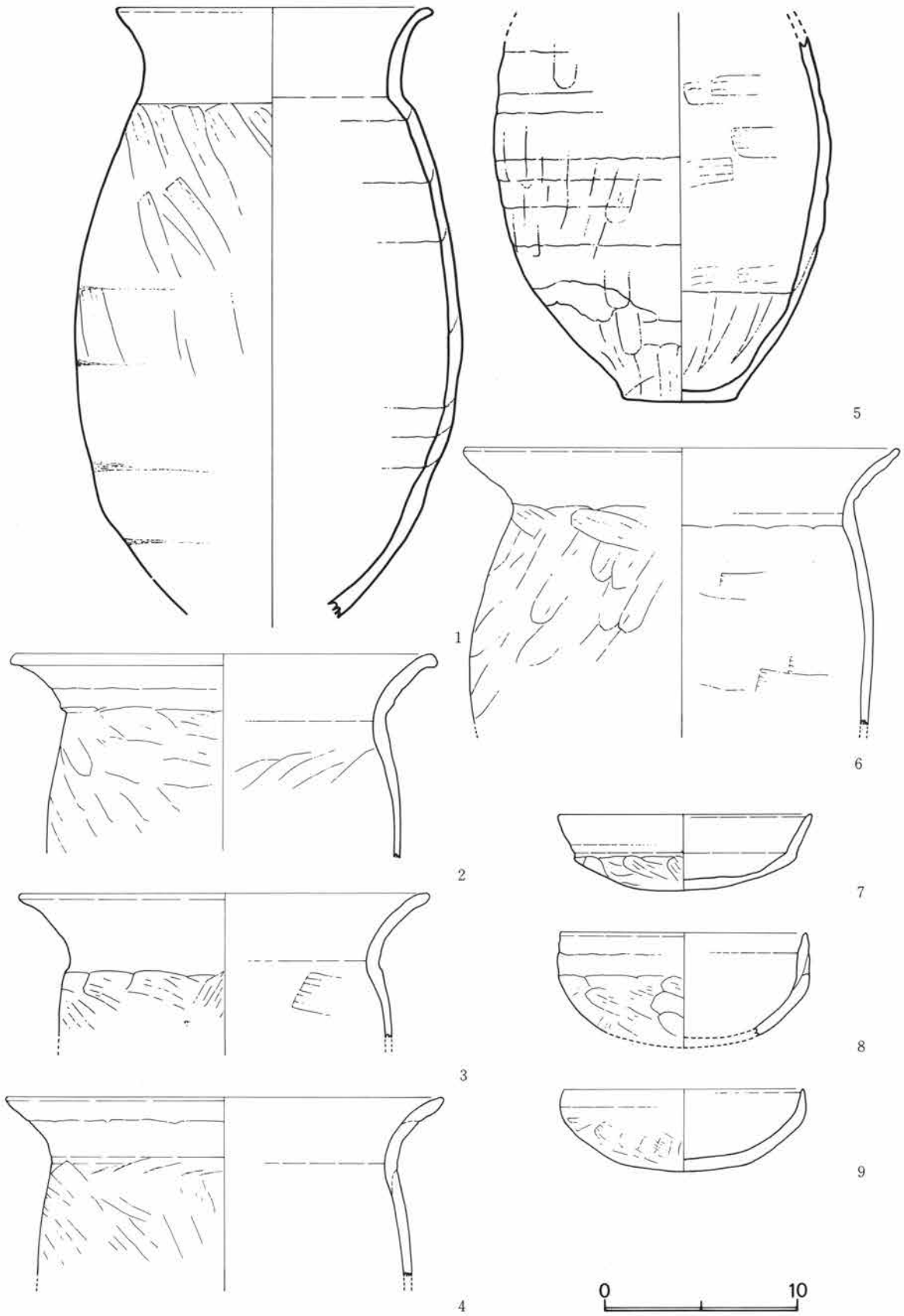
柱穴は住居内の四隅の対称位置にはなく、北西、北東コーナーの壁上に2穴、住居内の西側、南北壁下に2穴ある。これで見ると、上屋がいかなる構造になるか推察できないが、コーナー部の柱穴は可能性が考えられる。

遺物(図168-1~9)カメと坏の組み合わせである。

カメは、多少頸部のくびれをのこしているが、最大径は口縁端部に来る形である。口縁はやや外弯しつつ45°ほどの角度で開くが、口



第167図 A87号住居図



第168図 A87号住居遺物実測図

縁端部で折りまげた形の端部が肥厚している他は、そのままのびている。全体に紐作り痕があり、体部は斜めあるいはたて方向のケズリ痕をのこしている。

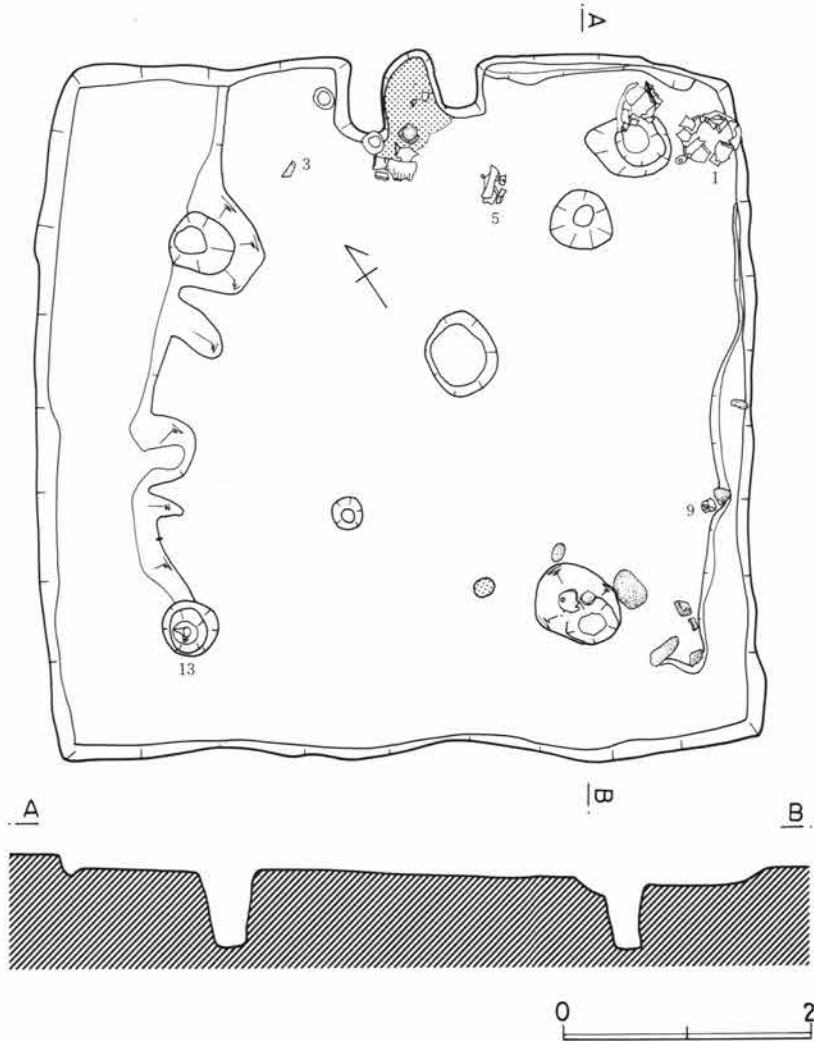
坏は3種あるが7は最も典型的な形で浅い体部から外方へ開いて立つ。口縁との境の段はかなり小さく不明瞭になっている。8は底部を欠いているが、紐作り痕をのこすなど整形が雑で、素縁口辺の端部は内そぎの手法を見せている。むしろわんに近い型であろう。

9は平底気味の体部の深い坏で、口縁部と体部の境の稜がやや不明確になるもので、口縁部は直に立つ形で、他の坏と共伴する事実で時期推定の根拠を与えてくれる。

A-88号住居

K-20区を中心に発見された方形住居である。ローム面の掘りこみは10cmほどと浅いが、全体によく整った住居である。典型的なものとして注目される。

カマドは北壁中央につくりつけられているが、当初から位置を決めて、ロームの前出しによりカマドを設けている。従って、ロームが削りとられずに壁内に張り出し、その表面に粘土をまく形である。規模は焚口巾45cm、奥行70cmほどで壁の内側で先端が止まり、煙道はない。



第169図 A88号住居図

第II章 遺構と遺物

貯蔵穴は住居の東北コーナー部に不正円形のもの認められたが、径50cm 深さ60cm ほどで縁にかかってカメが出土している。そのまた脇にもカメと坏が出土している。

柱穴は、対角線上に4個、および中央に1個が検出された。径40cm、深さ60cm で、かなりしっかりしている。中央の柱穴が棟を支えるものとするれば、ほぼカマドの上を棟が通ることになる。

壁下には北壁東半分と東壁部分に周溝がめぐり、西壁部分は柱穴と壁の間を一旦掘りおこして、あとから貼り床し、除湿している。

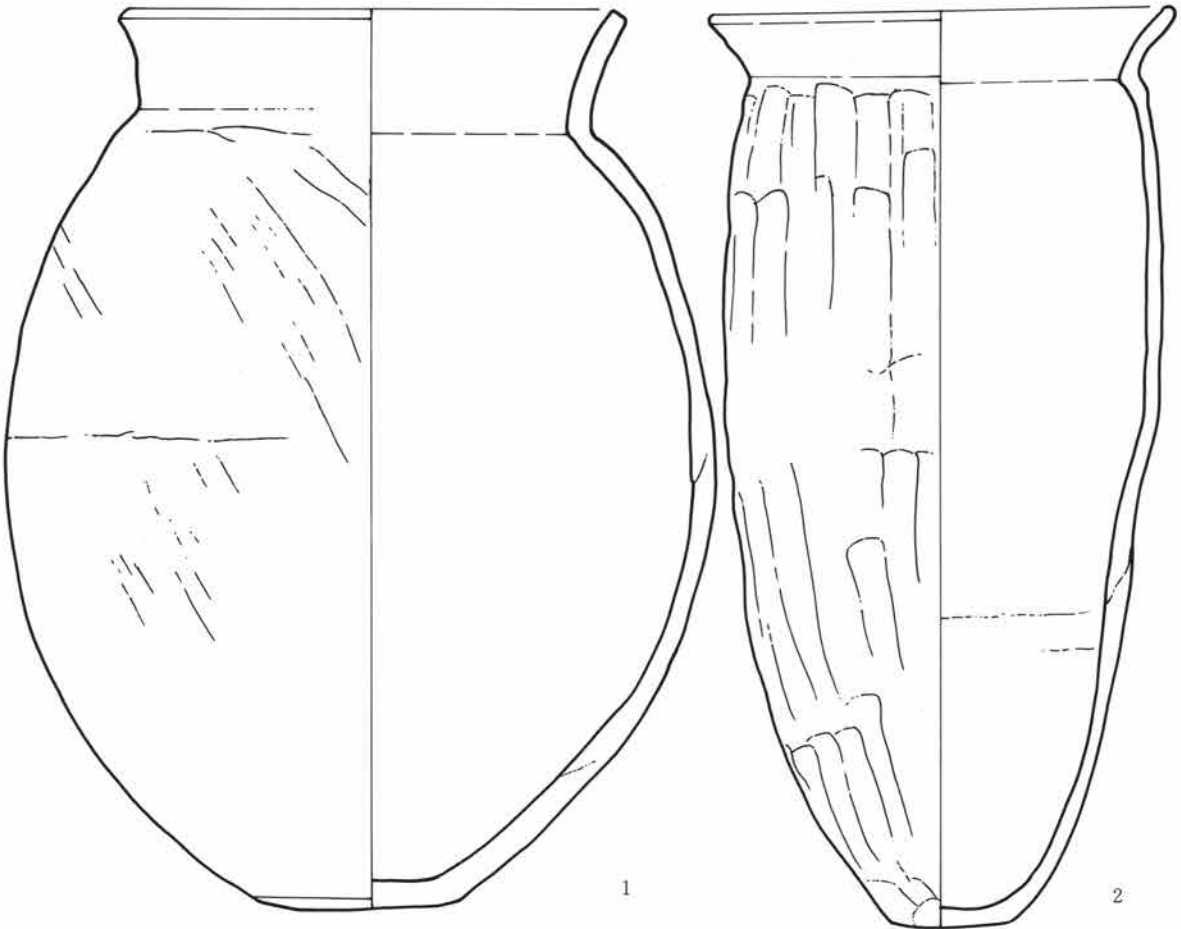
特に床面をみると、住居の北東部、とりわけカマド前面はパリパリに踏み固められているほか、四隅の柱穴の内側はよく整い、踏み固めも固い。

遺物はカマド周辺、貯蔵穴周辺に集中して認められたほか、住居南東隅部にも河原石や土器が10点ほど集中していた。

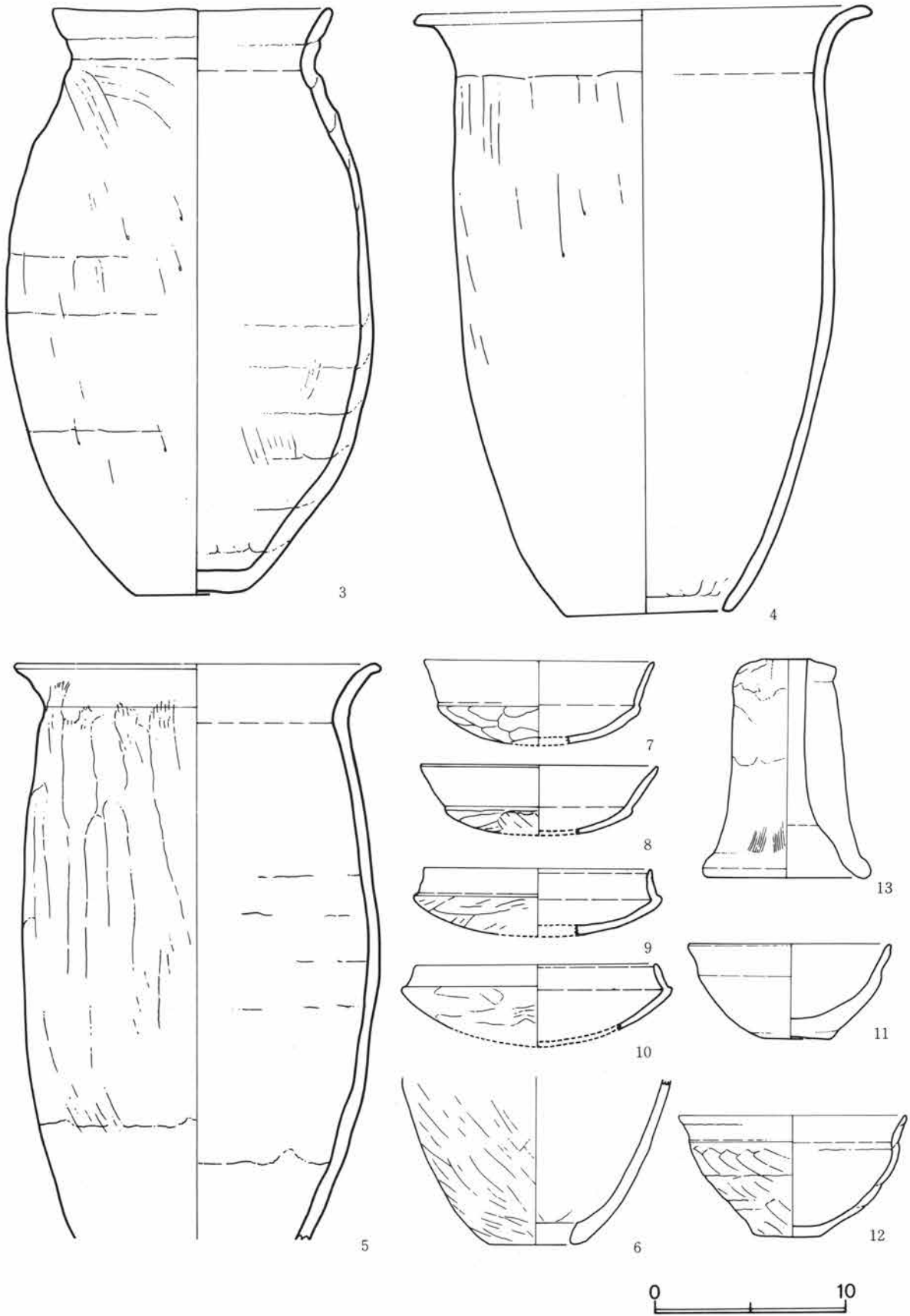
遺物 (図170・171-1~12) カメ、コシキ、坏、鉢、土製支脚のセットで良好な状態である。

カメは、胴部中位に最大径をもつ1と深端な長胴形を呈するものの二種がある。前者は長胴化した球形胴で、頸部が強くくびれ、そこから外反り気味に口縁部が立つ。口唇部はヘラで仰えている。底部は平底で小さく不安定である。後者は最大径が口縁部に来る小さい不安定な平底をもつものである。

コシキは長胴形で底部を欠いたものと小型で、底に単孔を有するものの二種がある。つくりは長胴カメと同様である。



第170図 A88号住居遺物実測図



第171図 A88号住居遺物実測図

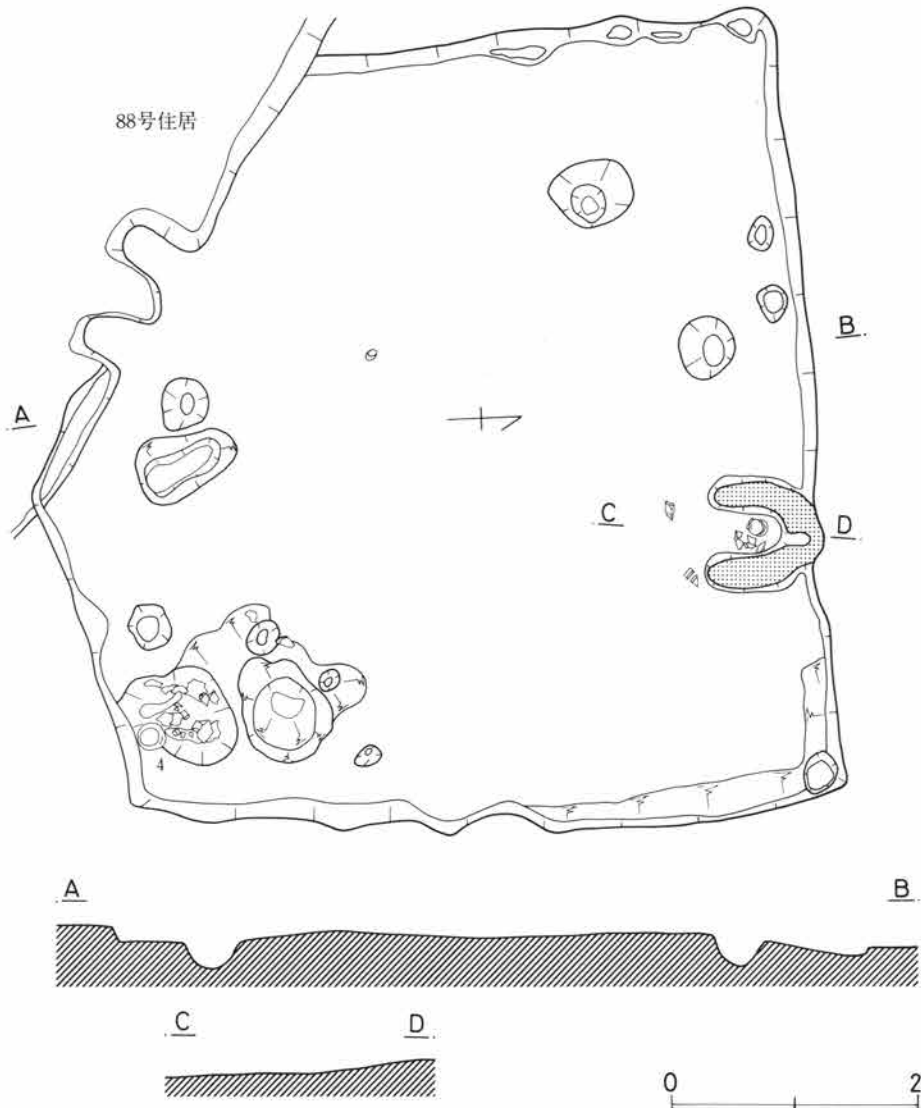
坏は二種あるが、体部と口縁部の段は強く意識され、体部も深みがある点は共通している。異なるのは口縁部の立ち方で、1つは内傾して立つもの、他は外斜して外開きする。鉢は平底で頸部に多少のくびれをみせて外開きする短かい口縁をもつ。紐作り痕がみとめられる。

第171図-13は、ほぼ直にたつ円筒形から端部がやや開く形で、中空になっている。表面には櫛状工具の痕跡がのこる。内面はヘラ削りである。

A-89号住居

J-20区を中心に検出された方形住居である。規模は6.5×6.2mでローム面からの掘り込みは13cmほどで浅い。住居西南部は88号住居と重複しているが、前後関係では88号が後行する。カマドは北壁東寄りに住居内にはり出す形で付設された粘土カマドで、馬蹄形を呈している。カマドの床はややのぼり勾配を呈し、内部にカメが出土し、その下に土製支脚が据られていた。また周辺からもかなり多量の土器が出土している。

貯蔵穴は、住居南東隅に検出されたが、径70cm、深さ40cmと20cmほどのものが二個あいていた。一方は土器片が多量に含まれており他はない。このピットがこの住居につくか否か即断できないが、これを貯蔵



第172図 A89号住居図

穴とすれば、カマドの位置が問題となる。その目で東壁をみると、中央部に壁が外に少しとびだした部分があり、ここに当初カマドが付設された可能性がある。

柱穴は四隅のものは北西、東南部のものが二個検出された他に、住居の西壁とカマドの中間ラインに2個の補助柱穴が検出された。このあり方からすると、四隅の柱穴は別として、棟の位置は住居中央よりやや西に偏していたことが推定される。

その他に壁下周溝が一部めぐっている。

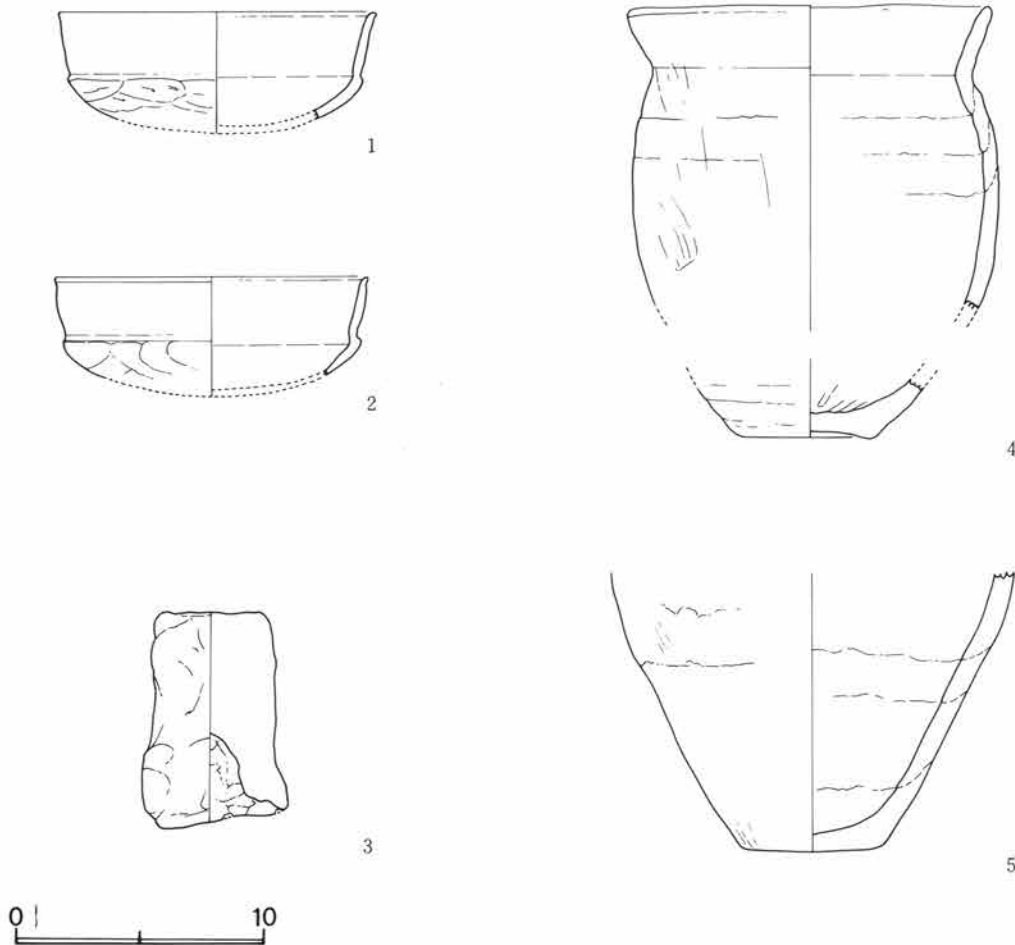
遺物 (図173-1~5) カメ2個、坏2個土製支脚が出土している。

カメは頸部のくびれる長胴化した球形胴で底部はやや上げ底気味の平底。口縁部は短かく外開きして立つ。紐作り痕をのこして器面は凹凸がある。

坏は、体部が深く口縁の立ち上がりも長い。体部と口縁の境には明瞭な段があり、口縁端部はやや外に折れている。

土製支脚は、長さ8.5cmほどで短かく、手捏ねで粗製である。下半部の内面は指でくりぬいている。しかし、粘土は耐火性に富むらしく、二次焼成によるくずれは少ない。

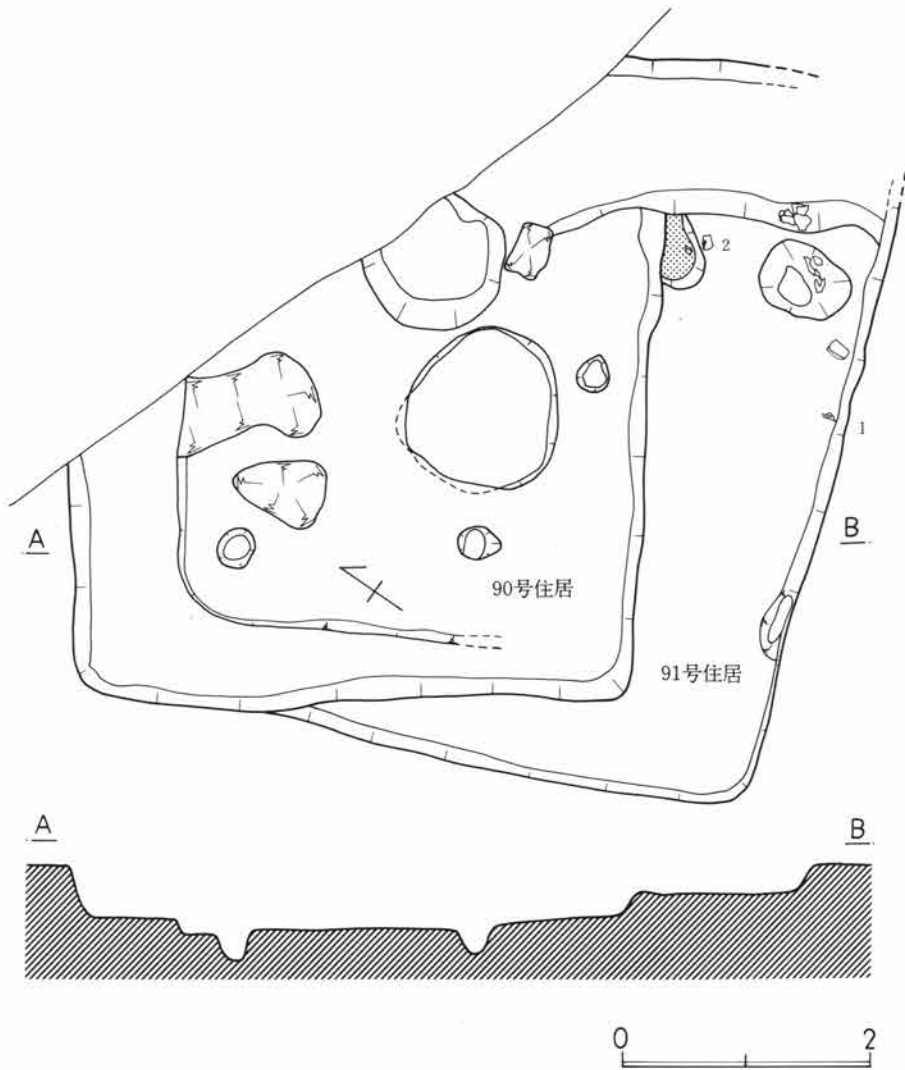
全体的には焼成火度の高い、つくりの良好さがめだつ。



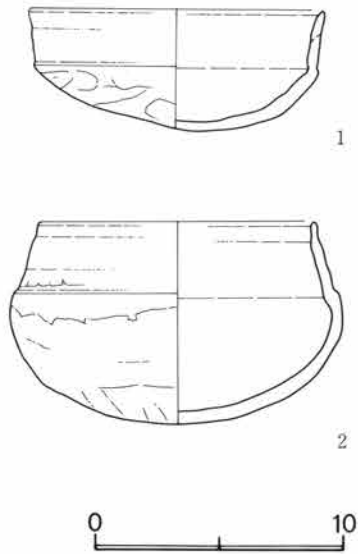
第173図 A89号住居遺物実測図

A-90、91号住居

J-21区に検出された住居で二つの住居が北にスライドするような形で91号が90号に先行する形で重複している。90号住居は一辺4.6mほどの方形とみられるが、床面はかなり荒れている上、遺物がないため不明な点が多い。特に東壁側がカットされていて全体は把握しにくい。特に内側に方形に一段下がる部分は別の住居の可能性もはらんでいる。住居中央の径1.3m、1.1mの二つの円形ピットは中に焼土を含んでおり、他の調査例からすると国分期のものに類例がある。そのほかにも多くの不整形ピットがあり、床面全体が荒れている。外側の面は中央の荒れた面からみると15cmほどの段差があり、しかも、それに付随するとみられる柱穴があいている。柱穴は径20cm、深さ30cmほどで、二つの柱穴の壁からの距離も等しい。カマドなどは東壁、北壁にあったものとみられるから現状では検出されない。



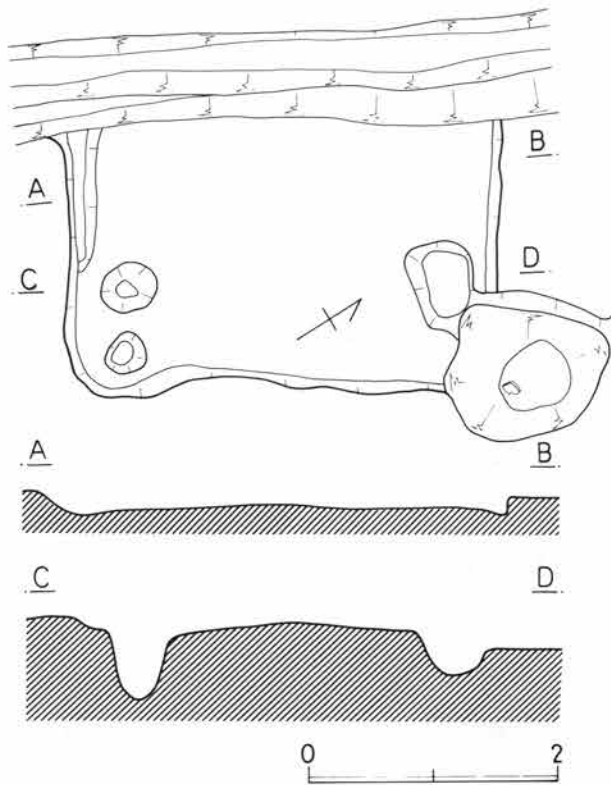
第174図 A90・91号住居図



第175図 A91号住居遺物実測図

み痕が器面にのこる。口縁部は一旦直に立ち、端部は外彎して開く。底部は造り出られている。

坏は、深い体部から、直立する口縁部との境は強い稜線で画される。碗は、極端に深い扁円形の丸底を



第176図 A92号住居図

91号住居は、その下層にある住居で、規模は5mほどの方形住居である。東壁部分に巾1.25m、深さ15cmほどの近世の溝が走っているため東壁部分は切られている。しかし、カマドの袖や貯蔵穴の位置からすれば、壁はそう隔らないところにあつたとみられる。

カマドは東壁南寄りにあつたとみられ、その右脇には貯蔵穴がある。貯蔵穴の径は65cmほどの径をもつ不正形で深さも45cmほどある。

床面は整っており、特にカマド周辺は踏み固められている。遺物のほとんどもカマド、貯蔵穴周辺に限られている。

遺物 (図175-1~2)

91号住居

カメ、坏、わんの出土がある。カメは2個体あるが、頸部のくびれの強い長胴形の体部で、輪積

もつ体部に、内傾する口縁部が長くつく。口縁の境には段があり、基部に弱い沈線が入る。口唇部にも弱い線が入るが、全体的にナデによる変化をもたせている。

A-92号住居

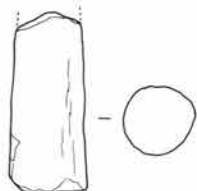
I-23区に検出された方形住居であるが西側を近世のものとみられる5号溝によって切られている。南北長は3.5mを測る。ルーム面の掘りこみは10cmほどで浅い。

カマドは北壁にあつたとみられるが溝に切られたものであろう。北東隅部には貯蔵穴がある。径50×70cmの不正方形で、深さ30cmほどの規模で中に土器片が出土した。

そのすぐ北東に隣接する大型のピットは後からのものである。

住居南東隅にはピットが2個発見されたが内側のものは支柱穴の1つとみられる。径50cm、深さ50cmで直に立つ。

南壁下には中央部で周溝が認められている。巾25cm、深さ10cmほどであるが、他壁には現



第177図 A92号住居遺物実測図

状では見当らない。

床面は全体に中央部がやや高くなる形であるが、よく整っている。

遺物 (図177-1~2) 遺物はほとんどなく、形状を推察させるものは、坏1個である。他には円柱状の土製品がある。

坏は、浅い体部で肩部の張りはない。口縁部と体部の境には明瞭な段があり、基部に弱い沈線が入り、段を一層強調している。口縁部は短かく内傾して立つ。内側の折返しも強く、口唇部は丸くなっている。底部のヘラ削り、口縁のナデとも入念である。

円柱状の土製品は二次焼成痕を受けており、おそらく土製支脚として使用されていたものと思われるが、出土層は埋土中である。

A-93号住居

J-21区を中心に検出され方形住居である。5.6×4.9mの規模をもち、ルーム面からの掘りこみは10cm内外と浅い。

カマドは、北壁中央にルームを削り残して壁内につくりつけられている。

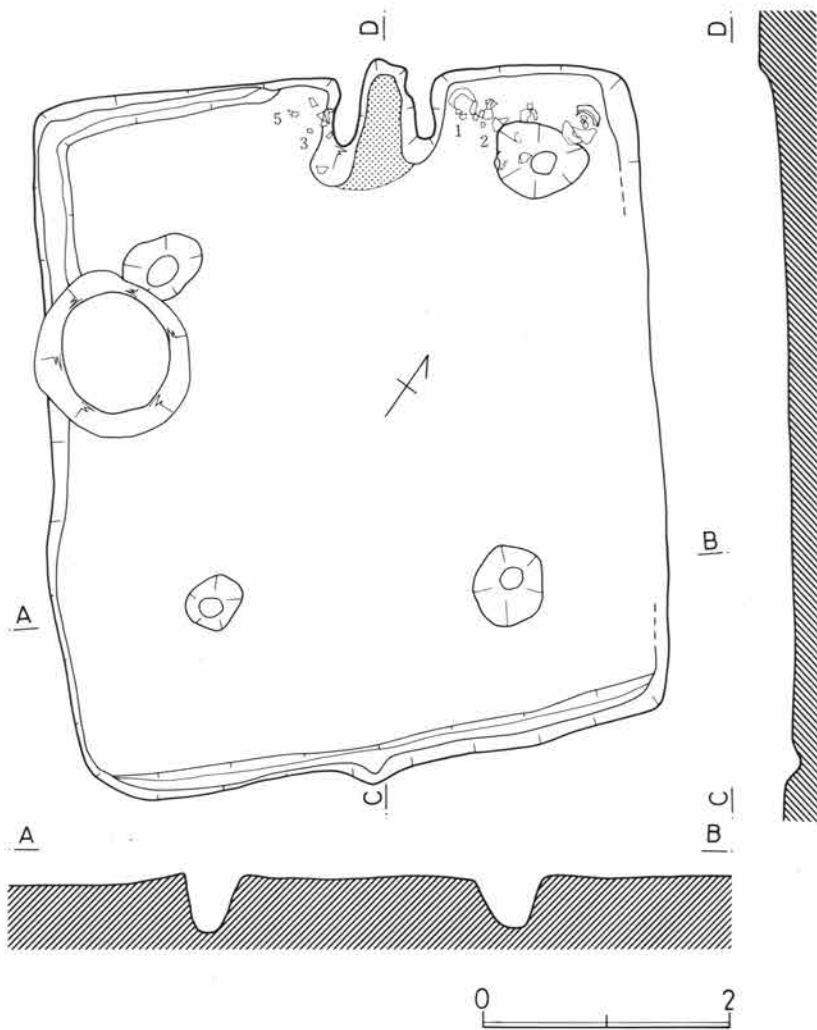
焚口巾80cmで床は、ややのほり勾配をとる。黒色粘土が、ルームの芯を巻いているが周囲はかなり強く焼けている。

その右脇の住居東隅には径60cmの不正円形の貯蔵穴をもっている。深さ40cmほどで途中に坏片がかかって出土した。

柱穴は北東部の1個を除いて3個が検出されている。径45cm、深さ50cmである。各柱穴は直に立つ。

壁下には北西コーナー、南壁部に周溝がめぐっている。巾20cm、深さ8cmほどであまりシャープではない。西壁中央にかかって径1.2m、深さ60cmほどの円形ピットがあるが後から掘られていたものである。

この住居は、カマドのみでわかるように、当初から



第178図 A93号住居図



企画的に掘られてたものとみられるが、これに尺度を当てはめてみると、次のような完尺によるものと推察される。その基準尺は35cm 1尺とみると、南北長、16尺、東西長14尺、カマド位置は東から5尺、西から7尺、カマド2尺分をとる。更に柱穴は東西、南北の各芯心距離はそれぞれ7尺、8尺ではかれる。これで見ると、この住居は高麗尺で企画されたものとみられる、この試論でみると、他のローンを掘りのこした住居も基準尺度ではかれる可能性が多分にあるものと推察している。

第179図 A 93号住居遺物実測図

遺物 (図179-1~11) カメ、コシキ、坏の三種が出土している。特にカマド、貯蔵穴周辺から集中的に出土したものである。カメは、最大径と口径がほぼ同じものと最大径が口縁部にくるものがあるが、後者も差はほとんどない。頸部のくびれも弱く残っている。底部は安定した平底である。体部には紐作り痕がのこっており、たて方向のケズリがみられる。

コシキは、下半は欠くが深い鉢形を呈する形で最大径は口縁端部にある。口縁部は短かく外開きするが、内面はナデがていねいに行き届いていて整っている。

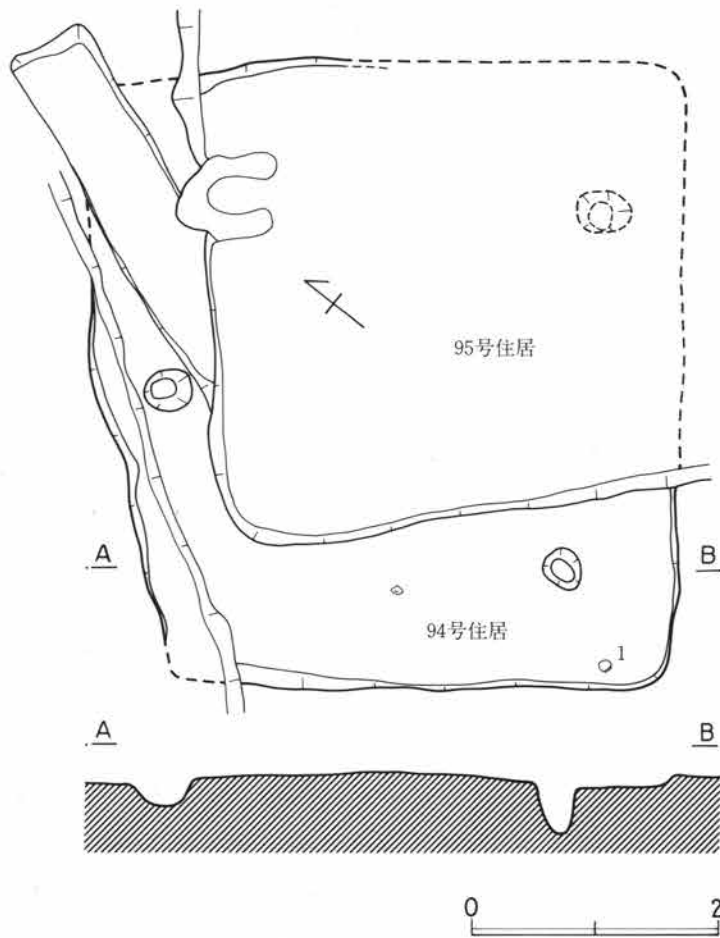
坏は三種がある。深い体部のものと浅いものの二種があるが、深めのものでも肩部の張りはない。口縁の立ち方は内傾するもの、直立するもの、外傾して立つものがあるが、いずれも境の段はやや弱くなっている。特に外傾する類のものは痕跡をのこす程度である。

定形化されない坏があるが、体部から口縁部への移行に段や稜がなく、その点ではむしろわんという方がいいかも知れない。底部は尻がこけて径も小さくなっている。全体的には成形が雑で、ケズリによる整形痕がめだつ。

A-94号住居

平面形態は隅丸の方形住居で、95号住居に切られている。その他に近世溝や中世土坂で切られていて残存状態はよくない。

規模は5.1×4.8mである。ロームからの掘りこみ面は10cmほどで浅い。



第180図 A-94号住居図

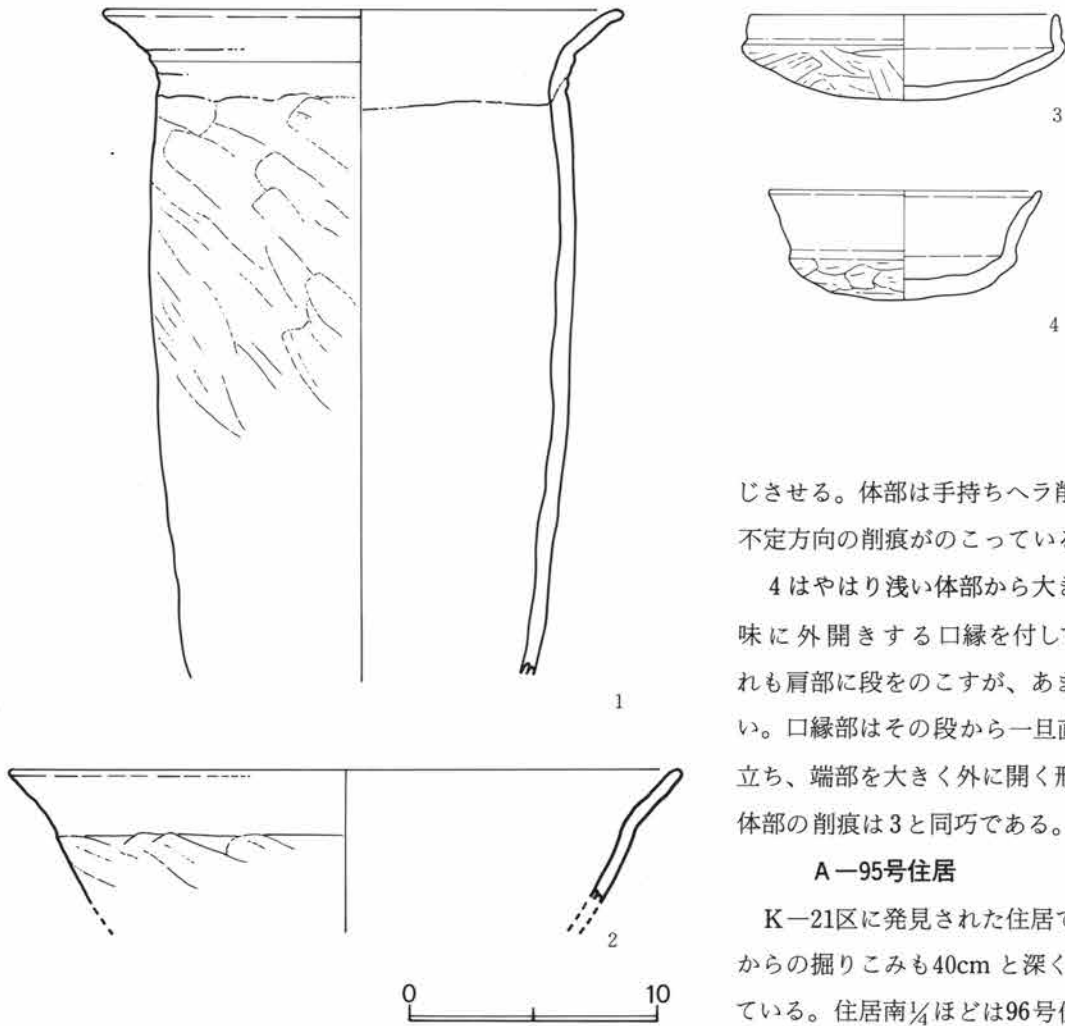
カマドは、切られた住居により消滅したものと推察される。

柱穴は南西コーナー部及び東南コーナー部の2個が確認された。前者は各壁からそれぞれ90cmの位置にあり、後者は南壁から70cm、東壁から1.2mの位置にあり、これからみてもカマドが東壁にあったため、寄せられなかった事情がうかがわれる。西壁側のピットはこの2つの柱穴の中間に位置しているが壁に近いこともあってこの住居につくものか否か決め兼ねる。

住居や溝で切られたこの住居は、その一部を確認しえた状態であり、不明確な点が多い。

遺物 (図181-1~4) 坏、長胴カメ、鉢が出土している。

3は浅い体部から短かく内傾気味に立つ口縁部をもつ。口縁部との境の段は基部の沈線で強調されている。口縁部は横ナデでやや丸味を感



第181図 A94号住居遺物実測図

ている。

カマドは北壁中央部に付設されている。焚口巾26cm、奥行80cmと住居規模にくらべてやや小型である。貯蔵穴は住居の北東コーナー部にあり、50×80cmの長方形を呈し、深さは40cmである。肩部にかかって土器片が出土している。

柱穴は4個がほぼ対角線上に検出されていたが、径40cm、深さ50cm内外でほぼ直立する。

東壁北半分ほどに壁下周溝が認められたが、巾15cm深さ5cmほどである。

貯蔵穴のカマド寄りには粘土帯が10cmほどの高さでまわり、貯蔵穴を保護している。

遺物は床面からの出土は少なく、カメが2個体破片で検出された。他には埋土中からの出土が多いが、住居中央の床面に近い部分から出土している。

遺物(図183-1~5)カメ、壺、坏のセットである。カメは最大径が口縁に来るものと胴部中央に来るものの二種がある。頸部のくびれは後者では比較的大きい。底部は安定した平底である。

わんは薄手の肩の張りの少ない体部から短かく外反して開く口縁をもつ。底部を欠くが小さい平底をもつものと考えられる。

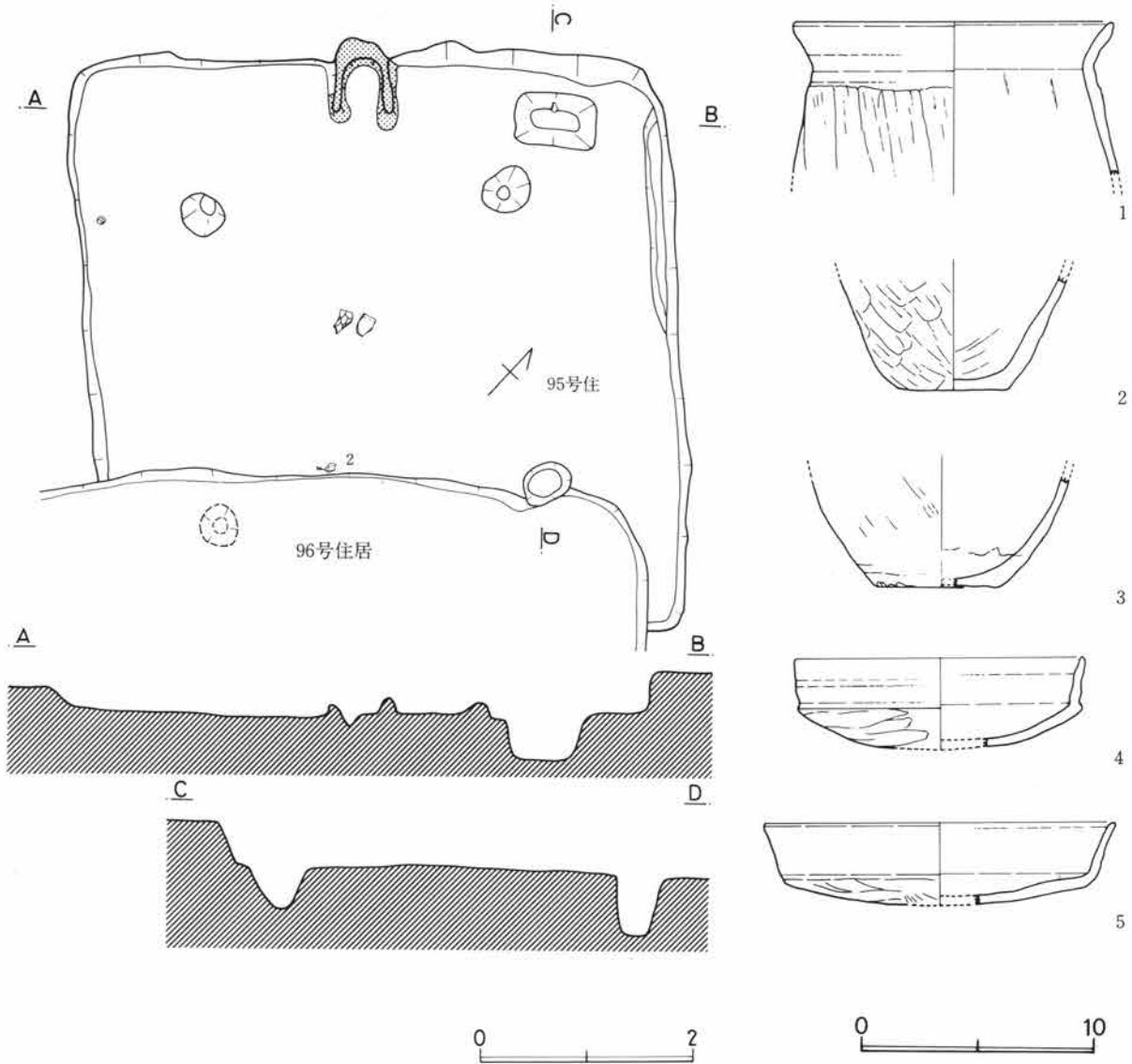
坏は、口縁立ち方に二種ある。直立するものと外開きするものとで前者は段から立ち上がり、中央に弱い

じさせる。体部は手持ちヘラ削りによる不定方向の削痕がのこっている。

4はやはり浅い体部から大きく外彎気味に外開きする口縁を付している。これも肩部に段をのこすが、あまり強くない。口縁部はその段から一旦直立気味に立ち、端部を大きく外に開く形である。体部の削痕は3と同巧である。

A-95号住居

K-21区に発見された住居でローム面からの掘りこみも40cmと深く、形も整っている。住居南 $\frac{1}{4}$ ほどは96号住居によって切られているが、住居の規模は推察できる。東壁長5.3m、北壁長5.7mを算し



第182図 A 95号住居図

第183図 A 95号住居遺物実測図

沈線が入る。体部は共に浅く、特に後者は浅い。また後者は口縁部と体部の境は弱い。稜線で画されているだけで、口縁端部も素辺である。

全体的にカメのケズリはたて、斜の二方向があるが共に強く、胎土中の夾雑物が剖面に出ており、焼成度も低い。

坏類の成、整形はややていねいであるが、わんはつくりが雑である。

A-96号住居

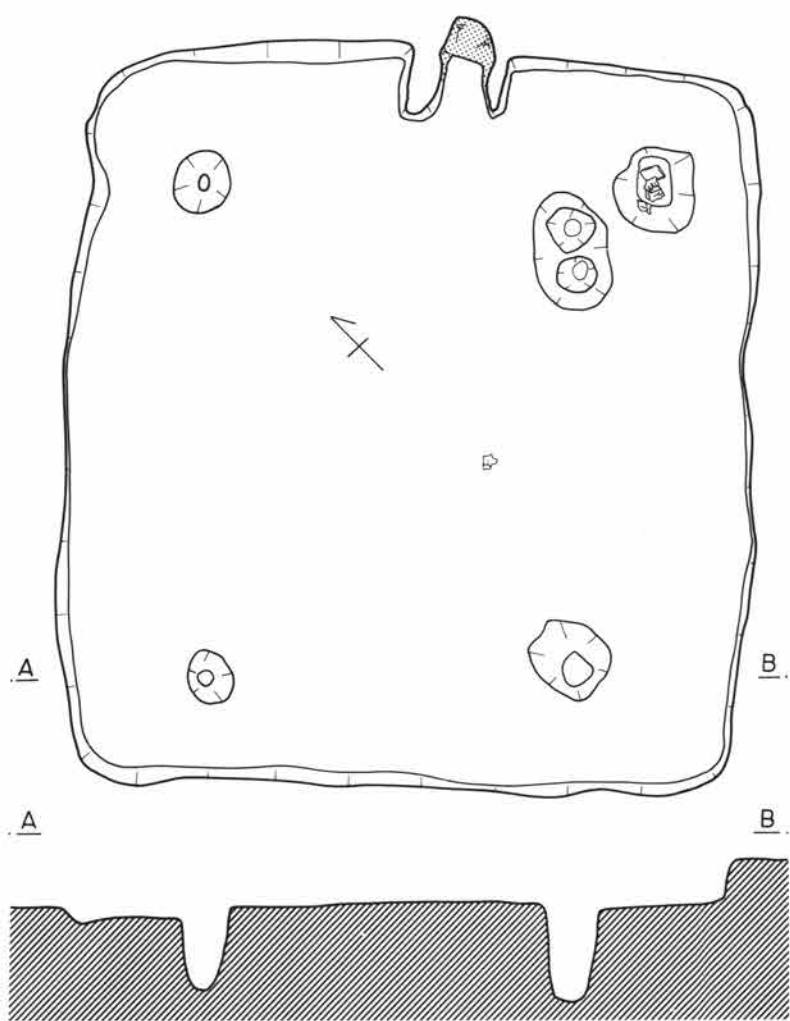
J-22区で発見された方形住居である。ローム面からの掘り込みは30cmほどで深く、状態もしっかりしている住居の一つである。住居の施設としては、カマド、貯蔵穴、柱穴がある。

カマドは北壁中央に付設されているが、これもロームを削りのこして袖とし、その内面を中心に黒色粘土を貼っている。焚口巾は40cm、奥行80cmほどで上り勾配の床をもつ。

貯蔵穴は住居北東隅部に径70×60cmほどの不正方形で深さ50cmの規模であり、内から長胴カメが出土した。底部の穴は長方形であるところをみると本来は長方形の掘り方をしていたものであろう。

柱穴は四隅に四個が確認された。これは50cm、深さ60~70cmで直に掘られている。北東隅の柱穴は2つ

第1節 A地区の遺構と遺物(A-96号住居)



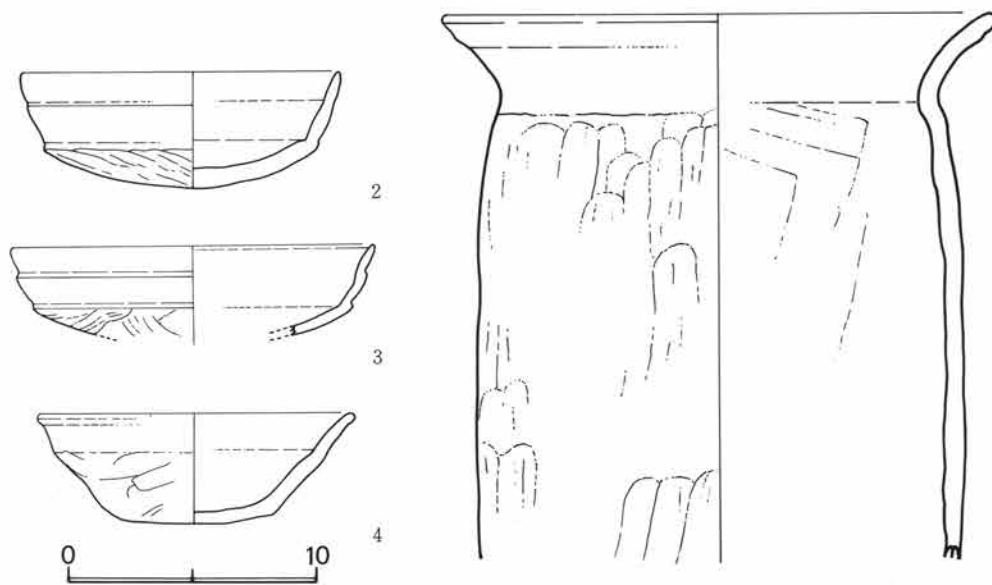
第184図 A96号住居図

の穴が重複しており、建て替えがあったことも推察される。

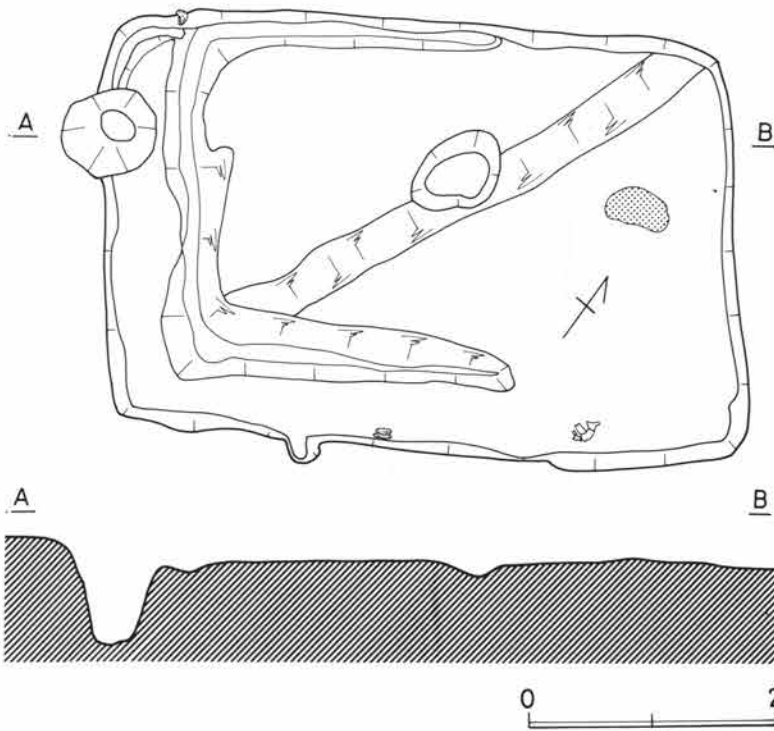
住居は全体によく整っているが、とりわけ床面はよく踏み固められている。カマド前面では埋土がはげするように掘りとれた。西壁側のロームは削られて、壁が低くなっている。

この住居も企画性をもつものとしてみると35cmを基準尺度として東西16尺、南北17尺、カマド位置は東北隅から6尺、北西から8尺でとり、間の2尺にカマドを設置する形をとっている。柱間は東西9尺、南北10尺が基準となるように企画されたものと推定される。

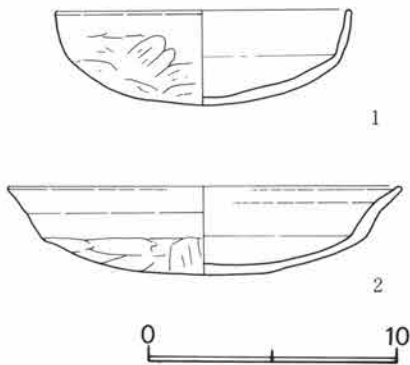
B. 遺物 (図185-1~4) カメ、坏、わんのセットである。カメは最大径が口縁端部にくる形で頸部のくびれはほとんどみられない。口縁部は横ナデがよく行きとどき、口唇部にはおさえの線がのこるほどである。体部は紐作り痕が



第185図 A96号住居遺物実測図



第186図 A-97号住居図



第187図 A-97号住居遺物実測図

消えるほどたて方向のケズリが顕著である。内部のナデも行き届いている。

坏は二個体とも同形である。

体部は浅く、口縁部は外開きして立つ。口縁部には中段に沈線を入れ、変化をもたせている。底部は手持ちヘラ削り痕が顕著で周辺から内側に向けてのケズリが目立つ。

わんは、平底気味の不安底な底から45°の角度で一旦開きそこからやや屈曲して立つ。口唇部はやや肥厚気味である。外面の整形はやや雑である。

この種の土器を含む一群は他の遺構の場合も同様な組み合わせ、特徴を有するところから、時期的

なものを示すものと受けとめている。

住居の企画性と合わせて注目される住居である。

A-97号住居

L-23区に検出された長方形住居である。住居北東隅から南西隅へ対角線上に近世の溝が入り、床を切りこんでいる。ローム面からの掘りこみは20cmほどである。

この住居は床面上に北壁下の壁周溝を共用する形で内部に「コ」の字状に溝がめぐっている。各辺に対して平行に西壁、南壁がこの溝にそって外側を囲むことからすると拡張された住居であると

みられる。

当初の規模は3×4.7mから、3.4×5.2mに拡張されたものとみられる。その際カマドの付設されていた東壁を避けたものとみられ、焼土が一部のこっていた。

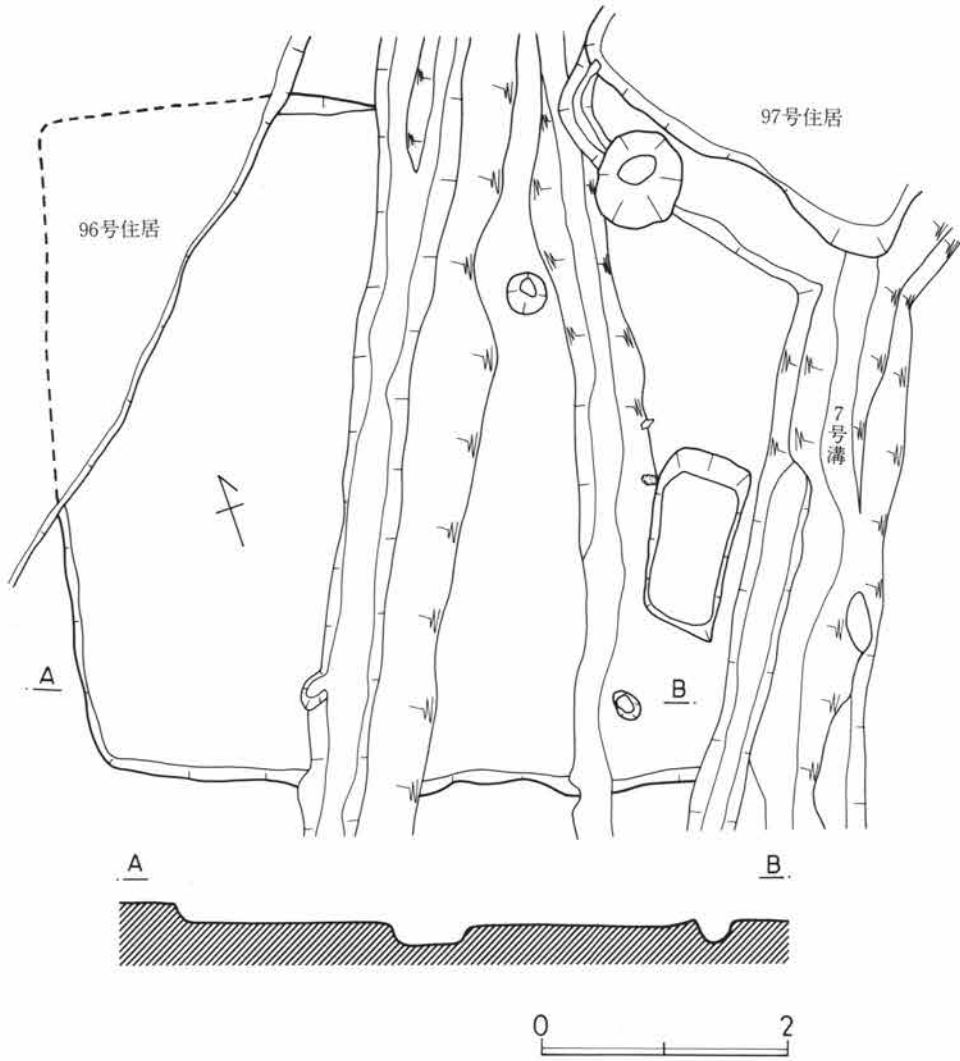
住居内に柱穴とみられるピットは確認できないが西壁上のピット（径深さとも60cm）、南壁上掘りこみなどを考慮すると、柱は、壁上かそのすぐ外側に設置された可能性が強い。

床面は後世の溝を除けばほぼ安定している。遺物は南壁下に坏2個が出土している。

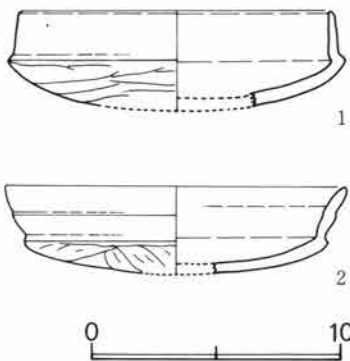
遺物（図187-1～2）坏は二個体とも体部肩の段や稜が不明瞭で体部が浅い。1は弱い稜から長い口縁が立つ。2は浅鉢状に肩部から外彎気味に大きく開く口縁部をもつ。

A-98号住居

K-23区で検出した方形住居とみられるが、住居東側を4条もの近世溝によって切断され、更にその東北コーナーを、97号住居によって切られている。ローム面からの掘りこみは15cmほどで溝の多い部分ではロー



第188図 A98号住居図



第189図 A98号住居遺物実測図

ムが削られている。範囲は貯蔵穴の位置からの推定で、5.5mの方形とみる。

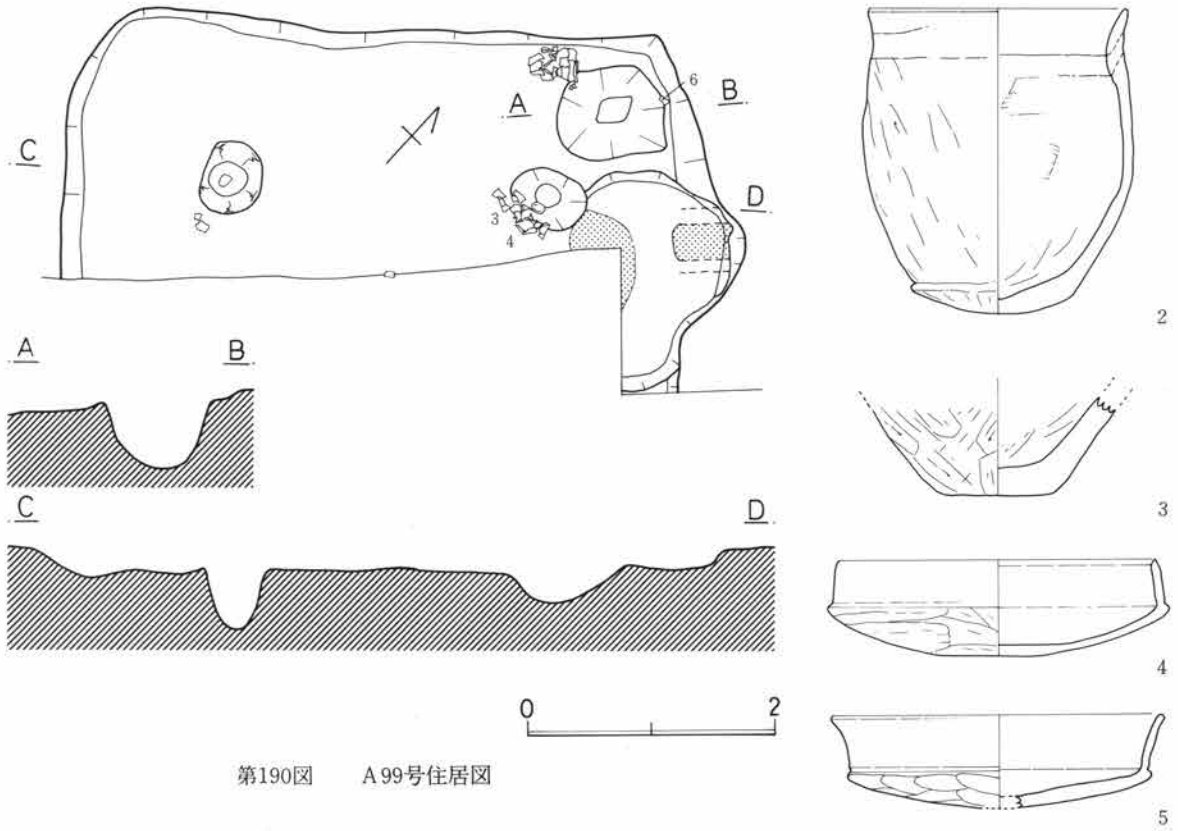
カマドは東壁東寄りにあったと推察するが、その論拠は貯蔵穴の位置からである。その貯蔵穴は径70cm 深さ40cmほどの不正円形を呈している。おそらく、この左側壁に接してカマドが存在したとみられるが確認はない。

柱穴は2個、それらしいものが発見されているが径20cm 深さ15cmと小規模で確実性にとぼしい。遺物は後世の掘削により、ほとんど床面上からは検出されていないが、カマド、貯蔵穴とみられる周辺から

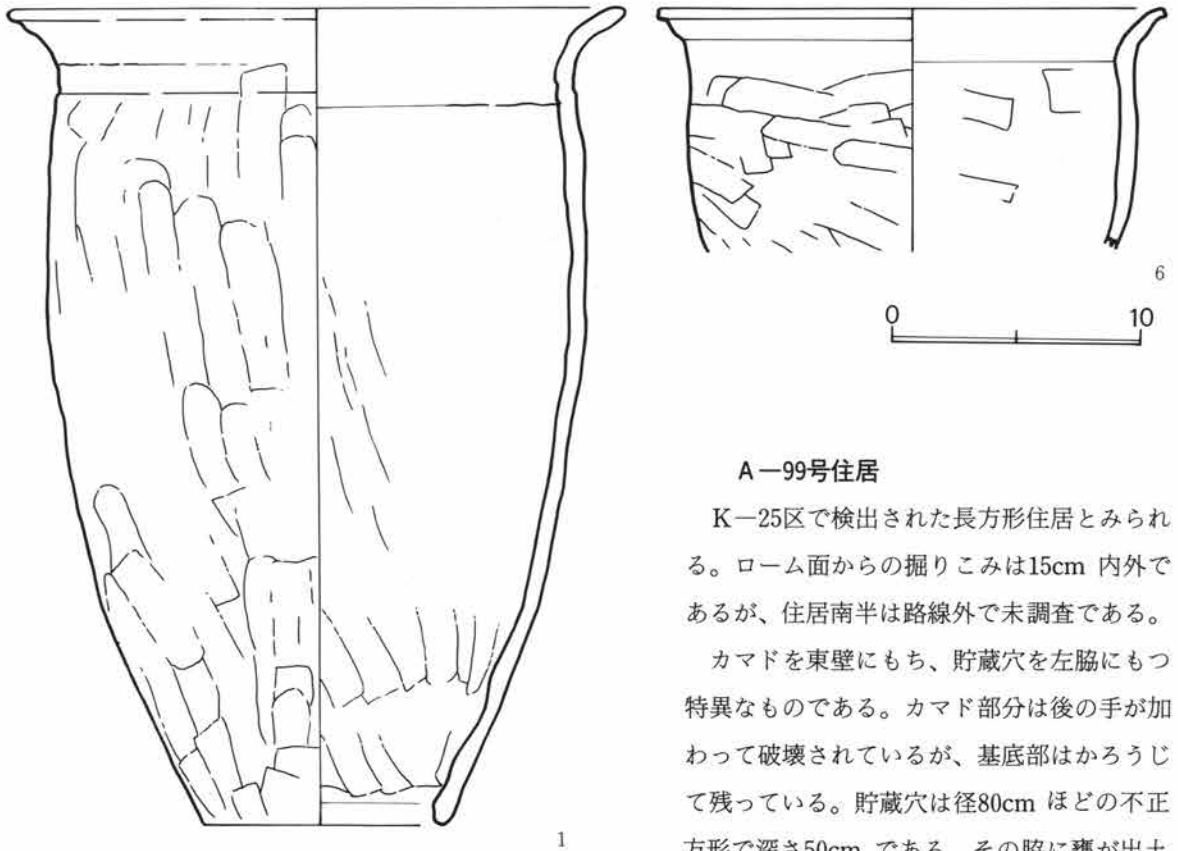
坏2個体が出土した。

遺物 (図189-1~2) 典型的な有段口縁の坏である。1は浅い体部からやや内傾気味に立つ口縁部を有する形で、段はしっかりしている。

2は口縁が外開きする形で口縁は沈線で二段に画す意図がみられる。



第190図 A99号住居図



第191図 A99号住居遺物実測図

A-99号住居

K-25区で検出された長方形住居とみられる。ローム面からの掘りこみは15cm 内外であるが、住居南半は路線外で未調査である。

カマドを東壁にもち、貯蔵穴を左脇にもつ特異なものである。カマド部分は後の手が加わって破壊されているが、基底部はかろうじて残っている。貯蔵穴は径80cm ほどの不正方形で深さ50cm である。その脇に甕が出土した。

柱穴は北側の2穴が確認されたが、径、深さとも50cmで直に立つ。

カマド周辺は径1.5mほどの不正円形のピットが掘られ、カマドを破壊している。そのピットの中にカマドの焼土が入りこんでおり、この掘削の際カマドが消滅したことを物語っている。

遺物 (図191-1~6) カメ、コシキ、小型カメ、坏が出土している。カメは最大径を口縁にもつ長胴形、コシキはこれも同様で、底部を欠く単孔である。

小型カメは不安定な平底で最大径は体部中央に来る。つくりは雑である。

坏は有段で口縁は外開きするものと内傾するものの二種に分かれる。体部は浅く、口唇部をヘラでおさえ

ているものもある。

全体につくりは雑で、体部のヘラ削り技法が顕著である。

A-100号住居

L-24区に発見された住居で、4.6×4.2mの規模をもつ。

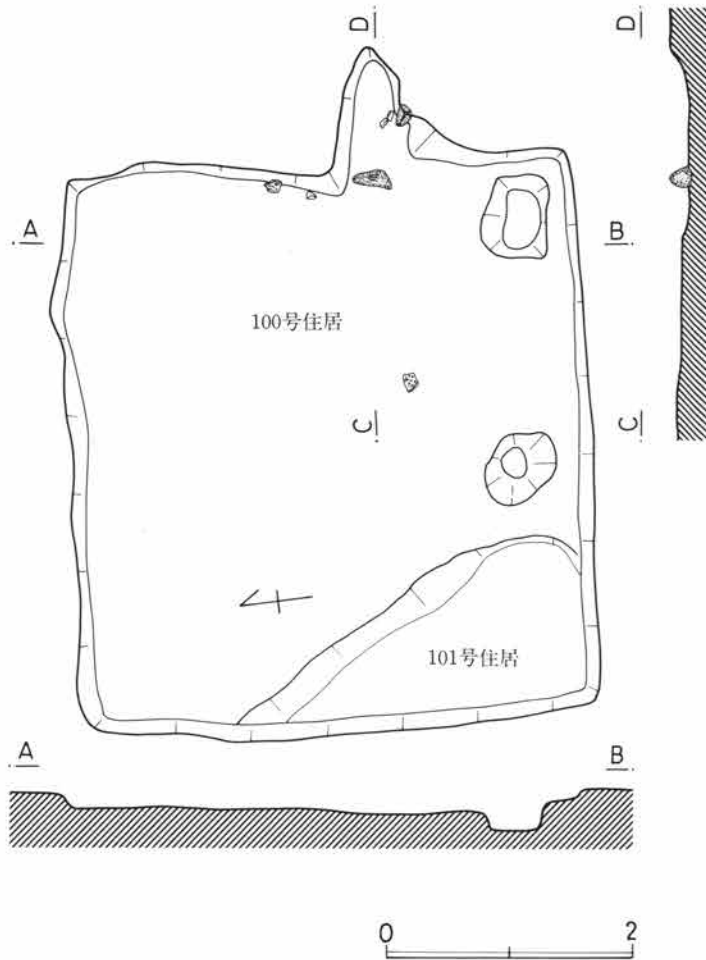
カマドは東壁中央からやや南寄りに壁外に造り出して付設されている。焚口巾50cm、奥行120cmほどで、カマドの部分で壁の方向にややズレがある。

住居の南東隅には貯蔵穴があり、径50cm 深さ15cmほどの規模がある。

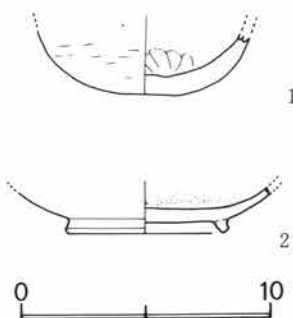
南壁下中央部にピットがあるが径40cm 深さ20cmほどである。床面の踏み固めの状態からみて入口部と関係するものとみられるが確認できない。

他に、住居の南西部で一段と深い部分があったがこれは、この住居と直結するものではなく、むしろ、床面をつくる以前の原地形に起因するとみられるものである。

遺物はカマド周辺を中心に少量が出土した。



第192図 A 100号住居図

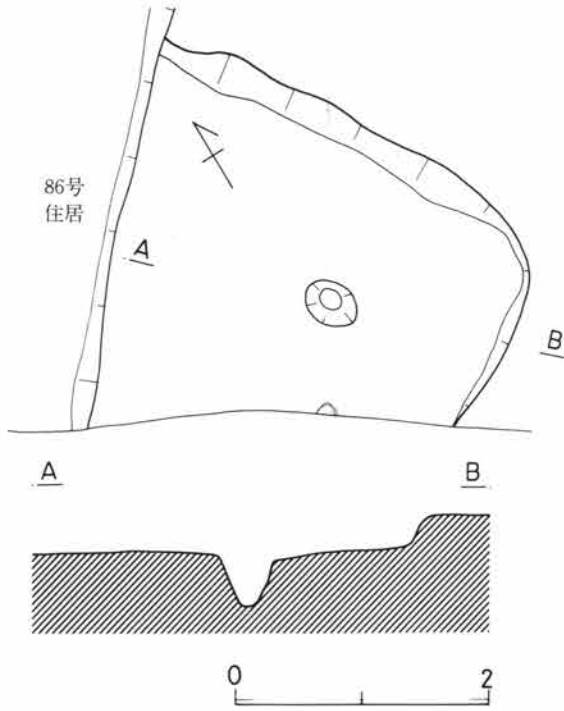


第193図 A 100号住居遺物実測図

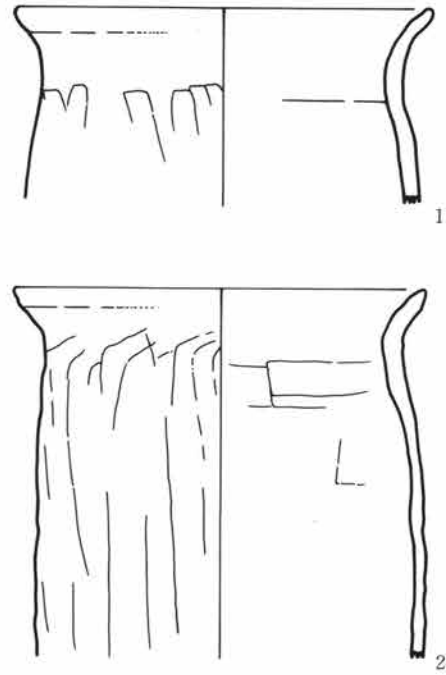
遺物 (図193-1~2) 土師器のわん及び灰釉陶器のわんを出土した。1は平底気味の底から扁球状の体部をもつ小型だが、口縁部を欠いている。2は灰釉陶器である。付け高台で、釉はドブヅケである。素地は灰色でやや青みをおびている。高台の接地部分は内側である。

A-101号住居

M-23区に検出された住居で、路線外にほとんど出るうえ、住居北側を、86号住居で切られて、わずかに全体の1/3ほどを調査したもののみ



第194図 A101号住居図



第195図 A101号住居遺物実測図

遺物（図195—1～2）カメ2個を出土した。両方とも下半分を欠いているが、体部は長胴形で、頸部のくびれをわずかにのこしている。口縁部も短かく外開きする形で、最大径は口縁と胴部最大巾とほぼ同じである。器表の整形のためのへら削りが著しい。

A—102、103、104号住居 J—25、26区に発見された住居で、三つの住居が重複していた。新旧関係では102から順次104号住居と古くなる形である。

102号住居は2.9×2.3mの規模をもつ隅丸長方形を呈する住居である。ローム面からの掘り込みは30cm前後で、壁の立ち上がりは緩傾斜を見せている。カマドは東壁中央の壁外に造り出されている。焚口巾35cm、奥行1.5mで先端に煙出口があく。床面はよく整い、平坦である。住居内に柱穴は見当たらない。

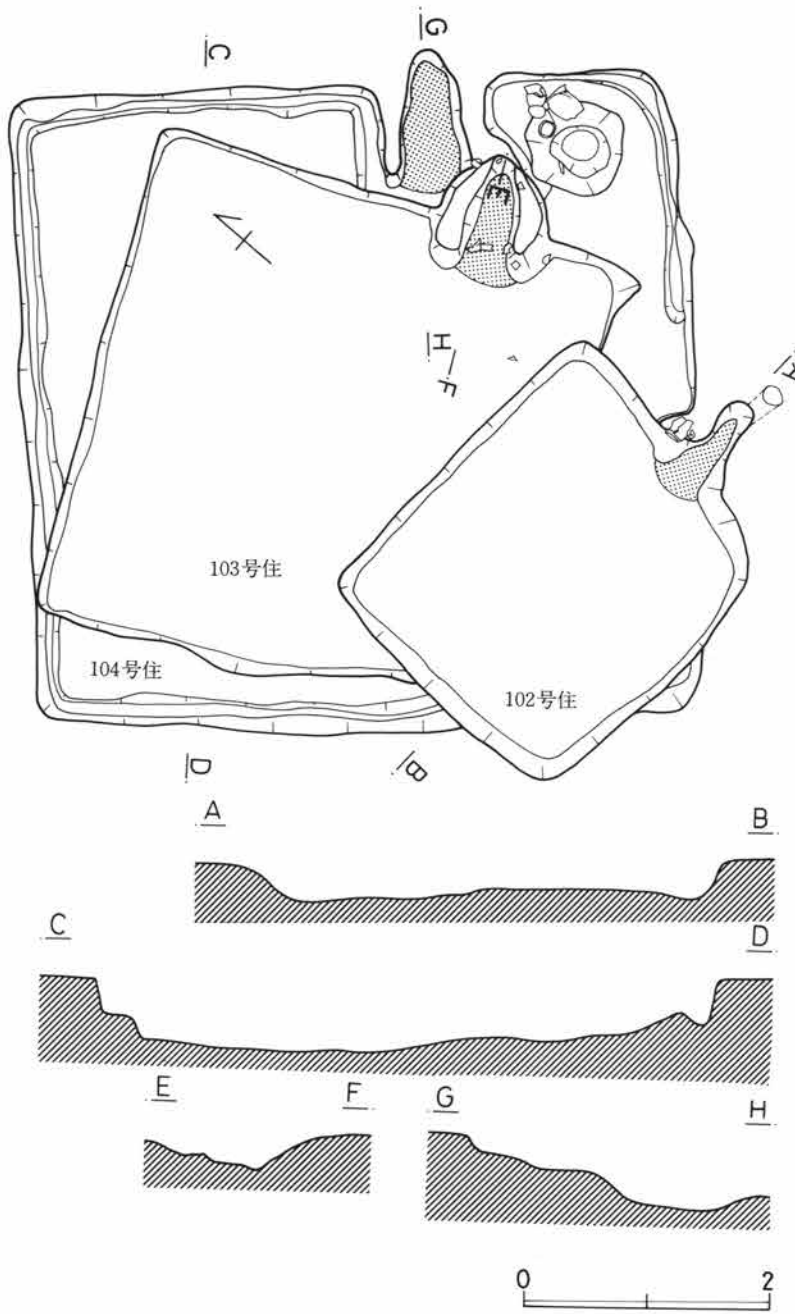
遺物はカマド左壁外に検出された他は埋土中に破片が認められた程度である。

103号住居は104住居の内側に軸線をズラした形で検出された方形住居である。ローム面からの掘りこみは、45cmと深い。規模は4×3.9mと方形である。カマドは東壁南寄りに付設された粘土カマドで袖部を少し壁内にくわしているが、ほとんど壁外に造り出している。馬蹄型にまいた粘土の焚口巾は40cm、奥行は1mである。住居床面には他に施設は見当らず、平坦である。

遺物はカマド中や周辺からカメ、坏、須恵器坏が出土した。

104号住居は最下層に検出された住居で5.4×5mの規模をもつ。東壁中央やや南寄りに燃焼部を壁内に煙道部を壁外に出す粘土カマドが確認された。ローム面からの掘りこみは30cmであるので、重複部分は103号住居に切られているが、東壁側の重複しない部分でカマド、貯蔵穴を検出したものである。焚口巾50cm 奥行1.1mと大型である。貯蔵穴は径70cmの隅丸方形を呈し、深さ60cmほどである。この縁にかかって多くの遺物が重なり合って出土したほか、石製模造品も出土している。

この住居の重複は、本遺跡における住居の主軸方位、カマド位置と構造、土器変化について確実な資料を提供してくれる点で貴重である。



第196図 A-102~104号住居図

A-103号住居遺物 (図198-1~10)

カメ、小型カメ、坏、須恵器坏が組合わさって出土している。

カメはカマド中から出土したもので、形状は頸部のくびれた長胴カメである。最大径を体部中央にもつ形で底部は不安定な平底である。口縁部は一旦立ち気味に開き端部を更に水平方向に折る。体部はたて方向のケズリが顕著で器肉がうすくなっている。口縁の形、底部の状態などに次の時期の「コ」の字口縁への移行のきざしがみられる。

小型カメは丸底気味の平底であるが体部中位以上は欠いて全体は不明である。また5は底部の状況からすると古式に属するともみられるが、場合によっては下層住居との混入が考えられるかもしれない。

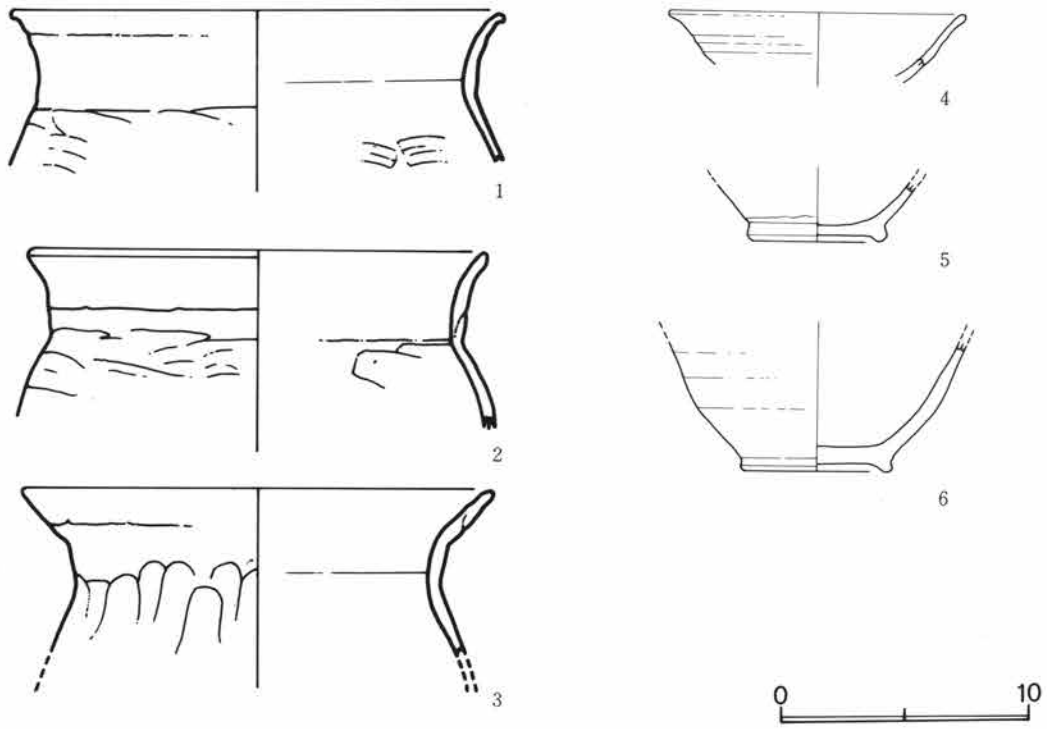
坏は比較的深い体部から丸底で立ち上がり、口縁部を稜で画して直立または内傾する形である。9、10の端部の外そぎは稜を強調するための手法とみられる。9は他の一群に比べ、体部の浅さがめだつ。底部はすべて手持ち不定方向ヘラ削となる。

須恵器坏は、大きい平底から体部を逆「ハ」の字状に開く。口唇部は外そぎ気味に尖る。ロクロ痕も目だたないほど入念に横ナデして作りがよい。底部はヘラおこしで無調整である。

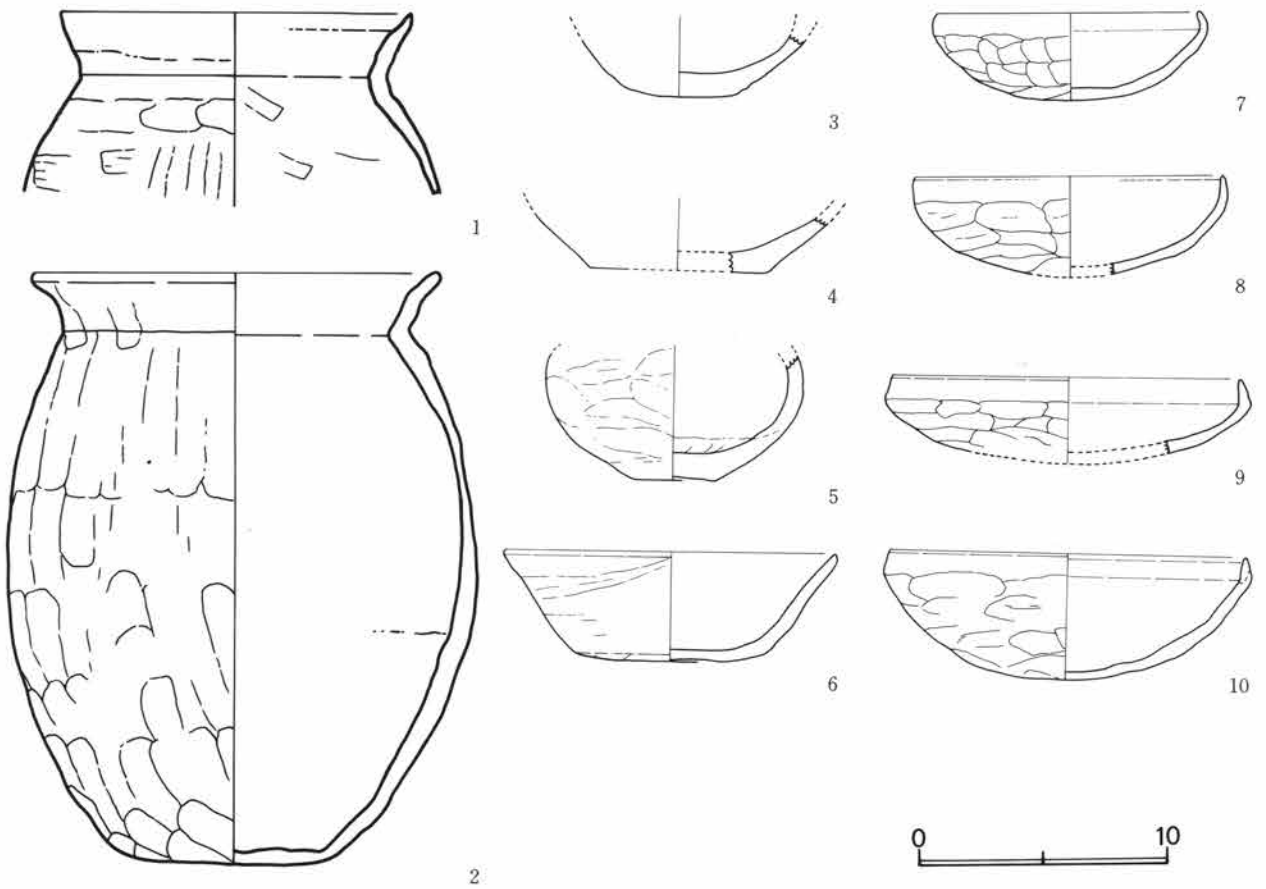
全体的には真間期の特徴を有しているが、下層住居との関係で混入も心配される一群の土器である。

A-104号遺物 (図199-1~8) 床面に直結して確実に出土したのは2の小型カメ、3のコシキ、7の石製模造品の剣形の3点である。小型カメは大きい平底から内彎して立つ体部をもみち、口縁は頸部のくびれをみせずに短かく直立する形である。底部は図でみると突出気味であるが、これはむしろ成形の雑さから来るものである。

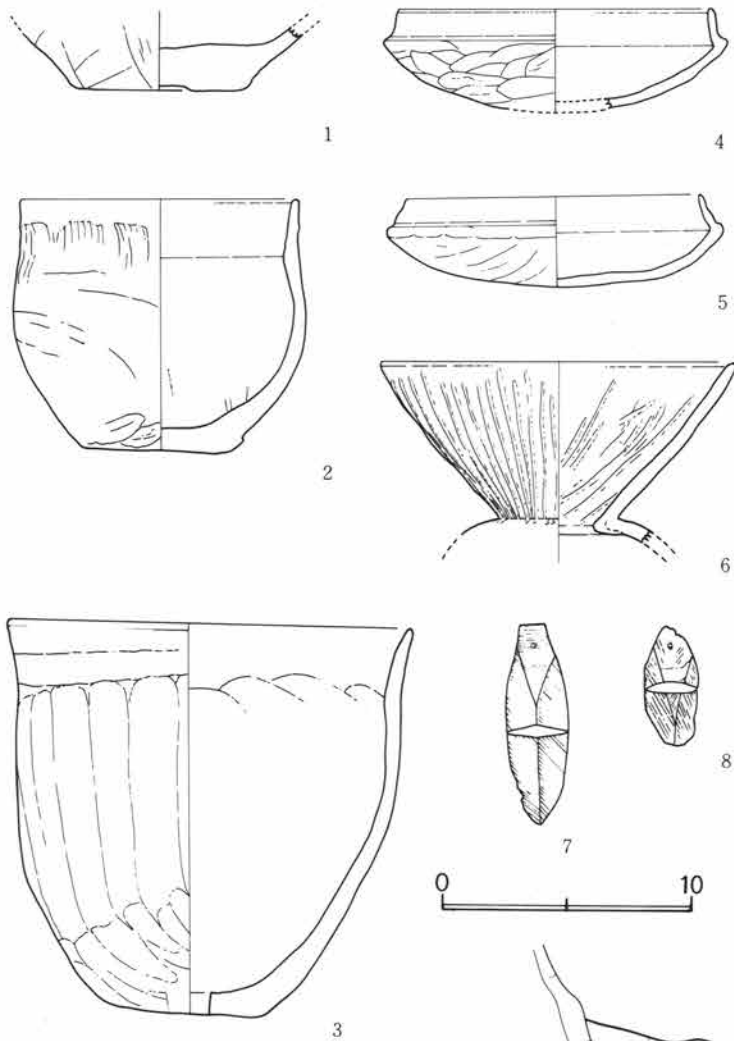
コシキは鉢形を呈する器形で、底部に単孔を焼成前にうがっている。不安定な平底で、孔の径は1.5cm。口



第197図 A102号住居遺物実測図



第198図 A103号住居遺物実測図



第199図 A104号住居遺物実測図

A-105号住居

H-24区で検出された隅丸長方形の住居で住居西壁部を中世溝で切断されている。ローム面からの掘り込みは10cmほどで浅い。規模は3×4mと小型である。

カマドは東壁南寄りに寄せて方形掘方をもつ粘土カマドを築いている。焚口巾40cm、奥行60cmで、煙道は不明である。

壁の立ち上がりも傾きをもち、床面もあまり整わず、踏み固められていないで軟かい。

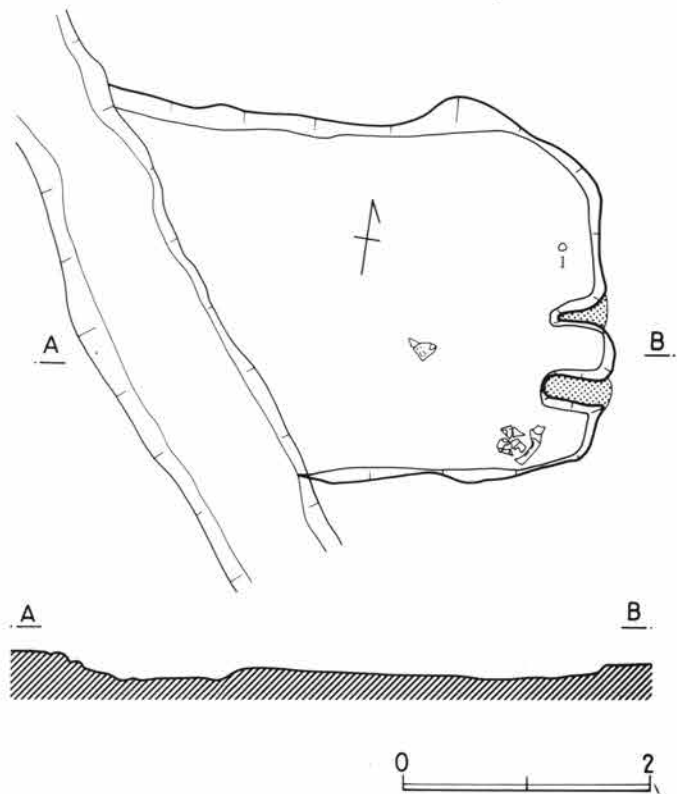
遺物はカマド周辺に少量認められた他は、ほとんど破片すらなかった。

縁部は短かく外反し、口唇部は指おさえて整えている。外面の整形は口縁横ナデ、体部は上半をたて方向、下部を斜方向のヘラ削りである。

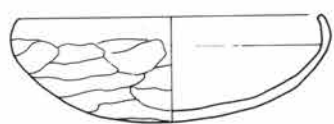
石製模造品は剣形のものが2個出土している。中央に稜線をおき両刃をかどった剣形で先端を鋭利に尖らせる。柄部に小孔を穿ち整った形をしている。他に同種のものが1個ある。

5は小片が床面から出土し、埋土中のもとの接合できた坏である。肩部に強い段を有する坏身で、口縁部高より体部が深い。他に埋土中に同種のものが1個出土した。

全体的にはまだ整形に雑さがみられる他は、高火度焼成で焼きもかたく、全般にセットとしては、鬼高II期の範疇に属するものとしてとらえることができよう。



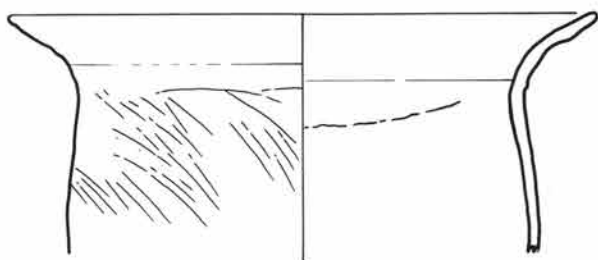
第200図 A105号住居図



1

遺物 (図201-1、2) カメと坏が出土した。

カメは、口縁端部に最大径が来る形で器内のうすい長胴カメである。頸部はややくびれをみせるが、そこから口縁は水平に近く開くことがある。胎土中に砂粒などの夾雑物を含むこと焼成火度の低いこと、ヘラ削りの存在など、特徴的である。



2

坏は内斜口辺の坏である。丸底の大型坏で体部は深い。口縁は肩の部分に稜をもたずゆるく内湾する感じである。口唇部はナデ技法、体部外側はヘラ削り技法がめだつ。

全体的には真間期の範疇に入るものとみられる。

A-106号住居

J-24区に検出された住居であるが近世溝、中世土壇などに分断されたり、97号住居と重複したりしてかなり破壊されている。住居の規模は3.7m × 4mほどのものと推定される。

住居の範囲は壁下周溝がめぐる状態があり、その中や住居床面状の固い面から遺物が出土したことで住居とみたものである。

周溝はやや壁寄りが深く、落ちこみは住居の中から緩傾斜で落ちている。深さは6~7cmで、深い部分は10cmほどである。周溝のめぐり方でいえば、隅丸長方形とみられるが、南西隅部のみの確認であるためはっきりしない。

主軸の方向は磁北に近く、他のいくつかの住居と共通するものがある。

東壁を切る中世土壇は30cmほどの深さで床面を切る。更に東壁部分も溝で切られ、全く壁の立ち上がりはみられない。

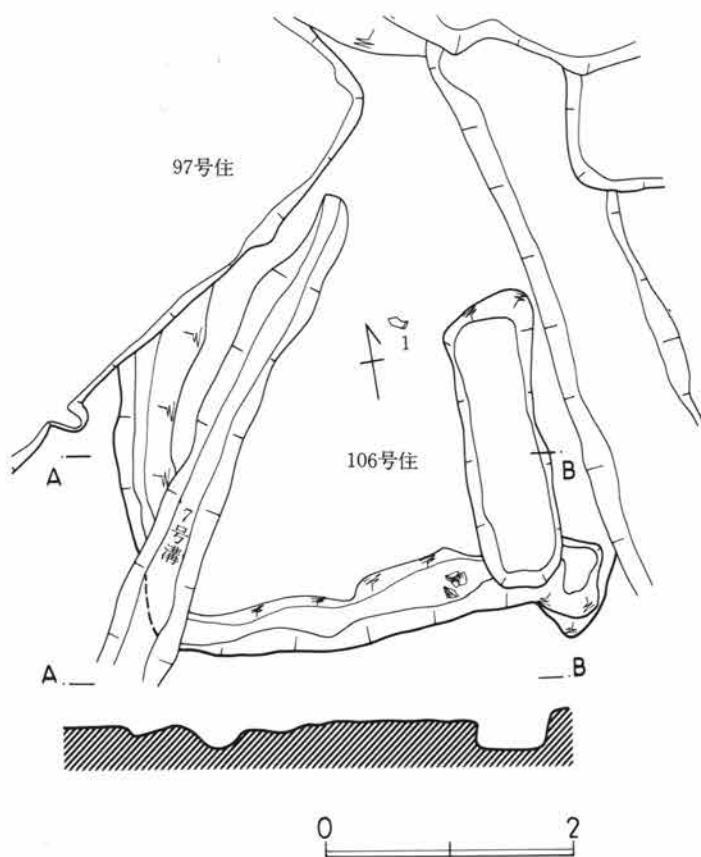
住居西北隅部で重複する97号住居との前後関係は97号が先行する。

更に北壁部分は他の中世の方形掘りこみで切られている。

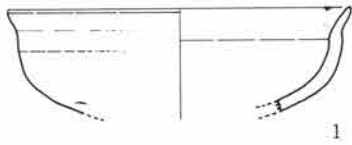
床面はやや荒れていて凹凸があり、しかも踏み固められていない。

カマドは東壁部分にあったとみられ、

第201図 A105号住居遺物実測図



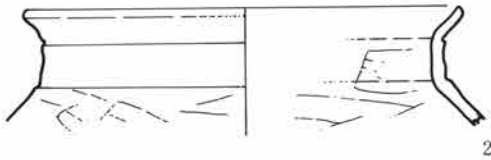
第202図 A106号住居図



土壇のまわりに少量の焼土が堆積していた。遺物も南壁周溝中と土壇西北端に発見されていることも推定される。

遺物(図203-1~3) カメおよび坏の出土がみられた。

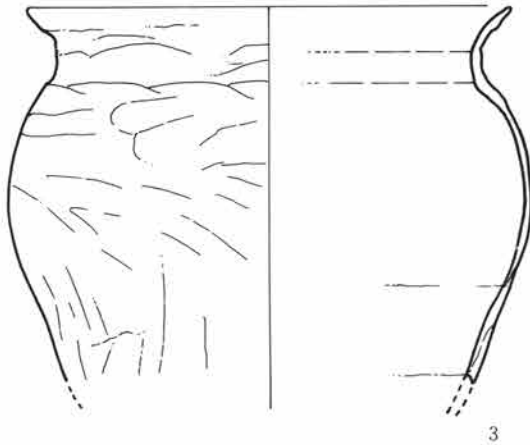
2のカメは口縁部に特徴がある。即ち、やや締まった頸部から一旦直に立ち、そこから大きく外反して口縁部が開く形である。



いわゆる「コ」の字口縁を呈するカメである。体部は肩が張り最大径が胴部上半部にくる。下半部はすぼまっている。底部は欠くが、やや大きめの不安定なものと思われる。この土器の特徴は胎土中に細砂を混じること、顕著なケズリは体部に認められるが、やや生乾きの段階で鋭利なヘラ状工具で削ったものとみられ、器肉が極端にうすくなっていることである。

器内はナデが丹念でよく整っている。

3もこれと全く同巧である。



坏は体部が深く、肩部のはった頸部から短かく外斜する口縁をもつ。体部はヘラ削り後ヘラでまた調整しており比較的よく整っている。形状からすれば古式をのこすものであり他から流れこんだ可能性がよいものとする。全体的には「コ」の字口縁のカメの時期を基準にすべきであろう。

A-107号住居

N-16区に検出された住居であるが、西壁部分が路線外にかかって調査ができず、更に西北部を近世溝が切っているため不明である。

住居はしたがって全体の $\frac{2}{3}$ ほどを調査したのみである。

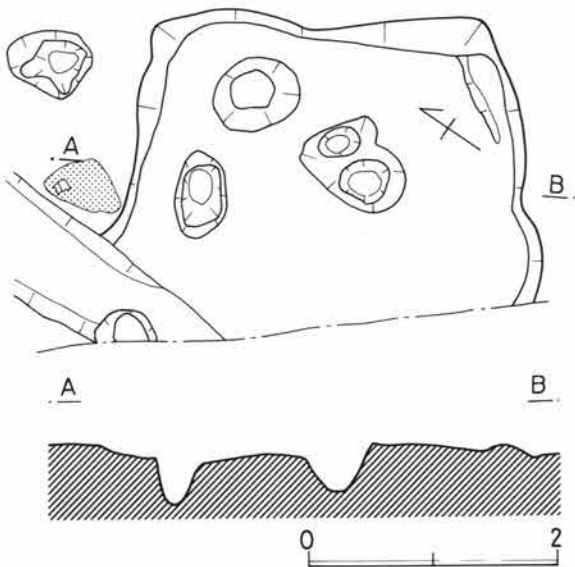
規模は確認できる東壁部分で3.1mあり、掘りだした部分の西端の壁の状態が屈曲傾向をみせはじめていることからすると、東西方向もほぼ南北長と同様な規模を有するものと推定される。ローム面からの掘りこみは10cm弱で浅い。

遺構内には4個の柱穴様ピットを有しているが径、深さとも30cmほどである。中央の2個が支柱穴で、この上に南北方向の棟ののつたとみる。

床面はやや平坦でなく、床は踏み固められていない。カマドは確実でなく、北壁に焼土が堆積しているのみである。

遺物(図205-1~5) カメ、坏、須恵器坏3個

第203図 106号住居遺物実測図



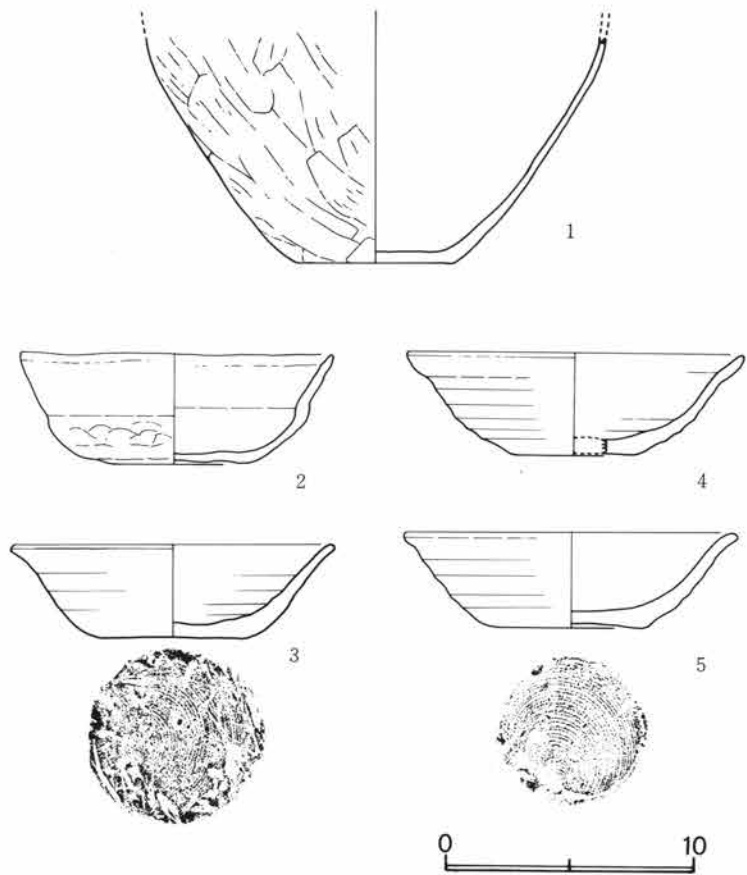
第204図 A107号住居図

第II章 遺構と遺物

が出土している。カメは口縁を欠くため不明だが残存部分のようすからみて「コ」の字状口縁を呈したカメとみる。

坏は体部を折りまげ指頭でおさえたもので、そこからわずかに肩をはり、口縁を開く。器面に凹凸がみられる雑なつくりである。

須恵器坏は大きめの平底から浅い口縁の立ち上がりをみせる。体部にはロクロ痕、底部は右回転糸切り、口唇部はやや外反する。



第205図 A107号住居遺物実測図

A区、H～I区Pit一括

住居と関係づけられないピットについてここでH～I区のものを集成したものである。

したがって特に視点をきめて拾い出したものではない。

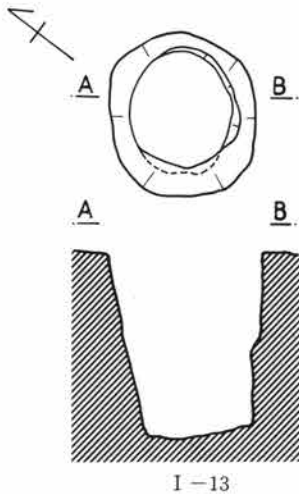
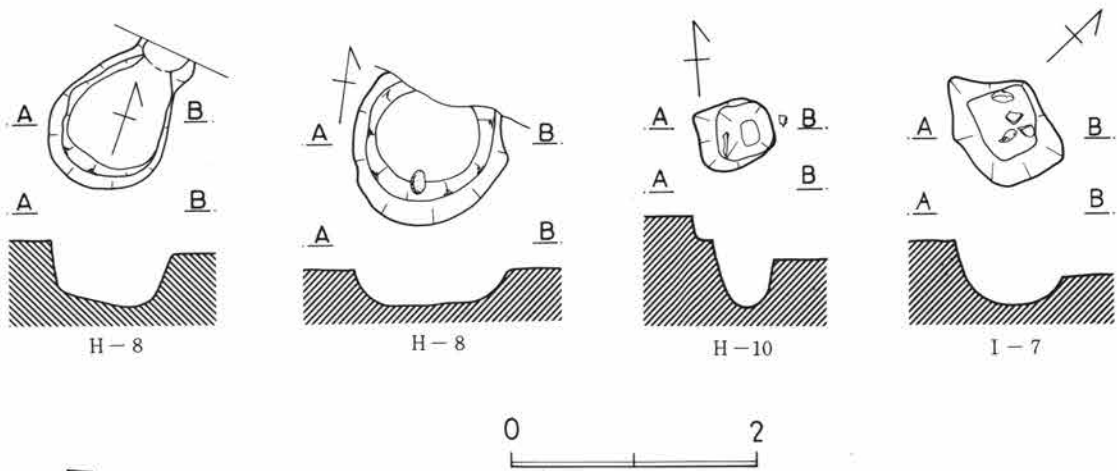
取り上げた遺構は主として遺物を出土したものを中心にとり上げている。

分布でみると溝の周辺に出土する大型ピットが特に目だつ。また地形が東側で次第に下がる部分にも集中してくる傾向がみられる。

全体的には柱穴状ピット、井戸、土壇などが多いものとみられる。その他には、住居が未確認で柱穴が一部検出されものもあろうと考える。

ここで取り上げたピットについて、形状、規模、出土遺物、性格などについて概略をみたのが次表である。

地点	形状	規模m	深さm	出土遺物	備考
H-8-1	円形	1.25	0.25	坏(鬼高II)	掘立柱穴?
H-8-2	不正円形	1.20×1.0	0.4	ナシ	掘立柱穴?
H-10	不正方形	0.6×0.5	0.55	坏(鬼高II)	貯蔵穴?
I-7-1	不正方形	0.8×0.7	0.5	坏13個(鬼高III)	貯蔵穴?
I-7-2	円形	0.5	0.4	高坏(鬼高II)	
I-13	円形	1.15	1.4	灰釉長頸瓶	井戸
H-11-1	円形	0.4	0.3	砥石、提げ砥	柱穴?
H-11-2	不正円形	0.6	0.5	コシキ	柱穴?

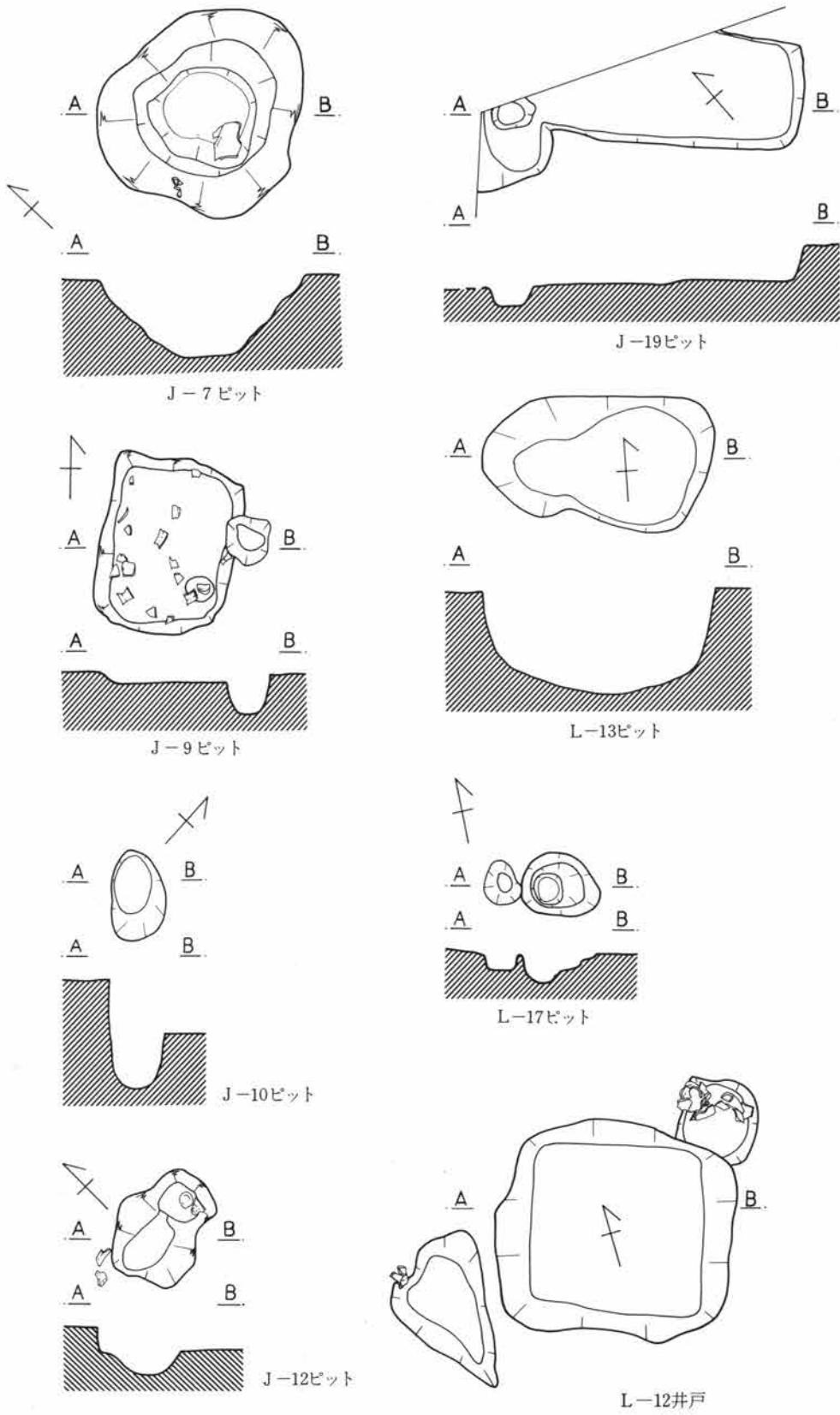


第206図 A区H~Iピット図

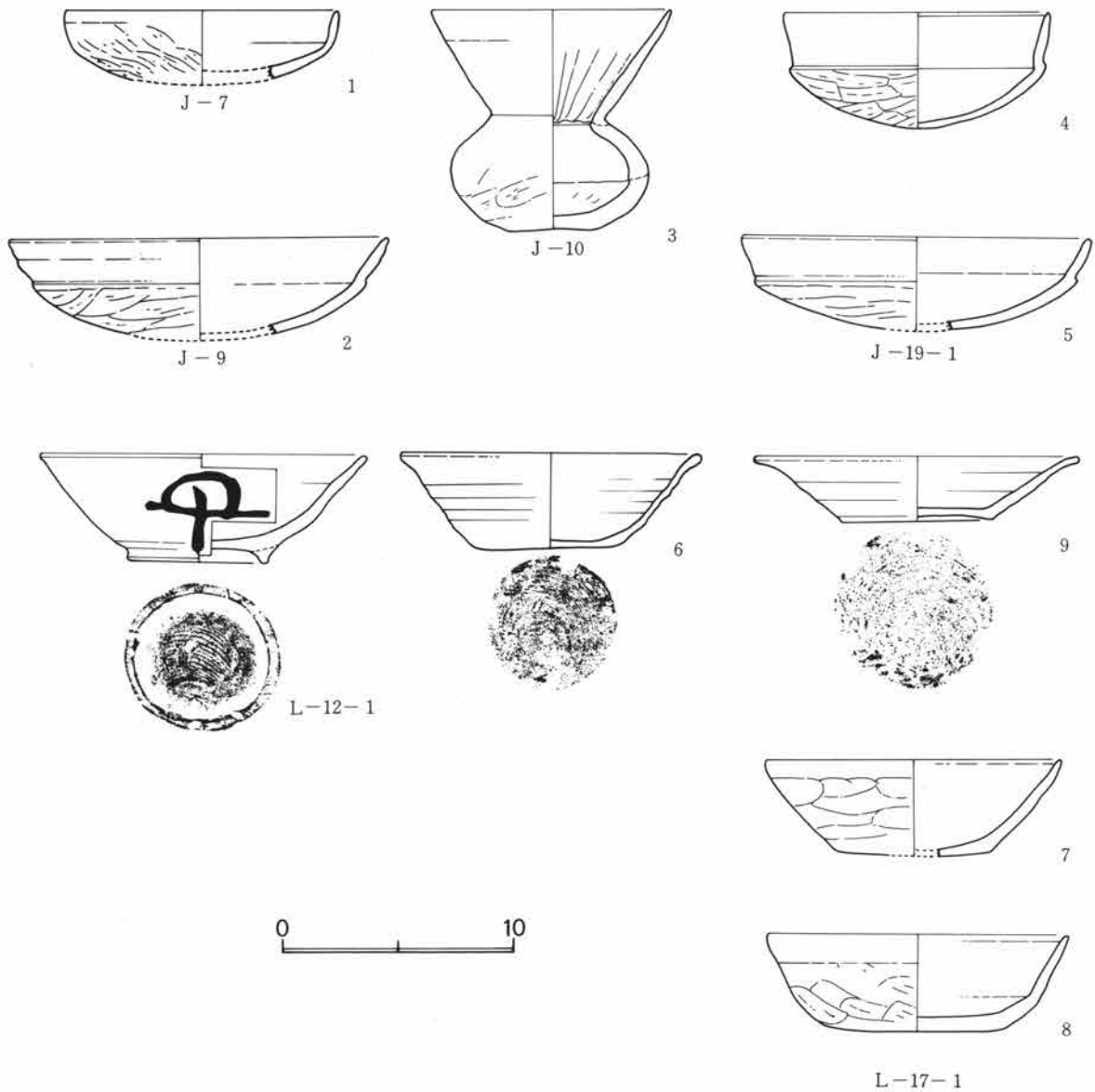
A区J-L区ピット一括

ピット中から遺物を出土したものを一括取り上げた。そののみ表示すると次のようである。

地点	形状	規模m (径、深さ)	出土遺物	備考
I-7	不正円形	1.8 -0.7	坏 鬼高末	段掘り
J-9	不正方形	1.2×1.7 -0.15	坏 鬼高III	横に柱穴状 ピット
J-10	長円形	0.5×0.85 -0.5	堆 和泉	
J-12	不正円形	0.9 -0.4	坏 鬼高II	二段ピット 2個連続
J-19	長方形	1.05×2.5 -0.3	坏 鬼高II	中世土壇と 柱穴状重複
L-13	不正円形	2.2×1.2 -0.9	須恵 国分	井戸
L-17	円形	0.7×0.6 -0.27	土須 恵国	坏 国分
L-12	方形、円形	2×2.3 -0.2 0.7-0.4	須恵高台 墨書土器	掘立柱穴?



第207図 A区J～Lピット図

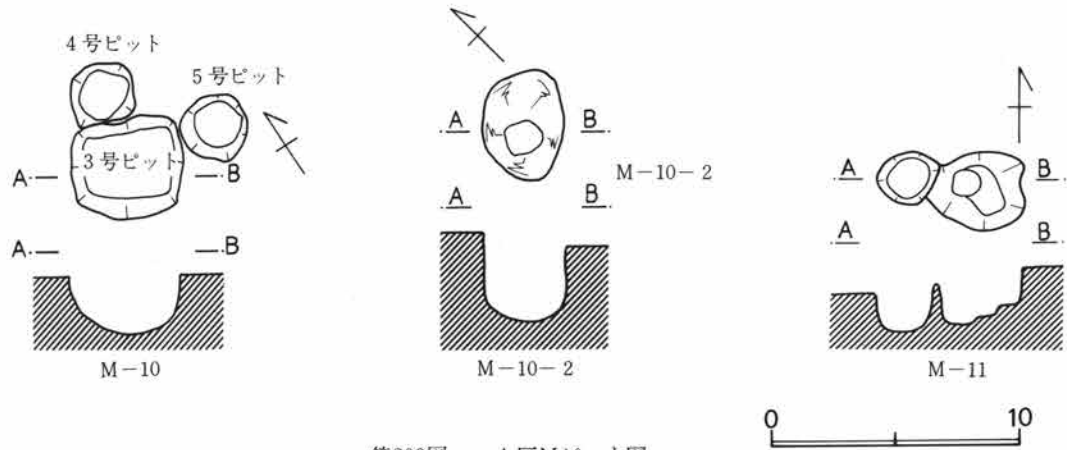


第208図 A区J～Lピット遺物実測図

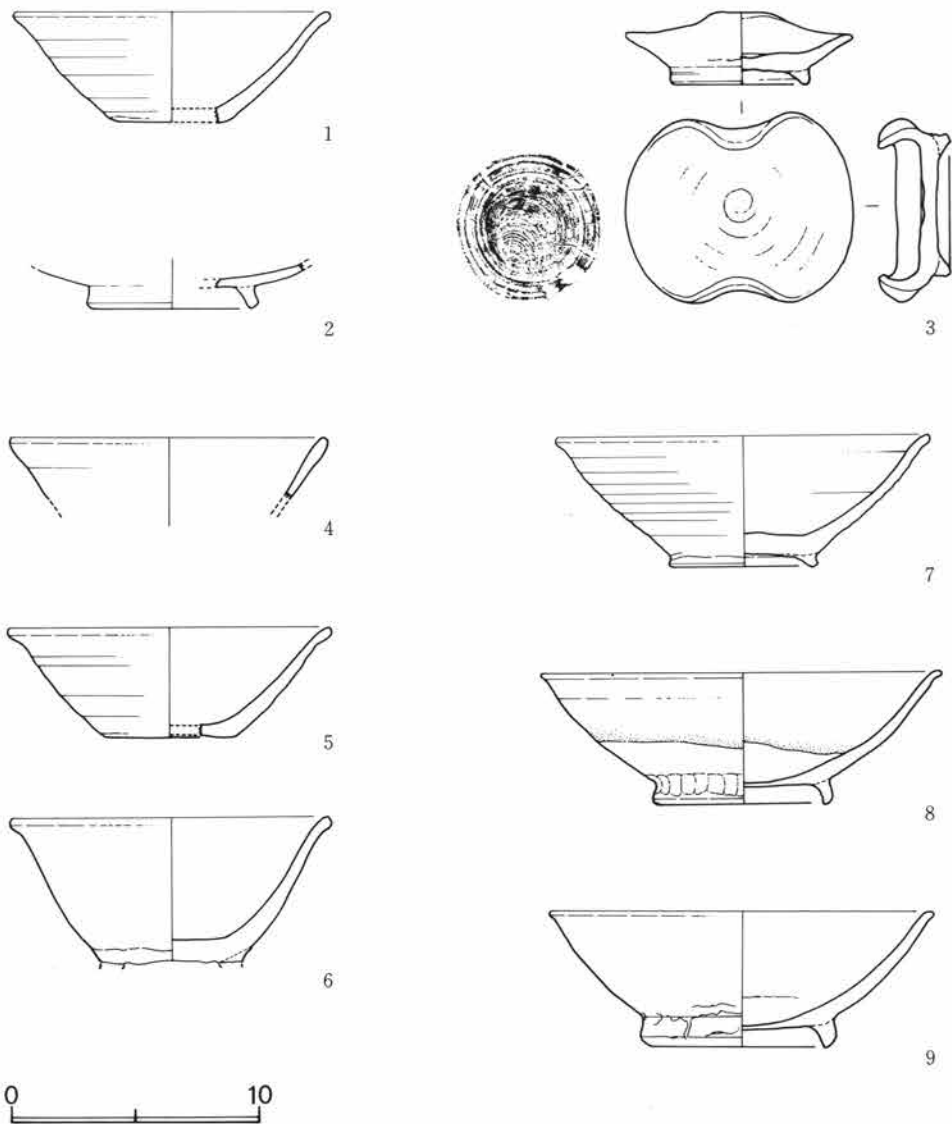
M区ピット一括

M-10区に検出されたピット群から、多くの遺物を出土したので取り上げたものである。ピットは3個検出されたがその概略は次のようである。

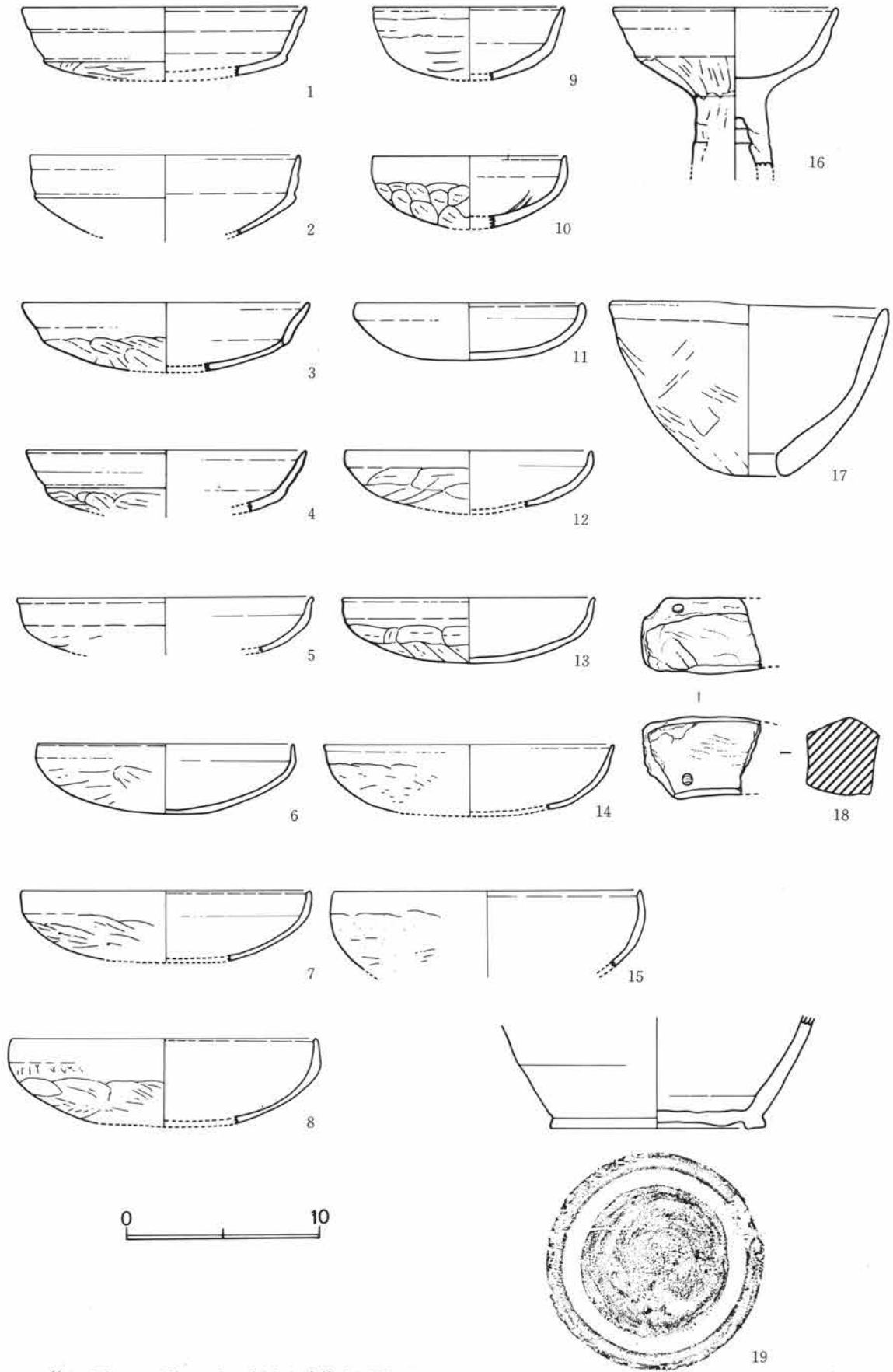
	形状	規模m	深さm	出土遺物	備考
1号	方形	0.9×0.8	0.45		
2号	長円形	0.9×0.7	0.6		
3号	方形			耳坏1 須恵器3(内高台付2) 灰釉碗2	0-53期



第209図 A区Mピット図



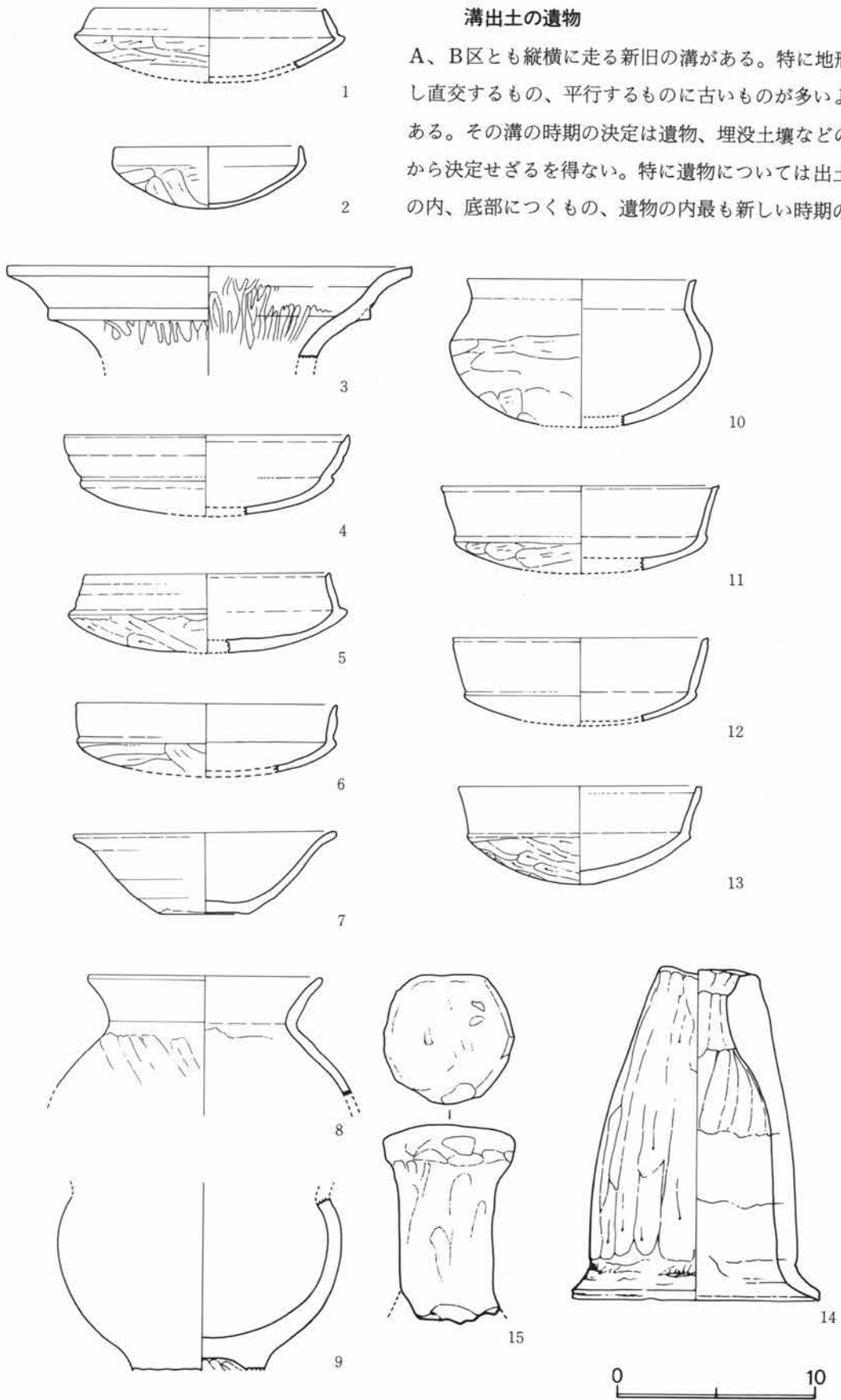
第210図 A区M10-1ピット遺物実測図



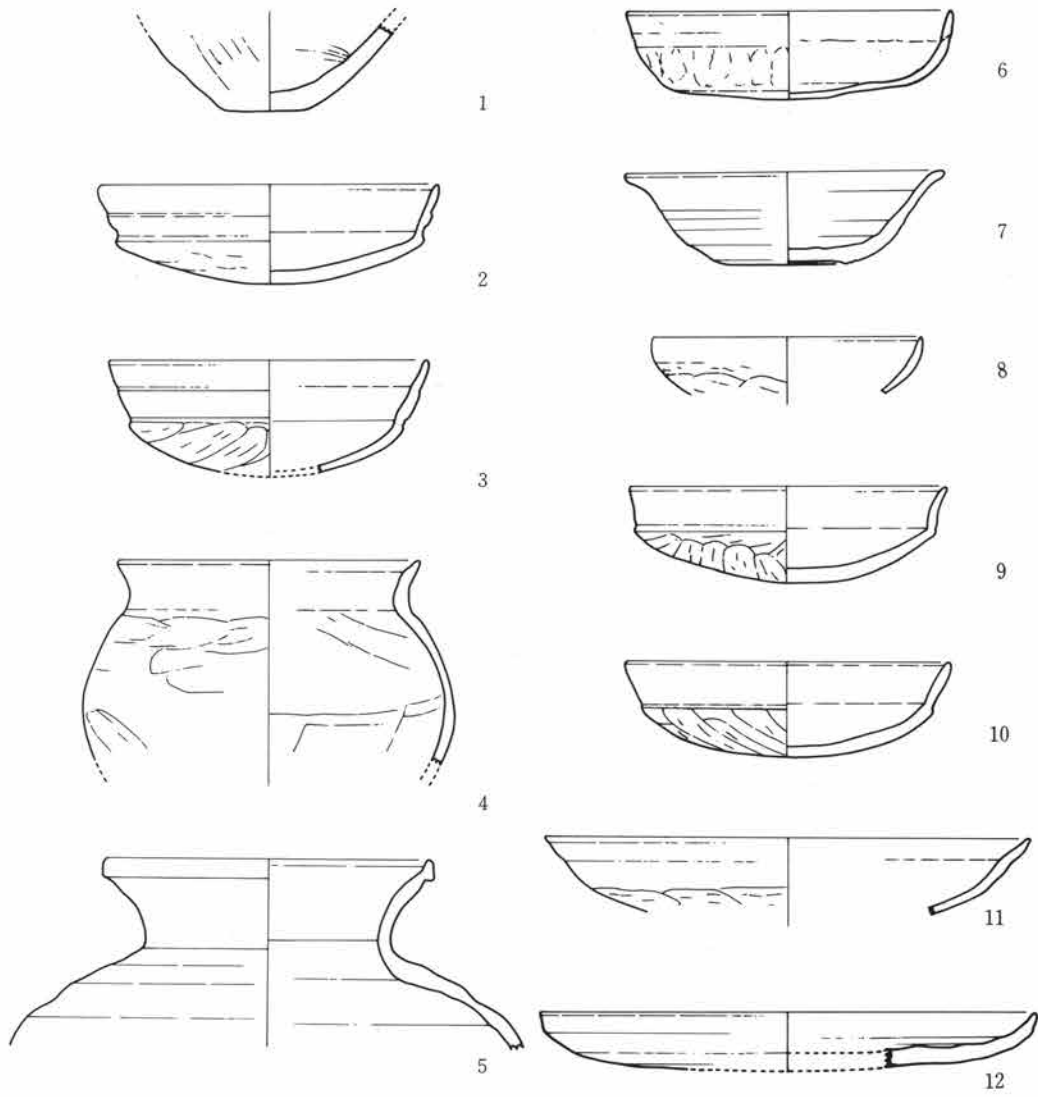
第211図 A区ピット一括出土遺物実測図

溝出土の遺物

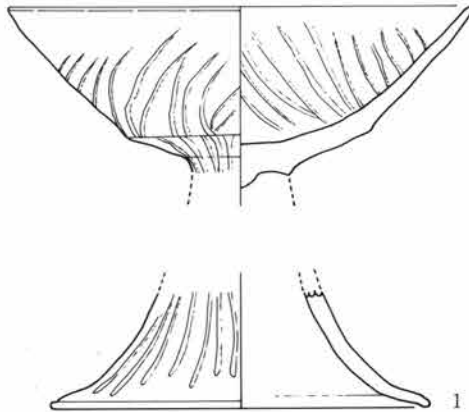
A、B区とも縦横に走る新旧の溝がある。特に地形に対し直交するもの、平行するものに古いものが多いようである。その溝の時期の決定は遺物、埋没土壌などの分析から決定せざるを得ない。特に遺物については出土層位の内、底部につくもの、遺物の内最も新しい時期のもの



第212図 A区1号溝遺物実測図



第213図 A区2・5・10号溝遺物実測図
2号溝(1~3) 5号溝(4) 10号溝(5~12)



第214図 A区H-24大溝埋土出土遺物実測図



1

I-11 埋土



4

A-区 I-11 埋土



2

I-11 埋土



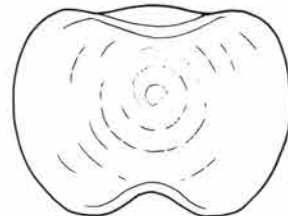
5

A区 J-12 埋土

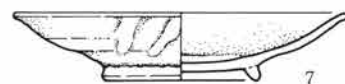


3

A区 J-11 埋土



6



7

A区 J-12 埋土



第215図 A区その他の遺物実測図

を基準とすべきであろう。その意味において、特に遺物の多い1号、2号、5号、10号溝について遺物を提示し、時期について考察してみようと思う。

まず1号溝の出土遺物、ついで2、5、10号溝について遺物をみてみよう。

1号溝についてみると、溝底に接して出土したものは3(壺)7(須恵器碗)10(カメ上半)9(脚付カメ)の4点である。この中で最も新しいものは7である。この土器は底径と口径の比は1:2.1で2倍以上である。また、口縁端部に肥厚化傾向もみられることからすると10世紀ごろのものともみられるから、この1号溝は平安期のものとみることが妥当であろう。

2号溝については遺物は鬼高II期の坏が主であり、その出土状態をみると埋土中の出土であるところからするとこの開削時期は7世紀以降とみることが妥当であろう。

5号溝については扁球形土器であるが、これも埋土中の出土でその時期を決定することは無理である。1号溝との関連でみるとこの5号溝は1号溝をまたいでいるところからすれば、それ以降のものであることになる。だとすれば、その上限は1号溝の開削時期より下ることはまず誤りなからう。

10号溝については、J-11、K-13区で坏類が多量に出土しているが、この内最も新しいものは、6の土師器坏、7の須恵器坏で、これからみれば、平安期のものである。しかも、この溝が1号溝に合して止まる事実は、この溝が1号溝と同時期のものである証左である。

以上から、ここに取り上げた溝は、1号、10号溝が先行し、そのあとに2号、5号溝が掘られたものであろう。

住居の採録からもれた遺物のうち、注目されるものについて取り上げた。

主として、新しい時期のものであるが、これらは、住居から出土しているものと思われるが、平安期の住居がロームをあまり掘りくぼめなかったり、堆積した黒色土中に床面をもつものなどがあったことから、住居をとばしてしまった危険もある。1はI-11区付近の出土である。2~4はI-11区の出土で57、58、84号住居の周辺である。時期的にもかなりまっとうしており、しかも墨書が、他の出土遺物にみられるものと同じである点も注意すべきである。

6は耳坏であるが、これと同巧のものがM-10ピットからも出土していて注目される。7の灰釉碗はO-53期のものでやはりM-10出土のものと同時期で、本遺構における灰釉の移入はこの時期になされたものと考えられる。

第2節 B地区の遺構と遺物

B-1、2号住居

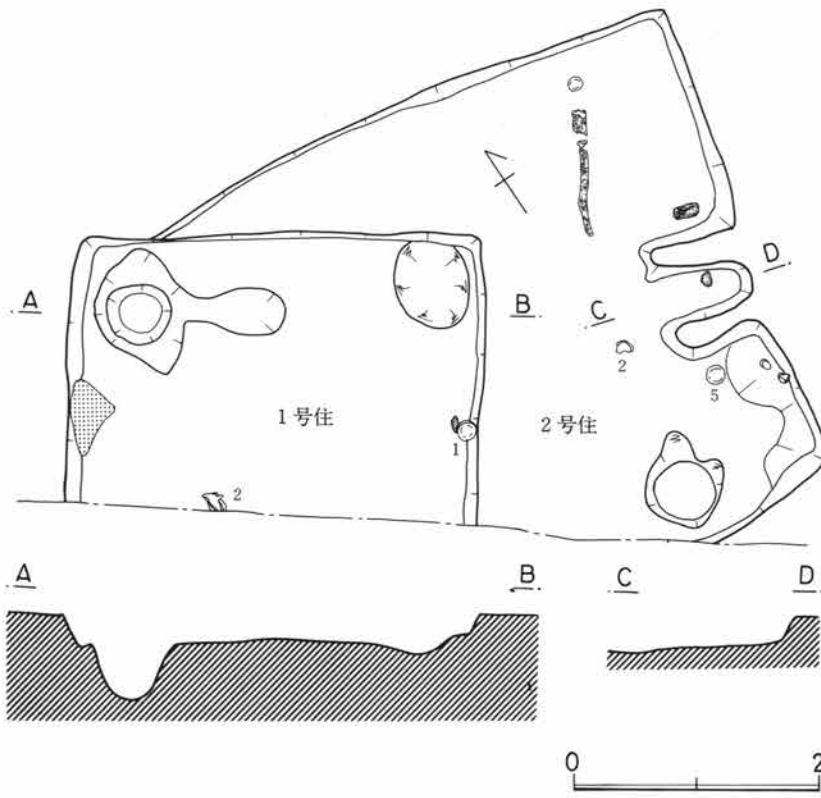
L-14区に発見された方形住居である。2号住居の床を切って1号住居がつくられていた。

1号住居

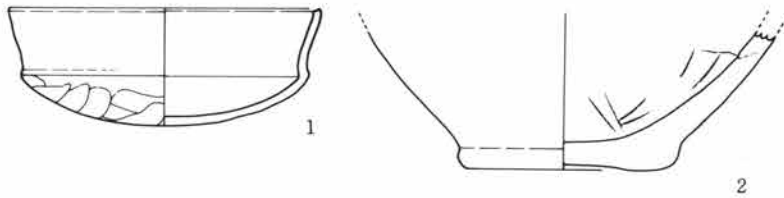
2号住居の西半部に重複して発見された住居で、南半部は路線外に出るため未完掘である。

北壁長は3.35mで、ローム面からの掘りこみは25cmほどである。カマドは西壁北寄りにあったとみられるが、焼土塊のみである。そのすぐ右脇に円形の貯蔵穴がある。径65cm、深さ50cmである。

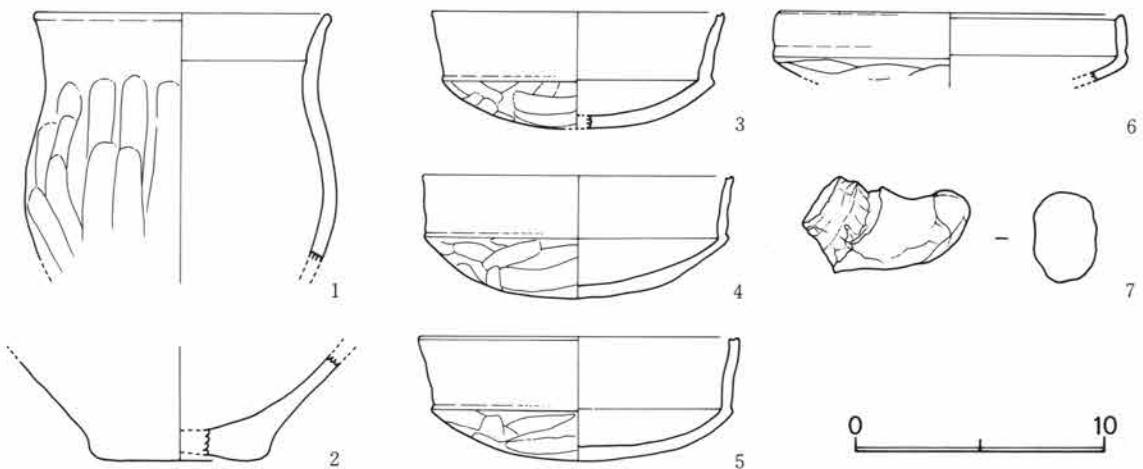
床面は整っており、踏み固められている。住居北東隅部に径60cm、深さ20cmほどのピットが円形に掘られていたが、性格は不明である。その他に施設はない。



第216図 B 1・2号住居図



第217図 B 1号住居遺物実測図



第218図 B 2号住居遺物実測図

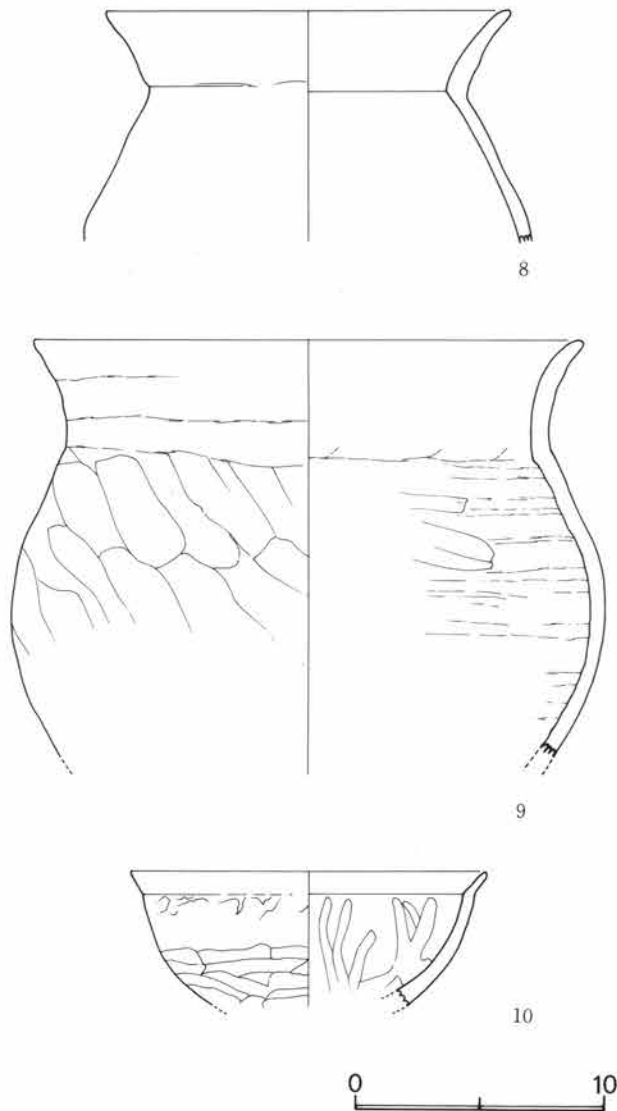
遺物は東壁下および、カマド前面に発見されたが、量的には僅かであった。

遺物(図217-1,2)壺かカメの下半部と坏が発見されている。底部からの立ち上がり方からみて球形胴に近いものとみられる。底部は造り出しで中央をやや上げている。器面はヘラ研磨により滑沢である。

坏は肩部の段が明瞭な有段坏で、体部はやや浅い。口縁部は外湾気味に立ち、端部をおさえている。底部は不定方向ヘラ削り技法がみられる。

2号住居

住居の $\frac{1}{3}$ は1号住居の重複と路線外にのびて判然としない。規模は東壁長4.1mで、北壁長4.5mほどとみられる方形住居で、ルーム面からの掘りこみは20cmほ



第219図 B 2号住居遺物実測図

どで、1号住居との床面高の差は16cm内外である。カマドは東壁中央に発見されたが、袖は壁内に張り出す。袖部はロームを掘りのこして表面に粘土を巻いている。焚口巾は35cm、壁線までの奥行き80cmの長さを示す。煙道は確認されない。床面は草灰が3cmほど積もり、湿地における、カマドの設置方法を考えさせる。カマド中に支石がある。

カマド右脇に円形の貯蔵穴が径60cm、深さ40cmほどの規模であいている。また、東壁のカマド右脇下には一段低く掘りこんだ周溝状のものが不正形で掘られている。

遺物はカマド周辺に集中して発見された他、北壁下東端部近くに坏が発見された。また、一部に炭化材の出土もある。

遺物 (図218・219-1-10) カメ、坏が出土している。

カメは、頸部のくびれの「く」の字状のものとゆるく折れるものの二種がある。8は上半部のみであるがやや長胴傾向をみせるが最大径は体部中央にくるとみられる。9は頸部内面に弱い稜をみせて、外湾気味に開く口縁をもち、体部は扁円形を

呈する。

坏は外斜口辺で、深めの半円形の体部に短かく外斜する口縁を付す。端部は内そぎ気味で尖がる。体部内外面ともヘラ研磨痕がみられ、器面は滑沢である。底部を欠いているので確認できないが、丸底と思われる。

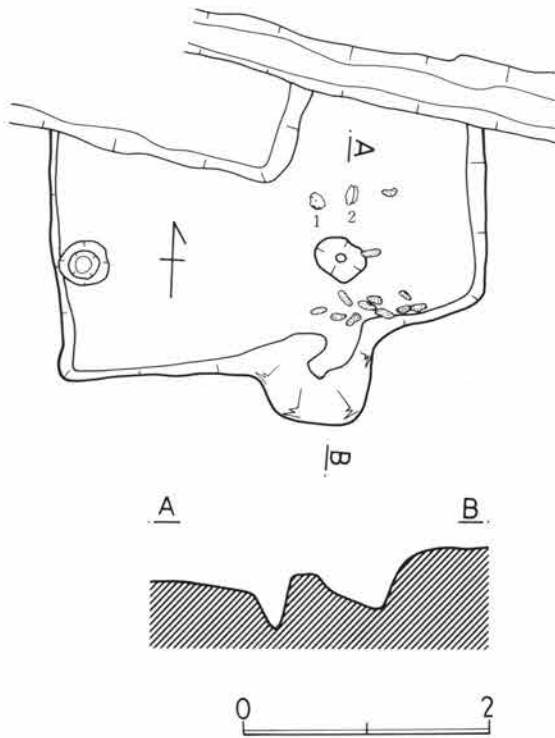
B-3号住居

K-15区を中心に検出された住居でローム面からの掘りこみは20cm内外である。住居の北半は近世溝、方形の掘りこみにより破壊されているため不明である。

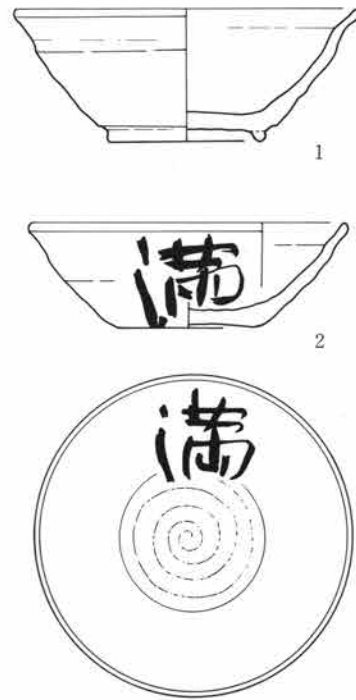
確認できる南壁長は3.45mであるが、南北方向の長さは破壊されていて測定できない。しかし、溝の北側では壁の立ち上がりが確認できないことから考えるとこの住居は東西方向に長い住居になると思われる。

住居北西部にかかる長方形の土壇は中世に属するとみられるので後述することにする。

住居の南壁部に壁外に張り出して不正形のピットがあくが、柱穴か否かは不明である。柱穴とすれば掘り



第220図 B 3号住居図



第221図 B 3号住居遺物実測図

かたは内傾している。他にピットが2個あいているが、径40cm、深さ30cm内外でほぼ直にあく。

床面はやや高低があり、あまり面も固くない。壁周溝は検出されていない。

遺物は住居東南部を中心に須恵器ワン2個、長さ15cm内外の河原石12個が発見されている。

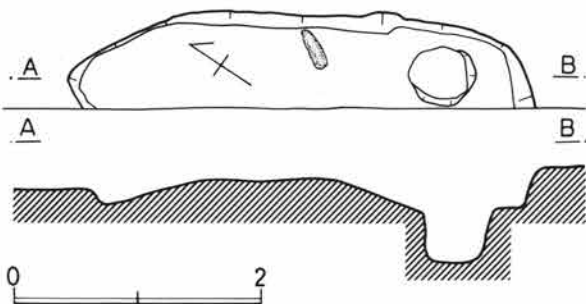
遺物 (図221-1、2) 遺物は須恵器が2個発見された。

1は高台碗である。ふくらみの少ない体部は、ロクロ痕が器表面、内面ともよく残っている。口縁端部はやや外開きして、肥厚気味である。

底部は糸切り後、付け高台をしているが、底部の縁より少し内側に粘土紐をはりつけ、指、およびヘラでおさえている。高台のふんばりは少ない。

底径と口径の比は1:1.8で、器高と口径の比は1:2.6である。

2は碗形土器で高台を欠く形だが、他は1と同巧である。底径と口径の比は1:2.3で、器高と口径の比は1:3.2である。器面内外とも「満」の墨書がある。



第222図 B 4号住居図

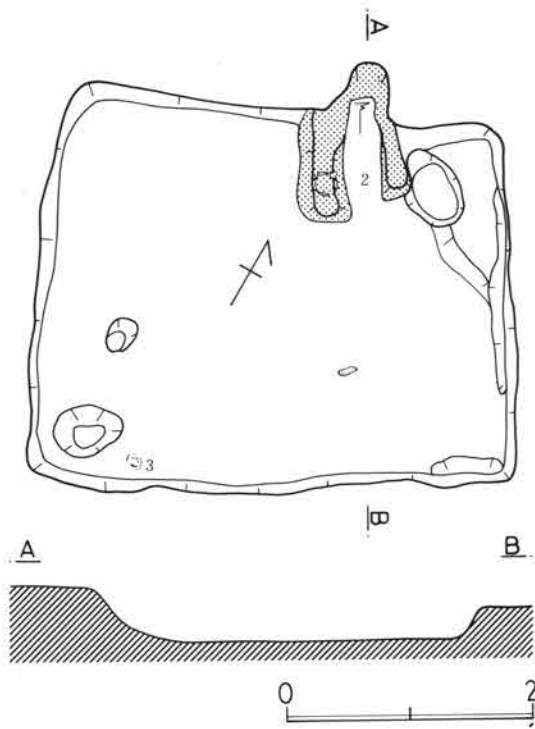
全体的に灰白色で一部酸化されて赤色を呈するところがある。胎土に砂粒、小礫などの夾雑物を含んでいる。ロクロは右回転である。

焼成火度はあまり高くはなく、堅さに欠ける。

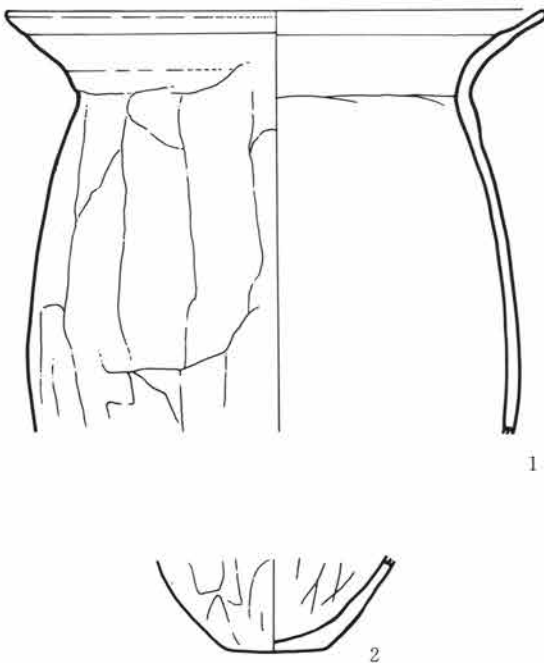
その他、12個出土した河原石は長さが長い方で17cm、短かいもので12cm、直径6cmほどのものである。

B-4号住居

L-15区で検出された住居跡であるが、北壁部



第223図 B 5号住居図



第224図 B 5号住居遺物実測図

分を検出したのみで、おそらく、全体の2割程度を掘っただけで、未完掘である。

ローム面からの掘りこみは20cmほどであるが東壁近くに径55cm、深さ45cmほどの円形ピットがあり、更に中央の床面がもり上がり、壁近くでまた低くなるといった状態で高低差がある。遺物も石だけで、これが住居跡であるか否かも確定できない。

B-5号住居

L-16区で検出した住居で不正方形を呈する。ローム面からの掘りこみは35cmほどであるが、掘りこみは直ではない。規模は3.95×3.1mである。

カマドは北壁中央からやや東に寄った位置にある、粘土カマドである。燃焼部内側は方形で、焚口巾40cm、奥行1.1mを測る。カマドの右袖に接して貯蔵穴が円形にあく。径45cm、深さ25cmほどである。壁周溝は東壁下で断続して部分的にまわる。その他、住居南西部に2個のピットがあくが性格は不明である。

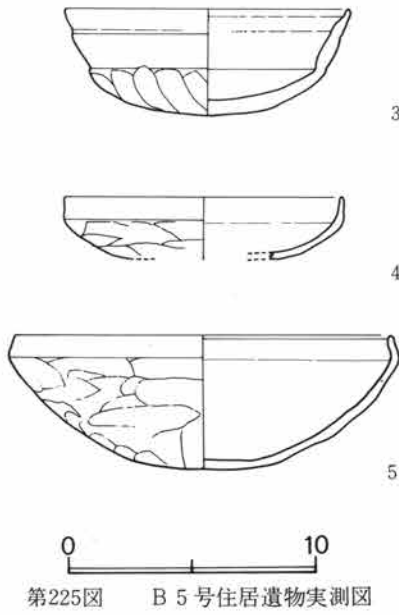
住居床面には、四隅の柱穴は認められない。また、床面の状態でみると、北東隅部を除いて平坦で整っている。特にカマド前面は踏み固められて堅固である。

遺物はカマド左袖部にカメ、南西隅部に坏(3)が出土したほかは埋土中の出土である。

遺物(図224、225-1~5)長胴カメ、坏が出土している他は細長の河原石1個が出土した。

長カメは、上半部、底部のみで、全容はつかめない。上半部は頸部のくびれがやや強く残るが体部のよりは弱い。口縁部は、外彎気味に長く外開きしている。最大径は口縁部端部にある。体部はたて方向のヘラ削り痕がよくのこっているが、輪積みのあとは消滅している。底部は小さい不安定な平底で削りも底部まで及んでいる。

坏は16が床面に接して出土している。浅い体部は、ヘラ削りによって肩部の張りをなくしている。肩部の段は弱く、そこから外方向に斜めに開き、



第225図 B 5号住居遺物実測図

端部はナデが内面で強い。口縁中段には沈線が1条入る。

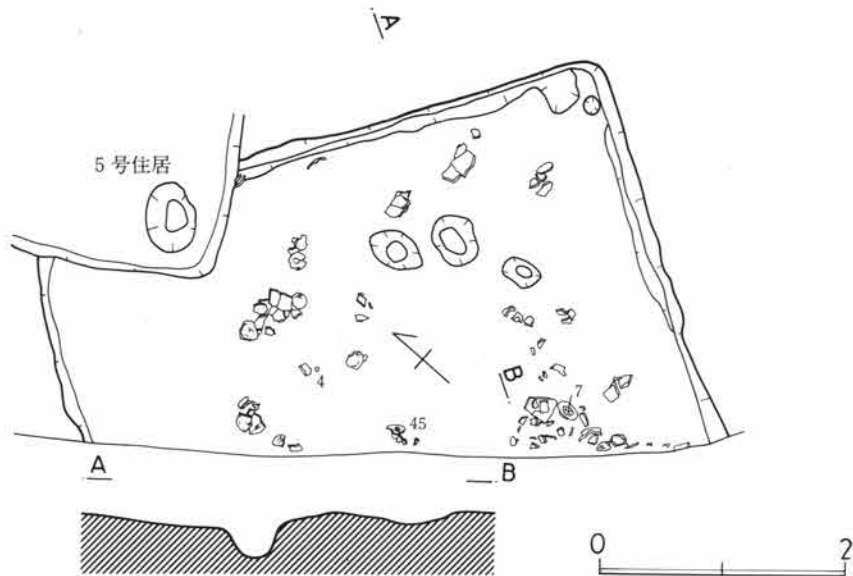
4、5は埋土中の出土である。これがこの住居に直結するか否かは不確定だが、床面近くで検出された。共に口縁を短かく直立または内斜される薄手の坏である。

技法的な面からみれば3、4との共通点はないとみる方が妥当であろう。

B-6号住居

住居北西コーナーで5号住居に切られ、更に南半部で調査区外に出るため、ほぼ1/2を発掘した未完掘住居である。それにもかかわらず、多量の出土遺物の検出をみたのは、不時の災害により、この住居が廃棄されたことに起因するものであろう。

住居は北壁部分で、4.92mを測る方形住居である。ローム面から



第226図 B 6号住居図

の掘りこみは30cmほどである。

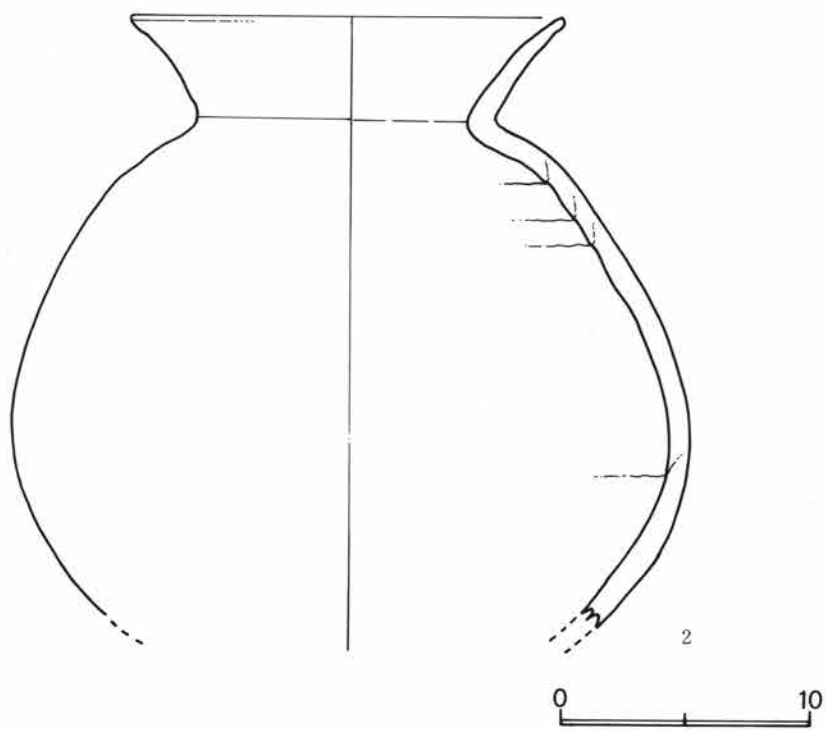
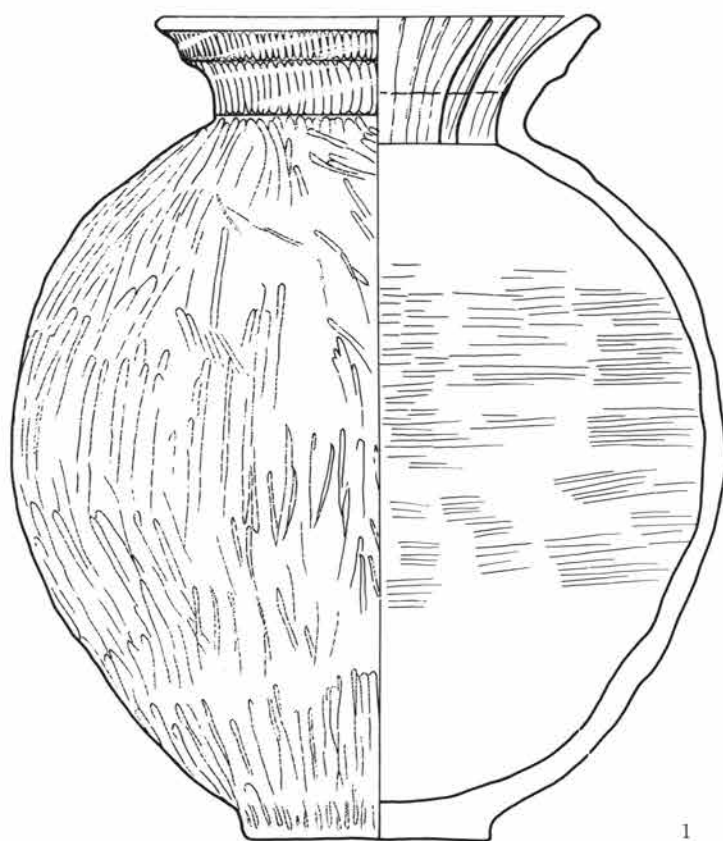
カマドは検出されていない。

住居の施設は、北および東壁の一部に壁下周溝がめぐっている他、数個のピットが発見されている。しかし、四隅の主柱穴に該当するようなものは、北壁沿いでも対の位置には検出されなかった。住居北東コーナーの三つのピットは径30cm、20cmのものがあるが深さは30cmほどである。床面はやや高低があるが、固く踏み固められていた。

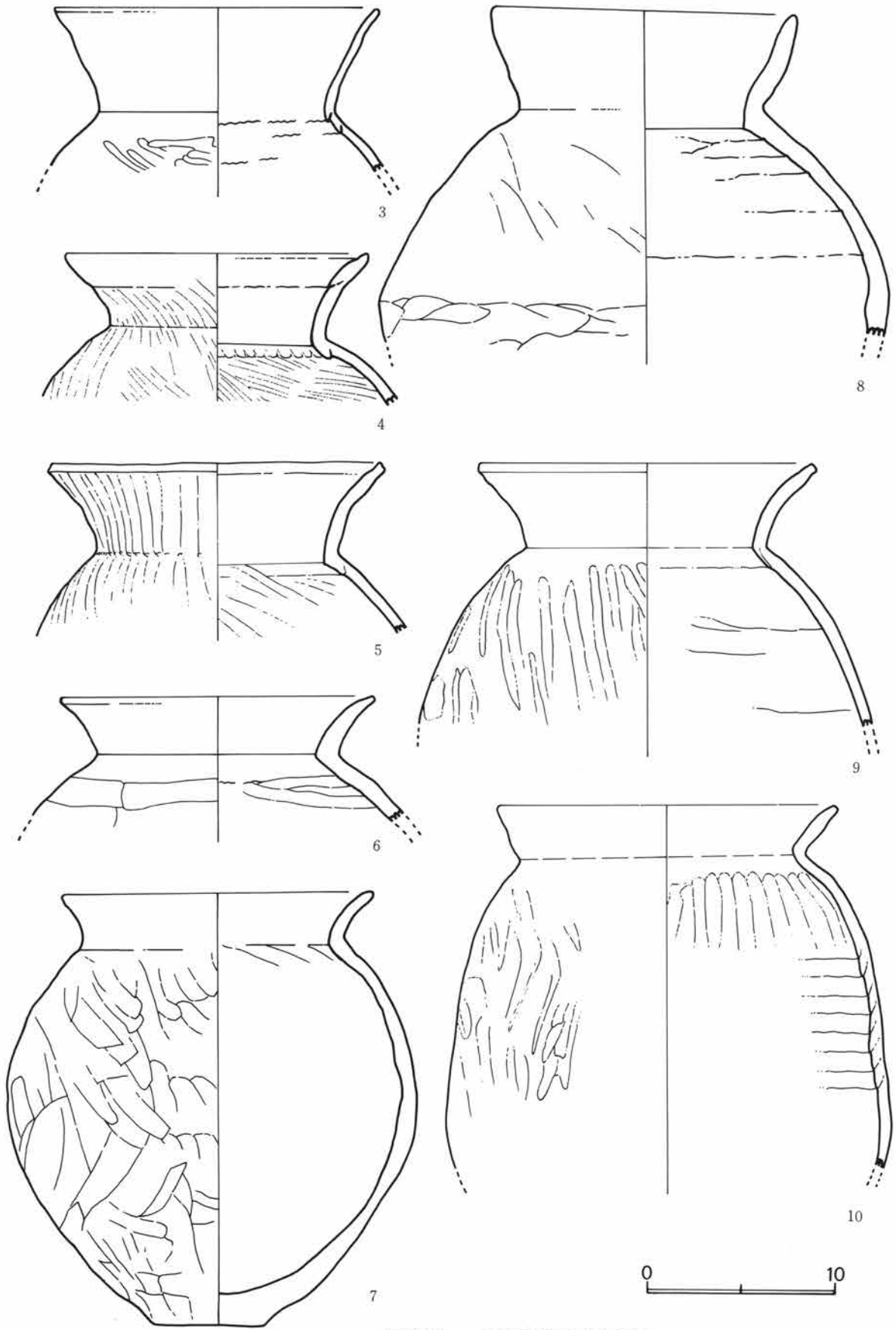
遺物は北西部を除いて、まんべんなく散乱した状態で発見されている。

遺物(図227~232-1~48) 壺、カメ、鉢、碗、埴、高坏などの器制で、量的にも類をみない多さである。

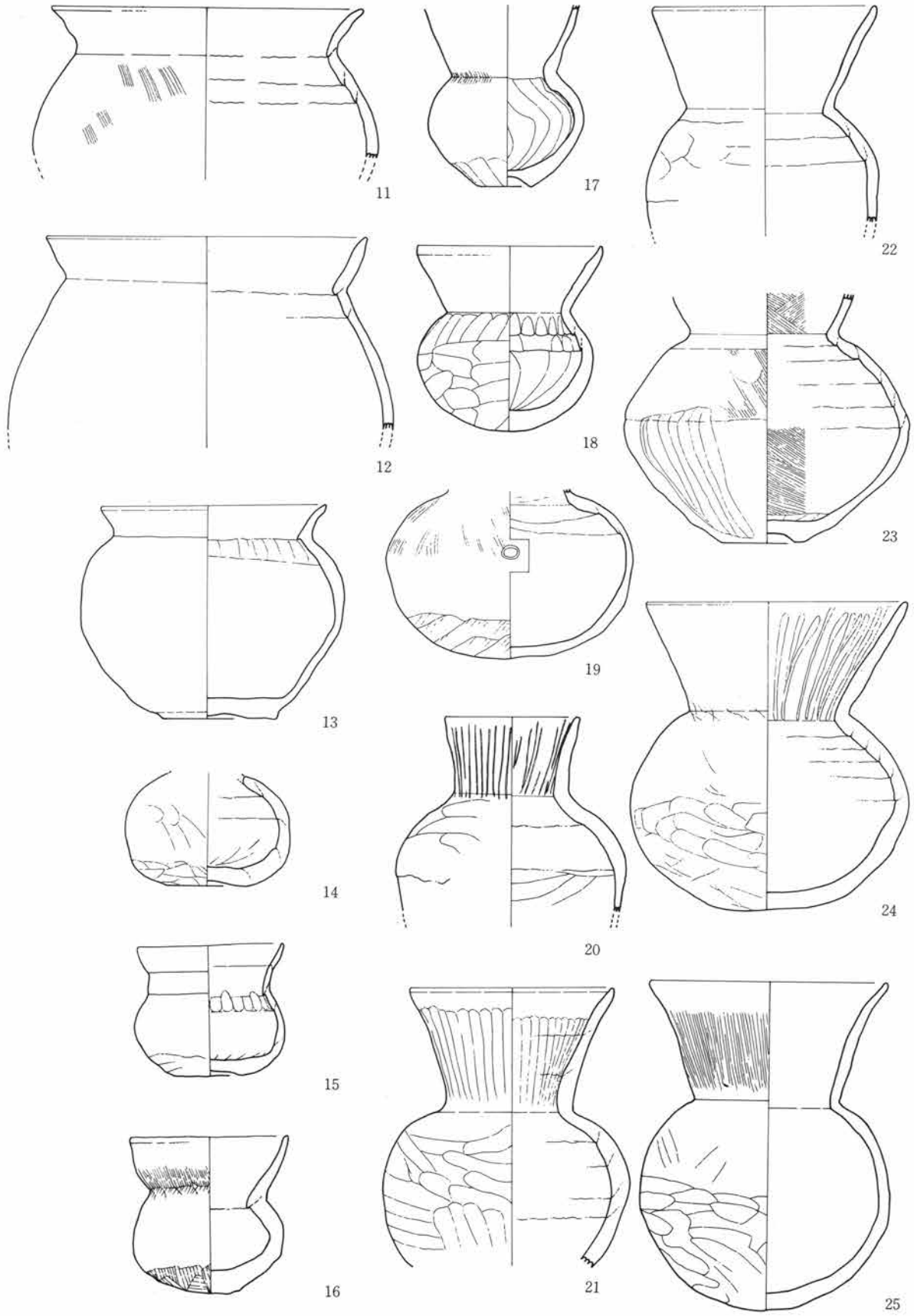
壺は、刷毛目を胴部内面に残す他はすべてへら研磨を施し、器面は滑沢である。体部は球形ないし、下ぶくれ状の球形胴で、底部は大きい造り出しのある平底で安定している。口縁部は強い「く」の字状の屈曲を



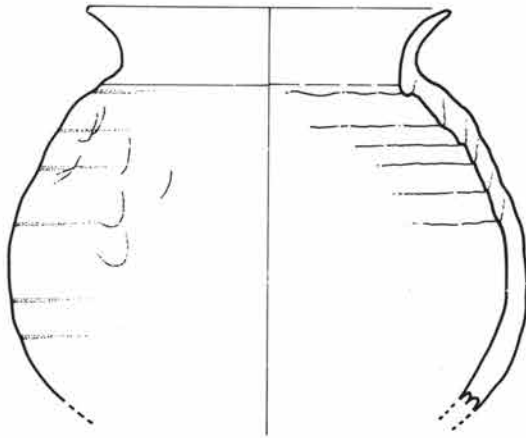
第227図 B 6号住居遺物実測図



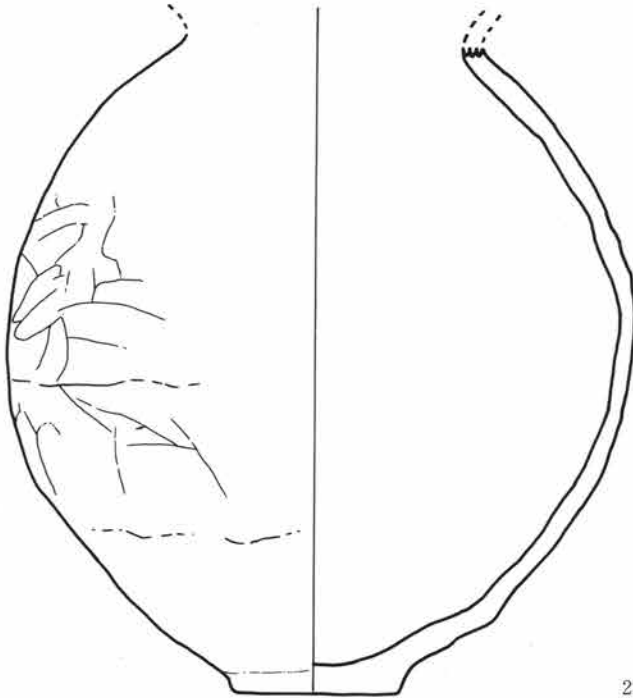
第228図 B 6号住居遺物実測図



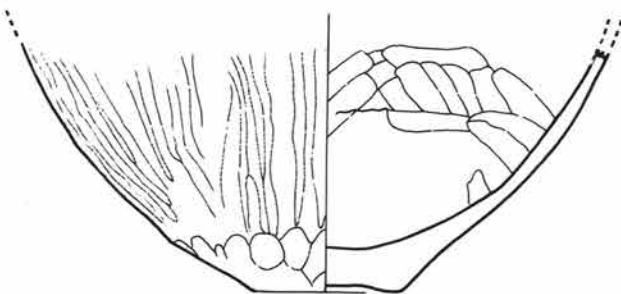
第229図 B 6号住居遺物実測図



26



27



28



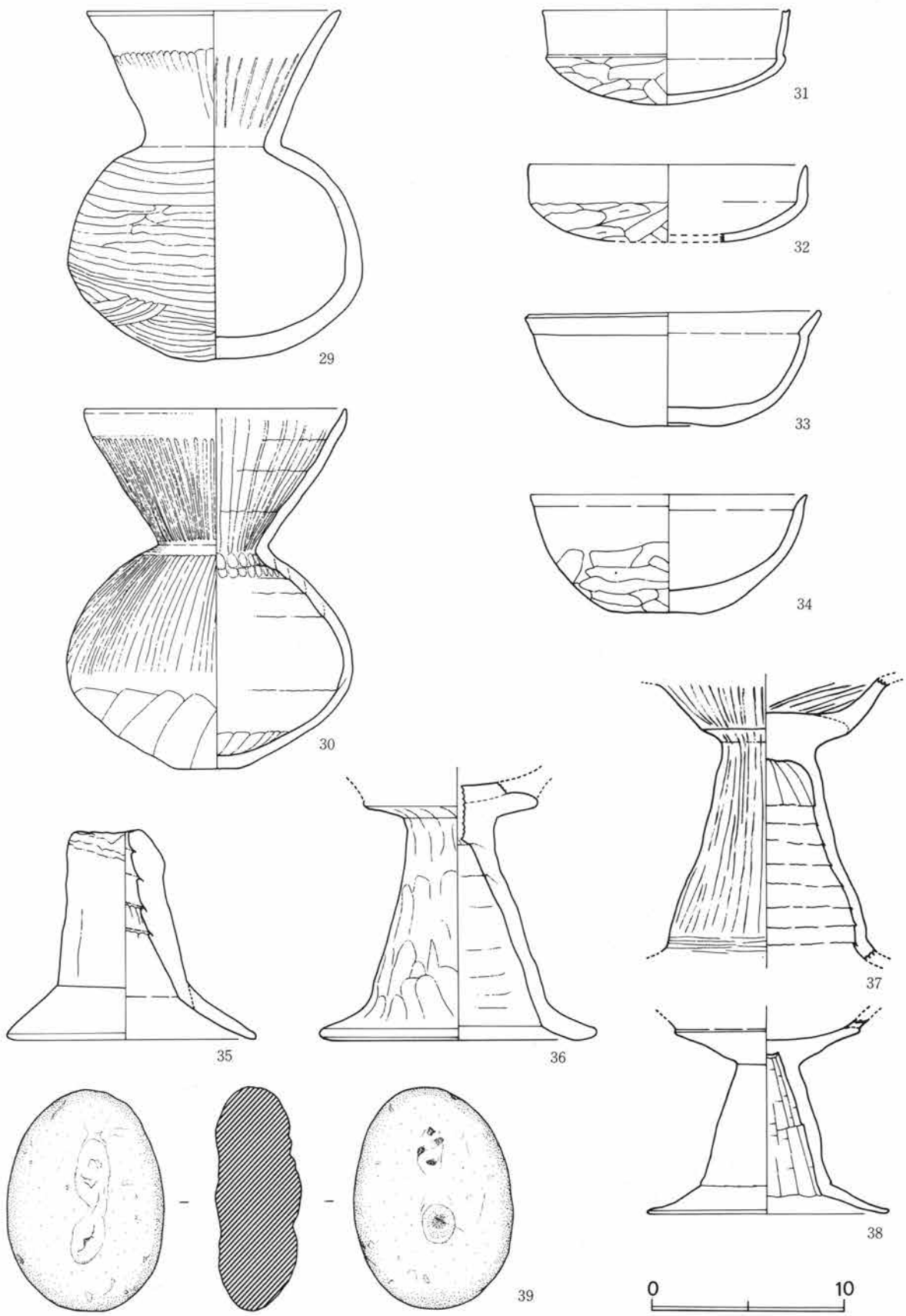
第230図 B 6号住居遺物実測図

もって開くが単口縁のものと折り返し口縁のもの二種がある。カメは扁円形の体部とやや長胴傾向をみせるものがあるが、共通して輪積み手法がみられること、体部外面を刷毛目、ヘラなどで整形することが指摘される。底部はほとんどのものが欠けているが、一部突出した造り出しの平底で安定した形がみられる。

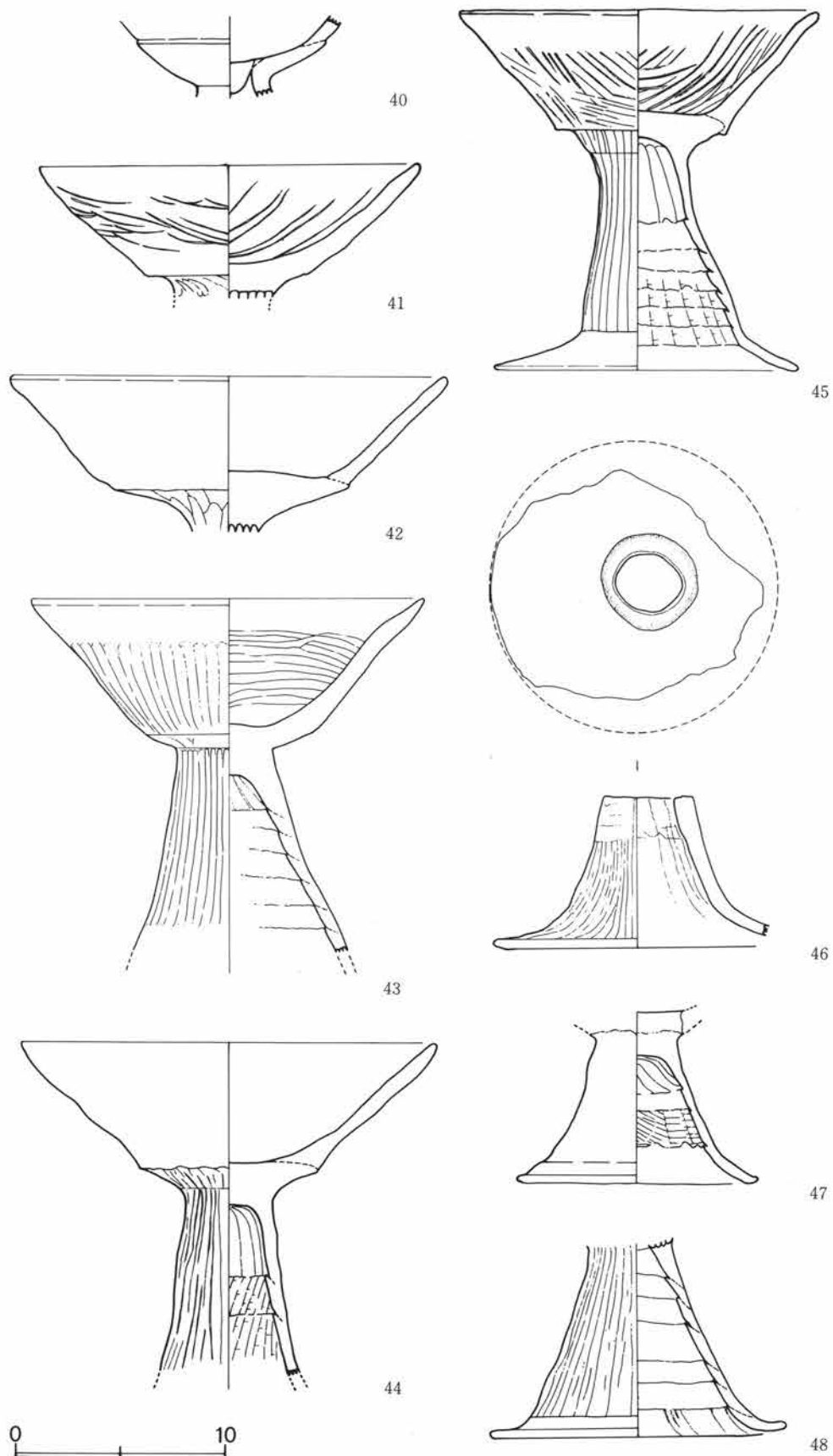
埴は大型と小型の二種がある。大型のは球形胴または扁円形の体部に長く直立気味かまたはやや外傾して開く口縁をもつものがある。23の底部は上げ底である。小型のものは大型のものをそのまま小型にしたものと胴部最大径を器下半におくもので口縁を大きく内彎気味に開く二種がある。概して大型のもの、小型のもの前者の作り方がヘラ研磨など、丁寧なのに比べて作りが雑で、接合部に指頭痕をのこしているものもある。また、19のように体部に孔をあけているものがある。

高坏は直線的に大きく外開きする坏部に角度を小さく長く立つ脚部がつく。脚の裾は急に水平に近く開く。坏との接合は坏底部が小さいこともあってかなり底径に対して大きい。特にこの坏部を欠いた脚が羽口として使用された痕跡をのこす35・46がある。時期から

第2節 B地区の遺構と遺物(B-6号住居)



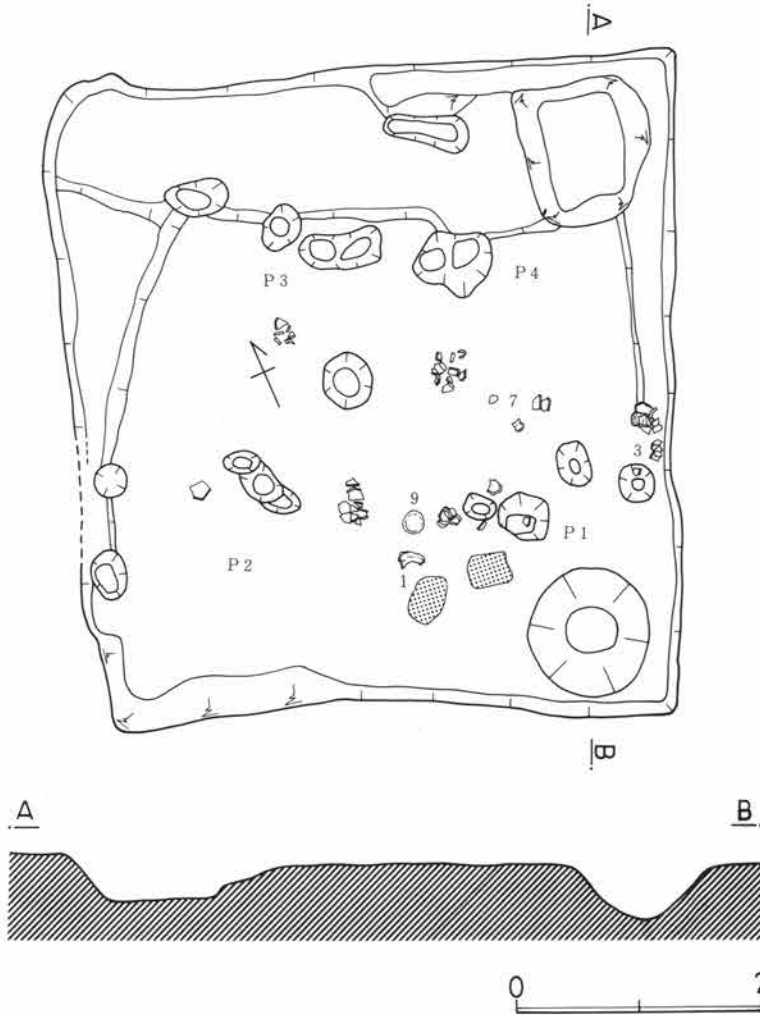
第231図 B 6号住居遺物実測図



第232図 B 6号住居遺物実測図

して製鉄との関連を考えるより製銅と関連するものであろうか。

坏は33、34のように外斜口辺のもの、31、32のように有段の坏の二種がある。前者は平底で体部下半のふくらみはみられない。口縁は内ソギ技法で外反を強調している。後者は出土状態からみて混入の可能性がある。



第233図 B 7号住居図

B-7号住居

J-16区に発見された方形住居である。この住居も上層を近世溝が切っていたが、床面までは達していなかった。

規模は1辺5.1mの方形でルーム面からの掘りこみは15cmほどである。

遺構はかなり多くのピットが床面にあいたり、住居北壁、および西壁部に一段掘りくぼめた部分があり荒れていた。

住居の施設としては、貯蔵穴が住居南東隅に発見されたが、径1m、深さ46cmほどの規模で、底は碗底状を呈していた。

柱穴はP1～P4までが支柱穴と考えるが、径30cm、深さ30cmほどで、他の住居と比べるとかなり、壁から内側に入っている。柱間は東西1.6m、南北2.2mほどでほぼ整っている。しかしすぐ隣接して柱穴状のピットがみられるところからすると、

建て替えが行なわれた可能性もある。

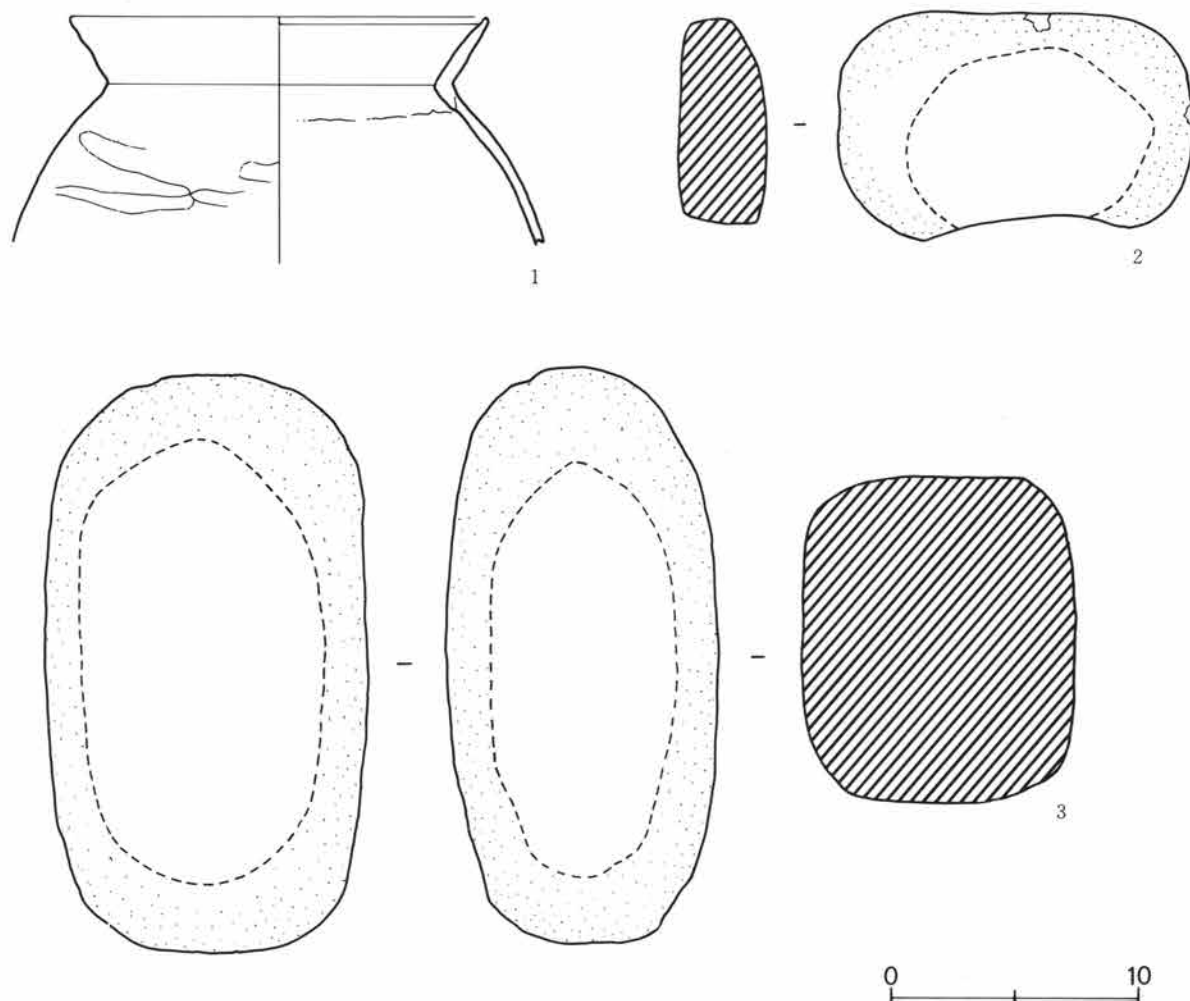
土器型式からすれば、カマドをもたない形が考えられるが、その目で床面をみると、住居南東部の貯蔵穴西側に焼土の堆積がみられ、ここに炉があった可能性が強い。住居南西部西壁寄りの二つの柱穴は出入口の可能性が強い。

遺物は貯蔵穴北側に集中的に発見されたが、これらは高坏、カメ、埴、小型カメ等であった。

遺物(図234、235-1～12)器種はカメ、高坏、埴、小型カメの組み合わせである。

カメは上半部のみであるが、球形胴で、頸部のくびれが強く、「く」の字状を呈する形である。器面はヘラにより整えられ、輪積み痕もみられない。口縁部はほぼ直に外開きし、端部は剣先状を呈する。

高坏は、坏部は平底気味で大きく、そこから浅く直線的に口縁部が開く。口唇部は剣先状を呈している。脚部はやや開き気味に一旦たち、裾部で急に開く形である。坏部との接合は小さく体部、脚部ともヘラ研磨



第234図 B 7号住居遺物実測図

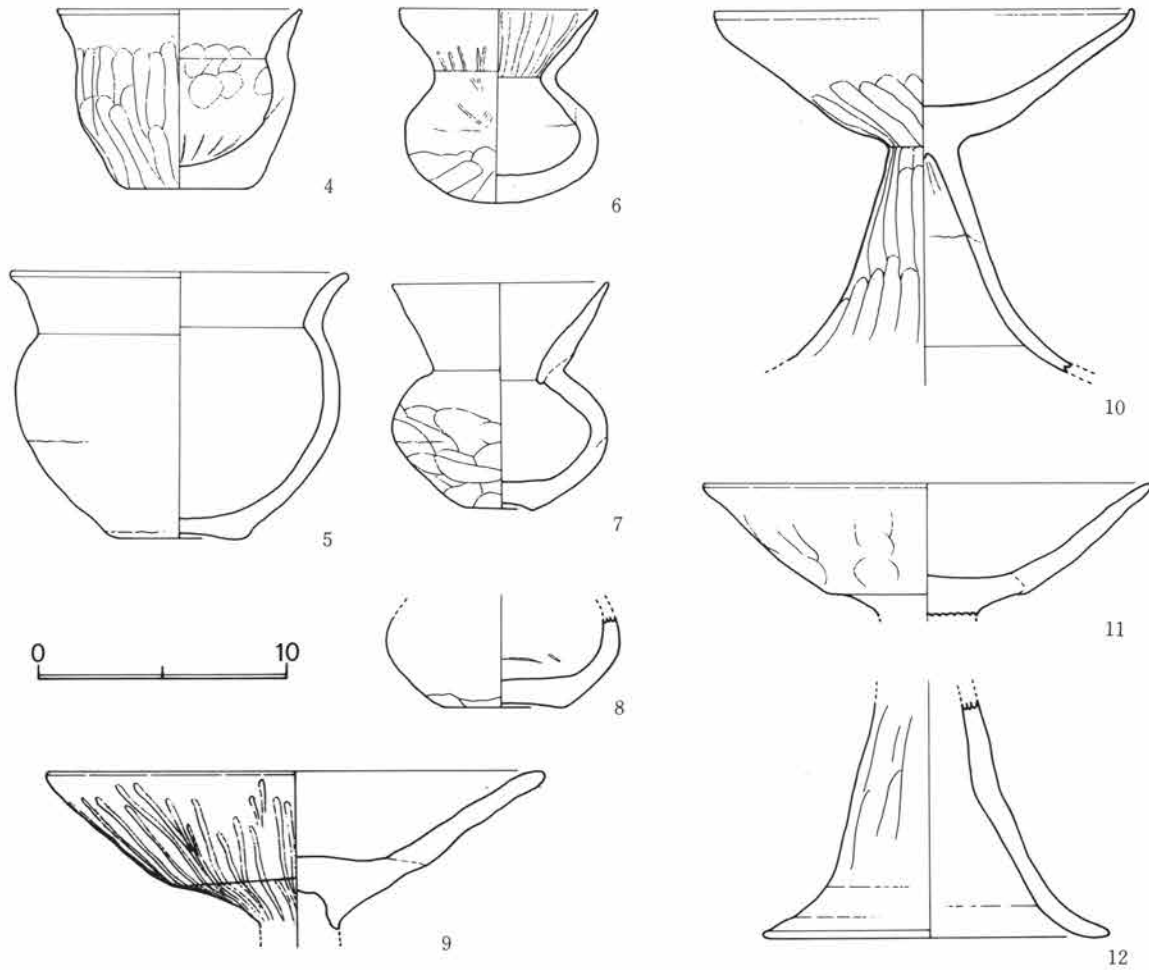
痕をのこしている。

埴は扁球形の胴部に、大きく口縁部が外斜して開く。底部は平底ないし、中央部をやや上げ気味につくるが、大きい平底と小さい平底の二種がある。体部外面はヘラ研磨痕がのこり、焼成火度も高い。

小型カメは、4、5の二つがある。4は、大きい平底をもち、肩のはった体部、そこから外斜して短かく立つ口縁をもつ。口唇部は内そぎ状に尖る。体部外面はヘラ研磨である。内面頸部付近には指頭痕をのこす。5は形態的には4と同形だが、大型である。底部は突出の造り出しで中央部がやや上がる。口縁部は「く」の字状の強い頸部から外彎気味に外開きする。器面は滑沢である。

他に平らな河原石の表面をすったような安山岩が二個出土している。磨くというより細かくたたいた感じのする表面の状態で、いかなる用途に使われたかは不明である。

土器は全般に研磨が行きとどき、胎土も夾雑物が少なく、焼成火度が高い。黄褐色気味の色調が特徴的である。



第235図 B7号住居遺物実測図

B-8号住居

I-18区に検出された隅丸長方形の住居である。ローム面からの掘りこみは20cmほどであり、形状も整っている。

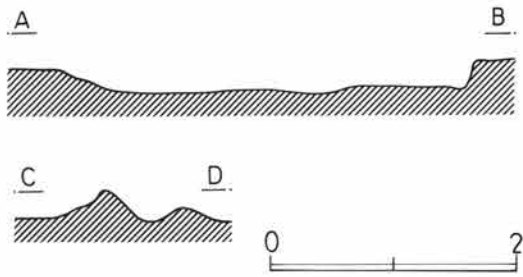
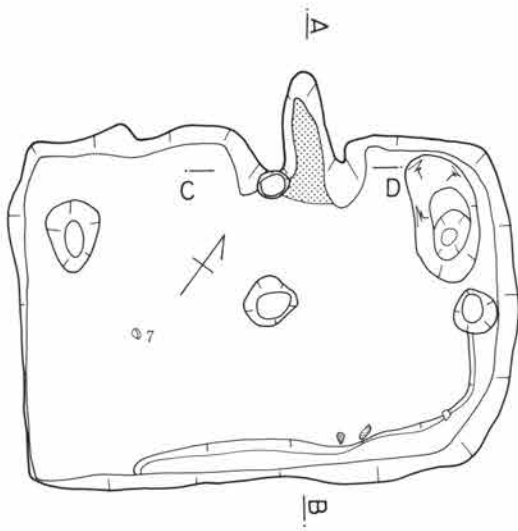
カマドは北壁中央からやや東寄りに土器を芯にした粘土カマドが検出された。焚口巾30cm、奥行1.1mで焚口から奥へ向って上り勾配をとる。焚口裾部には西側だけ長胴甕を立てている。燃烧部の焼け方が著しい。壁内への張り出しは僅かですべてほとんど壁外に出る。

住居北東隅に貯蔵穴が発見されたが、形状は東壁沿いに長円形を呈し、上端で長径1m、短径50cm、深さ40cmである。

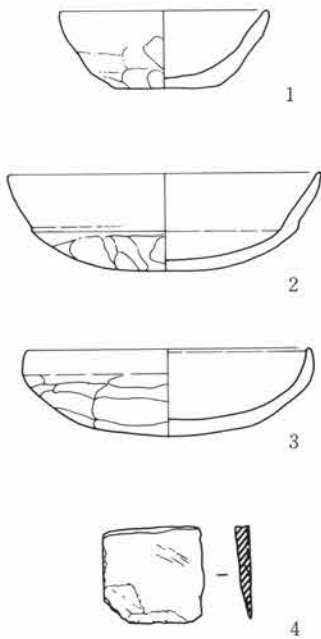
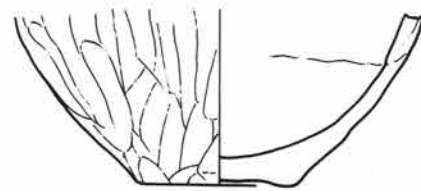
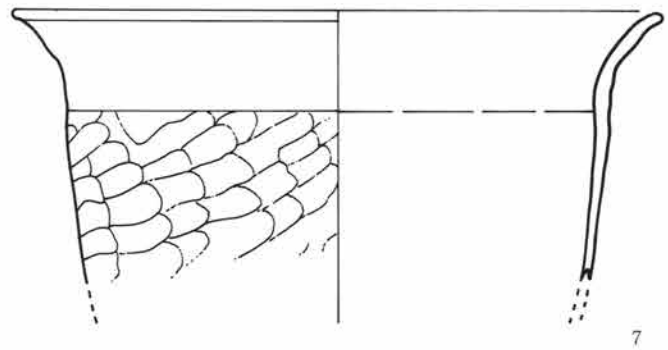
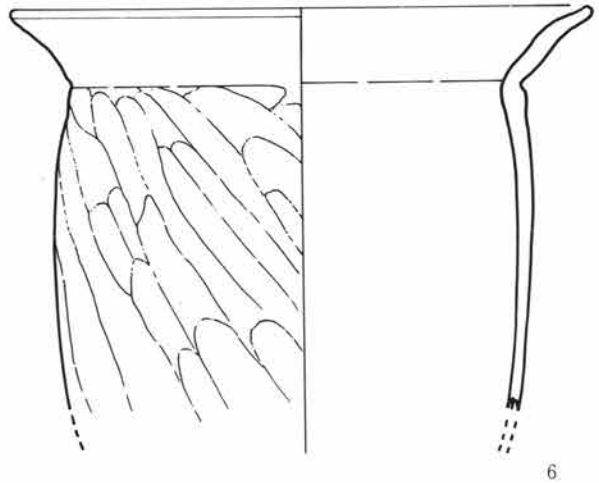
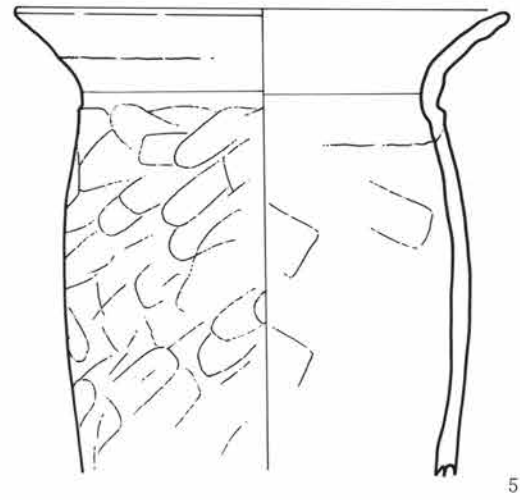
他に床面にピットが3個発見されているが、長軸線にそって、中央と東壁下に各1個、東北コーナー部に1個である。長軸中央線のものには柱穴の可能性が強いが、東北コーナー部のは、東北コーナーの貯蔵穴と掘りかた、規模とも類似しており、その意識があるかも知れない。柱穴様ピットの規模は径35cm、深さ30cmほどで、ほぼ直に立つ形である。

住居の床面は、中央部がやや低いほかは、ほぼ平坦である。しかし、床面の踏み固めはあまり顕著でなく特に周辺部がやわらかい。

住居の東南隅から南壁の大部分については壁下周溝がめぐっているが、深さは10cmに満たない状況で浅



第236図 B 8号住居平面図



第237図 B 8号住居遺物実測図

いものである。

遺物 (図237-1~8) 遺物はカメ、埴、坏、砥石である。

カメは長胴であるが、最大径は口縁部にいくこと、頸部のくびれはほとんどないか又は全く欠くこと、体部は斜方向のヘラ削り痕がみられること、底部は体部に比べて小さい不安定な形である。口縁部の開きはかなり水平に近くなる形で、口唇部にやや肥厚化傾向のみられるものもある。場合によると7はコシキになるともみられるが確認はない。カマドの裾にある5は、6とくらべて頸部のくびれ、長胴などの面でやや古い要素をみせる。

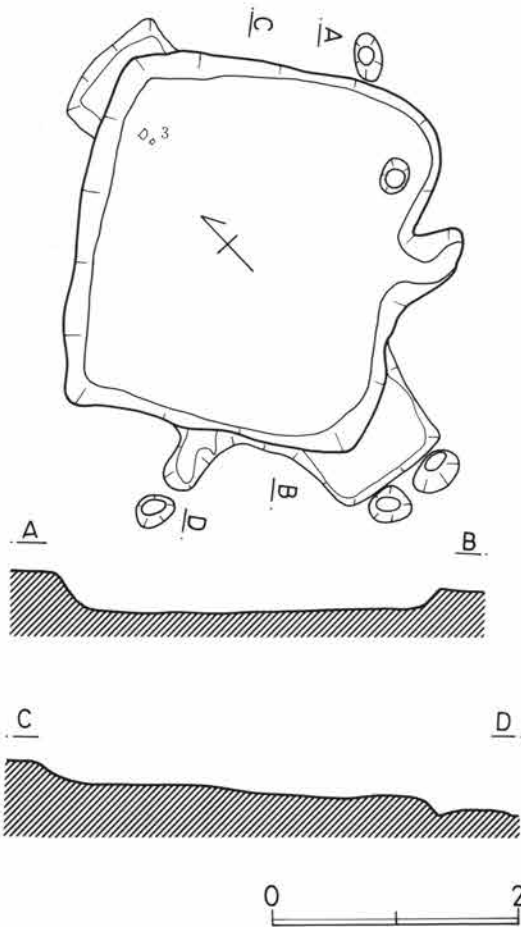
埴は小型で、カマド中から出土した。不明確な平底で、体部は逆「ハ」の字形に開く。口縁端部にやや肥厚化の様相をみとることができる。体部外面は指頭痕をのこし、やや雑な整形である。

坏は、有段の坏と稜で短かく立つ形と二種がある。2は底部の浅い体部から不明確な段を有し、そこから外反して立つ口縁をもつ。端部は外そぎの技法である。

3はいわゆる真間型の坏で、口径が小さく、浅い体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は短かく直立する。両者とも体部外面はヘラ削り技法が顕著である。

B-9号住居

F-19区で発見した隅丸方形の住居である。規模は2.6×3mで、ローム面からの掘り込みは30cmである。住居の北から南にかけては、中世の所産である長方形土壇が掘られていたが、住居面までは達していなかったため、全ぼうをつかむのには支障がなかった。



第238図 B-9号住居図

壁面の立ち上がりは傾斜しており、シャープな感じはない。その壁の内、東壁のほぼ中央に壁を削りこんだ部分があり周辺に少量ではあるが、焼土が散布していた。この部分がカマドとみれば、位置的には東壁中央にあったとみてよいであろう。

そのほか、この住居の床面には東北隅に1個柱穴状のピットがある。径20cm、深さ20cmほどであるが、上屋との関係でみると、この柱穴1個のみではそれを柱穴とは断定できない。

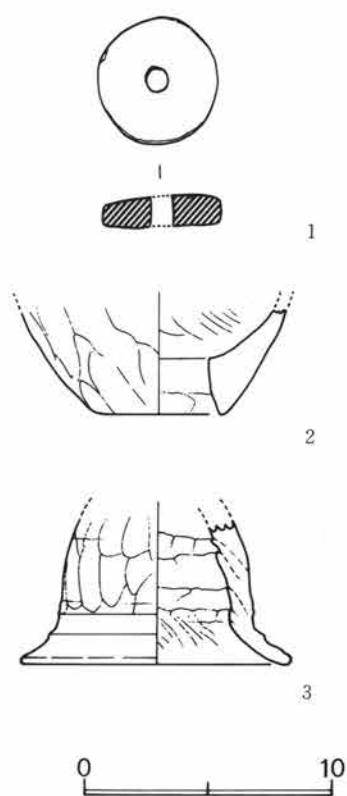
また、住居の外周に4個のピットがある。住居内のピットと同様なピットであるが、これが、榿木受けの柱列の位置とみれば、もっと外周にピットのあく可能性があるのかも知れない。

床面は東半では水平で、ほぼ整って平坦であるが、西半では南西部がやや低くなっている。

遺物は住居北西隅部分に発見されたが量的には極く少量である。

遺物 (図239-1~3) 完形品としては、石製紡錘車(1)1点である。石材は、流紋岩で扁平な形のもので使用擦痕がみられる。

2はコシキである。体部下半のみであるので全体



第239図 B 9号住居遺物実測図

の形は不明であるが、丈のつまった長胴形のカメ型コシキとみられる。底部の孔は、かなり厚手の底を内と外両面から削りとっている。

3は土製支脚とみられるが、ズングリした高環の脚のような形をしている。内面には輪積み痕が凹凸ほどである。

したがって、カマドなども全く確認できない。ただ、住居東南隅および東北隅に貯蔵穴様のピットがあることが手がかりになる。

貯蔵穴は68×80cm の方形で深さ60cm で、壁の掘りこみもキッチリしている。底部は平坦につくられている。

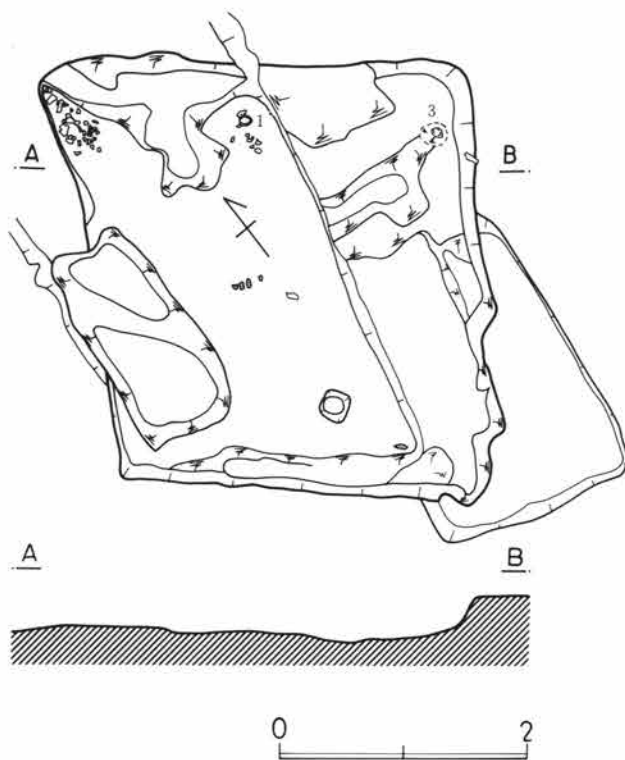
北東隅にあるものも多少形にくずれは見られるが、ほぼ同規模のものである。これからカマドをみせてのこり、指頭痕があり、外面はヘラ削り、端部は横ナデしている。

B-10号住居

H-19区に検出された不正方形の住居である。特に周辺が中世を中心とした長方形の土垣群で住居のまわりがかなり荒れていて、範囲の確認にも困難を来たす状況であった。

規模は3×3.5mで、北西、東南隅に鋭角になるような平行四辺形である。住居の南西部、北東部で土垣と溝状の遺構と重複している。

ローム面からの掘りこみは25cm ほどであるが、東壁部分では削られて範囲も不明確であった。



第240図 B10号住居図

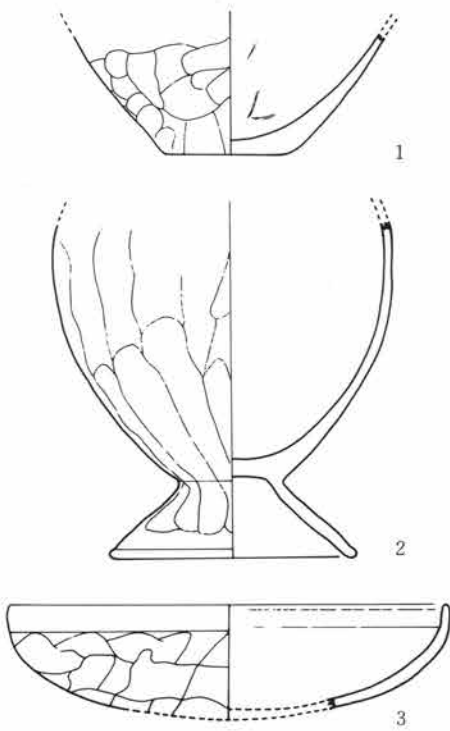
カマドなど全くその位置を想定する手がかりもないほどである。この集落で一般的にみられる北壁か東壁をみると両壁とも破壊が著しく、旧状を望むべくもない。しかし、土器の出土などからすると、東壁より北壁に付設されていた可能性がある。特に東に寄った位置が掘りとられている部分にあったとみるのが妥当であろう。

柱穴らしいものは南壁中央から70cm ほど入ったところに1個認められる。径25cmの方形気味の掘り方をみせ、深さは15cm ほどである。

また南壁下には周溝が20cm 巾、深さ10cm ほどで掘られているが、東壁中央までその痕跡をとどめている。

遺物は北壁下に集中するが、北西隅、中央、東北隅と床面の残存状況のいい部分に認められる。

遺物 (図241-1~3) カメ、脚付カメ、坏



第241図 B10号住居遺物実測図

の3点が出土している。カメは底部のみで、平底で胴の詰まった肩のはったもので、口縁は外反りして開くものと考えられる。

脚付カメは口縁を欠いているが、イチジク型の体部に「ハ」の字状に開く脚部を付す。カメと同様に、かなりケズリが強く、器肉はうすく、胎土中の砂粒をうき出させている。

坏は大型で、浅い丸底の体部から短かく直立する口縁部をもつ。体部外面は不定方向のヘラ削り痕がみられるが、内面および口縁外面はていねいに横ナデされている。

B-11号住居

J-19区で発見された方形住居とみられるが、長方形土坑がほぼ南北方向に4本も入りこんだため、床面はほとんど、ズタズタで、わずかに住居の西南隅を除く部分が検出されて、かろうじて範囲を想定したものである。

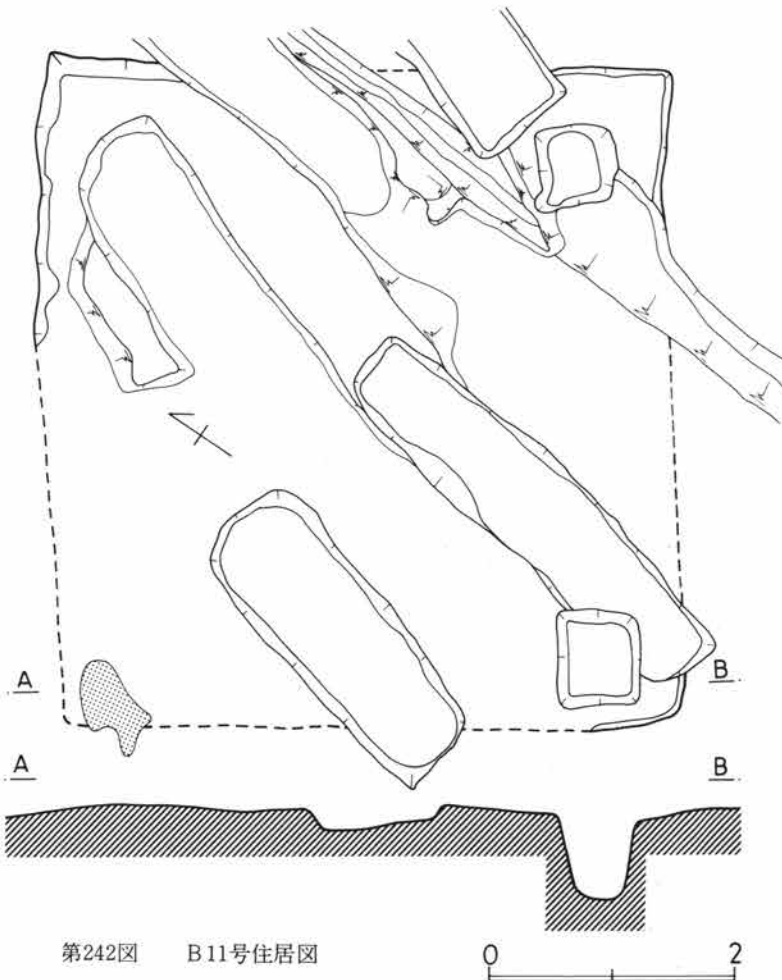
規模は5.1×5.3mで周辺がけずられているため、壁の立ち上がりもようやく確認したほどである。

したがって、カマドなども全く確認できない。ただ、住居東南隅および東北隅に貯蔵穴様のピットがあることが手がかりになる。

貯蔵穴は68×80cmの方形で深さ60cmで、壁の掘りこみもキッチリしている。底部は平坦につくられている。

北東隅にあるものも多少形にくずれは見られるが、ほぼ同規模のものである。これからカマドの位置を推定すると、北東隅の貯蔵穴と関係するカマドは北壁に、南東隅の貯蔵穴と関連させて考えれば東壁にカマドが設置されていた可能性が考えられる。

更に推察すれば、北東隅の貯蔵穴のくずれからみれば、当初北壁にカマドがあったが、後に東壁につけかえられた可



第242図 B11号住居図

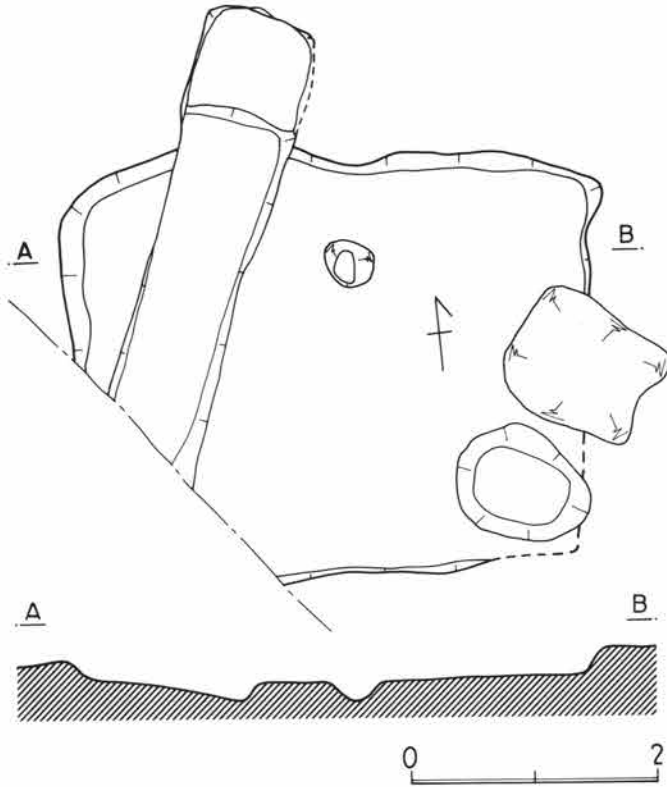


第243図 B11号住居遺物実測図

能性もある。それは、後者の貯蔵穴に遺物が含まれて、廃棄時までこの貯蔵穴が使用されていたとみることが妥当と考えられるからである。

その他に、住居南西隅に焼土が一部のこっている。

遺物は、貯蔵穴の他、一切発見されないほど床面が破壊されている。



第244図 B12号住居図

遺物 (図243-1) 土師器カメである。肩部から上の部分のみである。頸部のくびれは強く口縁部との接合は強い「く」の字状を呈する。口縁端部はヘラでおさえている。

成形は輪積みで割れもそれにそっている。整形は体部はヘラ研磨、口縁部は内外面とも横ナデ技法をみせている。

B-12号住居

M-18区で発見された隅丸方形住居である。この住居は東壁南半部で13号住居と重複している。13号住居との前後関係は出土遺物が全くないため不明である。

また、この住居は南西コーナーで路線外にかかり、更に西壁部で長方形土壇により切断されている。

ローム面からの掘りこみは20cmで、規模は4.3×3.35mである。住居北西隅部はやや歪みがある。

カマドは東壁中央部にあったとみられるが、その部分に掘りこみがあり破壊されて

しまったとみられる。

その右脇の南西コーナーには大きい貯蔵穴があり75×100cmの径をもち、深さは50cmを測る。形状はやや長円形気味である。

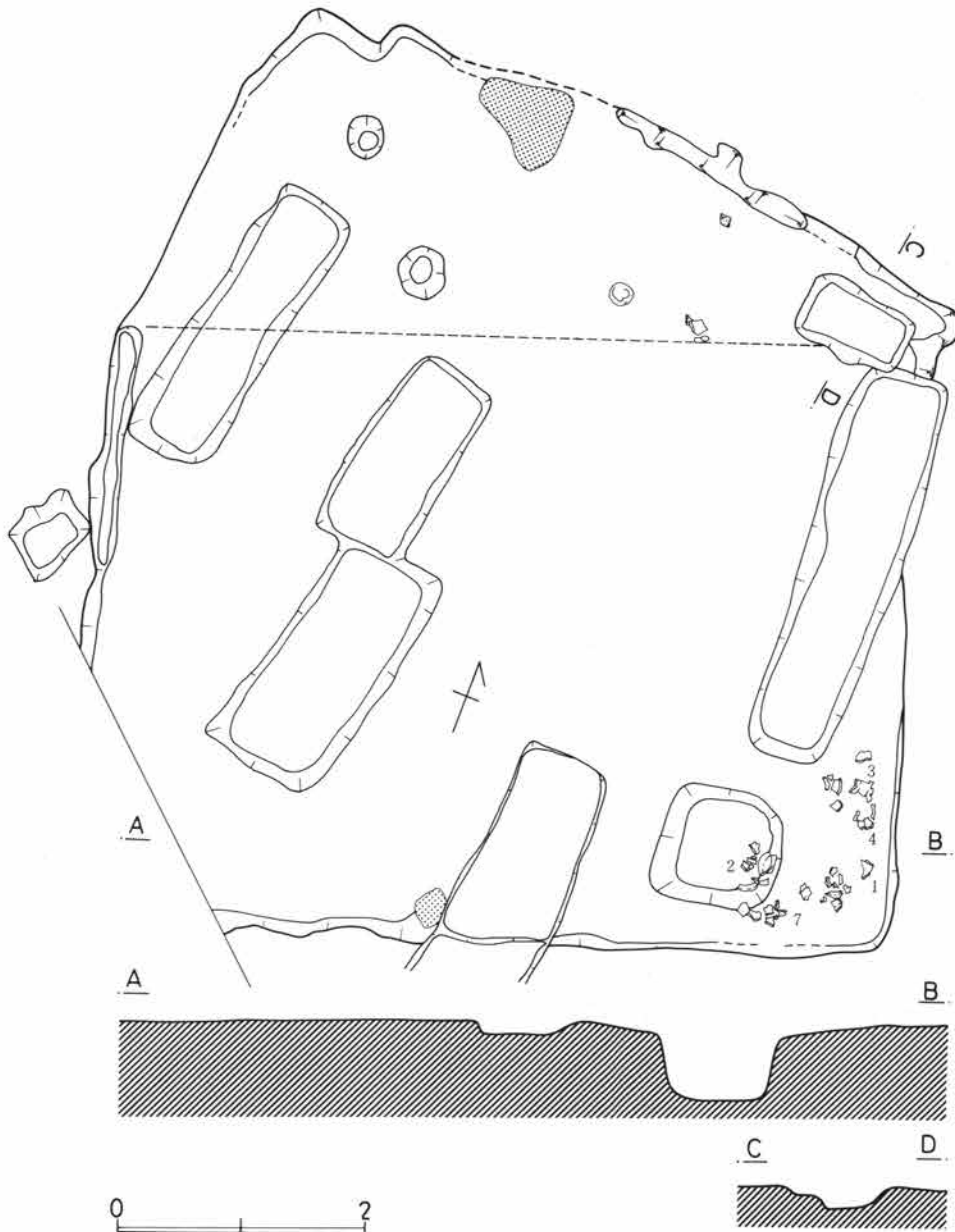
その他、住居中央線上北半中央部に径30cm、深さ18cmほどのピットがあいている。これが柱穴であるか否か不明であるが、二柱式の上屋構造を想定するとすれば、この位置に来る可能性もある。

その他、本住居では長方形土壇で床面を切られているが、全体的には床面はかなり整っている。遺物は全く発見されていない。

B-13号住居

L-19区を中心に検出された住居で、二軒の住居が重複している。即ち、北側に古い住居があり、それを切って南側に長方形住居がのる。今、この新しい住居をA、古い住居をB号とする。しかし、両住居とも、周辺のロームが削られているため、その範囲については推定の域を出ないものである。

A号住居は南側に主軸方位を磁北線に近くとっている。規模は6.6×4.9mで、ロームの壁の立ち上がりは



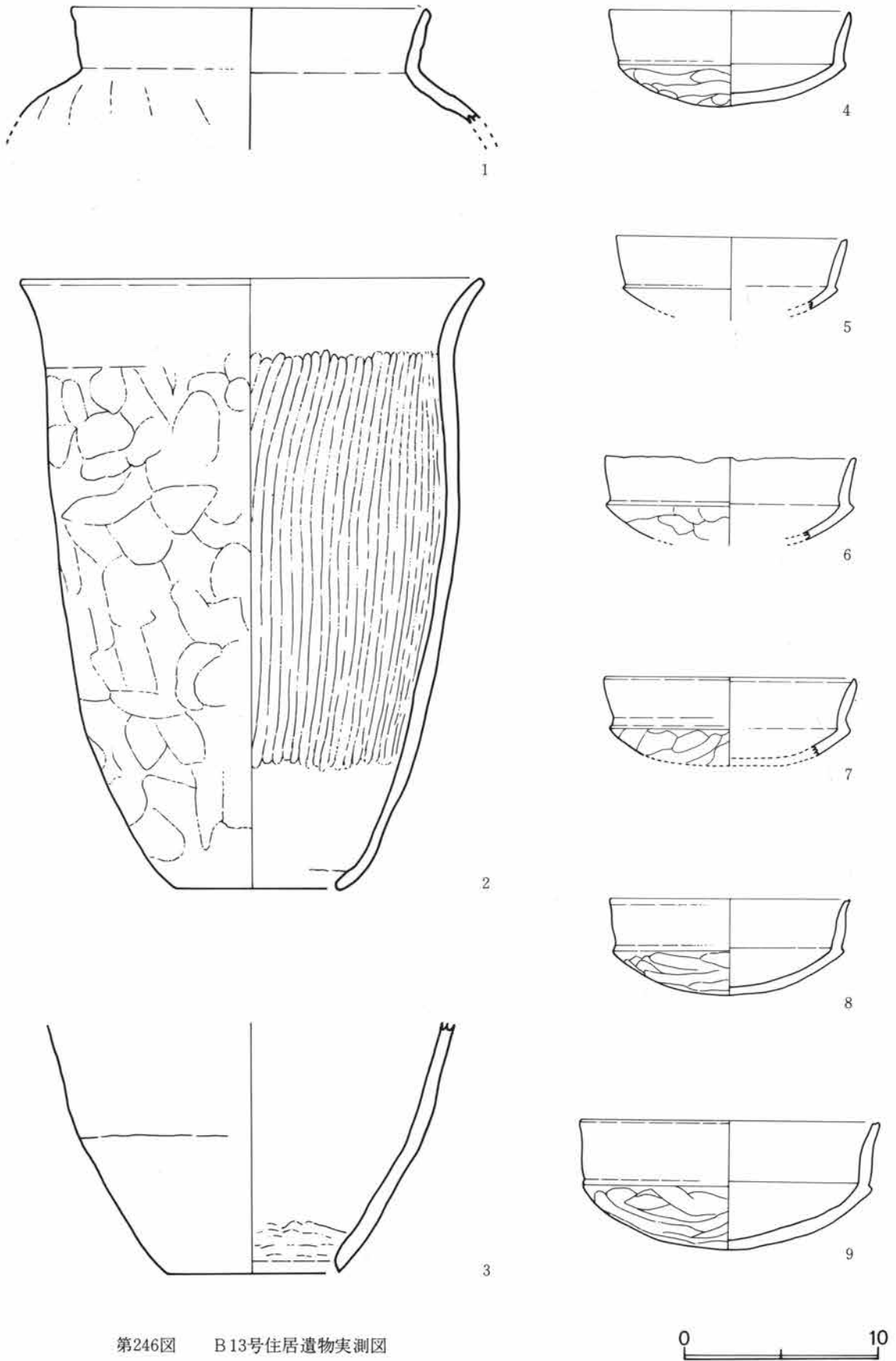
第245図 B13号住居図

ほとんどない。しかも、床面上に5個の長方形土坑が掘られてほとんど住居の約1/3の床面がこわされている。

住居の施設としては、住居東南隅に貯蔵穴があいている。径1m、深さ50cmの方形の掘り方をもつ。この穴の縁や周辺にたくさんの土器が集中して検出されている。

カマドは、東壁か、南壁の中央にあったとみるのが、貯蔵穴の位置からみて妥当性がある。その目で周辺をみると、南壁、北壁とも該当する位置には長方形土坑があり、確認することはできない。ただ南壁の土坑右脇に焼土があり、ここにカマドを想定することはできる。その他、床面には西壁に壁下周溝が一部にめぐっている。

床面は全体的にかなり踏み固められており、整っている。



第246図 B13号住居遺物実測図

B号住居はA号住居の北に軸線を東にズラして重複している。そのため住居は北1/3程度しか検出できないことになり、わずかに貯蔵穴、柱穴などを確認したにとどまる。貯蔵穴は北東隅部にあり径50×90cmの長方形の掘り方で深さ20cmほどの規模をもつ。

北壁中央やや西寄りにかなりまとまった焼土塊があり、北壁中央にカマドがあった可能性が強い。特に遺物が出土している地点から考えれば、この推察は誤りはなかろう。柱穴様ピットは北西隅に2個あるが径40cmほどで、深さ20cm内外である。コーナーとの関連でみれば内側のものがより柱穴に近いかもしれない。床面は全体によく踏み固められ、特に遺物が出土している周辺は固い。

遺物 (図246-1~9)

A号住居の遺物、貯蔵穴中かその周辺から出土している。壺、コシキ、坏の三種である。壺は肩部から上部のみで肩の張りが強く、頸部は強くくびれて短かく直立する口縁部をもつ。コシキは口縁端部に最大径をもつ長胴形で底をすべて抜く。体部外面はヘラ削り痕が顕著で、内面は荒い櫛状工具で内面を整えている。

坏はいわゆる有段の坏で、浅い体部、開き気味に立つ口縁、その境の段はしっかりと両者を画していることは共通している。口縁部は彎曲気味のものと同直線的なもの、口唇部が外そぎ、内そぎ状になっているものなどがある。

B号住居は坏2つであるが体部が深いこと、口縁の立ち上がりが深いこと、大型のものがあることなどがA号と異なる点である。

全体的にみるとA号よりB号に古式をうかがうことができ、遺構の調査所見とも合致している。

B-14号住居

J-20区に発見された住居で、これもローム面までかなり荒れていること、溝状の掘りこみが住居を縦断するなどしてのこりの状況はよくない。特に平坦部はほとんど旧状をのこしていないといった状態で、かろうじて深く掘りこまれた貯蔵穴で住居の存在を確認したほどである。

住居の推定規模は西壁長で3.1mを算するが、東西方向の規模は不明である。北壁に接して浅い貯蔵穴状のピットがある。この中からは2、3の遺物が出土した。

また、東半部のロームが残る部分にもう一つの貯蔵穴がある。規模は径60、深さ40cmで不正円形をしている。この中からは1が出土している。

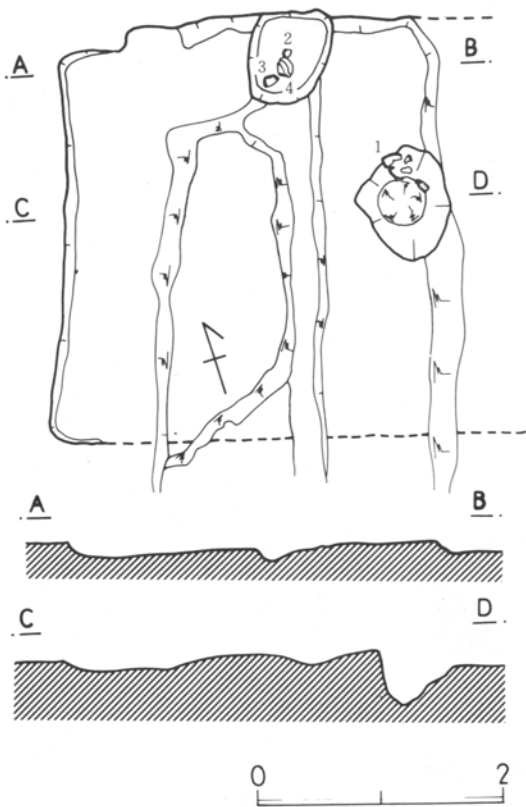
従って、この二つの貯蔵穴は時期的に差異があることは明白である。また、その他の施設は一切確認できない。

遺物 (図248-1~4)

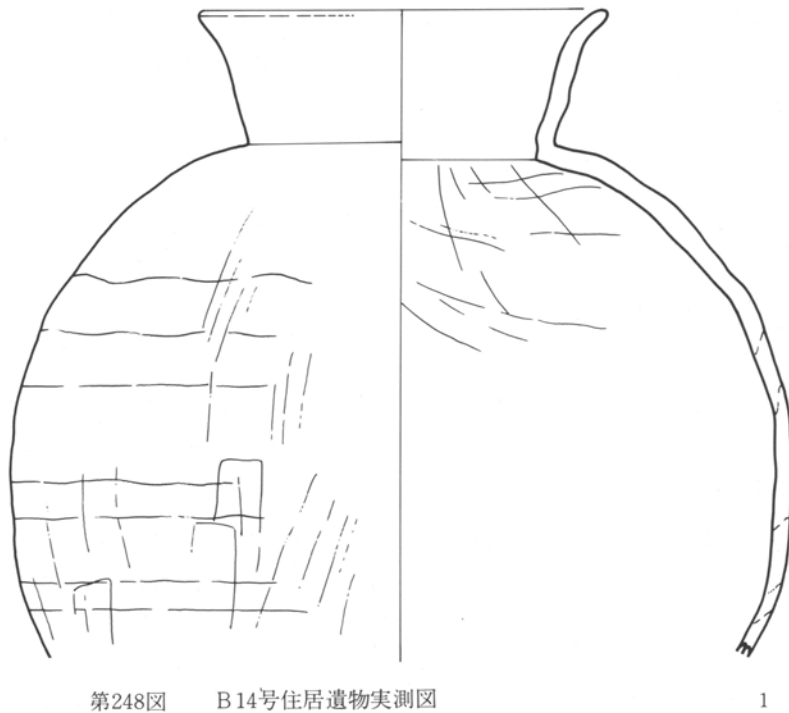
新しい貯蔵穴の中からの出土遺物は坏3個が出土している。

2、3は、大きい平底から斜めに大きく開く口縁をもつ。しかも、指でおこしたらしく屈折部分の外側に指頭痕がのこされている。

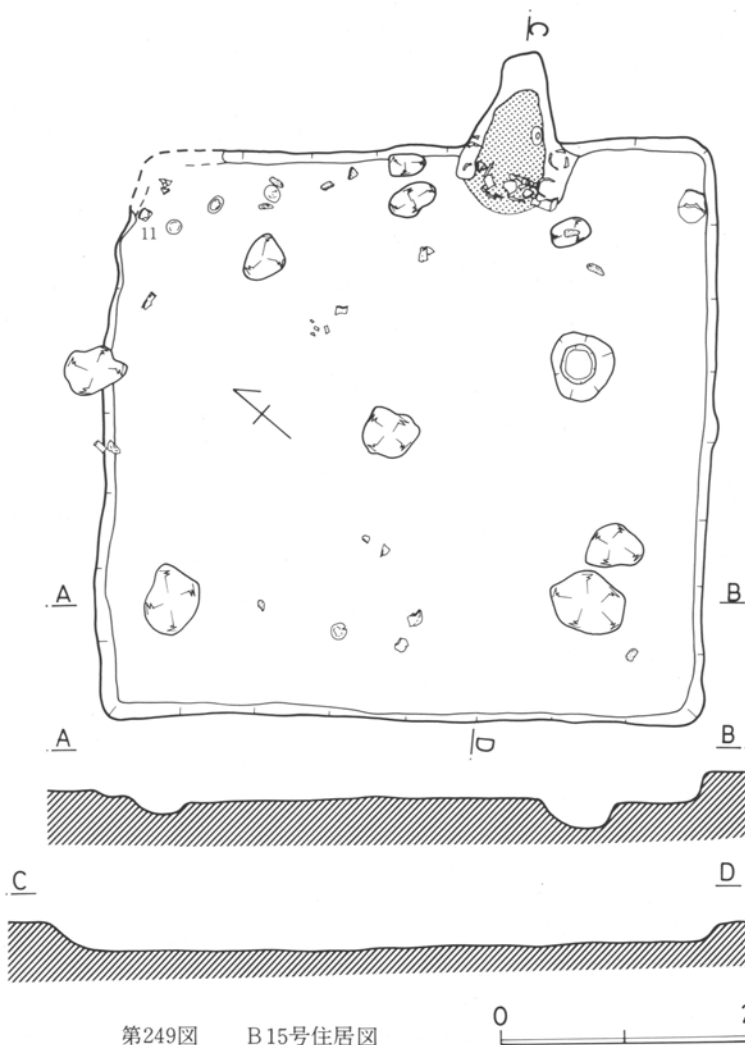
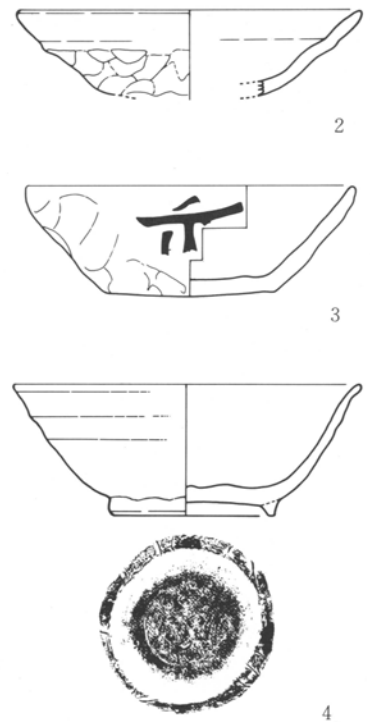
3には墨書がみられるが判読できない。4は須恵器



第247図 B14号住居図



第248図 B14号住居遺物実測図



第249図 B15号住居図

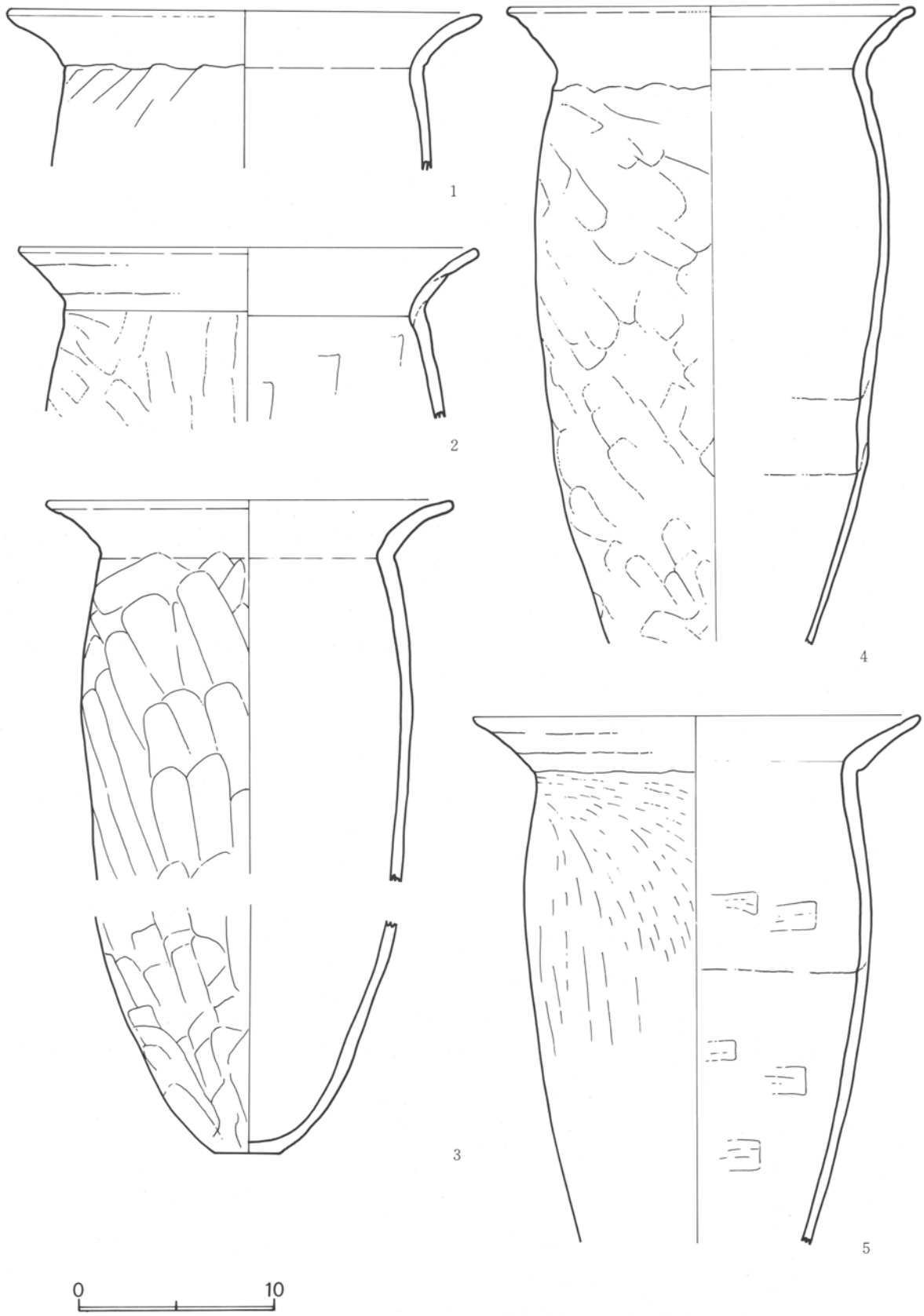
の高台碗で深手の大型である。底部と口径の比は1：2で体部はロクロ痕をのこして口唇部は小さく外反する。高台は付け高台である。1は球形胴から強くくびれた頸部へ、そこから直立気味に立つ口縁端部は短かく外斜する。

B-15号住居

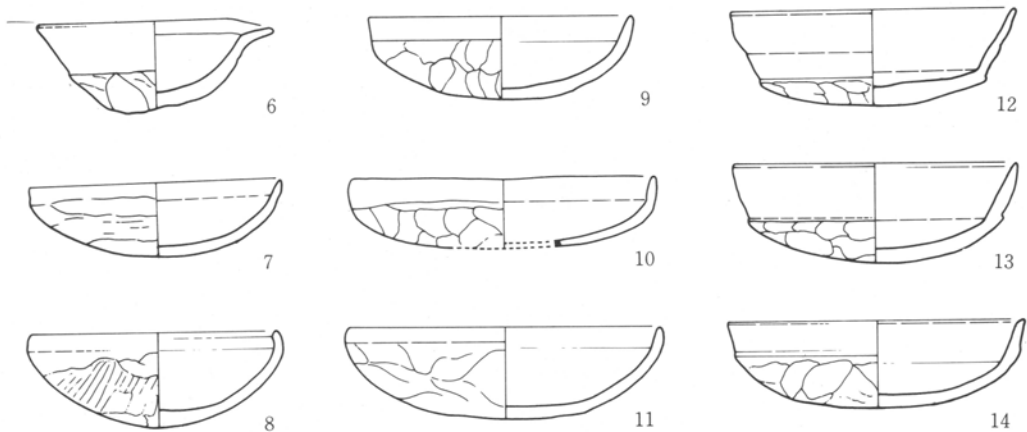
J-21区検出の方形住居である。全体的にかなりのこりの状態がよく全ぼうをつかむことができる。

規模は4.6×4.7mのほぼ方形で、深さも20cmほどである。ほぼ対角線が磁北をとるような方位をもち、その北西隅でわずかに16号住居と重なる。

カマドは東壁南寄りにあり、燃焼部を壁内に張り出した粘土カマドである。焚口巾50cm、奥行1.1mでやや軸線が壁線とズレる。袖部に長カメを立て、更にそれを結



第250図 B15号住居遺物実測図



第251図 B15号住居遺物実測図

ぶように長カメが架構されたような状態で出土した。

柱穴はあまり深いものではなく、概して掘り方もシャープさが無い。全体的には四隅に柱穴様のピットがあり、更にその中央にもピットがくる5柱式のような様相がうかがえる。更に南壁側にもう一本主柱穴間にピットが入って入口との関連を想定させる。その他の住居の施設はみられず、床面もよく整っている。特にカマド周辺は固く踏み固められている。

遺物 (図250、251-1~14) 長胴カメと坏の組み合わせであるが特にカマドに使用された長胴カメが多いこと、坏の個体数が多いことに特徴がある。長胴カメは、最大径を口縁端部におく砲弾型である。体部は紐作り痕をたて、斜方向のヘラ削りで調整している。カマドに使用されたものとそれにかけてたみられる一群には差があり、特に後者の5は、口縁が水平状に開くこと、体部はケズリがやや生乾きの時点で削ったために胎土中の砂粒が削痕の方向にのこっていること、体部はケズリのためにかなり器肉がうすくなっていること、下半部のふくらみを欠くことなどが指摘され、カマドに使用されたものが鬼高的なのに対し、真間の様相をみせている。

坏も有段の鬼高式に属する器形(12~14)と、深手の口縁端部を短かく直立または内湾する真間式的なもの二種がある。前者は浅い体部、口縁の立ち上がりの短かいこと、境の段が弱いことに特徴がある。

後者の坏は口縁と体部の境が稜線で画されている。体部の深いものと浅いものがあるが、口縁が内斜するものや直に立つ素縁のものは深めで、特に内斜する8は小型だが深い。10は体部が浅く稜線もはっきりして、むしろ鬼高的な坏の退化型態とみる。体部は手持ち不定方向のヘラ削りで、全体に薄手のつくりである。内面はていねいになでつけている。

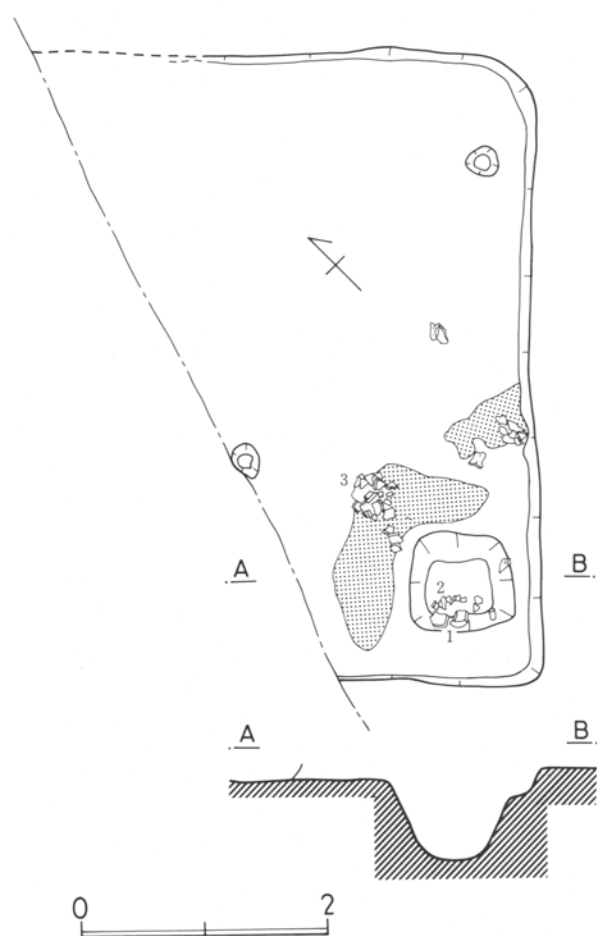
6は異型のわん型土器であるが、手捏土器で不安定な平底から、体部は深く内湾しつつ外開きして立ち、口唇部は外に屈曲させて開いている。

B-16号住居

I-21区に発見された方形住居である。住居西半を切られていて約半分を調査しえたのみである。西半部には溝や土壇が複雑に切り合っているためである。

その残存している東壁長は6.05mで、北壁長は現状で4.1mを計測でき、それ以上にのびることは確実である。形状からすると方形になるものと思われる。

ローム面からの掘りこみは20cm 内外で西へいくに従いロームが緩傾斜して掘りこみも浅くなるため、よ



第252図 B16号住居図

けいに形状をつかみにくくしている。

住居には東南隅に方形の大型貯蔵穴を有している。その規模は径1m、深さ55cmほどであり、断面は逆四角錐台形である。貯蔵穴の縁にかかって長カメの押しつぶされたものが2個体分出土している。

この貯蔵穴の周辺には多量の焼土の塊りが堆積して検出されている。この中には、コシキがやはり押しつぶされた形で出土している。

カマドは東壁部にあったものとみられ、東南隅から2.3mほどのところに壁に接して焼土が検出されている。このことからすれば、カマドは東壁中央からやや南に寄った位置に粘土カマドがあったとみられるが、形状や規模については明らかになし得ない。けれども壁面の状況で判断すれば、壁が外まで切られていないこと、焼土が壁内に納まっていることなどの点からして、煙道も壁外へのびなかった形のものである可能性が高い。

柱穴状のピットは東北隅部、カマド前面に2個検出されたが、共に径20cm、深さ15cmほどで小さく、位置的なものから考えてもこ

れを柱穴とする積極的根拠はない。床面は平坦でよく整い、かなり固く踏み固められて、とりわけカマド前面が固い。

遺物は、貯蔵穴中、貯蔵穴周辺の焼土中、カマドとみられる焼土周辺に集中し他からは土器の小破片の出土が多かった。

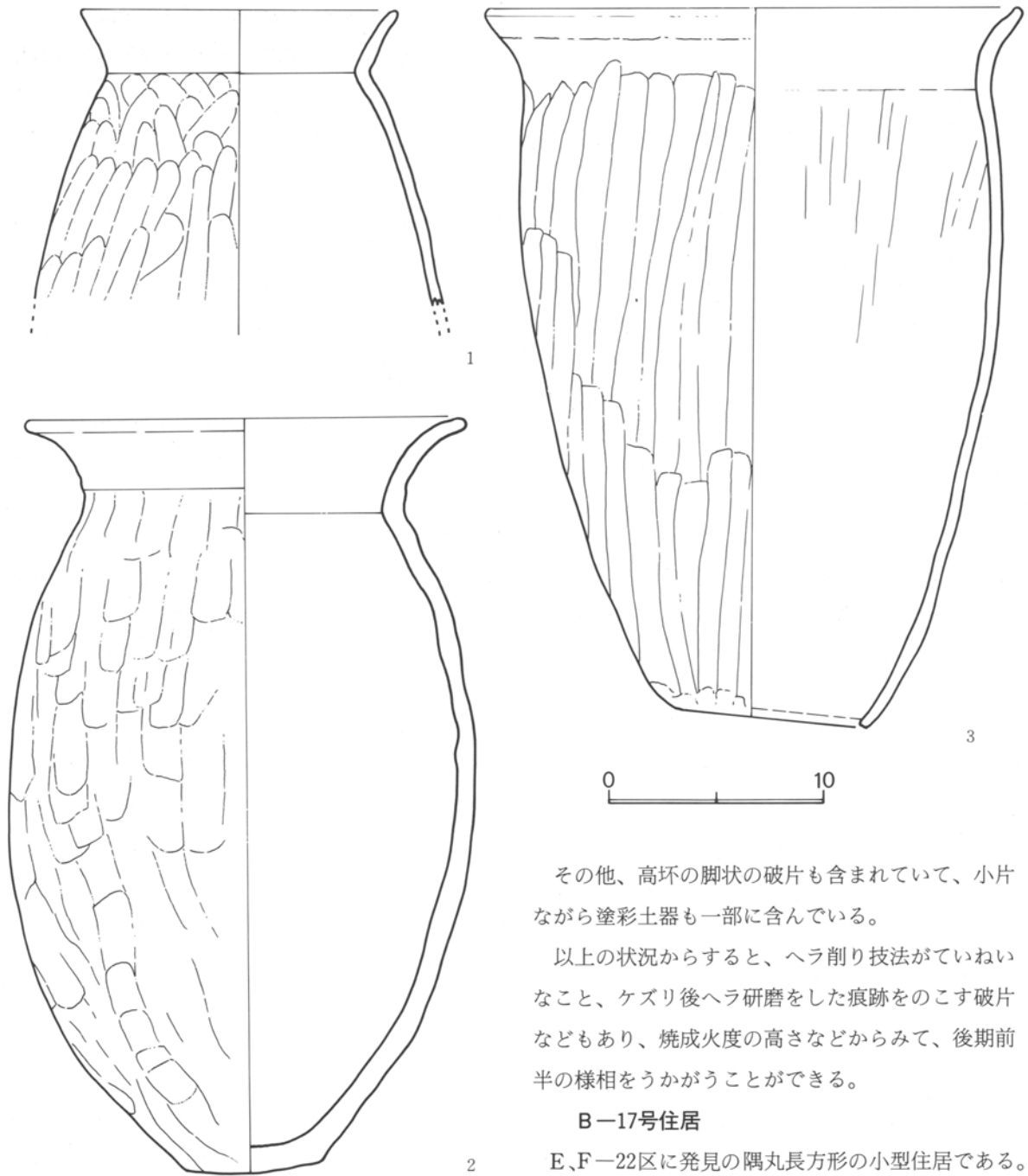
遺物(図253-1~3)形としてまとまるものは、図に示した長胴カメ2点、および長胴の大型コシキ1点のみである。

長胴カメは2にみる如く、卵形の器体部に、それに比し小型の平底をもつが、やや不安定である。頸部は体部中央のふくらみからかなり強くくびれ、そこから外反り気味に大きく口縁部を開いている。最大巾は体部中央にあり、整形は外面がたて方向ヘラ削り、内面はナデの技法をみせている。

コシキは、やや頸部のくびれを感じさせながら外開きする口縁部をもつ長胴形である。肩部の張りは弱く、孔部に連なる。体部は、たて方向のヘラ削りで輪積み痕は消えている。

内面はナデがていねいに行き届き、全般に整ったつくりである。

その他に、破片で、坏があるが、その様相でみると、底部が肩部の張りがみられること、口縁部は深く立ち、端部をヘラで仰える技法をみせること、口縁部と底部の境にはっきりした段を有するものが含まれている。



第253図 B16号住居遺物実測図

その他、高坏の脚状の破片も含まれていて、小片ながら塗彩土器も一部に含んでいる。

以上の状況からすると、ヘラ削り技法がていねいなこと、ケズリ後ヘラ研磨をした痕跡をのこす破片などもあり、焼成火度の高さなどからみて、後期前半の様相をうかがうことができる。

B-17号住居

2 E、F-22区に発見の隅丸長方形の小型住居である。3.1×4.4mの規模をもち、ローム面からの掘りこみは10cmほどで浅い。その上、床面に多数のピット状

の掘りこみが大小入りまじって複雑に切り合っているため床面が大きく荒れている。

カマドは東壁南寄りと北壁東寄りの二つの存在が予想され、それぞれ少量の焼土を伴っている。このことからすれば、カマドのつけ替えが考えられる。状況的には北壁のものに焼土がほとんどないことを考慮すれば北壁から東壁に移設された可能性が強い。焚口中、奥行とも50cmほどである。柱穴はあまり明らかではないが、4支柱穴が想定される。径50cm、深さ15cmほどであるが東西、南北の柱間が1.9mでほぼ同長で、両壁に付設されたカマドの位置を配慮して、柱位置を全体に東南部に移しているところが興味をひく。

その他、床面上の大小ピットについては性格は不明である。東壁カマド前面のピットの中には焼土ブロッ

第2節 B地区の遺構と遺物(B-17~19号住居)

クの混入がみられることから、床面を整えた際の穴とみている。最も大型の西端ピットは径90cmほどの隅丸方形の形状で深さ30cmほどであり、いわゆる貯蔵穴である可能性もある。

遺物 (図255-1) 「コ」の字口縁のカメの口縁部を出土している。肩部の張り、口縁の屈曲がはっきりしているところから、この型の出現期とみる。

B-18号住居

G-22区を中心に検出された隅丸長方形住居である。2.3×3.5mの規模で東西に長く軸線の方向はほぼ磁北と一致する。

カマドは北壁中央からやや東に寄っているが燃焼部を壁内にもつ粘土カマドで、壁外に半分ほど出る形である。そのすぐ右脇に径50cm、深さ15cmほどの貯蔵穴様のピットがある。カマドの規模は焚口巾40cm、奥行90cmである。また、カマドをはさんで壁線にやや出入りが認められる。床面はやわらかいが整う。

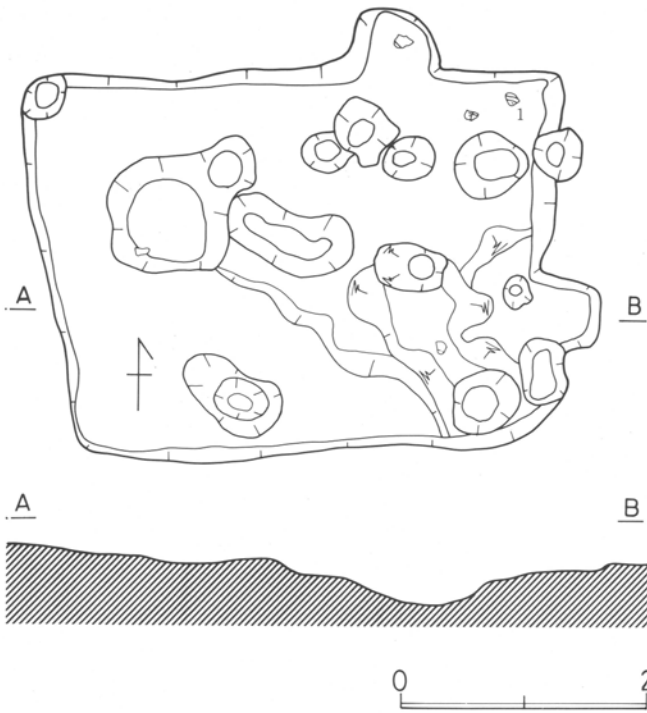
遺物 (図257-1)

坏は深い体部から段をもって長く立つ口縁をもつ形である。底部はヘラ削り後研磨、内面、口縁外側はナデ技法、段はやや弱くなっているが、全体につくりがよい。

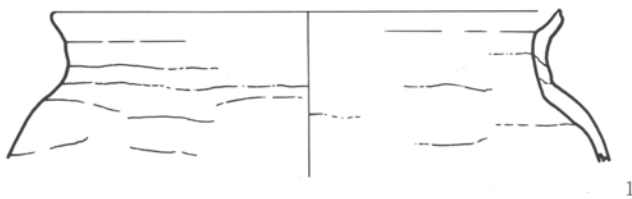
B-19号住居

G-14区に発見された長方形の住居である。ロームの掘りこみは15cmほどと浅く、住居東南隅部を20号住居によって切られている。

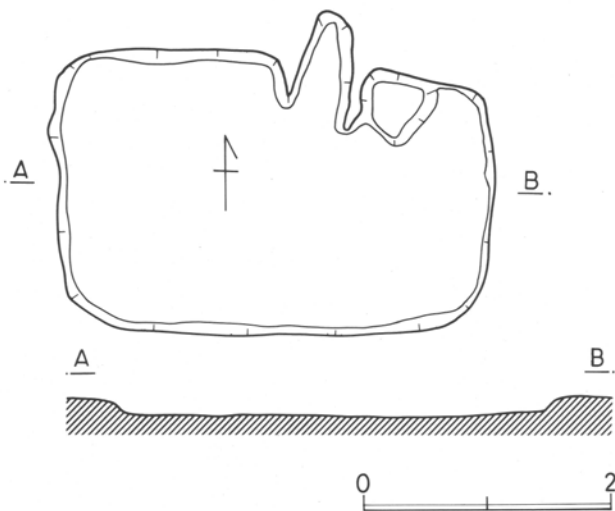
主軸の方位は、ほぼ磁北線に合致しており、これは時期的なものを示すものかも知れない。



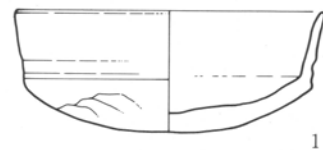
第254図 B17号住居図



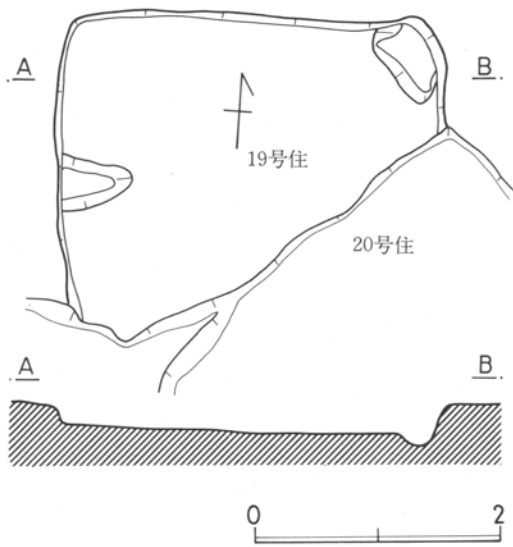
第255図 B17号住居遺物実測図



第256図 B18号住居図



第257図 B18号住居遺物実測図



第258図 B19号住居図

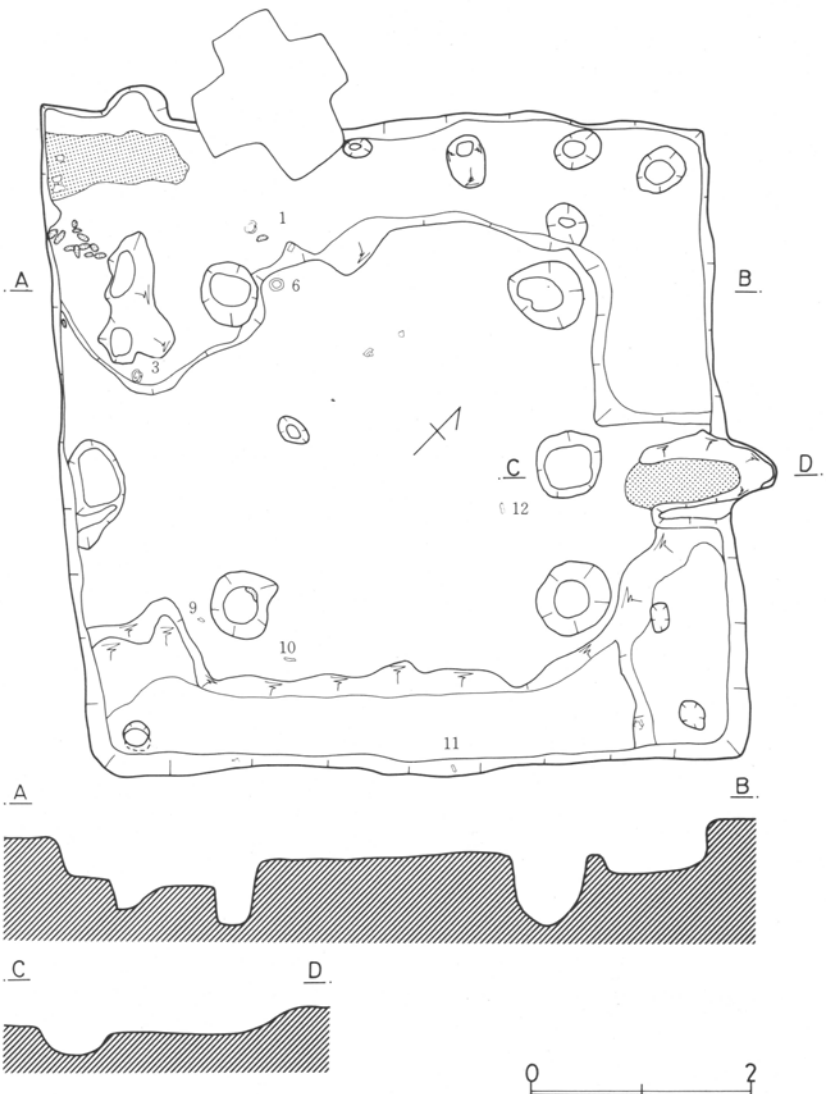
しかし、カマド、壁下周溝等も一切検出されず、遺物もほとんど出土していないため、その手がかりがつかめない。床面は整っている。

B-20号住居

H-23区を中心に発見された方形住居で規模も5.8×6mとかなり大型である。ローム面からの掘りこみも40cmと深く、壁の立ち上がりも直である。

カマドは東壁中央からやや東に寄った地点に燃焼部を壁内に、煙道部を壁外に出している。規模は焚口巾40cm、奥行1.35mと大形の粘土カマドである。

柱穴は四隅に支柱穴が4本検出されているが、径35、深さ55cmほどで、各柱間は南北2.7m、東西3mでま



第259図 B20号住居図

ぶ線はほぼ、南北柱穴の中間に位置することから棟持ち的な性格をもつ柱穴と考えられる。また、壁下の柱穴はほぼ等間隔に置かれしかも各コーナーのピットがやや深い傾向からすると壁状の施設と関係するか、柱受け柱とも考えられる。

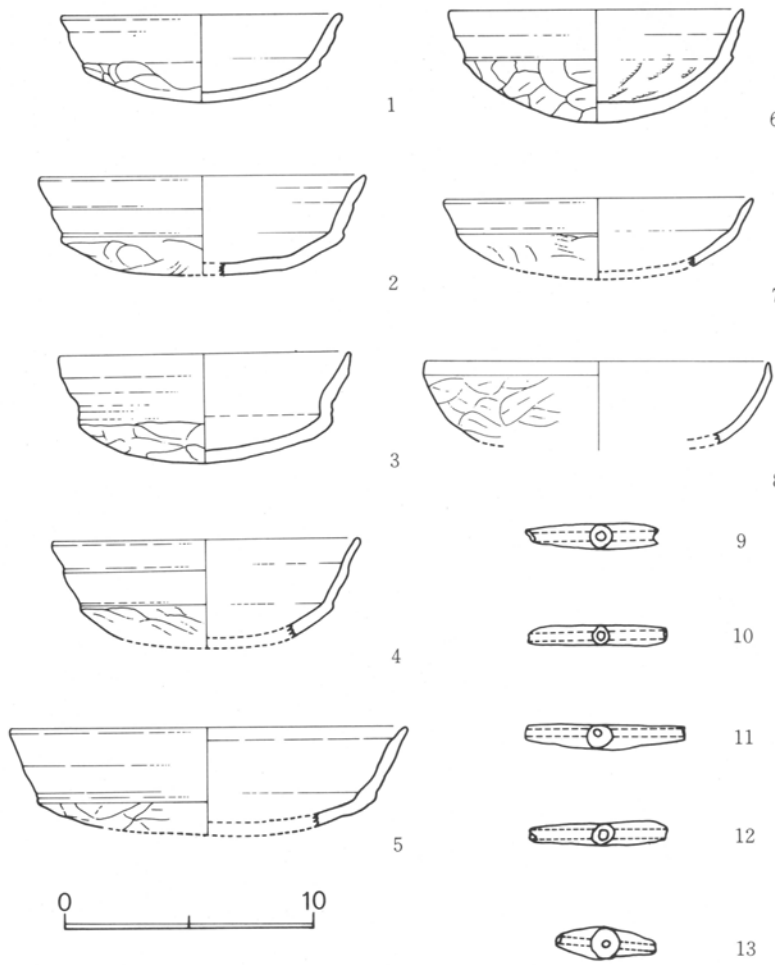
また、住居周縁部は、一旦ロームを掘りくぼめた床下に構造がみられ、この上に貼り床をする除湿工作を施している点も注目される。

これで見ると、棟の位置は東西方向でカマド上に来る形で、北壁下の柱穴によって、屋根構造の形が想定されて興味ある住居である。

遺物 (図260-1~13)

遺物は8個の坏と5個の土錘と偏っている。

坏は3種がある。有段の鬼高型の坏と真間型の坏(8)およびその中間(7)



第260図 B 20号住居遺物実測図

のもの、3種である。

1～5の坏は浅い体部から大きく、長く外斜して開く口縁をもつ。肩部の段はやや不明瞭で、形骸化した感があるものが多く、沈線で強調している。口縁中段にも沈線の入るものがある。

6は肩の段が弱く、体部が削りこまれて円形を呈するところに特徴がある。

7は段が消滅した形で、口縁の立ち上がりも小さい。

8は深い体部から短く外そぎした口縁をもつ坏である。

B-21号住居

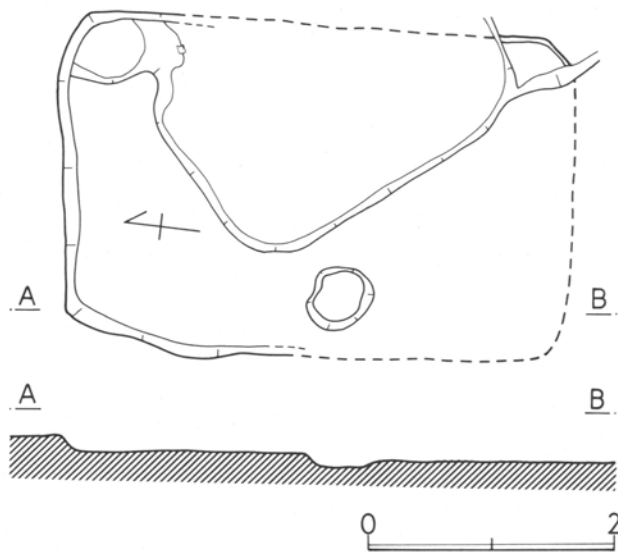
H-23区に発見された住居部分は20号住居と重複している。しかし、発掘途中で、遺構面が荒れていたため、当初住居と認定されなかったことと、20号住居床面が21号住居より低かったため、床面を確認できないまま掘りすすみ、床面は重複外の部分のみの調査にとどまった。

形状は隅丸長方形で、規模は2.7×4.1m、ローム面からの掘りこみは、20cmほどである。しかし南側は20号住居で切られているため、立ち上がりは確認できない。

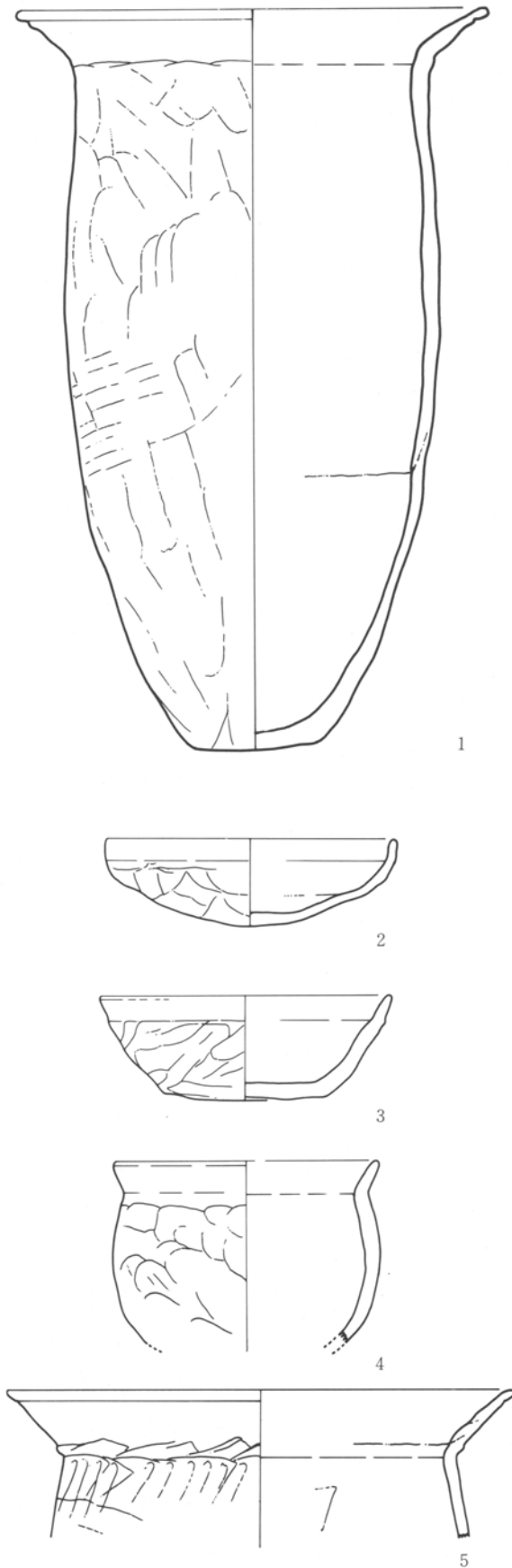
住居の施設としては貯蔵穴様のピットがあるのみである。そのピットは西壁中央に径50cm 深さ20cmほどの規模である。

カマドは、東壁部分にあったとみられるが20号住居により切られているため、滅失している。特にこの部分は、1.6m×2.7mの長方形土壇もうがたれていて、壁の立ち上がりも確認できない。

床面はほぼ平坦で整っている。また、住居



第261図 B 21号住居図



第262図 B21号住居遺物実測図

北東隅にも浅い円形ピットがあるがこれも、性格が不明である。

遺物は重複した部分からはずれた北半分に集中して発見された。このあり方からみると、北東隅のピットは、貯蔵穴の可能性をのこしている。

遺物 (図262—1～5)

カメ、小型カメ、坏の組み合わせである。

カメは最大径は口縁部に来る砲弾型で底部は小さく不安定である。口縁部は、頸部のくびれを全く欠く形からかなり水平に近い形で外開きする形である。紐作り痕が部分的にのこるが、外面はたて方向のヘラ削りで整形している。また、2は、かなり生乾きの時点で削られたらしく、ヘラの動きはスムーズにっていない状況がみられる。

小型カメは底部を欠くが、球形胴で、頸部はややくびれ、そこから、口縁を短かく外開きして立つ。体部外面は指頭痕がのこるほど、雑なつくりで、焼成火度も低い。底部は欠くが、丸底か、不安定な平底になるものとみられる。

坏(2)は肩部の不明瞭な稜で直立するが、端部は素縁である。体部は器面に凹凸があり、特に底部部分は雑である。

坏(3)は平底で大きく安定している。体部はそこから外開きして深くたつ。口縁端部は横ナデしているが全体のつくりは雑である。

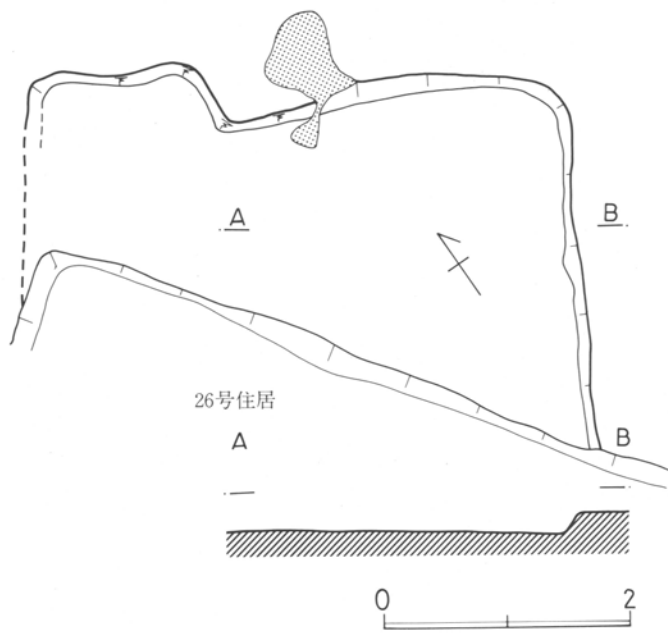
全体的には、カメの口縁の形、坏の形状からして真間的な傾向として把握されるものであろう。

B-22号住居

J-23区に発見された住居であるが、これも23号住居に南半を切られて、ほとんどその状態をつかむことができない。

ロームからの掘りこみは25cmほどで、東壁の立ち上がりはかなりしっかりしていて、東北部を中心にその存在が確認できた。

住居は確認できた北壁長が4.4mで南北長は不明である。北壁部分は西北部で張り出しがあり、曲折している。その部分は1.7×0.6mで、不正形をしている。北壁中央に焼土があるが、壁外が主で、住



第263図 B-22号住居図

居内までのびている。そのあり方からみるとカマドとはみられない。

その他には住居の施設はみられない。

張り出しの部分の床面はかなりやわらかく、踏み固められた形跡はみられないが、東壁中央部分から南側に固い床面があり、その辺りにカマドがあった可能性がある。その意味では、カマドは東壁中央から南に寄った部分にあったのかも知れない。

遺物はほとんど破片もない。

B-23号住居

I-23区を中心に発見された大型の方形住居である。東壁部分の24号住居と重複しているが、前後関係でみると24号住居が23号住居より新しいことが確認された。ロームからの掘りこみから25cm内外と比較的

深く、壁の立ち上がりもしっかりしている。

住居規模は 9×8.6 mで、本遺跡最大の部に属するものである。主軸方位はかなり東にズレている。

住居の施設中、柱穴位置に注目してみると、柱穴が二通りあることがわかる。即ちP1~P4が柱穴規模、位置からして対称である。これで見ると東壁に平行して細い溝がこれを囲むように発見される。おそらく、この4個の柱穴に対して壁があったことが推察される。

P5~P10までの柱穴は前の4個より外側にあり、しかも中央に1個の補助柱穴を入れている。このことからするとこの住居は拡張された住居とみることが妥当であろう。しかも、当初の規模でも1辺6mほどの規模が推定され、かなり大型であるのに、更に1.5倍ほどの壁長まで拡大していることからすると、この住居はこの時期における集落中における中心的な住居であったとみて誤りなからう。

柱穴間の芯心寸法は前記4柱穴では 3.6×4.2 m、6柱穴期では 5.2×5.2 に変化している。このことからすると当初はやや長方形で後に方形に変化したのであろうか。

西壁下にある、断続する2本の溝はほぼ中央部で切れていることからすると住居内を画する特殊な施設があったものであろうか。いずれにしても、柱穴のあり方からすると、棟走向は東西に向いていたものとみられる。それに合せば、カマド位置も当然東壁の24号住居と重複した部分に推察されよう。遺物は破片のみである。

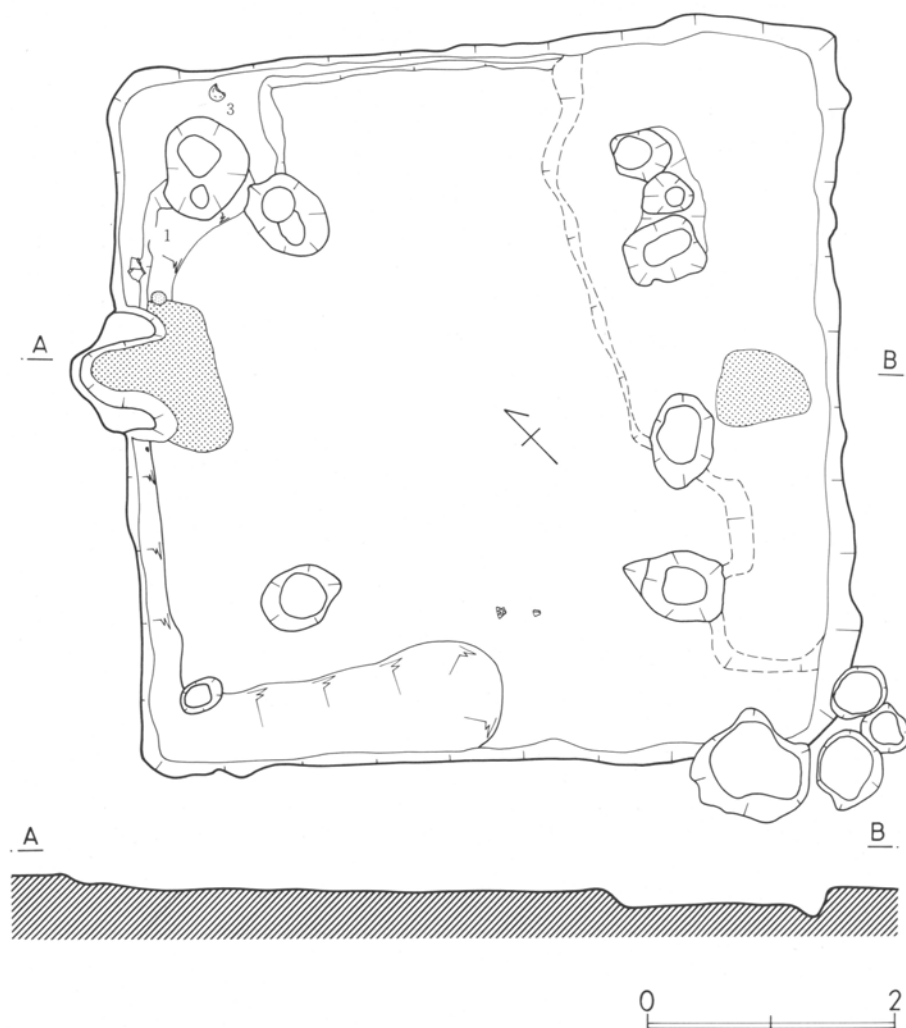
遺物のうち、形状時期を推定できるものに鉢および高坏脚がある。鉢は肩の張りの少ないいわゆる鉄カブト状の丸底形を呈するものと見られる。口縁部には2条の沈線を施す。高坏脚も裾部のみ破片であるが、一旦外開き状に立ち、裾部で急速に開く。立ち上がり部分は3本の沈線でアクセントがつけられているが、かなり太く裾のひろがりの少ない形である。全体的には焼成火度は高くないが、つくりは良好である。

B-24号住居

I-24区に発見された住居で西に23号、東に25号が重なっている。前後関係でみると23、25号が同時に存在し、そのあとに24号が両者による形で配されたものであろう。



第264図 B23号住居図



第265図 B 24号住居図

規模は6×5.8mで主軸はかなり東に偏している。柱穴は4本の支柱穴が確認された。

カマドは西壁中央に袖を壁内にやや張り出させ、煙道部を壁外に出す。規模は50×70cmで焼土が多い。

貯蔵穴はカマドの右脇に発見されたが、円形で径50cm、深さ40cmである。

柱穴のあり方からすると建て替えの可能性はある。棟走向は東西方向にあったとみられる。

その他、周辺部を一旦掘りこんだ除湿工作があったとみられる。全体的に床面

は固く、柱穴も整った位置である。

遺物 (図266-1~3)

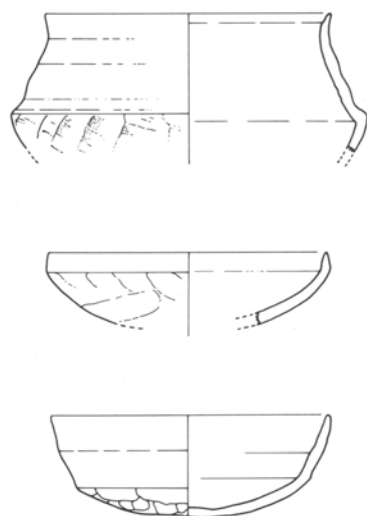
鉢、坏の出土をみたが、鉢は内斜して立つ長い口縁は端部を短かく外反させる。体部は下半を欠くが肩の段はつよい。

坏は、真間期の特徴を有する2と鬼高的な二種がある。前者は稜を肩部¹にかなり明瞭に残すこと、口縁端部を外そぎしている点に特徴がある。3は体部が浅いこと、肩部の段が消えていることに特徴があり、時期的なものを推察させる。

² 全般に低火度焼成で、整形にへら削りの技法が顕著にみられることから、鬼高期と真間期の境に位置するものとみられる。

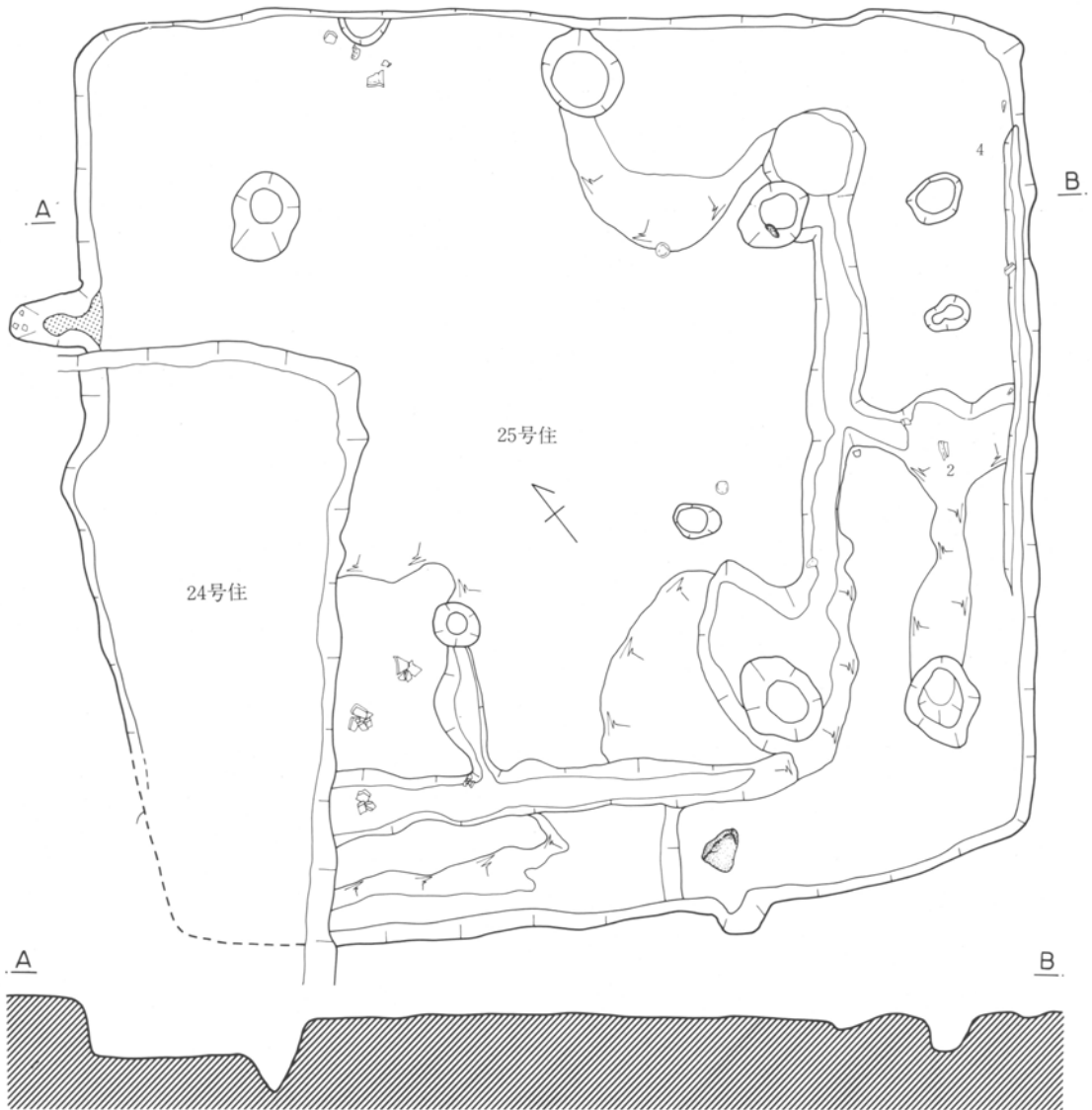
B-25号住居

I-25区に発見された方形住居で24号との重複の時期的関係、住居拡張の様相など、23号住居と酷似する内容をもっている。³

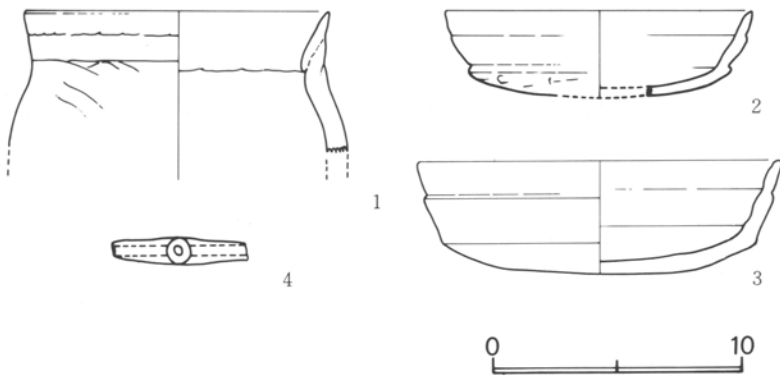


第266図 B 24号住居遺物実測図

規模は7.5×7.8mとこれも大きく、主軸方位はほぼ同様である。拡張



第267図 B25号住居図



第268図 B25号住居遺物実測図

は東壁部分及び南壁部分へみられ、壁下周溝がそれを証明している。その拡張は東壁部で1.3m、南壁部で80cm 巾である。これに合わせて東壁側の柱穴を壁寄りに寄せている。カマドは、これも23号と同様に西壁に付設しているが、かなり破壊されて全容はつかめていない。

遺物は南東隅、北壁下西寄りに集中的に発見されている。

遺物 (図268-1~4)

小型カメ、坏、土錘の組み合わせで、カメは輪積みで器肉があつく、体部は整形がかなり行き届いてヘラでおさえている。体部中央に最大径がくる。坏は浅い体部から長く立つ口縁をもち、沈線を配する。肩の段や稜はやや退化している

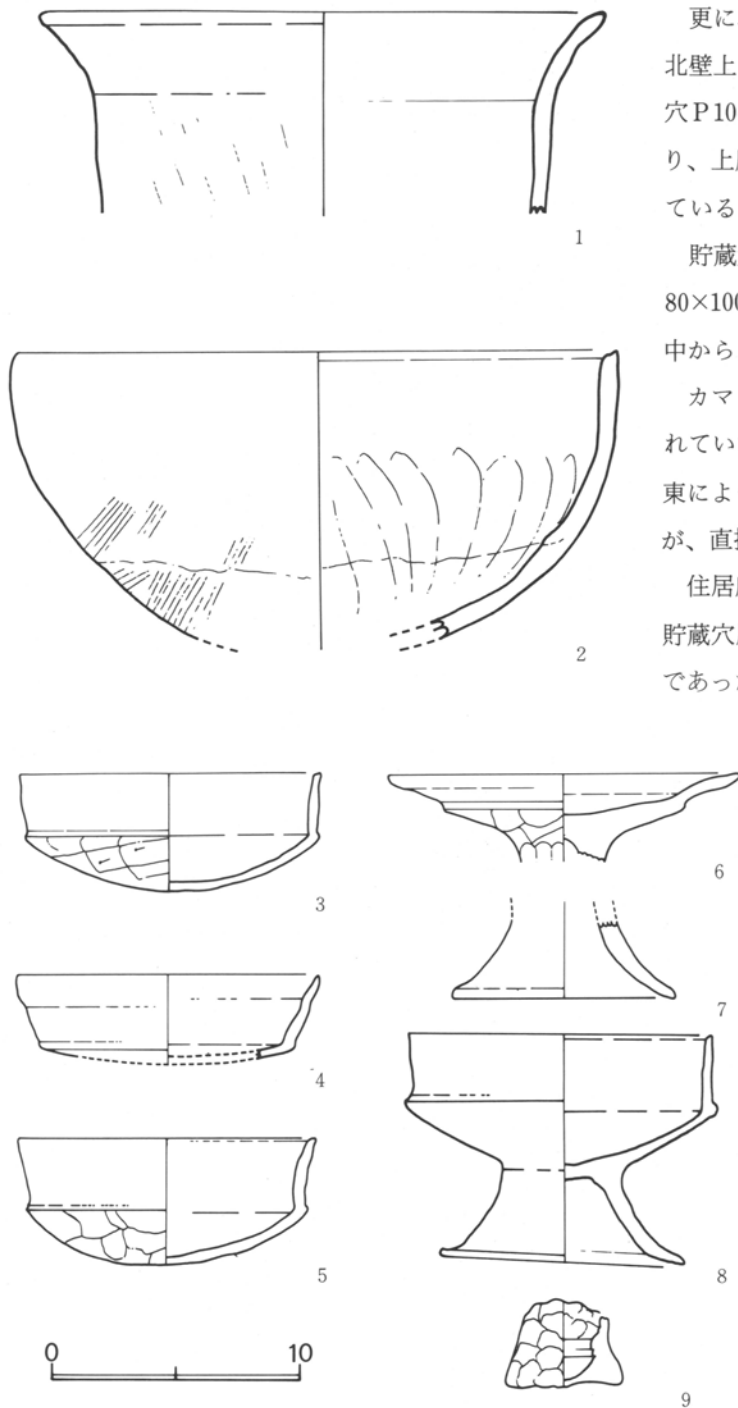
B-26号住居

K-23区で発見された方形の住居で、西壁部で27号と東壁部で28号と重複している。そして両者より新しい住居としての所見が調査時点で確認されている。規模は7.4×6.6mと大型で整った住居である。

柱穴は4本の柱穴のほか、東西方向の中間に南側では支柱穴間に、北側では北壁下に小さい補助柱穴(P5、P6)が来る。



第269図 B 26号住居図



第270図 B26号住居遺物実測図

更に、壁線に切りこむように南壁上にP7、北壁上にP8、P9が設けられている。この柱穴P10のように西壁側にも存在した可能性があり、上屋を想定する上で興味ある資料を提供しているといえよう。

貯蔵穴は東南隅部に方形の大型のものがあく。80×100cmの径で、深さ50cmを算するもので中からカメの上半分が出土している。

カマドはこの位置からすれば、東壁に付設されていたとみられるが、確認できない。焼土は東によった中央部と南壁下に2箇所認められたが、直接カマドとは無関係である。

住居床面はかなり踏み固められており、特に貯蔵穴周辺はパリパリで、埋土がはがれる状態であった。

遺物 (図270-1~9)

コシキ(1)、鉢、高坏、坏の器種である。

コシキは口縁部に最大径をもつ長胴型で下半を欠いている。整形がていねいで、内部のナデは滑らかである。

鉢(2)は半球状の素縁口辺で体部外面はヘラ研磨、内面は放射状のヘラ研磨痕が僅かに残っている。

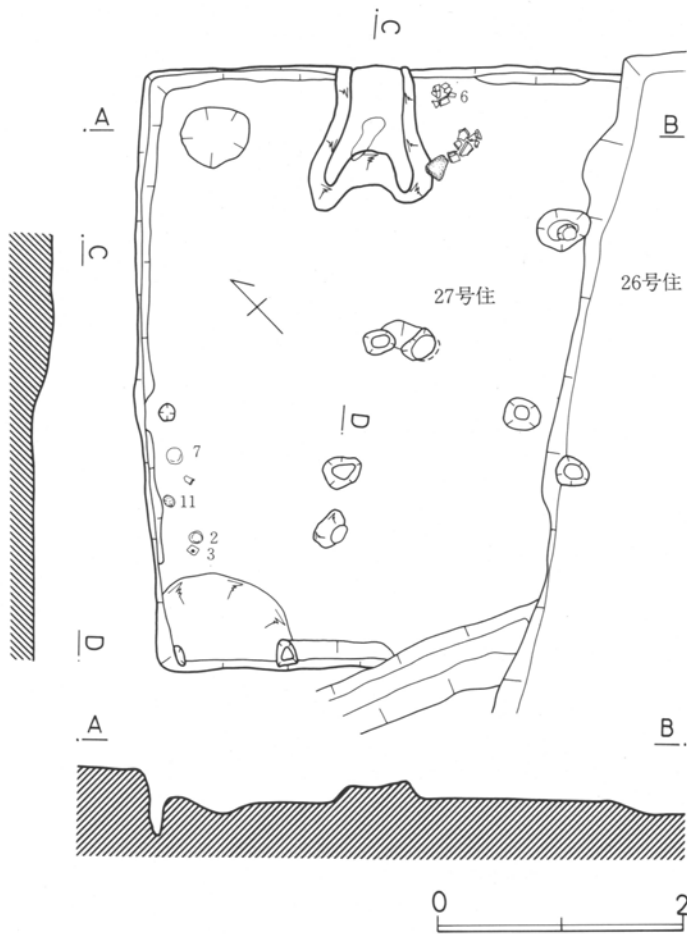
高坏は浅いパレススタイル状のものと坏に脚を付したものの二種がある。前者(6)は坏部が浅く、脚との接合部が細いのに対し後者(7)は坏部は単独の坏そのもので、それに脚を付した型である。

坏は体部と口縁の立ち上がりを見ると口縁がやや高い形であるが肩の段、口唇部の抑えなどでいねいな整形である。他に、手捏ねの粗製土器が出土している。

B-27号住居

K-22区で発見された方形住居で主軸の方位が対角線が磁北にくるところから呼称がむずかしいが、一応カマドの付設されている壁を東壁とする。

規模は一辺4.68mほどの方形である。カマドは外にのびない粘土カマドで巾40、奥行1.1mの規模をもつ。



第271図 B27号住居図

底は奥へゆるい上り勾配をとる。カマド右袖部に焼け石が出土したが、大きさ、形からみてカマド内の支石である可能性が高い。特にカマド上面に骨粉が出土していることなどからすると廃棄時点では破壊されていたものとみられる。

柱穴は壁からするとかなり内側に入って確認された。即ち各壁から1.6mの位置にあり、しかもそれが対角線上にくるように設計されている。

貯蔵穴は、カマドが東壁北寄りにあるところから、北東隅部にあけたとみられる。径50cm、深さ15cmほどの規模である。

またあまり顕著ではないが壁下周溝がカマド部分を除いてめぐっている。

遺物 (図272-1~11)

小型カメ、コシキ、高坏、坏、砥石状石が出土した。その位置はカマド右脇、北壁下西寄りの地点に集中していた。カメは半球状の体部で丸底、頸部

はややくびれて、そこから短かく立つ口縁が外に開く。

コシキは底部のみであるが、底径の周辺を少しのこして穿孔する方法をとる。小型である。高坏はいわゆる鬼高型の坏に脚を付したものである。割合深い体部をもち肩には強い段をもち、そこから外彎気味に立つ口縁部は共伴するものの中に同様なものがみられる。脚は接合部が大きく、開きも裾部で急激にひらく形である。器面の整形はよく整っている。

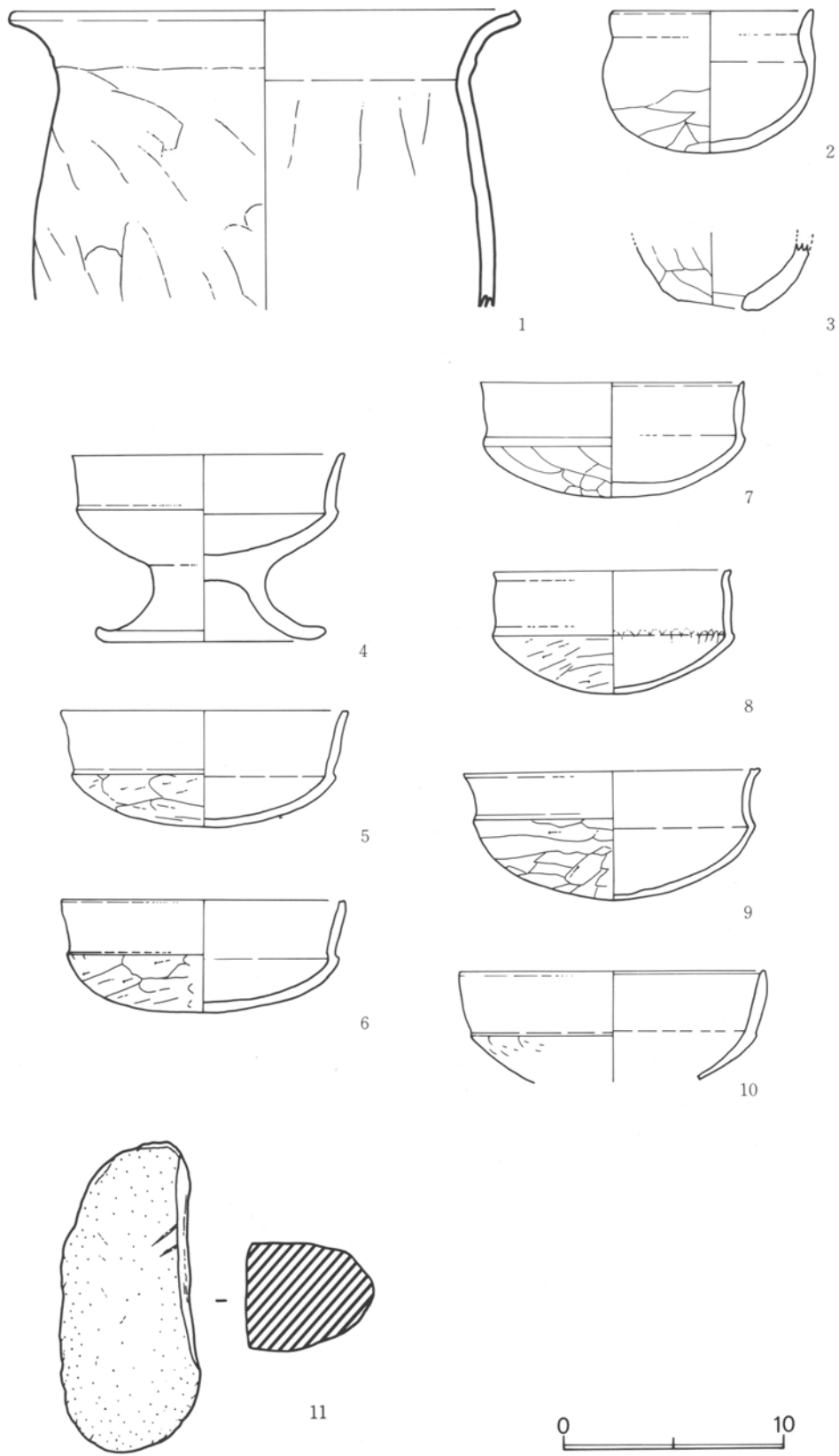
坏は共通して、体部が深いこと、肩部の段がしっかりしていること、胎土、焼成とも良好なことがあげられる。ただ、口縁の立ち上がり方に直立(6)外彎して立つ(8)ものの二種がある。全体的には肩部の張りがまだ残っているものが主流を占めるが、7、9のように張りの少ない形のものも含まれている点が注目される。

石は安山岩の平の面をケズリ、刃物痕をのこしている。同種のものがいくつか出土しているが、その機能については不明である。

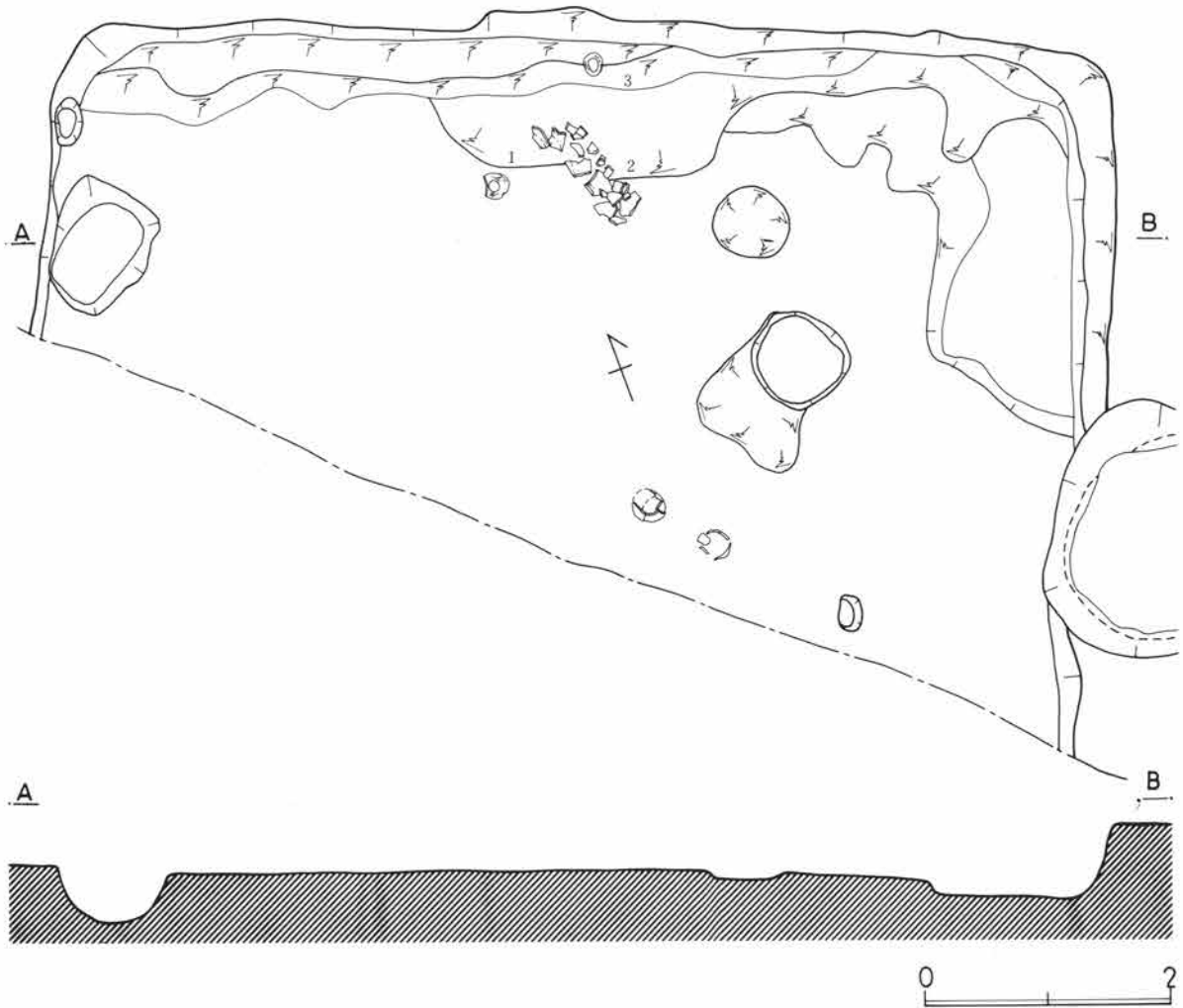
一般的に整形がよく、つくりがよい。器形にまだ鬼高古式の様相をとどめている一群の土器である。

B-28号住居

L-25区を中心に検出された住居で、路線外にかかるため未完掘である。ローム面からの掘りこみは50cmほどで、他から比べると極端に深くなっている。8.7mを算する北壁長からすると東壁もほぼ同様な長さをもったものと推定される。



第272図 B 27号住居遺物実測図



第273図 B28号住居図

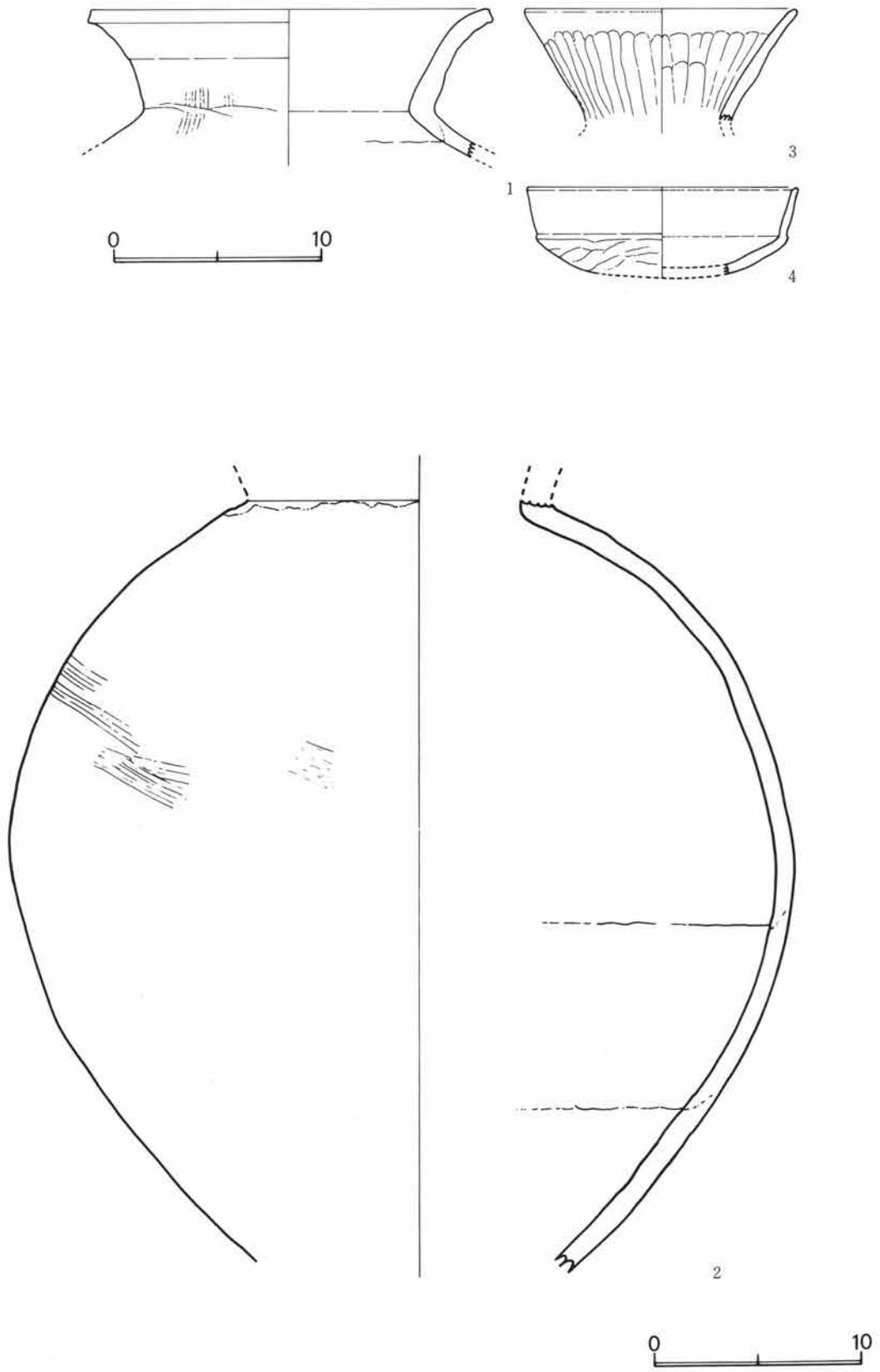
カマドは発見されていない上に焼土の出土もみられず、現状で調査した部分にはなかったものと想定される。住居の周囲を一旦掘りくぼめた除湿工作はここでもみられる。柱穴は東北部の大きいピットとも考えられるが、径が70cm に対し、深さが30cmと浅い点が問題である。遺物は北壁下中央に集中して発見された。

遺物 (図274-1~4)

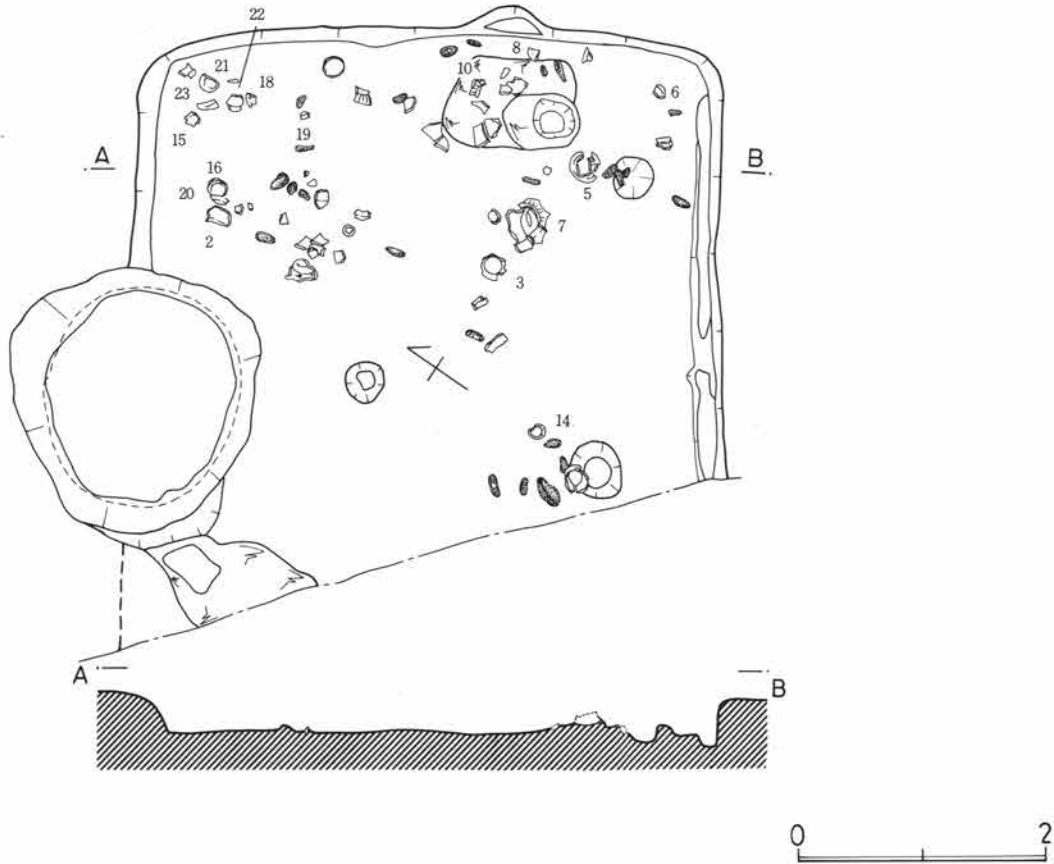
壺、埴、カメ、坏が出土したが、遺物の共伴関係に不明な点をのこしている。3、4は出土地点も26号住居と重複する点にあり、まぎれこんだ可能性がある。これは両方の住居が床面レベルをほぼ同一にしていることから来る。

壺、埴は器面をよくヘラ研磨して滑沢である。共に球形胴をもつ形で研磨痕が内外面ともよく見られる。全体的には和泉期の土器の様相が主流を占めることからすると、カメ、坏を除外して考えることも必要であろう。

壺は、2個体にあるが、2のような球形胴でやや下半がのびる形である。器面はヘラ研磨されて滑沢であるが部分的には櫛状工具の整形痕をのこしている。1は口縁部であるが強い「く」の字状の屈曲で外開きする口縁部をもつ。口縁端部はやや外に折れる。端部はヘラで抑えている。また外面中央に沈線がうすく入り段状を意識させる。器面は滑沢で、黄褐色で焼成火度は高い。埴は口縁部でヘラ研磨をたて方向に施している。端部は横ナデで、素縁口辺である。



第274図 B 28号住居遺物実測図



第275図 B29号住居図

B-29号住居

K-26区で発見された方形住居である。主軸方位は対角線が磁北を指す形であるため壁の呼称を一応円形ピットのある側を北壁とする。ローム面からの掘りこみは30cmと深く、壁も直に切りこまれて整う。

柱穴は南壁側の2個と中央の1個で径は46cm、深さ40cmほどで、中央のは小ぶりである。しかしそれに対する他の柱穴は未確認である。

カマドはおそらく、後穿の円形(L-26)ピットによって切られた部分にあった可能性が高い。全般的に床面が踏み固められていたが、円形ピット前面が特に固いことから推察できる。また、住居東南部の浅い方形おちこみは15cmほどで、中に遺物が入り貯蔵穴状を呈していた。その中に柱穴状に一段下がる円形ピットがあり、柱穴であろう。南壁下には巾、深さとも15cmほどの壁下周溝がめぐっている。

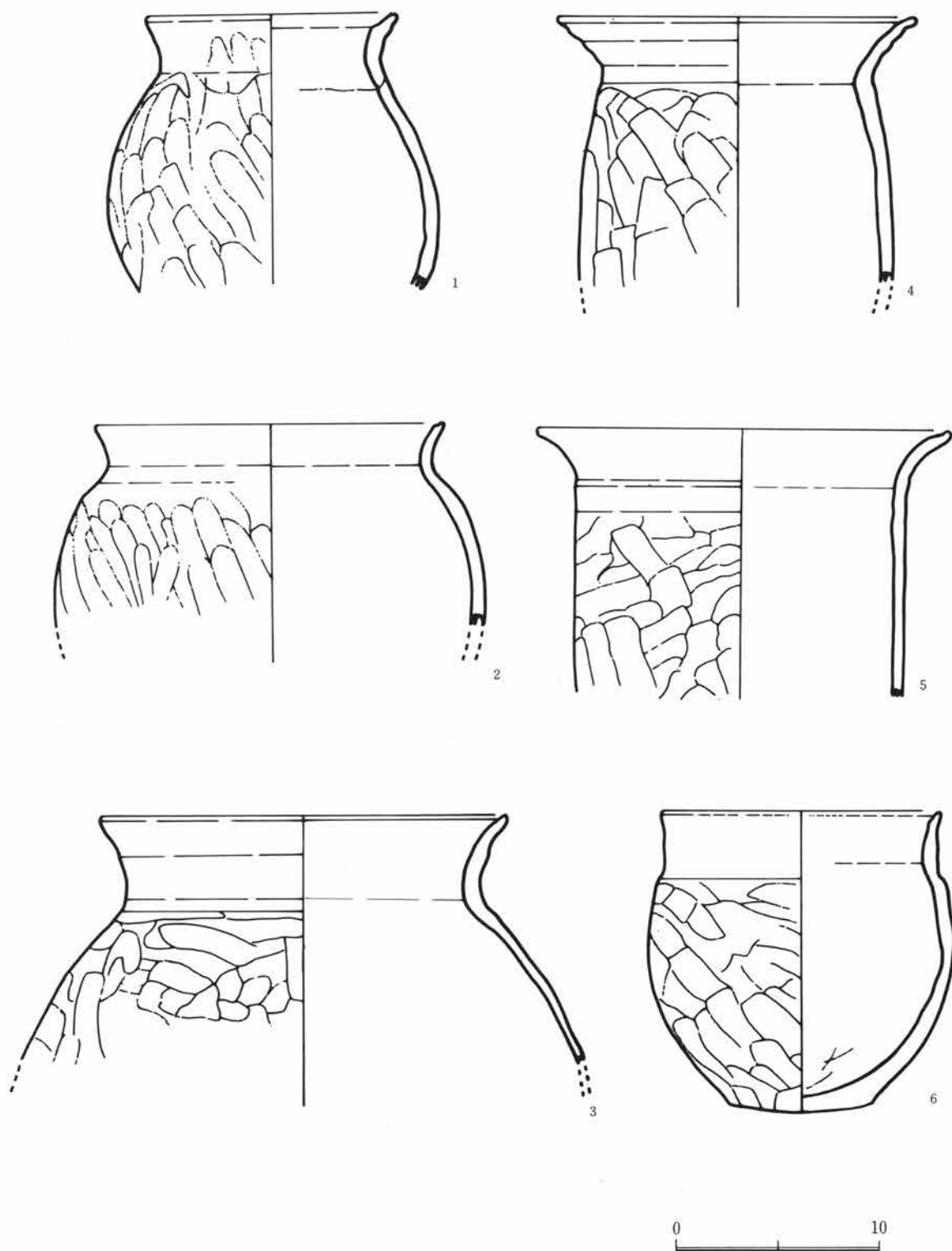
L-26ピットの左側も床面が荒れているが、これが、住居と併行するか、ピットと併行するものかは明らかでない。

遺物は東壁側から南壁側にかけて巾2mほどの範囲に集中して出土しているが、量的にかなり多い。

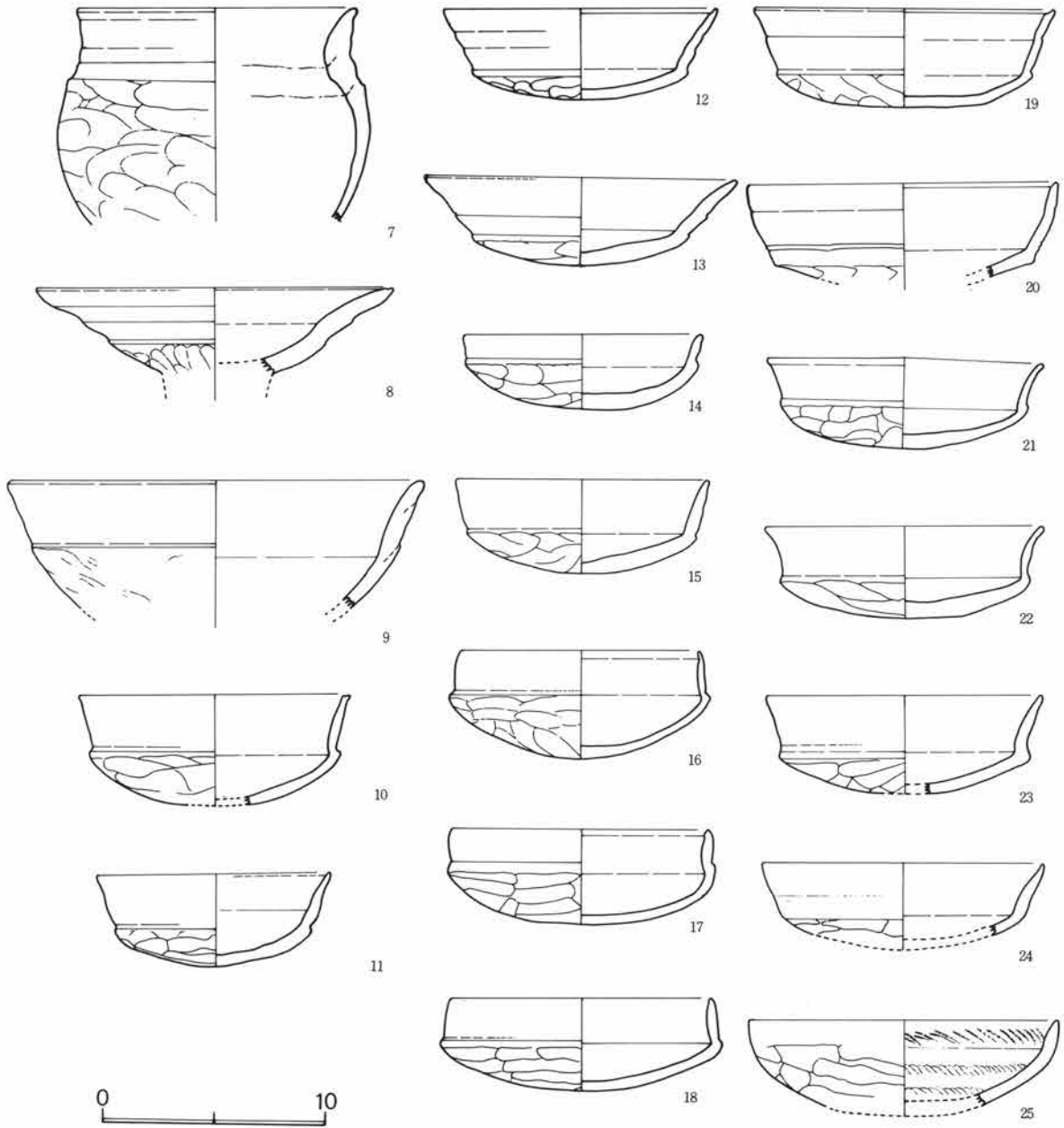
遺物 (図276、277-1~25)

器種はカメ、コシキ、小型カメ、高坏、鉢、坏とほぼ網羅されている。

カメは長胴化した長円形の胴部をもち、くびれた頸部から立ち上がり直に近い口縁が短かく立つ。コシキ(5)は頸部のくびれがなく、口縁の開きは水平に近い。内面はナデが行き届き、ていねいなつくりであ



第276図 B29号住居遺物実測図



第277図 B29号住居遺物実測図

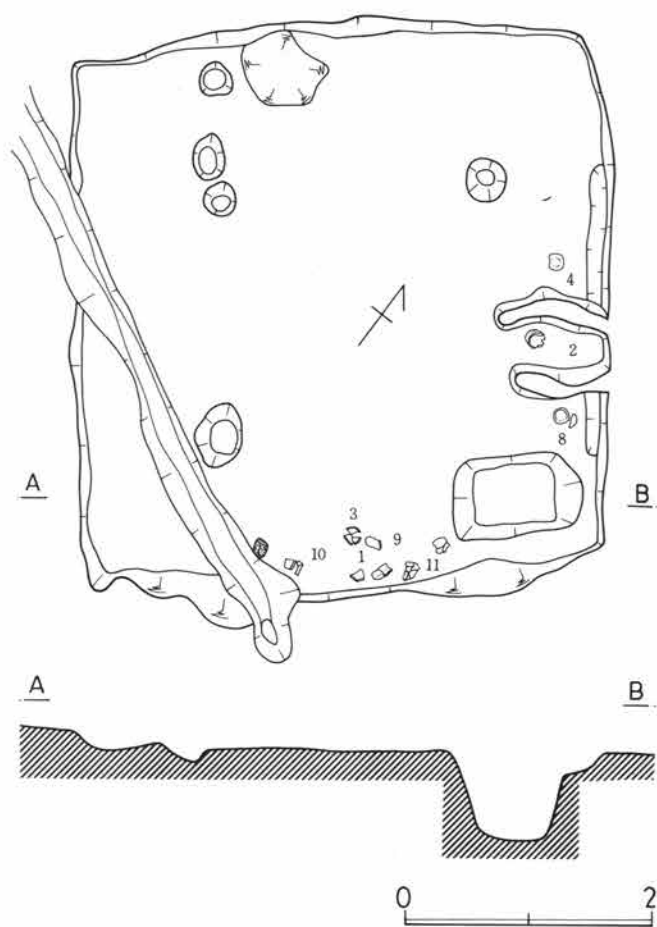
るが下半を欠く。

小型カメは長円形の体部に不安定な平底と直立する口縁をもつ。カメ、小型カメとも体部外面はたて、斜方向のヘラ削りが顕著で、紐作り痕がほとんど消えている。

高坏は、坏部は小さく浅い底部から不明確な段をもって水平に近く大きく開く。脚は接合部が大きく底部はヘラ削りをたて方向に入念に行なっている。

鉢(9)は大型の半球状で下半を欠く。口縁部は弱い段から開き気味に立つが端部は素縁である。底部は丸底とみられる。

坏はバラエティにとんでいる。全体的には肩部の段はあまり強くなく、体部は浅い。口縁の立ち上がりで



第278図 B 30号住居図

三種に分けられる。即ち、直立、内斜、外斜の形で、16個体のうち、直立が3、内斜が3、外斜が9個である。

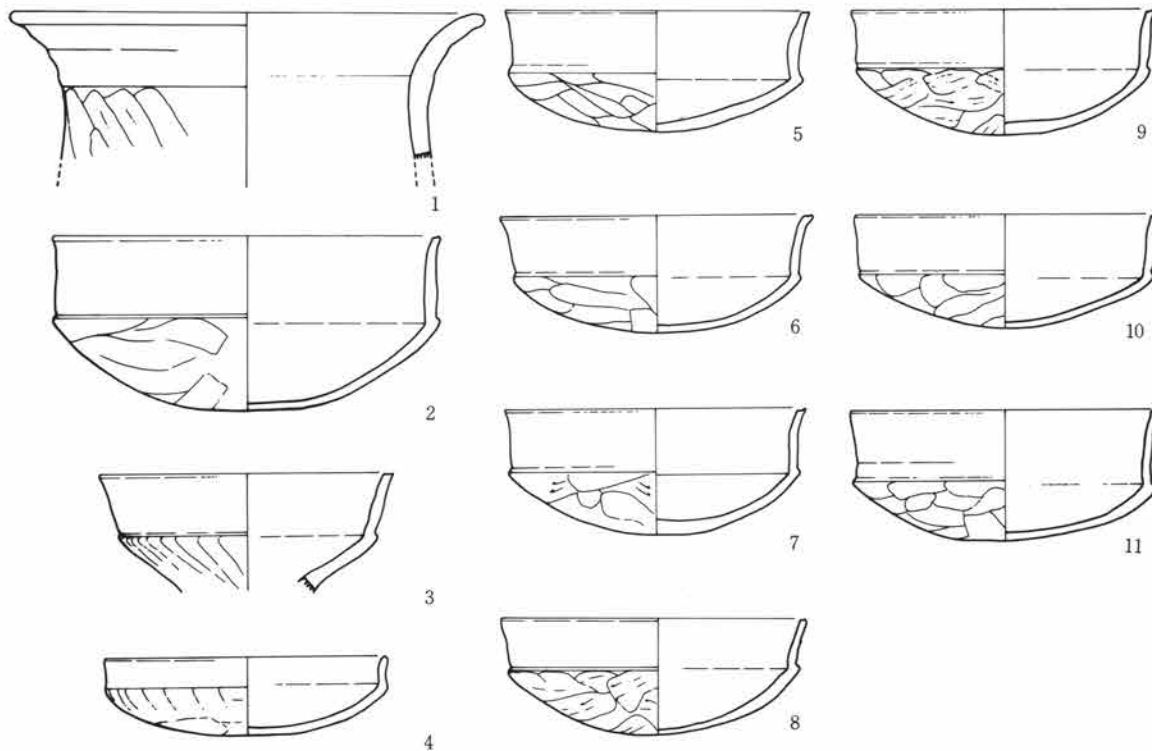
また、25は素縁口辺の坏で、稜は明瞭でない。

数も器種も多く、良好なセットで、本遺跡における一標式となりうる遺物である。

B-30号住居

I-27区で発見された方形住居で西壁部分で31号住居の上にいる。主軸方位が対角線上にのることから壁の呼称を一応カマドのある壁を東壁と呼ぶ。ローム面からの掘り方は20cmほどで、よく整った住居だが西壁北 $\frac{1}{2}$ から南壁西 $\frac{1}{2}$ にかけて近世溝が切っている。

規模は4.6×4.3mで東壁中央やや南寄りにカマドが設けられている。焚口巾30cm、奥行80cmで煙道は壁外に確認されない。カマド中には高坏を支柱として燃焼部手前北寄り部分に据えている。粘土カマドで、カ



第279図 B 30号住居遺物実測図

マドの壁は内面を弯曲させている。

カマド右脇には90×65cmの貯蔵穴が深さ70cmで掘られている。壁はほぼ直に近い状態である。

柱穴は南東隅部のを除いて3個が検出されているが柱間は東西2.10、南北1.8mである。径は30cm深さ40cmほどで一定している。

その他に北壁中央部分に壁寄りに2個の柱穴状ピットがあるが、このピットが住居と関連する機能をもつか否か即断できない。

更に東壁カマド両脇の壁下に周溝がめぐっているが、他までは及ばない。

遺物はカマド周辺及び南壁下に集中して発見された。

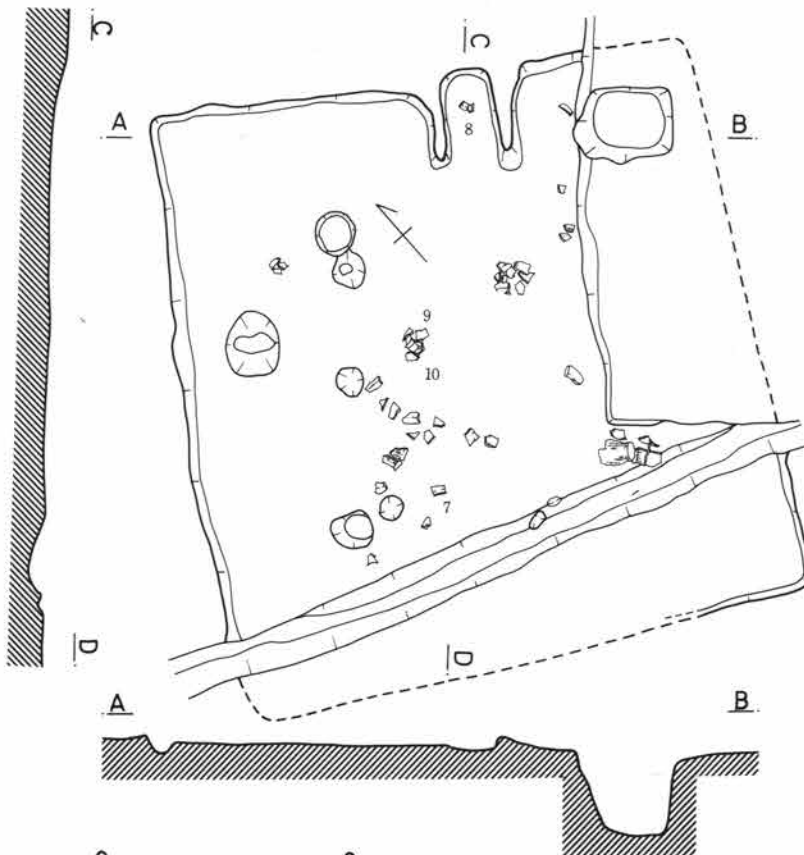
遺物(図279-1~11)

カメ、高坏、坏の組み合わせで、カメは最大径が口縁部に来る長胴形で下半を欠く。高坏は小型の有段の坏をのせた形で脚を欠く。坏は全体で9個発見されているが、肩部の段にやや退化傾向がみられる他は全体に体部の深さ、直に立つ口縁で統一されている。

2の大型や4の稜線で口縁を画するものなど、特殊なものも含まれるが、概して整形、焼成ともすぐれ、つくりがよい。

B-31号住居

J-26区を中心に発見された方形住居で東北部で30号と、南壁中央部で32号住居と重複する。30と32号の間にはさまれる住居である。

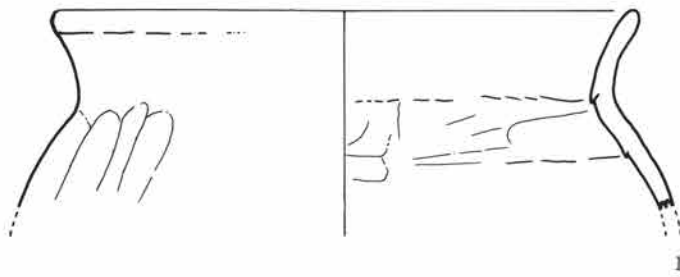


第280図 B31号住居図

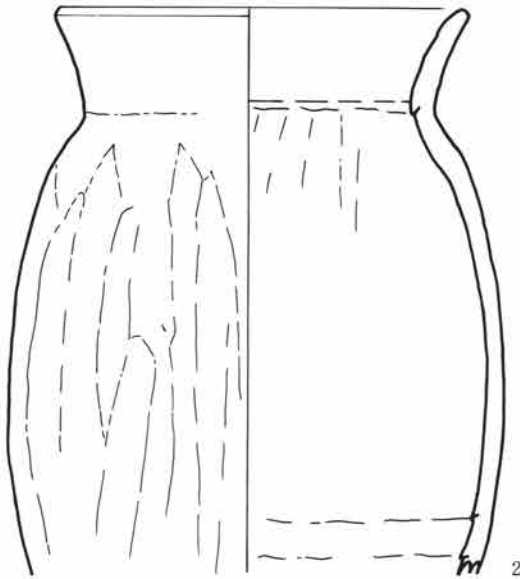
4.6×4.7mの方形で北壁中央からやや東に寄って40×80cmの粘土カマドを設ける。ロームを削りのこした袖部には黒色粘土をまいている。

カマド右脇には80×60cmの長方形掘り方で、深さ60cmの貯蔵穴を設けている。底を広くとった形で、整っている。

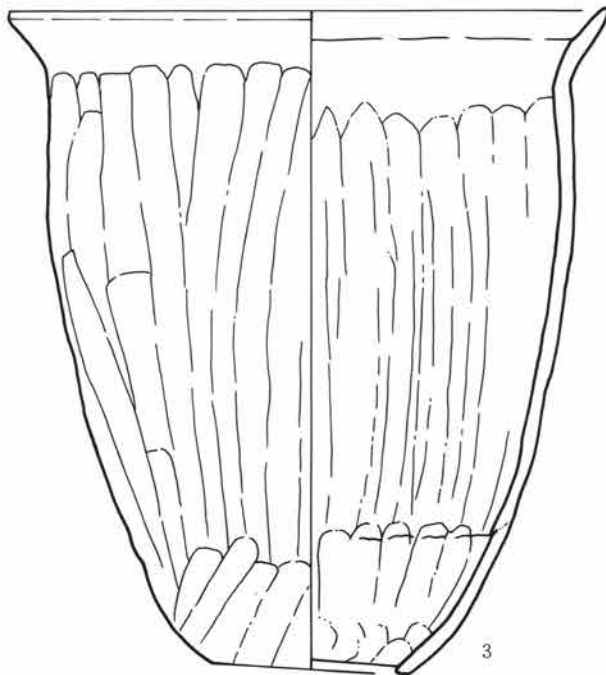
柱穴は重複のない西側部分では3個が並んで確認されたが、重複部分では未確認である。西側の様相で見ると当初4本の支柱穴であったものを後に中間に補助柱を入れて6柱式に建て替えた様相が推察される。これで見ると、棟走向はカマドを中心にして、南北方向をとったものと考えられ、切り妻の上屋が想定できよう。



1



2



3

第281図 B31号住居遺物実測図

その他に西壁下中央に浅い円形の大型のピットがあるが、その性格については不明である。

床画は全体的によく整い、特にカマドを含む、住居東北四半分は固く踏み固められている。

遺物は貯蔵穴周辺および、住居中央部に集中して検出されたが全体的にはかなり状態がよい。

遺物 (図281、282-1~10)

カメ、コシキ、高坏、小型カメ、坏の組合せで10個体ほどの形が復原できた。

カメは、口径の大きい球形胴が長胴化傾向をみせるものと、かなり長胴化したものの二種がある。1は前者の例で、最大径は胴部中央にくる形であるが全体に丸味がある。

2は後者の例で、頸部のくびれはまだかなり強く口縁の立ち上がりは直に近い形である。体部は両方ともヘラ削りによる整形痕をもち、輪積み痕をわずかにのこしている。

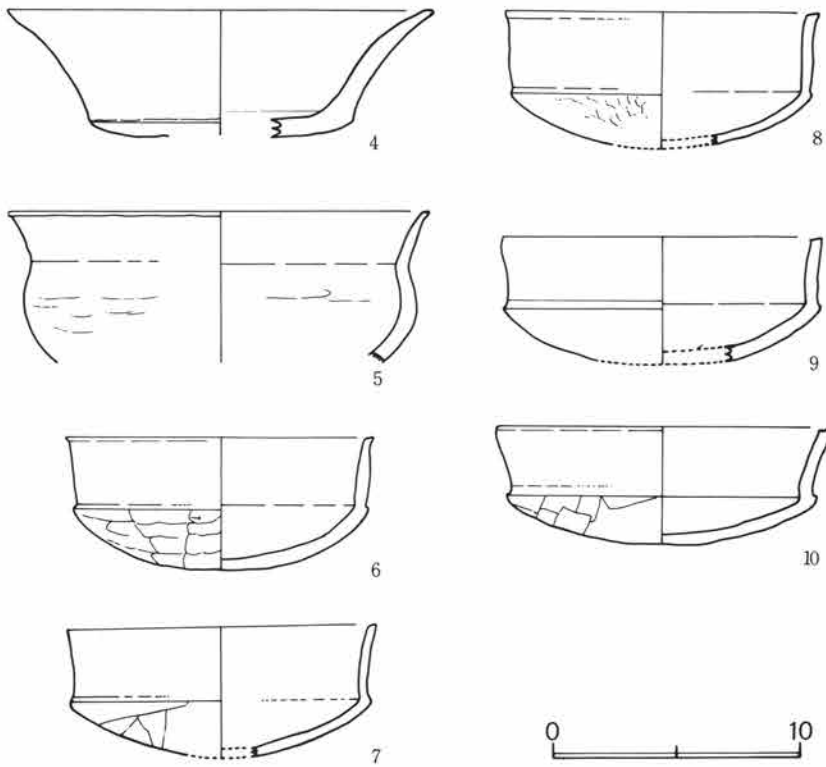
コシキは、口縁端部に最大径をもつ長胴型で、底部全面をぬく孔を有している。内外面ともヘラ削りでていねいに整形されている。

1、2とも煤が付着しており、コシキも上半分に煤の付着がみられることから煮沸具としてセットになっていたものもみられるが、カメのいずれと組むかは不明である。出土状態からすれば2と3が接近して出土した。

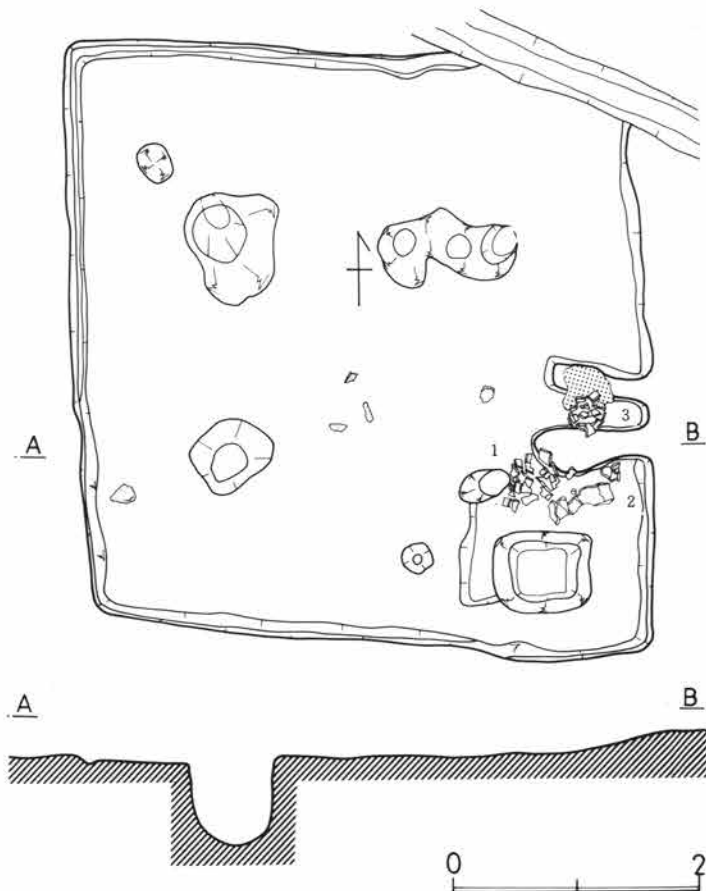
高坏は脚部を欠いている。坏部の底部は浅く稜を境に大きく口縁部が反り気味に外開きする。坏と脚の接合部はあまり大きくないことが現状から推察される。

小型カメは扁円の球形胴から、比較的長い口縁部をやや外開き気味に立てている。頸部のくびれは弱い、肩部はまだかなり張っている。

坏はいわゆる有段のもののみで、体部と口縁の高さでみると口縁がやや浅くなる傾向



第282図 B31号住居遺物実測図



第283図 B32号住居図

で、肩の丸味も少なくなっている。口縁はすべて端部をへらでおさえている。全体的に胎土が緻密で、焼成火度が高く、整形がていねいなため整った感じがする。

セットの傾向からすれば鬼高式I期後半における様相として把握しておきたい。

B-32号住居

J-27区で検出した方形住居である。住居東北隅で近世溝に切られている。

周辺はロームの削りがはげしく、住居床面の掘りこみは10cmにも及ばない。

カマドは東壁中央からやや東に寄った位置にあり、

焚口巾40、奥行100cmで、床は上り勾配をみせている。袖は当初から意識的にロームを掘りのこし、それに粘土をまいている。カマドは燃焼部にカメの破片が入って発見された。

貯蔵穴はカマド右脇に一段下がった部分に方形に掘りこまれている。径55×80cmで深さは50cmほどである。直に掘りこまれて底面も広い。

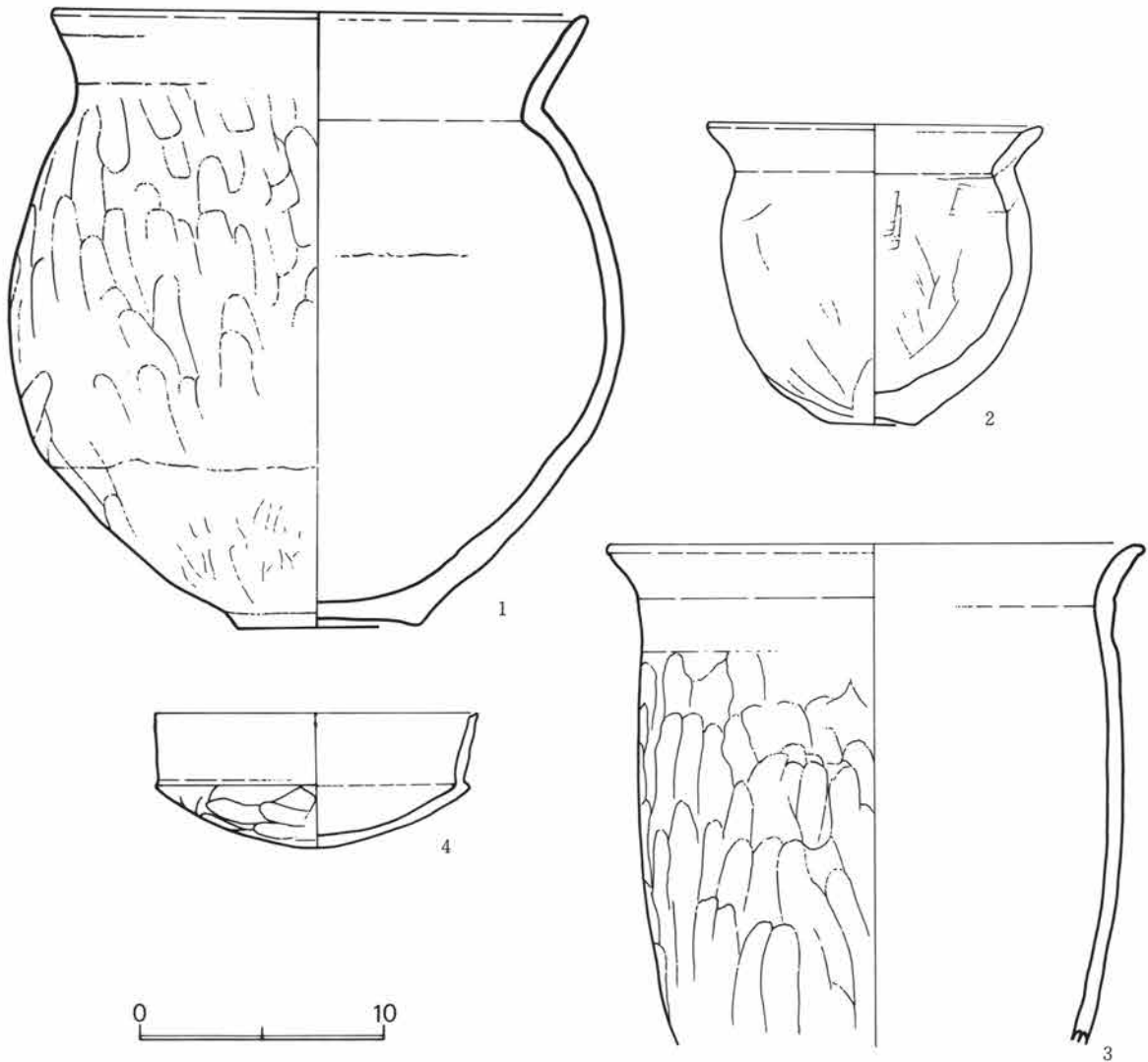
柱穴は四隅の主柱穴の他、貯蔵穴の西にも1個検出されている。

主柱穴は東西2.1m南北に1.8mの柱間でやや内傾気味の掘り方をみせている。貯蔵穴脇の柱穴は入口と関連するものであろうか。

カマド北壁を除き、壁下周溝がめぐる。

B-32号遺物 (図284-1~4)

カメ、コシキ、小型カメ、坏が出土した。カメは球形胴から、頸部が



第284図 B32号住居遺物実測図

強くくびれ、そこから短かく外反して立つ口縁をもつ。底部は中央がやや上がる大きい安定平底で突出した造り出しの底である。体部はヘラ削りだがこまかく、その後ヘラでおさえている。コシキは最大径を口縁部にもつ長胴カメ形で下半を欠く。口縁は小さく外開きして立つ。特に内面のナデ整形は入念である。

小型のカメはカメと同様の球形胴で口縁との境は強い「く」の字状を呈する。底部も同様だが、全体に器肉が厚い。整形はヘラでおさえて入念である。

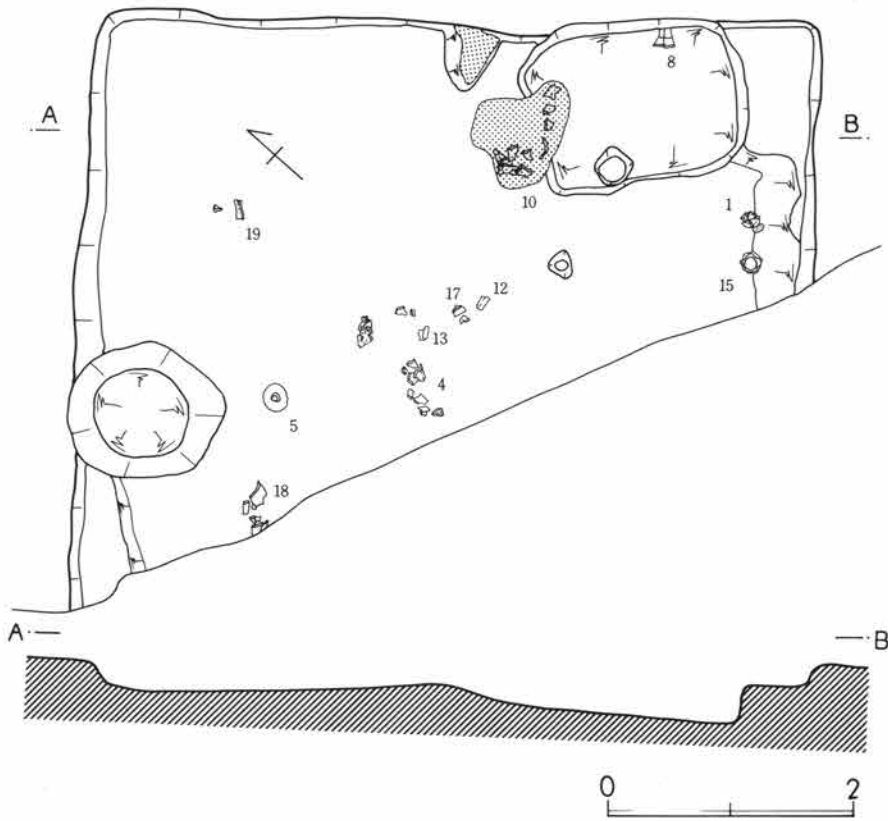
坏は肩に段を有する形で体部は深く、口縁は直立して立つ。段、口縁端部などはヘラで入念に仕上げられてつくりは良好である。

B-33号住居

K-2区に検出された大型の方形住居である。ロームの掘りこみは20cmほどである。路線外にかかるため完掘していないが、住居の $\frac{3}{4}$ ほどを調査した。

住居の一辺は5.9mを東壁で計る。

床面には東壁下に1.7×1.3mの方形掘り方があり、その脇のカマドを破壊している。従って、カマドの全ぼうはつかめないが、粘土カマドで、壁外にのびない形のものでと推定される。更に北壁に径1.1m、深さ25



第285図 B33号住居図

cm ほどの円形ピットがあるが、それも後から掘られたものである。

遺物はカマド及び住居中央に散乱して発見されたが、量的にはかなり多い。

B-33号住居遺物
(図286、287-1~19)

この住居の出土遺物は、大きく二種に別けられる。遺物の出土層位、遺構の重複関係では確認できなかったが、ここでは一応、下層住居を想定して分離して述べることにする。

下層遺物、カメ、小型カメ、高坏、坏の組

み合わせである。カメは球形胴の長胴化傾向のもの(1)と胴部が下ぶくれするもの(4)とがある。共に厚手の器肉で、特に後者はヘラ削りが入念で整っている。小型カメも同様に、焼成火度は高い。底はすべて(3)にみるような突出平底であろう。

高坏は、坏部が曲線的に深い底部から大きく開く形で口縁端部は外そぎの手法をみせている。坏と脚の接合は比較的小さく、脚は細く長く直に近く立つ形で、裾部を欠く。坏部内面には放射状暗文をのこしている。

坏は全体的に共通点がある。即ち、体部は肩が張って深いこと、段が明瞭であること、口縁の立ち上がりがやや外開きぎみに直立すること、口縁部がヘラでおさえて作りがていねいであることを指摘できる。この一群の土器は鬼高I式における古い様相をみせているものとしてとらえている。

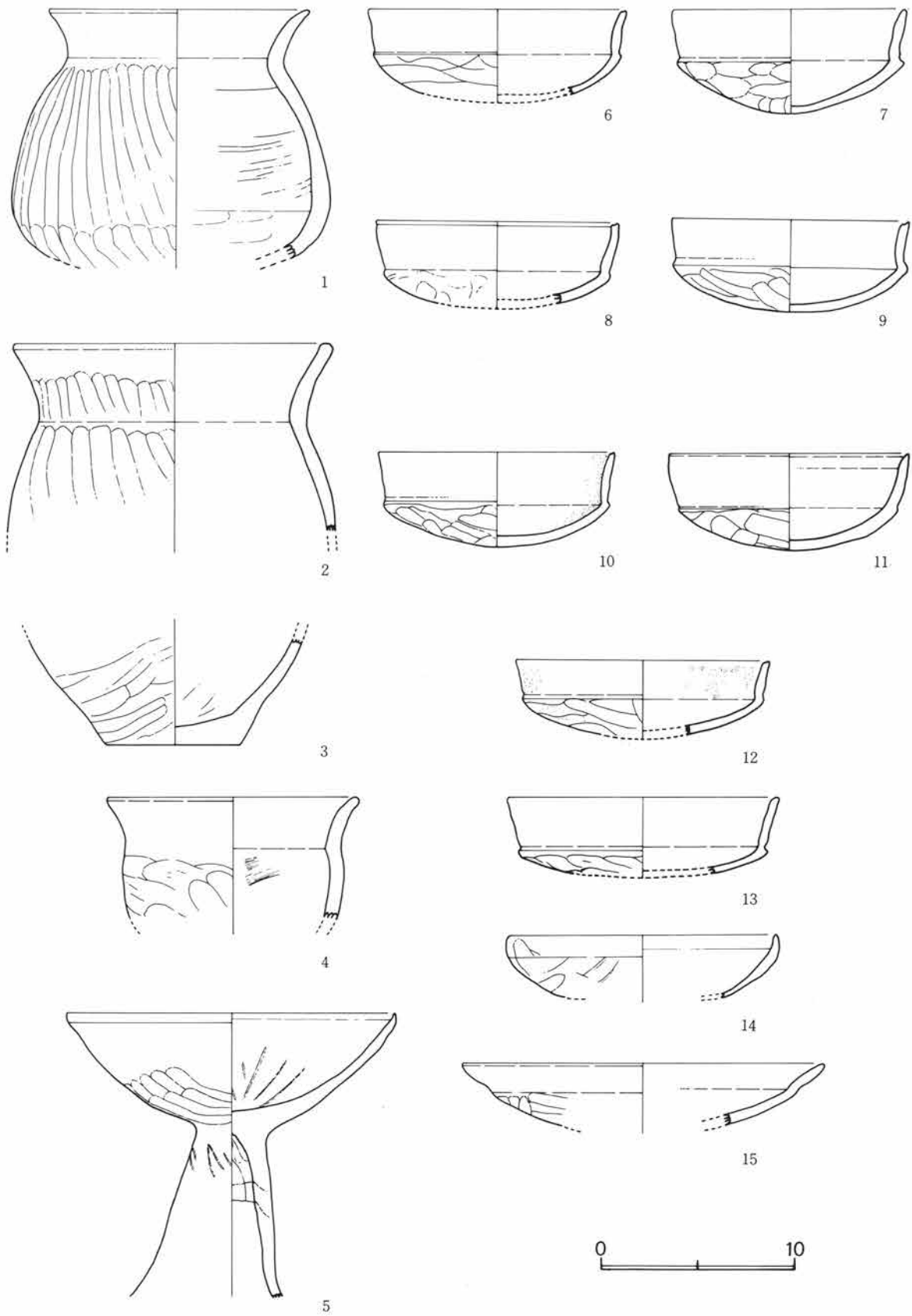
上層遺物、長胴カメ、コシキ、坏を確認した。カメは頸部のくびれが残る長胴カメで、最大径は胴部最大巾にある。特に口縁の開きは大きく、端部はややすくとめている。体部外面はヘラ削り痕が顕著で、輪積みの痕跡も残している。

コシキは、体部にやや丸味をのこし、頸部がくびれ気味に外斜する口縁に続いている。ケズリは内外面と入念な仕上げである。

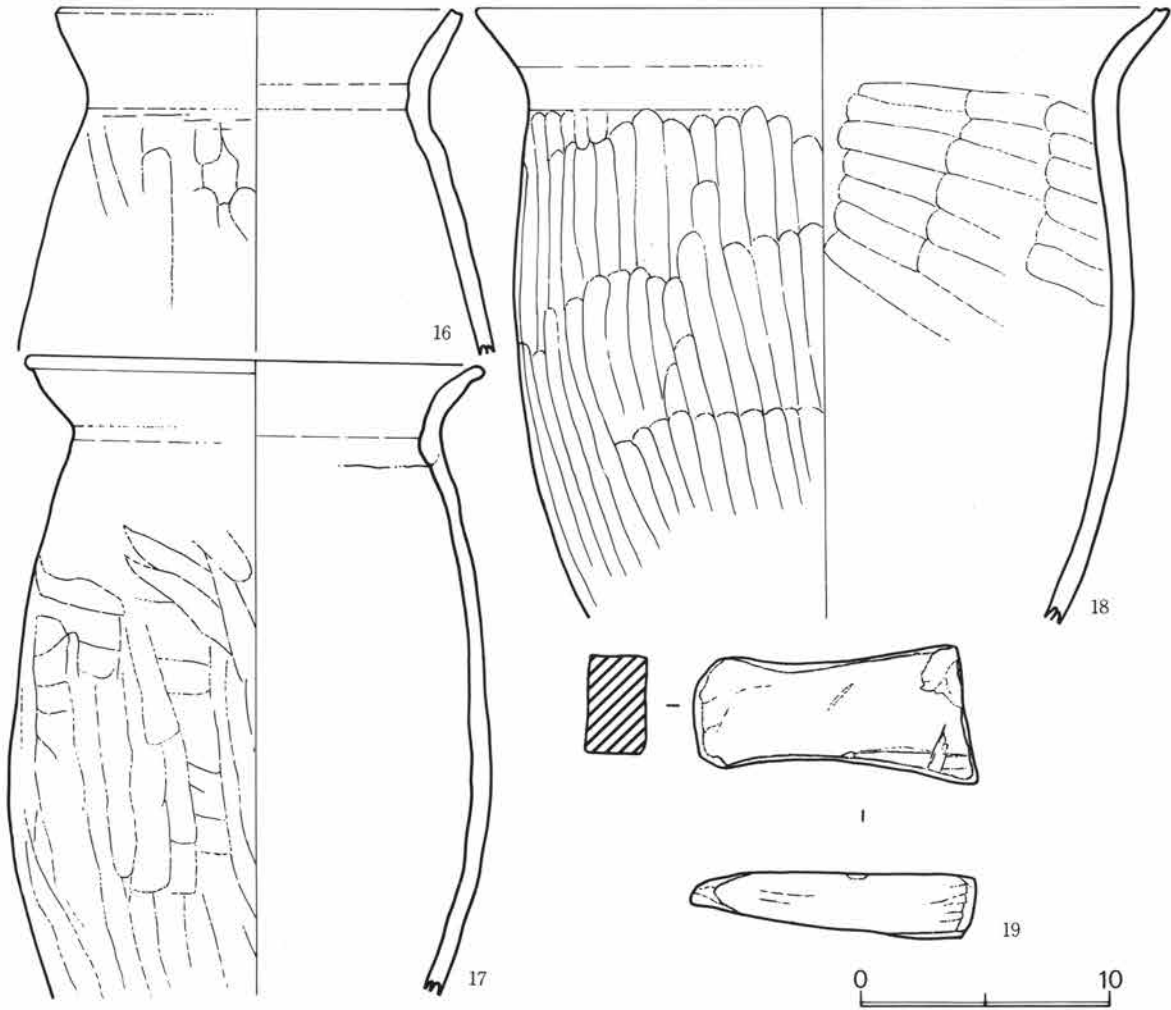
坏は下層のものに比べて、体部は肩の張りが少なく体部が浅いこと、段をヘラで沈線を入れて強調する手法をみせること、段をもたないものもあり、稜で口縁と体部を画するものがあること、口縁の立ち上がり、直立するもの他、稜から短かく立つもの(14)、稜線から水平に近い開きの口縁をもつもの(15)があることなどを指摘できる。

砥石もこの上層のものとの共伴である。

この一群の土器は全体的にヘラ削り技法が顕著なこと、焼成火度が下層のものに比べて劣ること、坏に



第286図 B33号住居遺物実測図



第287図 B 33号住居遺物実測図



第288図 B 34号住居図

バラエティーがみられないことなどの要素から、鬼高Ⅱ式末の傾向としてとらえることが妥当と考える。

B-34号住居

E-23区で検出された住居で、北半が路線外にとびだすこと、南壁東半部で35号住居と重複するなどしてほとんどその特質をつかめないのが実情である。

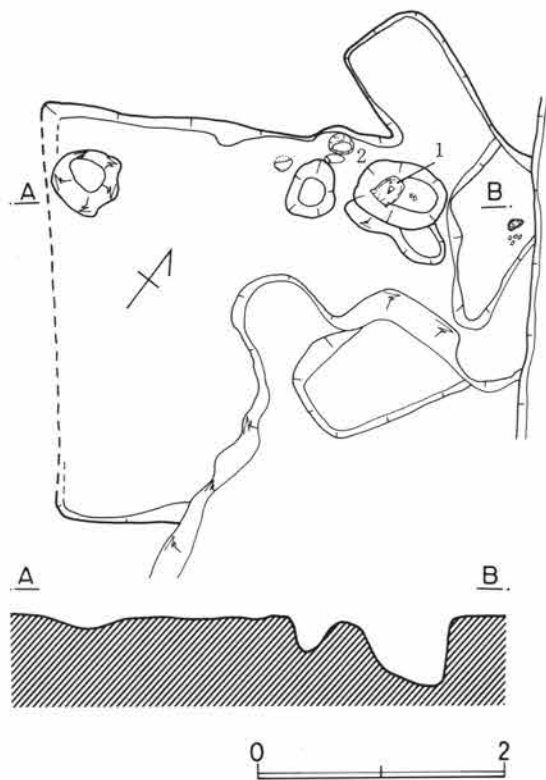
南壁長は4.7mを算するが他壁は不明である。特に北側はすぐにロームが落ちこんで微高地が切れる境目に近づくため、ロームの掘りは高低差やピット状遺構が確認されたが、これらはほ

とんど性格や機能については不明の点が多い。

また遺物もなく、時期的なものもつかめない。ただ、35号住居がこの床を切ってつくられていることは明白で、その意味では上限をおさえることは可能である。

B-35号住居

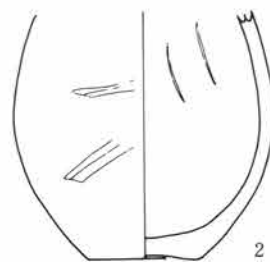
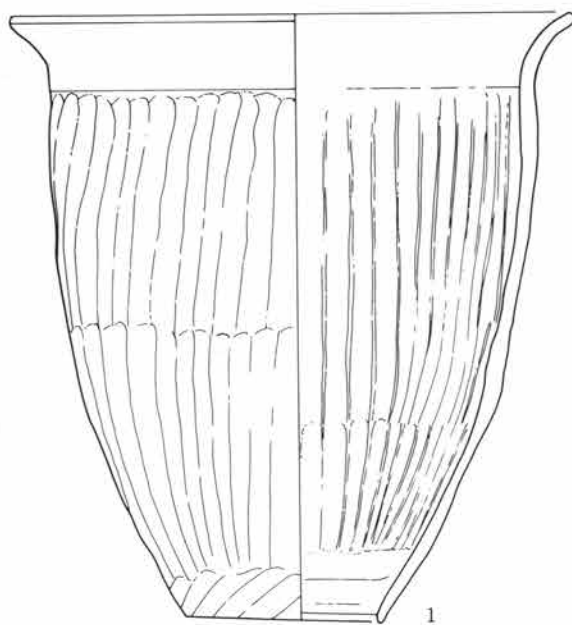
E-23区を中心に検出された小型の住居で西壁長で3.3mある。掘りこみも浅く、貯蔵穴をкаろうじて確認



第289図 B35号住居図

できた程度である。東壁側は複雑に入りこんでいて壁の位置は確認できなかった。貯蔵穴は径70cm 深さ50cmで、中にコシキが入りこんでいた。その西に円形の柱穴状のピット、更には北西壁下にもピットを認めたが住居の全ぼうが不明で性格がわからない。遺物は貯蔵穴周辺に認められた。

遺物 (図290-1~2) 大型コシキと小型カメを検出した。コシキは最大径が口縁部にくる形で体部は内外面ともへら削り、底をぬく。小型カメは口縁を欠くが長胴化した球形胴で中の上がった平底である。



第290図 B35号住居遺物実測図

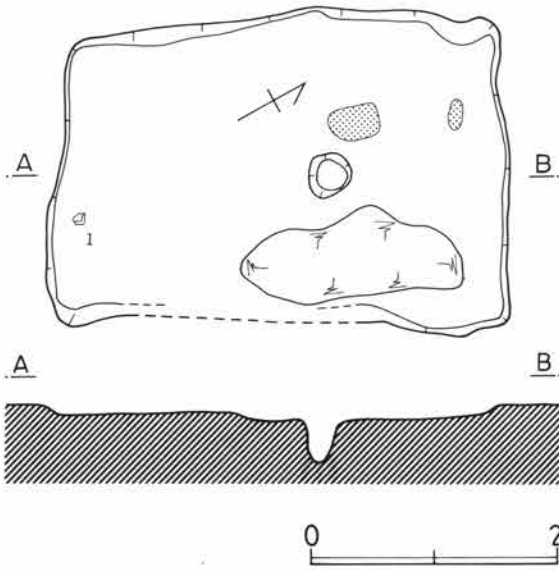
B-36号住居

E-24区に発見された小型の長方形住居である。東壁中央部分で重複している。

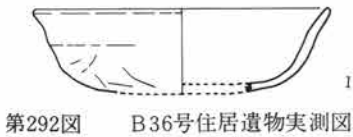
ローム面からの掘りこみは10cmほどで、壁の立ち上りも不明瞭な部分がある。2.5×3.8mの規模で主軸の方向が東に偏している。

カマドなども確認されていないが北壁部分にでもあったのであろうか。焼土は住居西北四半部に二カ所検出されている。

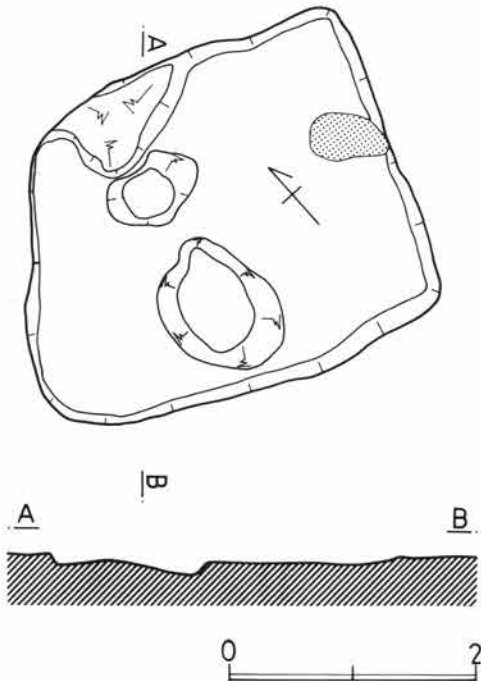
柱穴状のピットは径25cm、深さ30cmのものが住居中央で確認されている。カマドが北壁部分中央にあったとみれば、この柱穴がやや住居中央に寄る可能性もあるが、場合によるとうち南壁部分に柱穴が来て、2柱式の上屋構造をとる可能性もある。他には不正長円形の浅いピットがある。



第291図 B36号住居図



第292図 B36号住居遺物実測図



第293図 B37号住居図

遺物(図292-1) 坏1個が出土したのみである。平底の坏で、底部から口縁への移行部分で指頭痕が多少のこっている。口縁はやや外開き気味で素縁である。

B-37号住居

F-24区で検出された不正方形の住居である。ロームからの掘りこみが浅いため、範囲を必ずしも明瞭にとらえられていない。

現状で規模を推定すると2.8×3.4mで、主軸はやや東にブレている。東壁に平行する形で西壁を限定すれば北西隅部が切断されたことになるが、このあたりはロームの原地形が下がることもあって判然としない部分である。

カマドとみられる部分は、焼土の堆積がみられる東壁中央部分であるが、これとって形状、規模を推定するまでには至らない。

住居床面には3個ならんで不正形の浅いピット状の遺構がみられるが中央のピットの縁に近い部分で焼土の検出をみたが、性格は不明である。

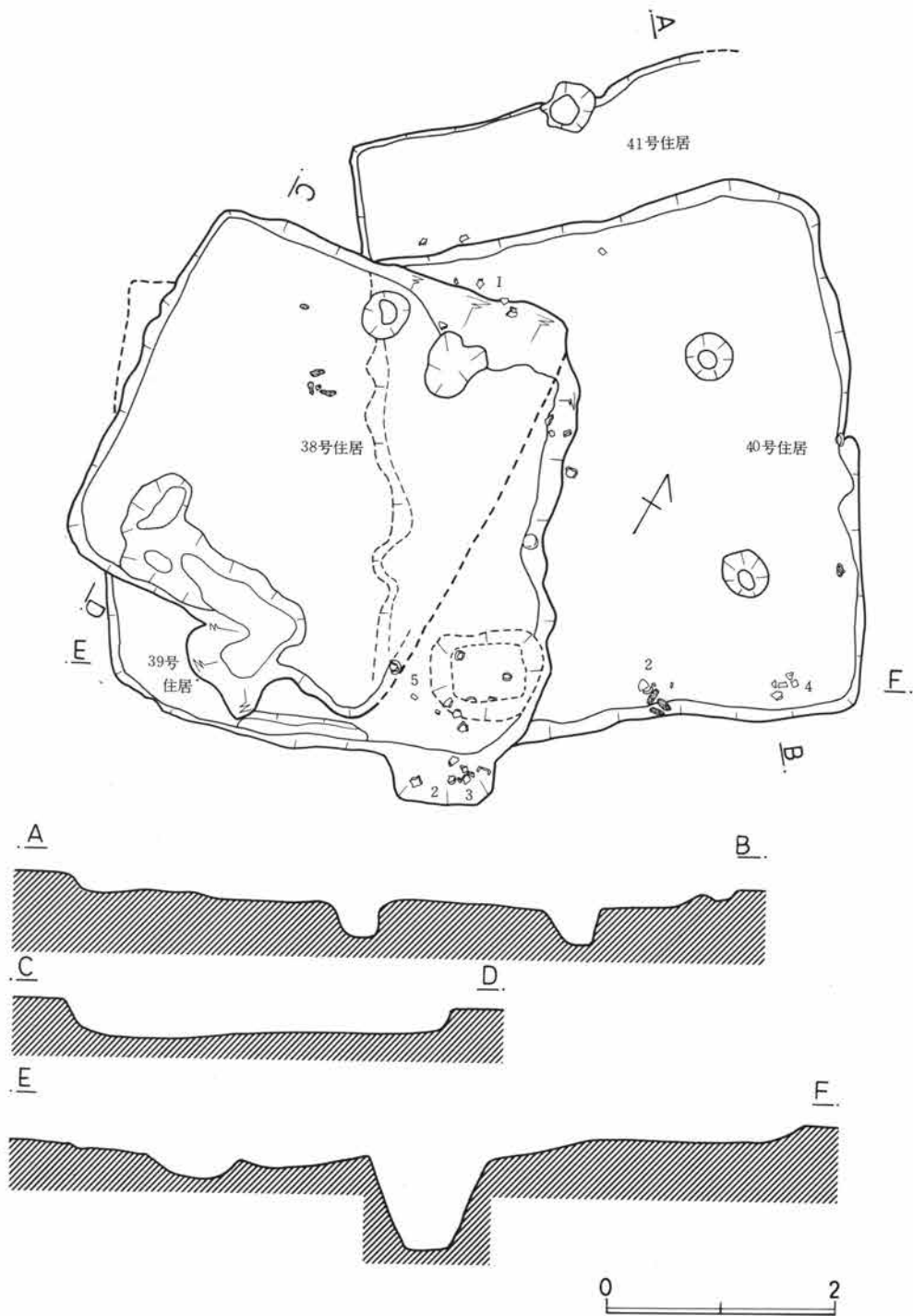
遺物はほとんど、ローリングを受けた小破片のみで、床面に密着して、この住居の時期を決定するような資料は全くない状況であった。

更にいえば、これが住居跡であるとする根拠も明白ではないといった方がいいのかも知れない。

B-38・39・40・41号住居

複雑な重複をみせるこの部分は、G-25区を中心にひろがっている。4軒の住居が切り合っていることは確実で、調査時の所見から38号が最も新しく41号が最も古いとみられた。38号住居は隅丸方形の形状を呈し、ほぼ主軸を磁北線に合わせている。規模は3.4×3.2mで、掘りこみは最も深い。南壁中央に壁を切ってカマドが付設されていた様子を推定させるが、形状は不明である。カマド前面の掘りこみは除湿のための操作であろう。床面は西壁下ではかなり安定している。

39号住居跡はその大部分を38号に削られのこった部分は1/6ほどである。その南東隅を中心に遺物が集中して住居の範囲を限定する根拠を与えている。遺物はこの他、東壁張り出し部分に多く検出された。



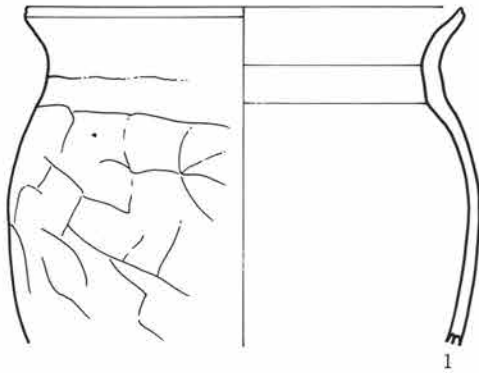
第294図 B 38～41号住居図

40号住居は主軸方位を30°ほど東にとる方形住居である。これも西半を38、39号住居に切断されているため $\frac{2}{3}$ ほどが確認された。東南隅の貯蔵穴は40号に付随するものとみられるが、規模は70×100cm、深さ80cmほどである。

他に柱穴が3個確認されているが柱間は190、220cmほどである。

遺物は壁ぎわに発見されている。

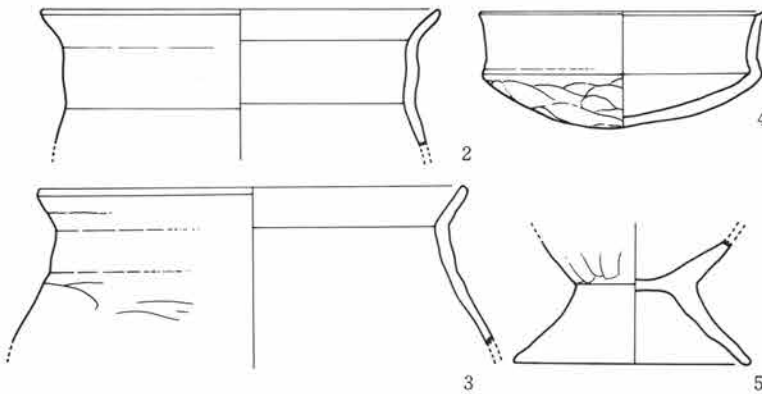
41号住居は40号住居の北にほぼ同主軸方向をもって検出された。床面のほとんどは40、50号住居により切



断されているため、ほとんどその形は不明で、壁上に1個の柱穴を検出したのみである。

B-39号遺物 (図295-1~5)

カメ類と坏の出土である。口縁部と脚付きである点に特徴を有している。口縁部はいわゆる「コ」の字状を呈している。とりわけ、1はその典型で退化していない型態とみることができる。体部は肩がはってそのまま下半がすぼまる形とみられるが、下半を欠いて不明である。2、3はそれの退化型態とみる。



脚は一旦直に立って裾が開くものと、そのままラップ状に開く二種がある。

B-40号住居遺物 (図296-1~4)

壺かカメの底部と坏1個体を出土している。

底部は突出した平底で、器面はヘラ研磨して滑沢である。球形の胴部をもつものとみられる。

坏は有段の坏で、体部と口縁の境の段はやや弱く、4にみる

如く、沈線を入れてそれを強く表現しようとする意図がうかがえる。4の段もやや明確さを欠いている。体部は肩が張らない浅い形で、口縁はやや外彎気味に立つ。

全体につくりは良好である。

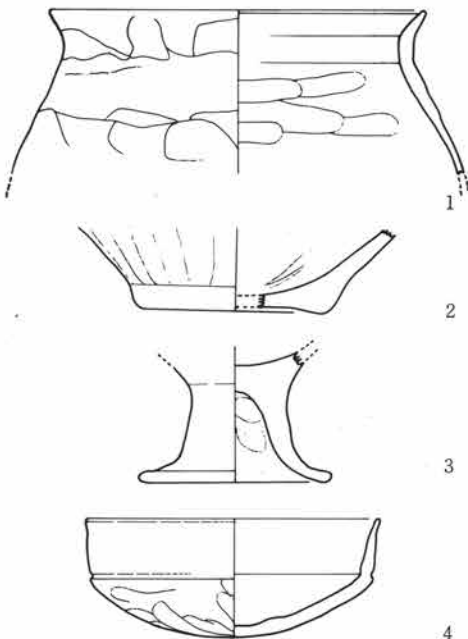
B-42号住居

調査区の縁辺、F-26区で発見された方形住居で4.5×4.3mの規模をもつ。ほぼ軸線を磁北にとる形で、ロームの掘りこみは25cm内外である。

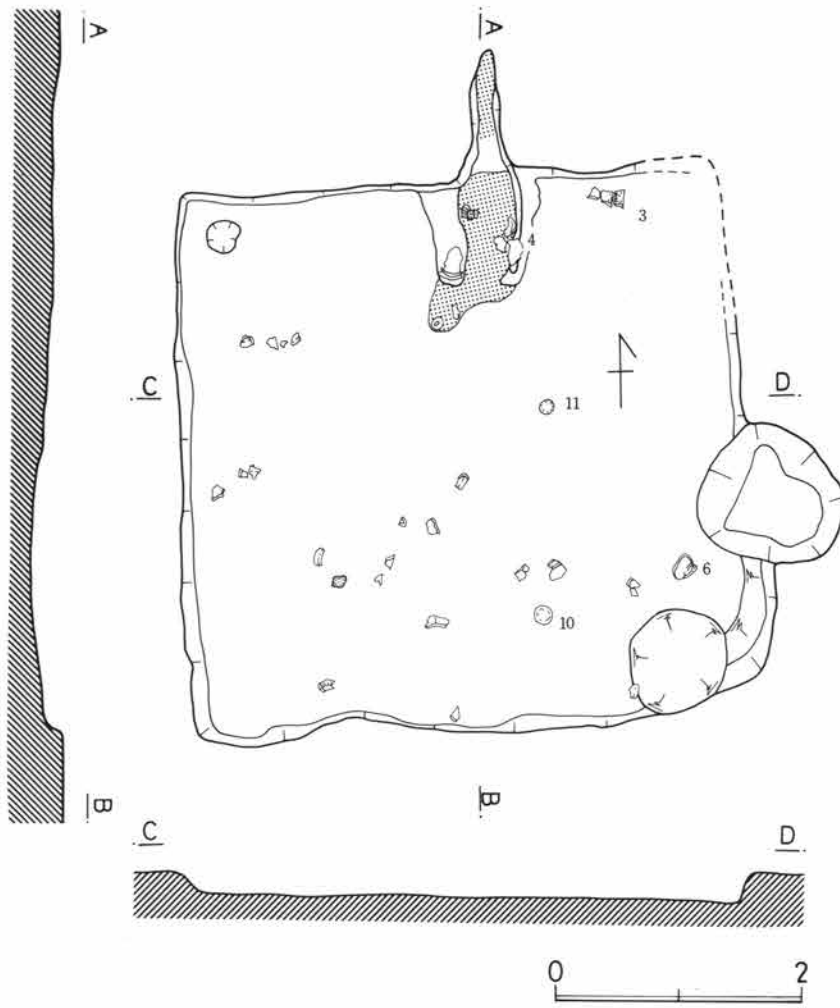
カマド燃焼部は50×85cmと大きく、左袖側によせて支石が焚口から50cmほど奥に据えられている。更に壁の外へ1mの煙道がつく。柱穴は北西隅に1回検出したほかは、黒色土からの掘りこみで確認しえなかった。

住居南東隅部には2個の円形ピットがあるが、これは後からの掘開である。

遺物はカマド周辺、西壁から南壁沿いにかけてかなり分散して検出された。



第296図 B40号住居遺物実測図



第297図 B42号住居図

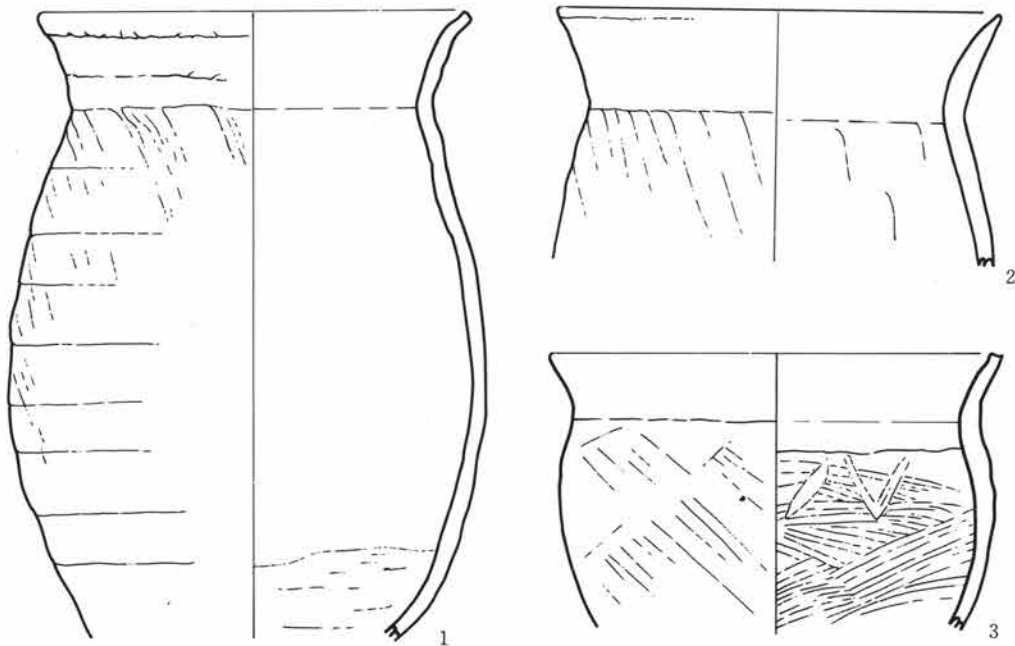
遺物 (図298、299—1～14)

カメ、小型カメ、坏、碗、土錘の組み合わせで、量的にも多い、カメは頸部のくびれの強い長胴形で、最大巾が胴部中央にくる形が主流をしめている。(2、5)しかし、(3)のように口縁部に最大径をもつものもあり、これがコシキになる可能性もある。それは器表面の煤付着の状態を考慮してのことである。

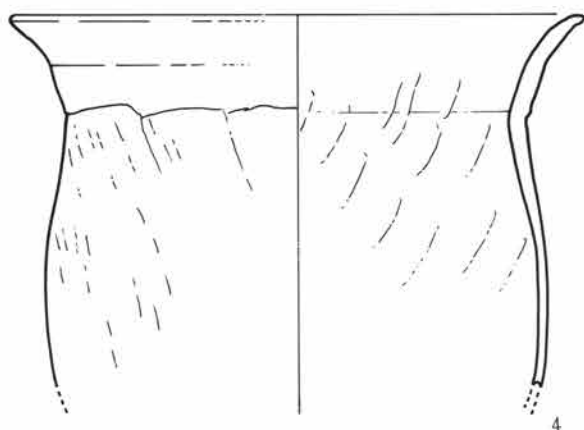
底部は突出する形で古式をのこしている。

小型カメは扁円形の体部から短かく立つ口縁を有するところはカメに類しているが、器表面の整形は櫛状工具の使用もみられる。

坏 (11) は深い丸底の体部の肩に段をもたせ、そこ



第298図 B42号住居遺物実測図



から外湾気味に直立口縁を付す。内外面ともヘラで調整する入念な仕上げである。

碗は肩の段が強い深い体部をもち、口縁は直立または外開きするもので、口唇部のづくりも入念である。体部と口縁部の高さがほぼ等しい形である。なお12~14の遺物は等倍である。

土錘は円形の土製品で、中央に貫通孔があく。3個の出土をみたが、他の住居では紡錘状のものが多い中で、やや特異なものである。

B-43号住居

E-25区に検出された住居だが、路線外にかかるため、一部を調査したにすぎない。

地形的には微高地の縁辺部にあるため、ロームがけずられたりして、住居そのものが明確でない。西北隅を確認したが、壁下およびその内側がかなり荒れており、床面の確認に難儀した。

西南隅部では、その荒れた床面に柱穴状のピットが2個検出されたが、これが、他の対称な位置にないことから主柱穴と断定できない。

住居中央部分はかなり整っており、平担でかなり踏み固められている。

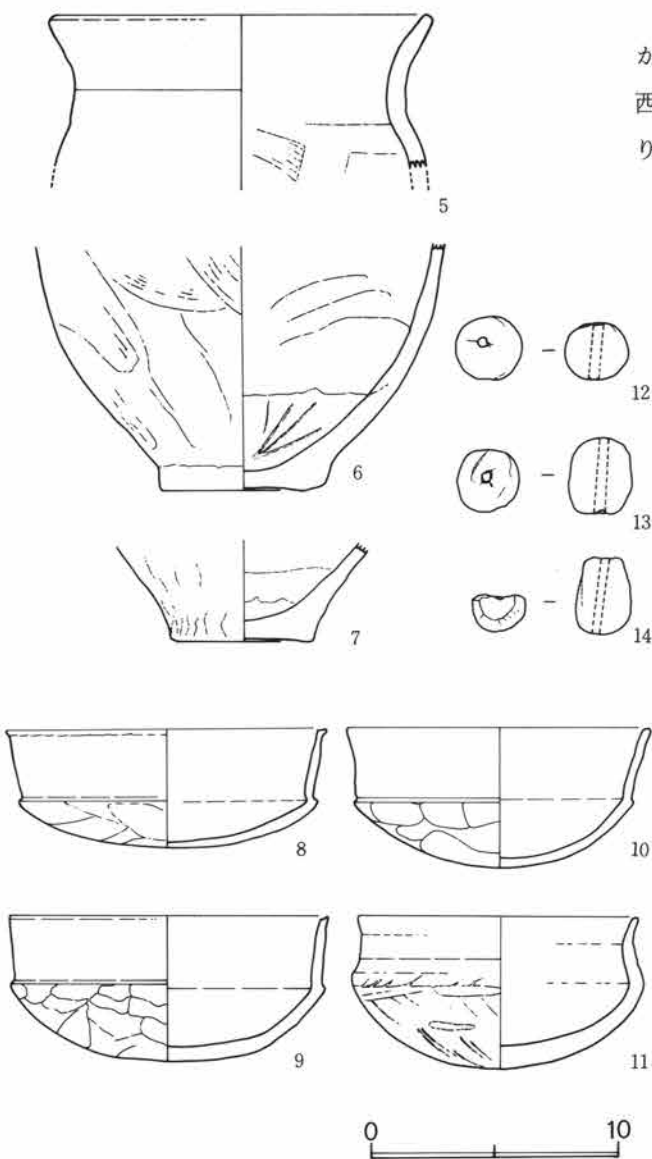
規模は確認できる西壁長で4.5mを測る。特に住居の施設であるカマド、貯蔵穴等は東壁部分にあるとみられることからすると、この部分は遺構、遺物も最も変化に乏しい部分であるかもしれない。

遺物の出土はない。

B-44号住居

F-27区で検出した住居であるが、既に微高地の原地形が落ち始める縁辺にあたっているため、遺構の状態はよくつかめない。

多少の焼土と遺物を検出したためにここに住居の存在を予想したが、その範囲については限定しきれないのが実情である。



第299図 B42号住居遺物実測図

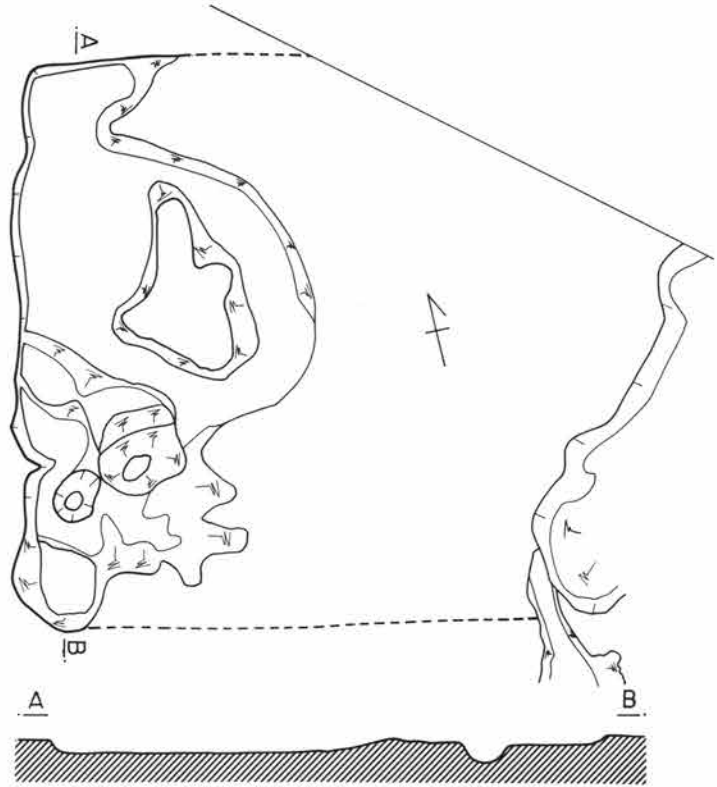
第II章 遺構と遺物

周辺には6個ほどの掘立柱穴とみられるものもあり、かならずしも堅穴住居でない可能性もある。しかし、現状では掘立柱を想定するだけのピットもない。

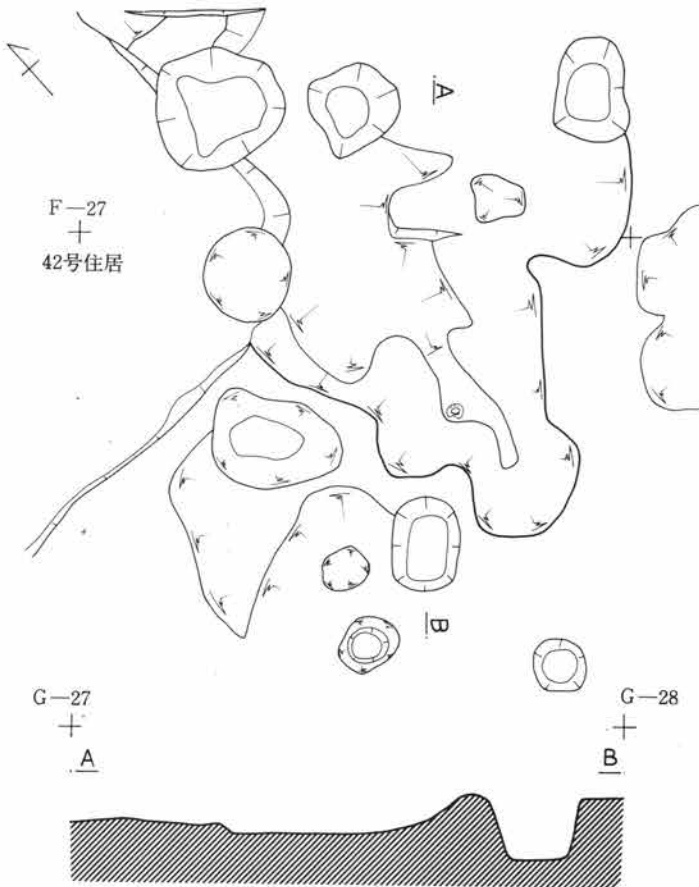
遺物には高台付碗がある。付け高台で底径と口径の比は1:2.1である。内面に、墨書がある。

B-45号住居

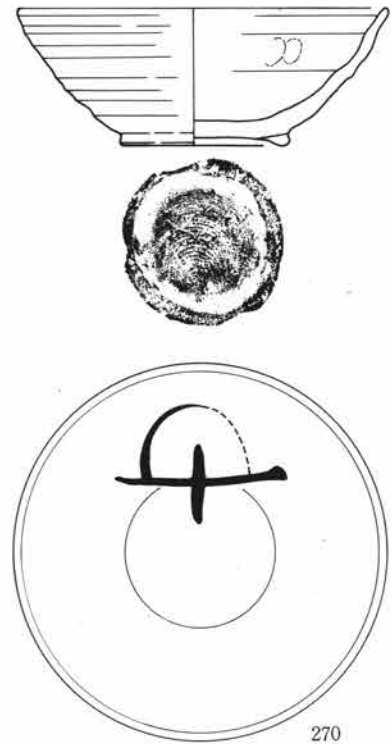
G-26区に検出された遺構であるが、端的にいつて住居であるか否か判然としない。ルーム面を10cmほど掘りくぼめているが、中に一段と低い部分があり遺物を出土した。壁長の確実な北壁で3.3mを計る。なお、北東隅の一段低い部分は1.7mほどの不正方形である。



第300図 B43号住居図

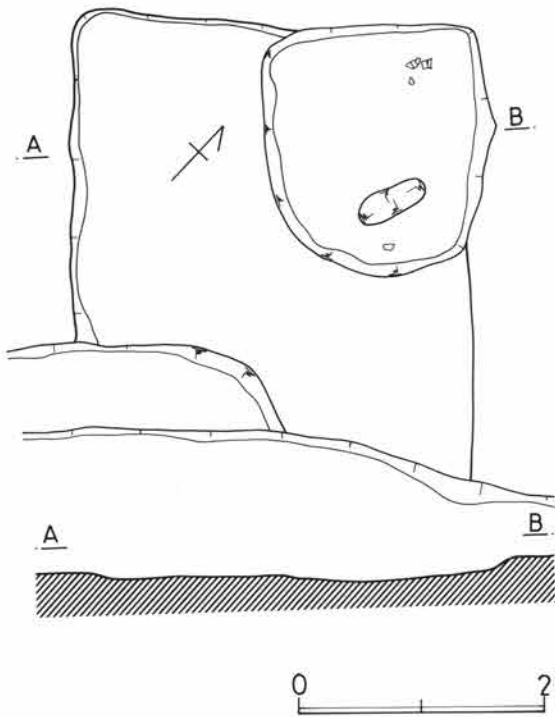


第301図 B44号住居図

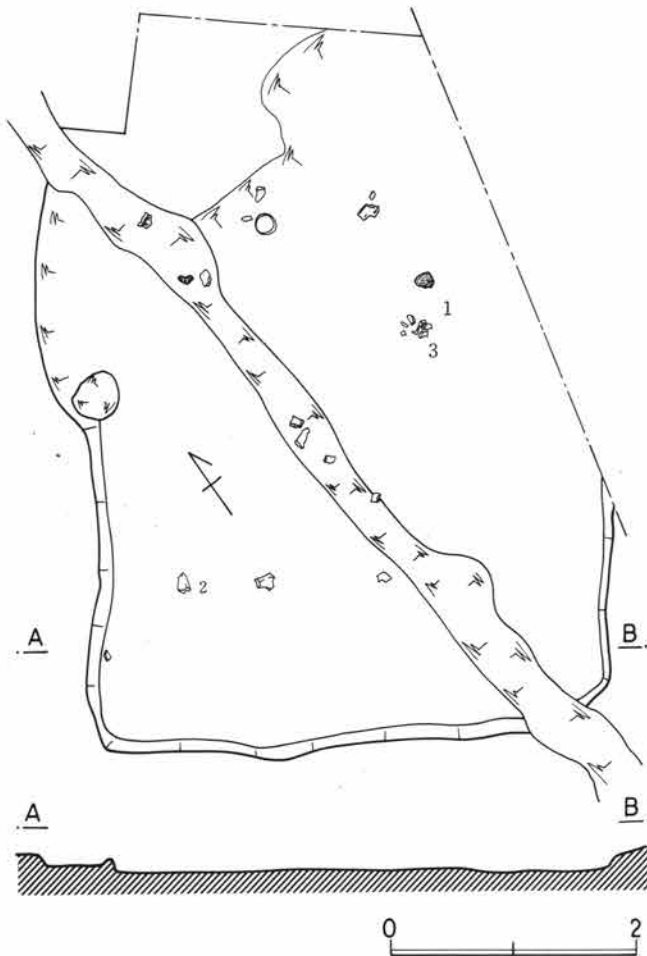


270

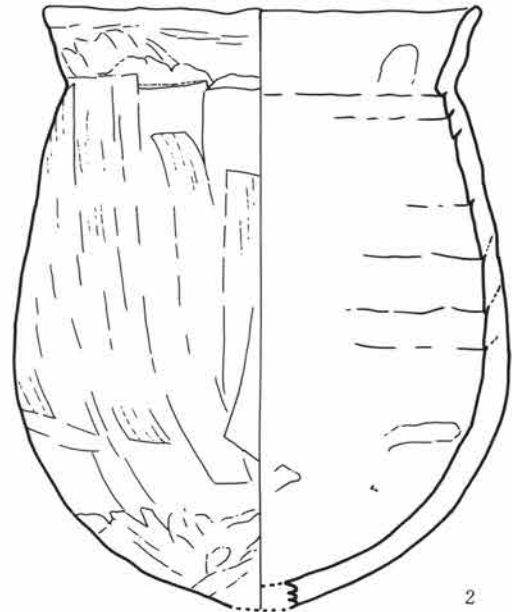
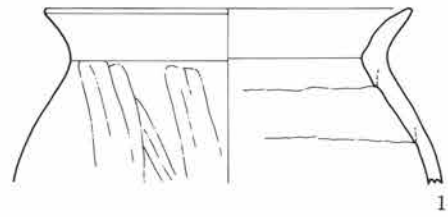
第302図 B44号住居遺物実測図



第303図 B45号住居図



第305図 B46号住居図



第304図 B45号住居遺物実測図

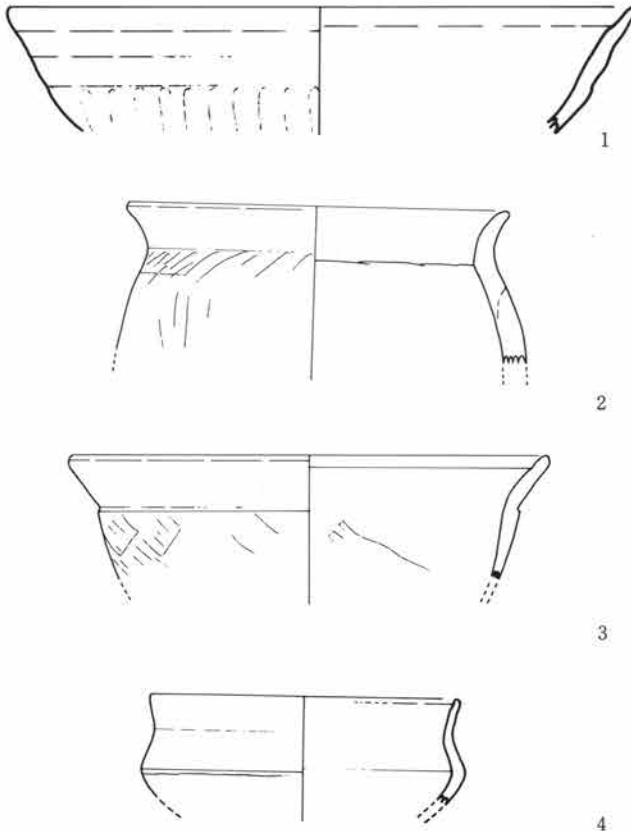
遺物(図304-1~2)

カメ2個体分が出土している。1は球形胴がやや長胴化した体部に、短かく外反する口縁を付す。器面は滑沢でヘラ削りをおさえ整っている。内面は輪積み痕をとどめている。

2は底部中央が尖底気味の特異な形状で体部は長胴化している球形胴である。口縁部はややくびれた頸部から短かく開いて立つ。内外に輪積み痕をとどめている。

B-46号住居

G-29区に発見された長方形住居とみられるが、調査区の端部にかかるため、住居北東隅部が未確認である。ロームからの掘りこみは15cm内外で、北西隅から南東隅にかけては近世溝が掘られていて、わずか



第306図 B46号住居遺物実測図

に床面を削っている。

住居の規模は、確実な南壁長では3.3mを計り、更に遺物の散布範囲から推定した南北長は4.5mほどのものと考えられる。

住居の施設としては、ほとんどなにもない状況である。他の遺構から考えても未調査区の東壁部分にカマドなどが集中して検出されることからしてもほぼ誤りなからう。

西壁中央壁にかかって柱穴様ピットが発見されているが、径35cm、深さ10cmほどで不明確である。壁内に他の柱穴が検出されないことからすれば、壁上に柱穴のくるとも考えられるが、対称の位置が確認できない点からすれば断定できない。

床面は一応整って平坦である。

遺物は住居の北東四半部に集中して発見されている他、溝中にも小片が入りこんでいる。

遺物 (図306—1～4)

カメ、鉢、坏、壺が出土している。

カメは、器肉のあつい長胴気味のもので上半部のみが出土している。頸部のくびれはやや強く。口縁は外反気味に短かくつく。体部はケズリ後おさえてやや滑沢である。

鉢はいわゆる鉄カブト形を呈するもので体部から口縁への移行は沈線で画している。口縁は外開きして立つ。体部は斜めのケズリが入っている。

壺は肩のはった形で彎曲して丸底の底部に移行するものと推定される。口縁部は短かく直立気味に立つ。

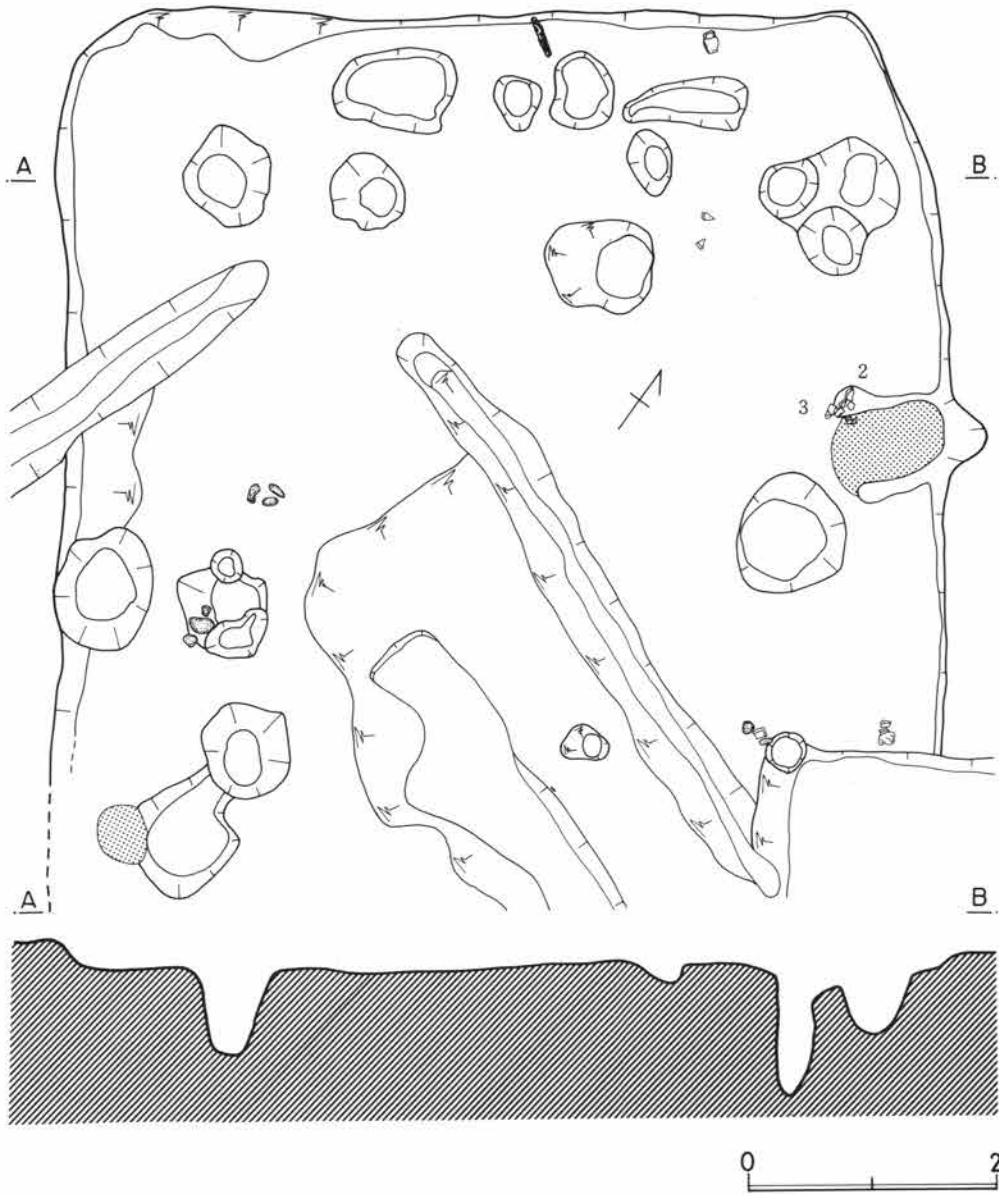
坏は素縁口辺の坏で体部と口縁の境は特に意識せず、ケズリの体部と横ナデの口縁部と整形手法で画している。

全体的には鬼高II期の範疇に属するものとみられる。

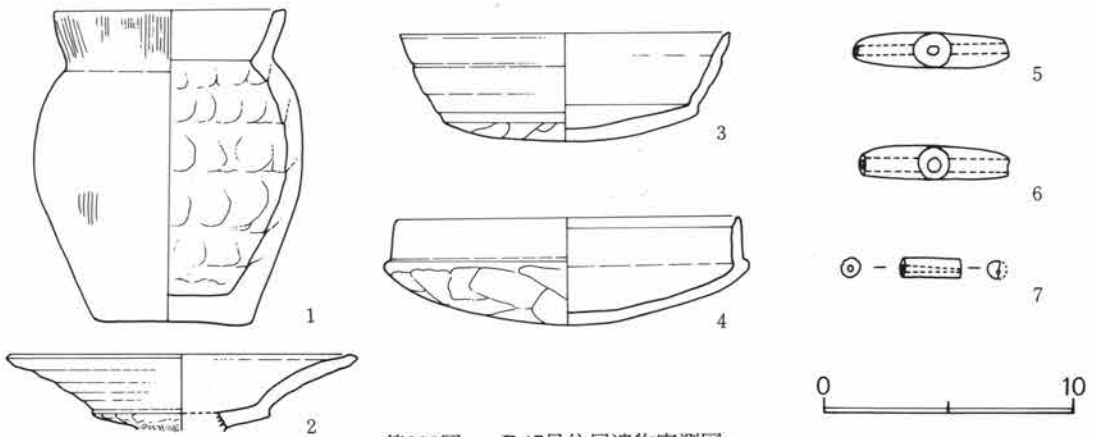
B-47号住居

I-29区を中心に発見した大型住居である。南側は後世の攪乱がはげしく、範囲を限定できない。ローム面からの掘りこみも30cmほどあり、北壁長は7.2mを算し、南北長は柱穴の状況からみて7.4m以上に及ぶ大型である。柱穴は四隅の支柱穴の他に数個の副柱穴をもつ。支柱穴間の芯心は4.5m等間であったとみられ、その間に1.5m～1.2m間隔の副柱穴が入る。規模が大きかったために、そうした配慮なしには上屋が造られなかったことを示している。更に周辺の壁下の補助柱穴も考慮すると、柱木の間隔がおよそ15°くらいの間隔で配されていたことを示すのかも知れない。

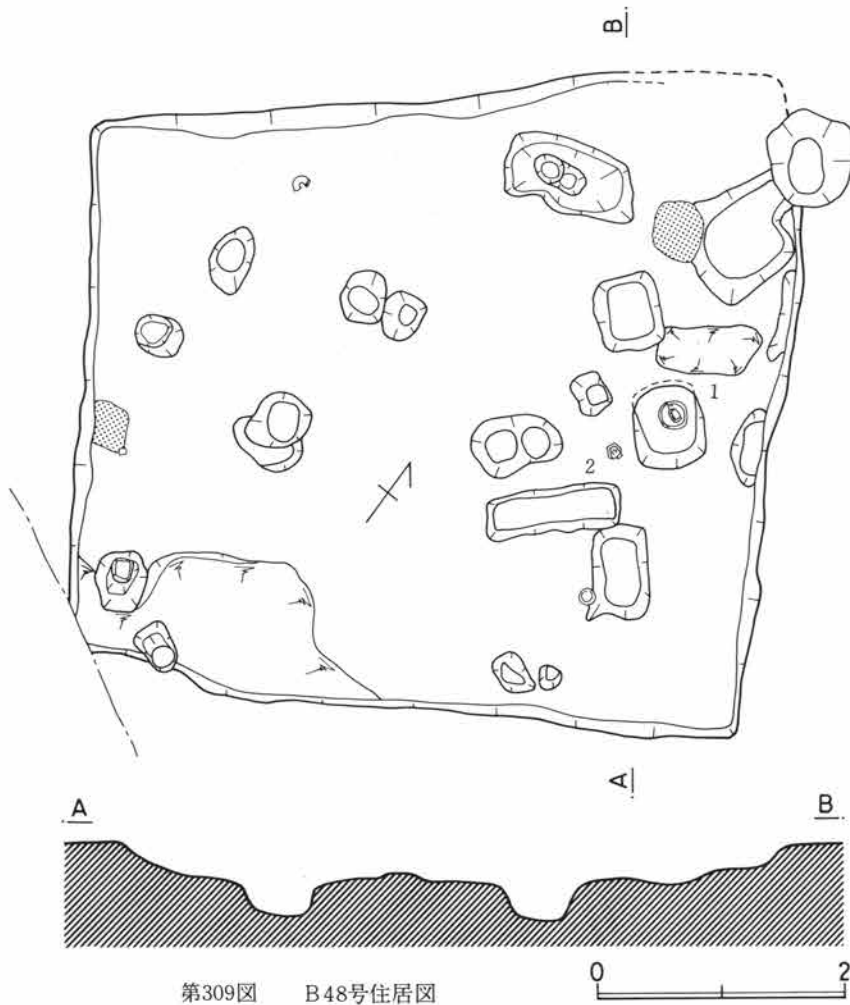
カマドは東壁中央に壁内につくり出されている。焚口巾50cm、奥行1.25mと大型の粘土カマドである。燃燒部はほぼ壁内に位置することからほぼ平坦で壁外は煙道として段をへだてて外へのびたものと思われる。



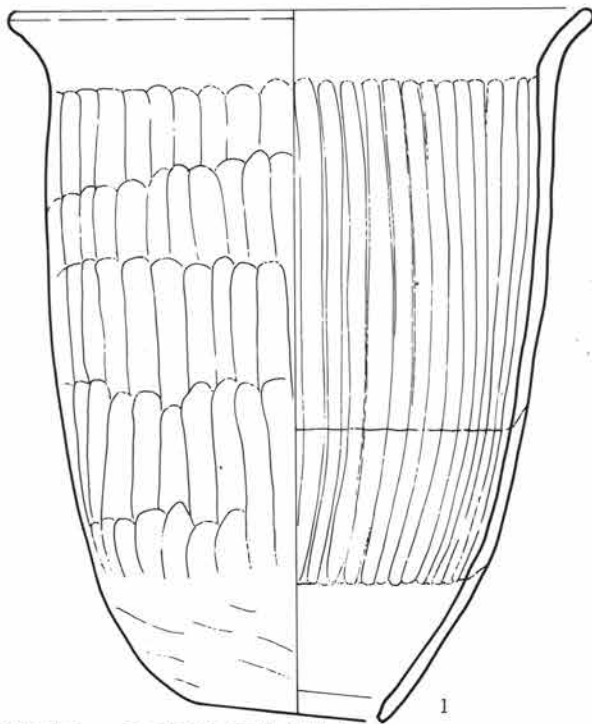
第307図 B47号住居図



第308図 B47号住居遺物実測図



第309図 B48号住居図



第310図 B48号住居遺物実測図

床面はほぼ整っていて、特に支柱穴を結んだ線内は固く踏み固められていた。

遺物は量的には少ないが特にカマド周辺、南東隅、北東隅に集中して発見されている。この中には小型カメ、高坏、坏、土錘がある。

遺物 (図308-1~7)

小型カメ、高坏、坏、土錘の組み合わせである。

小型カメは肩のはった長胴に大きい平底をつけ、口縁部は短かく直立気味に立つ。端部はヘラおさえ。器表はヘラ研磨で滑沢、内面は紐作り痕を丹念に指でおさえしている。

高坏は脚を欠くが、坏部は小さい底部から浅く大きく水平気味に開く。脚との接合部は大きい。

坏は浅い体部と口縁との境に明瞭な段があり、そこから内傾して立つ坏身、外斜して開く蓋坏の二種がある。

B-48号住居

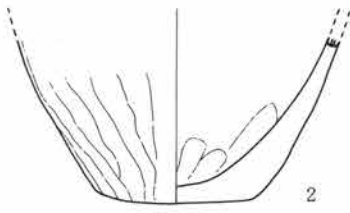
J-29区に発見された方形住居であるが、各壁長が区々で不正方形である。5×5.6mの規模である。

柱穴は、中央の2穴が支柱穴でそれを両脇の副柱穴から支えて棟をあげ、そこから柱を下ろしたものと推定されるが、これについては推定の域を出ない。方形の掘り方の穴は掘立柱建物の可能性がある。

カマドは焼土が部分的に検出されたのみではっきりつかめていない。床面もかなり荒れている。

遺物 (図310、311-1~3)

カメとコシキの組み合わせである。カメは下半

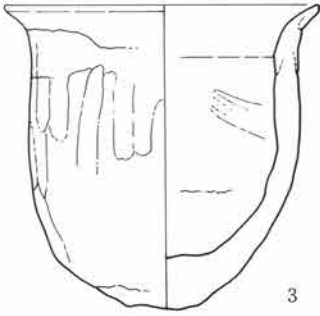


のみのものと小型の二種がある。長胴でもまだかなり肩の張りのある形である。コシキは長胴形で最大径を口縁端部におく。

器面は内外面とも細かいへらのたて方向のケズリを施し、そのあとおさえている。

全体的に、カメの雑なつくりに対し、コシキの精巧さがめだつ。

B-49号住居



H-34区で発見された方形住居で道路に切られて%ほど調査した。

確認できた西壁長で6mを計る。住居の施設としては東壁部分にカマドなどがあるとみられるため、西壁沿いの支柱穴2個が確認ができたのみである。

支柱穴は径35cm、深さ40cmほどのもので芯心距離、3.3mである。西南隅の柱穴の左脇にも円形ピットがあき、中に河原石が6個入っていた。

またすぐ右脇にもピットがあるが、これも浅く、その性格については

不明である。

第311図 B48号住居遺物実測図

床面はところどころに凹凸があるが概してよく整っている。

遺物(図313-1~7)

カメ、コシキ、坏の組合せである。カメは長胴形で頸部のくびれがやや残り、最大径と口縁部が同じになる1と最大径が胴部中央にくる3の二種がある。

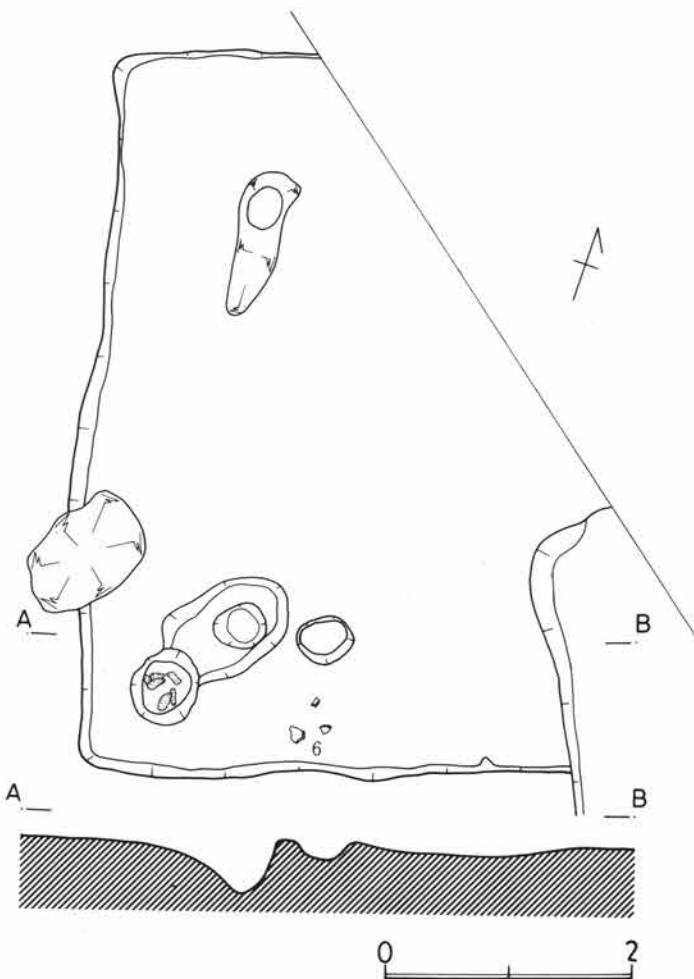
コシキは長胴形の単孔で最大径は口縁部にくる。内、外面の器面整形は入念である。底部は底をそっくり抜いた形の底で端部は丸味をもっている。

坏は肩部にはっきりした段を有するものが主流で、体部もまだかなり深手である。

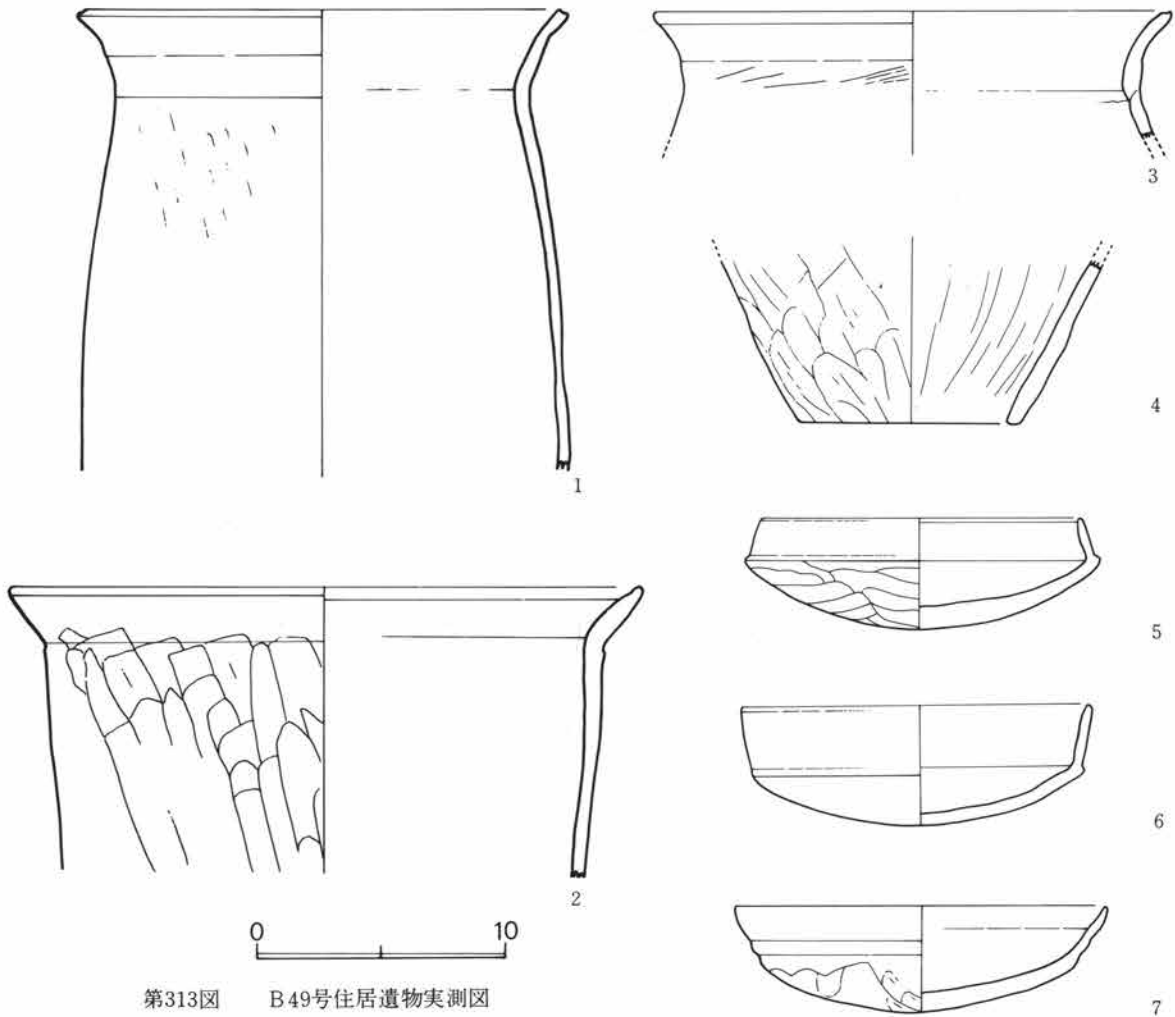
5は段の強い肩部と深い体部、内斜して立つ口縁部で両者の高さの比は1.6である。7は蓋坏で、肩部の稜線が強調され、そこから開き気味に立つ口縁部で、体部は深めである。体部と口縁部の比は5と全く逆で口縁部が高い。

6は肩部の張りをやや欠き、底部が尖底状になる。口縁部は沈線を2本入れて段を意識させている。口縁部の比は1:1で他とかわっている。

全体的にカメの最大巾が口径と体部中央が同じ大きさの1.6の坏の状態からみる



第312図 B49号住居図



第313図 B49号住居遺物実測図

と、時期判定の一つの規準になる時期の所産と考える。

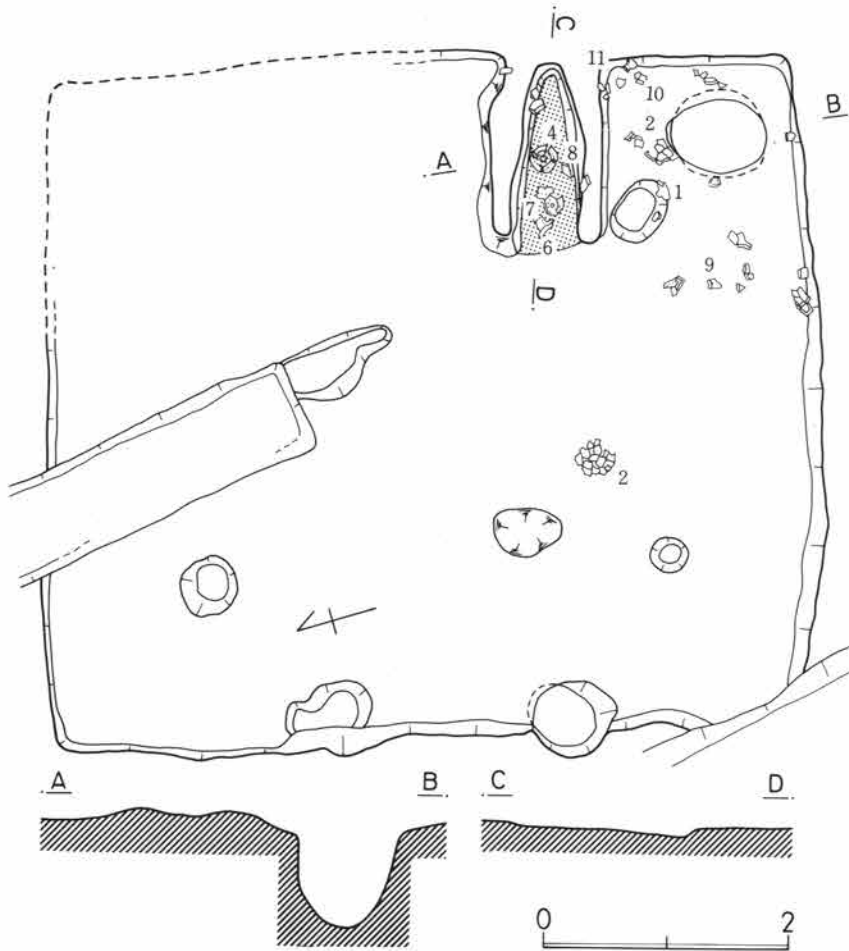
B-50号住居

H-34区に検出された大型方形住居である。住居の東北隅に49号住居が切っている。規模は6.2×5.5mの方形であるが、ローム面からの掘りこみは10cm弱で浅い。49号住居はこの床面を10cmほど削っているために東北部は旧状をのこさない。

カマドは東壁中央からやや南に寄った部分に付設されている。ロームを削りのこして黒色粘土をまいて袖をつくっている。その規模は焚口巾45cm、奥行1.5mと長大な粘土カマドである。床は、焚口前面をやや掘りくぼめ、そこから上り勾配に奥へ進む。焚口から奥へ79cm入った左寄りに高坏の脚が立ち支脚様を使用したとみられたほか、かなり多量の遺物を出土した。内部もかなり強く焼けて使用の激しさを物語っている。

そのカマドの右脇に貯蔵穴が円形にうがたれていた。径75cm、深さ70cmの規模で、内部から壺、カメが出土した。また、この貯蔵穴は内部がえぐられて広がっている。また、この縁にかかってたくさんの遺物が出土している。

柱穴は、四隅に支柱穴が検出された。径30~40cm、深さ40~50cmの規模で、各柱穴間の距離を芯心で計ると、東西2.75、南北3.7mである。住居の東西、南北の長さの比が1.2になるのに対し、柱穴間の比は1.3であるのは東西間が壁から余計はなれるからである。また、西壁下に2つの柱穴があり、ほぼ、支柱穴の中間にくる。芯心で1.8mあり、ちょうど入口にあたるのかも知れない。それを裏書きするようにこの2柱間から



第314図 B50号住居図

カマド前面にかけて一段と固い床面が続いている。これで見れば、入口を妻側におき、カマドの煙出しを妻部におくとすれば、棟走向は東西方向であったものと思われる。

全体的にはかなり整った住居で典型的な施設の配置をみることができる。この住居において問題となるのはカマドの出現期のものと考えられる点である。これについてはA地点にもこれに類するものがあり、検討を要しよう。

遺物 (図315、316-1~12)

組み合わせは壺、カメ、埴、高坏、鉢の5種である。

2の壺は球形胴は底

部近くでややコケる感じで小さいしっかりした平底である。強い「く」の字状を呈する頸部から直立気味に一旦立ち端部で外反する。体部表面はヘラで入念に研磨されている。

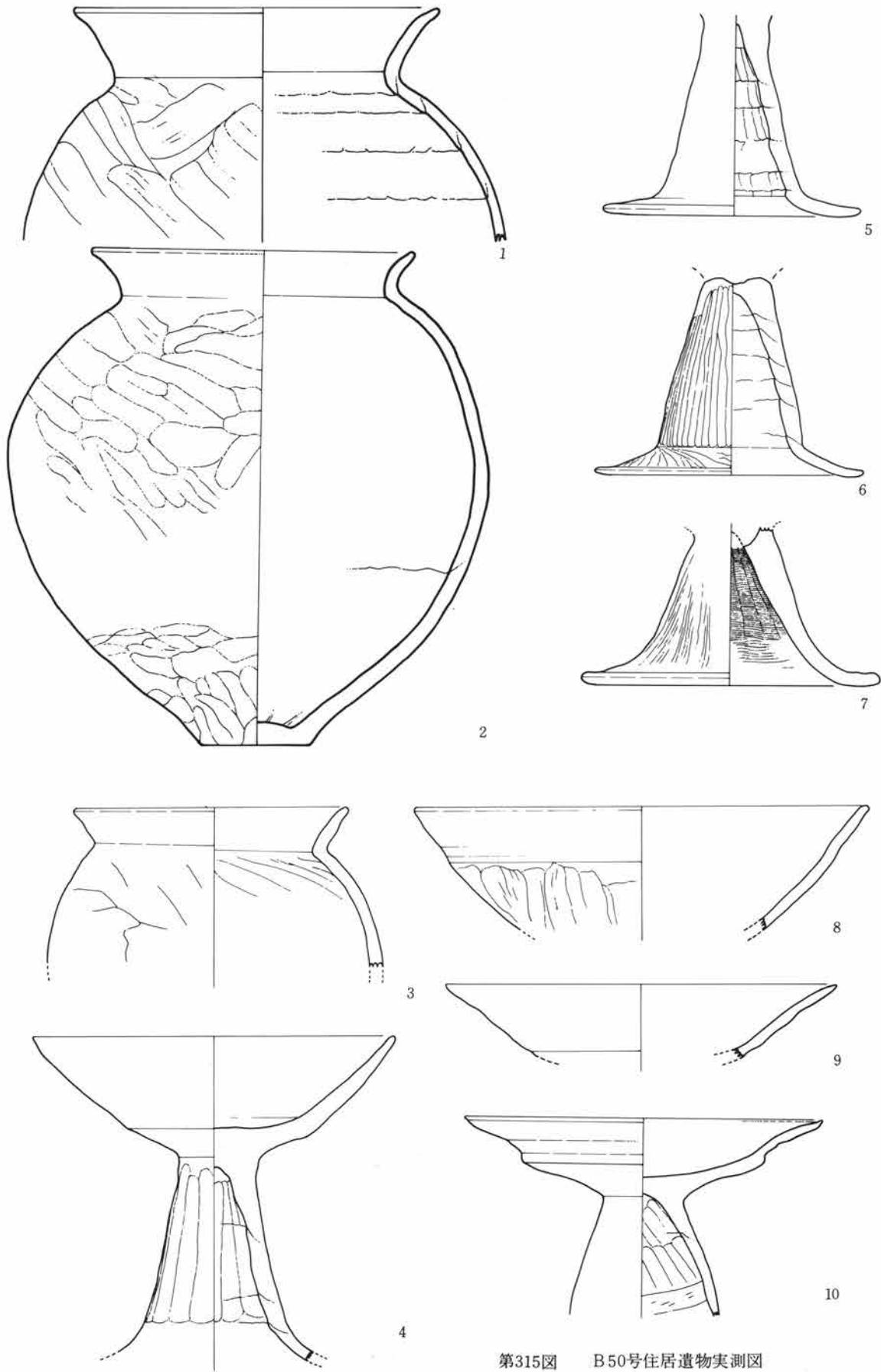
カメは1、3の2個体あるが、球形胴で、口縁は「く」の字の頸部から大きく外開きする。体部表面は壺より粗いヘラ削りとそれをおさえる形で整っている。内面には紐作り痕がのこる。

埴は2個体あるが共に、体部は扁円形で中央部はやや屈曲気味に折れる。底部は小さい平底で中央を指でおさえて上げている。口縁部は内外面ともヘラ研磨で滑沢で、口縁の接合部は指頭痕がのこっているが、おさえはこまかい。

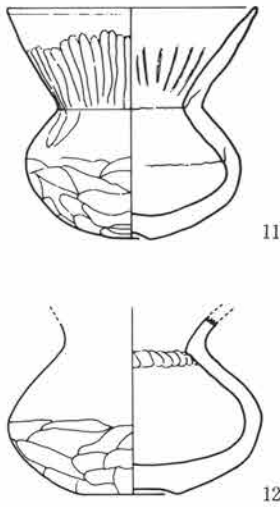
鉢は下半を欠くが大型の口径をもち、肩の張りが少ないからやや尖底気味になるものと思われる、口径に比べ浅い感じがする。口縁部と体部の境はややヘラでおさえて沈線に入ってからそこから外開きする。体部外面はたて方向のヘラ削りである。

高坏は、坏部が大きく、脚は一旦小さく開いて立ち、裾部は大きく開く形である。坏部は4と10の二つの流れがある。4は大きい底径をもち、稜が強くそこから急激に大きく直線的に開く。端部は素縁で尖がり気味である。10の坏部は底部と口縁の境に強い段があり、そこから外湾して大きく開く。開きながら中段に角度の小さい変換点があるため外面は多段状に見える。

脚は外面はヘラ研磨、内面は紐作り痕をのこすもの、それを櫛状工具で整えたもの、指でひっかくものの二種がある。



第315図 B50号住居遺物実測図



第316図 B50号住居遺物実測図

全体的にはかなり器種が豊富で、しかも技法的にも特徴があり、時期的なものを考える上で基準となる遺物群であろう。

B-51号住居

F-28区に検出された不正方形住居である。規模は4.1×4.3mで平行四辺形状の形である。形状の特異なことで、遺物が住居中央に山積した状態で出土した点が特筆される。また遺物も異形のものも多く、単なる住居かどうかを考える必要がある。

住居施設のカマドはなく、ほり方形状も不正形である。柱穴が住居中央やや南寄りに3個ある他北東隅、西南隅に1個ずつある。また、北西隅部には方形の貯蔵穴状のピットがある。

この特異さからみると、上屋構造は想定できない。掘りこみ内の北東から南西隅への2個の柱穴は一列に2mの間隔をおいて並ぶが、他は全く対称関係はない。ピットの深さもまちまちで統一性はない。

貯蔵穴状のピットは径70cmほどの方形であるが、掘りかたの軸線とは平行関係にない。しかもその周辺の土器のあり方、器種の特異さなどからみると、この一隅は住居というより、何か特殊機能をもつものとも考えられる。しかも床は平担でなく、かなり凹凸があり、整っていない感じをうける。

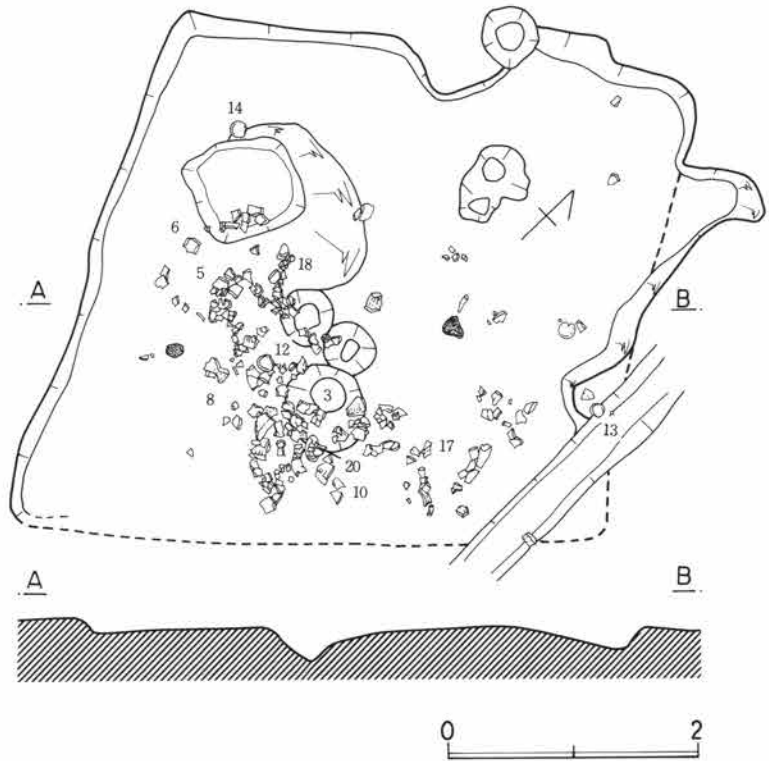
遺物 (図318、319、320-1~21)

カメ、コシキ、鉢、小壺、坏の他、異形のものとして5、7のカメ、8の深鉢、19のコップ状の土器などがある。

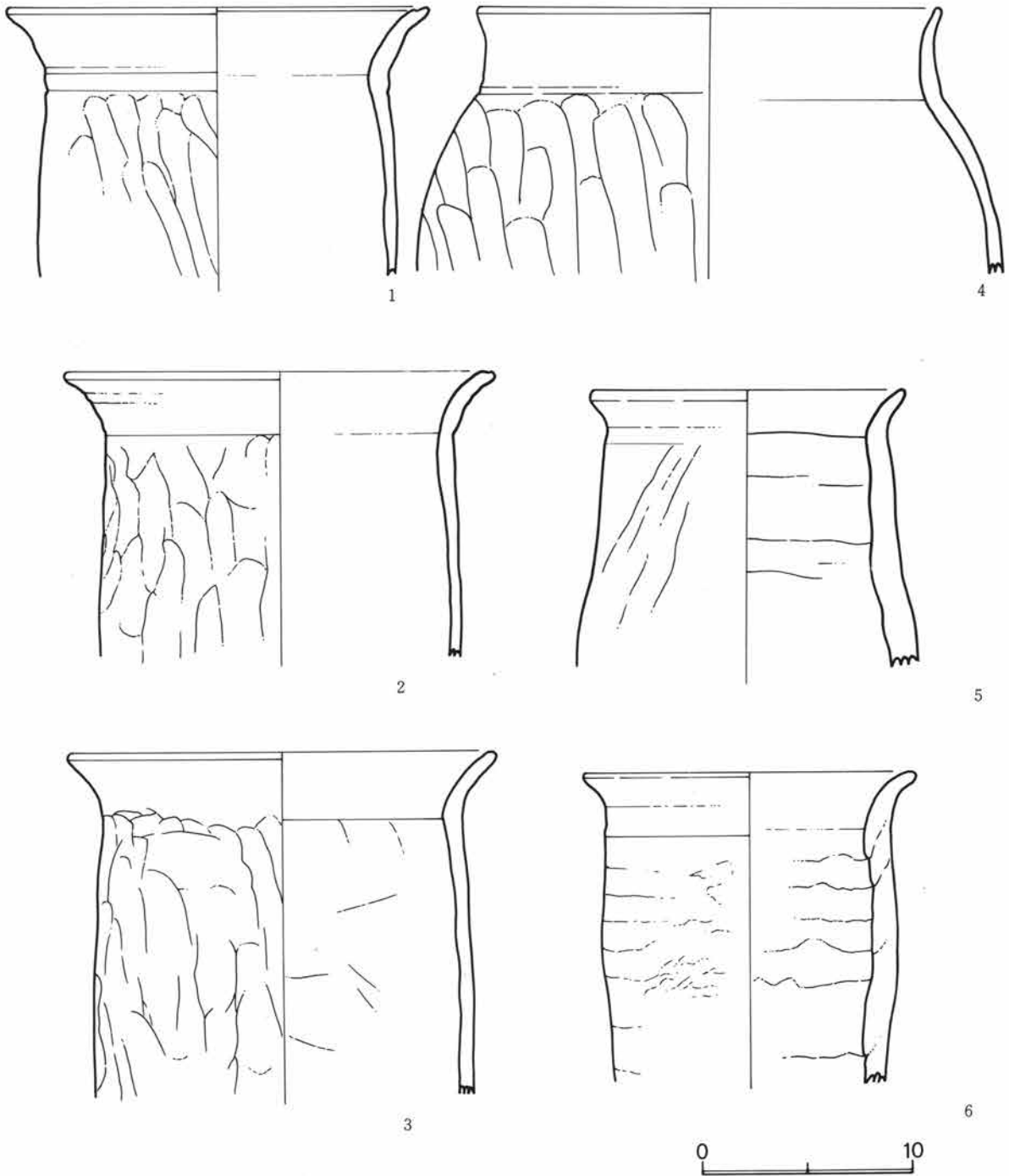
カメは、口縁端部に最大径がくる形で砲弾型の長胴カメである。異形のカメは5、7のように口縁を小さく直立または少し開いて立たせ、内面に紐作り痕をそのままのこすような雑なつくりもある。

コシキは丸底に近い鉢形のもので、底部には底いっぱいひろがらない単孔を有する形である。また9も下半を欠いているが、コシキである可能性をもっている。

鉢形土器は鉄カブト状のものと8のような坏鉢形の異形なもの二種がある。10はふつうの形で半球形の体部の肩に二条の沈線を施し、そこから外開きする口縁を付す。異形鉢は大きい木葉のつく平底でそこから20°ほどの角度で直線的に立つ。更に口縁部をもつ。特に底部のあつこと、器面の凹凸が多いことなど雑な



第317図 B51号住居図

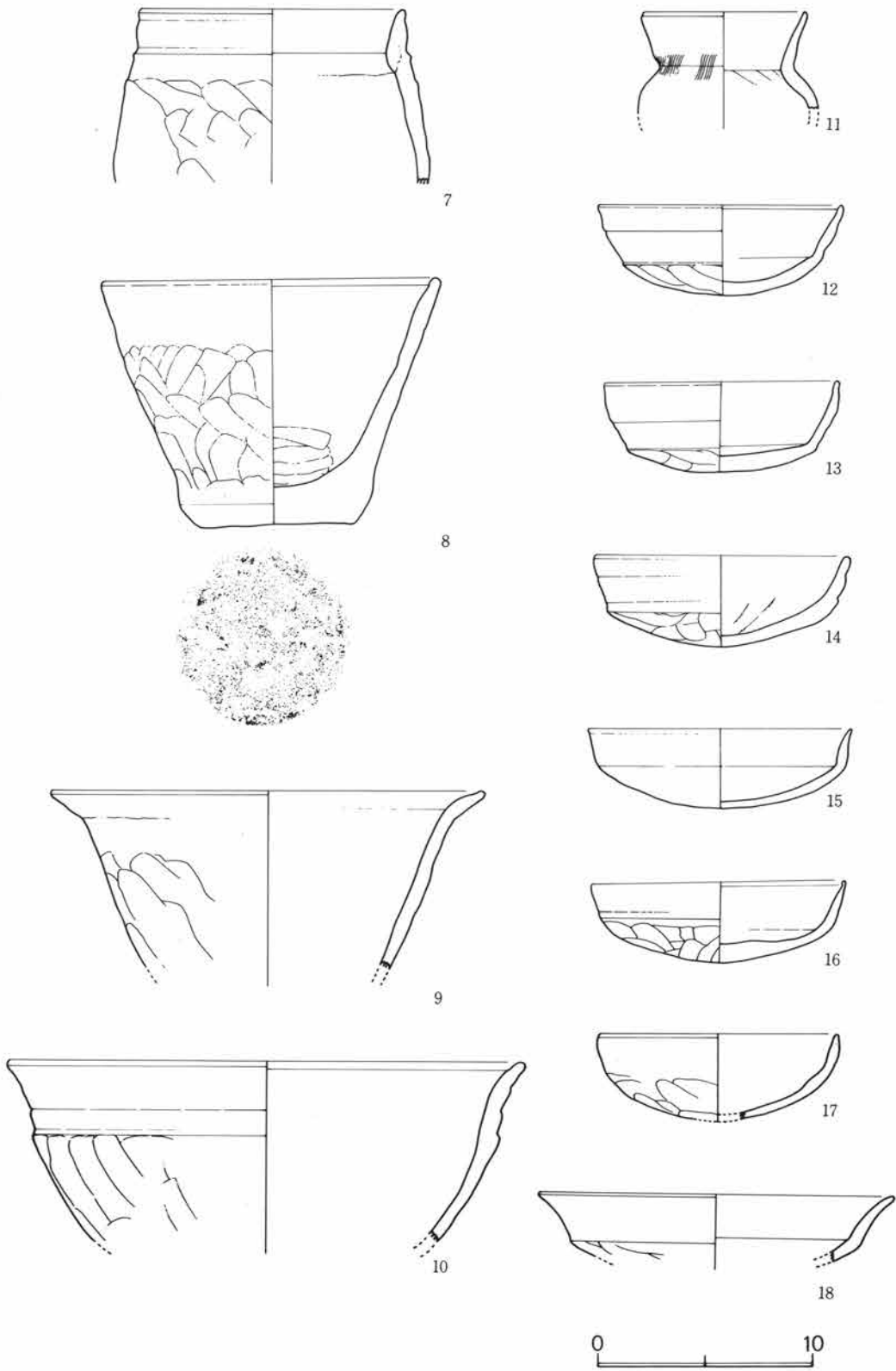


第318図 B51号住居遺物実測図

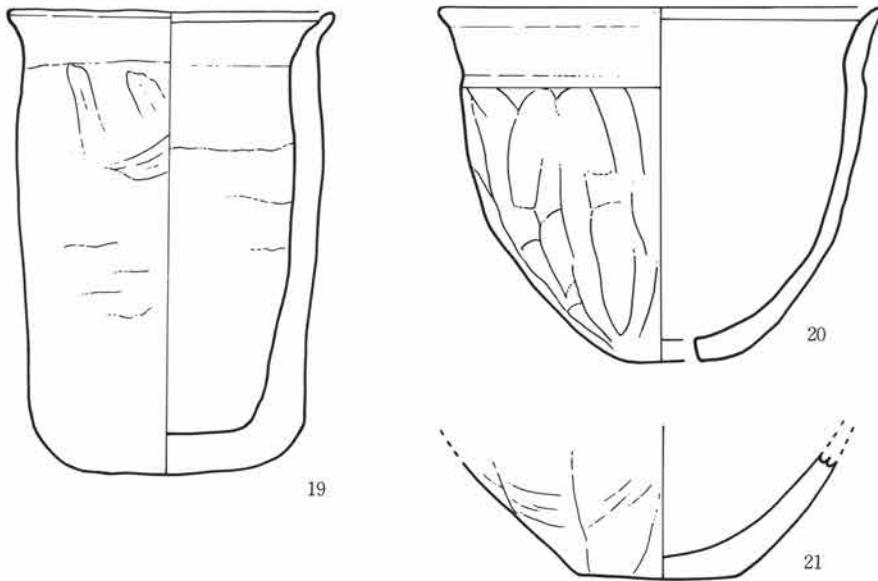
つくりである。

小壺は下半を欠くが埴状のものとみられる。扁円状の体部に長い直線的に外開きする口縁がつく。部分的に整形のための櫛状工具痕をのこす。形態的には古式をのこすのである。

坏は有段のものと稜線で口縁を画するものの二種がある。前者は12、13であるが、段はかなり退化して形骸化している。口縁に一本ないし二本沈線が浅く入る。後者は15~17で体部と口縁の境の稜がまだかなりのこっている感がある。特に前者の一群に比べ、体部が深いところに相異がある。18は体部の極端に浅いものであろう。



第319図 B51号住居遺物実測図



第320図 B51号住居遺物実測図

コップ状の土器は円筒状の体部と大きい不安定な平底、口縁部を短かく外反させる手法、輪積み痕をみせることなどの特徴がある。器肉はあつい。

以上のように、この遺構、遺物とも特異な様相を指摘できるが、この性格や機能については不明である。

また、これが一般の住居とすれば、かなり変形的なものとして考えざる

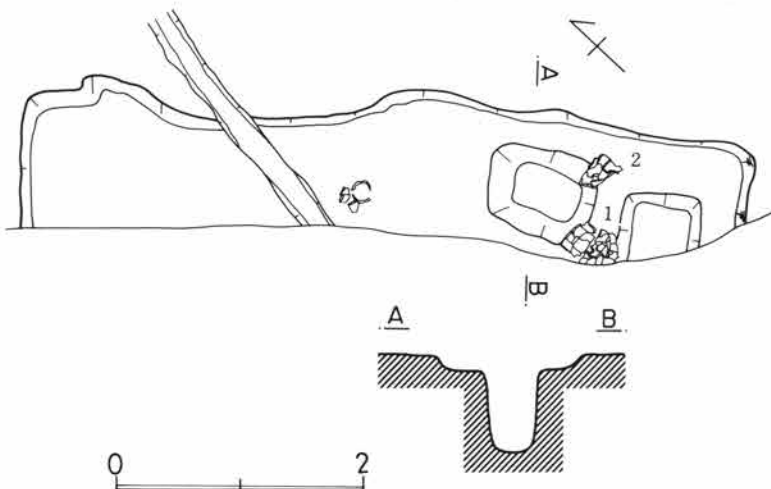
を得ない。こうしたことからして本稿では、これを一般住居、特殊遺構の両面から検討中であることのみ触れるにとどめておきたい。

B-52号住居

L-22区に発見された住居であるが大部分は路線外にかかるため、住居の東壁部分を壁沿いに1.1m分ほど調査したものである。ローム面からの掘りこみは10cmほどで浅い。床面はほぼ平坦で整っている。

住居の規模は、確認できた東壁長が5.9mである。この住居の東南隅部に貯蔵穴がうがたれている。しかもそれが2個あり、いずれも壁の走向に合致している。この2個の貯蔵穴が同一住居に属するものか、二つの住居に分かれるものは不明である。もし、二つの住居が重複していたとすれば、当然、二つの貯蔵穴に前後関係があるはずであるが、ほぼ同一床面上にあり、埋土も同様なこと、住居壁の走向に合致していることからすれば、単一の住居の可能性が強い。

貯蔵穴の規模は北側のものが85×70cm、深さ70cm、南側のものが60cmの径で深さ50cmである。共に掘りこみはほぼ直で、シャープである。



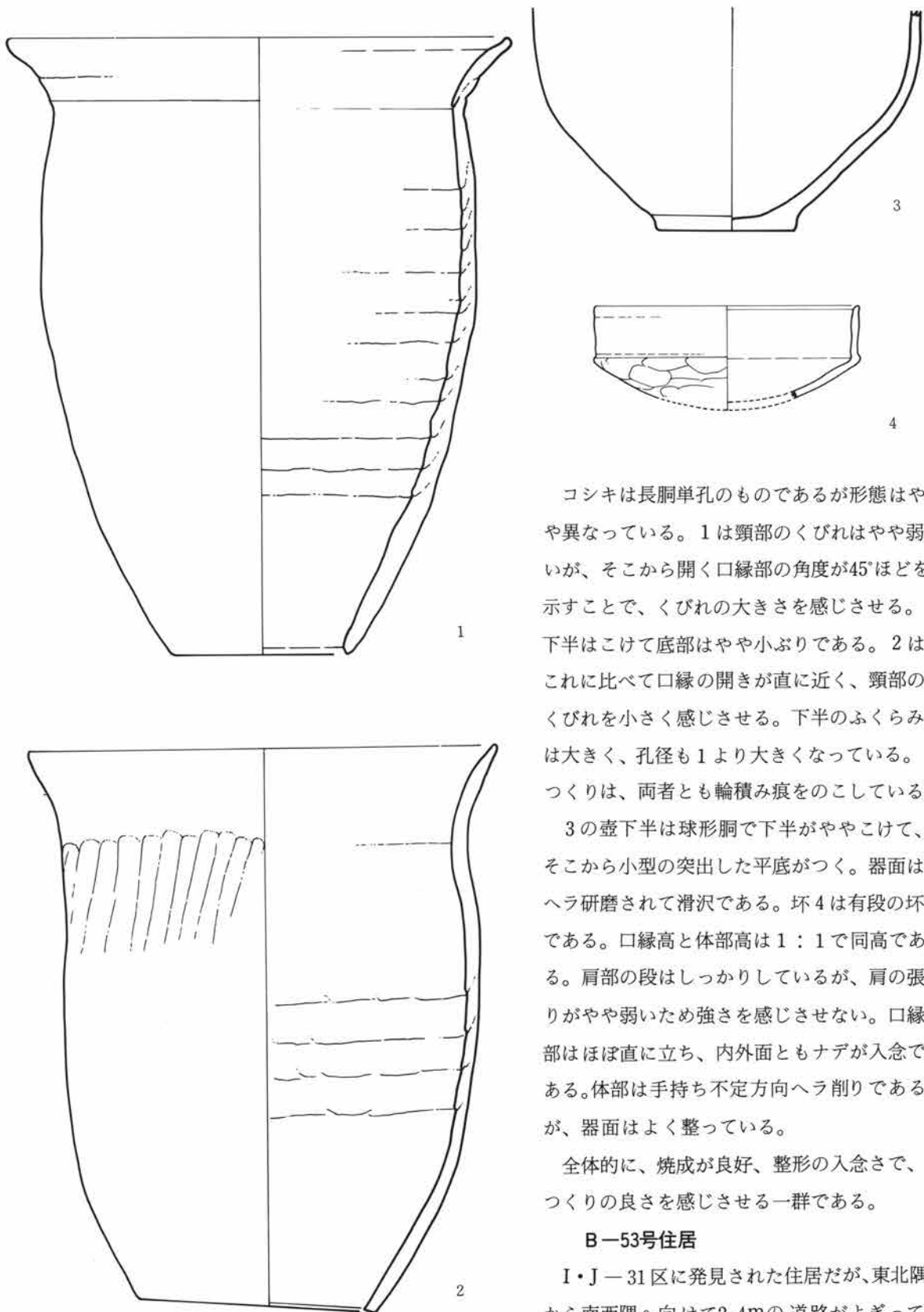
第321図 B52号住居図

この貯蔵穴の位置からすれば他の例から推して東壁中央にカマドが付設されていたと考えられるが、現状では検出されない。ただ、東壁中央にやや外に張り出す壁線が、その位置を推察させるが定かでない。

遺物は、貯蔵穴の間と東壁下中央に検出されている。

遺物 (図322-1~4)

コシキ2個、壺下半部1個、坏1個の4個である。



コシキは長胴単孔のものであるが形態はやや異なっている。1は頸部のくびれはやや弱い、そこから開く口縁部の角度が45°ほどを示すことで、くびれの大きさを感じさせる。下半はこけて底部はやや小ぶりである。2はこれに比べて口縁の開きが直に近く、頸部のくびれを小さく感じさせる。下半のふくらみは大きく、孔径も1より大きくなっている。つくりは、両者とも輪積み痕をのこしている。

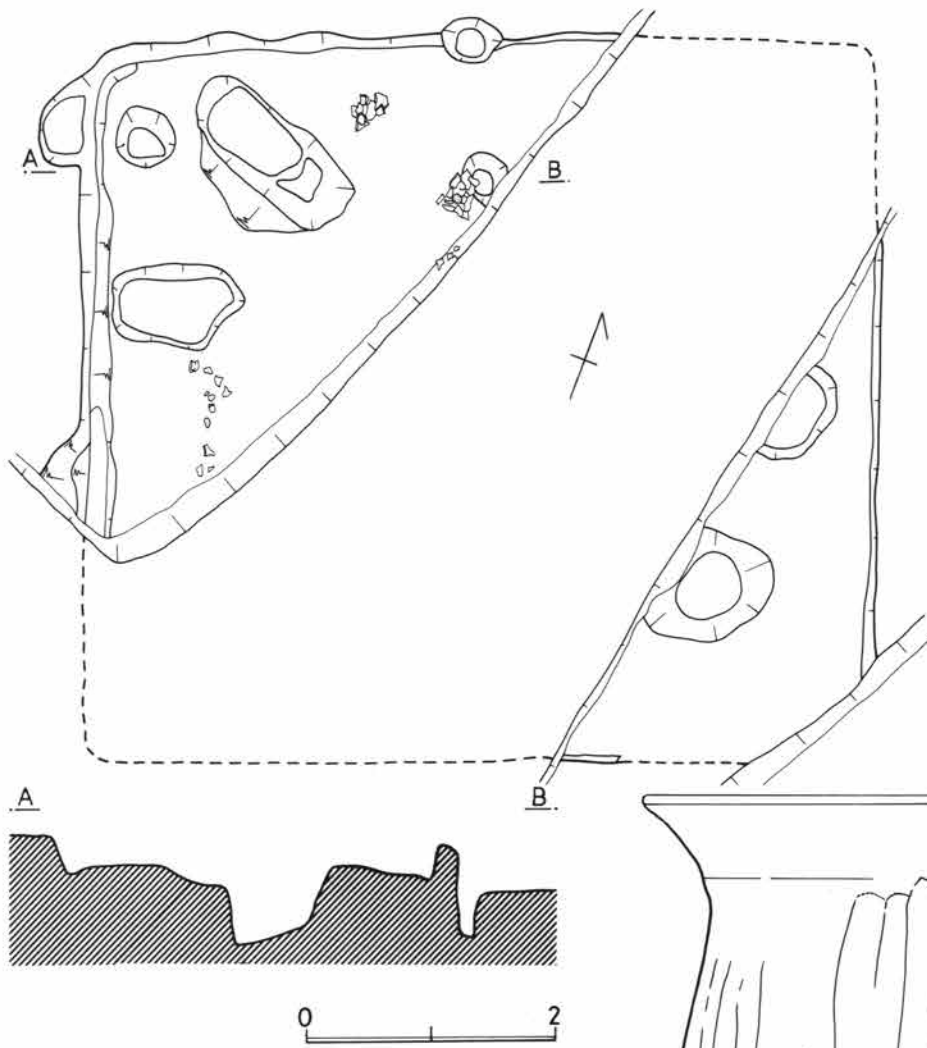
3の壺下半は球形胴で下半がややこけて、そこから小型の突出した平底がつく。器面はヘラ研磨されて滑沢である。坏4は有段の坏である。口縁高と体部高は1：1で同高である。肩部の段はしっかりしているが、肩の張りがやや弱い、強さを感じさせない。口縁部はほぼ直に立ち、内外面ともナデが入念である。体部は手持ち不定方向ヘラ削りであるが、器面はよく整っている。

全体的に、焼成が良好、整形の入念さで、つくりの良さを感じさせる一群である。

B-53号住居

I・J-31区に発見された住居だが、東北隅から南西隅へ向けて2.4mの道路がよぎっているため、住居の南東部、北西部を三角形に調査したものである。規模は6.4×5.8mで、

第322図 B52号住居遺物実測図



第323図 B53号住居図

棟に桁が渡っていたものとみられる。

住居西北隅には貯蔵穴がある。径80cm、深さ60cmの不正円形の規模をもつ。これからすれば当然カマドはその左の壁につくりつけられていたとみられる。西壁北寄りの浅い不正円形のピットがカマドの位置を示しているとみられる。

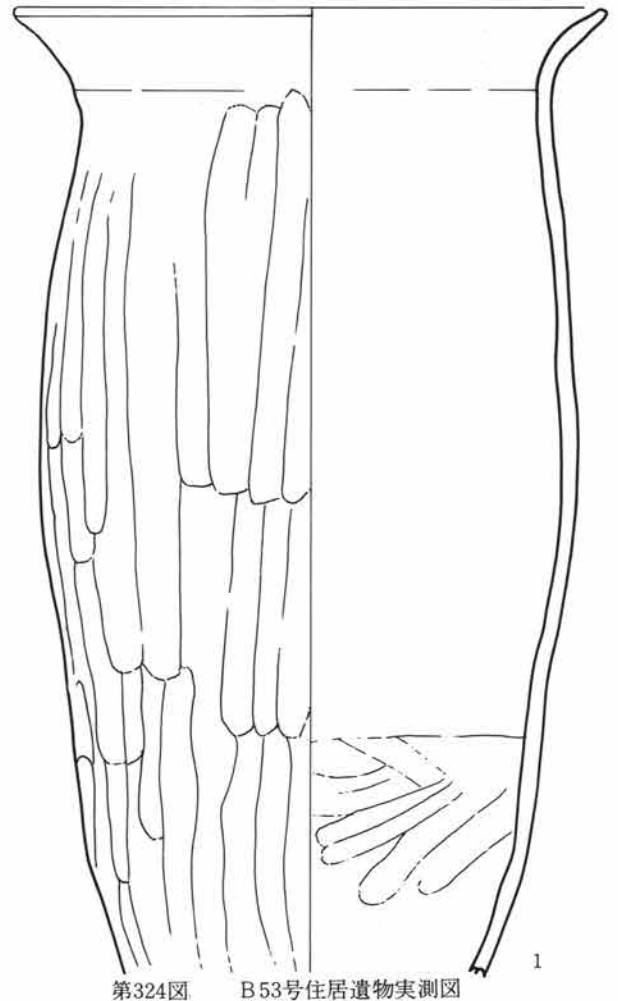
遺物 (図324、325-1~9)

長胴カメ、坏の組み合わせである。

長胴カメは極端に長い形で最大径を口縁部におく形である。3個あるうち、3が頸部のくびれが強く、胴部最大径とほぼ同じでやや古式に属している。

坏は全体としては体部の浅い口縁部との境の段や稜が弱い形である。その中には5のような有段のものもあるが多くは稜で画されたものが主流を占める。ただ、9

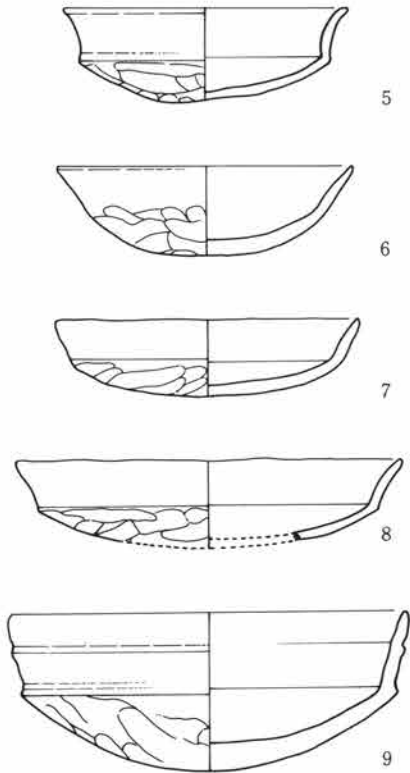
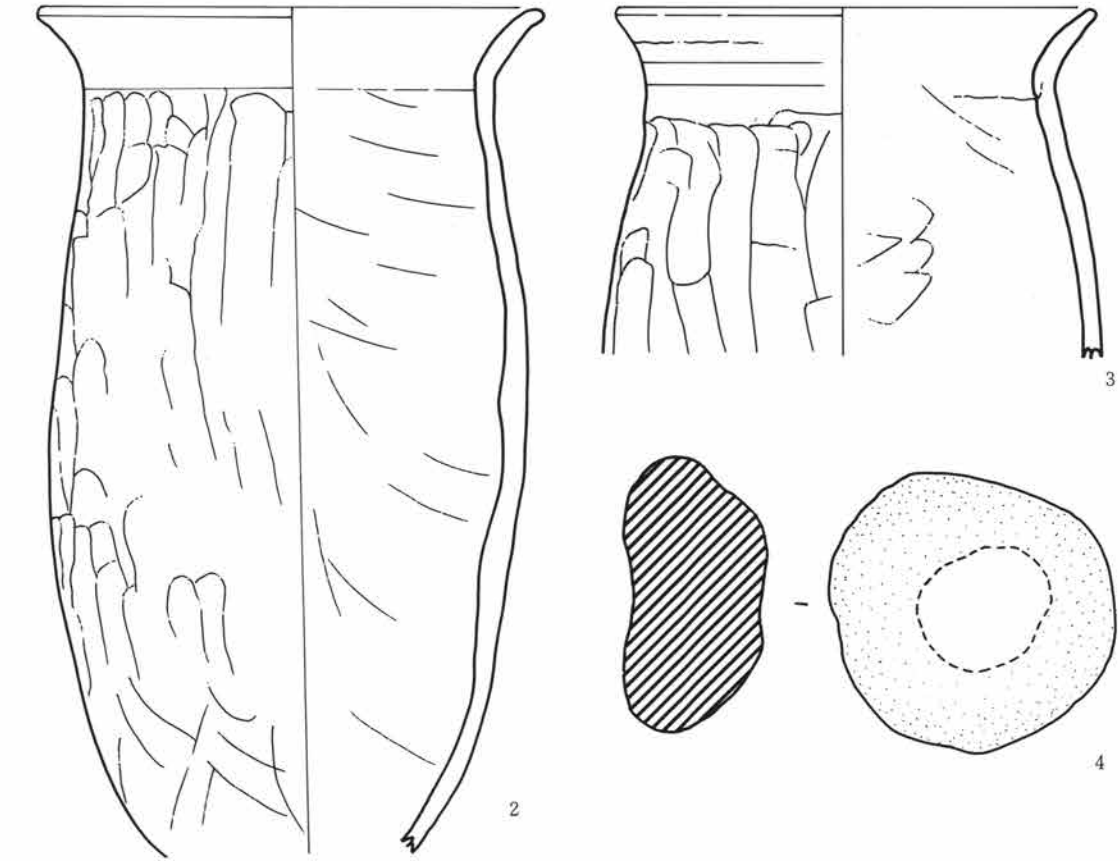
ローム面の掘りこみは25cm内外である。現状の柱穴で復原すると主柱穴は四隅にありその芯心距離は南北、東西3.2mずつである。更に東西方向の柱穴の間に壁上及び柱穴間に補助柱穴があり、この位置に棟が南北方向に走っていたとみられる。この棟に対して西壁北端の壁上にピットがあり、ここから



第324図

B53号住居遺物実測図

1



のように段を明瞭に残すもので体部も深いもののように古式をのこす大型のものもある。

そのほか、安山岩の中央をたたいたようなものが出土しているが、この機能、性格については不明である。

B-1号、2号掘立柱建物遺構

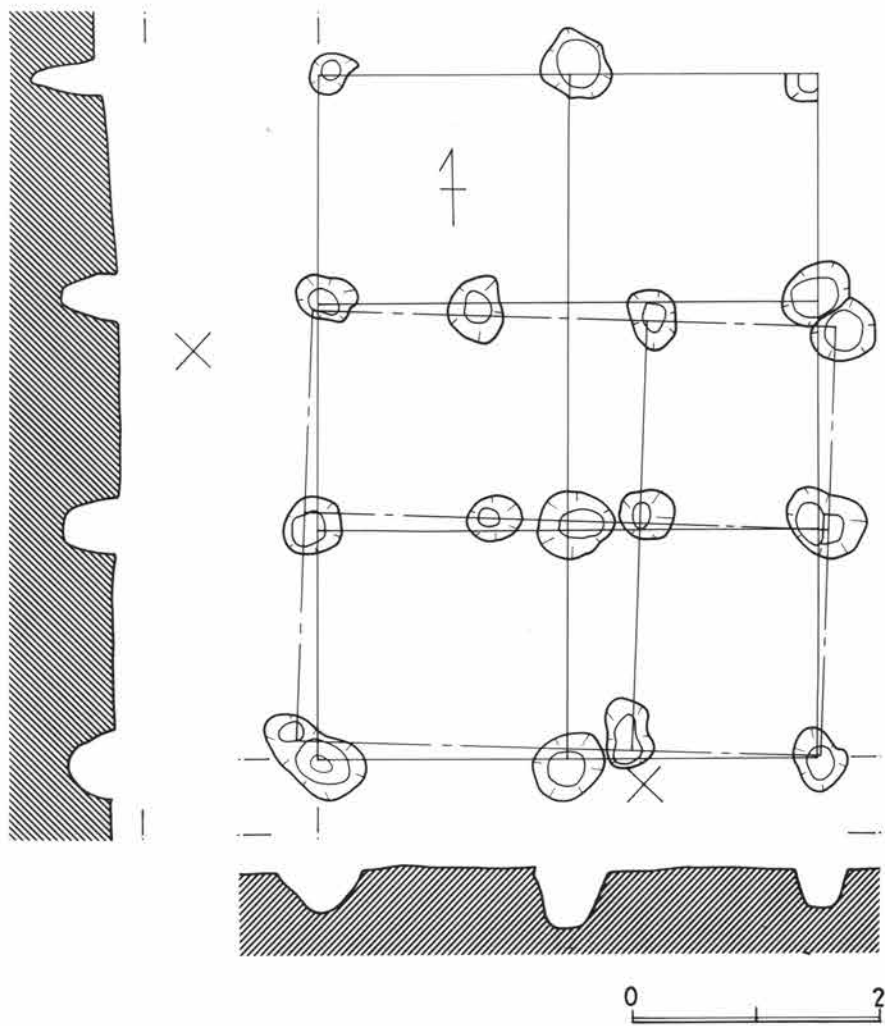
F-22区に発見された掘立柱建物遺構で2棟が重複して発見されたが共に総柱建物である。1号は長方形で3間×2間で桁行5.4m、梁行4.0mである。柱間は桁行1.8m、梁行2.0mである。

柱穴は径45~50cm、深さ40cmほどである。

また、2号は方形で3間×2間で桁行4.2m、梁行3.4mである。柱間は桁側で1.4m、梁側で1.7mである。柱穴はやや1号より小振りで径40cm 深さ30cmほどである。

両者の前後関係でみると3号が先行することが調査の所見で確認されている。

第325図 B53号住居遺物実測図



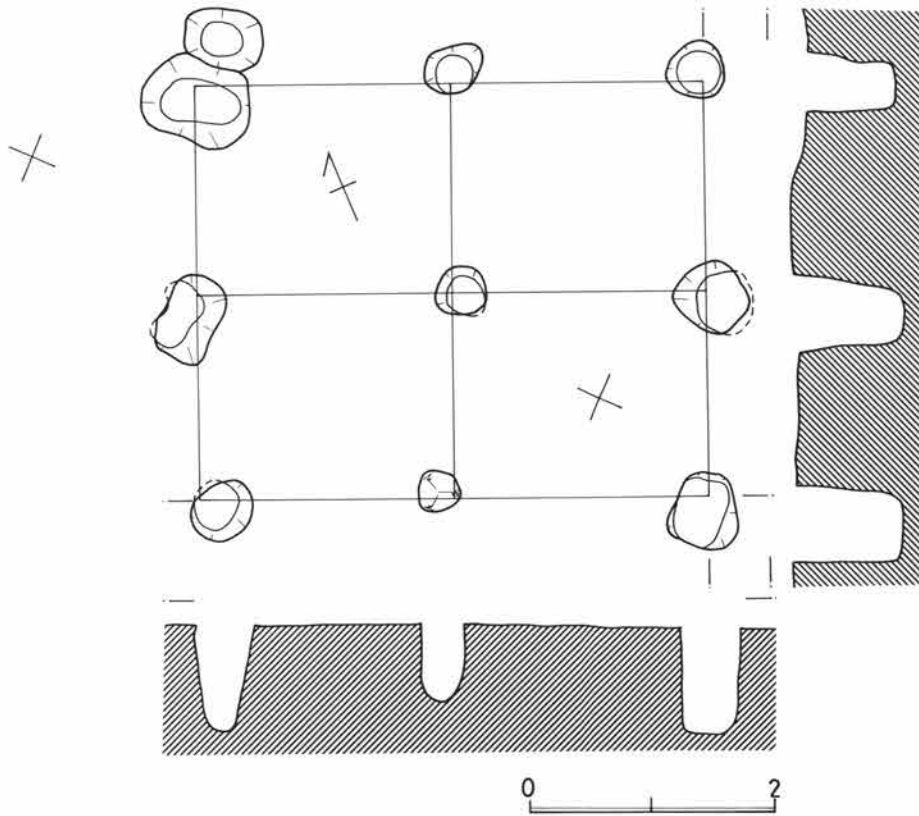
第326図 B区1・2号掘立柱建物遺構図

名称	棟走向	主軸方位	規模(m)		柱間寸法(m)		柱穴の形状	備考
			桁行	梁行	桁行	梁行		
1号	N-S	N-S	3間 5.40	2間 4.00	1.80-1.80-1.80	2.00-2.00	円形	総柱
2号	E-W	N-3°-E	3間 4.20	2間 3.40	1.40-1.40-1.40	1.60-1.80	円形	総柱
3号	N-S	N-20°-W	2間 4.15	2間 3.35	2.075-2.075	1.675-1.675	長円形・円形	総柱

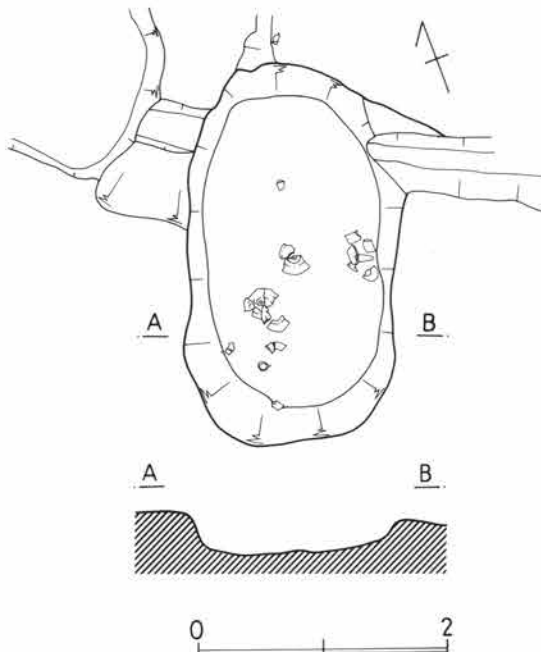
B-3号掘立柱建物遺構

G-28区に検出された掘立柱建物遺構である。桁行、梁間とも2間の総柱建物である。主軸方位がN-20°-W、桁行4.25m~4.20m、梁行3.35~3.40m、それぞれの柱間寸法は2.07m、1.67mである。柱穴の規模がまちまちで大型で90×60cmのものであるが、径50cmほどのものが一般的で深さは90~60cmである。

この3棟の内、1、2号は建て替えであることは、同じ柱穴を共有している点ではっきりしているが、その前後関係でみると磁北との関連でみると興味ぶかい。3号は1、2号とは方位を大きく異にすること、柱穴の様相などからみて異質で、それは時期的な差を表わしているものとみられる。調査時の所見からすれば、



第327図 B区3号掘立柱建物遺構図



第328図 B区M-L22ピット図

1、2号は真間期、3号は鬼高期のものとみられる。

B区M-L22ピット

M・L-22区に発見された長円形のピットである。長径3m、短径1.65mで深さ30cmほどの規模である。

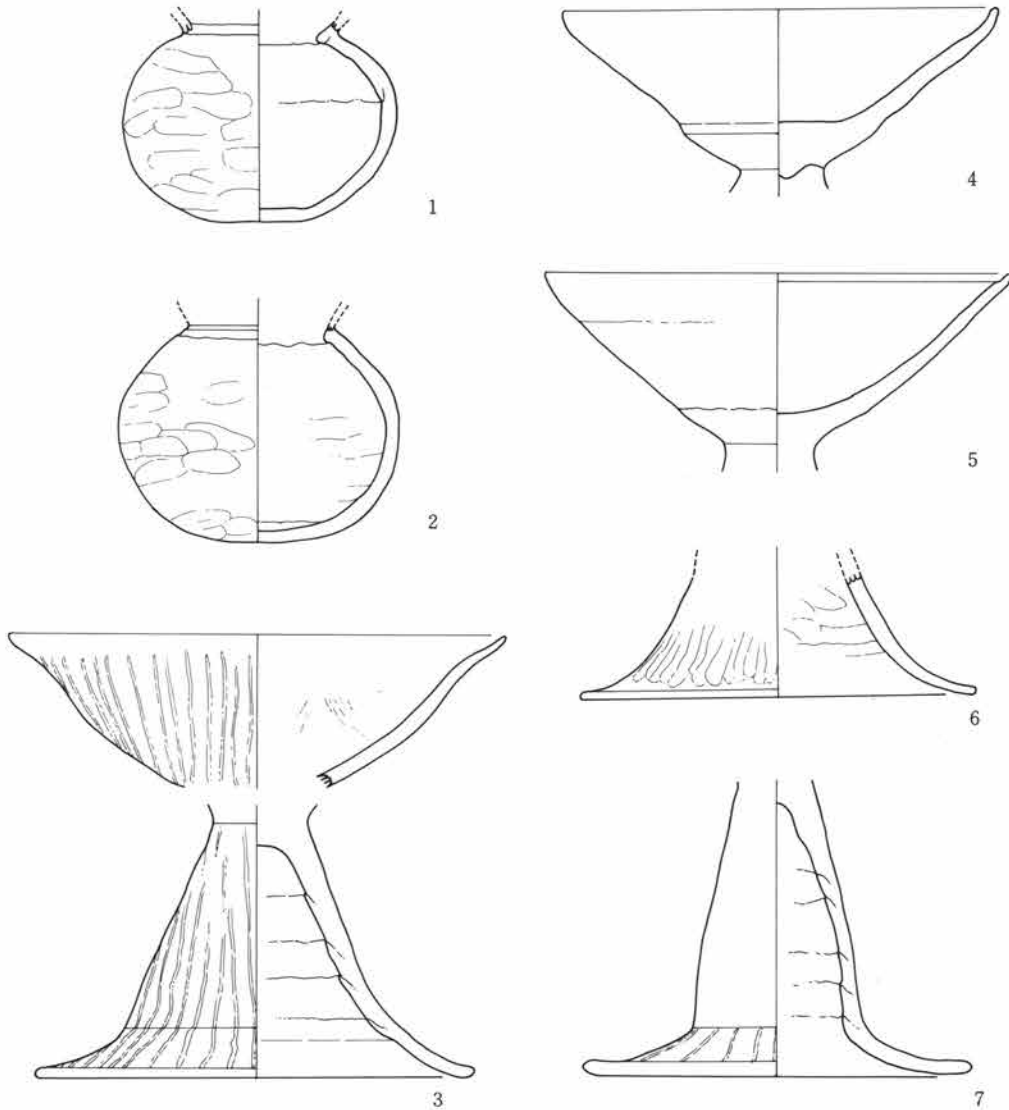
埋没土層は自然堆積の状態を示しているが、砂質の土層が確認されるところから水成堆積に遭って一挙に埋まった可能性が大きい。

遺物は埋没過程に合わせて塊底状に入りこんでいるが下層部分に集中して発見された。

時期的には本遺跡における居住が開始された時期の所産とみられるが、遺物が高坏、埴に限定されていることからすると、祭祀的な性格が大きい。祭祀または墓塚的なものが想定されるが、それを立証するに至っていない。

遺物 (図329-1~7)

埴、高坏の出土がみられるが、埴は口縁部を欠



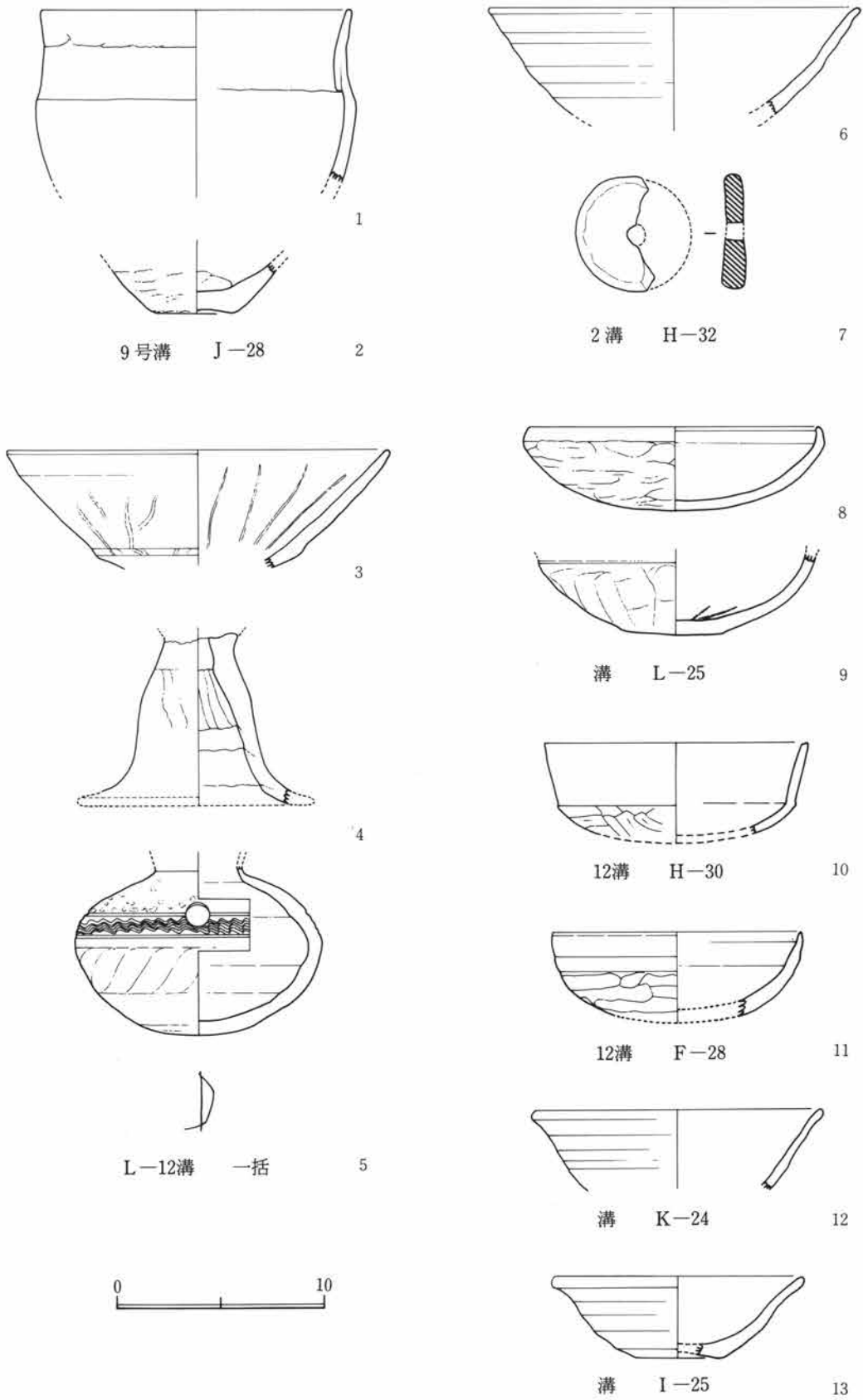
第329図 B区L-22・23ピット遺物実測図

いている。坩の体部はほぼ球形であるが1は2に比べやや扁球状である。それに伴って底部は前者が不明確な平底状、後者は丸底状である。口縁の接合部も1はやや巾が広く、2は小さい。おそらく、口縁部は前者が大きく広がる形で、後者は直に近く立つ形で、どちらかといえば前者が後者に先行する形とみられる。しかし、実質的には時期的に大きい差はないであろう。

高坏は坏部と比較すると底部で口縁部と分けられるか否かにより2つに分けられる。3は底部から口縁部に境目なしにスムーズに移行し、口縁部がやや弱く外開きする。端部は剣先状を呈している。

4と5の坏部は共通して底部と口縁の境に段または稜で画される。口縁は直線的に大きく広く。これも口縁端部は4でやや直立気味に立つ。

脚はラップ状に一旦直立気味に立ち、端部が急に開く。坏との接合は比較的小さく4のように「ヘソ」によるはめこみ式のものもある。整形はすべて器表面をヘラ研磨して晴文状の痕跡をのこしているものもある。また焼成火度も高度で、焼き上がりは堅緻である。



第330図 B区溝一括遺物実測図

第3節 陶磁器

緑釉陶器

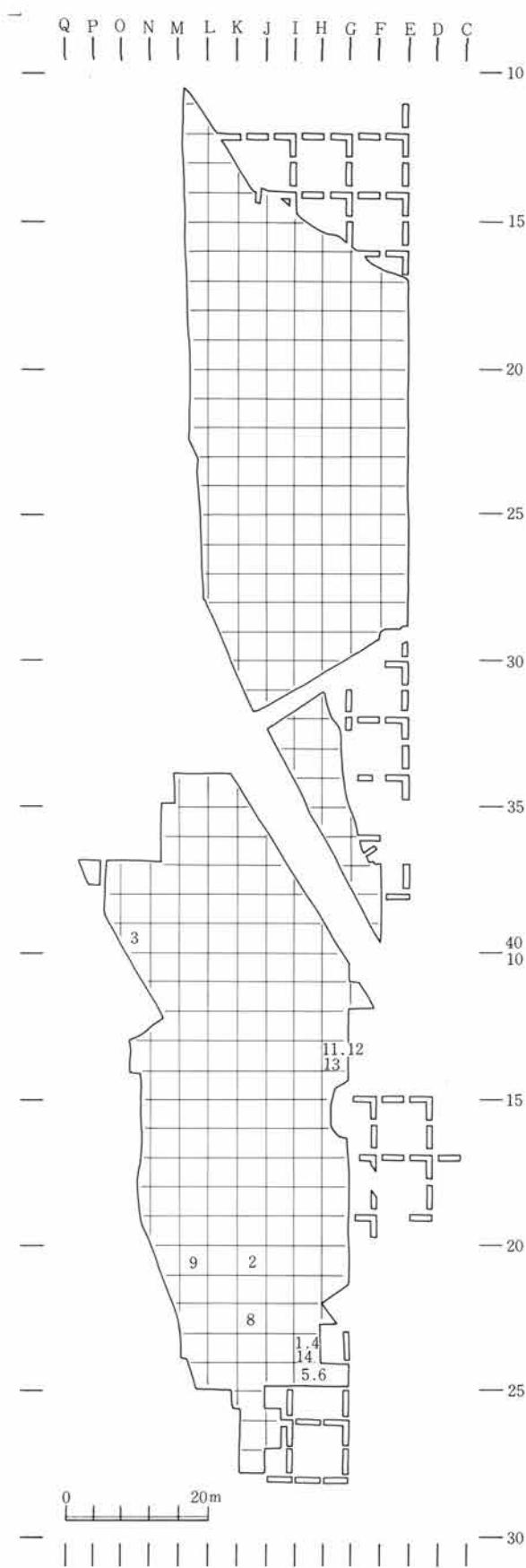
緑釉陶器の出土はB地区では皆無であったが、A地区では14点の出土があり、第332図は、そのすべてを掲示した。どれも遺構に直結せず遺構埋土～耕作土間の出土である。

出土の濃密は、A区G-13に3点、I-23に3点、H-24に2点、N-13に2点と集中をみる。遺構との関連性は、A区G-13の3点は、同一個体と考えられる胎土であるが、ばらばらに出土しており、旧台地を埋める黒色土中から出土し、関連しそうな遺構が周辺にない。H-23の3点も同一個体と考えられる胎土であるが、ばらばらに出土している。関連遺構は方形周溝遺構の埋土下方からの出土であり、近接して、国分期の竪穴住居が存在している。H-24の2点も、前者の方形周溝遺構から出土している。O-13の2点は相互別個体で、関連しそうな遺構は周辺に見当たらない。1グリット内で1片しか出土しなかった第332図-2、3、8、9のうち、周辺に関連しそうな遺構が存在する例は、第332図-3が国分期のM-12井戸に近接する。以上、出土傾向は明瞭な遺構を伴わないことに、特徴があるが、このことは、緑釉陶器の普及の初頭に集落形成が終息をむかえたため、出土の個体量が少なく、伴う遺構も、普及量の少なさゆえをもって遺構に共伴しなかったのではないだろうか。

緑釉陶器の年代観は特徴的な破片しか傍証性が得られないので図-9、13、14について触れる。第332図-9は稜碗であるので稜碗の出現する黒笹14号窯式以降の所産である。第332図-13は碗の見込部に直径2cmほどの退化的装飾円刻文があり折戸53号窯式に類す。第332図-14は単圈文と形骸化した花卉内蕊の刻文から黒笹90号窯式⁽¹⁾に類される。年代は黒笹14号窯式が9世紀後半、折戸53号窯式⁽¹⁾が10世紀後半、黒笹90号窯式⁽¹⁾が10世紀を前後する頃とされている。

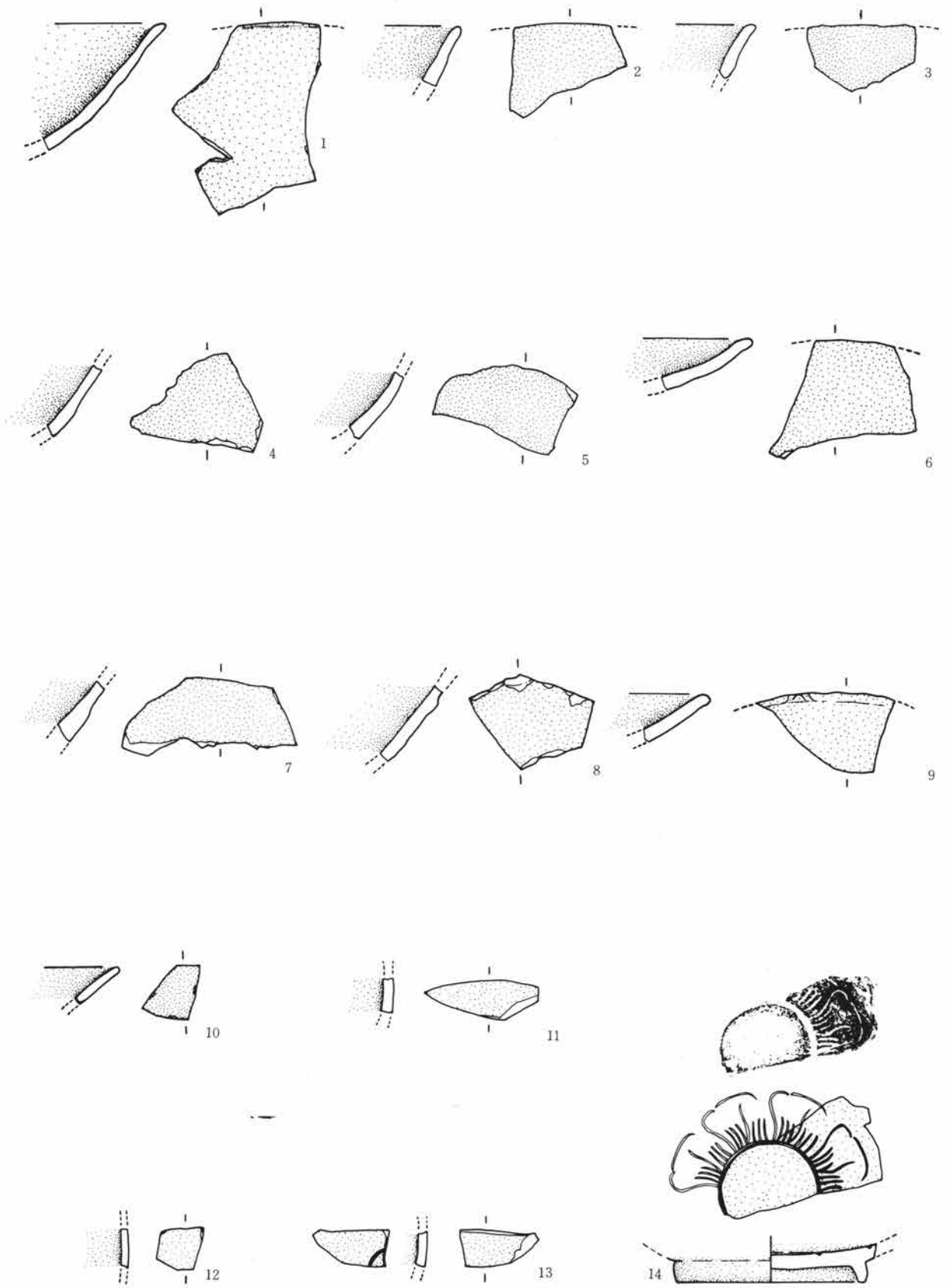
(1) 齊藤孝正 「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル211』1982

(2) 吉田恵二 「緑釉陶と灰釉との相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル211』1982



第331図 緑釉陶器出土位置図 1 : 1,000

第3節 陶磁器



第332図 緑釉陶器実測図 1 : 2

中世舶載陶・磁器

歌舞伎遺跡から約50点の中国陶・磁器の出土がある。それらのうち遺構に直結する資料はなく、遺構埋土から耕作土にかけて出土している。分布性は近世遺物を伴う近世溝から多く出土する傾向があり、それらを除くと、特異な分布現象は感じられなかった。出土陶・磁の大きさは細片であり、割れ口の摩耗した破片が多かった。

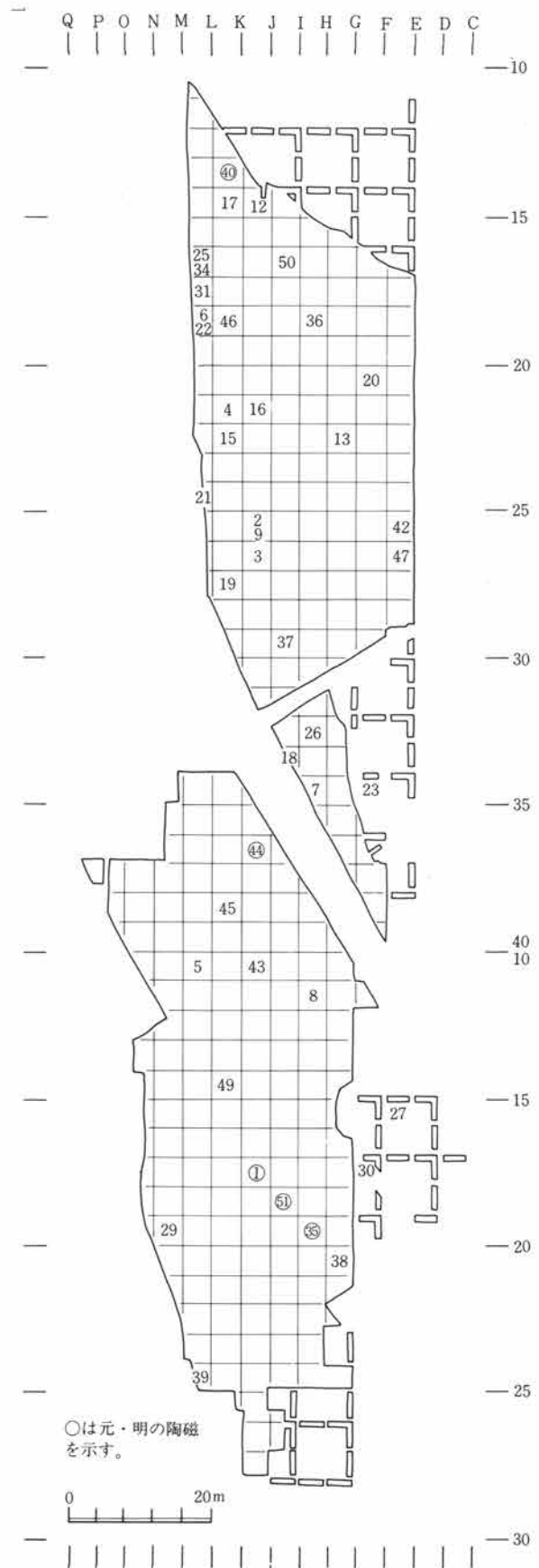
舶載陶・磁の内訳は青磁35、青白磁2、白磁4、黒釉陶器3、褐釉陶器2・青花1である。器種は、青磁では碗、鉢、盤があり、青白磁では梅瓶、器種不明、白磁では長頸の壺、小皿があり、黒釉では碗が、褐釉では壺がある。青花は皿である。各器種のうち最も多いのは碗で、続いて皿があり、盤、鉢などは個体数が少ない。

陶磁の年代観は、鎬手蓮弁文碗(第334図-4~13)や砧手の製品が多いため南宋~元代に磁器の主体が置かれる。明瞭な元代の製品は少なく、長頸の壺(第334図-1)がある。明代は天竜寺手の青磁(第335図-40)、白磁皿(第335図-44)、青花皿(第335図-51)などが存在する。

陶・磁の製作地は龍泉窯系の青磁が多く、同安窯系は見られず、景德鎮窯系(第334図-2・3)が少量あり、特記されるのは第335図-47の天目茶碗が建窯製とされることである。

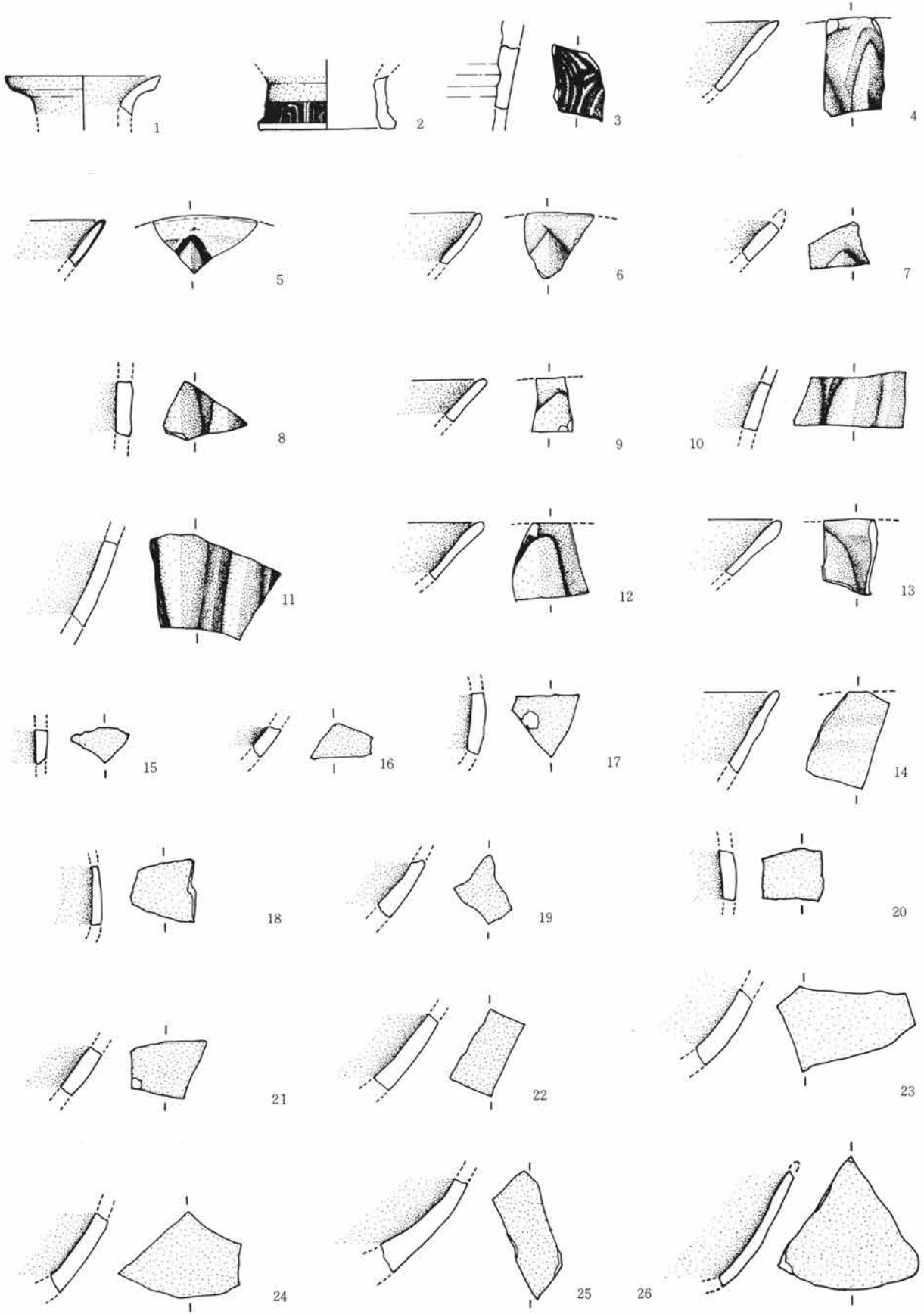
陶・磁の作調は、青磁では、くすんだ青色を呈するものが多く、全体的な作調は低い。出来のすぐれた製品は、第335図-32、33が施釉も厚く二重貫入を生じ、美しい砧手色を呈する。建窯製の天目碗は釉中の禾目のぎめが生じ、すぐれた出来である。

以上、舶載陶・磁に触れたが、当遺跡におけるその在り方は、不可解で、それらが生活に伴う所産なら、在地の陶器中世土師質土器をまじえ出土するはずであるが、在地製品は、希薄であった。約150m、西方の東京電力変電所遺跡からは、両者が共存してある。この陶・磁の存在理由については考察として土地利用の変遷の項でさらに検討する。

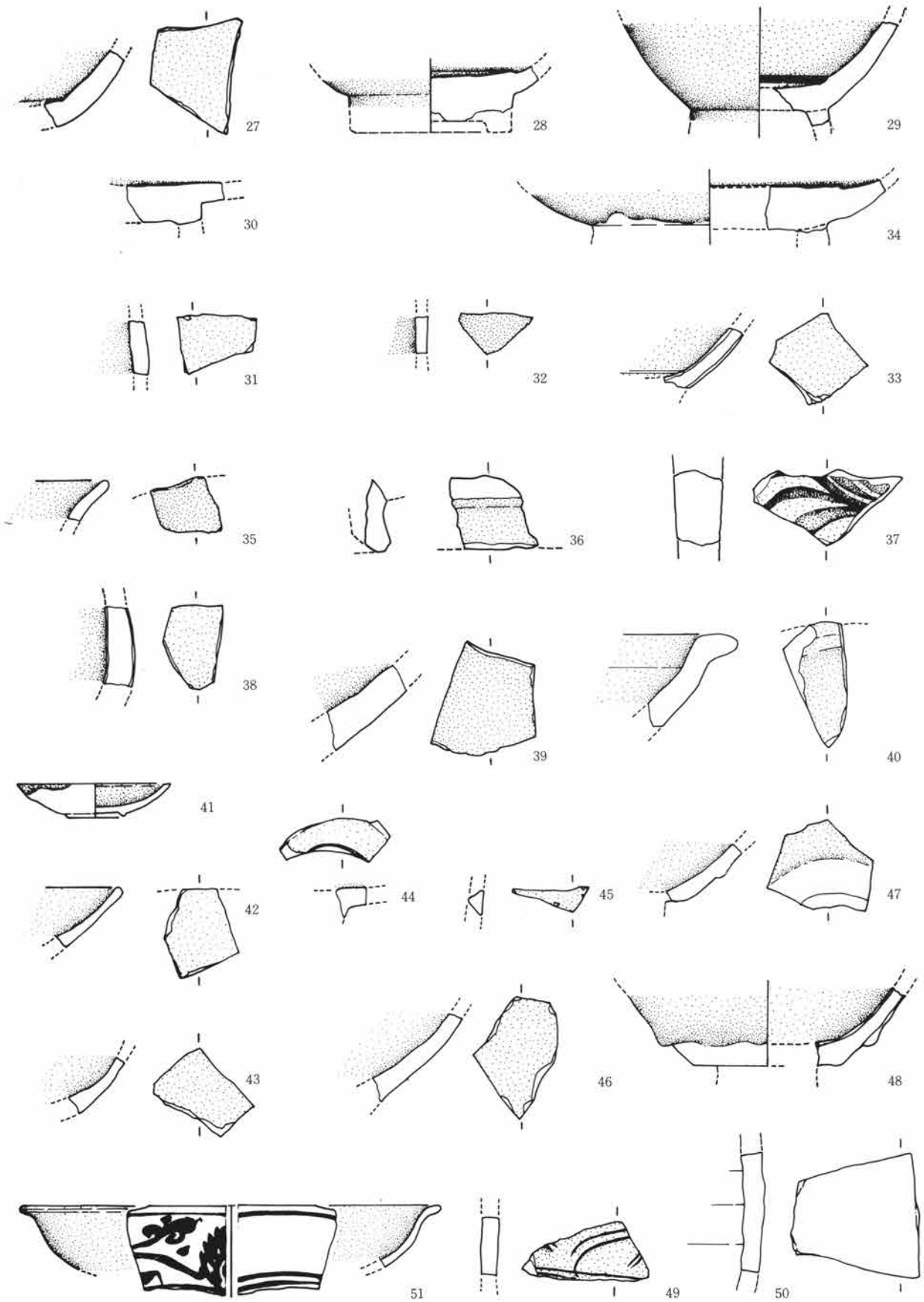


第333図 舶載陶・磁器類出土位置図 1 : 1,000

第3節 陶磁器



第334図 舶載陶・磁器類実測図 1:2



第335図 舶載陶・磁器類実測図 1:2

中世国産陶器

中国陶・磁の出土量に比べ、中世国産陶器の出土量は多くない。出土の傾向としては、近世遺物を伴う溝からいく分出土している。しかし遺構に直結する遺物類はない。分布性は散在的で、各破片の割れ口は著しく摩耗している。

陶器類は施釉陶器と焼締陶器に区別することができる。

① 施釉陶器

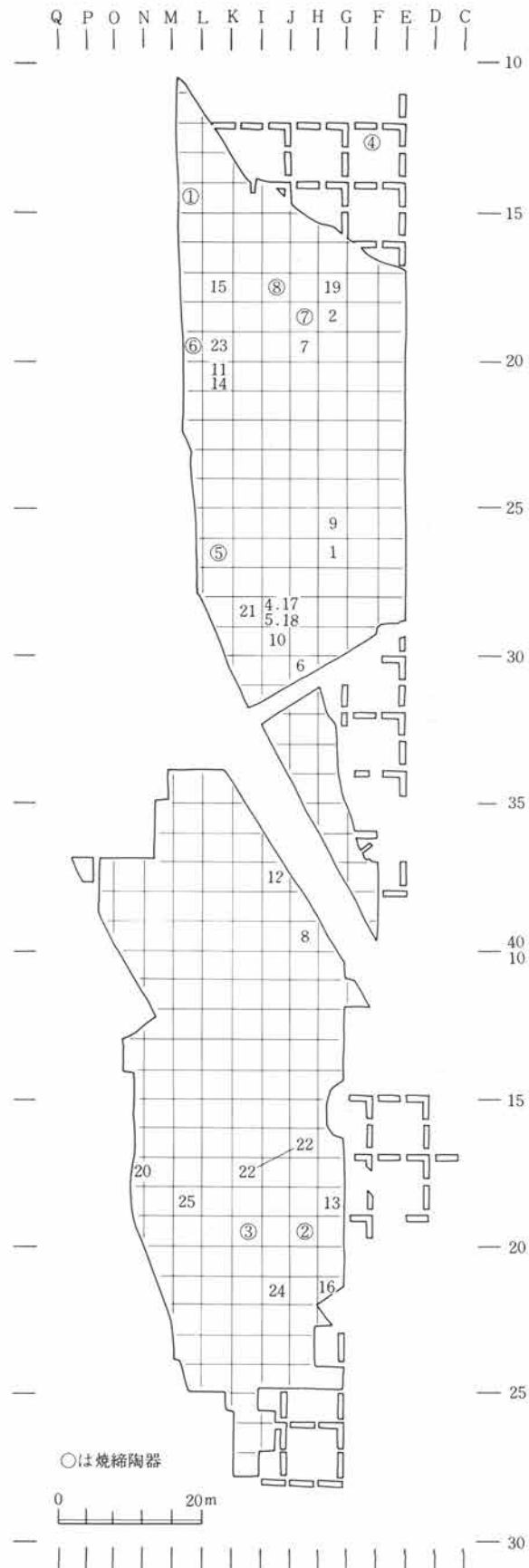
施釉陶器は灰釉、鉄釉があり、瀬戸焼、美濃焼を主体とする。

灰釉には瓶子(第337図-8)か梅瓶(第337図-9)、花瓶か水注(第337図-6)、盤(第337図20~25)、おろし皿(第337図10~13)があり、皿(第339図-14~19)がある。鉄釉は碗(第337図-1、2)、花瓶か水注(第341図-9)がある。器種揃を見ると、皿・おろし皿など日常的な種の中に瓶子・花瓶など特殊な器種が含まれる点は注意されよう。

年代観としては、瀬戸焼では第337図-8の瓶子が南北朝期で14世紀代に、第337図-9も水注だとすれば同期に置かれる。美濃焼では第337図-1の碗が大窯IV・V段階で15世紀末期に、第337図-18の端折皿が大窯II・III段階で16世紀中頃に、第338図-25の盤が施釉陶II・IV段階で15世紀末期に置かれる。

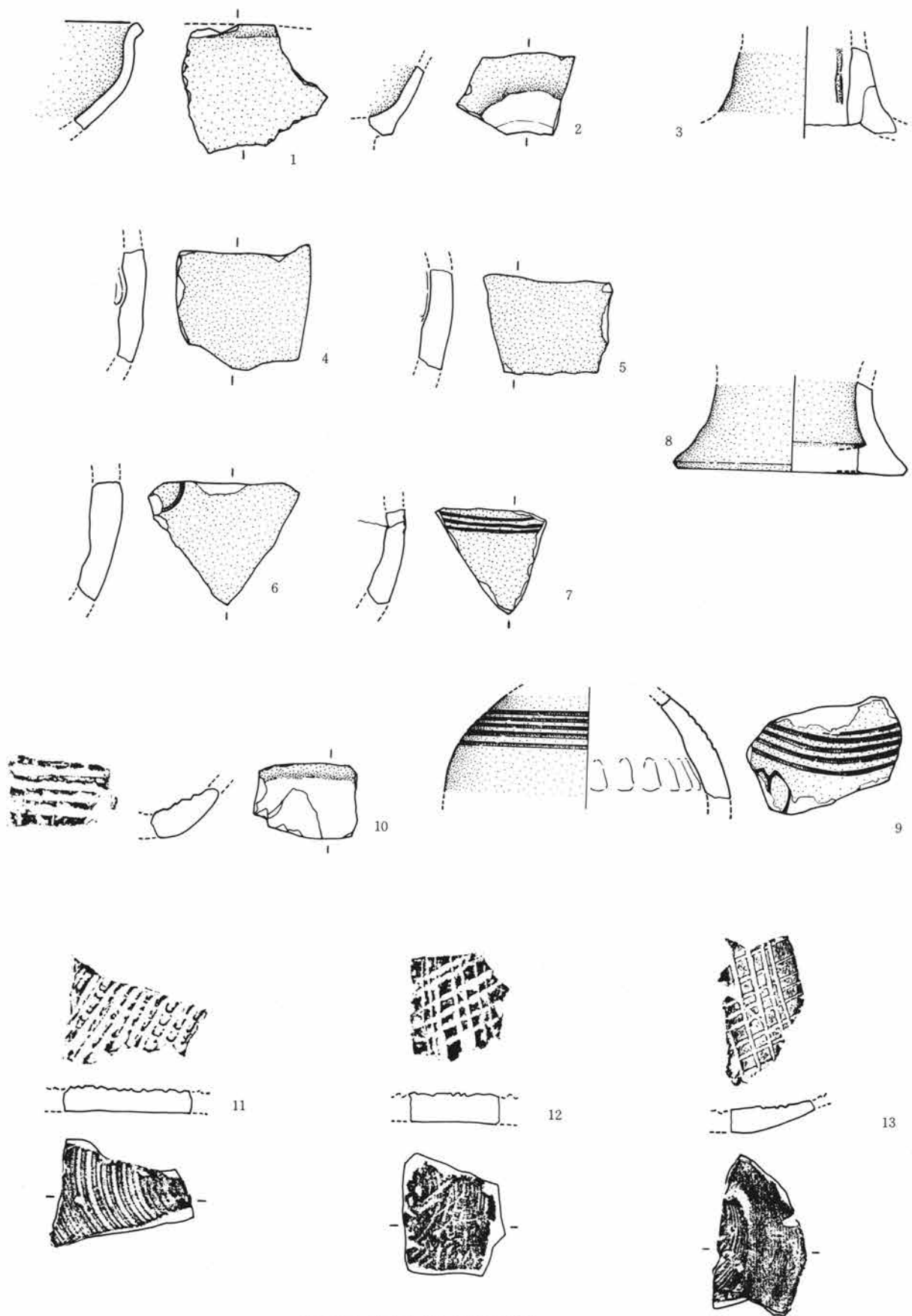
② 焼締陶器

焼締陶器は常滑焼、渥美焼が多く、わずかではあるが製作地不詳の製品がある。器種は、第339図-7の鉢を除くと、他は大甕あるいは甕である。第339図-1は、甕の小片を円盤状に二次加工したものである。年代観は特徴のある。第339図-8が常滑焼であるならIII期に置かれ、13世紀後半から、14世紀前半に相当する。



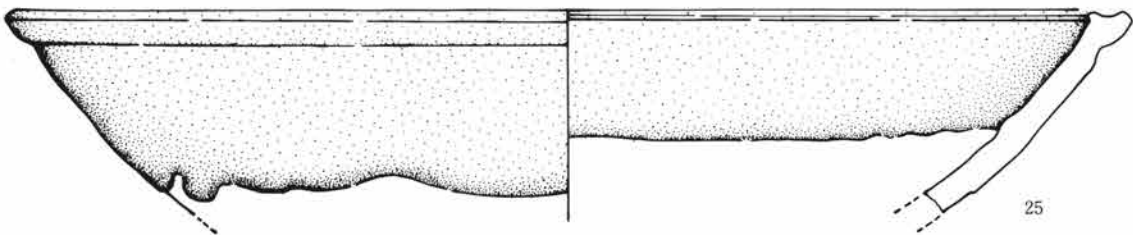
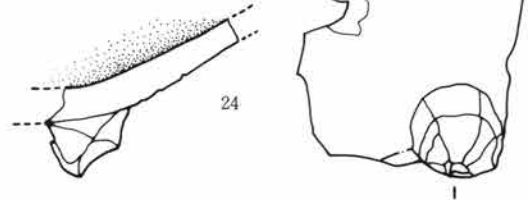
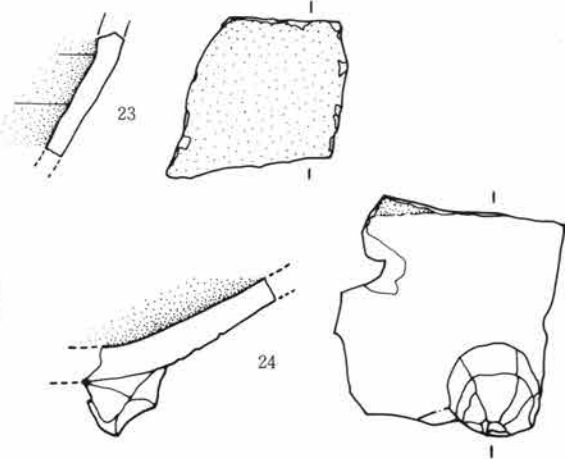
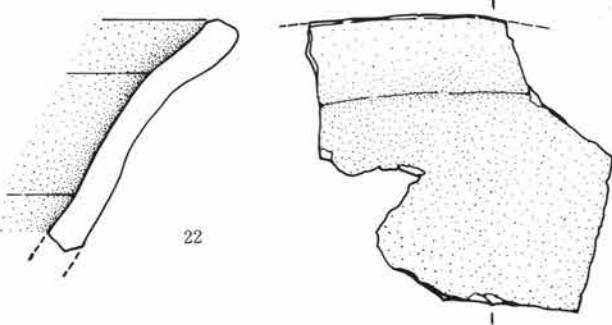
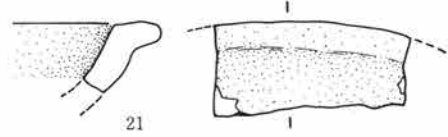
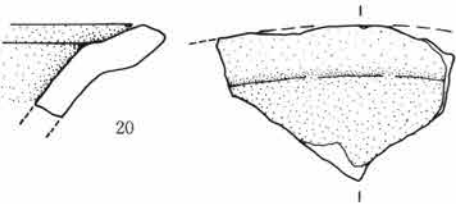
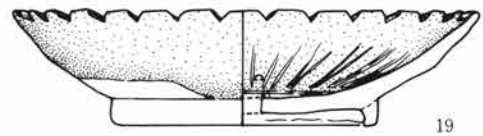
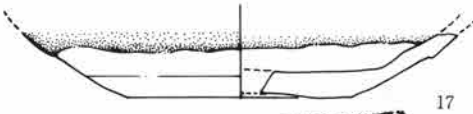
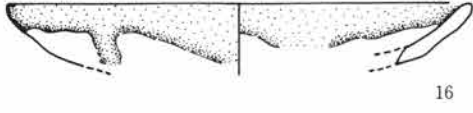
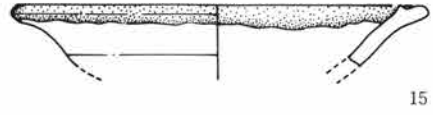
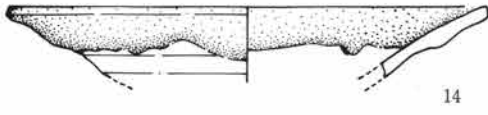
第336図 国産施釉陶器類出土位置図 1 : 1,000

(1) 檜崎彰一 「瀬戸」『世界陶磁全集 3 日本中世』1977
 (2) 檜崎彰一 「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』1980
 (3) 赤羽一郎 「常滑」『世界陶磁全集 3 日本中世』1977

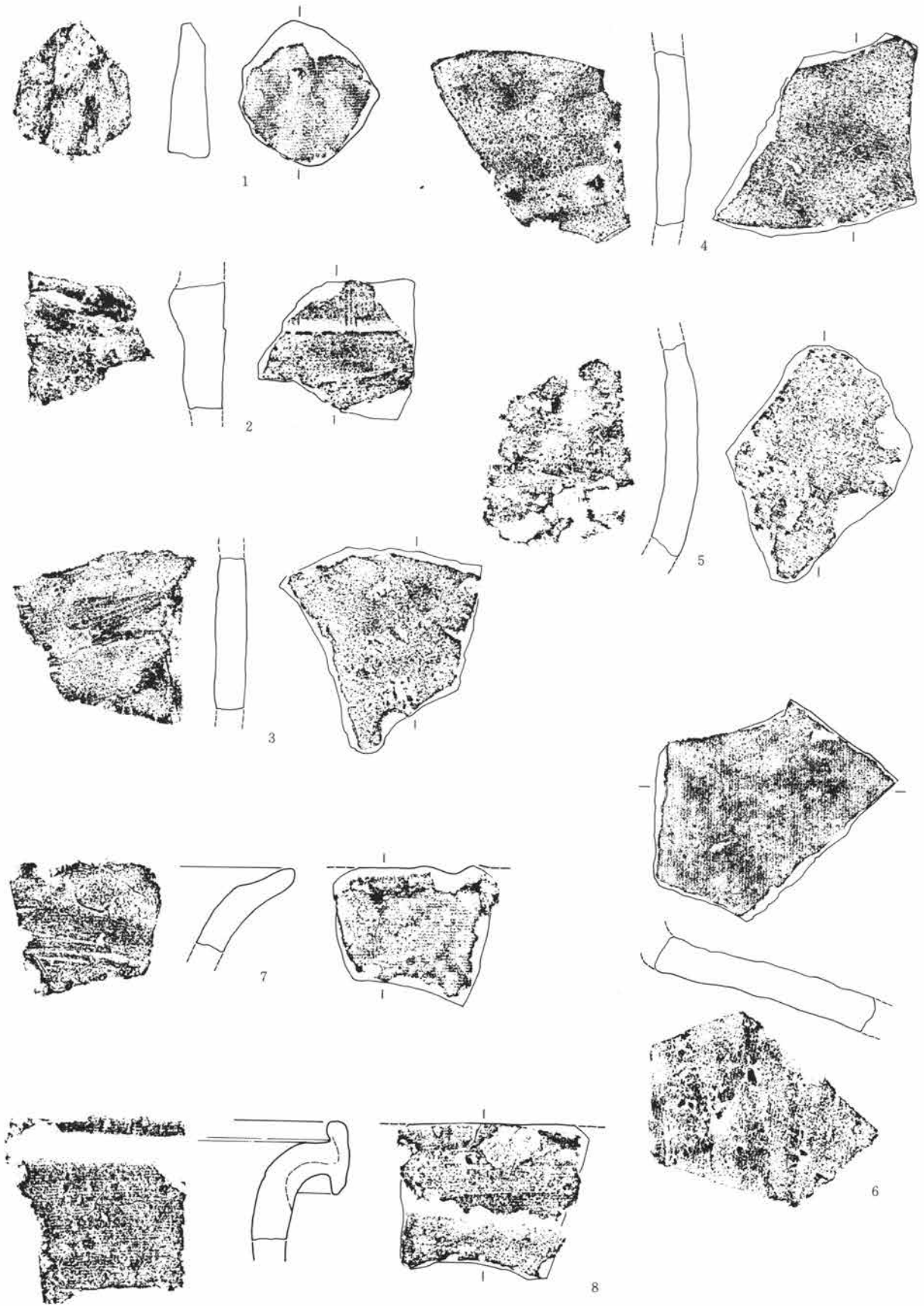


第337図 国産中世陶器類実測図 1 : 2

第3節 陶磁器



第338図 国産中世陶器類実測図 1 : 2



第339図 国産焼締陶器類実測図 1:2

近世陶・磁器

歌舞伎遺跡から近世住居に関連する遺構は認められなかったが国産の陶・磁器の出土は多く、整理用平箱二つを満たす量があった。破片の大きさは近世住宅跡から出土するような大形の破片は少なく、割れ口の摩耗した細片が多かった。このため近世陶・磁器が遺跡内に存在する原因は、生活による直接の廃棄ではなく、廃棄され二次的におよんだ所産と考えられた。

近世陶器、磁器の両者の割合は器種・器形、釉調などの陶・磁器要素から、時代観を得て通観すると、江戸時代前半代は磁器の占める割合が少なく、それに代り陶器類が主体をなし、江戸時代の後半は磁器類が増加し、陶器類が減少する傾向にある。この在り方に不自然さはないので江戸時代全般を通じ、ある程度の種揃があるものと見なして以降、検討を加えたい。

磁器類で比較的古い段階に置かれるのは、くらわんか手⁽¹⁾と呼ばれる庶民磁器類(第340図-2)の存在が顕著で、磁器生産が一般大衆に向け量産されはじめた時期が江戸時代中期、18世紀代であったことが伺える。続いて、この中期の一群とそれ以降の磁器皿の見込部にこんやく判と称される染付花文が施された例を多く見ることができる。こんやく判花文を施した皿類を焼造した窯跡は、有田地域で2~3例⁽²⁾であることを思えば、こうした庶民磁器の主体が伊万里焼であったとは考えがたく、波佐見焼、砥部焼などの地方磁器窯の製品が大量に供給されていたと考えられるのである。要するに、当地域における、江戸時代庶民磁器の主体は伊万里焼ではなく、地方窯による磁器であったと考えられるのである。

初期伊万里と断言できる製品はないが、判断に苦しむ製品がある。第340図-1・6である。第340図-1は青磁碗であるが、釉中の気泡が大粒で荒く乳濁し、釉と素地との境目に鉄足が生じ、器型も考慮すると江戸時代前期のやや古い段階の製品と考えられる。また、第340図-6は鶴首の徳利片であるが、器型上、肩部の大きくふくらむ形と考えられるため、17世紀後半から18世紀にかけての所産となろう。このように量産磁器の主体は江戸時代中頃以降であったが、それに先だって、わずかながら磁器が使用されている。

江戸時代前半の陶器類は、美濃焼、瀬戸焼が多く、第340図-18・19などの小皿類が多用されており、中世終末からの商圈を受継いだかのように存在する。この段階で注意されるのは第340図-5が唐津焼と考えられ、このほか楡描文を特徴とする小鹿田・上野焼などの朝鮮系の九州産陶器類も若干、出土している。

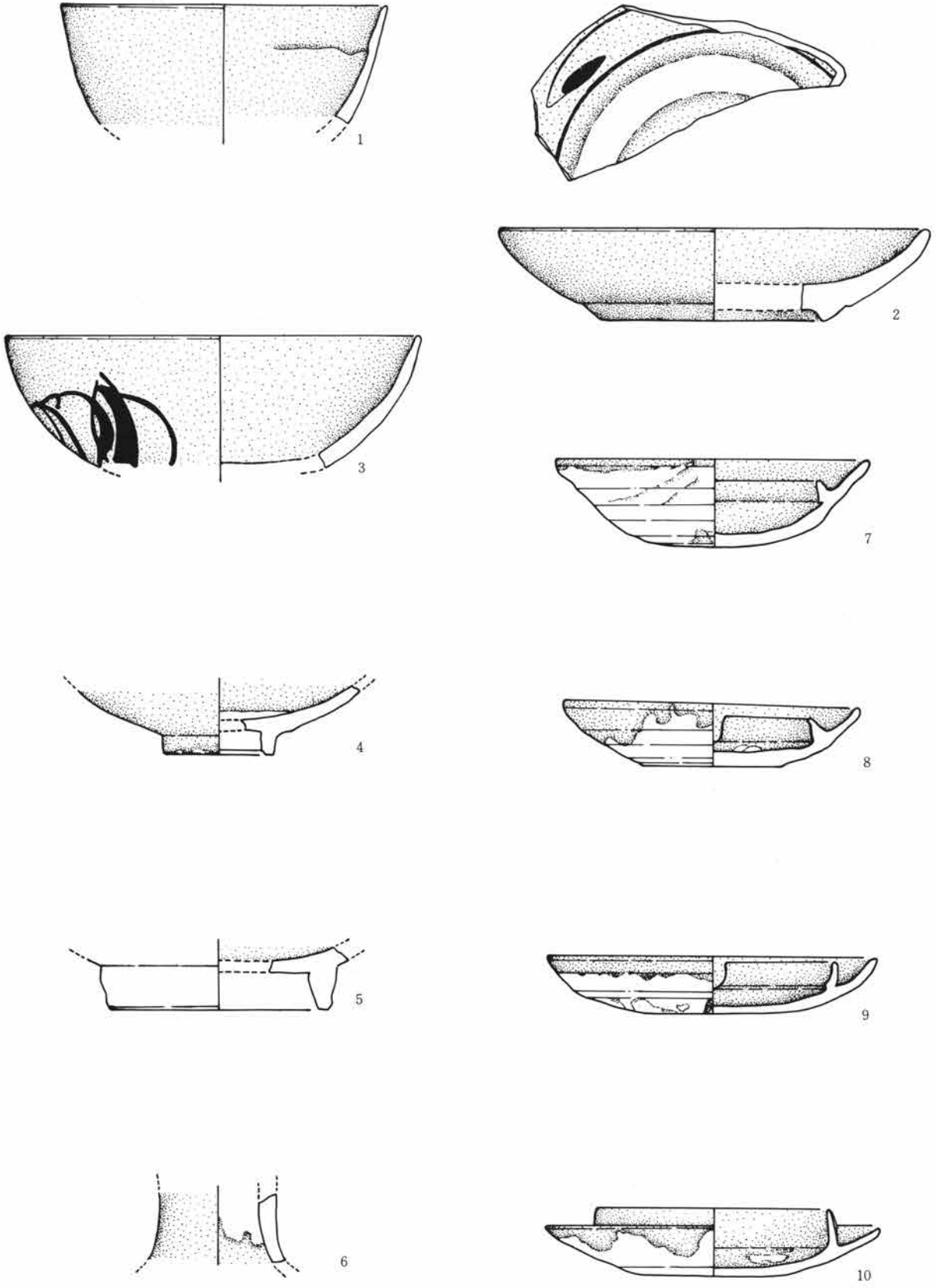
江戸時代後半代は、顕著に磁器類の普及を認めることができる。中でも、中期以降のくらわんか手の皿類は系統的に以降に引継れるが、明治時代直前に至って減少傾向をきたす。精選呉須を用いた染付が少ないのである。このことは、明治時代中期以降に印判手とペロ藍を用いた皿類が多く見られるのに対し、ペロ藍を用いたくらわんか手皿が、ほとんど見られないことから、幕末から明治時代前期にかけて、当地域にそれらが供給された量は少なかったと考えることができあるいは、生産量が少なかったとも思える。

中国の明末から清初の高染付、呉須手などの舶載磁器の出土はまったくなかったが、第340図-4に掲げた白磁皿は、見込部が蛇目で、生掛施釉されているので、その頃の舶載磁器であるかもしれない。

註

(1) 狭義のくらわんか手は、見込部に釉の削り落しによる蛇目(重ね焼のため)のある碗・皿をさして呼ばれているが、広義では粗製の庶民磁器全般をさしている。ここでは広義の意である。

(2) 永竹威 『伊万里』陶磁大系第19巻 1973



第340図 国産陶・磁器類実測図 1 : 2

歌舞伎遺跡竪穴住居一覧

A区

区	住居No.	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
A	1	長方形 2.8×4.8	N-9.5°-W	東壁南より	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、坏、土鍾、紡 鍾車	2より新しい	III期-後
	2	長方形 9.8×?	N-11°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		長甕、坏	1より古い	III期
	3	方形未完掘	N-37°-E	北壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、甌、小形広口 甕、壺、高坏、埴		II期-末
	4	方形未完掘	N-18.5°-W	?	?		壺、甕、高坏、坏		III期-前
	5	方形 5.4×5.2	N-6°-W	西壁近く		貯蔵穴	壺、甕、小形甕、 埴、高坏		I期-前
	6	方形 3.9×4.0	N-21°-E	東壁中央	地山削出		長甕、坏		III期-前
	7	方形 3.4以上× 2.2以上	N-14°-E					8より新しい	
	8	方形 4.6×2.9 以上	N-23°-W	東壁		貯蔵穴	甕	9号溝が切る	III期-前
	9	長方形 4.7×5.6	N-9.5°-E	北壁東より	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、小形甕、甌、 坏		II期-後
	10	長方形 4.8×4.3	N-26°-E	北壁中央	粘土 住居内張り出し		短頸壺、高坏、坏、 石製模造品		III期-前
	11	方形 3.6×3.6	N-22°-W	炉南半中央	?	貯蔵穴	壺、甕、埴、小形 甕、高坏	14より古い	I期-前
	12	方形 4.6×4.5	N-45°-E	東壁中央?		貯蔵穴	甕、坏、埴		II期-末
	13	方形 5.0×4.9	N-26°-E	?	?	貯蔵穴	甌		III期-前
	14	方形 5.4×5.1	N-48°-W	東壁中央	?	貯蔵穴	甕、甌、高坏、小 形甕、坏、鉢	15より古い	III期-前
	15	隅丸長方形 3.4×2.7	N-38°-E	東壁中央	粘土 壁外張り出し		甌、高坏、坏	14より新しい	V期-前
	16	方形 3.4×3.8	N-25°-W	北壁東より	粘土 住居張り出し		甕、小形甕、坏、 盤		IV期-末
	17	方形 5.4×5.5	N-20°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し		長甕、甌、坏	19より新しい	III期-後
	18	方形 ?×5.8	N-30°-E	南側柱穴間 ?	?		甕、埴、勾玉、高 坏、石製品	19より古い 65より古い	I期-後
	19	方形 7.5×6.8	N-6°-W	?	?		甕、坏、砥石	17より古い 18より新しい	II期-後
	20	方形 未完掘		?	?		坏	21より古い	II期-前
	21	隅丸方形 未完掘					坏	20より新しい	IV期-後
	22	隅丸方形 3.5×2.7 以上	N-35°-W	?	?		脚付甕		VI期-後
	23	隅丸方形 4.0×4.9	N-40°-W	北壁東より	粘土 住居内張り出し		甕、坏	24、25より新しい	V期-前

第II章 遺構と遺物

区	住居No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
	24	隅丸方形 2.6以上× 4.3	N-29°-W	?	?		坏、手捏祭祀土器	23より古く、 25より新しい	III期-前後
	25	隅丸方形 6.1×6.5	N-34°-E	北壁東より	粘土 住居内張り出し		甕、高坏、埴、小形甕、手捏祭祀土器	23、24より古い	I期-
	26	隅丸方形 2.8×3.0	N-42°-E	東壁北より	粘土 住居内張り出し		坏、甕、小形甕、土鍾		V期-前
	27	隅丸長方形 3.0×4.4	N-17.5°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、高坏、坏	25より新しい	V期-前
	28	隅丸長方形 5.3×4.3	N-42.5°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し		須恵坏、高台付埴、脚付甕	29、30より新しい	VII期-前
	29	隅丸長方形 6.1×6.0	N-33°-W	不明	不明		甕、坏	28、30より古い	V期-前
	30	方形 3.2×3.1	N-25°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、坏	28より古い	III期-前
	31	隅丸長方形 4.6×3.2	N-45°-E	東壁中央?	粘土	貯蔵穴?	甕、高坏、坏	32より古い	II期-末
	32	方形 3.4以上× 4.2以上	N-16°-E	東壁	粘土 住居内張り出し		甕、坏(K-10ピット、高台付皿)	L-12ピットより古い	III期-後
	33	方形 4.6以上× 3.0以上	N-18°-E	北壁東より		貯蔵穴	甕、把手付甗、坏		II期-後
	34	方形 5.4×5.7	N-38°-E	?	?		壺、高坏、石製模造品、小形甕、埴	1号溝が切る	I期-前
	35	長方形 6.0×6.0		炉?	?		埴、壺、高坏、砥石、(上層・坏)	33より古い	I期-前 (IV期-後)
	36	隅丸方形 3.1×4.1	N-13°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴?	甕、坏	25より新しい	VI期-末
	37	隅丸方形 2.8×2.5	N——S'	東壁中央	粘土 住居外張り出し		ナシ		IV期-末
	38	隅丸方形 3.4×4.5	N-15°-W	北壁東より	粘土 住居内張り出し		甕、坏、土鍾		V期-前
	39	2.4以上× 2.6	N-38°-W	北壁	粘土 住居内張り出し		ナシ		
	40	隅丸方形 2.6×3.2	N-12°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、坏	41より新しい	V期-前
	41	方形 7.0×6.6	N-18°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、鉢、小形甕、坏	40より古い 42より新しい	III期-後
	42	隅丸長方形 1.8以上× 3.6	N-6.5°-W		粘土		甕、坏、高坏	41より古い	I期-前
	43	隅丸方形 4.7×5.3	N-18°-E	?	?		甕、甗、坏		III期-前
	44	方形 4.0以上× 5.0以上	N-39°-W	?	?		ナシ	43より古い	II期?
	45	隅丸長方形 3.1×4.6	N-43.5°-W	北壁中央	粘土 住居外張り出し		ナシ		III期以降

区	住居 No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他 施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
A	46	不詳 3.1以上× 2.3以上	N-26°-E	?	?		ナシ		
	47	隅丸長方形 3.1×2.7	N-24°-W	東壁中央	粘土 住居外張り出し		坏、石(角閃石安 山岩使用痕あり)	48より古い	V期一前
	48	隅丸長方形 3.4×2.4 以上	N-30°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		長甕、甌、坏	47より新しい	V期一前
	49	方形 6.6×6.6	N-34°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	長甕、小形甕、坏、 短頸壺、石	6号溝が切る 50より古い	III期一前
	50	方形 7.2×6.8	N-38°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、高坏、坏、須 恵坏	49より新しい	III期一後
	51	隅丸方形 2.3以上× 2.2	N-35°-W	東壁			ナシ	1号溝が切る	不明
	52	方形 3.9以上× 4.4	N-33°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、小形甕、甌、 高坏、坏	53より古い	II期一末
	53	長方形 5.7×4.9	N-26°-W	?	?		甕、甌、坏	52より新しい	III期一前
	54	方形 4.2以上× 4.4以上	N-24°-E	?	?		ナシ		不明
	55	隅丸長方形 3.3×2.4	N-35°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	短頸甕、鉢、坏、 高坏		III期一前
	56	方形 3.2×3.3	N-42°-E	?	?		ナシ		不明
	57	方形 8.8×8.4	N-29°-E	?	?		壺、甕、長甕、甌、高 坏、坏、石(角閃石 安山岩)	55、56、1号溝が 切る	III期一前
	58	長方形 2.7×4.0	N-38°-E	北壁東より	粘土 住居内張り出し		ナシ	1号溝が切る	不明
	59	方形 2.2以上× 3.2	N-15.5°-E	?	?		石		
	60	方形 3.2×4.3	N-20°-W	西壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、甌、坏、コッ プ型土器、支脚	17号溝が切る	II期一前
	61	隅丸方形 2.8×4.0 以上	N-39°-W	北壁中央	壁外張り出し		甕		V期一前
	62	隅丸長方形 3.4以上× 2.9以上	N-40°-E	?	?		ナシ		V期一前
	63	方形未完掘					ナシ		不明
	64	未完掘部分					ナシ		不明
	65	隅丸方形 4.9×5.0	N-20°	東壁中央	?	貯蔵穴	甕、鉢、坏	1号溝が切る	III期一前
	66	方形未完掘	N-23°-E	?	?		高台付碗、土鍾		VII期一後
	67	方形 2.6×3.8	N-30°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、甌、坏、支脚		IV期一末
	68	方形未完掘		?	?		ナシ		V期

第II章 遺構と遺物

区	住居 No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他 施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
A	69	方形未完掘	N-17.5°-E	?	?		甕又は甗、甕	68に先行する	IV期-末
	70	隅丸長方形 4.8×3.2	N-5.5°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		坏、須恵坏		VI期-前
	71	方形 4.6以上× 7.0	N-42°-E	北壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、甗、高坏、坏、 須恵高坏	70号に先行する	III期-前
	72	方形 7.4×7.6	N-44°-W	粘土 住居内張り出し			長甕、坏	74より新しい	V期-前
	73	方形 6.8×6.4	N-22°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し		坏	72号に先行する	V期-前
	74	長方形 5.2×3.0	N-40°-W	?	?		蓋	75、76に先行	V期-後
	75	方形 6.7×7.6	N-43.5°-E	?	?	貯蔵穴	甕、小型甕、須恵 短頸壺		III期-前
	76	隅丸方形 6.5×7.4	N-16.5°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し		長甕、鉢、坏、砥 石、蓋	75号に先行	V期-前
	77	方形 6.8×6.5	N-18.5°-W	?	?		甗、坏	79より新しい	V期-前
	78	隅丸長方 2.8×4.2	N-3.5°-W	東壁中央	粘土 住居外造り出し		ナシ	79より新しい	V期
	79	方形 7.4×7.2	N-38°-E	北壁東より	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、甗、坏	77より古い 78より古い 80より古い	II期-後
	80	方形 4.6以上× 3.8以上	N-1.5°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、高坏、坏、鉢	79より新しい 2、3号溝が切る	III期-前
	81	方形	N-2°-W	?	?		甕		VI期-後
	82	方形 6.1×6.1	N-39°-W	東壁中央	粘土 住居張り出し	柱穴4	坏	81より古い 1号溝が切る	III期-前
	83	隅丸長方形 3.4×4.6	N-28.5°-W	東壁中央	粘土、住居内外 張り出し	貯蔵穴	甕、甗、坏、石	84、85より新しい	V期-前
	84	長方形 3.0以上× 4.5	N-42°-E	?	?		ナシ		?
	85	方形 7.4×6.7	N-46°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、高坏、坏、須 恵坏、鉢	83より古い	III期-後
	86	方形 6.7× 5.0以上	N-44.5°-E	北壁中央	?		甕、坏、鉢、紡錘 車	83より古い	III期-後
	87	隅丸長方 2.5×4.5	N-9°-E	北壁東より	粘土 住居内張り出し		甕、坏	81より古い	IV期-前
	88	方形 5.6×5.8	N-33°-E	北壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、甗、支柱、坏、 鉢	89より新しい	III期-前
	89	方形 6.5×6.2	N-3.5°-W	北壁東より	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、坏、支柱	88より古い	II期-末
	90	方形 4.0以上× 4.6	N-36°-W	?	?			91より新しい	VII期
	91	方形 5.8× 4.0以上	N-26°-W	?	?	貯蔵穴	甕、坏	90より古い	II期-後

歌舞伎遺跡竪穴住居一覧

区	住居No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
A	92	方形 2.2以上× 3.5	N-35°-E	?	?	貯蔵穴	坏、支脚	5号溝が切る	III期一後
	93	未完掘 方形 5.6×4.9	N-40.5°-W	粘土 住居内張り出し			甕、坏、鉢		III期一後
	94	方形 5.1×4.8	N-39°-W	?	?		坏	95より古い	III期一前
	95	方形 5.3×5.7	N-45°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	長甕、甕、鉢、坏		III期一後
	96	方形 6.0×5.6	N-45°-E	北壁中央	粘土 住居内張り出し		長甕、坏		III期一後
	97	方形 3.4×5.2	N-44°-E	?	?		坏		IV期一末
	98	隅丸 5.5× 5.5以上	N-11°-E	東壁東寄り	?	貯蔵穴	坏	5号溝が切る	III期一後
	99	隅丸未完掘 2.8以上× 5.2	N-41°-W	東壁	粘土 住居内張り出し		甕、甕、坏		III期一末
	100	方形 4.6×4.2	N-5°-E	東壁南より	粘土 住居内張り出し		埴、灰釉		VII期
	101	隅丸 未完掘		?	?		甕		IV期一前
	102	隅丸長方 2.9×2.3		東壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、長甕、鉢	103より新しい 104より新しい	VI・VII期
	103	方形 4.0×3.9		東壁南より	粘土 住居内張り出し		甕、鉢	102より新しい 104より新しい	V期一前
	104	方形 5.0×5.4		東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、甕、埴、坏、 石製模造品	102より古い 103より古い	III期一前
	105	隅丸長方形 3.0× 4.0以上	N-9°-W	東壁南より	粘土 住居内張り出し		長甕、坏		V期一前
	106	隅丸 4.7以上× 3.7以上	N-3°-W	?	?		甕	97より新しい 7号8号溝が切る。	VI期一前
	107	隅丸 2.4以上× 3.2	N-44°-E	?	?		甕、坏、須恵坏		VI期一後

B区

区	住居No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
B	1	方形	N-35°-E	西壁中央		貯蔵穴	甕、坏	2-	
	2	方形 4.1×4.5	N-15°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、鉢、坏	1-	II期
	3	方形 2.4以上× 3.5	N-6.5°-W				墨書土器		III期一前
	4	隅丸 未完掘					ナシ		VII期

第II章 遺構と遺物

区	住居 No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他 施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
B	5	隅丸方形 3.1×3.8	N-28°-W	北壁東より	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、坏		IV期
	6	方形 3.2以上× 5.0	N-30°-E				壺、甕、小形甕、 埴、長頸壺、高坏、 石		I期一後
	7	方形 5.1×5.0	N-17.5°-W	炉	焼土塊	貯蔵穴	甕、小形甕、埴、 高坏、石		I期一前
	8	隅丸長方形 2.8×4.0	N-40°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	長甕、坏、砥石		IV期
	9	隅丸方形 3.0×2.7	N-	東壁中央	粘土 住居内張り出し		紡錘車、甕、支脚		IV期
	10	隅丸方形 3.4×3.2	N-34°-E				甕、脚付甕、坏		
	11	方形 5.3×5.1	N-			貯蔵穴	耳坏		II期
	12	隅丸長方形 3.4×4.3	N-8°-E			貯蔵穴	ナシ		
	13	方形	N-19°-E			貯蔵穴	甕、甕、坏		III期
	14	方形 未完掘	N-21.5°-W	?	?	貯蔵穴	坏(墨書土器)高台 付碗(貯蔵穴内[※		VI期一中 (I期一末)
	15	方形 4.6×4.7	N-38°-W	東壁南より	粘土 住居内張り出し		長甕、坏	16より新しい	IV期一末
	16	方形 6.05× 4.1以上 未完掘	N-44°-E			貯蔵穴	甕、甕、	15より古い	II期一前
	17	隅丸長方形 3.1×4.4	N-11.5°-W	北壁東より 東壁南より		貯蔵穴	甕		IV期一後
	18	隅丸長方形 2.3×3.5	N-4.5°-W	北壁中央	粘土 住居内張り出し		坏		III期一前
	19	隅丸長方形 2.6以上× 3.2	N-5°-W				ナシ		
	20	方形 5.8×6.0	N-43°-W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		坏、土錘		IV期
	21	隅丸長方形 2.7×4.1	N-7°-W				長甕、小形甕、坏		V期一前
	22	隅丸 3.0以上× 4.4	N-30°-E				ナシ		不明
	23	方形 9.0×8.6	N-35.5°-E						
	24	隅丸方形 6.0×5.8	N-40°-E	西壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	坏、鉢	25より新しい	IV期一前
	25	隅丸方形 7.5×7.8	N-37°-E	西壁北より			甕、坏、土錘	24より古い	III期一前
	26	方形 7.4×6.6	N-33.5°-W			貯蔵穴	甕、坏、高坏、手 捏土器		III期一前
	27	方形 4.8× 3.9以上	N-44°-E	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	小型甕、甕、坏、 高坏、石		III期一前

区	住居 No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他 施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
B	28	隅丸 5.7以上× 8.7	N- 23° -E	?	?		甕、長頸壺、坏	26より古い 27より古い	I期一前 (III期)
	29	隅丸 4.5以上× 4.8	N- 45° -E			貯蔵穴	甕、坏、高坏、鉢		III期一前
	30	方形 4.6×4.3	N- 45° -E		粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、坏		
	31	方形 4.6×4.7	N-33.5° -W	北壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、甌、高坏、坏		II期一後
	32	方形 4.7×4.6	N- 2° -W	東壁中央	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、坏		III期一前
	33	方形 4.5以上× 5.9		東壁中央		貯蔵穴	甕、坏 ○上層、甕、高坏、 坏、砥石		II期一前 IV期一後
	34	隅丸 2.1以上× 4.7 未完掘	N- 32° -E				ナシ		
	35	方形 3.3× 3.9以上				貯蔵穴	甕、甌		II期一後
	36	長方形 2.5×3.8	N- 27° -W				坏		VI期一後
	37	隅丸長方形 2.8×3.4	N- 20° -E	南壁中央			ナシ		
	38	隅丸方形 3.4×3.2	N- 4.5° -W						VII期一
	39	隅丸方形 3.6以上× 3.9以上	N- 23° -E			貯蔵穴	甕、脚付甕		VI期一
	40	方形 4.7× 4.2以上	N- 30° -E				坏、脚付甕		III期一前
	41								
	42	方形 4.5×4.3	N- 3.5° -E	北壁中央	粘土 住居内張り出し		甕、坏、丸形土塊		II期一後
	43	方形	N- 16° -W				ナシ		
	44						墨書土器		VII期一前
	45	方形 3.3× 3.2以上	N- 42° -W				甕		II期一末
	46	隅丸長方形 5.8以上× 4.1	N-30.5° -W				甕、坏		II期一末
	47	隅丸方形 7.4以上× 7.2	N-37.5° -W	東壁中央	粘土 住居内張り出し		小形甕、高坏、坏、 土鍾、管玉		III期一前

第II章 遺構と遺物

区	住居No	形状規模(m)	主軸方位	かまど		その他施設	出土遺物	重複関係	時期
				位置	構造				
	48	長方形 5.0×5.6	N-32'-W			貯蔵穴	甕、甌		III期一後
	49	方形 6.0× 4.4以上	N-13'-W			貯蔵穴	甕、甌、坏		III期一後
	50	方形 6.2×5.5	N-16.5'-W	東壁南より	粘土 住居内張り出し	貯蔵穴	甕、鉢、高坏、坏、 埴	49より古い	I期一後
	51	不正方形 4.1×4.3	N-25'-W			貯蔵穴	甕、長甕、高坏、鉢、 坏		IV期一後
	52	隅丸 未完掘	N-33.5'-E			貯蔵穴	甕、甌、坏		II期一未
	53	隅丸長方形 5.8×6.4 未完掘	N-20'-E			貯蔵穴?	長甕、坏、石		III期一未

歌舞伎遺跡遺物一覧

A区

遺物番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
1-1	1号住	長甕	17.2		明褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁～体部 $\frac{1}{4}$
2	〃	〃			灰褐色	〃	不定方向ヘラ削り	底部
3	〃	坏	13.8	3.8	褐色	〃	横方向ヘラ削り	ほぼ完形
4	〃 床面	〃			灰褐色	〃	〃	$\frac{1}{2}$
5	〃	〃	14.2	4.2	褐色	〃	〃	$\frac{3}{4}$
6	〃 床埋土	土 錘			〃			完形
7	〃 床埋土	紡錘車			黒色			〃
2-1	2号住カマド床	長甕			黄褐色			体部上半
2	〃 埋土	坏			〃	横ナデ	不定方向ヘラ削り	口縁～体部
3	〃 埋土	〃			灰褐色			$\frac{1}{2}$
3-1	3号住	甕	16.5		褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	体部上半
2	〃 貯蔵穴	〃	17.8		明褐色	〃	斜方向ハケメ整形	〃
3	〃	〃			黄褐色	〃	横斜方向ヘラ削り	口縁部欠損
4	〃	〃			明褐色	縦ナデ	〃	底部
5	〃	壺	13.9	20.7	黒褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	一部欠損
6	〃	甌			褐色	縦ナデ	〃	体部～底部
7	〃 埋土床、貯蔵穴	広口壺	10.4		〃	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁～体部
8	〃	壺	16.2		〃	〃	縦方向ハケメ整形	口縁部
9	〃	高坏			〃	〃	縦方向ヘラ研磨	坏部
10	〃	〃			黄褐色	〃	〃	脚部
11	〃	埴	13.2	16.2	〃	〃	横方向ヘラ削り	口縁部一部欠損
12	〃	〃	9.2	10.8	褐色	〃	〃	完形
13	〃	〃	11.5	11.1	〃	〃	〃	〃
14	〃	〃	8.4	5.9	明褐色	縦方向ナデ	〃	ほぼ完形
15	〃	〃			赤褐色	〃	〃	体部～底部
4-1	4号住	長甕	17.8	35.0	〃	〃	〃	ほぼ完形
2	〃	〃	22.5		明褐色	〃	〃	口縁～体部 $\frac{1}{2}$
3	〃	甕			褐色	〃	斜方向ヘラ削り	〃 $\frac{1}{2}$
4	〃 埋土下面	〃			〃	〃	〃	〃 $\frac{1}{2}$
5	〃	長甕	16.9	33.3	〃	〃	横方向ヘラ削り	体部中位 $\frac{1}{2}$ 欠損
6	〃 ハリ床内	高坏			〃	ハケメ整形	横方向ナデ	口縁部 $\frac{1}{4}$
7	〃 ハリ床内	坏			黒褐色	〃	不定方向ヘラ削り	$\frac{1}{4}$
4-8	〃 床	須恵坏			灰褐色	ロクロ成形痕	〃	$\frac{1}{2}$
5-1	5号住	壺	20.5	31.4	赤褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	ほぼ完形
2	〃	甕	18.6	28.2	明褐色	〃	斜方向ヘラ削り	体部一部欠損

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
3	木炭中	〃	13.1	25.6	褐色	〃	〃	1/2
4	〃	〃	19.0	29.7	明褐色	〃	〃	一部欠損
5	〃	〃	18.4		黄褐色	〃	〃	底部欠損
6	〃	〃	16.3		褐色	斜方向ナデ	縦方向へら削り	口縁～体部
7	〃	〃	18.1		〃	横ナデ	〃	〃
8	〃	〃	14.3	21.9	〃	〃	〃	ほぼ完形
9	〃	〃	13.8	22.0	黒褐色	〃	不定方向へら削り	〃
10	貯蔵穴	〃			褐色	〃	斜方向へら削り	体部～底部
11	〃	〃	15.7		〃	〃	斜方向ハケメ整形	底部欠損
12	〃	〃	17.0		〃	〃	斜方向ハケメ整形 後ナデ	〃
13	木炭層中	〃			黒褐色	〃	〃	口縁～体部3/4
14	埋土中	〃	15.0		褐色	〃	斜方向へら削り	〃 1/4
15	〃	〃	14.5		〃	〃	横方向へら削り	口縁部
16	埋土	〃			〃	〃	〃	口縁～体部
17	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	底部
18	〃	〃			灰褐色	〃	横方向へら削り	〃
19	〃	罎			褐色	〃	縦方向へら削り	〃
20	〃	〃			〃	〃	〃	口縁端部欠損
21	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃
22	〃	〃			赤褐色	縦ナデ	不定方向へら削り	口縁端部欠損
23	〃	甕			〃	横ナデ	ハケメ整形	口縁～体部
24	埋土	〃			〃	〃	斜方向へら削り	〃 1/4
25	〃	〃			黄褐色	〃	〃	〃 1/4
26	〃	〃			褐色	〃	〃	〃
27	埋土	〃			〃	〃	〃	〃 1/4
28	〃	高坏	22.8		〃	〃	縦方向へら削り	坏部1/2
29	〃	〃	18.5	14.8	赤褐色	〃	〃	完形
30	〃	〃	17.3	16.9	褐色	横ナデ後放射状へら 研磨	〃	1/2
31	〃	〃	17.8	16.9	〃	横ナデ	〃	ほぼ完形
32	〃	〃	18.5		〃	横ナデ後へら研磨	横ナデ後へら研磨	坏部1/4
33	〃	〃			〃	横へら削り	縦方向へら削り	脚部
34	5号住	〃			褐色	横方向へら削り	縦方向へら研磨	〃
	〃	〃			〃	横ナデ	〃	〃
36	〃	〃			赤褐色	〃	縦方向へら削り 後へら研磨	〃
37	〃	〃			褐色	〃	〃	〃
38	〃	〃			赤褐色	〃	縦方向へら研磨	〃
39	〃	〃			褐色	〃	へら削り後ハケメ 整形	〃
40	〃	〃			〃	〃	縦方向ナデ	〃
41	〃	〃			〃	〃	放射状へら研磨	坏部
42	〃	〃	19.0		〃	〃	〃	〃
43	〃	〃			〃	縦方向へら研磨	〃	〃
44	〃	〃	18.6		〃	〃	〃	〃
45	〃	〃			〃	横ナデ	〃	〃 1/4
46	〃	〃	16.8		〃	〃	〃	〃 1/4
47	〃	〃	16.5		〃	放射状へら研磨	〃	口縁部
48	〃	〃			〃	〃	〃	坏部
49	〃	〃			明赤褐色	横ナデ	斜方向へら削り	〃
50	〃	〃			褐色	〃	不明瞭	口縁～体部1/2
51	〃	〃	18.3		〃	〃	横ナデ	坏部1/2
52	〃	〃			〃	〃	〃	〃
53	〃	〃			黄褐色	〃	〃	裾部
6-1	6号住貯蔵穴	長甕	19.4		褐色	〃	縦方向へら削り	脚部
6-2	〃	〃			〃	〃	〃	体部～底部
3	貯蔵穴	坏			〃	〃	横方向へら削り	1/4
8-1	8号住	長甕			明褐色	〃	〃	1/2
9-1	9号住	甕	13.4		〃	〃	〃	底部欠損
2	床面埋土	〃			褐色	〃	〃	1/4

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
3	〃	〃			赤褐色			1/2
4	〃	甔	20.2	23.6	褐色	縦ナデ	縦方向へら削り	完形
5	〃 貯蔵穴	広口甕	12.6	13.7	赤褐色	横ナデ	〃	ほぼ完形
6	〃	小形甕	15.6		〃	〃	斜方向へら削り	底部一部欠損
7	〃	甕			〃	〃	縦方向へら削り	1/2
8	〃 床面埋土	坏			褐色	〃	不定方向へら削り	1/3
9	〃	〃	13.0	4.7	〃	〃	横方向へら削り	ほぼ完形
10	9号住	〃			明褐色	〃	不定方向へら削り	1/3
11	〃 床面埋土	〃	13.2	5.5	褐色	〃	〃	底部一部欠損
12	〃	〃	13.0	5.2	赤褐色	〃	〃	ほぼ完形
13	〃 床面埋土	〃			〃	〃	〃	1/3
10-1	10号住床面埋土	短頸壺			褐色	〃	横方向へら削り	口縁部1/3
2	〃 床	高坏			〃	〃	〃	脚部
3	〃 床	坏			〃	〃	横方向へら削り	口縁部
4	〃 床	滑石製穿子(未製品)石						(7.5×4.6)
5	〃 床	〃						(8.0×4.5)
6	〃 床	石製模造品						1/2
11-1	1号住	壺	16.4		褐色	横ナデ	横ナデ	口縁部
2	〃	甕	18.9		〃	〃	〃	口縁～体部
3	〃	〃			明褐色	〃	〃	1/4
4	〃	〃			褐色	〃	〃	1/4
5	〃	柑			〃	縦方向ナデ	横方向へら削り	口縁部一部欠損
6	〃 埋土	広口甕			〃	〃	〃	1/3
7	〃	高坏			〃	放射状へら研磨	放射状へら研磨	坏部1/3
8	〃	〃			〃	横ナデ	〃	坏部
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/4
10	〃 埋土	〃			〃	〃	〃	1/3
11	〃	〃			〃	〃	〃	脚部
12	〃	〃			〃	ナデ	縦方向へら研磨	〃
12-1	12号住床	甕			赤褐色	横ナデ	横方向へら削り	口縁～体部1/3
2	〃	〃			褐色	〃	縦方向へら削り	〃 1/3
3	〃	〃			黒褐色	〃	〃	〃 1/3
4	〃 埋土	〃	18.8	28.9	褐色	〃	〃	完形
5	〃	〃			赤褐色	〃	〃	底部
6	〃	坏			〃	〃	不定方向へら削り	1/2
7	〃	〃	12.5	4.7	明赤褐色	〃	横方向へら削り	1/4
8	〃 埋土	〃			褐色	〃	〃	口縁～体部
9	〃 埋土	〃	13.5	5.6	〃	〃	〃	↓部欠損
10	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～底部1/3
11	〃	〃			明赤褐色	〃	〃	〃 1/4
13-1	13号住貯蔵穴	甔			褐色	〃	縦方向へら削り	1/2
14-1	14号住	坏	12.0	5.5	〃	〃	不定方向へら削り	ほぼ完形
2	〃	〃			赤褐色	〃	横方向へら削り	底部欠損
3	〃 くぼみ	〃			明赤褐色	〃	不定方向へら削り	1/4
4	〃	高坏			〃	〃	横方向へら削り	1/4
5	〃	〃	14.2	4.3	赤褐色	〃	〃	坏底部片
6	〃	鉢			褐色	〃	〃	1/3
7	〃	長甕	17.8		明褐色	斜ナデ	縦方向へら削り	口縁～体部
8	〃	〃			黄褐色	〃	〃	底部
9	〃 南くぼみ	甔			灰褐色	横ナデ	縦方向へら削り	口縁～体部
10	〃	〃			赤褐色	〃	〃	底部
11	〃	坏	14.2		褐色	〃	〃	1/4
12	〃	高坏			赤褐色	〃	〃	脚部
13	〃	小壺	5.4	5.6	黒褐色	〃	縦ハケメ整形	完形
14	〃 床	小形甕	11.7		褐色	〃	横方向へら削り	1/3
15	〃 埋土下面	〃			〃	〃	縦方向へら削り	1/4
16	〃 埋土下面	〃			赤褐色	〃	〃	1/2
15-1	15号住埋土	甔			明褐色	〃	〃	口縁～体部1/3
2	〃 埋土	坏			褐色	〃	〃	1/4

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
3	// 埋土	//			//	不明瞭		一部欠損
4	// 埋土	坏	11.8	3.5	//	横ナデ		
5	// 埋土	//			//	//		1/4
6	// 埋土	//	12.4	4.0	//	//	横方向ヘラ削り	1/4
16-1	16号住	甕			//	//	斜方向ヘラ削り	体部~底部1/2欠損
2	//	//	20.2		黒褐色	//	不定方向ヘラ削り	1/4
3	//	//	15.4		灰褐色	//	縦方向ヘラ削り	口縁~体部
4	//	小形甕			褐色	//	不明瞭	//
5	//	坏			明褐色	//	横方向ヘラ削り	1/4
6	//	//			黒褐色	//		破片
7	//	//			褐色	//		1/4
8	//	//			//	//		1/4
9	//	須恵盤			灰色	ロクロ成形		底部
17-1	17号住床面	長 甕	18.7	30.5	褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	完形
2	17号住貯蔵穴	甕			//	//		口縁~体部1/2
3	//	//			//	//		// 1/4
4	//	甕			黄褐色	//		1/4
5	//	坏			//	//	不定方向ヘラ削り	ほぼ完形
6	//	//			褐色	//		口縁~体部1/2
7	//	//			黒褐色	//		// 1/4
8	// 埋土	//			明褐色	//		
9	// 埋土	//			赤褐色	//		1/4
10	// 埋土	//			明褐色	//		
11	// 埋土	//			//	//	横方向ヘラ削り	
12	// 埋土	//			褐色	//		口縁部
18-1	18号住	甕			赤褐色		縦方向ヘラ削り	底部
2	//	//			褐色	不明瞭		//
3	// 埋没土中	埴	7.8	9.0	赤褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	完形
4	//	//			//	//	斜方向ヘラ削り	底部
5	// 西ヘルト	坏			褐色	//		1/4
6	// 埋土	石(角閃石安山岩)						完形
7	// 埋土	勾玉						完形
8	// 埋土	高 坏			明褐色	横ナデ	横方向ナデ	口縁部
9	//	//			褐色	//	放射状ヘラ研磨	坏部
10	//	//			黄褐色	//		//
11	//	//			褐色	//	縦方向ナデ	坏部~脚部
12	//	//			//	//		脚部
13	//	//			灰褐色	//		//
19-1	19号住床面	砥石(提砥)						1/2
2	//	甕			褐色			底部
3	//	坏			//	横ナデ	横方向ヘラ削り	1/4
20-1	20号住	//	13.0	5.4	//	放射状ヘラ研磨		一部欠損
21-1	21号住	//			//	横ナデ		1/2
2	//	//			//	//		1/2
22-1	22号住	脚付甕(脚部)			明褐色	//	横ナデ	脚台部
23-1	23号住	長 甕			//	//	縦方向ヘラ削り	口縁~体部1/2
2	//	坏	11.5	3.4	//	//	横方向ヘラ削り	完形
24-1	24号住	//	15.2	4.3	明赤褐色	//		1/4
2	// 住居埋土	//			褐色	//	不定方向ヘラ削り	1/4
3	//	手捏祭祀土器	6.2	5.5	灰褐色	縦ナデ	不定方向ナデ	ほぼ完形
25-1	25号住	甕			灰白色	横ナデ	斜方向ハケメ整形	口縁~体部1/2
2	//	//			黄褐色	//	横方向ヘラ削り	//
3	//	//			明褐色	//	縦方向ヘラ削り	底部
4	//	高 坏			黒褐色	//	横方向ヘラ削り	坏部
5	//	埴			//	//		体部
6	//	//			褐色	//	縦方向ハケメ整形	口縁部欠損
7	//	小形甕	7.8	6.4	赤褐色	横方向ハケメ整形		完形
8	// 埋土	//			褐色	//	横方向ヘラ削り	口縁~体部1/2
9	// 埋土	手捏祭祀土器			灰褐色	横ナデ	縦方向ハケメ整形	体部~底部

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
26-1	26号住カマド内	甕	18.8		褐色	//	不定方向ヘラ削り	口縁～体部
2	//	//	12.3	11.9	//	//	横方向ヘラ削り	口縁部一部欠損
3	//	鉢	10.0	6.5	//	//	//	完形
4	//	坏	10.4	4.6	//	//	//	3/4
5	// カマド内一括	//	11.9	3.3	//	//	不定方向ヘラ削り	1/4
6	// カマド内一括	//	13.5	4.2	//	//	横方向ヘラ削り	完形
7	// カマド内一括	//	14.9	4.4	//	//	//	ほぼ完形
8	// カマド内一括	//	14.8	4.5	//	//	//	1/4
9	//	土 錘			//			完形
27-1	27号住	甕	19.1	27.8	//	横ナデ	縦方向ハケメ整形	口縁部一部欠損
2	//	長 甕	16.0		//	//	横方向ナデ	坏部1/2
3	//	坏			//	//	斜方向ヘラ削り	口縁～体部
4	//	//	24.8		//	//	//	//
5	// 埋土	//	10.5	3.4	//	//	横方向ヘラ削り	//
6	// カマド南	//			//	//	//	//
28-1	28号住	須恵坏	13.8	4.2	黄灰褐色	ロクロ成形		1/2
2	//	高台付碗	14.0	5.5	灰褐色	//		3/4
3	// カマド	//			//	//		1/4
4	//	//	14.6	5.6		//		完形
5	//	//	14.3	5.3	灰 色	//		ほぼ完形
6	//	脚台付甕			褐色	横ナデ	横方向ナデ	脚部
7	28号住	須恵坏			灰褐色	ロクロ成形		口縁部欠損
29-1	29号住	//	17.4		赤褐色	//	斜方向ヘラ削り	口縁～体部
2	//	坏			//	//	横方向ヘラ削り	1/2
3	//	//	12.4	3.6	褐色	//	不定方向ヘラ削り	3/4
30-1	30号住	//			//	横ナデ	横方向ヘラ削り	口縁～体部1/4
2	//	甕	19.2	27.4	//	//	斜方向ヘラ削り	3/4
31-1	3号住	//			//	//	縦方向ヘラ削り	口縁～体部1/2
2	//	高 坏	13.8		//	横ナデ後棒状工具 による研磨	ナデ	坏部～柱部
3	//	坏	24.8		//	ナデ	斜方向ヘラ削り	
32-1	32号住	甕			//	縦方向ナデ	縦方向ヘラ削り	1/4
2	//	坏	11.0	5.8	赤褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	完形
3	//	//	12.5	3.9	褐色	//	斜方向ヘラ削り	//
4	//	//	12.5	4.3	//	//	横方向ヘラ削り	ほぼ完形
5	//	//	14.4	3.7	//	//	//	//
6	//	//	13.1	3.8	赤褐色	//	不定方向ヘラ削り	//
7	// ビット	高台付皿			灰褐色	ロクロ成形		//
33-1	33号住床	甕			褐色	指頭ナデ	ハケメ整形後 斜方向ヘラ削り	口縁～体部
2	// 貯蔵穴	//			明褐色	斜方向ハケメ整形	横方向ヘラ削り	//
3	//	//	17.6		赤褐色	斜方向ヘラ削り	不定方向ヘラ削り	//
4	//	把手付甕	20.3	26.0	褐色	//	不定方向 (一部縦 方向) ナデ	//
5	// 埋土	坏			赤褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	1/2
6	// 埋土	//			褐色	//	//	// 1/4
34-1	34号住ビット一括	壺	23.4		//	横ナデ後縦方向ヘ ラ研磨	横ナデ後縦方向ヘ ラ研磨	口縁部
2	// 3ビット一括	//	18.4		//	横ナデ	斜方向ヘラ削り	口縁～体部
3	// ビット	高 坏	19.7		//	荒れ、不明瞭	ハケメ整形後 ヘラ研磨	坏部
4	// 埋土北面	石製模造品 (滑 石)						
5	// 埋土	甕	12.5	6.2	褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	口縁～体部
6	// 3ビット一括	埴	9.8	9.1	//	//	弱いヘラ研磨	ほぼ完形
7	// 3ビット一括	//			赤褐色	//	不定方向ヘラ削り	口縁部欠損
8	//	//			//	//	横方向ヘラ削り	//
35-1	35号住	坏	12.8	3.4	黄褐色	//	斜方向ヘラ削り	完形
2	//	//	12.0	3.8	//	//	横方向ヘラ削り	//
3	//	//			明褐色	//	//	口縁～体部
4	35号住	鉢	10.2	5.7	褐色	斜方向ナデ	不定方向ナデ	完形

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
5	//	埴	8.2	9.5	赤褐色	指頭ナデ	不定方向ヘラ削リ	口縁部一部欠損
6	//	//	12.4	12.6	褐色	横方向ナデ	横方向ヘラ削リ	口縁端部欠損
7	//	//	12.3	13.8	赤褐色	//	縦方向ヘラ削リ	完形
8	//	//	14.1	16.0	褐色	縦ナデ	横方向ヘラ削リ	ほぼ完形
9	//	壺	16.0		//	横方向ナデ	横斜方向ヘラ削リ	1/4
10	//	//			//	斜ヘラ削リ	不定方向ナデに近いヘラ削リ	口縁～体部1/4
11	//	//	16.7		//	横ヘラ削リ	横方向ヘラ削リ	// 1/4
12	//	壺			//	//	縦方向ヘラ研磨	頸部～体部
13	//	高坏	18.9		//	横ナデ後 縦方向ヘラ研磨		坏部
14	//	//			//	横ナデ	//	坏部～脚部
15	//	//	18.0	15.8	明赤褐色	荒れ、不明瞭	横方向ナデ	坏部1/2欠損
16	//	砥石(据え砥)					完形	
36-1	36号住貯蔵穴ワキ	壺	20.8		褐色	横ナデ	横方向ヘラ削リ	口縁～体部
2	// カマド内一括	小形壺			//	//	//	//
3	//	坏	12.7	3.8	//	//	不定方向ヘラ削リ	ほぼ完形
4	// 住壁肩	//			赤褐色	//	横方向ヘラ削リ	完形
38-1	38号住	壺			//	//	//	口縁～体部1/2
2	//	坏			//	//	斜方向ヘラ削リ	1/2
3	//	//	11.8	3.7	//	//	横方向ヘラ削リ	完形
4	//	//	12.4		//	//	//	口縁部
5	//	//	12.8	3.3	//	//	//	1/2
6	//	//			明褐色	//	//	1/2
7	//	//			褐色	//	//	1/2
8	//	//			//	//	不定方向ヘラ削リ	1/2
9	// カマド内床	//			//	//	横方向ヘラ削リ	口縁～体部
10	//	//	13.4	4.2	//	//	斜方向ヘラ削リ	ほぼ完形
11	//	//			//	//	横方向ヘラ削リ	1/2
12	//	//			//	//	//	1/2
13	// 住床	土 鐘			//			完形
40-1	40号住2層下	長 壺	22.4		//	横ナデ	横方向ヘラ削リ	口縁～体部
2	// 2層下	坏			//	//	//	//
3	// 2層下	//			//	//	//	//
41-1	41号住	壺			//	//	縦方向ヘラ削リ	1/2
2	//	鉢	20.6	11.8	//	//	斜方向ヘラ削リ	完形
3	// カマド	小形壺	12.9		明赤褐色	//	//	口縁～体部1/4
4	//	坏	13.2	3.5	//	//	不定方向ヘラ削リ	一部欠損
5	//	//			//	//	//	// 1/2
41-1	42号住カマド	壺			黄褐色	//	//	1/4
2	// カマド	//			明赤褐色	//	斜方向ヘラ削リ	底部
3	// 住床	高坏	18.2		褐色	//	ヘラ研磨	坏部1/2欠損
43-1	43号住埋土	壺			//	//	横方向ヘラ削リ	口縁～体部
2	// 埋土	//			//	//	//	//
3	//	壺 or 甌			明褐色	//	斜方向ヘラ削リ	1/4
4	//	//			灰褐色	//	不定方向ヘラ削リ	1/2
5	//	//			赤褐色	縦ナデ	縦方向ヘラ削リ	底部
6	// 住床	坏	13.7	3.8	//	//	横方向ヘラ削リ	1/2
7	// 埋土下方	//			//	横ナデ	//	1/2
47-1	47号住	壺			黄褐色	縦ナデ	縦方向ヘラ削リ	口縁～底部1/2
2	//	//		39.6	褐色	//	//	完形
3	//	坏	15.5	15.0	//	横ナデ	縦方向ヘラ削リ	口縁～体部
4	//	//			//	//	横方向ヘラ削リ	体部～底部
5	カマド内一括	//			//	//	//	
6	// 床	石			//	//	//	1/4
48-1	48号住	長 壺			//	//	//	1/2
2	//	坏	13.9	3.6	//	//	//	1/4
3	// 住埋土	//			//	//	//	1/4
4	// 埋土	//			//	//	//	口縁～体部1/2
5	49号住	//			//	//	縦方向ヘラ削リ	体部～底部1/2

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
49-1	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/2
2	〃 住床	〃	19.3	33.5	〃	〃	〃	底部欠損
3	〃	小形甕	11.0		〃	〃	横方向へら削り	口縁～体部
4	〃 床面近	〃			〃	〃	〃	口縁～体部 1/4
5	〃	〃			明褐色	〃	〃	〃 1/2
6	〃	〃			〃	〃	〃	〃
7	〃	小型壺	11.4		黒褐色	〃	〃	〃
8	〃	坏	11.0		褐色	〃	〃	口縁～底部 1/2
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/4
10	〃	〃			〃	〃	不定方向へら削り	〃 1/4
11	〃	〃	13.2		〃	〃	〃	〃
12	〃	〃			明褐色	〃	〃	〃 1/2
13	〃	〃	14.2		〃	〃	〃	〃 1/2
14	〃	〃			褐色	〃	〃	〃 1/2
15	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃 1/2
16	〃	須恵短頸壺	11.0		青灰色	ロクロ成形	〃	口縁～体部
17	〃	須恵坏	11.8		〃	〃	〃	口縁～底部 1/2
18	〃	石(角閃石)						
50-1	50号住	甕	17.2		褐色	横ナデ	縦方向へら削り	口縁～体部
2	〃	〃	15.8		〃	〃	〃	〃 1/2
3	〃	〃			〃	〃	〃	〃
4	〃	高 坏	9.1	6.0	〃	〃	〃	ほぼ完形
5	〃	坏	14.9	4.0	〃	〃	斜方向へら削り	約 1/2
6	〃	須恵蓋坏	14.0	4.9	〃	ロクロ成形	〃	一部欠損
52-1	52号住床	甕	21.7		〃	横ナデ	斜方向へら削り	口縁～体部
2	〃	甕	21.6		〃	〃	縦方向へら削り	〃
3	〃	〃	15.4	21.6	〃	ナデ	〃	〃
4	〃 床	坏	12.2	4.8	赤褐色	〃	横方向へら削り	ほぼ完形
5	〃 床	〃	12.0	5.0	褐色	〃	〃	完形
6	〃	〃	12.0	5.2	〃	〃	不定方向へら削り	1/4
7	〃	〃	11.6	5.2	明褐色	〃	横方向へら削り	完形
8	〃	〃	12.1	5.0	褐色	〃	〃	口縁部 1/2 欠損
9	52号住	〃	12.2	5.1	〃	横ナデ	〃	完形
10	〃	〃	12.0	5.2	明褐色	〃	〃	〃 1/2
11	〃	〃	11.0	5.0	〃	〃	不定方向ナデ	底部一部欠損
12	〃	〃	11.8	5.2	褐色	〃	横方向へら削り	3/4
13	〃	〃	11.8	4.7	〃	〃	不定方向へら削り	完 形
14	〃 貯蔵穴底	〃	12.4	5.0	〃	〃	横方向へら削り	〃
15	〃	〃	12.2	5.2	〃	放射状へら研磨	〃	〃
16	〃	〃	12.6	5.5	〃	横ナデ	〃	〃
17	〃	〃	13.4		〃	〃	〃	3/4
18	〃	〃	12.8	4.8	〃	〃	〃	〃
19	〃 床面	〃			〃	〃	〃	1/2
20	〃	〃			〃	〃	〃	3/4
21	〃	〃	13.4		〃	〃	〃	1/2
22	〃 床面	〃	14.3	5.2	〃	放射状へら研磨	〃	ほぼ完形
23	〃	〃	16.5	6.3	〃	〃	〃	完形
24	〃	小形甕			〃	〃	〃	底部欠損
25	〃	高 坏			〃	〃	〃	口縁部欠損
26	〃	〃			〃	〃	〃	〃
27	〃	〃			〃	〃	〃	〃
53-1	5号住	甕			赤褐色	〃	斜方向へら削り	口縁部 1/4
2	〃	〃			〃	〃	縦方向へら削り	口縁部欠損
3	〃	〃			明褐色	〃	〃	底部
4	〃	小形甕	11.0	6.2	〃	〃	斜方向へら削り	底部一部欠損
5	〃	坏	12.7	3.8	〃	横方向へら削り	縦方向ナデ	口縁部欠損
6	〃	〃			褐色	横方向ナデ	不定方向へら削り	口縁～体部
55-1	55号住	広口甕			〃	〃	斜方向へら削り	体部～底部
2	〃	〃	14.5	12.0	赤褐色	〃	横方向へら削り	1/2

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
3	〃	〃	13.0	14.7	褐色	〃	斜方向へら削り	½
4	〃	鉢	23.0	14.7	〃	〃	〃	¾
5	〃	坏	11.4	4.2	赤褐色	〃	〃	完形
6	〃	〃	12.2	4.2	褐色	〃	横方向へら削り	口縁部一部欠損
7	〃	〃	13.4	4.6	〃	〃	〃	ほぼ完形
8	〃	〃	17.3	7.0	〃	〃	不定方向へら削り	完形
9	〃	高 坏			灰 色			坏部½
57-1	57号住	壺	19.3	31.4	明褐色	横ナデ	ハケメ整形	完形
2	〃	甕			褐色	〃	縦方向へら削り	口縁～体部
3	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	〃
4	57号住埋土	〃			黄褐色	〃	不定方向へら削り	口縁～体部¾
5	〃 埋土	〃			褐色	〃	縦方向ハケメ整形	〃
6	〃	長 甕	19.0	37.4	明褐色	〃	縦方向へら削り	ほぼ完形
7	〃	甕			灰褐色	縦方向ナデ	〃	口縁～底部縦½
8	〃	〃	24.4	32.3	褐色	ナデ	〃	ほぼ完形
9	〃	甕	19.0		〃	縦方向ナデ	〃	底部欠損
10	〃	〃			明褐色	〃	〃	〃
11	〃	〃			黒褐色	不定方向ナデ	不定方向へら削り	口縁～体部
12	〃	〃	17.0		褐色	横ナデ	縦方向へら削り	底部欠損
13	〃	〃	15.6	17.4	〃	〃	横方向へら削り	ほぼ完形
14	〃	広口甕	20.4		黒褐色	ナデ	斜方向へら削り	底部欠損
15	〃	小 壺			明褐色	横ナデ	横方向へら削り	一部欠損
16	〃	小形甕	11.0	14.2	〃	〃	斜方向へら削り	完形
17	〃	坏			〃	〃	横方向へら削り	½
18	〃	〃			褐色	〃	不定方向へら削り	口縁～体部
19	〃	〃	13.3	4.1	灰褐色	〃	〃	完形
20	〃	〃			褐色	〃	横方向へら削り	口縁～体部
21	〃	〃			明褐色	〃	〃	〃
22	〃	石(角閃石安山岩)						
23	〃	高 坏			赤褐色	横ナデ	横ナデ	坏部
24	〃	〃	17.2		〃	〃	縦方向ナデ	裾部
25	〃	須恵高坏			灰白色			脚部
59-1	59号住	石(角閃石安山岩)						
60-1	60号住	甕			褐色	横ナデ	不定方向へら削り	口縁部
2	〃	〃			灰白色	〃	斜方向へら削り	½
3	〃	甕	24.5	29.5	〃	縦方向へら削り	縦方向へら削り	一部欠損
4	〃	甕			褐色	横ナデ	〃	底部欠損
5	〃	〃	17.3	22.5	〃	斜方向ナデ	不明瞭	ほぼ完形
6	〃	〃			明赤褐色	〃	縦方向へらナデ	底部
7	〃	鉢			赤褐色	横ナデ	〃	¾
8	〃	〃			〃	〃	〃	½
9	〃	甕	13.0	8.2	〃	〃	縦方向へら削り	完形
10	〃	〃	10.8	6.4	〃	〃	横方向へら削り	〃
11	60号住	坏	12.2	5.2	褐色	〃	不定方向へら削り	〃
12	〃	〃	12.2	4.9	〃	〃	横方向へら削り	〃
13	〃	〃	12.5	4.6	〃	〃	〃	〃
14	〃	〃	12.5	5.0	〃	〃	〃	〃
15	〃	〃			赤褐色	〃	〃	〃
16	〃 貯蔵穴	〃			褐色	〃	〃	½
17	〃	〃			〃	〃	〃	破片
18	〃	〃	12.4	5.7	〃	〃	〃	¾
19	〃	〃	12.9	5.6	〃	〃	不定方向へら削り	ほぼ完形
20	〃 カマド内	〃	13.0	5.4	〃	〃	横方向へら削り	完形
21	〃	コップ型土器	9.0	7.4	〃	〃	横方向ナデ	〃
22	〃	カマド支脚		7.6	〃	ナデ	ナデ	½
61-1	61号住	甕			褐色	横ナデ	横方向へら削り	口縁部
65-1	65号住	〃			明褐色	〃	〃	〃
2	〃 柱穴	鉢			〃	〃	〃	口縁～体部

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
3	// 柱穴	甕			黒褐色	//	縦方向へら削り	底部
4	// 柱穴	坏			明褐色	//	横方向へら削り	1/2
5	// フク土	//			赤褐色	//	//	口縁～体部
6	//	//	14.2	6.7	黄褐色	放射状へら研磨	不定方向へら削り	完形
7	// フク土	//			赤褐色	横方向ナデ	斜方向へら削り	口縁～体部
8	// ビット中N-8	//			//	//	//	ほぼ完形
9	// ビット中N-8	//	13.1	4.5	//	不明瞭	横方向へら削り	//
10	// ビット中N-8	//	14.2	4.2	//	横ナデ	不定方向へら削り	完形
11	// ビット中	//			//	//	//	1/2
12	// ビット中	//	14.8	4.3	明褐色	//	横方向へら削り	完形
13	// ビット中	//	15.2	4.3	赤褐色	//	不明瞭	ほぼ完形
14	// フク土	//			褐色	//	//	1/2
211-1	// H-8	//			//	//	不定方向へら削り	口縁～底部1/2
2	// H-10	//			//	//	横方向へら削り	// 1/2
3	// I-7	//			明褐色	//	//	// 1/2
4	// I-7	//			褐色	//	斜方向へら削り	// 1/2
5	// I-7	//			//	//	//	// 1/2
6	// I-7	//			//	//	不定方向へら削り	//
7	// I-7	//			//	//	横方向へら削り	// 1/2
8	// I-7	//			//	//	//	// 1/2
9	// I-7	//			//	//	//	// 1/4
10	// I-7	//			黄褐色	//	//	//
11	// I-7	//			明褐色	//	不定方向へら削り	//
12	// I-7	//			褐色	//	斜方向へら削り	//
13	// I-7	//			//	横ナデ	不定方向へら削り	//
14	// I-7	//			//	//	斜方向へら削り	//
15	// I-7	//			//	//	//	//
16	// I-7	高坏			//	//	縦方向へら削り	坏部～脚部
17	// H-10	甕			//	//	斜方向へら削り	口縁～底部1/2
18	// H-11	砥石						
19	// I-13	須恵甕	11.7		灰色	ロクロ成形		体部～底部
208-1	// J-7	坏			褐色	//	斜方向へら削り	口縁～体部1/2
2	// J-9	//			//	//	横方向へら削り	完形
3	// J-10	埴			//	//	//	//
4	// J-12	坏			//	//	//	口縁～底部1/2
5	// J-19	//			//	//	//	// 1/2
6	// L-13	須恵坏			灰色	//	//	// 2/3
7	// L-17	坏			褐色	横ナデ	横方向へら削り	// 1/2
8	// L-17	//			//	//	//	// 1/2
9	// L-17	須恵皿			灰色	ロクロ成形		// 1/2
10	// L-12	高台付碗			//	//		完形
210-1	// M-10	須恵坏			//	//		底部欠損
2	// M-10	灰釉碗			灰白色	//		底部のみ残存
3	// M-10	須恵耳坏			灰色	//		完形
4	// M-10	須恵坏			//	//		口縁部のみ残存
5	// M-10	//			//	//		底部欠損
6	// M-10	高台付碗			//	//		高台部欠損
7	// M-10	//			//	//		完形
8	// M-10	灰釉碗			灰白色	//		//
9	// M-10	高台付碗			灰色	//		ほぼ完形
212-1	1号溝	坏			褐色	横ナデ	横方向へら削り	口縁～底部1/2
2	//	//			//	//	不定方向へら削り	//
3	//	壺			//	横ナデ後へら研磨	横ナデ後へら研磨	口縁部のみ残存
4	//	坏			//	横ナデ	不定方向へら削り	口縁～体部1/2
5	//	//			//	//	//	// 1/2
6	//	//			//	//	//	// 1/2
7	//	須恵坏			灰色	ロクロ成形		
8	//	小形甕			褐色	横ナデ	斜方向へら削り	口縁～体部
9	//	台付甕			//	//	荒れ不明瞭	

遺物番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存		
			口径	器高		内面	外面			
10	〃	坏	12.3	4.9	〃	〃	横方向へら削り	口縁～底部 $\frac{1}{4}$		
11	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	
12	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	
13	〃	〃			〃	〃	〃	〃	ほぼ完形	
14	〃	カマド支脚			〃	〃	〃	縦方向へら削り	完形	
15	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	一部欠損			
213-1	2号溝	甕	13.2	3.5	〃	横ナデ	横方向へら削り	底部のみ残存		
2	〃	坏			〃	〃	〃	〃	口縁～底部	
3	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	
4	5号溝	小形甕			〃	〃	〃	〃	口縁～体部	
5	10号溝	須恵甕			〃	〃	灰色	ロクロ成形	〃	
6	〃	坏			〃	〃	褐色	横ナデ	不定方向へら削り	〃 $\frac{3}{8}$
7	〃	須恵坏			〃	〃	灰色	ロクロ成形	〃	
8	〃	〃			〃	〃	褐色	横ナデ	横方向へら削り	〃
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃	不定方向へら削り	〃 $\frac{3}{8}$
10	〃	坏			〃	〃	〃	〃	横方向へら削り	口縁～底部 $\frac{1}{2}$
11	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃 $\frac{1}{2}$
12	〃	須恵甕			〃	〃	灰色	ロクロ成形	〃	〃 $\frac{1}{2}$
215-1	表採	須恵坏	〃	〃	〃	〃	〃	完形		
2	〃	高台付碗	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	一部欠損		
6	〃	須恵耳环	〃	〃	〃	〃	〃	約 $\frac{1}{2}$		
7	〃	灰釉段皿	〃	〃	灰白色	〃	〃	ほぼ完形		
66-1	66号住床	須恵坏	〃	〃	灰色	〃	〃	口縁～体部 $\frac{3}{8}$		
2	〃 埋土中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	口縁～底部		
3	〃 上層	高台付碗	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
4	〃 上層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
5	〃 上層	土 鍾	〃	〃	褐色	〃	〃	端部一部欠損		
67-1	67号住カマド	カマド支脚	17.2	19.4	〃	横ナデ	縦方向へら削り	完形		
2	〃	壺			〃	〃	灰褐色	〃	斜方向へら削り	$\frac{1}{2}$
3	〃	甕			〃	〃	褐色	〃	〃	$\frac{1}{8}$
4	〃	〃			20.7	18.5	〃	〃	〃	口縁～体部 $\frac{1}{4}$ 欠損
5	〃 床	坏			〃	〃	〃	〃	横方向へら削り	$\frac{1}{2}$
69-1	69号住フク土	小形甕又は甔	12.8	3.4	〃	〃	斜方向へら削り	口縁～体部		
2	〃 フク土	甕			〃	〃	〃	〃	横方向へら削り	$\frac{1}{8}$
70-1	70号住床	須恵坏	19.0	20.2	〃	ロクロ成形	〃	$\frac{1}{4}$		
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	$\frac{1}{8}$
71-1	71号住	長 甕			〃	〃	褐色	横ナデ	縦方向へら削り	口縁～体部
2	〃	〃			〃	〃	褐色	〃	〃	口縁～体部 $\frac{1}{4}$
3	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃 $\frac{1}{2}$
4	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	$\frac{1}{8}$
5	〃 床	甔			〃	〃	〃	〃	斜方向へら削り	底部
6	〃 床	高 坏			〃	〃	〃	〃	横ナデ	$\frac{1}{8}$
7	〃 床	〃			〃	〃	褐色	〃	〃	ほぼ完形
8	〃	坏			〃	〃	〃	〃	横方向へら削り	$\frac{1}{8}$
9	〃 床	〃			〃	〃	〃	〃	〃	$\frac{1}{4}$
10	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃 床	〃			〃	〃	〃	〃	〃	$\frac{1}{4}$
12	〃 床	〃			〃	〃	赤褐色	〃	斜方向へら削り	$\frac{1}{8}$
13	〃 床	〃	〃	〃	褐色	〃	〃	$\frac{1}{4}$		
14	〃	須恵高坏	〃	〃	灰色	ロクロ成形	〃	坏柱部破片		
72-1	72号住	長 甕	20.2	20.2	褐色	横ナデ	横方向へら削り	$\frac{1}{8}$		
2	〃 床カマド	〃			〃	〃	〃	〃	斜横方向へら削り	口縁～体部 $\frac{3}{8}$
3	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	口縁～体部
4	〃	〃			〃	〃	褐色	〃	斜方向へら削り	〃
5	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	底部欠損

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
7	西南スミ	坏			〃	〃	〃	
8	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	1/8
9	〃	〃			〃	〃	〃	1/8
10	〃 西	〃			褐色	〃	斜方向へら削り	口縁～底部1/8
11	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃 2/8
12	〃 床カマド	〃			〃	〃	〃	口縁～体部1/8
73-1	73号住	〃			〃	〃	斜方向へら削り	〃 1/2
2	〃	〃	10.2	3.2	〃	〃	不定方向へら削り	完形
3	〃	〃			〃	〃	〃	1/8
4	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	1/8
5	〃	〃	13.5	3.0	赤褐色	〃	〃	完形
6	73号住	坏			褐色	横ナデ	〃	1/2
74-1	74号住	長甕			明褐色	〃	縦方向へらズリ	1/4
2	〃	〃			〃	〃	不明瞭	1/4
3	〃	甕			〃	〃	縦方向へら削り	1/4
4	〃	小形甕			〃	〃	〃	1/8
5	〃 I層	〃			〃	〃	横斜方向へら削り	口縁端部欠損
6	〃	坏			褐色	〃	〃	2/8
7	〃	〃			赤褐色	〃	〃	完形
8	〃	〃			褐色	〃	〃	2/8
9	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	1/2
10	〃	〃			〃	〃	〃	口縁部欠損
11	〃	短頸壺	10.2	6.5	青灰色	ロクロ成形	〃	完形
75-1	75号住	須恵蓋	14.0	3.1	灰色	〃	〃	一部欠損
76-1	76号住床	長甕			明褐色	横ナデ	縦方向へら削り	1/4
2	〃 床	鉢	24.0		褐色	〃	〃	底部欠損
3	〃 床	坏			〃	〃	横方向へら削り	1/8
4	〃 床	〃			〃	〃	〃	1/2
5	〃 床	〃			〃	〃	〃	1/2
6	〃 床	〃			〃	〃	〃	1/8
7	〃 床	〃			〃	〃	〃	1/4
8	〃 庄床	〃			明褐色	〃	〃	1/4
9	〃 床	〃			黒褐色	〃	〃	1/8
10	〃 床	蓋	16.4	4.3	灰色	ロクロ成形	〃	2/8
11	〃 床	砥石(提砥)			〃	〃	〃	一部欠損
77-1	77号住	甌			褐色	横ナデ	縦方向へら削り	底部
2	〃	坏			〃	〃	横方向へら削り	1/2
3	〃	〃			〃	〃	〃	1/2
4	〃 南ベルト	〃			〃	〃	〃	1/8
5	〃 南ベルト	〃			〃	不明瞭	〃	1/8
79-1	79号住南ベルト	甕			黄褐色	横ナデ	〃	口縁～体部
2	〃	〃			〃	〃	縦方向へら削り	底部
3	〃 床	長甕			〃	〃	〃	口縁～体部1/2
4	〃	〃			黒褐色	〃	〃	〃 1/2
5	〃	甌	22.0	25.8	〃	〃	〃	完形
6	〃	坏			〃	〃	横方向へら削り	1/4
7	〃	〃	12.3	5.9	〃	〃	〃	2/8
8	79号住貯蔵穴	〃	12.3	4.7	黄褐色	〃	〃	3/4
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃
10	〃	〃			褐色	〃	不定方向へら削り	2/8
11	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃
12	〃	〃			褐色	〃	〃	1/2
80-1	80号住	長甕			〃	〃	縦方向へら削り	口縁～体部
2	〃	〃			赤褐色	〃	横方向へら削り	1/8
3	〃	〃			黄褐色	縦ナデ	〃	底部
4	〃	〃			明褐色	〃	縦方向へら削り	〃
5	〃 床	〃			灰白色	〃	〃	〃
6	〃	高坏			〃	横ナデ	〃	坏上部欠損
7	〃	坏			褐色	〃	〃	1/2

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
8	〃	〃			灰 白 色	〃	〃	完形
9	〃 床	〃			赤 褐 色	〃	〃	ほぼ完形
10	〃 床	鉢			褐 色	横ナデ	横方向へら削り	1/6
81-1	81号住カマド内	長壺			〃	〃	〃	口縁～体部1/6
82-1	82号住	坏			〃	〃	〃	1/6
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃
3	〃 床	〃			〃	〃	〃	口縁～体部1/6
83-1	83号住	長壺			灰 褐 色	〃	斜方向へら削り	口縁部
2	〃 カマド内	壺			〃	〃	縦方向へら削り	頸部～体部1/2
3	〃 貯蔵穴内	鉢			明 褐 色	〃	〃	一部欠損
4	〃 床	石(角閃石安山岩)				〃		
5	〃 床	坏			褐 色	〃	不定方向へら削り	1/4
6	〃 床	須恵坏			灰 色	ロクロ成形		1/2
85-1	85号住	壺			褐 色	横ナデ	縦方向へら削り	底部のみ残存
2	〃	〃			黄 褐 色	〃	〃	〃
3	〃	高坏			明 褐 色	〃	横方向へら削り	ほぼ完形
4	〃	鉢			褐 色	〃	縦方向へら削り	口縁～底部
5	〃	坏			明 褐 色	〃	横方向へら削り	〃
6	〃 床面	〃			〃	〃	不定方向へら削り	〃 1/2
7	〃	〃			褐 色	〃	横方向へら削り	〃 1/4
8	〃	須恵坏			灰 色	ロクロ成形		一部欠損
86-1	86号住	鉢			褐 色	横ナデ	縦方向へら削り	口縁～体部
2	〃	壺			〃	〃	横方向へら削り	〃
3	〃	坏			〃	〃	〃	〃 1/2
4	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/4
5	〃	紡錘車			黒 色			完形
87-1	87号住	壺			褐 色	横ナデ	縦方向へら削り	底部欠損
2	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	口縁～体部
3	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃
4	〃 カマド	〃			〃	〃	斜方向へら削り	〃
5	〃	〃			〃	〃	縦方向へら削り	体部中位～底部
6	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	口縁～体部
7	〃 床面	坏			〃	〃	〃	完形
8	〃 床面	〃			〃	〃	〃	口縁～体部1/2
9	〃 カマド	〃			〃	〃	〃	完形
88-1	88号住	壺	20.4	36.0	〃	〃	〃	口縁部一部欠損
2	〃	長壺	18.8	36.6	〃	〃	縦方向へら削り	ほぼ完形
3	〃	壺	14.6	30.4	〃	〃	〃	〃
4	〃	甌	24.2	31.4	〃	縦方向ナデ	〃	〃
5	〃	長壺	18.8	36.6	〃	横ナデ	〃	〃
6	〃	甌			〃	〃	斜方向へら削り	体部中位～底部
7	〃	坏			〃	〃	〃	口縁～底部1/2
8	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/4
9	〃	〃			〃	〃	〃 3/4	〃
10	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃 2/3
11	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/3
12	〃	〃			〃	〃	不定方向へら削り	〃 1/3
13	〃	カマド支脚			〃		ナデ一部ハケメ整形	一部欠損
89-1	89号住	坏			〃	〃	斜方向へら削り	口縁～底部1/6
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃
3	〃 カマド	カマド支脚			〃		ナデ	一部欠損
4	〃 床面	壺			〃	〃	縦方向へら削り	口縁～体部と底部
5	〃	〃			〃	〃	〃	体部下位～底部
91-1	91号住	坏			〃	〃	横方向へら削り	口縁～底部1/2
2	〃	〃			〃	〃	〃	一部欠損
92-1	92号住	〃			〃	〃	〃	口縁～底部1/2
2	〃	カマド支脚			〃		ナデ	一部欠損
93-1	93号住	甌			黒 褐 色	〃	縦方向へら削り	底部欠損

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
2	〃	甕			褐色	〃	〃	一部欠損
3	〃	小形甕			〃	〃	不定方向ヘラ削り	口縁～体部
4	〃	甕			〃	〃	縦方向ヘラ削り	〃
5	〃	〃			〃	〃	〃	〃
6	〃	〃			〃	〃	〃	〃
7	〃 床面	坏			黒褐色	〃	不定方向ヘラ削り	〃 ¼
8	〃	〃			〃	〃	〃	〃
9	〃	〃			褐色	〃	〃	一部欠損
10	〃	〃			〃	〃	〃	〃
11	〃	〃			〃	〃	〃	〃 ½
94-1	94号住床面	長甕			〃	〃	斜方向ヘラ削り	口縁～体部
2	〃	鉢			〃	〃	〃	〃
3	〃 床面	坏			〃	〃	不定方向ヘラ削り	〃 ¼
4	〃 〃	〃			明褐色	〃	横方向ヘラ削り	完形
95-1	95号住	甕			赤褐色	〃	縦方向ヘラ削り	口縁～体部
2	〃 〃	〃			褐色	〃	〃	底部
3	〃 〃	〃			〃	〃	〃	〃
4	〃 〃	坏			〃	〃	横方向ヘラ削り	口縁～底部
5	〃 〃	〃			〃	〃	〃	〃 ½
96-1	96号住	甕			黒褐色	〃	縦方向ヘラ削り	口縁～体部
2	〃 床面	〃			褐色	〃	斜方向ヘラ削り	口縁～底部 ½
3	〃 〃	〃			〃	〃	不定方向ヘラ削り	〃 ½
4	〃 〃	〃			〃	〃	〃	〃 ½
97-1	97号住	〃	12.0	3.8	〃	〃	〃	ほぼ完形
2	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～底部 ½
98-1	98号住	〃			〃	〃	〃	〃
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃
99-1	99号住	甕			〃	縦ナデ	縦方向ヘラ削り	一部欠損
2	〃	甕			〃	横ナデ	横方向ヘラ削り	口縁～体部
3	〃	小形甕			〃	〃	縦方向ヘラ削り	一部欠損
4	〃	甕			赤褐色	〃	斜方向ヘラ削り	底部
5	〃	坏			黒褐色	〃	不定方向ヘラ削り	口縁～底部 ½
6	〃	〃			褐色	〃	〃	〃 ½
100-1	100号住	埴			赤褐色	〃	〃	底部のみ残存
2	〃	灰釉埴			灰白色	ロクロ成形	〃	〃
101-1	101号住	長甕			黄褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁～体部上位
2	〃	〃			赤褐色	〃	〃	〃 中位
102-1	102号住	甕			褐色	〃	横方向ヘラ削り	〃
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃
3	〃	〃			〃	〃	縦方向ヘラ削り	〃
4	〃 表層	須恵坏			灰色	ロクロ成形	〃	口縁部
5	〃	高台付埴			〃	〃	〃	体部～高台部
6	〃	〃			〃	〃	〃	〃
103-1	103号住カマド	甕			赤褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁～体部上位
2	〃 〃	〃			〃	〃	〃	一部欠損
3	〃 〃	〃			〃	〃	〃	底部
4	〃 〃	〃			〃	〃	〃	〃
5	〃 〃	埴			〃	〃	横方向ヘラ削り	体部以下
6	〃	坏			褐色	〃	〃	口縁～底部 ½
7	〃	〃			〃	〃	〃	〃 ½
8	〃	〃			〃	〃	〃	〃 ¼
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃 ¼
10	〃	〃			〃	〃	縦方向ヘラ削り	〃
104-1	104号住	甕			〃	〃	〃	底部のみ残存
2	〃	小形甕	11.3	10.2	〃	〃	縦横方向ヘラ削り	ほぼ完形
3	〃	甕	16.4	15.6	黄褐色	〃	〃	一部欠損
4	〃	坏			褐色	〃	横方向ヘラ削り	口縁～底部 ½
5	〃	〃			〃	〃	斜方向ヘラ削り	ほぼ完形
6	〃	埴			〃	〃	放射状ヘラ研磨	口縁部のみ残存

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
7	〃	石製模造品						
8	〃	〃						
105-1	105号住	坏			褐 色	横ナデ	横方向ヘラ削り	口縁～底部
2	〃	甕			〃	〃	〃	〃
106-1	106号住	坏			〃	〃	不定方向ヘラ削り	〃
2	〃	甕			〃	〃	横方向ヘラ削り	口縁～体部上位
3	〃	〃			〃	〃	〃	〃 中位
107-1	107号住	〃			〃	〃	横方向ヘラ削り	体部下位～底部
2	〃	坏			〃	〃	斜方向ヘラ削り	完形
3	〃	須恵坏			灰 色	ロクロ成形		〃
4	〃	〃			〃	〃		½
5	〃	〃			〃	〃		完形

B区

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
1-1	1号住	坏			褐 色	横ナデ	不定方向ヘラ削り	ほぼ完形
2	〃	甕			〃	〃		底部のみ残存
2-1	2号住	〃			黄 褐 色	〃	縦方向ヘラ削り	口縁～体部
2	〃	〃			黒 褐 色	〃		底部
3	〃	坏			褐 色	〃	不定方向ヘラ削り	口縁～底部½
4	〃	〃			〃	〃	〃	〃 ½
5	〃	〃			〃	〃	〃	約½欠損
6	〃	〃			〃	〃	〃	〃
7	〃	甕(把手)			〃	〃	ナデ	把手のみ残存
8	〃	甕			〃	〃	横ナデ	口縁～体部上位
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃 中位
10	〃	坏			〃	〃	〃	約½
3-1	3号住	高台付埴			灰 色	ロクロ成形		ほぼ完形
2	〃	〃			〃	〃		〃
5-1	5号住	長甕			褐 色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁～体部底部
2	〃	坏			〃	〃	不定方向ヘラ削り	ほぼ完形
3	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～底部½
4	〃	〃			〃	〃	〃	〃
6-1	6号住	壺			〃	〃	ナデ後ヘラ研磨	完形
2	〃	甕			〃	〃		口縁～体部下位
3	〃	〃			〃	〃	横方向ヘラ削り	口縁部のみ残存
4	〃	〃			〃	〃	斜方向ヘラ削り	〃
5	〃	〃			黒 褐 色	〃	縦方向ヘラ削り	〃
6	〃	〃			褐 色	〃	横方向ヘラ削り	〃
7	〃	〃			〃	〃	斜方向ヘラ削り	一部欠損
8	〃	〃			〃	〃	縦方向ヘラ削り	口縁～体部
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃
10	〃	〃			〃	〃	〃	〃
11	〃	〃			〃	〃	〃	〃
12	〃	〃			〃	〃	〃	〃
13	〃	小形甕			〃	〃	〃	ほぼ完形
14	〃	埴			〃	〃	斜方向ヘラ削り	口縁部欠損
15	〃	〃	7.8	6.8	淡 褐 色	〃	〃	ほぼ完形
16	〃	〃	8.4	7.2	〃	〃	ナデ一部ハケメ整形	口縁部一部欠損
17	〃	〃			〃	〃	ナデ一部ヘラ削り	口縁部欠損
18	〃	〃	9.8	9.7	褐 色	指頭ナデ	不定方向ヘラ削り	ほぼ完形
19	〃	〃			〃	横ナデ	〃	口縁部欠損
20	〃	〃			明 褐 色	〃	〃	口縁～体部中位
21	〃	〃	10.8	14.6	褐 色	〃	〃	〃
22	〃	〃			〃	〃	〃	〃
23	〃	〃			赤 褐 色	〃	〃	口縁部欠損

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
24	//	//	13.8	16.1	褐色	//	縦方向ヘラ削り	ほぼ完形
25	//	//	12.6	17.1	//	//	斜方向ヘラ削り	//
26	//	甕				//		口縁～体部
27	//	//				//		口縁部欠損
28	//	//				//		体部下位～底部
29	//	柑	13.6	18.5	黒褐色	放射状ヘラ研磨	放射状ヘラ研磨	ほぼ完形
30	//	//	13.2	18.1	褐色	//	横方向ヘラ削り	//
31	//	坏			赤褐色	横ナデ	不定方向ヘラ削り	約1/2
32	//	//			//	//	//	//
33	//	//	15.5	5.8	褐色	//		約1/4
34	//	//	14.3	6.1	//	//	斜方向ヘラ削り	//
35	//	高坏(羽口転用)			赤褐色	//	縦方向ヘラ削り	脚部のみ残存
36	//	//			//	工具押さえ	//	//
37	//	//			//	ナデ	//	//
38	//	//			//	//	//	坏部裾部欠損
39	//	くぼみ石						
40	//	高坏			赤褐色	ナデ	ナデ	坏部のみ残存
41	//	//			//	ナデ後ヘラ研磨	ナデ後ヘラ研磨	//
42	//	//			//	ナデ	ナデ	//
43	//	//			褐色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	裾部欠損
44	//	//			明赤褐色	//	//	//
45	//	//	17.2	17.0	赤褐色	指頭ナデ	ナデ後ヘラ研磨	一部欠損
46	//	//			//	//	縦方向ヘラ削り	脚部のみ残存
47	//	//			淡褐色	//	//	//
48	//	//			赤褐色	//	//	//
7-1	7号住	甕			黒褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	口縁～体部
2	//	石						
3	//	//						
4	//	小形甕			黒褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	ほぼ完形
5	//	//			//		横方向ヘラ削り	//
6	//	柑			淡褐色	横ナデ	//	//
7	//	//			//	//	//	約1/2
8	//	//			褐色	//	//	底部のみ残存
9	//	高坏			//	//	縦方向ヘラ研磨	坏部のみ残存
10	//	//			淡黄褐色	//	//	裾部欠損
11	//	//			明赤褐色	//	//	坏部のみ残存
12	//	//			淡褐色	//	//	脚部のみ残存
8-1	8号住	長甕			//	//	斜方向ヘラ削り	口縁～体部
2	//	//			//	//		//
3	//	甕			//	//		
4	//	//			//	//		底部のみ残存
5	//	塊			褐色	//		約1/4
6	//	坏			黒褐色	//		約1/4
7	//	//			褐色	//		約1/2
8	//	砥石						
9-1	9号住	紡錘車			//			完形
2	//	甕			褐色	//	斜方向ヘラ削り	底部のみ残存
3	//	カマド支脚			淡褐色	//	縦方向ヘラ削り	下半のみ残存
10-1	10号住	甕			明赤褐色	//	斜方向ヘラ削り	底部のみ残存
2	//	台付甕			黒褐色	//	縦方向ヘラ削り	口縁部欠損
3	//	坏			//	//	不定方向ヘラ削り	口縁～底部1/4
11-1	13号住	甕			淡黄褐色	//		口縁部のみ残存
13-1	13号住貯蔵穴	甕			淡黄褐色	//	斜方向ヘラ削り	口縁～体部上位
2	//	甕	23.6	31.2	//	//	//	完形
3	//	//			褐色	//	//	体部下半
4	//	坏	12.4	5.0	//	//	横方向ヘラ削り	ほぼ完形
5	//	//			明赤褐色	//	不定方向ヘラ削り	口縁～底部1/4
6	//	//			褐色	//	斜方向ヘラ削り	// 1/4

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
7	〃	〃			〃	〃	横方向ヘラ削り	〃 ¼
8	〃	〃			〃	〃	〃	完形
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃
14-1	14号住	壺			〃	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁へ体部
2	〃	坏				〃	横方向ヘラ削り	〃
3	〃	〃			赤褐色	〃	不定方向ヘラ削り	一部欠損
4	〃	高台付碗			灰色	ロクロ成形	〃	完形
15-1	15号住	長壺			褐色	横ナデ	斜方向ヘラ削り	口縁へ体部
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃
3	〃	〃			黒褐色	縦ナデ	〃	底部
4	〃	〃			褐色	横ナデ	〃	体部¼底部分欠損
5	〃	〃			〃	〃	横斜方向ヘラ削り	口縁部¼体部¼
6	〃	坏	9.6	3.5	灰褐色	〃	斜方向ヘラ削り	ほぼ完形
7	〃 かまど	〃	10.2	3.0	褐色	〃	横方向ヘラ削り	完形
8	〃	〃	10.35	3.8	灰褐色	〃	〃	〃
9	〃	〃	10.25	3.4	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃			褐色	〃	斜方向ヘラ削り	口縁へ体部
11	〃	〃		3.8	〃	〃	横方向ヘラ削り	〃
12	〃	〃			〃	〃	〃	〃
13	〃	坏	11.6	4.0	灰褐色	横ナデ	横斜方向ヘラ削り	ほぼ完形
14	〃	〃	12.6	3.7	褐色	〃	〃	口縁部へ体部¼
16-1	16号住	壺			〃	〃	〃	〃 ¼
2	〃	〃	20.6	34.7	灰黄褐色	横ナデ	縦横方向ヘラ削り	ほぼ完形
3	〃	甌	24.95	32.0	明褐灰色	〃	〃	完形
17-1	17号住	壺	20.7	6.1	褐色	〃	横方向ヘラ削り	口縁へ体部上位
18-1	18号住	坏	12.5	4.8	鈍い褐色	〃	〃	ほぼ完形
20-1	20号住	坏			灰白色	〃	〃	〃
2	〃	〃			〃	〃	斜め横方向ヘラ削り	口縁へ底部¼
3	〃	〃	11.8	4.4	明褐色	〃	不定方向ヘラ削り	ほぼ完形
4	〃	〃			黒褐色	〃	斜方向ヘラ削り	口縁へ体部
5	〃	〃			〃	〃	横方向ヘラ削り	〃
6	〃	〃	11.8	4.5	黄褐色	〃	〃	完形
7	〃	〃			〃	〃	〃	口縁へ体部¼
8	20号住	坏			褐色	横ナデ	〃	口縁へ体部
9	〃	土錘			〃	〃	〃	一部欠損
10	〃	〃			〃	〃	〃	完形
11	〃	〃			〃	〃	〃	〃
12	〃	〃			〃	〃	〃	〃
13	〃	〃			〃	〃	〃	〃
21-1	21号住	長壺	21.0	33.0	褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	口縁へ体部一部欠損
2	〃	〃	22.8		〃	〃	縦斜方向ヘラ削り	口縁へ体部上位
3	〃	坏	13.0	3.9	赤褐色	〃	斜方向ヘラ削り	ほぼ完形
4	〃	〃	13.1	4.7	褐色	〃	横斜方向ヘラ削り	〃
5	〃	小形壺			〃	〃	横方向ヘラ削り	口縁へ体部¼
24-1	24号住	坏			黒褐色	〃	斜方向ヘラ削り	〃 ¼
2	〃	〃			にぶい褐色	〃	横方向ヘラ削り	¼
3	〃	〃	11.3	4.0	明灰色	〃	〃	¾
25-1	25号住	小形壺			明赤褐色	〃	縦斜め方向ヘラ削り	口縁へ体部¼
2	〃	坏	12.4	3.5	褐色	〃	横斜め方向ヘラ削り	¼
3	〃	〃			〃	〃	〃	½
4	〃	土錘			〃	〃	〃	〃
26-1	26号住	壺			〃	横ナデ	斜め方向ヘラ削り	口縁へ体部上位¼
2	〃	鉢			淡黒色	〃	斜ハケメ整形	底部欠損
3	〃	坏	12.2	4.7	褐色	〃	斜め方向ヘラ削り	約¼
4	〃	〃			〃	〃	不明瞭	口縁部

第II章 遺構と遺物

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存	
			口径	器高		内面	外面		
5	〃	高坏			褐色		不定方向ヘラ削り	1/2	
6	〃 埋土					〃	〃	横方向ヘラ削り	坏部
7	〃 埋					〃	〃	〃	裾部
8	〃	高坏			淡黄色	手捏ね	〃	1/4	
9	〃	粗製土器		3.5				〃	ほぼ完形
27-1	〃	甕							
2	27号住	小形壺	9.1	6.4	褐色	横ナデ	横方向ヘラ削り	完形	
3	〃	甕			〃	〃	縦方向ヘラ削り	底部	
4	〃	高坏	12.4	8.5	〃	〃	〃	1/2	
5	〃	坏	13.0	5.3	〃	〃	斜め方向削り	3/8	
6	〃	〃	13.0	5.1	〃	〃	〃	1/2	
7	〃	〃	12.0	5.2	〃	横ナデ	斜め横方向ヘラ削り	完形	
8	27号住埋土	〃	10.8	5.6	〃	〃	横方向ヘラ削り	完形	
9	〃	〃	13.5	5.8	〃	〃	横斜め方向ヘラ削り	〃	
10	〃 一括埋土	〃	14.0		〃	〃	〃	口縁～体部	
11	〃	石(角閃石安山岩)					〃	完形	
28-1	28号住	甕	19.4	6.6	褐色	横ナデ	横ナデ	口縁部	
2	〃	壺			赤褐色	〃	斜方向ヘラ削り、 一部ハケメ整形	口縁部、底部欠損	
3	〃	長頸壺	12.6	5.4	明黄褐色	〃	横、縦方向ヘラ削り	〃	
4	〃	坏	13.2	4.2	鈍い褐色	〃	横斜め方向ヘラ削り	口縁～体部	
29-1	29号住	甕	12.4	13.5	黄褐色	〃	〃	口縁～体部下半	
2	〃	〃	17.2	9.8	黒褐色	〃	斜め方向ヘラ削り	口縁～体部中位	
3	〃	〃		11.7	褐色	〃	縦斜方向ヘラ削り	口縁～体部上位	
4	〃	長甕			〃	〃	斜方向ヘラ削り	口縁～体部中位	
5	〃	甕	20.2	12.8	黒褐色	〃	〃	〃	
6	〃	〃	13.8	14.5	黄褐色	横ナデ	〃	ほぼ完形	
7	〃	〃	12.0		褐色	〃	横方向ヘラ削り	体部下半～底部欠損	
8	〃	高坏	16.2	3.9	〃	〃	〃	坏部	
9	〃	鉢	18.8	5.7	〃	〃	〃	口縁～体部	
10	〃	坏	12.2	4.9	〃	〃	〃	〃	
11	〃	〃	10.2	4.2	〃	〃	〃	ほぼ完形	
12	〃	〃			〃	〃	〃	〃	
13	〃	坏	14.2	3.9	浅黄褐色	〃	〃	〃	
14	〃	〃	10.6	3.4	褐色	〃	〃	〃	
15	〃	〃			〃	〃	〃	1/2	
16	〃	〃	10.5	4.8	〃	〃	〃	ほぼ完形	
17	〃	〃	11.6	4.3	黒褐色	〃	〃	一部欠損	
18	〃	〃	11.8	4.1	褐色	〃	〃	〃	
19	〃	〃	13.5	4.4	灰褐色	〃	〃	〃	
20	〃	〃	14.0	4.2	褐色	〃	〃	口縁～体部	
21	〃	〃	12.5	4.2	〃	〃	〃	ほぼ完形	
22	〃	〃	12.5	4.1	〃	〃	〃	〃	
23	〃	〃	12.4	4.3	赤褐色	〃	〃	口縁～体部	
24	〃	〃	12.7	3.2	褐色	〃	〃	〃	
25	〃	〃	14.0	3.9	赤褐色	〃	〃	〃	
30-1	30号住溝一括	甕又は甕	19.2	5.9	灰褐色	〃	斜方向ヘラ削り	〃	
2	〃	坏			褐色	〃	斜横方向ヘラ削り	1/2	
3	〃	〃			灰褐色	〃	横方向ヘラ削り	1/2	
4	〃	〃			褐色	〃	不定方向ヘラ削り	1/2	
5	〃	〃	12.1	5.0	〃	〃	斜横方向ヘラ削り	ほぼ完形	
6	〃 かまど内	高坏			明褐色	〃	縦方向ヘラ削り	坏部	
7	〃 かまど	坏			〃	〃	横方向ヘラ削り	ほぼ完形	
8	〃 かまど	〃			褐色	〃	〃	1/2	
9	〃	〃			〃	〃	〃	1/2	

遺物 番号	出土遺構	器種	法量		色調	技法		残存
			口径	器高		内面	外面	
10	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	1/3
11	〃	〃			〃	〃	横斜方向へら削り	坏
31-1	31号住	甕			黒褐色	〃	横方向へら削り	口縁～体部上位
2	〃	〃			灰褐色	〃	〃	口縁～体部下位
3	〃	甕			黄褐色	縦ナデ	縦方向へら削り	完形
4	〃	高坏			黒褐色	横ナデ	横ナデ	口縁坏
5	〃	坏	12.4	5.3	褐色	〃	不定方向へら削り	1/2
6	〃	〃			〃	〃	横方向へら削り	口縁～体部
7	〃	〃			赤褐色	〃	〃	1/2
8	〃	〃			褐色	〃	横斜方向へら削り	1/3
9	〃	〃			黒褐色	〃	横方向へら削り	1/2
10	〃	鉢			褐色	〃	〃	口縁～体部
32-1	32号住	甕	20.1	24.8	黒褐色	〃	〃	ほぼ完形
2	〃	小形甕	13.8	11.9	褐灰色	〃	〃	一部欠損
3	〃	長甕又は甕	22.1	20.5	〃	〃	縦方向へら削り	口縁～体部中部1/3
4	〃	壺	13.3		黄褐色	〃	不定方向へら削り	口縁～体部下位
33-1	33号住	甕			黒褐色	〃	〃	〃
2	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～体部上位
3	〃	〃			黄褐色	〃	斜方向へら削り	底部のみ残存
4	〃	小形甕			褐色	〃	横方向へら削り	口縁～体部
5	〃	高坏			〃	〃	〃	坏部～柱部
6	〃	坏			〃	〃	〃	口縁～底部1/3
7	〃	〃			〃	〃	不定方向へら削り	〃 1/4
8	〃	〃			〃	〃	〃	〃
9	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	ほぼ完形
10	〃	〃			〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	11.3	4.3	〃	〃	横方向へら削り	口縁～底部1/3
12	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/4
13	〃	〃			〃	〃	〃	〃
14	〃	〃			〃	〃	斜方向へら削り	〃 1/3
15	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/3
16	〃	甕			〃	〃	縦方向へら削り	口縁～体部上位
17	〃	長甕			〃	〃	〃	〃 中位
18	〃	甕			〃	〃	〃	〃 中位
19	〃	砥石(提砥)			〃	〃	〃	〃
35-1	35号住	甕	22.9	24.4	黒褐色	ナデ後縦方向研磨	〃	ほぼ完形
2	〃	小形甕			黄褐色	横ナデ	斜方向へら削り	体部上位～底部
36-1	36号住	坏			褐色	〃	不定方向へら削り	口縁～底部1/3
39-1	39号住	甕			〃	〃	横方向へら削り	口縁～体部1/3
2	〃	〃			〃	〃	〃	口縁部
3	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～体部
4	〃	坏			〃	〃	不定方向へら削り	口縁～底部1/2
5	〃	高坏			〃	〃	縦方向へら削り	坏部上位欠損
40-1	40号住	甕			〃	〃	横方向へら削り	口縁～体部上位
2	〃	〃			〃	〃	〃	底部のみ残存
3	〃	高坏			〃	〃	ナデ	坏部
4	〃	坏			赤褐色	〃	不定方向へら削り	ほぼ完形
42-1	42号住カマド	甕			淡黄褐色	〃	縦方向へら削り	口縁～体部下位
2	〃	〃			明赤褐色	〃	〃	〃 上位
3	〃	〃			〃	横方向ハケメ整形	斜方向へら削り	〃 中位
4	〃	〃			赤褐色	ナデ	〃	〃 中位
5	〃	〃			褐色	横ナデ	〃	〃 上位
6	〃	〃			〃	指頭ナデ	〃	体部中位～底部
7	〃	〃			〃	横ナデ	不明瞭	底部のみ残存
8	〃	坏	13.0	4.8	〃	〃	不定斜方向へら削り	一部欠損
9	〃	〃	12.6	5.9	〃	〃	〃	完形
10	〃	〃	12.2	5.6	〃	〃	横方向へら削り	完形

歌舞伎遺跡遺物一覧

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
11	〃	〃	11.3	6.1	〃	〃	〃	〃
12	〃	丸形土鍾			淡褐色			〃
13	〃	〃			〃			〃
14	〃	〃			〃			約1/2
44-1	44号住	高台付壺			灰褐色	ロクロ成形		口縁部から体部1/2
45-1	45号住	壺			〃	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁～体部中位
2	〃	〃			褐色	〃	斜方向ヘラ削り	底部一部欠損
46-1	46号住	鉢			黄褐色	〃	不定方向ヘラ削り	口縁部1/2
2	〃	壺	15.4	6.1	褐色	〃	〃	口縁～体上位1/4
3	〃	鉢			〃	〃	横斜方向ヘラ削り	〃 1/2
4	〃 埋土	坏			明赤褐色	〃	横方向ヘラ削り	口縁～体上位1/2
47-1	47号住	小形広口壺	9.3	12.4	褐色	〃	縦方向ヘラ削り	ほぼ完形
2	47号住カマド	高坏	14.2		〃	〃	横方向ヘラ削り	坏部
3	〃	坏	14.0	4.3	〃	〃	横斜方向ヘラ削り	1/4
4	47号住	〃	13.35	4.35	〃	〃	〃	口縁部1/2欠損
5	〃	土鍾			〃			完形
6	〃	〃			〃			〃
7	〃	管玉						一部欠損
48-1	48号住	瓶	23.1	28.5	黄褐色	縦横ナデ	縦斜方向ヘラ削り	口縁部1/2体部下位 1/2欠損
2	〃	壺			灰褐色		斜方向ヘラ削り	底部～体部の下位
3	〃 埋土	小形壺	12.8	12.2	褐色	横ナデ	縦方向ヘラ削り	口縁部～体部1/2欠損
49-1	49号住	壺			〃	〃	横方向ヘラ削り	口縁部
2	〃	〃			〃	縦ナデ	縦方向ヘラ削り	底部
3	〃	〃			〃	横ナデ	〃	口縁～体部
4	〃	瓶			〃	縦ナデ	〃	〃
5	〃	杯			〃	横ナデ	横方向ヘラ削り	一部欠損
6	〃	〃			〃	〃	不明瞭	1/2
7	〃	〃			〃	〃	不定方向ヘラ削り	1/2
50-1	50号住	壺			〃	〃	斜方向ヘラ削り	口縁～体部
2	〃	〃	17.0	25.9	黄褐色	〃	〃	ほぼ完形
3	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～体部
4	〃	高坏	19.2		褐色	〃	縦方向ヘラ削り	坏～脚部
5	〃	〃			赤褐色	〃	〃	脚部のみ残存
6	〃	〃			褐色	〃	〃	〃
7	〃	〃			淡褐色	横方向ハケメ整形	〃	〃
8	〃	鉢			〃	〃	〃	口縁～底部1/2
9	〃	高坏			黄褐色	〃	横方向ヘラ削り	坏部
10	〃	〃			褐色	〃	〃	坏～脚部
11	〃	柑	10.1	9.2	黄褐色	〃	不定方向ヘラ削り	口縁部一部欠損
12	〃	〃	20.2		淡褐色	〃	〃	口縁部欠損
51-1	51号住	壺	20.2		褐色	〃	縦方向ヘラ削り	口縁～体部中位
2	〃	〃			〃	〃	〃	〃
3	〃	〃	20.6		〃	〃	〃	〃
4	〃	〃			〃	〃	〃	〃
5	〃	〃			〃	〃	〃	〃
6	〃	〃			黒褐色	〃	〃	〃
7	〃	〃	12.4	8.0	褐色	〃	斜方向ヘラ削り	〃
8	〃	鉢	15.7	11.3	〃	〃	不定方向ヘラ削り	完形
9	〃	〃	20.7		〃	〃	斜方向ヘラ削り	口縁～体部1/4
10	〃	〃	24.1		〃	〃	〃	〃 1/4
11	〃	小形壺			黄褐色	〃	ハケメ整形後ナデ	口縁～体部上位
12	〃	坏	11.0	4.1	褐色	〃	斜方向ヘラ削り	ほぼ完形
13	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～底部1/2
14	〃	〃	11.8	4.3	〃	〃	〃	完形
15	〃	〃	12.2	3.7	〃	〃	不明瞭	口縁部欠損
16	〃	〃			淡褐色	〃	不定方向ヘラ削り	口縁～底部1/2
17	〃	〃	11.1	3.9	褐色	〃	〃	〃 1/4
18	〃	〃			〃	〃	〃	〃 1/2

遺物 番号	出 土 遺 構	器 種	法 量		色 調	技 法		残 存
			口径	器高		内 面	外 面	
19	〃	変形甕	13.2	18.4	淡黄褐色	〃	横斜方向へら削り	一部欠損
20	〃	甕			褐色	〃	縦斜方向へら削り	約 $\frac{1}{2}$
21	〃	甕			黄褐色	〃	横方向へら削り	底部のみ残存
52-1	52号住	甕	24.0	28.2	暗赤褐色	〃	縦方向へら削り	口縁部一部欠損
2	〃	〃			褐色	〃	〃	〃 欠損
3	〃	甕			〃	〃	不明瞭	体部下位～底部
4	〃	坏			〃	〃	横方向へら削り	口縁～底部 $\frac{1}{4}$
53-1	53号住	長甕			黄褐色	〃	縦方向へら削り	口縁～体部下位
2	〃	〃			褐色	〃	〃	〃
3	〃	〃			〃	〃	〃	口縁～体部中位
4	〃	石坏						
5	〃	坏			黄褐色	〃	横方向へら削り	口縁～底部 $\frac{1}{2}$
6	〃	〃			赤褐色	〃	〃	〃 $\frac{1}{4}$
7	〃	〃			褐色	〃	〃	〃 $\frac{1}{2}$
8	〃	〃			〃	〃	不定方向へら削り	〃 $\frac{1}{4}$
9	〃	〃			〃	〃	〃	〃 $\frac{1}{2}$
329-1	ピットL-22、23	埴			〃	〃	横方向へら削り	口縁部欠損
2	〃 L-22、23	〃			〃	〃	〃	〃
3	〃 L-22、23	高坏			〃	〃	縦方向へら研磨	坏部と脚部
4	〃 L-22、23	〃			〃	不明瞭	〃	坏部
5	〃 L-22、23	〃			〃	〃	〃	〃
6	〃 L-22、23	〃			〃	横ナデ	縦方向へら削り	裾部
7	〃 L-22、23	〃			〃	〃	〃	脚部
330-1	9号溝J-28	甕						
2	〃 J-28	〃						
3	L-12号溝一括	高坏						
4	〃	〃						
5	〃	須恵甕			青灰色	ロクロ成形		口縁部欠損
6	2号溝H-32	須恵坏				〃		口縁部
7	〃	紡錘車						約 $\frac{1}{2}$
8	溝L-25	坏				横ナデ	横方向へら削り	〃
9	〃	鉢				〃	斜方向へら削り	体部～底部
10	12溝H-30	坏			褐色	〃	不定方向へら削り	口縁～底部 $\frac{1}{2}$
11	〃 F-28	〃			〃	〃	横方向へら削り	〃
12	溝K-24	須恵坏			灰色	ロクロ成形		〃
13	溝I-25	〃			〃	〃		〃

中世国産焼締陶器

図番号	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
349-1	甕(円形加工)	J~L-13~15		白色鈹物粒多い。焼締。灰色。	体部片。外面に自然釉がおよび、内面に指整形の撫あり。	常滑焼か
2	甕片	A区G-21東壁、B軽石層中		白色鈹物粒多い。焼締。黒灰色。	体部片。外面に、叩あり。内面に指整形の撫あり。	常滑焼
3	甕片	A区I-21		白色鈹物粒多い。焼締。黒灰色。	体部片。外面に擦痕あり。内面に指整形の撫あり。	常滑焼
4	甕片	B区E-12B軽石上		白色鈹物粒多い。焼締。灰色。	体部片。外面に擦痕あり。内面に指整形の撫あり。	常滑焼
5	甕片	B区J-26		白色鈹物粒多い。焼締。灰色。	体部片。外面に自然釉あり、内面に指整形の撫と指頭圧痕あり。	常滑焼
6	甕片	B区K-19		白色鈹物粒若干。焼締。灰色。	体部片。外面に自然釉あり、内面に整形時の撫と擦痕あり。	渥美焼か
7	鉢片	B区G-18		白色鈹物粒若干。焼締。灰色。	口縁、片口部片。外面に自然釉あり。内面に横撫と工具による擦痕あり。	渥美焼か
8	甕片	A区B-17		白色鈹物粒若干。焼締。灰色。	口縁部片。内外面に横撫あり。	常滑焼

中世国産施釉陶器

図番号	土器種	出土位置	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
337-1	碗	B区G-26溝、埋		黒褐色。密。灰色。硬質	天目茶碗の口縁部片。釉調は鉄釉内・外面に浅く轆轤目あり。	美濃焼か
2	碗	B区G-18		黒褐色。密。灰色。硬質	天目茶碗の体部片。釉調は鉄釉釉溜りが外面にあり、露胎に轆轤右廻りの篋削目あり。	瀬戸焼か
3	瓶	B区表探	推定 頸径4・8	淡緑色。密。淡灰色。硬質	瓶類の頸部片。釉調は灰釉。くびれ部内面に接合部のめくれあり、その内面に糸切痕あり。内面は無釉。	瀬戸焼か
4	瓶	B区I-28		淡緑色。密。淡灰色。硬質	瓶類の肩部片。釉調は灰釉。内面無釉。内面に指頭圧痕あり。	瀬戸焼
5	瓶	B区I-28		淡緑色。密。灰色。硬質	瓶類の肩部片。釉調は灰釉。外面施釉。内面無釉。内面に指頭圧痕あり。	瀬戸焼
6	瓶	B区H-30		淡緑色。密。灰色。硬質	瓶類の体部片。釉調は灰釉。外面施釉。内面無釉。外面に内面に紐作り痕と指頭圧痕あり。	瀬戸焼
7	瓶子か梅瓶	B区H-19		淡緑色。密。灰色。硬質	瓶類の体部上半片。釉調は灰釉。外面施釉。内面無釉。外面に3+α条の沈線あり。内面に紐作り痕と横撫痕あり。	瀬戸焼
8	不詳	A区H-9	推定 底径8・3	淡緑色。密。黄灰色。硬質	器種不詳の体部下半。釉調は灰釉。底部を除く、内・外面に施釉あり。内・外面に浅い轆轤目あり。	美濃焼か
9	花瓶か	B区G-25土壇		褐色。密。灰色。硬質	体部上半片。釉調は鉄釉。外面施釉。内面無釉。外面に5条の沈線と印花文あり。内面に紐作り痕と指頭圧痕あり。	瀬戸焼
10	卸皿	B区I-29		黄緑色。密黄灰色。硬質	体部片。釉調は灰釉。外面無釉。内面に卸の刻目あり。刻みは板状工具の押えによる。体部外面下半の露体部に横撫あり。	美濃焼
11	卸皿	B区K-20溝埋		欠損不詳。密。黄灰色。硬質	底部片。内・外面無釉内面に卸の刻目あり。刻みは板状工具の押えによる。底部に糸切痕あり。	美濃焼
12	卸皿	A区I-7		欠損不詳。密。灰色。硬質	底部片。内・外面無釉内面に卸の刻目あり。刻みの工具不詳。底面に糸切痕あり。	瀬戸か美濃焼

図番号	土器種	出土位置	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
337-13	卸皿	A区G-18		欠損不詳。密。灰色。硬質	底部から体部にかけての破片。内・外面無釉。内面に卸の刻目あり。刻みの工具不詳。底面に轆轤右廻りの糸切痕あり。	瀬戸焼
338-14	皿	B区K-20 溝埋	推定口径12.8	淡緑色。密。黄灰色。硬質	口縁部片。灰釉。口縁部内・外面施釉。口縁部内面に浅い立ち上りあり。内・外面に轆轤による横撫あり。	瀬戸か美濃焼
16	皿か卸皿	A区G-21	推定口径12.4	淡緑色。密。灰色。硬質	口縁部片。灰釉。口縁部内・外面施釉。釉境は酸化し、鉄足状露胎部の内・外面に轆轤による横撫あり。	瀬戸か美濃焼
17	皿	B区、17区内溝埋	推定底径6.02	淡緑色。密。灰色。硬質	口縁部片。灰釉。口縁部の内・外面施釉・釉境は酸化し、鉄足状。露胎部の内・外面に轆轤による横撫あり。底面に轆轤右廻りによる糸切痕あり。	瀬戸か美濃焼
18	皿	B区17号住居周辺	推定口径13.0 器高2.6	淡褐色。密。灰色。硬質	灰釉。内面から口縁部外面にかけて施釉。外面、露胎部に轆轤による横撫あり。底面は笥による再調整。高台は付高台。重ね焼痕あり。	瀬戸か美濃焼
19	菊皿	B区G-19	推定口径12.4 器高3.0	淡緑色。密。灰色。硬質	灰釉。外面・底と体部下半が露胎部には轆轤による横撫あり。底面は轆轤右廻りによる糸切痕があり。付高台の接合時に内面整形を受ける。	瀬戸か美濃焼
20	平鉢	A区N-17		淡緑色。密。黄灰色。硬質	灰釉。内・外面に施釉あり。	美濃焼
21	平鉢	B区J-28 溝埋		淡緑色。密。灰色。硬質	灰釉。内・外面に施釉あり。	美濃焼
22	鉢	A区J-17		乳灰色。密。灰色。硬質	灰釉。内・外面に施釉あり、釉はカセ気味。体部外面に轆轤目あり。	美濃焼
23	鉢	B区K-19		暗淡緑色。密。灰色。硬質	灰釉。内・外面に施釉あり。体部外面に轆轤目あり。	瀬戸焼
24	足付平鉢	A区I-21		黄灰色。密。灰色。硬質	灰釉。内・外面に施釉あり。外面体部下方は露胎となる。露胎は轆轤右廻りによる笥削り。脚は貼付。	瀬戸か美濃焼
25	平鉢	A区L-18		黄灰色。密。灰色。硬質	灰釉。内・外面に施釉あり。内・外面の体部下方は露胎となる。	瀬戸か美濃焼

中世船載陶磁器

図番号	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成	特徴	摘要
334-1	水注か (青白磁)	B区J-17、耕作土	推定口径8、4	純白。軟調。	釉は薄く、淡い青色および、気泡は細かい。	景徳鎮窯系か
2	不詳 (青白磁)	B区N-25耕作土	推定径 7、3	白色。軟調。	釉は薄く、淡い青色および、細貫入。気泡は細かい。内面は無釉。外面に雷文帯の印文あり。	景徳鎮窯系
3	梅瓶 (青白磁)	B区1号溝、埋土	体部片	白色。軟調。	釉は薄く、淡い青色および、細貫入。気泡は目立ず透明感強い。外面に劃文あり。	
4	碗(青磁)	B区G-21	口縁部片	淡灰色。硬調。	釉は厚く、くすぶった青緑色。外面に蓮弁を劃する。	龍泉窯系
5	碗(青磁)	A区L-10 (2層)	口縁部片	白色。硬調。	釉は厚く、青緑色をおび粘手。口縁は紫口化する。外面に蓮弁を劃する。	龍泉窯か
6	碗(青磁)	B区L-18住埋土上面	口縁部片	淡灰色。硬調。	釉は厚く、くすぶった青緑色。外面に蓮台を劃する。	龍泉窯系
7	碗(青磁)	B区H-34耕作土	口縁部片	白色。軟調。	釉は薄く、淡青緑色および粘手。外面に蓮弁を劃する。	龍泉窯か

第II章 遺構と遺物

図番号	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成	特徴	摘要
334-8	碗(青磁)	A区H-11、3層	体部片	淡灰色。軟調。	釉は薄く、くすぶった青緑色。外面に劃文された蓮台が2単位あり。	龍泉窯系
9	碗(青磁)	B区J-25、耕作土	口縁部片	淡灰色。軟調。	釉は薄く、淡青色で透明感あり。外面に蓮台を劃する。	龍泉窯系
10	碗(青磁)	A区表採	体部片	淡灰色。軟調。	釉は薄く、淡褐色で透明感あり。大まかな貫入する。外面に蓮弁を2単位、劃す。	龍泉窯系
11	碗(青磁)	B区表採	体部片	淡灰色。軟調。	釉は厚く、淡青緑色で、大まかな貫入する。外面に蓮弁を3単位、劃す。	龍泉窯か
12	碗(青磁)	B区J-14耕作土	口縁部片	淡灰色。軟調	釉は厚く、淡青緑色で、細貫入する。外面に大まかな蓮弁を劃す。	龍泉窯か
13	碗(青磁)	B区G-21	口縁部片	灰褐色。軟調	釉は厚く、淡青緑色。外面に大まかな蓮弁を劃す。	龍泉窯系
14	碗(青磁)	A区表採	口縁部片	淡暗赤褐色。軟調	釉は薄く、淡茶褐色をおび透明感強い。やや酸化気味体部外面に轆轤目あり。	北方か南方か不詳。
15	碗(青磁)	A区K-21	体部片	灰色。硬調	釉は薄く、淡青褐色をおびる。体部外面に蓮弁を劃す。	龍泉窯系か
16	碗(青磁)	A区V-21A址	体部片	灰色。硬調	釉は薄く、淡青緑色をおび細貫入する。体部外面に蓮弁を劃す。	龍泉窯系
17	碗(青磁)	B区J~L-B~15耕作土	体部片	白色。軟調	釉は薄く、青緑色をおび細貫入する。	舶載か邦製(伊万里)か不詳
18	碗(青磁)	B区I-33溝埋土	体部片	灰色。軟調	釉は薄く、淡青緑色をおびる。細貫入する。	龍泉窯系
19	碗(青磁)	B区K-27耕作土	体部片	淡灰色。軟調	釉は厚く、淡青緑色をおびる。細貫入する。	龍泉窯系
20	碗(青磁)	B区下-19耕作土	体部片	灰色。軟調	釉は厚く、淡青緑色をおびる。細貫入する。	龍泉窯系
21	碗(青磁)	B区L-24II層	体部片	白色。軟調	釉は薄く、淡青緑色をおびる。細貫入する。	龍泉窯系か
-22	碗(青磁)	B区L-18住埋土上面	体部片	純白色。硬調。	釉は薄く、淡青色をおびる。気泡細く、浮濁する。内面に劃文あり。	龍泉窯系景德鎮窯系か
23	碗(青磁)	B区下-4耕作土	体部片	灰色。軟調	釉は薄く、淡青緑色をおびる。細貫入する。	龍泉窯系
24	碗(青磁)	B区E-12B軽石上面	体部片	灰色。軟調	釉は薄く、淡青緑褐色をおびる。細貫入する。内面に劃文あり。	龍泉窯系か
25	碗(青磁)	B区L-18	体部片	白色。軟調	釉は厚く、淡青緑色をおびる。気泡多く乳濁する。内面に縞状劃文あり。	龍泉窯系か
26	碗(青磁)	B区H-32	体部片	白色。軟調	釉は薄く、淡青緑色をおびる。大まかな気泡が入り透明感強い。	古伊万里か
335-27	碗(青磁)	A区E-15耕作土	体部片	灰色。軟調	釉は薄く、淡青褐色をおびるがかせている。内面にわずかな凹みあり。	龍泉窯系
28	碗(青磁)	B区L-16 2層	底部片	灰色。軟調	釉は薄く、淡青緑褐色をおびる。外面が部分的に露胎あり。内面に印花文が部分的に残り、圏線あり。	
29	碗(青磁)	B区M-19耕作	底部片	白色。軟調	釉は厚く、淡青緑色をおびる。細い気泡多く乳濁する。高台側の素地は鉄足状に酸化する。	龍泉窯系
30	鉢(青磁)	A区表採	底部片	灰色。軟調	釉は薄く、淡青緑褐色をおびる。内面に圏線がめぐり、内に劃文あり。	龍泉窯系
31	浅鉢(青磁)	B区C-17耕作土	体部片	乳白色。軟調	釉は厚く、青緑色および砧手。二重貫入生じる(官窯手)。内面に圏線とを作り出す。	龍泉窯
32	碗(青磁)	B区表採	体部片	乳白色。軟調	釉は厚く、青緑色をおびる砧手。二重貫入生じる(官窯手)。	龍泉窯
34	浅銭(青磁)	A区K-4耕作土	体部片	乳白色。軟調	釉は厚く、青緑色をおびる。二重貫入生じる(官窯手)。高台部は鉄足状に酸化。	龍泉窯

図番号	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成	特徴	摘要
335-35	皿(青磁)	A区H-19耕土	口縁部片	淡灰色。軟調	釉は厚く、淡青緑褐色をおび細貫入する。口縁な稜花をなす。	龍泉窯系
36	鉢(青磁)	B区H-18耕土	高台部片	白色。軟調	釉は薄く、青緑色をおびる砧手。気泡が多く乳濁する。高台端部は生掛の削り取りあり。	
37	大盤(青磁)	B区I-29耕土	底部片	白色。軟調	釉は厚く、青緑色で若葉色をおびる天龍寺手。内面に劃文あり。	龍泉窯
38	盤(青磁)	A区G-20 3層	体部片	白色。軟調	釉は厚く、青緑色をおびる砧手。細かい気泡を多く含み乳濁する。	龍泉窯
39	大盤(青磁)	B区L-25 3層	体部片	白色。軟調	釉は厚く、青緑色をおびる砧手。細かい気泡を多く含み乳濁する。	龍泉窯
40	大鉢(青磁)	B区J-13	口縁部片	淡灰色。軟調	釉は厚く、青緑色で若葉色をおびる天竜寺手。口縁端部は端折りとなる。	龍泉窯
41	小皿(白磁)	B区表採	口径(8.3)	白色。硬調	釉は内面で薄く、外面の口縁部で溜りとなり厚い。外面は以下露胎となる。外面に印文で蛸足唐草施文。	不詳
42	皿(白磁)	B区E-25 3層	口縁部片	白色。軟調	釉は薄く、細貫入する。外面の下方にわずかながら露胎部あり。	中国製
43	皿(白磁)	A区O-10耕土	体部片	白色。軟調	釉は薄く、貫入する。	中国製
44	皿(白磁)	A区J-6 3層	底部片	灰色。軟調	釉は薄く黒色。素地は、陶・磁質の間。	不詳
46	碗(天目・陶器)	B区E-12 3層	体部片	暗灰色。軟調	釉は厚い、わずか茶味おび部分的に禾目状となる。素地は陶・磁質の間。外面下方露胎となる。	中国製
47	碗(天目・陶器)	B区E-18耕土	体部片	黒色。軟調	釉は厚く、黒色味をおび全面禾目状となる。素地は陶・磁質の間。	建窯
48	碗(天目・陶器)	B区表採	体部片	灰色。軟調	釉は厚く、黒色味をおびる。素地は陶質。	不詳
49	壺(褐釉・陶器)	A区K-14耕作	体部片	淡黄。灰色。軟質	釉は薄く、黄褐色を呈する褐釉。外面片切劃文。内面、轆轤目立ち、無釉。	不詳
50	壺(褐釉・陶器)	B区B-12耕土	体部片	淡赤黄褐色。軟質	釉は刷毛塗で薄く、茶褐色を呈し、カセている。内面は無釉。	瀬戸焼か
51	皿(染付)	B区I-18	口縁部片	白色。軟調	透明釉はわずか青みおびる。呉須は群青に近い。外面に宝珠唐草、内面に3条の圏線を施文。	景德鎮窯か

近世陶・磁器

図番号	土器種	出土位置	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
340-1	碗(磁器)	B区G-20	推定口径11.4	青緑色。密。白淡灰色。硬質。	碗の口縁部。青磁釉。釉は乳濁し気泡大きく荒い。外面に細貫入あり。内・外面施釉。	伊万里焼か
2	皿(磁器)	B区J-18	推定口径15.0 器高3.2	浮白色。密。白淡灰色。硬質。	染付で、呉須は、天然呉須調。文様は水草。見込の蛇目、高台端部を除いて施釉。蛇目部分に砂の付着あり。重ね焼痕あり。高台部は後家底。	いわゆるくらわんか皿
3	碗(陶器)	A区I-18溝埋	推定口径14.3	淡灰色。密。灰色。硬質。	飯茶碗。釉調は鉄絵で花文。内・外施釉。	
4	碗(陶器)	A区I-13	推定高台径3.8	淡褐色。密。灰色。硬質。	碗の底部。釉は透明釉気味で、内・外面に貫入があり、内面底、外面底を除いて施釉。釉境は鉄足状に酸化。高台は削り出し。	

第II章 遺構と遺物

図番号	土器種	出土位置	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
340-5	皿(陶器)	B区G-23	推定高台径7.7	淡褐色。密淡黄色。硬質	中皿の底部。釉は透明釉気味で細貫入入る。内面に播落し櫛描による施文あり、文様不詳。施釉は内面のみ。高台は削り出し高台。	唐津焼か
6	徳利 (磁器)	B区J-18		青緑色。密白色。硬質	鶴首徳利の頸部。釉は青磁釉。釉内の気泡は細いが乳濁する。施釉は外面と内面の一部にあり。内面の露胎に轆轤による横撫あり。	伊万里
7	灯明皿 (陶器)		推定口径11.0 器高3.1	茶褐色。密灰色。硬質	釉調は鉄釉。釉は口縁部外面、内面に施釉。外面の露胎部に轆轤による筥削り目あり。	
8	灯明皿 (陶器)		推定口径10.4 器高2.2	茶褐色。密灰色。硬質	釉調は鉄釉。釉は口縁部外面、内面に施釉。外面の露胎部は、轆轤による筥削り目あり。	
9	灯明皿 (陶器)		推定口径11.4 器高2.0	茶褐色。密灰色。硬質	釉調は鉄釉。口縁部外面、内面に施釉。外面の露胎部に轆轤による筥削り目あり。	
10	灯明皿 (陶器)		推定口径11.6 器高2.3	茶褐色。密灰色。硬質	釉調は鉄釉。釉は口縁部外面、内面に施釉。外面の露胎部に轆轤による筥削り目あり。	

第Ⅲ章 考 察

第1節 土地利用の変遷

発掘調査によって明らかにする事象は、古代以前がどうなっていたかという点に労力が注がれ、その結果、最も必要であるはずの地域史に寄与する中世以降の事象については触れられない場合が多い。ここでは竪穴住居跡廃絶後から近世に至るまでの間、歌舞伎遺跡がどのように変貌したかを通史的に捉えたい。

① 古代について

まず歌舞伎遺跡の竪穴住居の廃絶を出土遺物から見ると、羽釜の出土がA地区で数点しかなく、羽釜の出現の直後に集落の主体は終息したと考えられる。羽釜の出現は、県内の編年観、清里陣場遺跡にしたがえば、⁽¹⁾第3期にはじまる。同期にあたえられた年代観は10世紀前半である。歌舞伎B遺跡では羽釜およびそれ以降の土器群の出土は薄弱で、それ以前の土器種は系統的に存在しているため、羽釜の出現以前に、集落は終息に向ったことが明らかである。しかしA遺跡からは10世紀後半代の緑釉陶器が出土しているため、その頃まで細々と生活が続いていたようである。

10世紀後半以降、11世紀後半まで当地域に竪穴住居跡は存続している。土器類は、その間、清里・陣場遺跡の第4～6期に相当しているが歌舞伎遺跡ではその期の土器が希薄で、この地が居住の主体的な場所ではなくっていったことが証左される。それと関連するかのようA遺跡1号溝(第345図)が、いずれもの住居跡を切って西から東へ向って走行し、B遺跡H-16号溝(第345図)が、南から北へ向って存在する。両溝の埋土中の土器群は羽釜を伴っていないが清里・陣場遺跡の第3期に類し、10世紀前半に廃棄されたことが明らかで集落の主体の終息とほぼ同期か、接した頃となる。この溝の方向性はB遺跡H-16号溝では、南北軸にあり、A遺跡1号溝は国家座標東西軸から南へ12°30'ほど傾むいて走行している。両溝とも蛇行部分と、傾きにひらきがあるが基本的には方位を意識している。両溝は、溝巾が1mを越える比較的、大規模であり、埋土低位にラミナ状の砂の堆積と、2度以上の掘り直しが認められることにより、ある段階に流水し、ある程度の管理と整備がなされたことが判る。このことは両溝が組織的な作業に基づいて構築されたと考えることができ、その機能は大規模な土地区画整備あるいは耕地の整備に伴うものと類推される。さらに類推を進めればその整備は集落に終息をもたらされた要因とも考えられ、集落移動と溝の構築が直結するのであれば、その支配関係は集落の掌握者、溝の管理者とが一連の人々であったと解釈される。

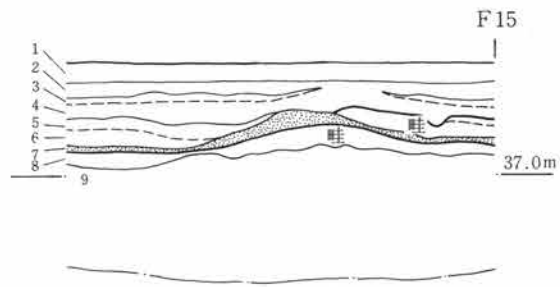
この2条の溝の利用は、2度以上の掘り直しが認められるが、同じ方向性をもって数条の溝が重複している訳ではないので、組織的な管理は短期に終わっている。この後、11世紀後半段階まで、その間の遺物を伴う溝はなく、しっかりした土地管理に基づく地帯でなかったことが伺え、妥当性において空間地か、細々とした耕地であったと類推される。⁽²⁾

12世紀代は当地域にとって特記される事象がある。浅間山給源によるB軽石の降下である。前橋・高崎市その周辺では、灰層の直下から広大な水田跡が検出され、歌舞伎遺跡でも、同軽石の順堆積層と直下から水田跡を検出している。B軽石の年代観は、現在までのところ文献史料から、天仁元年(1108)の降下であると⁽³⁾する説が、史料内容上、支持されている。考古学上は群馬県における最終末の竪穴住居跡が完全埋没せず、

凹状埋没した最上層に、時としてB軽石層が認められ、最終末の竪穴住居跡が完全埋没するのに数十年を要すると考えられるので、最終末の竪穴住居跡の廃棄に埋没過程の数十年を加えた年代が考古学上決めるB軽石層の相対年代となる。最終末の竪穴住居跡に伴い年代観の知れる遺物として灰釉陶器があり、現在の編年観からすれば、終末期の灰釉陶器である丸石-2号窯式に類される一群が伴い、11世紀後半がそれにあたえられる。さらに竪穴住居の埋没期間を加えれば11世紀終末から12世紀初頭頃にB軽石層の降下年代が設定しうる。⁽⁴⁾

歌舞伎遺跡における、B軽石直下に検出された水田跡は調査時において、B軽石の降下年代弘安四年(1281)説が当時、有力であったのと、中世遺構に対する評価が今日ほど高くなかったことから調査では範囲の確認を行なうことにとどまり、面的な追求はしなかった。

B軽石下の水田は第345図のとおり、A遺跡の北東部分1200㎡、B遺跡の北西部分25㎡の低地部分に認められ、さらに遺跡地外に延びていた。調査はトレンチであったので、水田の単位は追求しなかったが、畦の方向性と、水田と台地際の方向性からA遺跡ではおよそN47°W、B遺跡ではおよそN4°Eの方向性があった。この水田跡の開田期は、10世紀前半に埋没したA遺跡1号溝が水田下まで達し、その掘り込み面から水田面までは約40cmの黒色泥土の間層があり、また、I-23より出土した10世紀後半代の緑釉陶器片の出土位置も、水田面レベルより、はるか下方にあったため、開田期は、ゆるやかに堆積した黒色泥土の存在、10世紀後半代の緑釉陶器の出土位置を考慮すれば、だいたい年代の下った11世紀代であったと考えられ、開田は、前代との間に、まったく関連性の得られない空白が生じているため、前代の系譜との関連性は薄いとしてよいであろう。以降、この水田面より、上方には現在の耕作面を含め、4つの水田面が存在しており、それらが連続的か、断続的に営まれたのか時代によってははっきりしないが、北側の低地部分が長期にわたり水田地帯であ



- 1. 現代水田耕作土
 - 2. 現代水田酸化層
 - 3. 近世水田酸化層
 - 4. 近世水田グライ斑層
 - 5. 中世水田酸化層
 - 6. 中世水田グライ斑層
 - 7. B軽石順堆積層
 - 8. 平安水田耕作土層
 - 9. 黒色粘性の泥質土層
- ※同一地点に畦の継続が見られる。

第341図 平安水田の畦とそれ以降の水田断面 F15北壁土層断面 1:40



第342図 新田義重讓状
〔群馬県史 資料編5 中世〕 1968による

新田義重讓状

ゆつるこかんの(空)の(事)、
をうなつか、(押)をしきり、
せらた、(世)かみひらつか、
みつき、
しも(下)ひらつか、(新)こかんなり、たの
さま(上)たけあるへからず、
このむねを(在)そんして
百さう(在)さたのものあんとす
へし、たしかに(在)ゆつりおハぬ、
源(新)源
(花)源

仁安三年六月廿日
(花)源

第343図 同上新田義重讓状

たことは確である。地域ではこの歌舞伎遺跡北方の水田地帯を本田と呼び、世良田を取りまく水田地帯の中では早くから開けた水田との伝承があり、B軽石直下の水田の存在から、そのことが裏付されよう。

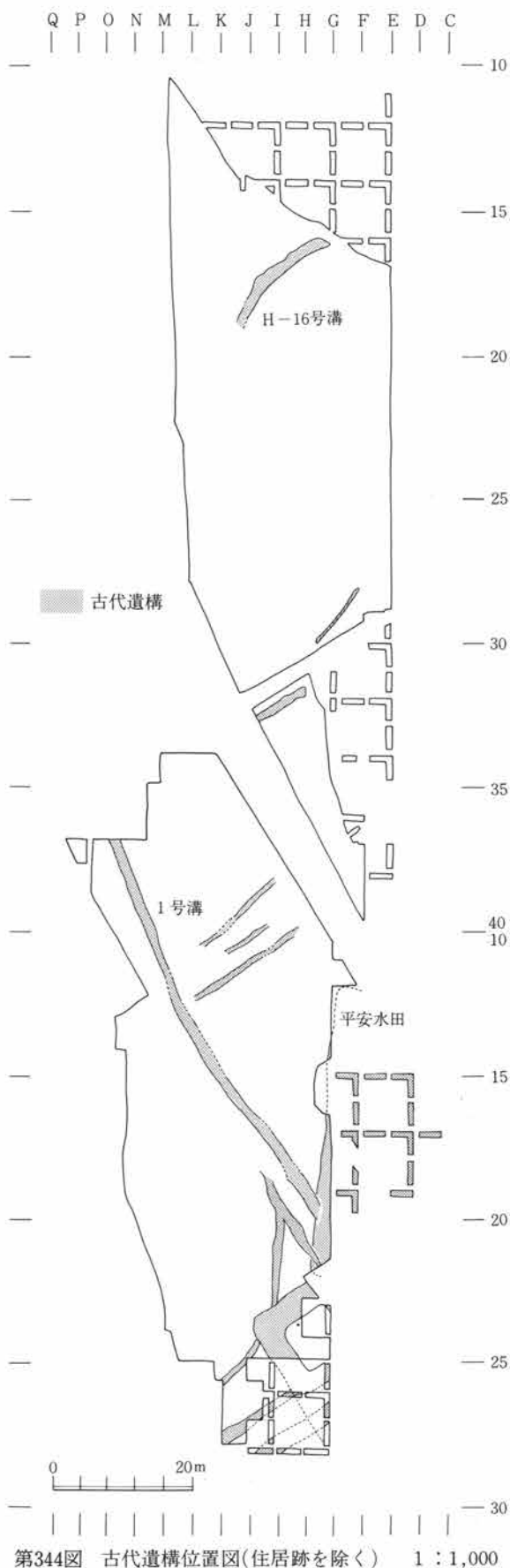
12世紀には特記される史料がある。地域の氏族として台頭してきた新田義重が次男の義季にあてた仁安三年(1168)の土地譲状(第343図)で、記事は空閑の郷、女塚、押切、世良田、上平塚、下平塚、三ツ木など新田庄の中核となる地を譲っている。

世良田は北東側に石田川流域、西に早川、南側に利根川にはさまれた河川地界を行政区分に用い、自然地界の場合は最も遺制をとどめ易いので、この範囲が、世良田郷の生活領域であった可能性は充分であろうし、いわゆる世良田台地の北方に位置する歌舞伎遺跡の地も、世良田郷内であったことは、ほぼ確実と見られ、譲状にある空閑は義重がどの程度の土地所有権を有していたか記述されていないため空閑の意味に不明確さを残しているが、仁安三年の前代に水田が存在しても、この場合の空閑の地に含まれる可能性は充分であろう。

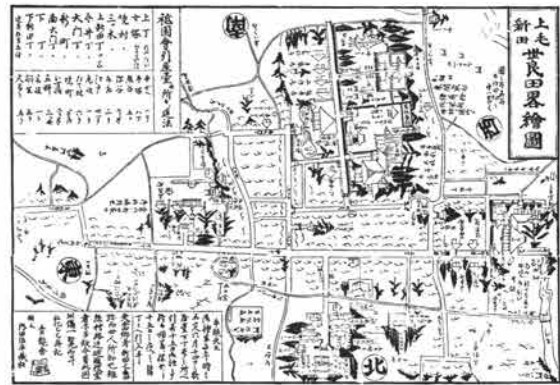
② 中世について

中世については、世紀ごとに区分しうるほど時代観を伴う遺物がないので、ここでは中世を前半と後半に2大別して扱いたい。

中世前半は、A、B遺跡の台地部分に明確な遺構はないが、低地部分の水田跡では中世前半の中国陶磁と国産陶器(図340-2)を含んでおり、中世前半に営まれた可能性がある。可能性にとどめた理由は、水田跡について面的な調査をした訳ではないからである。その広がり、B軽石下の水田上にあるのでB軽石下の水田の陸部を一まわり喰い込んだ規模となっており、方向性はほぼ同じであるが新たにB地区E-10、G-12、E-17を結んだ三角地帯を加え(第347図)、前代のB軽石下の水田と、ほぼ同じ方向性にあり、その経営は、前代の系譜との関連が強いとすることができる。この段階における新田氏は世良田全体の掌握者となっており、水田経営の掌握者を新田氏としてほぼ誤りないところである。



中世前半の遺物には、中国陶・磁、国産の施釉、焼締陶器があり、それらの多くは第333・336図のとおり水田部分よりも台地部分から多く出土した。ここで問題にしたいのは、土地利用を考えるうえの素材となりうる在り方をしていることである。遺物群の在り方には不可解な現象がある。それは日常生活に伴う陶・磁器なら対応する中世土師質土器や、在地の軟質陶器類が出土して良いはずである。ところが調査中に、ずいぶん注意していたのであるがまったく希薄な出土であった。このことは歌舞伎遺跡西方、約150mに位置する東京電力世良田変電所遺跡⁽⁷⁾の調査では、中国陶・磁、国産の陶器類に混って在地製品が出土していたし、南方約1.1kmの長楽寺遺跡⁽⁸⁾でも同様の一般的な在り方であった。中世の日常生活に直結する遺跡であるなら中国陶・磁、国産陶器と、在地製品の3者が周辺遺跡では共存しているのである。在地製品を欠く理由は、日常生活に供される前なら、中国陶・磁、国産陶器の2者だけの存在であっても不思議ではなく、つまり、2者が世良田に運び込まれ市に立つまでの間に、破損・廃棄すれば、在地製品が共存しなくとも理解できるのである。したがって歌舞伎遺跡においては、交易地かその近接地であった可能性を考えておきたい。遺跡自体から、このことを傍証しようとしても素材がないので、周辺地域を歴史地理学的な見方で次に関連傍証してみたい。まず歌舞伎遺跡を擁する世良田の地は利根川に南接し、水運に恵まれたとしてよい立地にある。世良田には幅10m、東西500mにわたり、なめら堀りと称する大規模、直線的な堀割り跡が残されている。なめら堀りは利根川に注ぐ小河川の早川からはじまり、石田川に至っている。ちょうど世良田長楽寺の推定門前町も並走しており、運河の可能性が高く、早川や、石田川などについても川舟を用いた運河の利用を考えてよい地形的な条件にある。当時の石田川を水運の運河に利用されていたとみれば、歌舞伎遺跡の地に交易地があったとしてよい可能性がより強調されるのである。しかし、交易地とするには問題がなくもない。かつての世良田の街並は東面する

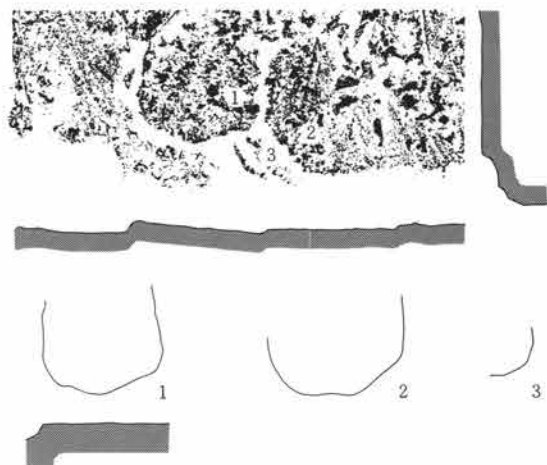


第347図 長楽寺絵図 (弘化三年)



第348図 中世焼締陶器と中世前半水田層

1. 中世水田グライ斑層
2. 同酸化層
3. 同耕作土層
4. 近世水田グライ斑層
5. 近世水田酸化層



第349図 長方形土壇に残る平鋤状工具痕 1 : 8

長楽寺の門前を東西に発達したと考えられ、世良田の北端部に位置する歌舞伎遺跡とは約700mへだたりが
あって、歌舞伎遺跡の地を交易地とするには余りにも遠すぎように思える。要するに妥当性上に問題がある
ため、交易地としての推定は、問題提起にとどめたい。

中世後半はB遺跡のH-21の西・北側に60基以上の長方形土壇（第346図）がもうけられ、A遺跡にも9基
以上が存在する。個々では何んのための遺跡か理解しがたいが各土壇に共通する特性がある。掘り方内壁が
平鋤状工具（第350図）で掘られ内傾すること、底部に黒色土かローム質土が数cmの厚さで堆積し、その上方
にローム質土ブロックを多く含む人為埋没土があることなど個々の特性はほぼ類似し、土壇相互が平行か直
交した位置関係にある点も共通する。共通性が多いことは、各土壇が、共通の機能を果たすために構築され
たと見なされる。共通の機能とは群在する土壇群を巨視的に俯瞰した時、近世以降の水田跡、近世溝跡など
後の農耕遺構の区分、方向性と一致ないしは近似していることが判り、このことは、土壇群が陸耕に関連
して機能した可能性が高く、水田に関連することは考えがたいので畑作に関連して機能したと考えられる。そ
の年代は一部が近世前半の水田跡下にあり、土壇の埋土から15世紀代の美濃焼（第338図-9）が出土してい
るので、構築の主体は中世後半に置かれる。なお、遺物の出土については調査時に注意しており、近世磁器
がまったく出土せず、美濃焼陶器片が最も新しい遺物であった。以上のことから中世後半の歌舞伎遺跡の台
地部分は畑地となっていたことがあったと推定される。

③ 近世について

近世になると、中世後半に畑地であったと考えられる台地部分にも序々に水田がおよび、浅間山給源によ
る天明三年（1783）の軽石層降下以前にA・B遺跡の半分ほどが水田と化している。

その後も、しばらくこの耕作状態は続き、全面水田におおわれるのは江戸時代の後半になってからのこと
である。やがて近代には現在のように化した耕地整理が待っていたのである。

- (1) 中沢悟「平安時代を中心とした土器群について」『清里・陣場遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982
- (2) (1)に詳しい。群馬県における古代の土器生産は11世紀終末以降衰退するが、各事象について土器を用いて検討を加える場合、11世紀中
頃以前であるなら、土器は存在するとみてよい。
- (3) 石川正之助「下小島町・大八木町地区」『上越新幹線地域蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』（群馬県教育委員会）1975
- (4) 中沢悟「浅間山噴出のB軽石及びそれに近い土器群の年代」『清里・陣場遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982
- (5) 尾崎喜左雄「火山噴出物堆積と遺跡」『一志茂樹博士喜寿記念論集』1971
- (6) 「長楽寺文書」『群馬県史 資料編5 中世1』（群馬県）1978
- (7) 1974群馬県教育委員会によって発掘調査されている。
- (8) 大江正行、川原嘉久治「長楽寺遺跡」（尾島町教育委員会）1978
- (9) 定方嘉津夫「鎌倉時代の世良田」『尾島町の歴史8号』1974に詳しい。

第2節 歌舞伎遺跡における土器の編年（別図編年参照）

歌舞伎遺跡における住居跡を中心とした多くの遺構は、また多くの土器を出土している。これらを集約して、本遺跡における土器変化の流れを整理しようとするのが本稿の狙いである。勿論、これらは遺構の前後関係を軸として各遺構における横の連関をみ、それぞれの時期における土器の組合せの復原を試みたものである。従って、この編年における横の組み合わせは単なる共存関係を示すものではなく、一方で、個々の器形のたての流れを併せて加味する形で大きい変化をよみとることをねらいとしている。

ここで取り上げた範囲は古墳時代前期後半から平安時代にわけ、古墳時代後期全般にわたる時期が主である。そして、基本的には7期に分割し、その特徴をみようとするものである。以下、各期について、その概略を述べてみたい。

Ⅰ期の土器

この時期に属する土器を出土した住居はおよそ10軒ほどで、住居数はあまり多くない。しかし、1軒の住居から出土する遺物の数は極端に多く、中でもB-28、A-5号住居などはその典型である。器種でみるとこの時期の土器はあまり多様でないこともまた一つの特徴である。

この時期の土器の器種は壺、カメ、コシキ、罎、高坏、埴である。壺は基本的には球形胴で底部は突出した安定した平底を有する。その平底の中には中央がやや上がる形のものがある。口縁部は強く「く」の字状に開く単口縁のもの、一旦直に立ち、中位に段をもつ有段口縁のもの二つがある。器表は細かくヘラ状工具で磨かれ、滑沢である。概して焼成火度は高く、黄色がかった色調で、堅い焼きである。この種の土器は球形胴からやや長胴化したものへ、頸部のせまいものから広いものへ、口縁部の段が弱まるものへという微妙な変化が認められる。

カメは、壺と同様に球形の体部、小さい平底、広い頸部から短かく外開きする口縁部をもつ器形である。概して壺に比べて整形は雑で、胎土も夾雑物を含んでいるため粗い。二次的な焼成痕をもつところから煮沸具であることは明らかである。可能性としてはこの土器に鉢形のコシキがつくことが考えられるが、そのやや退化形態が存在する。この本来の形は口縁部に折り返しがあり、直にすぼまる底部は小さく、その底に単孔をうがつものがあるが、本遺跡では破片に一部ある。

罎は最大径が口縁端部にくる形で扁球形、底部は丸底か小さい不安定な平底を有するものが一般的で、中には底部中央を指で押したのものがある。頸部のくびれは強いがその径は大きいものと小さいもの2種がある。それを基準として次第に口縁端部と胴部最大径が同じになり、体部は球形に近くなったり、尻部がこけるような変化がみられる。全体的には壺と同様に器面をヘラで滑沢に磨いているものが一般的である。

小型カメは頸部のしまる形で、そこから比較的大きく長く開く口縁部をもつ扁球状の体部から、球形胴で短かく外開きする口縁部をもつものへと変化する。最大径はいずれも体部中央にくる形が一般的である。また、一部には大きい平底から鉢状に立ち、弱く頸部がしまりそこから短かく強く外開きする罎状のものも含まれる。

高坏は、坏部が深く大きいのが共通した特徴であるが、底部に稜をもつもの突帯を有するものと自然に彎曲して開くものがある。脚部は弱い開きで一旦立ち、裾部で急激に大きく開く形が一般的である。坏部に突帯を有するものは、脚裾部にも段や突帯を有するものもある。坏部と脚の接合は巾の小さいものから大きいものへの変化があり、更にその接合に「ヘソ」ではめ込む式のものも含まれている。内外面ともヘラによる磨きがみられ、特に坏内面のものは放射状暗文に類するものもある。

埴類は平底の底部を有し、そこから深く体部が立ち、口縁が素辺のもの、内斜するもの、外斜するものの三種がある。特に内面に放射状の暗文を有するものがあることが特徴である。全体的には体部の深いものから浅いものへの変化がみられる。

II期の土器

土器の組み合わせは壺、カメ、コシキ、埴、小型カメ、高坏、鉢、埴、坏とI期にくらべ、多様化する。壺はI期くらべ底部の不安定化、体部の長胴化、口縁部の直立傾向などが指摘できる。特に有段口縁を意識した口縁中段に沈線を施したものがあり、底部が丸底に近いものもあり突出傾向が消滅する。全体的には器面整形の粗雑化がめだち、胎土も夾雑物を含み、カメと類似してくる傾向がある。

カメは胴部の長胴化という一般的傾向がみられる。頸部もくびれが弱まり広口化する。しかし、まだ最大径は体部中央にあるものが多い。この時期の後半には長胴化が一段とすすみ、いわゆる長胴カメが出現する。体部に粗い輪積み痕をのこし、ヘラでたてまたは斜方向にケズる整形は、前段のヘラ磨きからすると雑な感じをもたせる。また、胎土も小礫を含んだものがあり、ますます粗雑化に向かう。

大型長胴形のコシキの出現も、この時期における特筆される変化である。鉢形からこの長胴形への大形化は、生産力の飛躍的発展を物語るものとみられ、この時期に急激に拡大する集落規模もこれを反映したものに他ならない。形態的にはまだ丸味があり、頸部にややくびれの傾向をのこす点が指摘できる。口縁部はあまり長く開かない。特に整形上では内面のナゲ技法が入念である。カメとの組み合わせでみると、コシキを重ねた不安定さは奇異に感じるほどであるが、これはカマドにかけるという操作を経てはじめて安定したものとなるのであろう。

埴は、体部の球形化が進む一方で器体部下半がこける傾向が指摘できる。そのため、胴部最大径は中央又は肩部にくるものが多い。口縁部は直立傾向がつよまり、口縁端部と胴部最大径が同じか又は後者が大きいものみられる。特に体部下半のヘラ削り技法が顕著になるのもこの時期の特徴である。

小型カメは、頸部が広くなること、体部の球形が崩れて、弱く張った肩部から胴部下半がこけた感じになる。口縁は比較的長く外開きし、底部は平底である。最大径は口縁端部と胴部中央がほぼ同じ大きさのものが一般的でIII期の胴部中央に統一される傾向と異なりをみせている。全体的には整形、胎土などに粗雑化傾向がみられ、焼成火度も低くなる。

高坏は坏部の浅くなること、口径の小さくなる傾向がみられる。坏部の底径と口径の差が次第に少なくなるのは脚の接合巾の拡大と大きくかかわる現象であろう。また、坏部に突帯状の段や稜を有するものなどもみられるが、伝統的なヘラ磨き技法が次第に衰える様相がみられ、形式化する。脚は接合部の巾がひろがり、脚高も低くなる傾向があり、全体的に萎小化傾向を指摘できる。

鉢は平底で、口縁部を画さない素辺のものから、肩部に一旦段をおき、そこから短かく外開きさせる口縁をもつものへの変化がみられる。それと共に底部の大きさも小さくなり、平底からついには丸底様のものまで出現するが、まだ痕跡はとどめている。

碗、坏類では、I期にみられた内斜、外斜口辺の坏が消滅し、素縁口辺のものが主流をしめる。これも今までのものに比べると、体部の浅くなる傾向は共通的である。更に、この時期における変化で特徴的なのは、いわゆる有段坏の出現であろう。深い肩の張った体部は丸底で、口縁は明らかな段を境にして長く立つ。概して体部の深さと口縁の立ち上がりの長さは同じで、口縁端部のヘラオサエ、体部の整形にヘラを用いることなどで、整った感じがする。また、塗彩や放射状暗文を有するI期の流れをくむものもある。

須恵器が相伴しだすのも、この時期の終末からである。A-55号住居にみられた高坏の坏部は口径と底径の差の少ない深手のもので、底部と体部の境は明らかな稜をもたないで移行する。胎土は緻密、焼成も堅緻で灰白色を呈している。脚はおそらく短かくたつ1段透しとみられるが、欠失している。

特殊なものとしてはA-88号住居の高坏の脚のような形状の羽口の出土が注目される。挿入口部分は気泡化しているが全体的にいていねいな作りである。溶融した対象が何かは明らかでないが、県内の他例から考えると銅である可能性がよい。

III期の土器

長胴カメ、長胴コシキ、小型カメ、高坏、有段の坏、須恵器高坏などがみられるが、他に石製模造品、土製支脚などを伴ってかなりバラエティに富む。この他に後半になると小型の鉢形コシキが出現し、須恵器の数が増すこともこの時期の特色である。

長胴カメはこの時期の前半では最大径が口縁部と胴部中央にきてほぼ等しい形から、後半には口径に最大径が来るようになる。長さはこの時期が最大になる。特に胴部のふくらみが減少すること、体部の削りと輪積痕をこのままのこす整形の雑さがめだつ。胎土中に夾雑物がまじり、焼成温度が低くなるのも目立つ現象である。底部は不安定な平底である。

コシキは頸部のくびれが全くみられない深鉢形で、口縁部の開きが水平に近づく。この他に後半期にみられる小型の鉢形のコシキの相伴は用途のちがいを感ぜさせる。底部は単孔のものと多孔のもの二種があるが、平底のものに単孔が多いのに対し、丸底ないし丸底気味のものに多孔のものが多くみられる。この他に県内では稀な把手つきのコシキが相伴している。成形、整形、焼成火度の面で他の一群のものと異っており在地窯製でない可能性がよい。

小型カメは、口縁部の作りがポツテリした感じでシャープさを感じさせないこと、直立気味のものが入ってくること、底部の平底がやや不明瞭になって不安定になることなどの点を指摘できる。全体的には長胴カメの技法と共通する。

埴形土器の消滅もこの時期の特徴で、この時期のメルクマールになる現象である。器形の消滅という点で見ると、高坏も本来の大きい坏部をもち、高く大きくふんばる脚をもつ。いわゆる高坏らしい高坏も消滅する。それに替わって、坏部は有段坏と同形で、脚は短かく立つ形で、坏部径より脚径の小さいものが出土する。この背景には須恵器の高坏の盛行や木製の高坏などがあるものと考えられる。

この期の特徴を最も端的に表わすものに坏がある。即ち、この坏は底部と体部の境に明瞭な段を有することを特色とし、そこから立つ口縁部が直立、外開き、内傾のバラエティに富む形を呈することである。この種の坏は須恵器の影響下にあることは勿論であるが、身と蓋が組み合わさる蓋付き坏が盛行するのが一つの特徴である。他に口縁部に2~3本の沈線を入れるのも顕著である。しかし、このバラエティーもIII期後半になるとまた姿を消してくる。全体的には前半の坏が比較的体部が深いのに比し、後半のそれは浅くなる変化をみせ、それと共に段も不明瞭になってくる。

須恵器は坏、短頸壺、ハソウが出土しているが坏は全体的には土師器の傾向と類している。短頸壺は扁平な体部に短かく直立する口縁を付し、肩部には櫛状工具による突刺文様が連続して付されている。ハソウは扁球状の体部に細長く立つ口縁を付すものとみられるが、口縁を欠いて不明である。古墳から出土するものとの対比で時期が限定される。

全体的にはヘラ削り技法の盛行、胎土に夾雑物を含むこと、低火度焼成、須恵器の共伴が多くなるなどの点を指摘できる。また、後半になると土師器の器種量が次第に減少してくる傾向もうかがうことができ、生活様式の変化を推察させている。また、遺構からするとこの時期からIV期にかけてがこの遺跡における最も集落が拡大する時期とみられる。

IV期の土器

この時期も2期に分けられるが、組合せではカメ、小形カメ、コシキ、鉢、坏の土師器と須恵器の坏、短頸壺がみられる。この時期になると土師器では高坏の消滅などを中心に土師器の器種の限定化がすすみ、特に後半期になるとカメ、コシキ、坏に固定化する。

長胴カメはほとんど頸部のくびれない砲弾型で底部は不安定な平底、最大巾は口縁部にくる。長さは前の時期より短くなる傾向があり、輪積み後のヘラ削りが顕著で薄い器肉である。胎土中の砂礫のまじる割合も多く、焼成も低火度である。

コシキは前半はIII期の長胴形、小型カメ型の両者をのこしているが、後半になると次々に大型のものが消え、小型のものも後半になると出土例が減少する傾向にある。この形態は鉢型で平底か丸底であるが単孔のものは小さい平底、多孔のものは丸底のものが一般的である。整形技法はカメ型土器に類している。

小型カメはほとんど前述のコシキと同様であるが、頸部のくびれ、口縁の開き方などが不明確でIII期に比べて退化型態としてとらえられる傾向が認められる。特に器肉がケズリにより、より薄くなる傾向や砂粒の含まれる胎土はカメ形土器と同様である。

坏はIII期みられた有段の坏が継続するが、次第に段が消え、底部と体部の境が稜線で画されるようになる。このことは、口縁の立ち上がり方もバラエティーがなくなり、外開きする形に統一されてくる。この傾向は須恵器の影響下にある蓋付きの坏が消滅することによる。おそらく、この手は須恵器に次第にその主たる座を奪われていく段階の所産と考えられる。

土師器の限定化とからめて当然量的な増加が推察される須恵器もまだ主たる日常雑器の座をしめるまでには至っていない。本遺跡における出土例でみると須恵器を伴う住居はこの時期は限られており、その意味からすると背景にある窯業生産が本県ではまだまだ十分な発展をしていないことがうかがえる。

ここに取上げた須恵器もその意味からすればIII期の傾向を踏襲しているとみられる。しかし、坏の小型化と、体部の浅くなる傾向、短頸壺における文様の簡略化などに退化傾向がみられるところに特徴がある。

この時期はその意味からしても、いわゆる土師器の内、古墳時代らしい技法、形態、焼成などの面から次第に須恵器を主流とする日常什器へ統一されていく過渡期の所産として、生産体制の変化を内包しつつ変質する土器の様相を端的に示すのがこの時期の土器であろう。また、石製模造品の消滅などからくる屋内祭祀の変化も推察されるところからすると、生活における内的変化もまた大きかったものとみられる。

V期の土器

この時期の土器も2期に分けることができる。組合せは土師器ではカメ、小型カメ、坏、須恵器では、坏、

蓋付きの坏、盤（皿）である。前期と後期の差異は土師器、小型カメの消滅、須恵器のカエリのある蓋の有無、鬼高的な坏の消滅などが目につく。

カメは、長胴型であることは前期と同様であるが、口縁部の開きが水平に近くなること、体部下半が細くなり、底部が小さく不安定になることの形態的变化がみられる。整形技法的には削りの技法の盛行は前期と同様であるが、ケズリの時点が生乾きの時点で削ったとみえて、かなり鋭利なものでケズりこんでいること、斜、横方向のケズリ技法が入ってくるために表面にギザギザの波形をのこすものがある点などが注目される。そのため、ケズリが入念で、器肉の薄さが目立ち、1.5mm程度まで削りこんでいる。また、従来土器の底部まではみられなかったケズリが底まで及んでいる点なども注目されよう。しかし、口頸部のみはやや厚手に入念に作っているため、この部分はよく遺物として残っている。

小型カメはIV期的な形がそのまま継承されているが、これに後半になると消滅するようである。おそらく後半期にはその地位を須恵器にとってかわられるためであろう。須恵器のカメ、瓶類は破片がかなり入っているところから、これが裏づけられる。

坏は、IV期後半でみられた、浅い体部からそのまま口縁部が境に稜線ももたないで、スムーズにそのまま移行し、短かく立つ素縁の口縁をもつ型、口縁部がやや内湾、内斜する型の二つがある。前半では前者が、後半では後者の型が一般的に主流を占めるようである。更に体部の深さ、口径などでみると前半は体部が深く、口径が12cm内外と小さく小型化するの比べ、後半では体部が浅く、口径も大型小型のパラエティーに富むようになる。

特に土師器では、後半にはほとんど長胴カメ、坏の種類に統一されるところに器制上の大きい特徴がある。IV期にみられた器種の限定固定化はここにして終局を迎えるようで、これ以降はほとんど多少の器形の変化は見せながらも固定化する。

須恵器はこれに比較して多くの組合せをみせる。特に液体溶器の破片がめだち、その機能が土師器から須恵器にとってかわられたことを証明している。

図にかかげた蓋付坏及び盤等はこの時期の特徴をよく表現するものであるので重点的にとり上げている。蓋は小型で、高い天井部に擬宝珠状のツマミをもち、カエリをもつものが主流を占めるようである。この手は古墳の前庭などから出土するものもあり、まだ古墳の墓前祭祀が行なわれていた時期にその盛行の時点があったとみられる。

坏は36住から出土したもののようにIV期の流れをくむものが前半期にはまだ残っているが、後半期には完全に消滅して平底の坏に固定する。底部は前期はヘラおこしの底部で、全面、又は周辺部をヘラ調整する技法がみられる。全体的にはその底部ヘラ調整の技法が一般的であるが、後半期には糸切り手法のものが終末期にはみられるようである。底部は口径に対し大きく、口縁の立ち上がりも短いことが特徴である。

大型のカメ類では成形技法の中に叩き締めの手法がみられ、内面に青海波状文、表面に板目をのこすものが一般的であるが、これも、次のVI期になると消滅する。

蓋は後半になるとカエリが消えて天井も低くなり、ツマミも中央の盛り上がり減少して平らに近くなるものが多い。

全体的にはこのV期で土師器と須恵器の日常生活において占める比率が完全に逆転する時期としてとらえることが可能で、土師器はカメ、坏の二種に限ってようやくその命脈を保っているに過ぎないのが実情である。

VI期の土器

この時期の器制はV期のものと全く同様である。ちがいは、それぞれの器形上の変化であり、技法上の変化が認められるに過ぎない。

組合せは土師器のカメ、坏、須恵器のカメ、蓋坏、皿などである。土師器のカメは、V期までの長胴カメが、口径に比し高さが減じ、体部に丸味が出る傾向がみられる。特に前半では底径の大きいこと、最大径が体部中央に来るもの、又は肩部が張って、その部分にくるものの二種があるが、前者が多い。後半になると、いわゆる「コ」の字口縁の肩のはったカメが出現する。粘土を精選し、従来のカメと感じが全く異なるものである。外的な文化を取り入れた結果、急激に出現したのもと思われる。口縁部のつくりは入念であついが体部はうすく、ヘラケズリが顕著である。体部は肩部が張り、下半はこける。底部は比較的大きいのが特徴で、胎土に砂粒を含んでいる。

坏は、浅い体部の口縁を短かく内傾させた坏から平底気味の底部から長く外開きする形のもの盛行する。これは粘土を円盤状にうすくのぼし、周縁をおこす形で成形したもので、体部の下半には、おこしたときに指で折れめをおさえ、整えた指頭痕がそのままのこっている。内面および、口縁の内外面は横ナデの技法が認められる。この形の坏は、これ以降、ほとんど変化をみせないで平安後期までのこってくるようである。

須恵器は蓋及び坏、カメなどがある。蓋はツマミの中央が平らかやくぼむ前半の段階から次第にリング状に粘土をはりつけた形に変化するまで続く。天井部は次第にふくらみが減少してうすく、口径が大きくなる傾向がある。カエリは完全に消滅し、先端部が天井の丸味からそのまま端部を短かくおり曲げた形から、天井部から一旦水平に開いてから端部を短かく曲げた形へ変化する。この蓋はこの段階で消滅してVII期までは残らない。

坏は底径と口径比でみると底径が次第に大きくなる傾向がある。その比が1：2の割合になるのを境に前半と後半を分けると「コ」の字カメの出現とほぼ合致するようであり、メルクマールとすることができそうである。底部から体部の開きをみるとこのことは急角度からゆるい角度への変化とみることもでき、全体的には体部の深いものから浅いものへの変化をたどることもできる。体部はすべてロクロ痕をのこしている。底部はすべて糸切り底であるが、前半には静止糸切りを多少含むが、後半にはほとんど回転糸切りに統一される傾向をとらえることができる。

そのほかには、大型カメがある。肩部より上の状況のみしか確認できないが体部径は40cm以上に及ぶものとみられる。肩の張りは弱く、最大径は、体部中央にくるとみられる。頸部のくびれは強いが、口縁部の屈曲はゆるやかである。口縁部は外気味に大きく開き、端部は短かく折り返し、ヘラでおさええている。成形技法上では、青海波当目の素文化叩き締めにおける叩数の減少化など作調の簡略化がみられる。

特殊遺物として墨書土器があるが、これは後半以降に限定されている。文字はかなり達筆なものと記号様のもの二種がある。

VII期の土器

基本的には組合せにVI期との相違はなく、カメ、坏の土師器と坏、高台付碗を中心とする須恵器の組み合わせである。カメは「コ」の字状口縁をもつカメが主流を占めるが、中に脚を付するものが出現する。口縁部はVI期より広めになり、肩の張りが少なくなり、底部はやや大きめになる。つくりそのものはVI期と変化はない。坏もVI期の流れにのったものがそのままのこる。ただ一部に底部から折りまげた体部の先端(口唇部)を稜線で外にやや開きぎみに横ナデ整形するものが出現する。

須恵器は、底径が口径に比し一段と小型化する傾向がすすむ。そこからの体部の立ち上がりは丸味をもって外開きし、口縁部は短かく外に折る。端部にやや肥厚傾向が認められるのも特徴である。底部はすべて糸切り技法である。埴の中の高台は粘土紐をはりつけたもので前半はまだその貼りつけ部分を指でおさえているが後半になると紐をおさえつけただけのものも出現し、一段と簡略化がすすむ。焼成技術からみると半還元された灰白色、軟質気味の須恵器の出現はこのⅦ期の後半にはじめて出現する。そうした意味からすれば、本遺跡の須恵器は本来的な還元焼成の須恵器が中心で、その後半還元の軟質須恵器に変化する様相を示す。

また、これに共伴する灰釉陶器は概ね0—53期に属するもので、管見からすればほとんどが東濃系に属するものである。釉のかけ方には刷毛ぬり、どぶづけの二種があるが、後者が多い。焼成火度も比較的高いらしく、釉の析出も多く、器面に光沢がある。

特殊遺物としては二例の耳環の出土がある。共にピット状の中から出土しているが半還元の灰白色の焼成、整形に類している。また、記号、及び文字を付した墨書土器も出土している。

全体的にはこの期の遺物を出土する住居跡を最後に集落は消滅したものとみられる。

これらⅦ期に分類した土器群は器形の変化、器種の組み合わせ、住居の重複関係などからみてⅠ期～Ⅶ期への変化をたどることができよう。これを南関東における土師器の編年に合わせると次のようになるであろう。

それぞれの期に対応する南関東の編年に合わせるとこの遺跡の始期は5世紀前半にさかのぼるものとみられるが、初頭にまで及ぶものではないとみられる。鬼高Ⅰ式の境は群馬県下における榛名山給源のFP軽石の降下時期との関連で年代比定を行なったものである。即ち、多少の地域差をみせながらもほぼこのFP降下時の前後にⅠ期とⅡ期の境があることが古墳出土遺物との関連、FA下の集落とFA上の集落との差異から導出された推論である。

歌舞伎遺跡の土器群と編年

期	年代比定	南関東編年
I	500	和泉式
II		鬼高Ⅰ式
III	580	鬼高Ⅱ式
IV	650	鬼高Ⅲ式
V	700	真間式
VI	800	
VII	900	
	1,000	国分式

真間式土器は従来の見解にもとづいて8世紀の土器として、その後出現する国分式土器を9世紀以降の土器とした。この集落の終期については従来の研究からすると決定しにくい、土器器制からみて須恵器主体の盛物用土器の盛行、半還元須恵器の出現、灰釉陶器の様相などからすると10世紀後半にあったとすることができる。

また、一方では集落の時期別の配置などの問題を考えるための根拠として、ほぼ1型式、100年単位、その中を更に2類に細分する中でより住居の配置について推論を試みることを狙っていることから前表を考慮したためである。

したがって、住居跡一覧表における時期の項はこの現点からできるだけ同時存在した住居の様相がとらえられるように配慮したつもりである。しかし、これらのいくつかについては事実誤認や重複関係、土器の共存関係などに一部不明を欠くものもあるかもしれないので厳密には同時存在の住居を相定できないかも知れない。また、一住居が約50年継続したとする保障もない。しかし、少なくともそれを二分することにより、より差異を明らかにすることと、同時存在の住居を限定する蓋然性が高まることを意図して細類型化したものである。

第3節 住居の主軸方位と規模

前述のように歌舞伎遺跡の集落は5世紀から10世紀終末ごろまでの間に営まれたものであることが編年によって明らかになった。この編年に従って各住居の主軸方位と規模について時期別の集約を試み、傾向を抽出しようとするのが本論のねらいである。

グラフはたて軸の数字は住居一辺の長さをmで表わし、中軸線を中心に右側が東方向、左側が西方向への中軸線のブレを示している。住居の大きさについては面積をとることも考えられるが、調査の性格上、一辺しか確実につかめないものがかなりあるので、把握できる一辺について主として長い方をとった。この結果として、住居規模は2m間隔で区切り、角度のブレは20°ごとに放射状の線を入れて表現した。

I期の集落

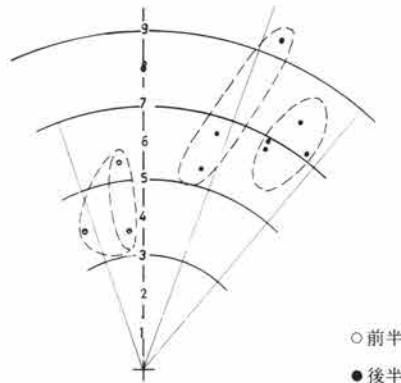
住居の数が10軒であるが、傾向は、はっきりしている。即ち、この時期の前半に比定される住居は3軒で、主軸方位はすべて20°内外西にブレる範囲の中におさまり、また規模も3～6mの枠の中に含まれる。その意味からすると、この一群はかなり規制された中で住居の形成がなされて、しかも企画化されていたことがうかがわれる。

後半になると住居の数も増加し、しかも主軸方位は東に偏するものに統一される。偏し方も20°～40°の間に集中している。また、住居の規模は前半期にみられたものより大型化し、前半で最大のものが最小になり、大規模なものでは1辺9m以上に及ぶものも出現する。ほぼ平均は7m内外となり、前半に比べて大型化する傾向がみられる。

したがって、この時期は規模、方向ともやや統一されていて、しかも後半期になると住居が大型化する傾向がうかがわれる。

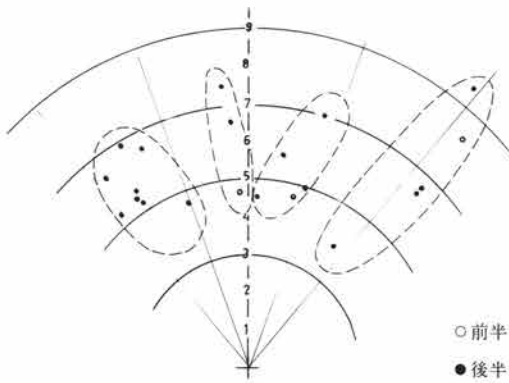
この時期に定着した集落が周辺の恵まれた肥沃な土地の中で次第に生産力を高め、集落としての形態を整え、大規模化していく傾向がうかがうことができる。

I期



○前半
●後半

II期



○前半
●後半

第350図 住居の主軸方位

II期の住居

概して、I期後半の傾向を持続しているといえるが、主軸方向はかなり偏角が広くなり東西各40°ほどのブレの中におさまる。規模は4m～9mの間に集約される。その中でもII期前半のものはI期後半のものと同様に角度では東偏40°までの中ですべて含まれ、更に規模も4mから8mの中に集約される。ただ、全体的には規模の面で大型のものと小型のものとの差が増し、集落内での分化が進行しつつある傾向をうかがい知ることができる。

後半になると集落内の住居数が急激に増加してくる。このことは、低地間の居住空間が限られた中で、制約をうけながら住居が形成されることになり、主軸方位にとらわれる傾向がなくなってきたことを物語っているとみられる。

規模では前半にみられた9m以上の住居は全く姿を消し8mから4mの間に集約される。しかも5mから6mの間に集中する傾向がみられ、集落内の住居規模の均一化がみられる。

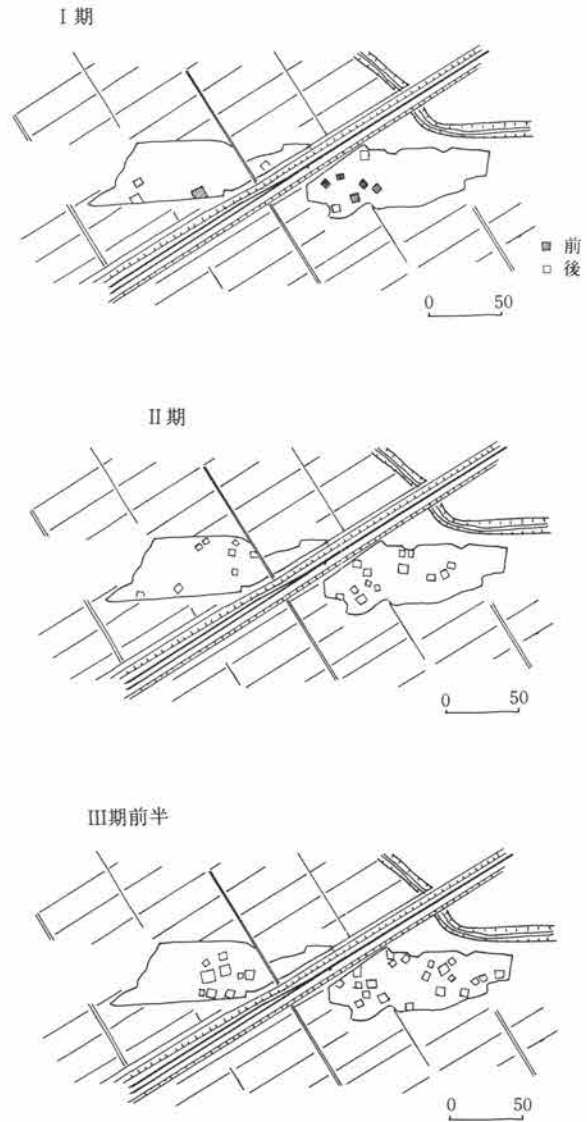
しかし、その中にも、大型住居を中心としたいくつかの群が存在したことが、その配置状態からわかり、集落の構造が一段と整ってきていることや、遺物の中に須恵器を伴う一群があり注目される。

III期の住居

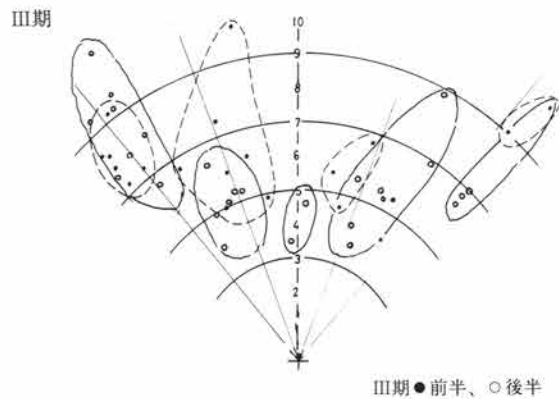
最も集落が大規模化する時期である。この時期は前半と後半の傾向にはほとんど差異は見出せないで、一括して述べることにする。

主軸方位についてみると住居の分散が遺跡範囲いっぱいには拡がりを見せてほぼまんべんなく東偏、西偏とも40°以上に及び、分散をみせる。このことは集落内の住居配置からみてもそれを統一する空間地を見出すことができないため、むしろ、集落内の通路、広場などのかかわりの中で規制を受けた結果と思われる。

住居の規模でみると9m以上の大型のものから3mほどのものまで区々であるが、9m以上のもの、6m前後のもの、4m前後のもの3段階に分けられ、



第351図 住居変遷図



第352図 住居の主軸方位

しかもそれらが組み合わさって小支群を形成する傾向がみとめられる。7～8軒のもの4群ほど認められるところからすると、律令期への過渡的な社会構成を示すものともみられる。

IV・V期の住居

この時期は住居数も減少してくるが全体的に集約傾向がみられ、しかもIV・V期ともほぼ同様な傾向であるところから一括して述べる。

主軸方位で見るとほとんど西偏40°までの間に集中する。この傾向は特にIV期に明瞭にみられる傾向で、III期と最も大きく画される傾向である。とりわけ、3～4mの住居ではかなり集中する。大型のものはこれと異なり、偏角も大きい。このことは、住居の小型化と偏角の統一が無関係ではありえないことの証左である。

住居の規模は大型のものと小型のものが明らかに分離する傾向にある。特に3～5mの間に大部分の住居が入るのはVI・VII期への移行がこの時点からはじまることを物語るものであろう。

V期になるとまだIV期の傾向をのこしているが規模、偏角ともますます集約する傾向にある。しかし、一方ではまだかなり前期の遺制をのこしていることも事実である。律令制度が集落構造にまで及んできたものとみることができる。

VI・VII期の住居

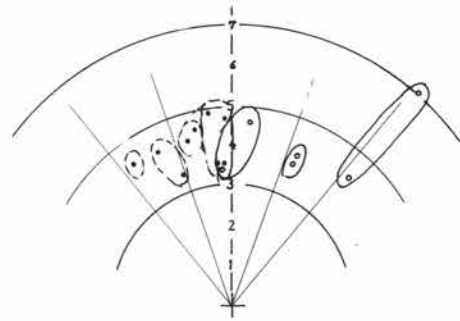
住居規模の小型化と均一化が一層進んでくる時期である。

住居の主軸方位の偏角で見ると西偏するものがVI期、東偏するものがVII期にあっている。住居数の減少により意図する企画でつくられるようになり、その意味では意識的にとられた数値であろう。

住居の規模で見ると3～5mの範囲の中にすべて包括されるという形で、一般にいわれる小型化が定着する。

これら一連の住居の主軸方位の変化と住居規模の

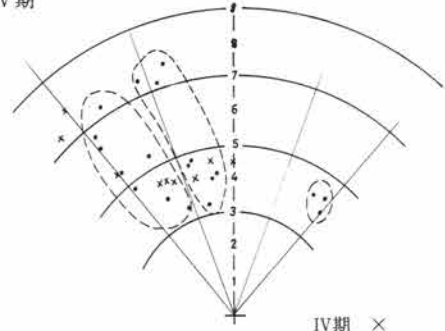
VI、VII期



VI期 ●
VII期 ○

第353図 住居の主軸方位

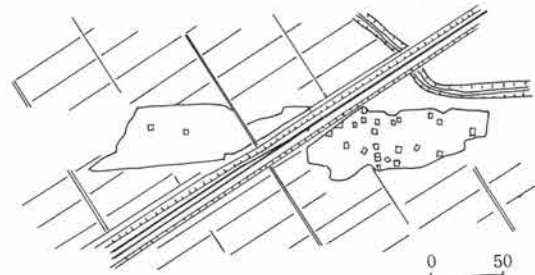
IV・V期



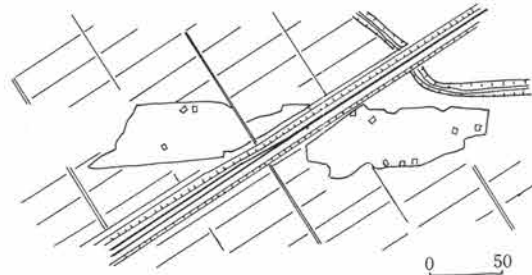
IV期 ×
V期 ●前半、○後半

第354図 住居の主軸方位

V期



VI期



第355図 住居変遷図

画一化はその背景にある集落構造の変化と合せて考慮するとき、かなり明らかにすることができるものと考え、以下、その考えを多少のべてみたい。



第356図 住居変遷図

第4節 集落の変遷

ここにいう集落は、厳密な意味からすると集落全体を調査していないので、その変遷をたどることも意味が半減するものであるかも知れない。しかし、この集落内における住居群が、時期によって多少の変化をみせる点からして、あながち意味のないことも思われぬ。そこで本稿では今までの各遺構における時期的な検討を集する意味で述べてみたい。集落といっても主として住居跡分布を中心にみる他は一部井戸、柵列群、掘立柱建物をみる程度であることを最初にことわっておく。

I期の住居群

集落がこの微高地上にはじめて形成された時期である。地理的景観からすれば、ようやく周辺の水路が安定したものとみられ、周辺の肥沃な沖積地を背景に集落が形成されたものとみられる。住居はこの範囲の中に11軒確認されたが、これがすべて同時に存在したのもと思えない。土器の様相からすると前後に分けるとおよそ1/2の住居が存在したとみるのが妥当であろう。その土器の前後関係でみると前期には中央に寄った部分に配置が偏っている。これで見ると、当初はまだ周辺部に占地するほど沖積地が安定せず、より比高の高い中央部にまず占地したものとみられる。

それよりややおくれて形成されたとみられる住居は周辺部に配されている。このことは次第に水位が安定し、居住区がやや拡大されたものとみることができよう。しかも、南東部は、それ以降の住居は多く形成されているにもかかわらず、I期の住居は含まれていない。全体的にはこの時期は路線より西に集落の中心があったとみられる。

また、周辺の調査で駅構内及び、駅西部でこの時期に属する住居が検出されていることからすると、こうした小さい住居群がこの沖積上の微高地状にいくつか分散して存在した可能性がある。また、北側台地上には、I期以前の集落が確認されているところからすると、この時期にそこから移動したものとみられ、その意味ではこの集落は北側台地上から分派した集落とみることができよう。その他の遺構ではこの時期に該当するものは確認されていない。

II期の住居群

この時期は急激に集落が拡大する時期である。前半にはまだI期の傾向が残っていたために急激な変化はみられなかったが、後半になると、一気に住居数が増加する。この時期は6世紀後半とみられるが、21軒の住居が存在したとみられるから、I期の住居数に比べ倍増する。更にI期の11軒の内半数が同時に存在した

ものとみられるから、それとの比較でいくと4倍に増加したことになる。この傾向は県内の他遺跡の趨勢と合致するものである。

その分散の範囲もかなり微高地全面に及び、しかも数軒から2軒ほどのブロックがいくつか形成される。図の場合でみると中央7軒が最大でしかも位置的にもすぐれている。集落中の中心的な群であろうとみられる。その各群では住居の規模に大小があり、その数の配分も大型のものと小型のものが1：2ほどの組み合わせで表われる傾向がみられる。

この時期にもおそらく中央部分の西側に集落がのびているとみられるが、調査区内でみると、各小支群の間に間隔がとられており、集落内に、広場や道路などの空間が確保され、I期に比べ、より村落的構造をとりはじめている状況を察知することができる。

この時期の最も大きい変化は、住居の東壁もしくは北壁に大型のカマドが付設されることである。このカマドは特に堅穴を掘る以前の企画に組みこまれていたものであり、ロームを袖部だけを削りのこした形のもので、特に大型住居に多い。この芯に黒色粘土を張った形で、石ないし土製の支脚を有している。

この時期に急激に巨大化するコシキは背景にある水田における生産力の高まりを想像させ、特に大型住居における出土遺物からみても有力家族が中心になって支群が形成されていったとみるべきであろう。また、坏の数がそのまま居住人数を示さないまでも、一住居から多量の坏を出土する例は、集落内の人口増加が確実に進行したことを証している。

III期前半の住居群

これを受けたIII期前半も同様な傾向を読みとることができる。中央部にみられた中心的な支群はほぼ規模もそのまま継続するが周辺の2～3軒の小支群がそろって大型化し、ほとんどが住居軒数を増している。即ち、線路北の支群は2～4軒の分散した住居群が一つに集中し9軒の大支群に成長した。しかも、住居の構成をみても大型2、中型3、小型4とバランスのとれた群となってきた。これと同様に構成、質とも充実した支群がいくつかみられることは、この時期にいたり、ますます社会構成が統一される傾向をうかがうことができる。また、住居の小型化傾向のきざしが見えはじめ、しかも、カマド、貯蔵穴、柱穴、厨房空間の固定など、定型化の様相をうかがうことができる。

集落の拡大とともに空間部分が次第に縮小されていることにも気づく。このことは、住居の増加は、集落の空間へ進出してきていることを物語っている。本遺跡の傾向は中田遺跡や船田遺跡より住居の小型化が進展していないことで、地域的にやや遅れる可能性を示している。特にこの傾向は後半期によくきざしが認められ、IV期にいたってはっきりと表われる。

IV・V期の住居群

IV期の住居は数が減少してくるとともに小型化が定着する。須恵器を共伴する住居数も少なくこの辺にも南関東よりややおくれる傾向があるともみられる。これは後背地の須恵器生産とも関連するとみられる。この遺跡の須恵器は太田金山丘陵を供給源にもつことは想像に難くないが、この傾向は入野遺跡でも同様であるところをみると群馬県における須恵器を多量に堅穴住居に持ち込む時期はV期をまたねばならなかった。

V期に入ると住居数が25軒になるがこれを分布でみると重複しているものもあり、期間的にも100年にわたる期間であるから、これがすべて同時に存在したものでないことは明らかである。多くみつっても半数とみられるから、最も住居の数が増えたIII期後半に比べればおよそ半数に減少したことになると思われる。

住居の小型化、主軸方向の統一傾向などの一連の動きは律令制の施行と無関係ではあり得なかったとみられる。また、住居のまとまりもⅢ期まではっきりみられた支群的なあり方はくずれ、住居が分散していく傾向がみられ、より集落の分化が進展したことを物語っている。

出土遺物では、ようやく、須恵器が住居内に量的にも多く持ちこまれるようになってくる。須恵器生産がようやく東国にも浸透し、その優位性が認められてきたものとみられる。土師器の器種の限定と反比例して須恵器の器種が増加していることがそれを裏づけている。

Ⅵ期の住居群

この時期には、住居数が一層減少して10軒になるが、これも同時に存在した数は半減するとみられるから調査区内における住居数は往時の1/6ほどに減少したことになる。その配置でみると微高地縁辺部に集中する傾向がみられるから、集落の中心はむしろ、南西方向にのびていったものと推定される。このことは集落の周縁部に住居空間が拡大していった結果とみられる。

このことは、奈良時代後半に大氾濫があったことがすぐ上流の三ツ木遺跡でも認められるところからしてもうかがわれ、それに伴って沖積土が運ばれ居住範囲を拡大した結果とみられる。おそらくその沖積土のひろがりから、可耕地が微高地の南西方向にのびて、それに伴って集落も変化していったものと思われる。しかし、その実数については調査区外にのびることから確認はできない。

住居は一層小形化、がすすみ、不定形の住居が増加する。整った定形的なⅢ期までの住居にくらべ、堅穴の掘りかたがくずれるのは、住居の上屋構造の変化により生じた現象であると考ええる。即ち、掘りかたそのものは住居の外部を決定するものではなく、軒が地面からはなれ、その外部は草壁状のもので仕切られるから、掘り方に規制されることはなかったのではなかろうか。このことからみると、すでにⅣ期にはほとんどその形が普及していたものと考えられる。

出土遺物では、ようやく須恵器が土師器をしのいで、日常雑器の主流を占めるようになるが、まだ、灰釉陶器はほとんど入ってきていない。

Ⅶ期の住居群

この時期には、いよいよ微高地中の住居が極端に減少してくる。住居は5軒ほどであり、しかも、溝状遺構や、ピットなどが出現し、次第に住居の場から変質して、次第に集落が消滅していく時期で、わずかにその命脈を保っていた時期とみられる。

しかし、この内容については、遺物量が少なく、はっきりしたことはわからない。ただ、かなりこの時期には灰釉陶器が持ちこまれてくることは大きな特徴として指摘できるであろう。

以上、各時期における集落の状態を住居を中心にのべてみたが、これはあくまでも集落の存在する可能性のある微高地全体を掘った結果ではない限定の中でとらえた現象であり、調査区外の様相については推察の域を出ないものである。

ただ、従来の他の遺跡調査の結果からの推察も含めての推論であるので、状況的には大きな誤りはないものと考えている。今後、集落全体を掘った遺跡についても検討を加えていきたい。

結

歌舞伎遺跡は、周囲を低平な沖積地にかこまれた小範囲の微高地であるが、調査の結果、多くの問題点や新しい事実が判明した遺跡である。

周辺の沖積地は水田耕作にとっては、格好の適地である。集落立地としては必ずしも適地でないこの地に集落が5世紀に進出してきたのもそこに原因があった。すぐ東を南流する石田川の水量は、湧水を起源とするだけに増水とはいっても、地形を変化させるようなものではなく、むしろ、沖積土を運んでいく程度のもので、住居部分を浸水させる程度のものであったとみられる。むしろ、地形を変化させたのは西を流れる早川が400mほど先の屈曲点で氾濫し、そのまま直流して、歌舞伎遺跡の周辺を流したことによるものとみられる。特に奈良時代末の氾濫は地形を変えるほどのものであったが、それ以外はほとんど、徐々に増水していったようなもので、それによってもたらされる沖積土の方が当時の人々にとっては魅力あったものとみられ、5世紀から10世紀末まで集落を営ませる要因になっていた。

増水によって一旦引き上げた人々は、水がひくのをまってまたこの微高地におりたち、住居を構えた。その盛期は7世紀にあったとみられるが、それ以後またその規模を縮小していったのは律令制との関連でもあろうか。いずれにしても、この微高地での集落の形成は、水との闘いであったことは推察に難くない。それは、この集落内を縦横によぎる溝でも立証されよう。

中世に入ると、遺物はかなりあるが、居住区は把握できなかったが、ただ、土壇や方形周溝状遺構などからみると耕地的な性格などをもったと考えることができる。この集落ののった微高地部も、その後沖積が進み、近世になると水田化されたようである。それは、地層的にみて水田土壌の確認や、近世溝跡などから考えられることである。おそらく、中世後半以降、水田化されたものと考えられる。

調査の時点で明らかになし得なかったが、この遺跡の南2Kmほどある中世の名刹、長楽寺があり、それとの関連で持ちこまれる中世陶器の存在が目される場所である。また、附近には多くの中世館址もあり、その背景をうかがうことができる。

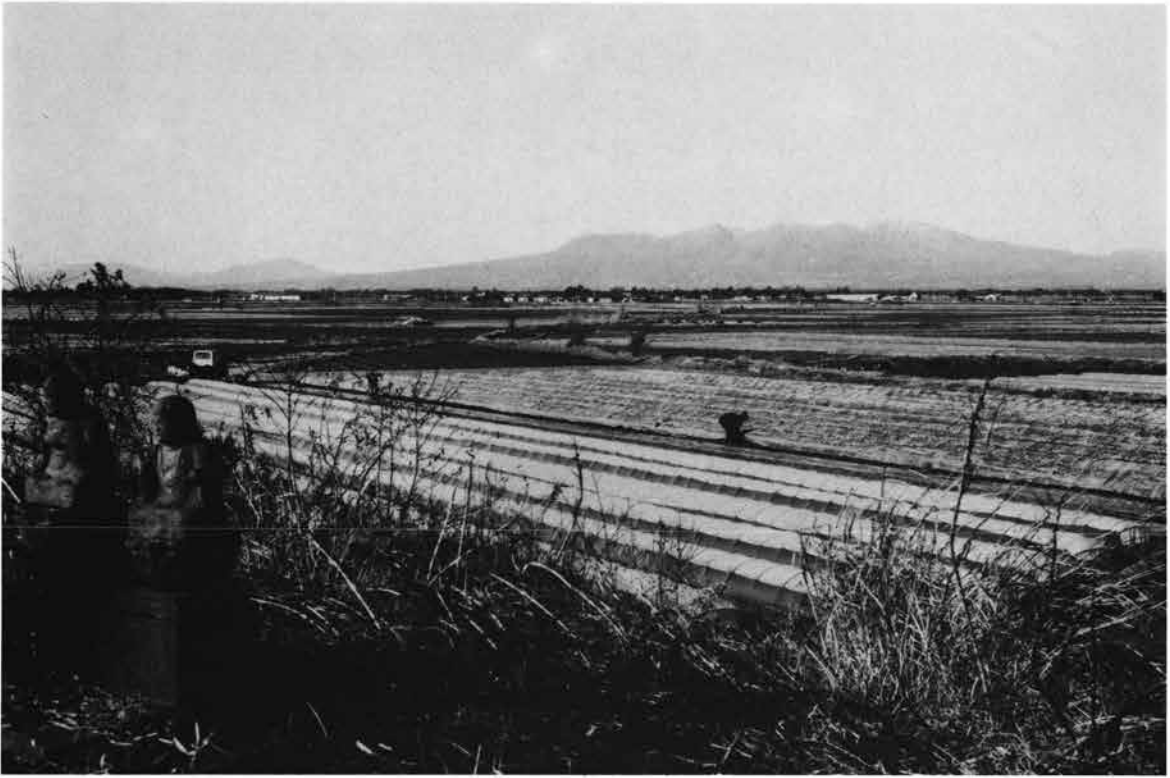
いずれにしても、本遺跡は古墳時代から性格をかえながら変化にとんだ地域として今回の調査でその変遷を立証しえた。更に周辺の調査をすすめる中で、よりその特質を明らかにできる可能性を秘めている地域である。その時点で更に問題を追求していきたいと思っている。

三次にわたる調査で、直接、間接にご協力いただいた関係機関、関係者に対し深甚なる謝意を表して筆をおく。

主要参考文献

- 杉原荘介他「武蔵和泉遺跡調査会報」考古学11-5 昭15
杉原荘介他「下総鬼高遺跡調査概報」人類学雑誌53-11 昭13
玉口時雄他「落合」 昭30
杉原荘介、中山淳子「土師器」日本考古学講座五 昭30
尾崎喜左雄、井上唯雄「入野遺跡」 昭37
大場盤雄他「平出」 昭30
松島栄治「北関東における土器様式の発展」史学会報五輯 昭33
申野勇他「八王寺中田遺跡資料編 I II III」 昭41~43
和島誠一他「住居と集落」日本の考古学II 昭41
金井塚良一他「集落と共同体」日本の考古学V 昭41
木塚初重他「土師式土器集成」I~VI
松島栄治他「石田川」 昭43
岩崎卓也「東日本における土師器の研究」史学研究 昭39
小出義治「土師雑考」国学院雑誌 昭34
氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14 昭32
真下高幸他「温井遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭56
川上 元他 中部高地の考古学 昭53
坂詰秀一他「武蔵新久窯跡」 昭46
井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」群馬県史研究 8 昭53
白鳥良一「多賀城遺跡出土土器の変遷」研究記要 昭55
福田健司「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」考古学雑誌64-3 昭53
倉田芳郎「南関東における住居出土の土師器」考古学雑誌50-3 昭40
田辺昭三「須恵器大成」 昭56
服部敬史「南武蔵における古代末期の土器様相」東京考古 I 昭57
玉口時雄「秩父」 昭31
山越 茂他 栃木県史 通史編原始古代一 昭56
齊藤 忠他 茨城県史料 考古資料編古墳時代 昭49
松村恵司「古代籍帳と古代集落についての覚書」 昭53
杉原荘介他「古代の日本」7、関東 昭45

写 真 图 版



二体地藏古墳より遺跡地、赤城山を望む 南→



木崎台地より遺跡地、榛名山を望む 東→

図版 2



A区調査区近景 東→



A区調査区近景 北西→



B区近景 南東→



B区近景 南→

図版 4



B区試掘風景 北西→



B区試掘風景 北→



A区5号住居跡 南西→

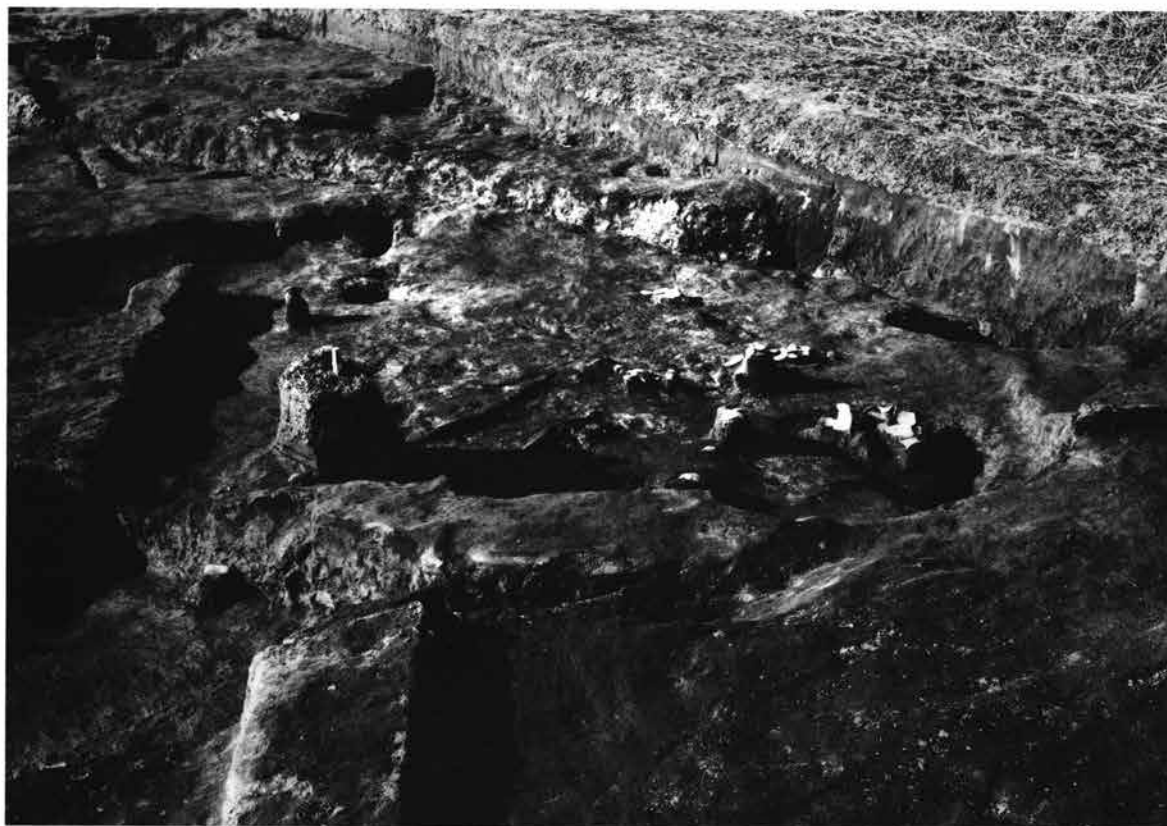


A区6号住居跡 南東→

図版 6



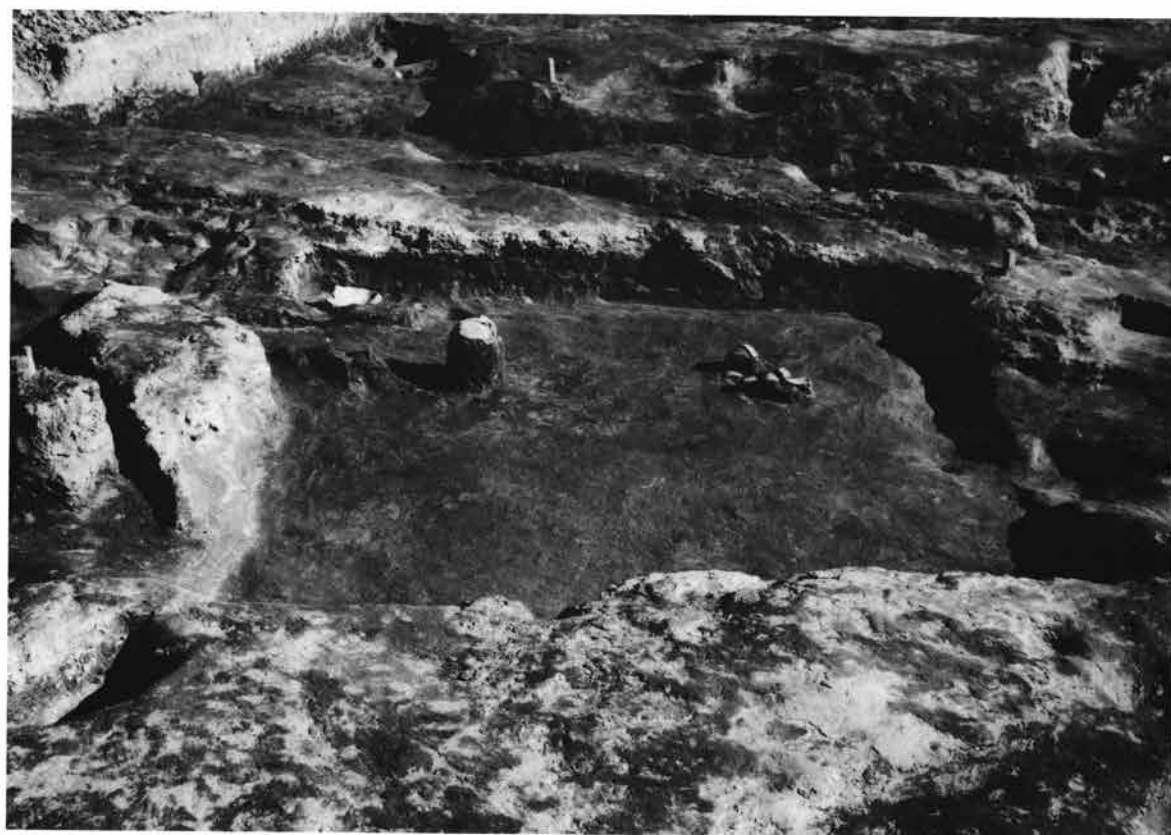
A区10号住居跡 北→



A区12号住居跡 南東→



A区15号住居跡 南西→



A区16号住居跡 西→

图版 8



A区22、25号住居跡 北→



A区23、24、25号住居跡 東南→



A区25、26号住居跡 西北→



A区27号住居跡 東→

图版10



A区31号住居跡 南西→



A区34号住居跡 北→



A区38号住居跡 北→



A区43号住居跡 北東→

图版12



A区52号住居跡 北東→



A区54号住居跡 北→



A区55号住居跡 北→

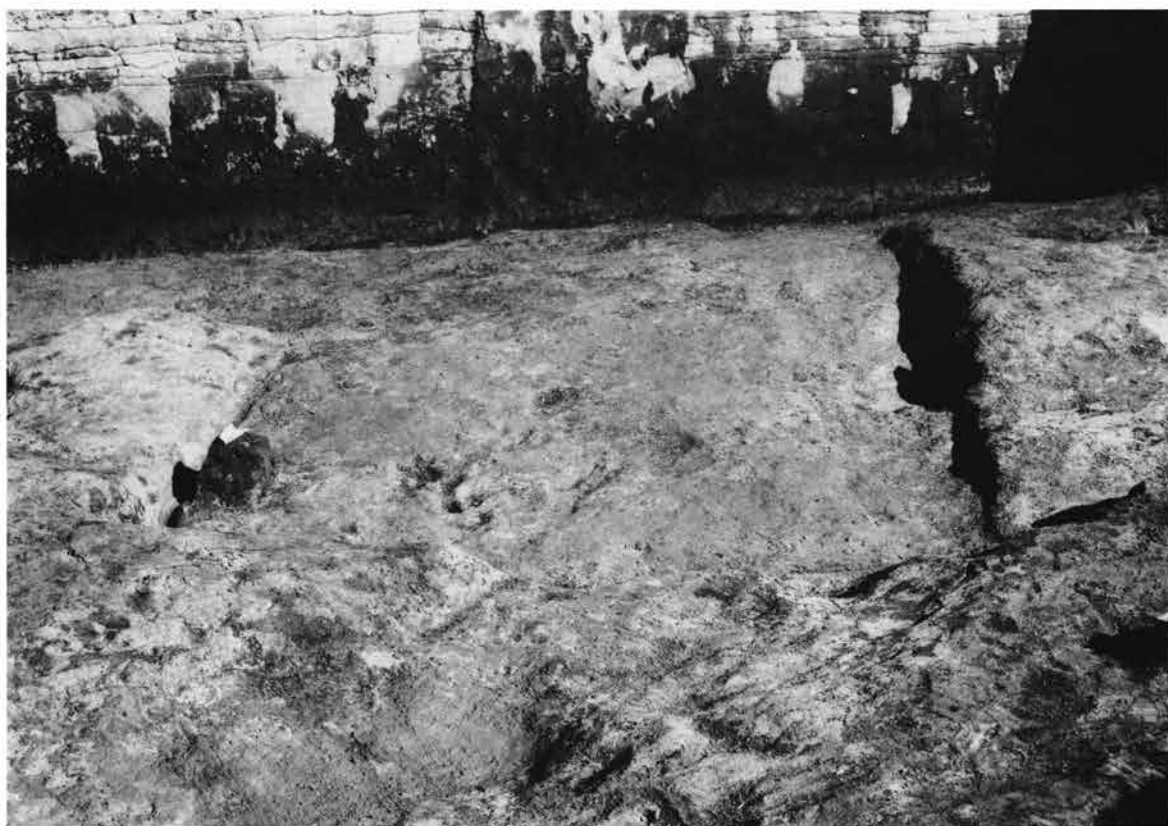


A区59号住居跡 西→

图版14



A区60号住居跡 南→



A区61号住居跡 南西→



A区78号住居跡 南→



A区82号住居跡 南東→

图版16



A区93号住居跡 西→



A区91、99号住居跡 南→



A区95号住居跡 東南→



A区95、96号住居跡 西→

图版18



A区97号住居跡 北→



A区102、103号住居跡 南→



B区1号住居跡 西→



B区1、51号住居跡 西北→



B区5号住居跡 東→



B区6号住居跡 東→

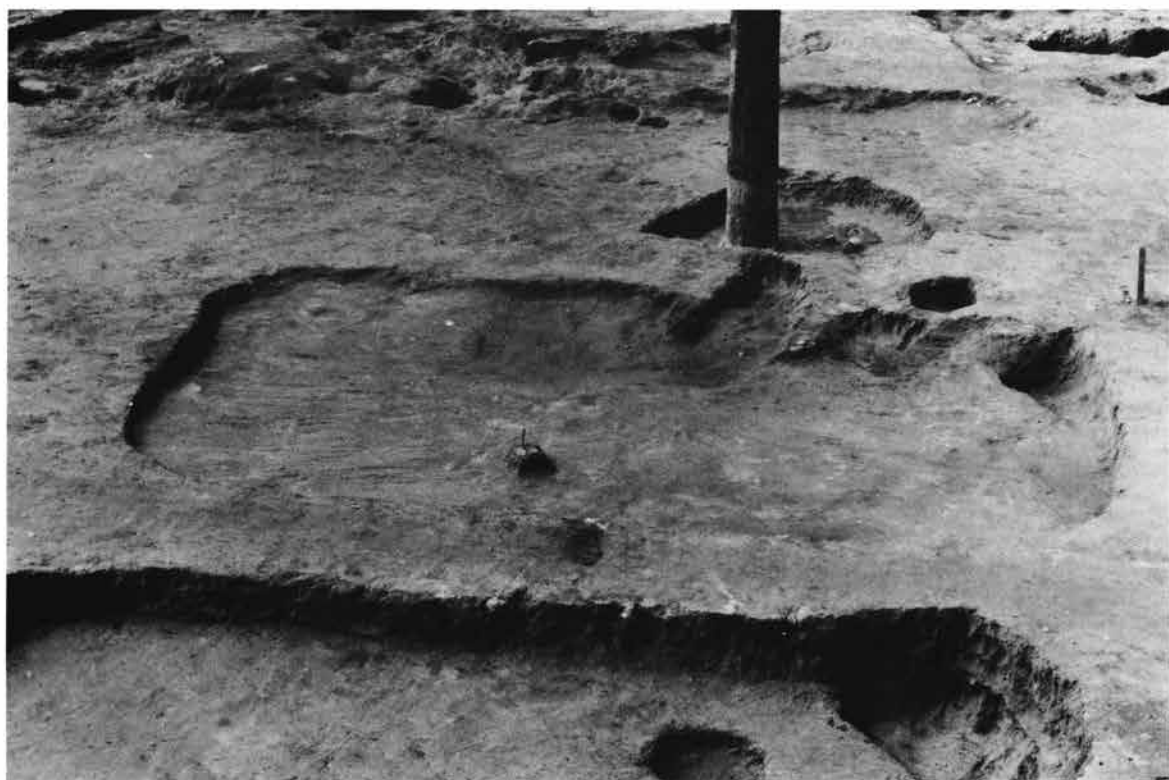


B区10号住居跡 北東→



B区15号住居跡 東→

图版22



B区18号住居跡 東→



B区24号住居跡 南→



B区25号住居跡 南→



B区26号住居跡 北→

图版24



B区29号住居跡 北→



B区33号住居跡 南→



B区47号住居跡 北西→



B区48号住居跡 北西→



A区1号住居跡カマド 西→



A区3号住居跡カマド 南→



A区15号住居跡カマド 西→



A区26号住居跡カマド 西→



B区27号住居跡カマド 南東→



A区30号住居跡カマド 東→

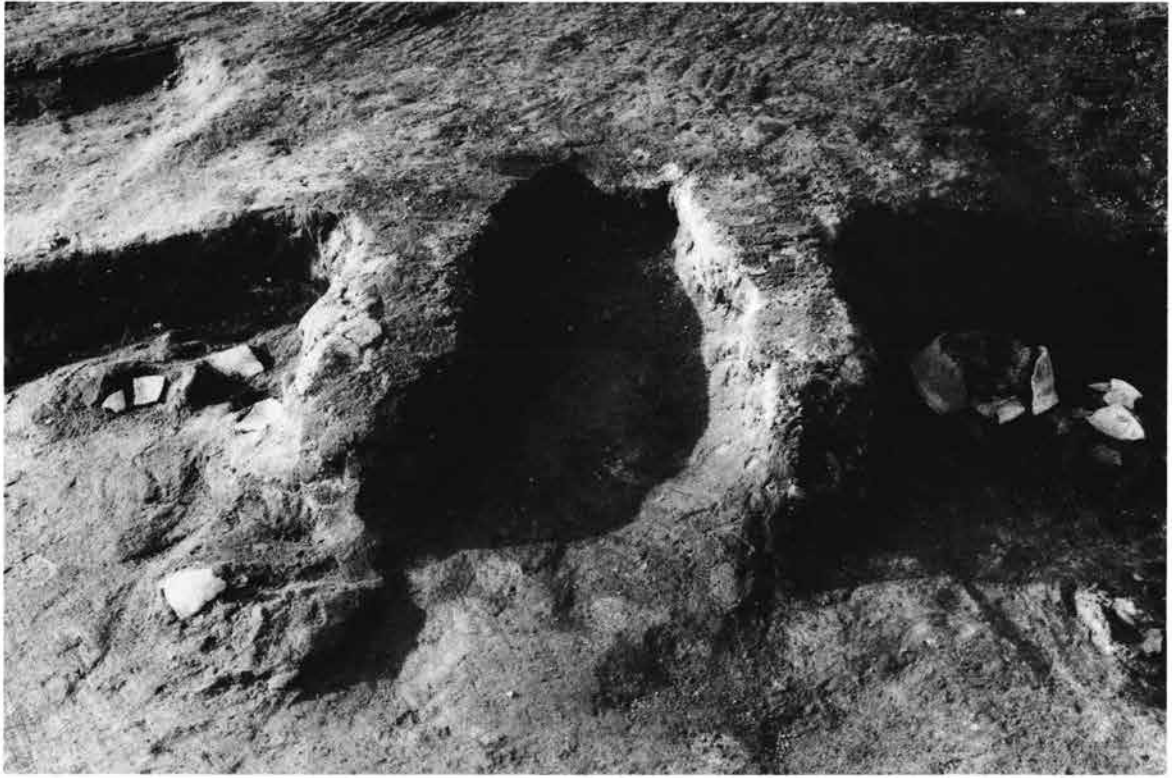


A区31号住居跡カマド 南→



A区78号住居跡カマド 南→

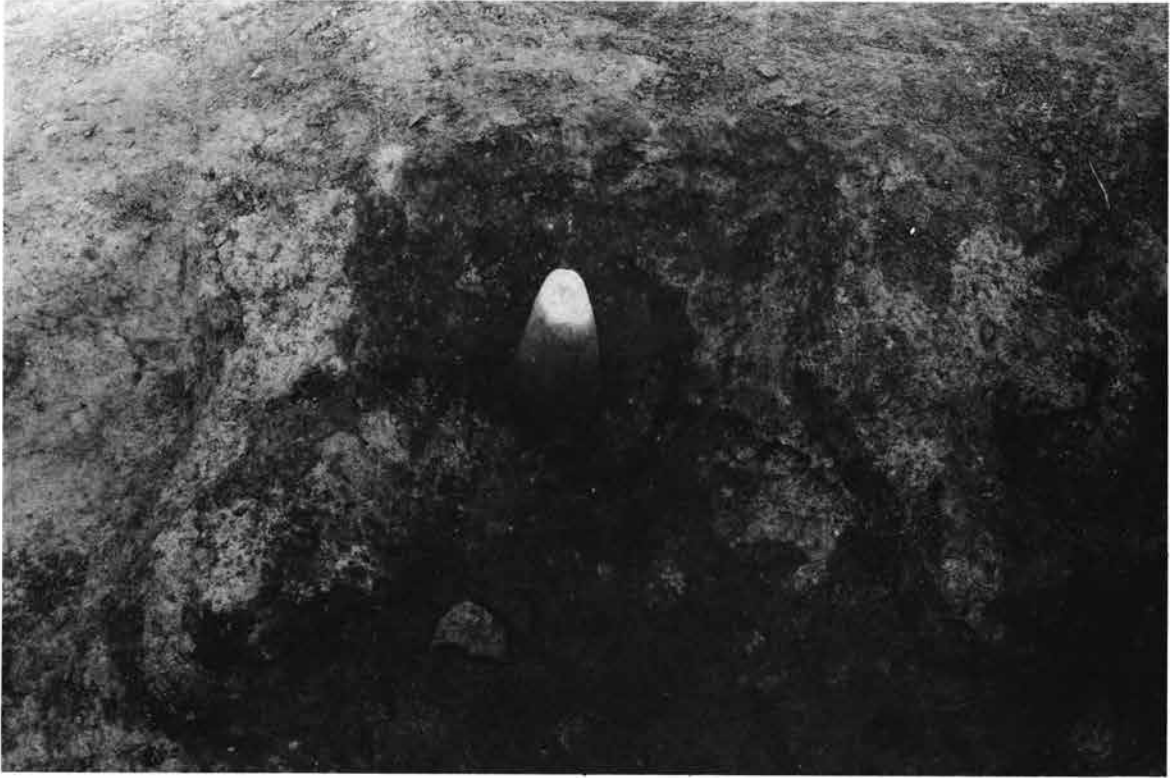
図版30



A区93号住居跡カマド 南東→



A区105号住居跡カマド 南→



A区106号住居跡カマド 西→



A区52号住居跡遺物出土状態 西→



A区15号住居跡貯蔵穴および土器出土状態 南西→



A区26号住居跡遺物出土状態 西→



A区60号住居跡遺物出土状態 東→



A区65号住居跡遺物出土状態 北西→



A区方形周溝遺構 北→



A区方形周溝構 北→



A区L-12号井戸跡 北→



同 近接 北東→



B区H-30号井戸跡 西→



A区I-13号井戸跡 北→



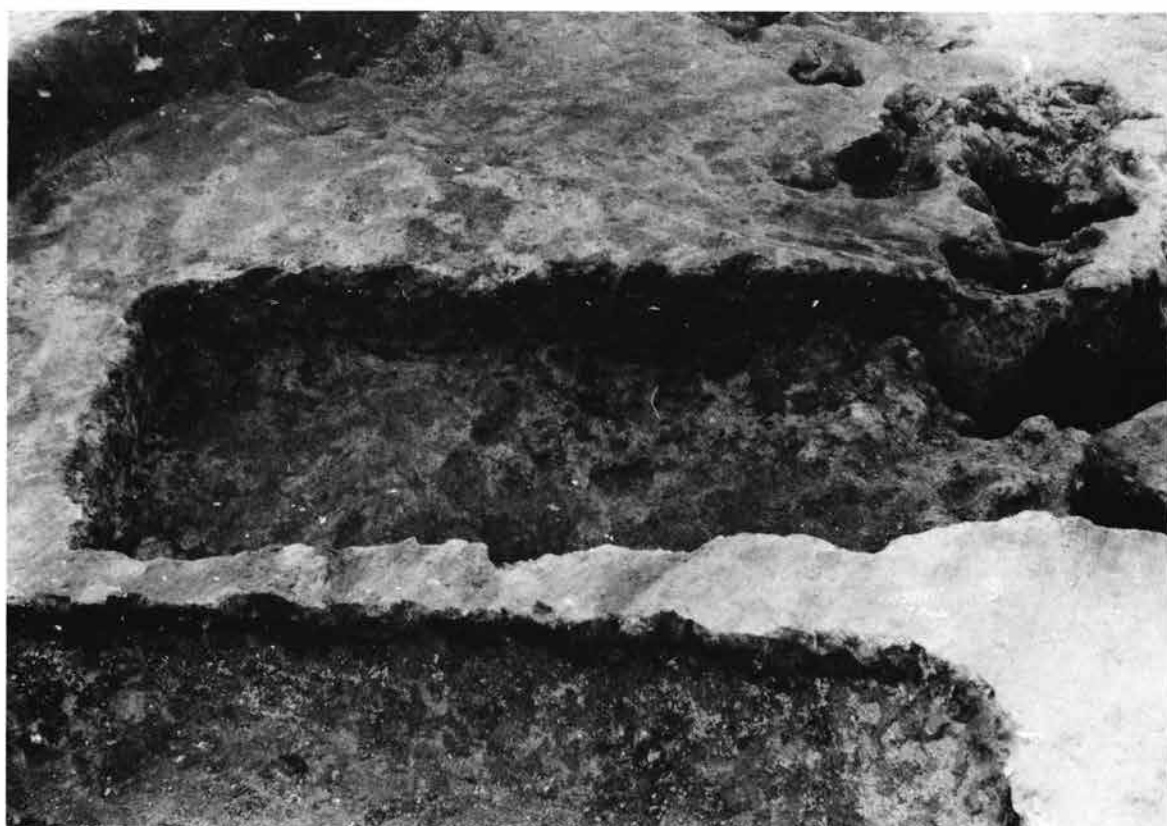
A区M-11号土坑遗物出土状态 南→



A区M-10号土坑遗物出土状态 南→



B区L-21周辺の長方形土坑群 北東→



B区G-18号長方形土坑 東→



B区E・F-27～30における台地陸部縁辺 北東→



同上 北東→

図版40



A区K-8近世方形遺構 北→



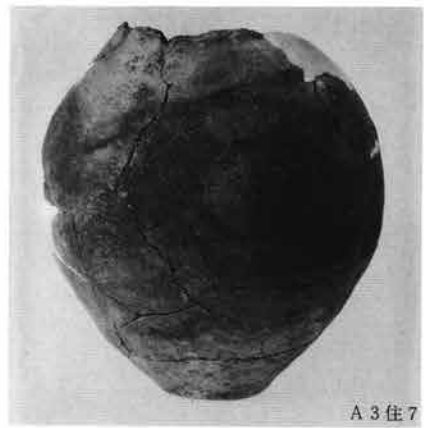
A区K-17溝、J-18溝(左) 北→



A 1 住 3



A 3 住 5



A 3 住 7



A 3 住 11



A 3 住 13



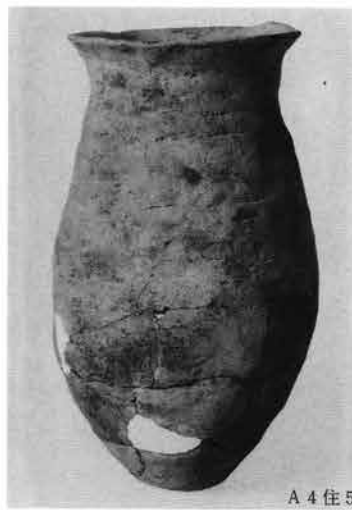
A 3 住 12



A 3 住 14



A 4 住 1



A 4 住 5



A 4 住 3



A 4 住 7



A 5 住 1



A 5 住 3



A 5 住 2

図版42





A 6住1



A 9住1



A 9住4



A 9住5



A 9住6



A 9住7



A 9住9



A 9住10



A 9住11



A 9住12



A 11住8



A 11住8



A 13住1



A 12住4



A 12住6



A 12住7



A 14住1



A 14住2



A 14住12



A 14住13



A 15住4



A 15住6



A 14住7

図版44



A 16住 2



A 17住 1



A 17住 5



A 18住 3



A 20住 1



A 22住 1



A 23住 2



A 25住 5



A 25住 6



A 26住 1



A 26住 2



A 26住 5



A 26住 6



A 26住 7



A 26住 3



A 27住 2



A 27住 1



A 27住 4



A 28住 5



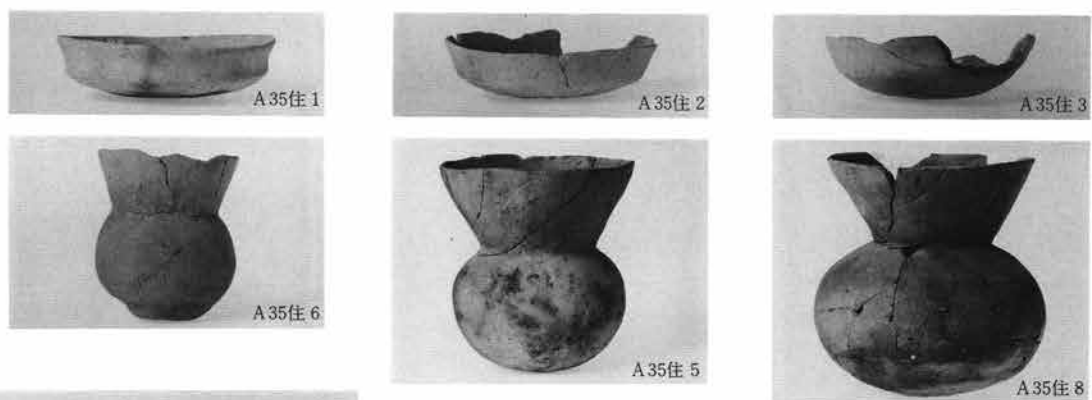
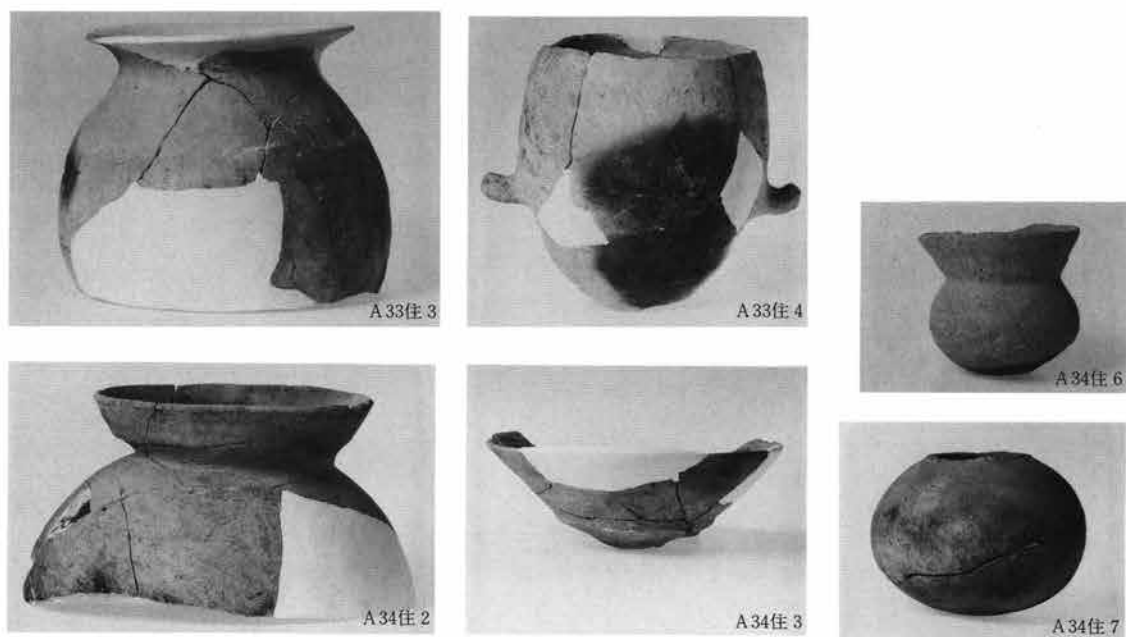
A 29住 2



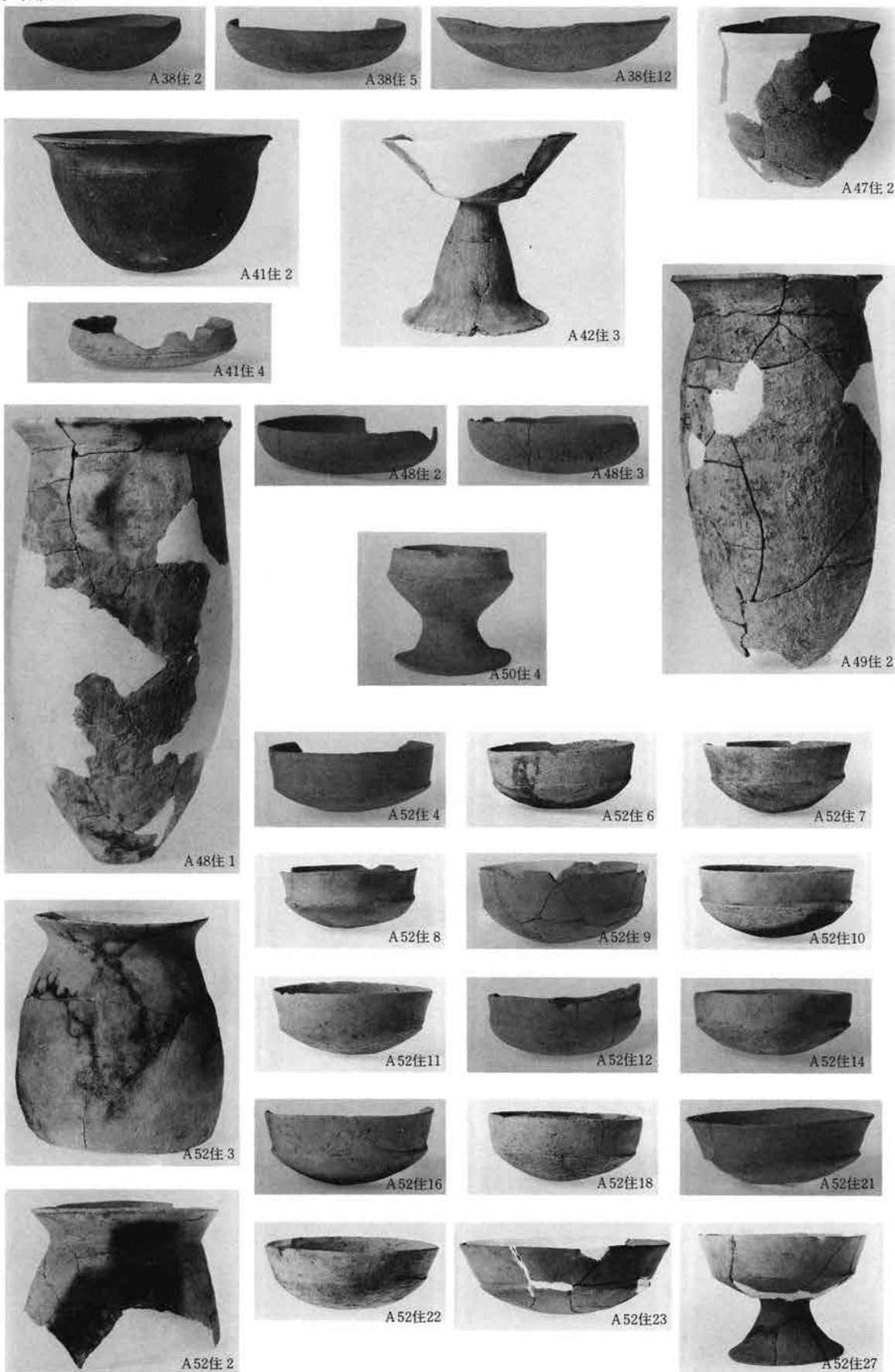
A 29住 3



A 30住 2



図版46





A53住2



A53住5



A55住1



A55住2



A55住3



A55住4



A55住8



A55住5



A55住6



A55住7



A55住9



A57住1



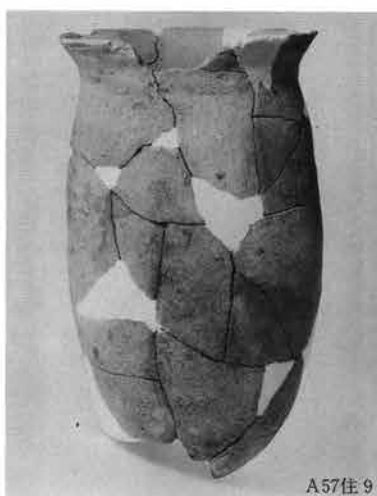
A57住7



A57住8



A57住6



A57住9



A57住10

図版48



A 57住12



A 57住13



A 57住14



A 57住15



A 57住16



A 57住25



A 57住19



A 57住23



A 60住3



A 60住5



A 60住6



A 60住18



A 60住4



A 60住21



A 60住7



A 60住8



A 60住9



A 60住10



A 60住11



A 60住15



A 60住16



A 60住22



A 65住10



A 65住12



A 65住13



A 65住10



A 66住3



A72住6



A72住10



A75住11



A67住2



A72住11



A76住10



A73住2



A79住8



A79住9



A79住5



A79住10



A79住11



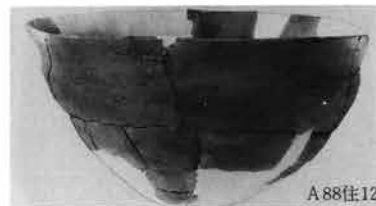
A88住3



A85住3



A85住8



A88住12



A88住11



A88住13



A88住2



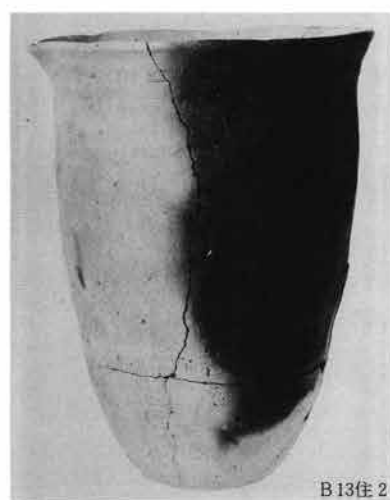
A88住4



A88住5

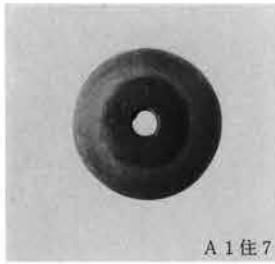
図版50





図版52

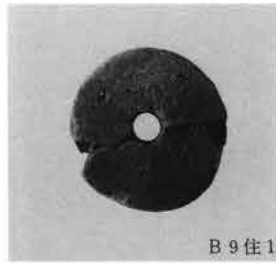




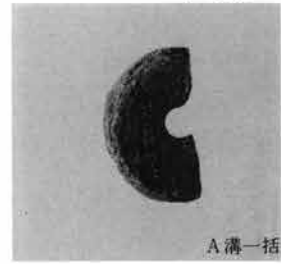
A 1住7



A 86住5



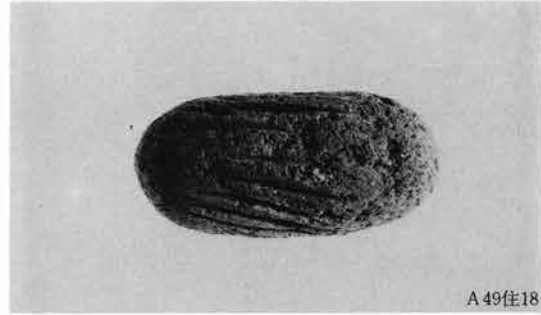
B 9住1



A 溝一插



A 35住16



A 49住18



B 2住7



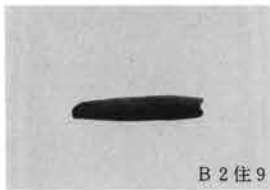
B 47住7



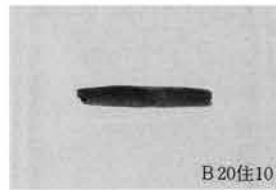
A 104住7



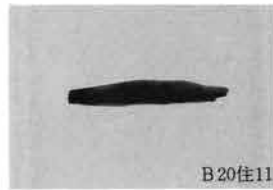
A 104住8



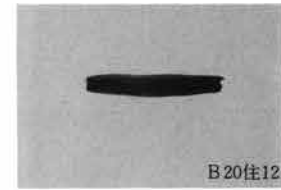
B 2住9



B 20住10



B 20住11



B 20住12



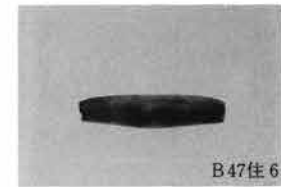
B 20住13



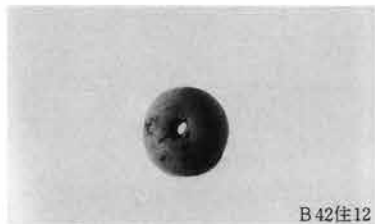
B 25住4



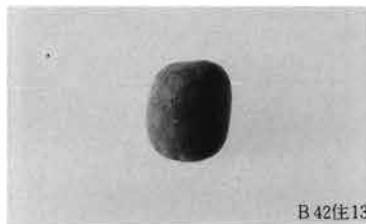
B 47住5



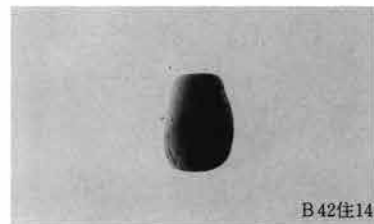
B 47住6



B 42住12



B 42住13



B 42住14

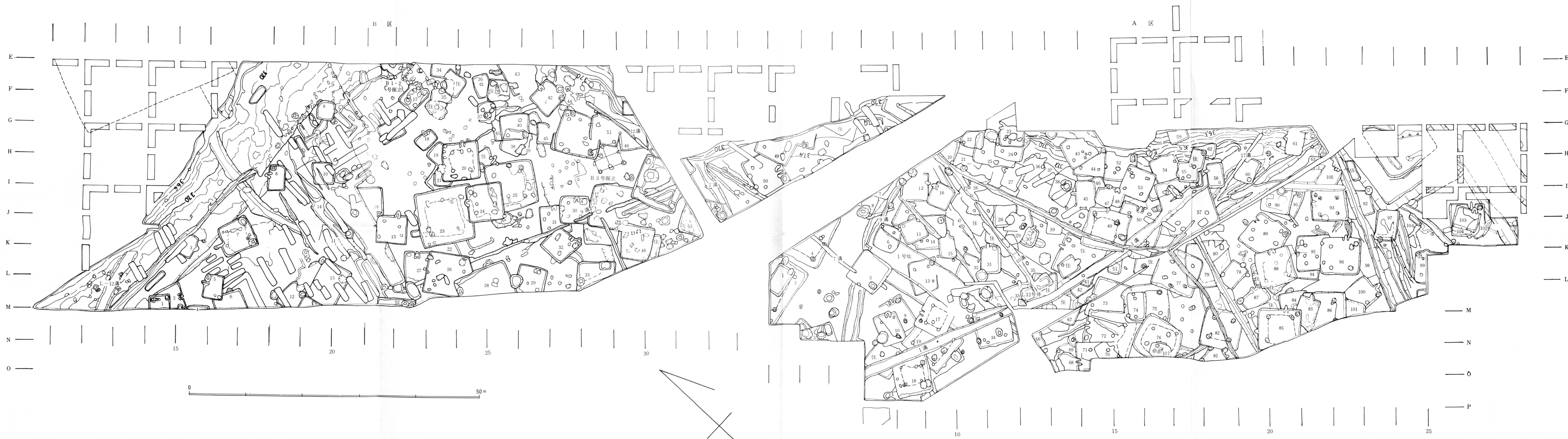
歌舞伎遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和57年3月25日 印刷

昭和57年3月31日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



付図1 歌舞伎遺跡 遺構配置図 1:300

付図2 歌舞伎遺跡 土器編年序列図

	土 師 器								須 恵 器				
	甕・壺類		高 杯		杯 類		小 形 器 種		環	他器種			
I 期													
II 期													
III 期													
IV 期													
V 期													
VI 期													
VII 期													

0 40cm

1~7 A 5住 18 A 57住 27~35 A 52住 44~46 A 49住 53 A 71住 62 A 76住 69 A 70住 76~78 A 28住
 8~16 B 6住 19~20 B 50住 36 A 50住 47 A 71住 54 A 76住 63·65~67 A 38住 70~71 A 106住 79 A 60住
 17 L12溝 22~26 A 60住 37~43 A 55住 48~52 A 49住 55~61 A 26住 64·68 B 10住 72~75 A 107住 I : 8